

類型学序説

ロシア・ソヴェト
言語研究の貢献

山口 巖 著

類 型 学 序 説

ロシア・ソヴェト言語研究の貢献

山 口 巖 著

1995

京 都 大 学 学 術 出 版 会

類 型 学 序 説

ロシア・ソヴェト言語研究の貢献

山 口 巖 著

明子に

類 型 学 序 説

目次・はじめに

目次

第 1 部

類型学の概念

001

1. 類型学の先駆者 フンボルトとサピア ————— 003
2. 類型学の意味 ————— 019
3. 現代の言語学における類型学 ————— 024
4. ロシアにおける類型学的研究 — その初期 ————— 035
5. 旧ソヴェトにおける類型学的研究 — 20-40 年代 ————— 042
6. 内容的類型学研究の進展 I. 能格言語 ————— 065
7. 内容的類型学研究の進展 II. 活格言語 ————— 083
8. 多分類言語 ————— 112
9. いわゆる混合類型の諸問題 ————— 116
10. ま と め ————— 118

第 2 部

ロシア語の類型学の諸問題

125

1. はじめに ————— 127
2. 活動体と不活動体 ————— 129
3. 述語機能の強化 — 形容詞短語尾形述語の成立 ————— 139
4. 述語の相対的独立性の強化 ————— 142
5. 名詞類の述語性の強化 ————— 146
6. 主語と述語との関係の弱化 I. 非人称形 ————— 149
7. 主語と述語との関係の弱化 II. 不定法文の発達 ————— 155
8. その他の特異な現象 I. 所有の構文 ————— 157
9. その他の特異な現象 II. 不定人称文 ————— 162
10. ま と め ————— 164

第 3 部

形式的類型学

167

1. はじめに ————— 169
2. 予備概念 ————— 170

反射律, 対称律, 推移律 170 分割, 同値類 170 語と連絲 171 句と言語, 正しい連絲 171 文脈, 許容および置換 171 S 同値と S 類, Γ 類 172 写像, 関数 172 P 写像, 有標的な P 写像, 完全な P 写像 173 P 文脈, P 許容, P 置換 173 誘導された集合, 誘導された分割, 初期細胞 174 初期類によって生成された系列, 基礎文法カテゴリー 174 文法的同音異義 175 タイプ 176 ΓS 連鎖, 部 177
3. 言語の種類 ————— 177

無形態の言語 177 極端に文化化した言語 179 ST 正規な言語, 完全に正規な言語 180 単純な言語, 自由変異 182 規範化された言語, 文法的変異体 183 完全に単純な言語, 完全に単純な語 184 理想的に単純な言語, 連結類 185 完備した言語 186 形式的に等質な言語 186 完全に等質な語, 完全に等質な言語, パラダイムをもつもの 188 制限された等質性をもつ言語および語 189 整合的なパラダイム 190 Γ 関係 192 変形関係 193 変形条件を満たすパラダイムをもつ言語 195
4. 文法カテゴリーのモデル化 ————— 197

予備概念, 文脈の容量 197 予備概念, 文法カテゴリー, カテゴリー束など 198 格の決定の一方法 199 T 判別的文脈と T 判別的句 201 格形成文脈 202 まとめ 207

第 4 部

類型学の応用

— 比較言語学におけるガムクレリゼらの試み —

209

1. 比較言語学と類型学 ————— 211
2. 音韻体系 — 印欧語の破裂音 ————— 217

喉音の取り扱いとケントゥム, サテム語群 227 破裂音の通時的変化 229 アルメニア語の体系 231 サンスクリットの体系 232 印欧語の s 233 語根の構造 235
3. 形態論 ————— 239

印欧祖語の類型 239
4. 名詞 ————— 251
5. 動詞 ————— 262
6. まとめ ————— 272

跋 276 註 277 索引 301

まえがき

はじめてロシア語を学びはじめたとき、ロシア語がそれまで学んできた英語などと非常に異なった「くせ」をもっていることに、とまどいを感じたことを、覚えている。たとえば英語であれほど自由にまた便利に用いられていた have 動詞がほとんど用いられないで、be 動詞にあたるものがその代わりをしていることや、名詞に「もの」であるか、それ以外のものであるかという区別があることなども、その一つであった。そのうちに、その中にはたとえば所有の表現とか、「～が好きだ」という表現のように、日本語と共通する「くせ」や、be afraid とか full とかのよう、英語でも属格をとる語彙がよく似た意味をもっているというように、英語と共通する「くせ」があることもなんとなくわかってきた。しかしこれらはあくまで「くせ」であるから、なぜそのような現象が起こるのかを問うことは不可能でもあるし、また意味のないことであると思われた。

しかし最近とくにクリモフによって提唱された内容的類型学によれば、これらの「くせ」が実は言語の類型と深いかわりをもっていること、そしてそれらが構造的に意味をもっていることが、主張されているように思われる。この立場からすれば、これまで説明不可能と思われ、言語のさまざまな箇所 に散在していたいろいろな現象が、たがいに関連をもったものとして立ち現れてくる。この内容的類型学の方向は、旧ソヴェト、とくにレニングラードを中心とする言語研究の、かなり長年月にわたる歴史を、背景にしていると思われるが、少なくとも我々にとっては、そのようなものとして意識されるようになってからまだ日も浅いため、まだまだ不十分な点やよくわからないことも多く、またさまざまな分野からの批判の存在も考えられるが、それにもかかわらず、一つの新しい視点を言語の研究に提供するという点で、その

今後について注目する必要があると思われる。とくに最近イヴァーノフとガムクレリゼによって類型学の成果を比較言語学に体系的に適用しようとする試みが現れたことも、その必要を強く感じさせる。

ここで述べようとするのも、内容的類型学の出現の経緯をおおまかに跡づけ、その内容を主としてクリモフの所説について概観して、そのものの観方をもとにしてロシア語の諸現象を考察すれば、どのようなことがいえそうであるかを考えてみようとするのを、その趣旨としている。また内容的類型学が生じてくる過程で、従来の表現の技法を取り扱う類型学が、形式的類型学として精密化しつつある過程を、主としてレヴジンの所説をもとに瞥見した。したがって本書は著者自身の今後の研究の一つの足がかりとするために、問題を整理したものであり、その意味でとくに独創性を主張するものではない。しかし従来類型学という名のもとに行われてきた研究で、内容的類型学以前の段階にとどまっているものが多いことを考えれば、このような整理もなにがしかの意味をもちうるのではないかと、ひそかに考えている。

本書の第四部として、いま述べたガムクレリゼ・イヴァーノフの手による、印欧語比較文法への応用についても、若干触れることにした。この分野においても、旧ソヴェトの研究にはそれなりの歴史があると思われるからである。

本書は1984年に大阪外国語大学における集中講義のノートに手を入れたものであるが、はからずもこのたび京都大学学術出版会によって出版の機会を与えられた。まことに有難いことである。貴重な文献について教示戴いたり、また貸与下さった、出版会および周囲の方々、関係者の各位、並びに直接折衝にあたられた八木俊樹氏に感謝申し上げる。

一九九三年三月二十日

類型学序説——ロシア・ソヴェト言語研究の貢献

第 1 部

類型学の概念

§1 言語の類型といえは、これまで孤立型言語 isolating languages, 膠着型言語 agglutinative languages, 屈折型言語 inflective languages というような分け方がよくされていた[SL 123]。これによればたとえば英語, ドイツ語, フランス語のように印欧諸語に属している言語は屈折型言語であり, 日本語は膠着型言語だ, というのである。たとえばヴィルヘルム・フォン・フンボルト (Humboldt, Wilhelm von 1767-1835) は『人間言語の種々相とその人類の精神的発達に及ぼす影響について』という彼の有名な著書の中で, 語の孤立, 屈折, 膠着について述べているが¹, ここでフンボルトは, これら三つの型の間には, 次のような関係がある, といっている。

中国語の場合のように, 文中における語の属している(思考の)範疇を指示することが欠けてしまっていることと, 本当の屈折(フレクシオン)ということとの間には, 言語の備えている純粋な有機構造と背馳しないような第三者は存在し得ないのである。両者の間に存在し得ると考えられる唯一のものは, 屈曲(ボイグンク)として用いられた複合という方法だけなのである。この場合の複合とは, 本来の屈折を目差しながらも十分には完成されなかった屈折という意味なのであって, 実は機械的な接着にすぎず, 純粋な有機的付加形成ではない。こういうどっちつかずの混血児は, 仲仲それと見分けのつくものではないが, 近頃では膠着という名称で呼ばれているものである²。

ここでフンボルトが中国語について「(思考の)範疇を指示することが欠けてしまっている」というのは, 品詞の区別についてのことであると思われる。この言語ではたとえば「走」という場合, 「歩くこと」という名詞かもしれないし, 「歩く」という動詞かもしれない。名詞に特有な形, 動詞に特有な形というものがないからである。それを決めるのはこの言葉が, 文の中でどのような役割を果たしているかによるのであって, 単語だけとってみても, 必ずしもそれがどういう品詞に属するかかわからないのである。このため中国語の単語はいわば裸の形であって, 他の単語との関係があらかじめ決まっていなくて, とみられる。このような考えから, 中国語は孤立型言語に属している, と考えられているのである。これに対して屈折型言語では, 語は「純粋な有機的付加形成」を示していた, とフンボルトは考える。これはどのような意味であろうか。これをラテン語を例にとつて

考えてみよう。ラテン語の名詞 *domin-us* という語は「主人」の主格を表している。「主人が」である。このことから語尾 *-us* は主格を表すものだ、と考えられる。ところが *domin-i*「主人たちが」という形が別にあることから、*-us* は実は単数であることも表していることがわかる。また同じく単数の主格を表す *puell-a*「少女」という単語のあることから、*-us* はまた男性であることを表すものでもあると、結論することができる。しかしこの語尾のどの部分が男性を表し、どの部分が単数を、またどの部分が主格を表すかを示すことはできない。全体としてこれら三つのカテゴリーを表しているのである。逆に *-us* という語尾はいつも男性単数主格を表すかといえ、実はそういうこともできない。たとえば *puer*「少年」という語には語尾がないが、語尾がないというまことにそのことによって、この語は男性単数主格であることを示しているのである。あるいはまた *dom-us*「家」という語もある。これは *dominus* と同じ *-us* という語尾をもっているが、この語尾が示しているのは女性単数主格である。このように語尾は語幹から切り放してそれだけで独立した意味をもつことができないのである。これが「純粹な有機的な付加形成」という言葉の中身である。

これに対してたとえば膠着型言語に属しているといわれる日本語では、「が」という語は主語を表していて、「こどもが」、「犬が」、「机が」というように、どのような名詞にもつけることができる。また「こどもたち」、「犬たち」のように、複数は「が」とは違う「たち」という要素によって表される。この「たち」は制限があつて、どの名詞にもつくというわけではないが、広く用いられている。したがって複数の主格は「こども・たち・が」、「犬・たち・が」のように二つの要素をつなぎ合わせて表される。これがフンボルトのいう「複合」であつて、「機械的な接着にすぎない」とされているものである。

しかしフンボルトは膠着型言語を単に孤立型言語と屈折型言語の中間にあるものとして位置づけているだけではない。「本来の屈折を目差しながらも十分には完成されなかった」ものと考えているのである。この点について彼は次のようにいつている。

.....いわゆる膠着語と呼ばれる言語と屈折言語との相違は、語の概念の属する範疇をすべて屈曲によって指示するか否かという言語の種類相違ではなくて、膠着語も屈折語も実は全く同じ方向を目差しはいるものの、膠着言語の場合はその努力に明澄性を欠いているがために、その努力に不成功の度合いが強いというだけの相違にすぎない³.....

すなわちフンボルトは膠着型言語は屈折型言語になろうと努力してはいたが、

努力が足りなかったもので、不完全なままになっているものである、といっているのである。言語の型にこのような価値の違いを認める考え方は、膠着型言語は屈折型言語よりも劣った言語であるという考えを、当時の人々に植えつけるのに役立ったと考えられる。これは当時のヨーロッパの人々のヨーロッパ中心主義的な考え方を、支えるものでもあったといえよう。

§2 現代の言語類型学のさきがけをしたと考えられている、アメリカのエドワード・サピア (Sapir, Edward 1884-1939) は、言語の類型による分類について、「なぜ言語の分類が結局概して無駄な企てとなってしまったかを示すものとして、ここに第四の理由がある……前世紀の中葉に至るころ、社会諸科学にしみこんだ進化論的偏見がすなわちそれである」[SL 123] と述べ、「実はこの科学的偏見には、その大きい先駆をつとめた、もっと人間的な偏見が入りまじっていたのである。これまでの大多数の言語理論家たちは、だいたい一定の型に属する言語を話していた。彼らにとって、この型の言語のうちで最も完全に発達したもののといえば、その幼少のころ習ったラテン語かまたはギリシア語であった。従って熟知しているこれらの言語は、人間の言葉の到達しえた<最高の>発達段階を表わし、他の型はすべて、彼らの愛する<屈折的>な型に至る中間段階にすぎないと信ずることは、彼らにとってむずかしいことではなかった」といっている [SL 123]。

このような「科学的偏見」に対してサピアは「言語というものをその真の内面性において理解しようとするならば、優先的価値観の迷蒙を解いて、英語とホットtentott語とを、同じ超然たる態度で、冷静に、しかも興味を持って、観察する習慣をつけないければならない」と主張している [SL 124]。この主張が、前にフンボルトのところで述べた批判を裏づけていることは明らかである。しかしサピアがこのようないわば客観的立場に立つことができたのは、実はそれなりの理由があったと考えられる。彼は師フランツ・ボアズ (Boas, Franz 1858-1942) の流れを汲んで、アメリカ・インディアン言語の研究を行っていたために、ヨーロッパの「常識」によっては理解できないような、多くの現象の観察を行ってきたからである。

§3 サピアは、「<すべての言語は相互に異なっているが、ある言語の異なり方は、他の言語よりもはるかに甚しい>……要するにこれは、あらゆる言語は形態的なタイプ、構造的類型、に群別できる、ということである」[SL 120-121] といひ、言語をそれぞれの類型に分類することができることを示した。これが言語の

類型的分類についての、彼の理論的な基礎となっている。

サピアはさらに「厳密に言えば、地球の上で話される数千の言語と方言の特異性を十分公平に取り扱うような、有限の数の類型を打ち立てることの不可能さは、始めから判っている」[SL 121] といって、地球上の言語はきわめて多様であるから、これをいくつかの有限の類型にまとめてしまうことがむずかしいことを認めながら、それにもかかわらず、どのような方法によれば、比較的客観的な仕方でのような分類を行うことができるかを、体系的に考えてみようとした。サピアのこのような考えが、言語類型学というものの始まりであると考えられるのである。

サピアはこうしてさまざまな分類の方法を吟味したが、彼はそのどれもが、何かの点で難点をもっていると考えた。たとえば彼は、当時「屈折」、「膠着」、「孤立」という概念とならんで用いられていた「分析的」analytic、「統合的」synthetic、「複統合的」polysynthetic [SL 128 126] という考え方も、非常に有用なものではあるが、それでもなお、それだけを用いて分類を行うのは適当でない、と考えていた。

サピアによれば、分析型言語というのは、いくつかの概念を結合して一つの語を形成することがまったくない言語か、あるいはわずかしかな形成しない言語のことであるという。前者にあたるのはたとえば中国語である。この言語では、一つひとつの概念はそれぞれ別の単語によって表され、それが集まって文をつくるようになっている、と考えられるからである。また後者に属するのは、たとえば英語、フランス語などであるという。英語の場合には、たとえば desks という単語は「机」という概念と「複数」という概念が結びついて一つの単語を構成している。またたとえば brought という単語についても、同じである。ここでは「もってくる」という概念が、「過去」という概念と結びついている。そして文はこのような単語の集まりによってつくられるのである。

これに対して複統合言語というのは、「われわれなら従属的な様式で取り扱おうとは夢にも思わないような概念が、派生接辞により、または語幹要素の＜象徴的＞な変化によって象徴的に表わされ、同時に統辞関係のようなもっと抽象的な観念も、また語において担われている」ような、普通以上に統合的な言語である、という [SL 127]。

§4 サピアの『言語』は 1921 年に上梓されたが、それより 12 年後の 1933 年に発表され、のちに論集にまとめられた「言語」という論文——これを前者と区別して論集の『言語』ということにする——には、統合性を、「その言語における語

の相対的な総合性、または苦心の程度」the relative degree of synthesis or elaboration of the words of the language [SC 20 15]と規定し、次のような説明を加えている。少し長くなるが、これがサビアのこの用語の意味をよく示しているので、引用することにする。

総合的言語として、たとえば一つの単語といえども、本質的に分析不可能な孤立型 (isolating type) から、多くのアメリカ・インディアン言語によって代表されるように、単一の語が機能上しばしば文と等価であって、多くの具体的な言及をなし、おおかたの言語ではいくつかの語彙を用いざるをえないような型にまで様々に分布している。総合性には四つの段階が認められる。孤立型、やや総合的な型、完全な総合型、および複総合型である。第一の型の典型的な例としては、中国語がある。中国語は、数、時制、法、格関係等の概念を表わすのに、語が内部的替変による語形変化、あるいは接頭辞的、接尾辞的要素の添加による語形変化を認めない。中国語はきわめて特殊な型の言語であると考えられ、東アジアのいくつかの言語に最も良く見られる型である。中国語の他に、シャム語、ビルマ語、現代チベット語、安南語、クメール語またはカンボジア語が、孤立語の例としてあげられる。これらの言語が言語進化の上から特に原始的段階にとどまっているとする古い解釈は現在では問題にされない。本来は単一の語の枠組の内て表現されていた概念の結合を、音韻変化のために、分析的手段で再表現せざるをえなくなった、より総合的な言語が、論理的に極端な分析的発展をした結果がこれらの言語であるという、逆の仮説をあらゆる資料は示している [SC 15-16]。

やや総合的な言語として英語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語、オランダ語、デンマーク語のごとき、古くからよく知られているヨーロッパの現代語があげられる。これらの言語では、語はある程度の変化はするが、それは形態的にはごく普通の入念さでしか過ぎない。^(ママ)たとえば英語、フランス語の複数形の構成は比較的単純であり、この型のすべての言語の時制と法体系は、古い総合的手段の補助として、分析的手段を用いる傾向がある [SC 16]。

第三の言語群は、アラビア語のような言語、およびサンスクリット語、ラテン語、ギリシア語等の初期インド・ヨーロッパ諸語で代表される。これらの言語はすべて形態的には非常に複雑で、文法的性、数、格関係、時制、法のような分類上の概念はきわめて正確に、また多様な方法によって示される。たった一つの単語でも、形態的に豊かな意味を表わすため、その文は、最初に述べた言語型式の文ほどには力強くはなく、また語順もあまり整わない傾向にある [SC 16]。

最後に、複総合的言語では、基本的関係概念の処理が形態的には一層複雑になり、また論理的には異なる具体的な概念の多くを、一語のみの範囲内に体系的に編入する力も強まっている。エスキモー語、アルゴンキン語はこの型の典型的な例である

§5 サビアが1921年の『言語』を書いたとき、彼はこの複統合言語の例として、おそらくアメリカ・インディアンの中のいくつかの言語のことを思い浮かべていたと、思われる。彼が引用している例によってこれを説明すれば、次のようになるであろう。たとえばチヌークの言語では *i-n-i-a-l-u-d-am* という単語は、初めの *a* にはっきりしたアクセントをもち、完全に独立した一つの単語としての形を備えているが、ここで *i* は「近過去」を表す要素であり、*n* は代名詞的な主語にあたる「私(は)」を、*i* は代名詞的な目的語「それ、彼」を、また *a* も同じように代名詞的な目的語「彼女」を、それぞれ表している。さらに *l* はその前にある要素が間接目的語であることを示すもの、*u* は「話手から離れること」を表す。また *d* は「与える」という意味を示し、*am* は「特定の目的のために来ること、あるいは行くこと」を表している。結果として *inialudam* という単語は、「私は彼女にそれを与えるために来た」という意味をもつことになる。

あるいはまた、ミシシッピー峡谷にあるアルゴンキン語族の一つであるフォックス語では、*ch-kiwi-n-a-m-oht-ati-wa-ch(i)* という単語の場合、*ch* は「それから」を意味し、*kiwi* は「そこら中を動きまわること」を表すという。*n* は動詞の語幹を次の要素 *a* に結びつける役割をもつが、この要素 *a* は「逃亡、あるいは逃げること」を、また *m* は「生物の対象に対する使役」、*o(ht)* は行為が「主語のために行われること」、*(a)ti* は「相互に」の意味を表す。また *wa* は「複数」、*chi* は「三人称の生き物」を、それぞれ表しているという。結果としてこの一つの単語 *ehkiwinamohtatiwach(i)* は「それから彼ら(生き物)はある生き物に彼ら自身の相互から逃れてさまよわせた」、すなわち「それから彼らと一緒にになって(彼を)彼らのもとからずっと追い払っていた」という意味をもつことになる、という [SL 66-67]。

このような分類の仕方をサビアは用いなかったが、彼によればそれはこの分類の仕方が単なる量的な区別にすぎないからであるという。すでに述べたことから明らかなように、たしかに「分析的な類型」、「統合的な類型」、「複統合的な類型」の三つの類型を区別するのは、単語をつくる際にどれだけ多くの「概念」がそこに組み合わされているかという、量的な原理である。このような量的な原理ではこれらの類型の間にはっきりした境界を引くのは非常にむずかしい。いくつ以上の概念が組み合わされれば統合的な類型、あるいは複統合的な類型になるのか、またいくつ以下ならば分析的な類型になるのかという線を引くのは、実際には非常にむずかしいのである。類型の間にはっきりとした線を引こうとすれば、どう

しても量的な基準によるのではなくて、なにか質的な基準を用いなければならぬであろう。しかし一方ではサピアは、すでに述べたように、厳密に言えば地球上の言語の大きな数とそれらの言語が示している多様性を考えると、これらの言語をいくつかの少数の類型にまとめることは事実上不可能であることを認めている。もしそうであれば、言語を分類する場合に、おのおのの類型の間にはっきりした線を引いてしまう質的な基準だけに頼ることも、また正しいということにはならないはずである。少なくともサピアはそう考えていたように思われる。

§6 サピアの分析的、統合的、複統合的という言語類型の規定は、おおよそ以上のようなものであった。そしてすでに述べたように、この分類原理は、各言語の語の「相対的な総合性、または苦心の程度」に、その基礎をおいていた。これに対して従来の孤立型言語、膠着型言語、屈折型言語という分類は、彼によれば、「語を構成する多様な要素が相互に融合する度合い」the degree to which the various parts of a word are welded together [SC 20 15],あるいは「語の構成要素が結合される機械的な粘着度」mechanical cohesiveness with which the elements of words are united [SC 22 17]に基づいている。論集の『言語』においてサピアはこれについて四つの型を区別している。これについての説明は、サピアの考えをきわめて明確に示しているので、少し長いが、やはり引用しておくことにする。

第一の型は、そのような結合作用が存在しない言語で、すでに述べた孤立型の言語である [SC 17].

第二の型の言語群には、語を本来の機械的構成要素に十分分析でき、各々の要素は多少なりとも明確に確立した意味を持ち、しかも各々の構成要素は他のあらゆる語彙に規則的に用いられ、新しい単語にはそれぞれの構成要素の意味を連合した概念が付与されるとき、そのようなすべての言語群が属する。いわゆる膠着語 (agglutinative language) である。大多数の言語は膠着的手段を用いていると思われる。これによると論理的分析が手段の節約をとまなう大きな利点がある。アルタイ諸言語と、特にトルコ語はそのよい例であるが、アフリカのバントゥー諸言語は形態上は膠着語である [SC 17].

第三の型はいわゆる屈折言語である。語根の要素、または語幹と、語形変化をする接頭辞、接尾辞との結合度は、膠着語よりも大きく、そのため、通例、語幹を取り出して接辞要素と分離することが難しい。しかし一層重要な点は、屈折言語では膠着語の場合よりも、言語的構成要素と、それが表わす概念との間には多少なりとも一対一の対応があるという事実である。仮にラテン語を例にとると、複数性の概念は、相互に音韻的關係をほとんど持たないと思われるきわめて多様な手段で表現

される。たとえば“equi”(=horses 馬)，“dona”(=gifts 贈物)，“mensae”(=tables 食卓)の語尾の母音または二重母音と“hostes”(=enemies 敵)の語尾の母音および子音とは機能的には等価値の構成要素であるが、その接辞の配列は論理的関連性を持たないまったくの形態的、歴史的な要因によっているのである。……以前は、良い意味で、ラテン語、ギリシア語のような屈折言語が持つ「化学的」特性と、トルコ語等の言語がもつ安定した機械的特性とを比較することがよく行なわれた。しかしこのような評価方法は、旧式で主観的であるため現在ではかえりみられない。これは明らかに英語、フランス語、ドイツ語を駆使する学者達が、みずから最も精通している言語構造をあえて有利な位置に合理化した事実起因している[SC 17-18]。

複雑な音韻法則が作用したために、融合作用がもたらした結果として、ことばの語根的要素に内部的替変の型式を生み出した第四の言語群が、屈折言語の派生として考えられる。たとえば英語で有名な“sing”, “sang”, “sung”, “song”の例は、内部的替変の構造的特徴についての若干の概念を提示している。これを「記号法的」(symbolistic)という。認めうる内部的替変の種類としては、母音の特性の交替、子音の交替、音の長さの交替、種々の型式の重複または反復、強さアクセントの交替、および中国語やアフリカの多くの諸言語に見られる音の高さの交替がある。この型の典型的な言語はアラビア語である。アラビア語では、他のセム語族と同様に、語の基本的意味は子音連鎖または子音群が表わすが、この子音連鎖には意味を持つ母音群が結合され、しかも母音群の連鎖型式は、子音群の構成が表わす意味とは独立した一定の機能をもっている[SC 18]。

第三の型の説明の中にある、「屈折言語では膠着語の場合よりも、言語的構成要素と、それが表わす概念との間には多少なりとも一対一の対応がある」という表現は一見奇異なものに思えようが、例を参照すれば明らかなように、屈折言語の場合には語を構成する要素の各々が、それぞれ一定の概念と対応するというのではなく、語全体がある(複合した)概念と対応している、というほどの意味であると解される。また第四の型のsymbolisticという用語に当てられた「記号法的」という訳語は、『言語』の泉井久之助の訳語の「象徴的」に等しい。ともに語における一定の記号要素が、具体的な概念に直接対応するのではなく、その存在(あるいは非存在)によって、語根によって示される概念に何らかの変化が生じたことを暗示するという点で、「記号法的」であり「象徴的」である、と解されるのである。

§7 サピアは分類のための第三の「標準」[SC 15]として、「言語の基本的関係的概念がそれ自体直接にどの程度表明されているか」を挙げている。すでにこれまで述べてきたことから明らかなように、彼は、少なくとも論集の『言語』にお

いては、「既知の言語形態のうち逸脱的な変種をも正当に扱った分類法は未だ提示されていない」[SC 15]という認識の上で、これら三種の「標準」を「便利なもの」として、いわば同等の資格で扱おうとしている。しかし『言語』においては、「分析的、統合的、複統合的にわけける尺度は、われわれの目的には、あまりにも単に量的であるので、私はこれを棄てた」[SL 134]としてこの分類法を批判し、さらに「孤立的、接辞的、象徴的——これもまた、手法上の外形にあまり重点を置きすぎるといふ理由から、不十分であるように考えた。孤立的、膠着的、融合的、象徴的にわけるのは取り柄のある図式であるが、やはり、外形にこだわっている」[SL 134]と述べ、「とにかくすべて従来の単層的な分類の試みには、重大な難点がある。私の重層的な分類は次のごとくである」[SL 134]として、彼の分類を示している。

また別のところで彼は「世間一般に行われているような、言語を「孤立的」、「膠着的」、「屈折的」（「融合的」と解される）に分ける純粋に手法的な分類法は、言語の直観的形態の発見に打ち込まれる楔として大した価値を有するといえない。もっとも上に提案した四つの概念の群（以下に説明）に分つ分類法が、それよりももっと深く楔を打ち込むかどうかはわからない」[SL 141]とも述べている。

このような彼の言明から明らかなように、彼は従来の分類の基準が形式的であるとしてこれを排し、内容にかかわる分類法を提案しようとしたのである。この点に我々は内容的類型学との接点をみる思いがする。もし彼が論集の『言語』においてこの最後の基準をも、他の形式的基準と同等なものとして扱おうとしたとするならば、彼はこの内容的基準もまた十全なものではなかったと、考えたからではなかったろうか。

それはともかく、彼はまず、文の中に表された概念と、概念を表すために用いられた文法的な手順との関係という観点から文を分析して、次のような四つの種類の概念を区別した。

質料的なもの	1) 基本(具体)概念——対象、行為、性質などの概念
	2) 派生概念
関係的なもの	3) 具体的関係概念
	4) 純粋関係概念

1) の基本概念については、とくに述べることはないであろう。2) の派生概念とは、たとえば英語の book「本」に対する book-let「小さい本」のように、語幹要素に語幹要素ではない要素を接辞したり、あるいはたとえば [ju:z](use)「用いる」に対する [ju:z](use)「使用」のように、語幹要素の内部の修正によって示される

ものである。

§8 3)の具体的関係概念というのは、サピアのいうところによれば、2)よりもっと抽象的ではあるが、まだ具体性がまったく欠けてしまったわけではないものである。これは「それが直接附加される特定の語を超えて関係を表示または暗示する点で」、2)とはまったく異なるものであるという。この「直接附加される特定の語を超える関係」とはどういうものかについて、サピア自身が引いている例をもとに説明すれば、次のようになる。

いまラテン語の *illa alba femina quae venit* 「やって来ところの、かの白い(白人の)婦人」という文と、*illi albi homines qui veniunt* 「やって来ところの、かの白い(白人の)人々」という文とを比べてみる。そうすればこれらの文の中のすべての語は、一つの語幹概念と、格、数、性、人称、時称という五つのカテゴリーの中から選ばれた三つの関係概念を含んでいることがわかる。すなわち、

「かの」(女性・単数・主格) + 「白い」(女性・単数・主格) + 「婦人」(女性・単数・主格) + 「関係詞」(女性・単数・主格) + 「来る」(現在・三人称・単数)

「かの」(男性・複数・主格) + 「白い」(男性・複数・主格) + 「人」(男性・複数・主格) + 「関係詞」(男性・複数・主格) + 「来る」(現在・三人称・複数)

このばあい「かの」と「白い」と「関係詞」のもっている「女性」あるいは「男性」と「単数」あるいは「複数」、および「主格」という三つの関係概念は、実際には文の本質からみれば別に必要なものではない。また「婦人」のばあいにも、「主格」という関係概念を除く他の二つの関係概念は、必要とはいえない。それにもかかわらず、ラテン語ではこれら「かの」と「白い」と「関係詞」という三つの語のもっている関係概念は、これらの語を超えて別の語、すなわち「婦人」、あるいは「人」と関係しているのである。また「婦人」という語のもっている「女性」という概念、「人」のもっている「男性」という概念は、逆に上に挙げた三つの語に関係をもっているから、少なくともラテン語では関係概念であると考えられる。ところが上に挙げたラテン語の文に対応する英語の文 *the white woman that comes* および *the white men that come* とを比べてみればわかるように、英語のばあいには、男性と女性の区別はほかの単語と関係をもっていない。したがって性のカテゴリーは、現実を反映している質料的な概念であって、関係的な概念ではないことになる。同じように日本語では数の概念も、名詞と関係する他の品詞において表現されないから、関係概念ではなく、文法的にこれを表す必要はないのである⁴。

このような、言語によってはなくても文をつくるのに差し支えないような関係概念に対して、それがなくては文がつかれないような関係概念もある。このような概念は具体概念をたがいに結びつけて命題の基本的な形をつくるのになくはないから、すべての言語に存在しているに違いない。これが4)の純粹関係概念である。たとえば「主語」と「述語」とか、「目的語」とかいうものが、これにあたる。

§9 サピアは、上で述べたような四つの種類の概念の組み合わせによって、言語の分類を行うための枠組みをつくろうとしている。

- A. 単純な純粹関係的言語
これは1)と4)の概念だけから成る言語である。
- B. 複雑な純粹関係的言語
これは1), 2), 4)の概念から成る言語である。
- C. 単純な混成関係的言語
これは1)と3)の概念から成る言語である。
- D. 複雑な混成関係的言語
これは1), 2), 3)の概念から成る言語である [SL 135].

サピアはこのような組み合わせをつくっているが、上に述べたように4)の純粹関係的概念が文をつくる上で欠くことができないものであるとすれば、サピアの言語の型の定義は、すべての類型に4)の純粹関係的概念を加えるべきであろう。これがすべての型に含まれていなくてはならないからである。そうすればサピアの分類の仕方は、まず3)の概念を含むか含まないかによって、言語を純粹関係的言語と混成関係的言語とに分け、次に2)のタイプの概念を含むかどうかによって、言語を単純な言語と複雑な言語に分けることになる。この二つの分類を組み合わせることによって、上述の四つの型が得られるのである。

このような分類によれば、Aの単純な純粹関係的言語は、要素の統合という点からみれば、分析的なものになるであろう。したがってその表現の仕方は孤立的であるか、あるいは軽い膠着型言語的な傾向をもつことになる。このため、この型に属するものとして、まず第一に中国語、安南語が挙げられる。次に弱い膠着型言語的な言語としてギニア海岸のユー語、軽い膠着型言語として近代チベット語などがあるという。これに対してBの型に属するものは、1)と4)の他に2)のタイプの概念も含んでいるから、膠着・孤立型言語的なもの、膠着型言語的なもののほかに、屈折型言語のように語幹と語尾などの要素が融合して分析すること

がむずかしい、融合的なものが考えられる。したがって統合の度合も、ポリネシア語のように分析的なものから、アメリカ・インディアン・ハイダ語のように複統合的なもの、トルコ語のように統合的なものに及ぶという。日本語も膠着・統合的なものとしてこの型に属するとされる。

サビアがC型の単純な混成関係型言語に属するといっているのは、一般には膠着・統合語的な言語とされるバントゥー語、融合的・分析的で同時に軽い統合語的な言語であるとされるフランス語である。このC型は単純な混成関係的な言語であるから、1)の具体概念と3)の具体的関係概念をもつが、2)の派生概念はもっていないはずである。バントゥー語やフランス語がそのようなものであるかどうかについては、人によって意見が異なるかもしれない。実際フランス語でたとえば pomme [pɔm]「リンゴ」— pommier [pɔm-je]「リンゴの木」、poire [pwa:r]「ナシ」— poirier [pwar-je]「ナシの木」のように、膠着的な手段によって派生概念を表すものも、ないわけではない。しかしたとえば je n'ai pas pu commencer à lire.「私は読みはじめることができなかった」のように、ほとんど無変化の記号素が独立して結びついているのは、孤立型言語的な特徴であり、aime「私は愛する」に対する aimons「私たちは愛する」、あるいは aimerais「私は愛するだろう」のような形があることは、融合的といわれる特徴を示している。さらにたとえば Je le lui ai dit.「私はそれを彼にいった」という文は、発音記号で表記すれば、[ʒə-lə-lqi-ɛ-di]となり、統合的な性格をも示している。同じようにバントゥー語のばあい、たとえばこの語族に属するスワヒリ語の ni-li-ki-soma「私はそれを読んだ」という文は、ni-「私(が)」, -li-「過去」, -ki-「それ(を)」, soma「読む」から成り立っている。したがってこの言語は膠着・統合的な型に属することになる。またこの言語では語の派生は一般的ではないから、単純な型であるといえる。

これに対して英語のばあいは、派生概念をはっきりもっていて、融合的・分析的な言語であり、複雑な混成関係的な言語の型に属するとされている。D型である。ラテン語やギリシア語などの古典語も、融合的・統合的な言語として、この型に属するという。そうすればロシア語も当然これに属することになるであろう。サビアによれば、セム語は象徴的・融合的で、統合的な言語であるという。ここで象徴的であるというのは、語幹の内部での変化あるいは内部屈折といわれるものをもっている、という意味である。たとえばセム語族に属するアラビア語の場合、単語の具体的な意味は原則として三つの子音によって支えられ、これらの子音の間にはさまれるさまざまな母音の変化によって、派生概念や関係概念が表されるようになっている。たとえばアラビア語では k-t-b という三つの子音によって

「書く」という具体概念が表されるが、これから派生されるものとして、たとえば kitabu「書物」があり、その複数として kutubu がある。これは具体的関係概念を表すものであるといってもよいであろう。さらに kataba「彼は書いた」(完了), ya-ktubu「彼は書く」(未完了)のようなものもつくられる。

§ 10 以上に述べたような考察を行うにあたって [SL 126-127], サピアは孤立的とか膠着的とかいうような区別を「その言語において最も典型的に発展している形態の手順による分類」であるといい、また分析的、統合的、複統合的というような分類の仕方について「非常に有用なもの」ではあるが、「排他的に適用されるべきではない」ものであり、「これら三つの名称は純粋に量的なものである」といっている [SL 125-127]。これに対してさきに述べた 1) から 4) までの概念の種類による言語の分類を「決して言語の手法上の外形を参酌するものではなく」、「諸概念を言語記号に翻訳する」仕方に関するものである [SL 135-136], としている。

このようなサピアの考えは、おそらくサピア自身が思っていたよりも重要なものを含んでいたように思われる。すなわちサピアはここで、1) 孤立、膠着、屈折というようなこれまでの分類の仕方は、形式的な手続きに関するものであること、2) 分析的、統合的、複統合的というような分類の仕方は形態的なものであること、を明らかにし、それだけでなく、概念を言語記号に翻訳する仕方についての型を研究することが必要である、といっているのである。この点でポティエ (Pottier, Bernard 1924-) が、「サピア作製の (1949) 基準のリスト (その言語で表現された概念のタイプ、表現の技法、総合の程度)」⁵ といっているのは正確である。最近の類型学の研究は、これからみるように、内容を重視した「内容類型学」contentive typology の方向に進みつつあると思われるが、サピアのこのような主張は、この方向の先駆となったと、いうことができよう。

サピアの分類の枠組みは、単に形態論のレベルだけを考えたものではなく、統語論のレベルも考慮に入れている、という特徴をもっている。この観点からみれば、完全に無形態の言語は存在しないことになる。たとえ形態のレベルにおいては無形態であっても、基本的な統語関係は、たとえば語順によって示される。サピアは、「どんな言語も、たとえその語彙中に一つの接辞すら見出しえないにせよ、基本的な統語関係は表現しうるし、また表現しなければならない。そこでわれわれは、すべての言語が形態言語であると断定する。純粋な関係の表現 (例えば語順) も事実一種の形態であることを無視するなら、言語はもちろん「無形態的」でもありうる。しかしここでの「無形態的」とは、その言語が非語幹の要素

の使用に煩わされないという、器械的な、しかもかなり皮相的な意味である」[SL 124]と述べている。

これと関連して述べれば、内容的類型学は、類型の基礎をなすのが「主語・述語関係」の型であるとするが、クリモフ (Климов, Георгий Андреевич 1928-) はこの考えを最初に明らかにしたのが外ならぬサピアであったとして、『言語』の次の箇所を引用している [KP 16-17]。

ある事物とある行為とについて語ろうとすれば、その二つが同格的に関係しているか(例、彼は「酒と打つこと」が好きだ)、その事物が発現点すなわちその行為を「なすもの」として、いいかえれば、通例いわれるように、それについての活動が叙述される「主語」として考えられているか、もしくは反対にそれが終点であって、行為の「目的」であるかについて知らなければならない。もしも一人の農夫と、一羽の家鴨の子と、殺害の行為とについて明瞭な観念を伝達しようとするならば、これらの具体的な表象に対する言語記号を、むやみやたらにどんな順序に並べて置いても、聴者はその場合の全般からこうだろうと推して、ある種の関係の型式を構成するかも知れないなどと、相手委せにするのでは十分といえない。根本的な統辞法上の関係は、曖昧なところのないように表現されなければならない。時、処、数、その他、いろいろ多くの概念に関する問題については沈黙していることもできるが、誰が殺害を行うかという、この要点を避ける手は見出されない。それを避けることのできる、または現に避けていると知られた言語は存在しない、それは、具体概念に対する記号を使用しなければ何事もいいえないのと同様である [SL 90-91]。

§ 11 一形式的な類型学は内容的な類型学によって完全にとって代わられたわけではない。内容的な類型学が成り立つための基礎には、どうしても形式的な類型学の研究が必要になる。そのためには言語の形式的・類型学的な記述の方法や、概念の精密化がはからなければならないだろう。また比較的最近のことであるが、類型学の研究が進んでくるにつれて、さまざまな言語に共通して現れる一般的な法則があることがわかってきた。その現れ方は、とくに音声の面で明瞭にとらえられる。たとえばどの言語においても、「子音」+「母音」という型の音節をもたないものはない、とか、ある言語の音韻に鼻子音が二種類あるとすれば、それは必ず n と m である、とかいうようなものである(したがって m と η しかもたず、 n を欠く言語はない、ということになる)。

もちろんこれは音の面だけに認められるものではなく、文法の面でもたとえば複数をもっている言語は必ず単数ももっており、もし双数をもっていれば必ず複数ももっている、というような原則が認められる。研究者はこのようなものを「常数」

constants とか、「言語的普遍」language universals などといった。言語的普遍とは何を指すかについて、理論的な基礎を与えたものに、グリーンバーク (Greenberg, Joseph Harold 1915-), ジェンキンス (Jenkins, J.J.), オズグッド (Osgood, Ch.E. 1916-) の三人の署名のある論文「言語的普遍に関する覚書」⁶があった。この中で、言語的普遍とは、 $\forall x(x \in L \supset \dots)$ すなわち、「すべての x について、もし x が言語であるならば……」という論理的構造をもつものであると定義されている。これはさらに六個の種類に分けられるという。

その一つはいま述べたとおりの形をし、論理的な性質のものであり、すべての言語に妥当する、非限定な言語的普遍である。たとえば「すべての言語には母音がある」とか、「すべての言語における音素の数は 10 から 70 の範囲内にある」というようなものである。

第二のものは包含関係をもつものである。これは $a \rightarrow b$ という形、すなわち、「ある言語において、もしこの言語が事象 a をもつならば、この言語は事象 b をもつ」という形をしている。これは非対称的である。すなわち、 $a \rightarrow b$ が成り立っても、逆、すなわち $b \rightarrow a$ は成り立たない。さきに述べた、複数をもつ言語は必ず単数をもつ、とか、双数をもつ言語は必ず複数をもつ、というような言語的普遍は、これに属する。グリーンバークが 1966 年に発表した論文⁷によれば、このばあい、前件にあたる「含むもの」explicandum、すなわち a 、は常に対立の有標的な項、後件にあたる「含まれるもの」explicatum、すなわち b 、は無標的な項であるという。

第三のものは限定的な等価といわれているものであるが、これは $a \rightarrow b$ と $b \rightarrow a$ の両方が成り立つ、対称的なものである。たとえば、グリーンバークの例によれば、側音のクリック (吸気による発音) をもつ言語は、歯音のクリックをもち、また逆も真であるという。

第四のものは、統計的普遍といわれるものである。これは第一のものに蓋然性を加えたものであって、「すべての言語においては、事象 a をもつ可能性が、他の事象をもつ可能性よりも大きい」という形をもつという。たとえば「すべての言語においては、少なくとも一つの鼻音をもつ可能性が、一つももたない可能性よりも大きい」というようなものが、これに属するという。

第五のものは、第二のものに蓋然性を加えたものであって、「もしある言語に事象 a があるとすれば、事象 b もある可能性が、ない可能性よりも大きい」という形をしているという。たとえば単数二人称が性を区別する言語では、単数三人称においても性の区別がある可能性が大きい」というような場合である。

第六のものは、やはり蓋然性にかかわるもので、普遍的分布法則と呼ばれる。これは十分に大きい資料をとれば、ある事象の頻度が、一定の平均値、一定の標準偏差の枠内に収まる、というものであるという。グリーンバーグ自身の例によれば、たとえばある言語体系が多くの冗長度 *redundancy* をもち、その意味で効率的でなければ、伝達に際して情報の受け手が少々誤っても、意味は完全に伝達される。したがってこのような誤りがしばしば起こるようになり、やがて体系自身が冗長度を減らす方向に動くようになる。逆に冗長度が極端に少ないと、情報の受け手の一度の誤りが伝達を損なうことがしばしば起こる、したがって体系は冗長度を増やす方向に働く。結果として、冗長度は一定の枠内に収まるようになる、というのである。

このような言語的普遍の研究も、類型学的な研究と密接にかかわっている。言語全体にかかわる第一の型および第四の型の言語的普遍を除いて、残りの型をもつ言語的普遍を明らかにすることによって、言語を類型に分類することが、少なくとも理論的には、可能となるからである⁸。

しかしこのばあい、問題になるのは、類型という概念の中身である。クリモフの内容的類型学は、主語・述語・目的語の関係が、類型の基礎であって、これがヒエラルキーの頂点にあり、これに基づいて当該言語のさまざまな現象が「構造化」されているということをその基本的な原理としている。したがってこれによれば、すべての言語は、この関係の表現の仕方の型によって、異なった類型に帰属するのである (§ 30, 31 参照)。この意味でクリモフの意味する「類型」は、客観的に存在する事実なのである。したがって類型を決定する基準は、恣意的なものであってはならず、主語・述語・目的語の関係から論理的に決定される、各レベルの文法現象（「包含事象」*implication*）の束に属するものでなくてはならないことになる。いいかえれば、類型の決定には、*implication* という名の示すとおりに、基本的な関係から演繹的に得られる特徴のみが、基準となりうるのである。

これに対してグリーンバーグは「言語的普遍」を用いて類型の決定を行おうとするのであるから、クリモフの手続きとは、方向が逆になっている [KP 28-29]。そうすれば、類型的基準があらかじめ設定できないから、使用する基準は勢い恣意的にならざるをえない。グリーンバーグに対するクリモフの批判も、まさにこの点にある。すなわち、

現代言語学のかなり広範な実践に反映されているグリーンバーグの定式の中に、これが類型学に関わるものであること自体を疑わせる、少なくとも二つの弱点がある。

第一に、何等の議論なしに、（しかもとくに言語類型という概念を完全に無視して）言語

類型学的アプローチを任意の構造的アプローチと同一視していることがここで目
を惹く。第二に、このばあい方法的手順自身の(起源的(*i.e.* 比較言語学的 I.Y.) および地域
言語学的なテクニックと比較して)かなり恣意的な完全な逆転が前提となっている」[KP
27]⁹。

2

類型学の意味

§ 12 19世紀においては、言語の研究の中心になっていたのは、比較言語学であ
った。これは一つの言語から分かれて生じてきた言語を対象にして、そこにみ
られる音韻を比較し、もとの言語の音韻を推定し、これに基づいてもとの言語の
語彙、文法など、さまざまな現象を明らかにする。そしてこの推定された祖語、
あるいは共通基語といわれる、もとの言語の現象をもとに、逆に一つ一つの言語
の現象を説明しようとするのである。このように同じ共通基語から分かれてでき
た言語を、互いに親近であるという。したがって比較言語学は、言語の親近性に
基づいた学問なのである。

この比較言語学は、大航海時代に始まる地理上のいろいろな発見、キリスト教
の宣教師の布教活動によって、それまでまったく知られていなかった地球上のい
ろいろな地方の言語資料がヨーロッパに持ち帰られて蓄積されたこと、とくにサ
ンスクリットの知識がヨーロッパにもたらされたこと、を直接の契機として発達
したものである。ヨーロッパの学界は、この遙かな東洋からもたらされた言語が
ギリシア語、ラテン語とその構造において酷似していることに驚嘆したのである。

インドにおいてサンスクリットを最初に正式に学び、アジア協会を創立したウ
イリアム・ジョーンズ (Jones, William 1746-1794) は、その機関誌 *Asiatick Researches* にお
いて、次のように述べているという。

サンスクリットはその古さが如何あろうとも実に驚嘆すべき構造の言語である。そ
れはギリシア語よりも完全にラテン語よりも豊富であり、更に両者の何れより
も精巧である。而もこれら両者とは動詞の語根に於てもまた文法形式に於ても偶然
生じたとは考えられない程の類似を有している。この類似は実に著しく、如何なる
言語学者と雖もこれらの三言語を調査しては、これらが、恐らくは最早存在しない
或る共通の根源より発したものであることを信ぜずには居られまいと思われる。さ
ほど確定的には言えないが、ゴート語やケルト語も、他種の言語と甚しく混淆して

いるとは言え、共にサンスクリットと同一の起源を有していると思うべき同様な理由がある。(仮にこれがペルシアの古代に就いて何かを論議する場所であるとすれば)、当然古代ペルシア語も亦同一語族に加えられることとなるであろう¹⁰。

それ以来、印欧語族のインド・イラン語派に属するこの言語は、周知のように、ギリシア語、ラテン語とともに、印欧語比較言語学において最も重要な言語の一つになったのである。

しかも当時のヨーロッパは、比較言語学の発達に非常に都合のよい状態にあったと考えられる。その一つは19世紀のヨーロッパに一般的であった、いわば時代の精神が、ダーウイン (Darwin, Charles Robert 1809-1882) の『種の起源』に始まる、歴史主義であったことである。当時のヨーロッパの学問は、大なり小なりこの歴史主義の影響を受けていた。そして比較言語学もまた、言語を共通基語との関係において研究しようとする、歴史主義的な側面を強くもっていたのである。その第二は主としてドイツを中心とする、ロマンティズムの影響である。ドイツを中心として「青年文法学派」Junggrammatiker といわれる研究者たちが比較言語学の研究をおし進めたことは、言語学史の上で有名であるが、これらの人々は「音韻法則に例外なし」という合言葉のもとに、その研究を行ったといわれる。このロマンティックな標語には比較言語学に対する深い信頼が表されているが、そのような信頼こそが、この学問をおし進める原動力になったのだと思われる。この比較言語学の発達によって、言語についての学は、はじめて学問の名に値するものとなり、また学問として認められるようになったのである。

この比較言語学は、すでに述べたように、あるグループの言語を比較してその共通基語を考え、この言語の状態を推定する——これを共通基語の「再建」または「再構築」という——こと、およびそれをもとにして、この言語から分かれた言語(下位言語)のさまざまな現象を説明しようとすることを目指している。したがって比較言語学が扱うのは、起源が同じ親近諸言語に限られる。もちろん比較言語学では、たとえば語彙の再建の場合に、ある言語が、ある時代に周辺にあった親近諸言語、あるいは親近でない諸言語から借用したものも研究対象にするが、これも共通基語から説明できないものの起源を説明しようとするためであって、決して比較言語学の枠の外にあるものではない。

このように一つの言語から多くの言語が分かれてることを言語の「拡散 divergence の相」ということにすれば、比較言語学が扱うのは、この拡散の相であることがわかる。これに対して言語には「集約 convergence の相」も考えられる。世界の言語の歴史を考えてみると、むしろこの集約の相の方が、拡散の相よりも実際に

は多いのではないかとさえ思われる。起源の異なるいくつかの言語が地域的に、あるいは文化的または政治的その他の理由で接触してたがいに融合し、新しい言語をつくりだす、という場合である。ペレゴ (Perego, Pierre) はこのようなものをさらに分類して、サビール型の言語、ビジン型の言語、クレオール型の言語などという¹¹。

§ 13 サビール型の言語というのは、ペレゴの定義によれば、1) 二つまたはそれ以上の言語の接触から発生したものであること、2) 相互理解の必要から生じた、通常は双務的なもの、すなわち双方の話手によって等しく利用されるものであること、3) その使用が意識的であること、すなわち使用者がこの言語を母語でもなく、相手の言語でもなく、また第三者の言語でもないことを意識して使用していること、という三つの条件を満たすものであり、かつ 4) 言語としてほとんど進展がなく、その生成のときの社会条件が変わると一般に消滅してしまうような、いわば不安定で、一時的なものである、ということになる。いわゆるリングア・フランカである¹²。したがってこの種の言語は偶然によって記録されないかぎり、体系的な資料としては残されることがない。たとえば地中海の港では、いくつかのロマンス系諸語、ギリシア語、アラビア語、トルコ語から成る言語が使用されていたが、これは上述の条件を満たしている。ペレゴが北アフリカのマグレブ地方にかつて行われたこの種の言語について推定しているところによれば、これは音声的、音韻的に中部イタリアの言語に非常に近いものであったが、単数・複数の形態上の区別がなく、冠詞もない。また人称代名詞は極端に単純化されていて、格の区別がない。動詞は現在兼未来の形、たとえば *mi andar* 「私は行く、または行くだろう」と過去形 *mi andato* 「私は行った」の二つしか区別しない。統語法は極端に単純化されているといったものであるという。

彼によれば、このほか最もよく知られているものとして、19 世紀にアメリカ北太平洋岸でチヌーク族インディアン毛皮漁師たちが、イギリス人やフランス人との間で用いていたものがあるという。

ペレゴによれば、19 世紀の 80 年代以降、上述のマグレブのサビール語は双務的であることをやめ、その使用はアラビア語およびベルベル語を母語とする人々に限られてくるという。すなわち双務的であることをやめた結果、この種の言語はある言語、たとえばフランス語の歪められたものと意識され、したがって使用者はなるべくこの主たる言語の構造に近づけようとするのである。このように個人、あるいは集団にその必要が感じられたとき、ある一定の状況下で社会的威信

のより高い言語を再現しようと努力した結果生じた、片務的な言語を、ペレゴは「疑似サビール語」と名づけることを提唱している。

§ 14 ピジン型言語というのは、ペレゴによれば、本来片務的であり、アフリカ、シナ海、メラネシアで用いられていた、英語的基盤に立つ疑似サビール型の言語が、双務的になったものをいう。彼によれば、アフリカにはカメルーンのピジン英語をはじめとして、多くのこの型に属する言語があるという。また中国のものは、かつてはシンガポール、カリフォルニアでも用いられたが、今日では消滅しつつあり、中国にはもはや存在しないという。中国のものは、中国語的な統語法がみられ、たとえば個数を示すのに英語の *piece* に由来する *-pisi* (箇に対応する) や、場所や位置を示す接尾辞 *-side* (たとえば *China-side* 「中国で」、*bottom-side* 「底に」など)、あるいは所有や連辞を表す小詞としての *belongy* (たとえば *you belongy clever* 「きみは賢い」など) があるという。

これに対しメラネシアの英語系ピジン型言語は生きて使用され、大きな役割を果たしているという。この言語はヨーロッパ人の経営する農場でしばしば混ざりあって働いている、パプア族とメラネシア族との両方に対してヨーロッパ人が用いたものであって、語彙の範囲がきわめて狭く、こみいった表現をしばしば必要とするという。たとえば「敵」は *man ee no good long you me* によって、「ウインクする」は *look look long one eye that's all* によって表される、という具合であるという。また、数や性を表すにも、たとえば *plenty man* 「人々」、*woman he brother belong me* 「私の妹」のように表すという。未来を表すには *by and by* に由来する *bimeby* を、過去を表すには *finish* を用いる。

クレオール型の言語というのは、事実上はすでに述べたピジン型の言語であるが、歴史的、あるいは社会的理由によって、一つの言語共同体の唯一の言語になったものである、という。通常はとくに西インド諸島、ギアナ、北米南部のルイジアナ、南部アフリカ東岸のマスカリン諸島すなわちモーリシャス島、レユニオン島等で用いられる、その地域特有の言語を指しているという。

§ 15 日本語のばあい、さまざまな研究者が努力を重ねてはいるが、いままでの言語ともはつきりした親近性があるとは、証明されていない。これも、古い時代にこのような集約が行われたためである、という考えがある。

このように集約の相が言語の研究に重要であることは確かであると思われるが、残念ながらこの分野においては、まだ比較言語学に較べられるような有効で厳密

な研究方法は、つくり出されていない。しかしそのような方法についての模索は、これまでもさまざまに行われてきたし、また現に行われてもいる。たとえばあとから移住してある地域を占めるようになった民族の言語に対する、先住民族の言語の影響を明らかにしようという、「基層」substratumの研究もそうであるし、また同じ地域にある言語が共通の現象をもつようになることに着目する、いわゆる「地域言語学」areal linguistics, ареальная лингвистикаの研究もそうである。地域言語学の例としては、スラヴ系のブルガリア語、チュルク系のトルコ語、イリュリア系のギリシア語、ロマンス系のルーマニア語、それにアルバニア語などが行われている、バルカン半島の言語についてのバルカン言語学が挙げられる。これらの言語が、それぞれ系統が違うにもかかわらず、たとえば後置冠詞をもつこと、不定法をもたないこと、などの際だった特徴を共通にもっていることは、よく知られている。

当初筆者は、言語類型学の研究も、大きくいってこのような集約の相についての、研究の手がかりを与えてくれるものであると、期待していた。しかしその後クリモフの他の著作などを読み進めるうちに、これが拡散の相にかかわる比較言語学、および集約の相にかかわる地域言語学と並ぶものではあるが、この両者とは異なって、拡散および集約の相とは関係のない、分科であることを理解するようになった。クリモフは言語類型学(すなわち内容的類型学)と比較言語学、並びに地域言語学との相違について、次のように述べている。

相異なる言語学の分科の概念装置に属する、言語の類型学的なクラス、語族のクラス、および言語同盟 language union のクラスは、原則として相互に独立して形成された。ある種の言語が、これら三つの側面の一つにおいて近縁であっても、それらが他の二つの側面において近縁であるということにはならない。言語の観察の三つの基本的な視角のすべてが、言語発達の原則的に異なる過程の研究によって規定されていることを考えれば、これは当然である。すなわち、起源的言語学(*i.e.* 比較言語学的 I.Y.)は言語の拡散の過程を研究し、地域言語学は言語の集約の過程を、類型学的言語学は言語の平行的(同型的 isomorphic または異型的 allomorphic)な過程を、研究する [KP 35]。

§ 16 現代の言語学において、内容的類型学の方の重要性を強調した最初の人
は、おそらくヴィレーム・マテジウス (Mathesius, Vilém 1882-1945) であったと、思わ
れる。マテジウスは、プラーク構造主義言語学派と呼ばれている、プラーク言語
学団の創立者の一人であり、また代表者でもあった。このプラーク学派は、自分た
ちの学説を機能的構造主義と呼んでいた。マテジウス自身の言葉によれば、この
学派は、ボドゥエン・デ・クルテネ (Baudouin de Courtenay, Jan 1845-1929) から機能主
義的な考えを、またフェルディナン・ド・ソシュール (Saussure, Ferdinand de 1857-1913)
から構造主義的な考えを、それぞれ受け継いだという¹³。このボドゥエン・デ・ク
ルテネの機能主義的な考えというのは、結局のところヴィルヘルム・フォン・フン
ボルトの考え、とくに彼の「言語はエルゴンではなくてエネルゲイアである」と
いう考えに遡るものであると、考えられる。ここでエルゴンというのは、できあ
がった「もの」を意味し、エネルゲイアとは「はたらき」を意味している。言語
を「もの」としてではなく、「はたらき」としてみようとするのが、フンボルトの
立場であった。

プラーク学派の「機能」という考え方は、したがって構造主義という考え方と
並んで、この学派の中心的なものの考え方であったが、この学派のいう「機能」、
すなわち「はたらき」function、というのがどういう意味をもっていたかについて
は、これまでいろいろな解釈があったように思われる。たとえばプラーク学派と
同じように構造主義の立場をとって、北欧学派あるいはコペンハーゲン学派
といわれる、ルイ・イエームスレウ (Hjelmslev, Louis Trolle 1899-1965) に代表される、
「言理学」glossematics と呼ばれるものがある。この学派はソシュールの構造主義と、
ルドルフ・カルナップ (Carnap, Rudolf 1891-1970) にみられる、数理論理学とを結合し
ようとするものであるといわれている。したがってこの学派のいう「機能」とい
うのは、言語の体系、あるいは構造をつくる要素の、構造の内部におけるはたら
き、またはこれらの要素の間の関係を意味している¹⁴。我々が一般に「機能」と
いう言葉を聞いたときに思い浮かべるのは、おそらくこのような意味をもったも
のであろう。

プラーグ学派のいう「機能」は、これとはまったく違うものであるように思われる。マテジウスは、言語の主体には内在的に「表現の欲求」と「伝達の必要」がある、といっている。機能というのは、この前提に立ってこれらの表現の欲求と伝達の必要を実現するための、言語の「はたらき」をいうのである。言語を使うこと、すなわち言語活動は、なにかしらこれらの欲求あるいは必要をみたそうとするものであるから、そこにはかならず目的がある、ということになる。この目的は、できるだけ効果的に達成できることが必要である。目的が効果的に達成できるためには、どうしてもそこに一つの構造がなければならない。

たとえばここに「ア」という一つの音しかもたない言語があると仮定してみよう。これを使う人は何に対しても、ただ「ア」という音で自分の言いたいことを表すほかはない。この「ア」が発音される状況や、身ぶりや、表情、あるいはいろいろなイントネーションなどによって「ア」だけでも、いろいろなことを、相手に伝えることはできるであろう。たとえば生まれて間もない子どもの場合が、これにあたる。これに対してここにもし「イ」という音が増えられたらどうであろうか。たとえば「ア」は話し手にとって好ましいことを表し、「イ」はいやなことを表す、というようにすれば、「ア」だけしかない言語よりは、ずっと確実に話したい内容を相手に伝えることができるに違いない。言語活動の目的性という点から、ずっと効果的である。さらにこれに「ウ」や「エ」や「オ」が加われば、その有効性はさらに高くなるであろう。そうすればこれらの音はたがいに関連しながら対立する、一つの体系をつくることになる。構造である。

こういうようにして、言語には構造が生まれてくる。したがって構造は機能を支えるものであり、構造と機能は、一体のものとして考えることが、必要になってくるのである。言い換えれば構造が存在することによって、言語はより効果的に目的を達することができるようになる。プラーグ学派の主張する「機能」とは、コペンハーゲン学派の、構造の中の「機能」、「はたらき」という考え方とは対照的な、構造を成り立たせる「はたらき」であり、言語の構造も、このような意味での「機能」の立場から研究しなければならない、というものであると、考えられる。

§ 17 プラーグ学派は、このように機能と構造を表裏一体のものと考えて、その理論を展開したが、細かくみれば、研究者の間には、機能の面に重点をおくか、それとも構造の面を重視するかという、重点の置き方の違いがあったことも、確かである。たとえば有名なニコライ・トルベツコイ (Трубецкой, Николай Сергеевич

1890-1938), ロマン・ヤコブソン (Якобсон, Роман Осипович 1896-1982), それにボドゥエンの弟子であり, ソシュールのあとをうけたジュネーヴ学派の創始者の一人でもあったセルゲイ・カルツェフスキー (Карцевский, Сергей Осипович 1884-1955) などのロシア人学者は, どちらかといえば構造の面に重点をおいた。プラーク学派の中の「ロシア派」ruské křídlo (the Russian wing) といわれている学者たちである。たとえばトルベツコイの代表的な労作『音韻論原理』*Grundzüge der Phonologie* は音声のどの特徴が意味の弁別に参与するかという, 機能の面を考慮しながらも, これらの諸特徴の論理的な関係, それに基づいた体系のあり方を, 徹底した形で論じた。

これに対してチェコの学者たちは, たとえばいま述べたマテジウスの外, ボフミル・トルンカ (Trnka, Bohumil 1895-1984), 構造主義美学を唱えたことで有名なヤン・ムカジョフスキー (Mukařovský, Jan 1891-1975), ハンガリー語の専門家で類型学の研究者, ヴラヂミル・スカリチカ (Skalička, Vladimír 1909-) などは, 機能の面を重視したと考えられる。これらの人々は, ロシア派に対して「チェコ派」české křídlo (the Czech wing) と呼ばれているのである¹⁵。たとえばマテジウスは, 一貫して言葉のはたらきの面を重視した。たとえば彼は英語とチェコ語の文を比較して, 英語が文の中の既知の情報(テーマといわれる)と文法的な主語とを一致させようとする強い傾向をもっていることを明らかにした¹⁶。これを敷衍すれば, チェコ語ではありえない *He is given a book.* のような受動態が可能となるのは, このような英語の持つ傾向によってであるということになる。

プラーク学派の機能的な観点というのは, さきに述べたように, 表現の欲求と伝達の必要をどのように実現しているか, というところから言語を研究しようというものである¹⁷。この表現の欲求と伝達の必要は, いわば人類に共通なものであると考えることができる。「表現と伝達の一般的な必要は, あらゆる人類に共通なものであって, 言語ごとに異なる表現と伝達の手段をそこに還元することのできる, ただ一つの共通の分母である」¹⁸とマテジウスがいつているのは, このことであろう。このことから, 機能的立場が, 表現の欲求と伝達の必要の, 言語ごとに異なる実現の仕方に興味をもつのは, 当然ということになるであろう。そこでは内容と表現のかかわりが常に問題にされることになるはずである。一方このような表現のあり方は, 同系であるか同系でないかにかかわりなく, 異なった言語を比較することによって, はじめて客観的にはっきりとその特徴をとらえることができるであろう。

マテジウスは「機能的構造言語学は, 音韻論も含めて親近性のない諸言語も比較する。比較に際して重要なのが共通の源を確認するだけでなく, 言語の分析

を深めること、言語の構造をよりよく認識することだからである。この構造は、性格の異なる諸言語の比較によって、はるかに立体的に明らかになるであろう」¹⁹と述べている。このような、同じ内容のものが言語によってどのように実現されているか、という研究をつきつめていけば、その実現の仕方に類型があることがわかってくるはずである。

§ 18 このように考えれば、言語をエルゴン「もの」ではなくエネルゲイア「はたらき」であるとする、フンボルトに代表される立場と機能主義、および機能主義と内容的類型学との間には、深い理論的な関係があるということになってくる。プラーグ学派の、しかもとくに機能主義的な立場を代表するマテジウスが、類型学的な研究の重要性を強調したのは、決して意味のないことではなかったと、考えられるのである。

プラーグ学派が言語の機能と構造とをこのようなものとしてとらえ、表現の欲求と伝達の必要を出発点として言語の研究を行おうとすることから、必然的に結果するのは、この学派の研究が、内容から形式にというアプローチをとることである。「研究は話者の伝達の必要から出発するであろう。このことから必然的に二つの結果が導かれる。直接に与えられたあるものとしての言から、体系として理念的にのみ現実的な言語へ、また機能的な必要から、それを満足させる形式的手段へ進むことである」²⁰とマテジウスはいう。

マテジウスは類型学的な研究を、「言語性格学」linguistická charakteristika と呼んでいる。マテジウスの考えでは、文法が単に言語の構造を記述するにすぎないのに対して、これは言語の最もめだった特徴のあり方を明らかにしようとするものであって、「記述された言語の諸現象を、その重要性に従って階層化する——すなわちヒエラルキーをつくる——試み」²¹であった。彼はこの点について次のようにいっている。

これは、これまでの文法が避けていた言語表現の諸側面も言語学的な考察の対象となるという事実、またとくに個々の言語要素を措定するだけでは不十分で、それらをその重要性に従って評価することが必要であるという事実を認めることである。言語性格学が主張するこの認識は、さらにあらたな結果へ導く。綿密な分析を行えば、対象とする言語の重要な諸特徴が孤立しているのではなくてたがいに関連しており、それがさらに深い原因に基づいていること、またまさにこれらの諸原因こそが、われわれの熱心な注目に値するものであることが、直ちに明らかになるのである²²。

ところで言語を同系であるか異系であるかにかかわらず比較することをその主要な方法とするものには、言語性格学のほかに、いわゆる対照言語学 *contrastive linguistics* がある。クリモフはこの両者について、これらが言語の普遍を含めて同型性と異型性を探究するという点では、(内容的) 類型学と同じであるが、両者とも言語の類型という概念を考慮していないという点でこれとは異なっているという [KP 21-22]。すなわち、

構造的な同型性と異型性の関係が、ある程度対照言語学、言語性格学、およびまた言語的普遍の視野に入っているという点で、言語的な同型性と異型性は、これらが本来の類型学と接しているという、決定的なクリテリアとなりうる。……対照言語学の特徴は、それが類型学にとっては鍵となる、言語類型という概念を必要としない(周知のように、この枠内での比較の基準となるのは、比較される言語の一方である)。性格学のアプローチが本来の類型学的なアプローチと異なるのは、それが、同じく言語類型という概念を考慮せず、一定の方法で決めた言語の範囲内に限って、言語の任意の構造的諸特徴を考察する点にある [KP 21]。

クリモフは、「したがって本来の類型学的研究の過程で措定された類型という概念とは関係なく、閉じられた (*i.e.* 範囲の限定された-I.Y.) 言語グループの特徴的な構造的特徴を措定する、きわめて多数の研究も、性格学のジャンルに属せしめるべきである」[KP 22] としている。しかし少なくともマテジウスの主張するような言語性格学の研究と、クリモフのいう内容的類型学との相違は、質的なものではなく、むしろ言語性格学は内容的類型学と同じ研究の方向と同じ手続きをもっているということができると思われる。確かにマテジウスの言語性格学は、クリモフのこのような類型の概念に到達してはいないけれども、機能、構造という問題意識を同じくしているからである。むしろ両者の異なるところは、言語性格学が、類型の概念に到達していなかったことによって、言語を系統的な同一性にかかわらないだけでなく、類型学的な同一性にもかかわらない比較を行おうとしたところに求められるべきではないかと考えられる。そしてこのことは、言語性格学をして、むしろコミュニケーションの問題、言語文化の問題に自己を展開していかしめた原因でもあると思われる。

§ 19 プラーク学派で類型学といえ、まず挙げられるのはスカリチカである。彼が「類型学」について多くの書物や論文を書いているからである。サビアが立てた言語の類型の枠組みは 1957 年にグリーンバーグによって修正されたが²³、ベルナル・ポティエによれば、スカリチカはこれをさらに 1) 音節と記号素との関

係、2)形態と機能の関係、3) (広い意味での)分類子、4)周縁的文法現象の特色づけなどによって改訂しようとしたといわれる²⁴。ここでポティエが分類子といっているのは、印欧語の性、スワヒリ語の名詞にみられるクラスのようなもの、日本語の数詞につく、「匹、羽、頭、個」のような「助数詞」の類を指しているらしい。いずれにしても、ポティエによるスカリチカの所説の紹介は、彼がどういう分類をしたかに重点があり、いま述べた基準および、このような基準を提唱するに至った理論的な面についての説明を欠いている。したがって少しスカリチカの考え方を、1935年に発表された、彼の「マジャール語文法に寄せて」を中心にしてみておく必要がある。この論文に彼の所説が最も明らかに示されている、と思われるからである²⁵。

彼はサピアについて、次のようにいっている。

類型学をより確実に基礎づける興味ある試みを行ったのは、サピアである。彼は、言語体系はきわめて多様であり、それらの間には段階的な相違があるだけであると、正しく指摘している。しかし彼は自己の理論において、個々の言語の体系の自立性のかわりに、言語間の相違を強調しすぎた²⁶。

このような認識に基づいて彼は次のように主張する。

.....そのことによって、ある人々(たとえばホイジャー(Hoijer, Harry 1904-1976))は、各言語はそれぞれ固有のタイプをもつ、すなわち、言語のタイプの可能性は無限に存在する、と考えた。現代の言語学の観点から、われわれはこの問題を違ったふうに考えたい。これに似たことは、音韻論にみられる。音韻論には、無数の異なった体系がある。おそらくすべての言語は他と異なった体系をもっているであろう。しかし、よく知られているように、そこには一定の限界がある。ある種の体系は可能でないか、もしくは稀れにしかみられない。したがって可能な体系の集合は、巨大ではあるが、決して無限ではなく、一定の構造的 가능성이結びつける結合を、音韻論的類型と呼ぶことができる。この観点から、音韻論的類型学が指定される。おそらくこれに類したことが、文法においても妥当するであろう。ここでも同じく体系と類型は区別されなければならない。すべての言語の文法的体系も、少しずつ異なっている。ここでもまた、可能性を制限する一定の法則が働く。ここにも類型が存在する。もちろんそれは古い学派の類型学が想像していたようには、単純なものではないが²⁷。

ここでスカリチカが述べている、構造の可能性には一定の限界があるという考えは、さきに述べた「言語的普遍」language universals という考えの根底にあるものであり、さらに遡ればヴィルヘルム・フォン・フンボルトの「一つの言語」eine Sprache という考えに行き着くことに、留意する必要がある。

§ 20 スカリチカはさらに、「より小さい形態論的単位に分割できない形態論的単位」²⁸という、ボドゥエン・デ・クルテネの形態素の定義について、これは音韻論の立場から定義されたものであって、まさに音韻論においてきわめて有用なものであるが、「文法においては形態素は分割できない単位ではない」²⁹と述べている。ここから彼はセーマ *sema* という概念を導入する。たとえば英語の *hand* と *hands* をとってみれば、*hand-s* は *hand* 「手」という形態素と「複数」を表す *-s* という形態素からなる。ここから *hand* も *hand* と「単数」を表す形態素 *-φ* からなるということが出来る。しかし他方、*foot* 「足・単数」と *feet* 「足・複数」、あるいは *tooth* 「歯・単数」と *teeth* 「歯・複数」のばあいには一つの形態素が「足」あるいは「歯」のような具体的な意義と、「単数」、「複数」のような数の概念とを表している。したがって文法のレベルにおいては、形態素は機能的に単一のものではない、ということができる。最小の単位とはいえないのである。このように文法のレベルにおいてもはや分けることのできない最小の機能的単位を、スカリチカはセーマと名づけた³⁰。別の論文において彼がこのセーマについて、「音韻論的要素と音素との関係はセーマと形態素との関係に等しい」³¹と述べていることからすれば、スカリチカはセーマという語によって、弁別的な意義素性を指していたと考えられる。断っておかなければならないのは、彼がここで文法といているのは記号の体系としての言語のことであると思われる。したがって文法というとき、それは「意味するもの」と「意味されるもの」との、統一体として観念されているのである。すなわち、

個々の記号においては、言語全体におけると同じように、二つの側面が認められる。意味されるものと意味するものである。……意味されるものは意味するものをもつことによって自己の存在をもつ。逆に意味するものは、何かを意味することによってのみ、存在する。もちろんそのことによってはまだ言語における形式と機能の関係は解決されない。しかしそれらのいま述べた特性は文法的な術語のより正確な定義について、我々の助けになる³²。

この機能と形式の関係を明確にすることによって、彼は言語の類型を決定する、客観的なクリテリアを提示しようとしたのである。そのようなクリテリアがなければ、類型の決定は、主観的にならざるをえない。「この文法的諸事実の研究なしには、また構造的な諸法則なしには、言語の「形態的分類」は主観的であり、時期早尚である。「言語類型」の数と性格についての類型学者の間のまったく不毛な論争も、このことを示している」³³、と彼はいつている。

§ 21 スカリチカがサピアの学説を前に推し進めたのは、このような客観的分類の為のクリテリアを示そうとしたところにあったと、考えられる。

彼はこの枠組みを使って言語を 1) 多統合型の言語, 2) 膠着型の言語, 3) 孤立型の言語, 4) 屈折型の言語に分け, 屈折型の言語をさらに外的屈折型の言語と, 内的屈折型の言語に分類した³⁴。

多少手荒く説明を加えるとすれば, セーマが語と一対一の対応を示す場合には孤立語の類型を与えることになるであろう。

スカリチカの例によれば, たとえばフランス語の場合, *Mon père m'a dit*. 「私の父は私に言った」, *C'est mon père*. 「これは私の父だ」, *Je vois mon père*. 「私は父を見る」, *Je l'ai donné à mon père*. 「私はそれを父にやった」, ...avec mon père 「私の父と一緒に」のように, 名詞は接頭辞, 接尾辞, あるいは語尾をもたない。格は *de* 「属格」, *à* 「与格」のように前置詞によって表されるか, 対格と主格のように, 語順によって示される。フランス語の場合には性は二つあるが, 英語にはほとんど存在しないといってもよい。逆に数は英語では存在するが, フランス語では語尾の *-s* は発音しない場合もある, というように, 性, 数の区別が弱い。動詞においても, 回説的表現が多く, セーマと語との一対一の対応への顕著な傾向がみえる。

もしセーマと形態素とが一対一の対応を示し, 複数個の形態素が語をつくる場合, これは膠着語の類型を与えることになる。たとえばトルコ語では *ev* 「家」は次のような形をもつという³⁵。

	単 数	複 数	
主 格	<i>ev</i>	<i>ev-ler</i>	「家/家々が」
属 格	<i>ev-in</i>	<i>ev-ler-in</i>	「家/家々の」
与 格	<i>ev-e</i>	<i>ev-ler-e</i>	「家/家々に」
対 格	<i>ev-i</i>	<i>ev-ler-i</i>	「家/家々を」
所 格	<i>ev-de</i>	<i>ev-ler-de</i>	「家/家々で」
奪 格	<i>ev-den</i>	<i>ev-ler-den</i>	「家/家々から」

これに対して, 多くのセーマが一つの形態素に対応し, この形態素が, セーマと一対一の対応をしている具体的意味を表す形態素と結合して, 語をつくっている場合には, 屈折語の類型を与える。たとえばラテン語の *femin-a* において, 形態素 *-a* は単数, 主格, 女性といった三つのセーマに対応している³⁶。

多くのセーマが一つの, 具体的意味を担う形態素に対応しているのは, 内的屈折 *introflexive* の類型である。これは多くのセーマが一つの形態素に対応している

という点で、屈折の特別な場合であるといえる。たとえばアラビア語では³⁷,

単 数	複 数	
farasun	afrasun	「馬」
waladun	auladun	「少年」
kalbun	kilabun	「犬」

スカリチカは「多統合型類型」polysynthetický typ という名によって、サビアとは異なったものを指している。すなわち、セーマと一対一の対応を行う、具体的な意味をもつ形態素が、複数個集まって語をつくるものを意味しているのである。これははたがってさらに進んだ段階にあるものという印象を受ける。

これによればたとえば中国語は 1) 複合語が多く使われること、2) たとえば主語が述語の前にくること、修飾語が被修飾語の前にくることのように、文の成分が語順によって定まっていること、3) 「與」(「と」、本来は「与える」の意味)、「從」(「より」、本来は「從う」の意味)のように、本来は独立した意味をもつ語が抽象的な意味を持つ文法要素として用いられること、4) 形態素がしばしば単音節であることなどの特徴をもっていることから、それを多統合型の言語であるとしている。彼によればこれらの特徴によって、中国語はシャム語、ビルマ語、ベトナム語に近い類型をもち、かなりの程度にアウストロ・アジア諸語、アウストロネシア諸語のほか、スーダン諸語、いくつかの北米インディアン言語とも近い類型に属するという³⁸。

§ 22 スカリチカはこのようにして孤立型の言語にはフランス語、英語、ドイツ語などが属し、屈折型の言語にはラテン語、イタリア語、スペイン語などが、また膠着型の言語にはアルメニア語、グルジア語、トルコ語などがそれぞれ属しているという³⁹。外的屈折型の言語というのは、たとえばバントゥー諸語のように、「文法的な語形変容が非常に発達しており、形態の合融性(一つの形態素が他の形態素と一塊をなす)と共に、多くの分類子を備える型である」⁴⁰という。もちろんスカリチカも、このような言語の分類が、純粋な形で行われるわけではないことを知っていた。たとえば屈折型の言語の中にも、膠着型の要素や、孤立型の要素がみられるのであって、ある言語が屈折型に属するというのは、ただこの言語の主な特徴が、屈折型であるというにすぎないのである。

このようにしてみれば、スカリチカの類型学は、サビアにみられる類型学の枠組みをより厳密にしたというだけで、多統合型の定義が異なるなどの相違はいくつかみられるものの、結果としてみれば、サビアとさほど違っていないように

みえる。しかしスカリチカは、さきにも述べたように、言語の種類の分類のクリテリアを明確にし、さらにこのセーマと形態素、あるいは語との関係を軸にして、個々の類型のもつ、音韻、語構成、形態論、統語論などの各レベルの現象を、この関係を頂点にする階層構造をもつものとしてとらえようとした。この試みは彼の諸論文の随所に認められるが、これを理論化したものに、論文「類型学的構造体」Ein "Typologisches Konstrukt"⁴¹があった。ここでいう「構造体」とは、類型学的に意味をもつ諸特徴と、それが作る構造の全体を指す、理念的なものであって、クリモフのいう、活格言語類型、能格言語類型のような個々の言語類型に当たる。クリモフは、このような理念的な言語類型と、これに属するところの現実存在する言語のグループとを区別する必要を論じながら、メシチャニーノフ(Мещанинов, Иван Иванович 1883-1967)は暗示的にこれを区別していたが、明示的に区別したのはスカリチカだけであると述べている[КР 24]。

たとえばスカリチカは、中国語などが属する多統合型の言語類型には、独立した意義をもつ語があるばあいには本来の意味で、またあるばあいには抽象的な文法的な意義をもって使われるために、あまり努力をしないで発音できる短い語形を必要とし、そのために母音を多く用いる傾向があると述べている。またアラビア語などのセム語族の言語が典型的なものとしてされている、内的屈折のタイプでは、子音が語の意義を支え、母音は文法的な役割を果たすから、子音が多く用いられるという。膠着型の言語においては、接頭辞や接尾辞の独立性が高いから、音節の独立性が高くなり、子音が多く用いられるようになる。さらに孤立型の言語では、単音節の語が多くなるために、母音によって語を他の語と区別する場合が多くなるという⁴²。

しかしさきに述べたように、同じ印欧語族に属するラテン語が屈折型言語であるのに、フランス語は孤立型言語であるとすれば、言語の類型は、歴史的に変化するものであると考えなければならないであろう。スカリチカはこのような類型の歴史的な変化を、スラヴ諸語について詳しく観察している⁴³。このように言語の類型が歴史的に変わるものであるということをはっきりさせたことも、スカリチカの功績であると考えられる。

§ 23 プラーク学派は、1929年にプラハにおいて開催される、第一回国際スラヴ学会に向けて「テーゼ」を発表した。これはプラーク学派の綱領ともいえるべきもので、外国向けの機関誌『プラーク言語学サークル論集』の第一巻の巻頭に載せられた⁴⁴。

このテーゼのなかの「比較方法の使用の新しい可能性」と題された項目には、次のように述べられている。

従来スラヴ諸語の比較研究は、起源的諸問題、とくに共通の相統財の探究にのみ、限られていた。いまや比較方法は、より広く用いられなければならない。これが、言語体系の構造およびその発達の法則を発見することを可能にする、適当な方法だからである。このタイプの比較を行うための貴重な資料は、親近性がないか、あるいはきわめて遠い親近性しかなくて、たがいに構造がきわめて異なった諸言語だけでなく、たとえばスラヴ諸語のように、同一語族の言語のばあいにも見出される。これらは、その発展の過程において本質的で数多くの相似点がありながらも、鋭い相違を示しているのである⁴⁵。

このような拡張された比較方法に基づいてスラヴ語を研究すれば、スラヴ語の類型が得られるはずだというのが、テーゼの次の主張である。

スラヴ諸語の発展の比較研究は、次第に、これらの言語の歴史に現れる集約的發展 *l'évolution convergente* と拡散的発展 *l'évolution divergente* が、偶然的一時的な性格をもつという考えを、否定しつつある。この研究は異なった集約的諸事実と拡散的諸事実(事実の束)の間にある、密接な法則性を明らかにする。スラヴ諸語の発展は、このようにしてその類型を与えるのが認められよう。すなわちたがいに密接に関連する一連の諸事実をあつめて、一つの全体とするのである⁴⁶。

すなわち、類型学的な研究とは、系統的に親近であるかどうかにかかわらず、言語の構造そのものを比較して得られたいろいろな事実の関連性を考察して、これらを一つの階層的な構造、いわゆるヒエラルキーの全体の中に位置づけることを意味している、というのである。このような考えがマテジウスの見解の発展であることは、明らかである。このような見解が重要なのは、それまでの類型学的な研究が、主に語の形を中心に行われていたのに対して、これによれば言語のすべてのレヴェルの現象がその対象になる、ということ、およびそれらの現象間の関係、言い換えればそれぞれの現象の意味づけが考察の中心になる、ということにある。とくにこの第二の点は、それまでの類型学的な研究に対して、まったく新しい地平を切り拓くものであった。

類型学的な研究がこのようなものであるということになれば、まず問題になるのは、類型の中心になるもの、すなわちヒエラルキーの頂点に位置し、その他の諸現象の存在が、論理的にそこから説明できるような概念はなにか、という問題であろう。あとでみるように、内容的類型学は、「主語・述語・目的語」の関係をそのようなものと考えているが、類型学の発展を跡づけてみれば、実はその発展

の歴史そのものが、この問題の探究の歴史であったといってもよい、と思われる。

かつてのプラーク学派の機関誌であった *Travaux du Cercle Linguistique de Prague* に代わって戦後出版された *Travaux Linguistiques de Prague* の第4巻は「音韻論，類型学および一般言語学研究」という特集であった。ここに発表されている論文のうち，類型学に関係するものとしてはズガル (Sgall, Petr 1926-) の「言語のタイプという概念について」，ルージチカ (Růžicka, Rudolf 1920-) の「言語類型学についての若干の覚え書き」，パレク (Palek Bohumil) の「潜在的類型学のパラメーターとしての超文論」，トポロフ (Топоров, Владимир Николаевич 1928-) の「ブルシャスキとエニセイ諸語，若干の平行現象」，ウーレンベック (Uhlenbeck, E.A.) のジャワ語の動詞に関するもの，などがあるが，これからうかがい知るかぎりでは，遺憾ながらこの特集の趣旨は，上述の方向に沿ったものではないと思われる⁴⁷。

4

ロシアにおける類型学的研究 — その初期

§ 24 ロシアでも，初期においては，西ヨーロッパの場合と同じ問題が，類型学の研究において認められた。すなわち，類型学が単なる好事家の興味の対象としてではなく，言語学の中の一つの独立した分科として立つためには，少なくとも二つの前提が必要であった。19世紀にみられた，言語の歴史的研究のみが真に言語の学の名に値する，という考えの克服，および比較言語学が主として対象としていた印欧語族以外の，非印欧諸語の知識の拡大がこれである。第一の点に関しては，ロシアあるいは旧ソヴェトにおいても，西ヨーロッパにおいて行われていたのと同様に，起源の同じ親近諸言語の比較言語学的な研究，とくにドイツを中心に行っていた青年文法学派にみられるような研究が盛んであった。これからの脱却は，ソシュール，メイエ (Meillet, Antoine 1866-1936)，ヴァンドリエス (Vendryès, Joseph 1875-1960)，あるいはボンファンテ (Bonfante, Giuliano Ugo 1904-)，バルトリ (Bartoli, Matteo Giulio 1873-1946) などの，言語の社会的な研究方法の発展にともなって起こった，言語のメカニズムのすべての側面に対する興味によって，支えられた。とくにハリコフ大学にあってフンボルトおよびシュタインタール (Steinthal, Heymann 1823-1899) の強い影響下にその学説を発展させたポテブニャ (Потебня, Александр Афанасьевич 1835-1891) や，プラーク学派の学説によって継承されることになる機能的言語学の先駆をなす，ポドゥエン・デ・クルテネ (Baudouin de Courtenay, Jan 1845-1929) を中心

とする、いわゆるカザン学派等の研究は⁴⁸、その著しいものであった。

その際、ロシアにおける一つの特徴として、言語における意味の問題、言語と思惟の関連などに重点がおかれる傾向があったということが、できるように思われる。このような傾向は、一つの必然として、文を中心として言語の現象を考える態度をもたらしたと、みられる。たとえばポテブニャは、「言語を活動 (*i.e.* エネルギア) として理解すれば、動詞、名詞、形容詞、副詞のような文法範疇を、なにか不変の、人間の思惟の日常的な諸特徴から完全に切り放されたものであると、考えることはできない。……一般的にいったただ一つの不変な文法範疇も、(「万物は流転す」というように) ア・プリオリにいて存在しえないだけでなく、ア・ポストリオーリにも存在していないのである。そうではなくて文法諸範疇が変化すれば、必然的にその中でこれらが生じ、変化するところの全体、すなわち文も変化する……言語を思惟の変化しやすい器官であるとする基本的な観方から帰結されるのは、言語の歴史は、かなりの時間的な長さでとれば、一連の文の規定を与えるに違いない、ということである」と述べている [KTI 12-13]⁴⁹。

この引用の箇所から、ポテブニャの学説にはフンボルトの思想が深く影を落としていることは容易に見て取れようが、言語の発展と思惟の発展との関係についても、ポテブニャは、言語の統語構造の「段階的な」発展は思惟そのものの発展の一定の時期を反映していると述べているといわれる [KTI 14]⁵⁰。

クリモフは、ソヴェトの類型学に及ぼしたポテブニャの影響について、次のように総括している。

……初期のソヴェトの類型学者たちの、一方ではポテブニャの言語学的な遺産との、また他方ではその他の彼らの先達たちの遺産との、思想的接触の性格が本質的に異なることを、強調しておかなくてはならない。後者の場合、このような関係が、言語に対する構造的・類型学的アプローチによる、同一の諸問題を取り扱う際の、興味深い平行性を反映しているとすれば、前者の場合にはこの卓越した言語学者の、40年代のわが国の類型学者たちに与えた、直接で、きわめて深い影響はきわめて顕著であった。……あらゆる点からみて、当時のわが国の研究のいくつかの問題提起の方向は、かつてポテブニャによって始められた考察を直接引き継ぐものとさえ、考えられていた [KTI 19]。

そしてこの類型学的方向というものは、明らかなように、「思想の言語による表現の技術的側面」に基づく分類、すなわちわれわれの用語によれば、形式的類型学による分類ではなく、思惟と言語の構造の関係に向けられていたといえる。クリモフによれば、ポテブニャの統語論の理論によって、文の形式的・論理的理論

は、文の構造の歴史的・発生的考察へと決定的に転換した、とヴィノグラードフ(Виноградов, Виктор Владимирович 1894/95-1969)が評価しているという[КТИ 12]。

これと関連して、ポテブニャが、『ロシア文法覚書』の第3巻第5章「名詞の種類の起源」に対する補遺の中で、次のように述べていることは、のちにみる内容的類型学の学説と関連して興味深い。

形式の現在の区別から推測されるその欠如に至る道筋の研究のプロセス、およびそれと同時にこの推測の蓋然性を証明するプロセスは、……次のような諸問題の解決に分かたれる。それは観察できる言語において過去に向かって増加することを示している、a) 主体と属性、b) 主体と述語、c) 主体と客体の区別の欠如、である⁵¹。

蛇足ながら、1984年に出版された、卓越した印欧比較言語学者のデスニツカヤ(Десницкая, Агния Васильевна 1912-1992)の論集に、彼女が当時を回顧して述べている項を、少し長くなるが引用しておきたい。ポテブニャの学的位置をよく示していると思われるからである。

……過去の卓越したロシアの言語学者ポテブニャは「予言者」であり、彼の著作『ロシア文法覚書』は「天啓」の書であって、そこから歴史的・類型学的な立論において一定程度に依拠することのできる、多くの深い思想と、繊細な統語的な考察を引き出すことができた。ポテブニャの言語学的な諸見解の解釈は、30年代末には能格性の問題と並んで、ネヴァ河畔の花崗岩の通りを散策しながら、類型学を志す若い言語学者のあいだに交わされた、際限のない会話と論争において最も好まれたテーマの一つであった。もちろんすべてのものが同じようにこの気晴らしにとりつかれていたわけではなかった(言語思想研究所の主だった「ポテブニャ派」はカツネリソン(Кацнельсон, Соломон Давидович 1907-1985)とボカーレフ(Бокарев, Анатолий Ал. 1910-1941)であった)が、ポテブニャの文法研究を創造的に研究することは、影響を及ぼしたというだけでなく、30-40年代のソヴェト言語学の歴史的・類型学的な学説を作り上げるうえで一時期を画したといっても、間違いではないであろう。このため、1947年、文法的発展の諸問題に対するポテブニャの見解をめぐって、ヴィノグラードフとカツネリソンの間に展開された激しい論争が、どのような事件として受けとられたか、明らかであろう。ヴィノグラードフはポテブニャの統語論の学説の批判的分析を通じて、当時いわゆる「新言語理論」の主要な命題の一つと考えられていた、段階理論に対してその矛先を向けた。カツネリソンはポテブニャの理論の強い点と弱点の、全面的な批判的分析によってこれに答え、諸言語の文法的構造の一般的、法則的な発展の研究の必要を主張した[DS 39]。

§ 25 すでにプラーグ学派のところで述べたように、プラーグ学派の標榜する機能的構造言語学というのは、構造という考えをド・ソシュールから、また機能

という考えをボドゥエン・デ・クルテネから受け継いだものであった。そしてこのクルテネの考えも、すでに述べたように、フンボルトの学説に大きく影響されたものであった。彼は言語の学における比較方法について、次のようにいっている。

歴史的に関係があつて、系統的に親近な諸言語の比較文法と並んで、親近性や歴史的な性質とは無関係に、さまざまな言語の生における、類似点と相違点の比較、同種と異種の現象、流れ、変化の比較が存在する。人間の思惟を比接したり一般化したりするこの種の作業は、通常の意味での比較文法に属させることはできない。それは一般、あるいは哲学的文法に属する⁵²。

.....われわれは諸言語を「比較」し、それらを「相互関係において」考察することができよう。しかし「比較」および言語の「相互関係における」考察には二種類がある。第一にわれわれは言語をそれらの親近性、それら相互のあらゆる歴史的関係とは無関係に比較することができる。われわれは歴史的にも地理的にもたがいに無縁な諸言語の中に、同じような性質、同じような変化、同じような歴史的過程と変成を絶えず認めることができる。.....諸言語の別の種類の比較は歴史的親近性と地理的、社会的、および文学的な隣接性による比較である。歴史的親近性による諸言語の比較は、通常の意味でのいわゆる「比較言語学」を生み出した。.....あまり普通でないのは地理的、社会的、および文学的な隣接性による言語の比較、すなわち最も広い意味での相互影響に基づく諸言語の比較である.....⁵³

これがプラーグ学派の、異系言語の比較の考え方の源流をなすものであることは、明らかである。クリモフによれば、クルテネは「言語の起源的な観点および地域的観点、さらに構造的・類型学的観点からの比較研究の正しさを明確に認めた最初の言語学者の一人であり、彼の意見によれば、構造的・類型学的観点に対応するのは、言語の形態的、構造的分類」であつて、「起源的言語学が歴史的基層を、地域的観点が地理的基層を扱うとすれば、類型学的観点は生理的・心理的基層を扱うと、彼は考えていた。これはソヴエトの言語学者の最近の論文にみられる、言語と思惟との緊密な結合という観点から、興味深い」と述べている〔KTI 15-16〕。

このような「類型学」に対して、いわゆる形式的な類型学については、ボドゥエンは非常に懐疑的であつた。1889年に書かれた「言語学の諸課題について」という論文において、彼は次のように書いている。

きわめてよく知られているが、非常に成功しているとはいえない分類の一つに、すべての言語世界を三つのグループ、あるいはクラスに分ける分類がある。1) 遊離し孤立する単音節の言語。その主な代表は中国語である。2) 貼り合わされる、膠着的で接辞的な言語。比較的正確に研究されているグループの中ではアルタイ・チュ

ルク諸語、ハンガリー語等が、これに属する。3)最後に屈折語である。これに属するのはセム諸語と……アーリア・ヨーロッパ諸語である。時間がないのでこの分類の基礎について説明することができないが、その正確さはきわめて疑わしいことだけは、指摘しておこう⁵⁴。

§ 26 またこれは第二の点と関連するが、比較言語学が主に印欧語族を対象にしていたところから、比較言語学からの脱却は、印欧語族中心主義からの脱却をも意味していた。序に言えば、あとで述べるエヌ・ヤ・マール(Марр, Николай Яковлевич 1864/65-1934)の、マルクス主義的な装いをこらした、いわゆる「段階理論」⁵⁵が、1950年にスターリンによって批判された後、私見にすぎないが、二つの潮流が生じたと思われる。

一つは外国の「ブルジョア的」な構造主義的な言語学に対して、本質的に歴史的な学説である比較文法が、再び力をもつようになったことである。

たとえば5年後の1955年に発表されたデスニツカヤの「印欧諸語の親近性の研究の諸問題」の序文において、著者は「マルクス主義的な言語学は、この問題の真に科学的で歴史的な取り扱いと、外国の構造主義者、新言語学者などの諸理論に対置せねばならない。これらは古典的な比較言語学の伝統の否定、歴史主義の否定を唱えているのである」と述べている⁵⁶。

このような見解は、スターリンによるマール批判の直接の結果であると思われるが、あとでみるように、比較言語学の独占的な優越は、さほど長く続かなかったと思われる。

もう一つはこれを契機に構造主義的な言語学を導入する試みが、いわば公然化したことである。とくに1960年代の初めから構造主義的な方法を用いた論文が多く発表されるようになった。その中で最も著名なものは、1966年に刊行された、アプレシヤン(Апресян, Юрий Дереникович 1930-)の『現代構造主義言語学の理念と方法』である⁵⁷。

このような潮流に対して、あまり成功したようには思えないが、構造言語学を何とかマルクシズムの枠内に取り入れようとする努力も同時に試みられた。たとえば1970年に出版された論集『レーニン主義と言語学の理論的諸問題』などは、このような試みの結果であると思われる。たとえばメリニチュク(Мельничук, Александр Саввич 1921-)はこの論集に発表した論文において、「言語が現実にもっている諸特徴が尽くしえないということは、将来、構造主義的方法の発展とその効率性の向上がいくら起こったとしても、言語のすべての客観的性質を完全に反映するよう

な、抽象的で、数理的に均整のとれた言語構造を組み立てることは、決してできないということである。したがってさまざまな、具体的な（厳密に構造主義的でない）研究方法の更なる適用と完成は、構造主義的分析という方法の拡大と深化と相俟って、科学一般、および特に言語学の発展の客観的法則の一つとなるであろう」と述べている⁵⁸。

スターリンは1953年に死んだが、1964年にはデクテレヴァ（Дегтерева, Т.А.）がスターリンの論文について、次のように批判している。

マルとその追随者たちが、彼ら以外の所に存在していたすべての言語分析の方法を、ブルジョア的であるとして排斥したとすれば、スターリンは別の極端に陥った。彼は伝統的な比較・歴史的言語学の技術的な方法の全体を、唯物弁証法の歴史主義的原理と同一視した。……この労作においてスターリンは、マルクス主義者の哲学者として言語研究の科学的アプローチの、真に唯物弁証法的な諸原理を示す代わりに、言語学者に多少とも原理的な言語の問題についての、一連のできあいの解決法を提案した。この際強調しておかなければならないのは、スターリンが言語学の諸問題の解決のための間違いのないドグマと考えたものが、言語の発展のプロセスの観察に基づいたものではなかったという事情が、言語の学に大きな損失をもたらしたことである。このような研究に対してスターリンには時間もなく、特別な言語学的教養もなかったからである⁵⁹。

このような傾向をみれば、1950年という年、およびスターリンの死んだ1953年という年は、少なくとも言語学にとって、一つの重要な転換点をなす年であったと、いうことができよう。

第二の点に関しては、ソヴェト革命による多民族国家の成立と、民族問題に対するマルクス主義的な問題意識から、ソヴェトを構成する「遅れた」民族に対して、民族の形成の基本的な条件である言語に関する政策を確立することが、必要であると考えられるようになったことが挙げられる。また他方ではマルクスズムの中に、民族文化の発展のために、言語の発展の法則を研究することが必要である、という認識が存在していたことも、指摘の要があろう。これについてクリモフは次のように書いている。

たとえば以前には遅れていたロシアの諸民族の言語建設という、もはや引き延ばすことのできない課題が、それぞれの言語の記述的分析のための、適当な諸原理を作り出すことを必要としていたが、これは類型学的な性格の、一定の基礎に基づくことなしには不可能であった。それだけでなく、ポリヴァーノフ（Поливанов, Евгений Дмитриевич 1891-1938）が正しく指摘していたように、「言語文化」の建設のために、わが国の科学は言語の発達に関する一般理論を必要としていた〔КТИ 8〕。

この通時論的な研究と関連して、かつての印欧語比較文法が作り上げた歴史的な研究方法の再評価が行われ、これを再び導入する可能性が論じられるようになった。

§ 27 さて、ここで問題を類型学に絞れば、ソヴェトで類型学の先駆者と考えられる人の一人に、まだロシア帝制期の 19 世紀の後半に活動したウスラル (Услар, Петр Карлович 1816-1875) がいた。彼はコーカサスのナフ・ダゲスタン諸語の文法的記述を行ったが、これらの言語はのちに能格言語といわれる、インド・ヨーロッパの言語とは非常に違う構造をもっていた。彼はこれらの言語の動詞が能動形をもっておらず、中動と受動の形しかないこと、主語が具格の機能も持っていること、動詞が主語とではなく、目的語と文法的に一致する、いわゆる対象活用を事実上もっていることなど、能格言語の特徴にすでに気がついていていたといわれる [KTI 9-11]⁶⁰。

たとえば彼はラク語についての著作において、次のように述べているといわれる。

あらゆる能動の動詞は行為する対象と、行為が向けられる対象とを、前提している。それらの関係的役割の相違は、それがとる格の相違によって表現される。したがって大部分のヨーロッパの言語では、行為する対象は主格におかれ、行為が向けられる対象は対格におかれる。アヴァール語およびチェチェン語においては能動の動詞はなく、受動の動詞しかない。行為する対象は具格 (instructiv, activ) におかれ、行為が向けられる対象は主格におかれる [KTI 10-11]⁶¹。

これがあとに述べる能格受動説である。彼はここから出発して、これらの言語に対格の存在しないことを説明しようとした。たとえば、

チェチェン語には能動の動詞、他動詞がまったく存在せず、中動および受動の動詞のみが存在する。たとえば(ロシア語では) я люблю брата 「私は・愛する・弟を」というが、……別の言い方を選んで брат любим мною 「弟は・愛される・私によって」ということもできる……このあとの表現がチェチェン語において唯一可能なものである。もしチェチェン語の文を мне любится брат 「私には・好まれる・弟が」と翻訳すれば、さらに深くチェチェン語の文の構造を観察することになるだろう。……これらすべてのことから、なぜチェチェン語には多くの格があるにもかかわらず、対格が存在しないのかが理解できるようになる。ここでは対格が常に主格と同じだとはいえない。対格はチェチェン語の動詞の性質そのものによって存在できないのである [KTI 11]⁶²。

彼はまた、アヴァール語についても、同様の現象を観察しているという [KTI 11]⁶³。

さらにまた彼はラク語について、ここには「受動ないしは中動の動詞と能動の動詞との間に、かなり漠然とはしているが、ある種の相違がある。能動の動詞は発展の途上にあり、あたかも途中で止まったかのようなのである」[KTI 11]⁶⁴と述べ、類型に歴史的変化のあることを認めているという。

当然のことではあるが、彼がはっきりとした類型の概念に到達することができなかったことが、彼の先駆者としての功績を、低くするものではない、と思われる。

5

旧ソヴェトにおける類型学的研究 — 20-40年代

§ 28 1920年代になると、さきに述べたように、後にスターリンの批判を受けて失脚したが⁶⁵、コーカサスの言語の研究で有名であったマールが、類型学、類型学的な親近性などの用語をしばしば使うようになった [KTI 21]⁶⁶。彼は類型学的な親近性による言語の分類が、それまでの比較言語学にみられる言語の系統による親近性の分類を置き換えることができると、考えるようになった。たとえば彼は次のようにいっている。

印欧語族は、類型学的にはあたらしい経済的社会的な諸条件の産物であるが、素材および多くの構成部分の残存物に関して、一定の発展段階にある、地中海の……ヤペテ諸語の将来の状態であり、一般的にいて構造的にあたらしい形成物である。たとえばアルメニアの諸言語、部分的にはアルバニア語のようなかなりはっきりした雑種は、印欧諸語が後にヤペテ諸言語と交配してできたものではなく、純粋なヤペテ諸語と完全な印欧諸語の間の中間的な段階にある、過渡的な状態である [KTI 22]⁶⁷。

ここにみられるように、マールは言語の発展を経済的、社会的な条件と直結しようとしており、また言語の類型的発展に段階性を認めようとした。いわゆる「段階理論」である。これは言語を社会機構などと同じように、経済的な「土台」ないし「下部構造」によって規定される、いわゆる「上部構造」と考えたことによる。たとえば彼は論文「ヤペテ理論」の中で、次のようにいっているという。

……コトバの発展における創造的過程の内的諸原因にすべての注意を払ってみても、この過程を言語そのものの中に認めることはできない。言語は造形芸術や芸術

一般とおなじように、上部構造に属する、社会的な有価物である。われわれは事実によって、言語諸事実の証するところに従って、コトバの創造的過程、創造の諸要因を物質文明の歴史と、その上に構築される社会、およびそれに基づいて形成される世界観の中に跡づけざるをえない⁶⁸。

周知のように、いわゆる唯物弁証法の教えるところによれば、歴史的な発展は、内容と形式の矛盾と相克の結果、この矛盾が一定の「臨界点」に達すると、いわゆる「量より質への転換」が生じて、新たな形式に到達し、そのことによって矛盾が止揚される、ということになる。前提は別にして、少なくともこれは形式においてはヘーゲルの *an sich* から *für sich* を経て *an und für sich* に至る図式と同じである。マルクス主義のいう「下部構造」のばあいには、内容と形式は、生産力と生産諸関係であると理解されていたと思われるが、これらの要素の相克と「闘争」によって、形式が新たな質を獲得した暁には、これに規定される社会構造も変更されなければならないことになる。発展の中に一種の不連続性の存在が前提されるのである。マールの「段階理論」にも、言語の発展の中に不連続なものが存在するという前提が潜んでいたと思われる。このような考えは明らかに間違っているといわざるをえず、これがスターリンによって批判された主な点でもあったが⁶⁹、それを別にしても、系統を無視した言語発展の図式は正しいものとはいえない。

このように、言語の発展を社会の発展と直結しようとしたこと、並びにそれに起因する段階理論とならんで、マールの上述の引用には、もう一つ特徴的なものがある。「雑種」あるいは「交配」という概念である。マールは1928年スフミのアブハジア文学語学アカデミーにおける講演で、「……欲すると欲せざるとにかかわらず、その構成において社会的な現象として言語にアプローチする必要……ここでは言葉の構成のイデオロギーが、人間の集団の血縁や生理的性質ではなく、経済および技術、およびそれらから生育し、それらとともにあるところの世界観と、有機的に関連していることが判明した。人間存在の集団そのもの、音声言語の集団的創造者たちは、その萌芽的形態において、血縁や生理的所与によってではなく、皮膚の色や頭骨その他の人類学的特徴による親近性とは無関係に、経済的な利害や必要の共通性による、家政上の防御と闘争の(ための)団結であったことが判明した」と述べている⁷⁰。

この言説からすれば、マールの上述の概念の形成は、さきに挙げたような、言語を「上部構造」とすることからの、論理的帰結であるかのようにも思われる。しかし上にみたように、マールが「雑種」として挙げた例の中に、アルメニア語、アルバニア語などがみられることから、これは実はクルテネの強い影響下にある

と考えないわけにはいかない。クルテネは、印欧比較文法は「諸言語の生が同一の初原的な構造と組成をもったものが、外部からの干渉なしに、連綿として静かに異なった方向に発展したという仮定、諸言語の純粋性という仮定に基づいている」⁷¹が、実際はさまざまな言語間の影響によって混合的性格をもつことを述べ、アルメニア語を例にしているからである。クルテネの異系言語の比較という考えも、ここから生じるわけであるが、これが言語の「集約の相」についての、最初の理論的な問題提起であったと思われる。問題はむしろ、マールがこの基本的には正しい考えを、「マルクス主義」的な理論の枠の中に、強引に押し込もうとしたところにあったと思われる。

§ 29 それにもかかわらず、コーカサスの諸言語の研究に大きな足跡を残し、また言語の類型という考えを押しだしたマールの功績は、認めなければならないであろう。マールの弟子であったメシチャニーノフは、すでに 30 年代に、まだ十分には明確ではなかったにせよ、類型学的な分類と系統的な分類とは、異なった性格のものであると考えるようになったという [KTI 22-23]⁷²。

マールはサンクト・ペテルブルグ大学を卒業し、レニングラード大学の教授の職にあった。メシチャニーノフは、最初マールとともに活動し、「新言語学」の研究にも参加したが、すでに 30 年代から独自の道を歩みだしたといわれる⁷³。

メシチャニーノフの研究は、主として言語の類型全体を構造化する、相互に規定し合う特徴を、一つの総体として考察しようとするものであり、この意味でとくに文のレベルが重視された。まさにこの意味で、同じくレニングラードを活動の舞台としていたクリモフの内容類型学に強い影響を与えることになった [GI 153]。

しかし内容類型学の成立には、さきに引用したデスニツカヤの回想にみられるように、主として 30 年代から 40 年代の間にマールやメシチャニーノフの周辺に集まり、レニングラードの「エヌ・ヤ・マール名称言語と思想研究所」を舞台にした、多くの若い研究者を中心とした集団の活動があったことが、比較的最近になってしばしば目に触れるようになってきた。

デスニツカヤによれば、30 年代の研究の中で、とくに注目すべきものとして、ボカーレフ、カツネリソン、メシチャニーノフのいくつかの研究があるという。このうちボカーレフは、1934 年の論文「アヴァール語の他動詞の「受動的」性格について」[DS 9]⁷⁴および 1941 年の初め頃に完成し、1949 年に至って遺作として発表された『アヴァール語統語論』[DS 9]⁷⁵の中で、動詞の種類によって構文の種類が

異なることを明らかにしたという。ここでは「……主語・述語関係および主語・目的語関係の伝達の、異なる方法が表現されている次のような種類の述語構文が区別された。1) 自動詞の述語をもつ文、2) 他動詞の述語をもつ文、3) 感覚動詞による述語をもつ文、4) 認知動詞による述語をもつ文、5) 自動詞の他動詞としての使用および他動詞の自動詞としての使用、6) 述語として用いられる持続アスペクトをもつ動詞、7) 述語として用いられる、勧奨相をもつ動詞、8) 述語として用いられる形動詞(分詞)、9) 合成述語及びそれと関連する諸現象である」という[DS 10]。

これに対してカツネリソンは、1935年に論文として提出し、1936年に刊行された「主格文の発生に寄せて」[DS 9]⁷⁶において、マールの段階理論から出発しながら、主格(対格)言語が歴史的に能格言語から発生したと論じて、言語類型間に発展段階の相違のあること、したがって能格言語類型が普遍的な意味をもつことを主張したといわれる。そのことによって彼は「原始の思惟の諸特徴の根底にあり、文の能格構造の原初の意味的基盤を決定すること、すなわち能格言語の<観念的内容>を明らかにすることを目差した」[DS 12]という。

メシチャニーノフは、30年代から類型学をテーマにする多くの研究を行ったといわれるが、1934年に科学アカデミーにおいて彼が行った演説[DS 15]⁷⁷の中で、「はじめて能格構文を段階理論に属する現象であるとする解釈が提示され、主格構文をもつ言語に能格構文の形式的残滓が保存されているという考察が述べられた」という[DS 15]。これはあとで述べるように、随件事象の存在と、その類型学的発展における意義についての最初の指摘であったと考えられる。

対格言語と能格言語という類型が歴史的な産物にすぎないとすれば、対格言語は果たして能格言語から発達したのか、それとももっと違った類型から発達したのか、という問題が生じてくる。これはかなり長い歴史的なスパンに属する現象であるから、その研究には、とりわけ印欧語比較言語学の成果の利用が必要になってくる。

§ 30 他方対格言語は、一つの歴史的必然として、その前段階に能格言語を前提としなければならないかが問題になってきたというのも、当然のこととしてうなずける[DS 32]。デスニツカヤ自身の回想によれば、このような雰囲気の中で彼女は博士論文「印欧諸語における直接補語のカテゴリーの発達」⁷⁸を書き、対格および他動詞という範疇そのものも、比較的后代の発達にかかるものであることを論証した。彼女によれば、このことは、印欧語が能格言語から発達したとする説が否定される契機になった。そして「印欧語のようなタイプの主格言語類型と、

たとえばコーカサスのヤベテ諸語に代表される能格言語類型とは、主語・目的語関係の形成の仕方が異なっている」ことが明らかになってきたという。

これと関連してプブリフ (Бубрих, Дмитрий Владимирович 1890-1949) は、フィン・ウゴル諸語の研究から「話者にとって大切なのは、行為者や行為の直接目的というカテゴリーではなく、行為の状況の中心となる対象のカテゴリーであり、しかも行為の状況の中心としての対象は、なによりも行為の直接目的語であり、行為の直接目的語の存在しない(とき、言い換えれば)、行為が自動詞的な性格をもつときにのみ、行為者となる」と述べ、このような言語類型が対格言語類型あるいは能格言語類型より古い言語類型であるとして、「絶対言語類型」absolute structure と名づけたという [DS 33-34]⁷⁹。

以上のような研究の発展の結果、40年代には能格言語類型が常に対格言語類型に歴史的に先行するものであることが否定され、両者とも、のちに活格言語類型と呼ばれるようになったものから、平行的に発展したものであることが漸次明らかになってきたという [DS 34]⁸⁰。

しかし、グフマン (Гухман, Мирра Моисеевна 1904-1989) は、メシチャニーノフの研究は「理念的に分析の手續きにおいて、論理的概念的なレベル、意味的なレベル、統語的なレベルを十分明確に区別することを可能にする、比較的少数の文法的・統語的単位に基づいてはいたが、彼の論文には必ずしもつねに一貫してこの区別が行われていたわけではない」とし、そのような単位として、1) 論理的概念的なレベルの単位、主体・陳述・対象、2) 意味的なレベル、行為者 *agens* (人物/非人物、活動体/不活動体)・相 (行為/状態、遠心性/求心性、他動性/自動性)・受容者 *patients*, 3) 統語のレベル、主語・述語・補語、を挙げている [GI 152-153]。

40年代になると、このことはさらにはっきりとした形をとるようになる。たとえばカツネリソンは、「類型学的な親近性がさまざまな類型学的な分類の基礎になるのと同じように、資料の親近性は、それが十分に広い現象に拡がっているならば、系統的分類の基礎になる」といっている [KTI 23]⁸¹。ここで彼が「資料の親近性」といっているのは、すでに言語学では常識になっているところの、比較言語学における「同系性」を意味している。したがってこれは類型学と比較文法が、原理的に異なるものであることを、認めるものであったが、それと同時に、類型学の研究において、言語の類型を多くのレベルをもった構造体であるとみること、それぞれのレベルの現象の間にどのような階層関係があるかを研究すること、この階層関係に基づいて各々の現象がもっている依存関係を明らかにすること、などを軸とする、体系的、構造主義的なアプローチを目差そうとする動きが、

はつきりしてきた。またこのような動きと平行して、変化しつつあるものとして、また固有の歴史を体験しつつあるものとして、言語の体系をとらえようという、歴史的、あるいは通時的なアプローチも明らかであった。このような共時的、構造主義的な原理と、通時的、歴史的な原理が、類型学の研究に導入されたことは、現在みられるような類型学研究を準備するものであったと、いうことができる。

§ 31 ここでとくに触れておかなければならないのは、グフマンが、カツネリソンの「内容的類型学」が、クリモフの目差しているものに対して否定的である、と述べていることである。

グフマンはカツネリソンについて、「メシチャニーノフの諸論文において考察の対象となっているのは、言語類型の全体を構造化する諸特徴・座標であるが、カツネリソンの注意は個々の言語的・思维的カテゴリーの再構成に向けられ、言語の全体としての類型学的分類のすべての試みに、激しく否定的な態度をもって」と述べ[GI 153]、カツネリソンが従来形態論的分類を批判して「いま述べたことは、もちろん古い形態論的分類にのみ、かかわるものではない……これはとくにたとえばマールの学説の支持者によってつくられてきた統語論的分類の変種にもかかわっている。能格構文および主格構文(すなわち対格構文)を区別することは、疑いもなく、多くの統合的・形態的言語の現実に対応している。しかしこれらの構文を拡張して、そのすべての形式的小および内容的契機を統一した、全体的な言語構造を代表するものとすることは、統語論の「レヴェル」に、言語の形態的分類という、誤った原理を生じさせるものである」[GI 153-154]⁸²と述べている箇所を引用して、「きわめて論争的ではあるが、非常にはっきりした態度である」と否定的なニュアンスをもって評している。しかしカツネリソンのこの論文をみれば、彼はまた「一つの類型の言語を他の(類型の-I.Y.)言語から区別する特徴は、すべての言語に共通の特徴と、個々の言語をその構造の<一般的なもの>と<個別的なもの>から区別する特徴が明らかにされるといふ条件においてのみ、十分な明確さをもちうる」⁸³ともいい、その根拠として「類型学は言語の一般的な構造を考察する。類似あるいは相違といった孤立した特徴を問題にすることを避けて、類型学は言語のすべての特徴をそのヒエラルキーのなかで考察する」ことが必要であると考えているのである。

したがって、カツネリソンの立場とクリモフの立場とは、究極的には、グフマンが述べているように異なっているとは思われない。

こうなってくると、それまでの類型学にみられる、孤立型言語、膠着型言語、

屈折型言語というような、形態論に基づく形式的な特徴づけが、形態論の基礎にある形態素の意義および他の形態素の意義との間の関係を見落している、という反省がされるようになったのも、自然の流れであると思われる。いうまでもなく形態素は記号であり、「形式」すなわち「意味するもの」と「内容」すなわち「意味されるもの」の結合したものである。この立場からみれば、それまで類型学という名でひっくり回して考えられていたものの中に、主に形式だけを扱うものと、表現の形式と内容の関係を考えようとするものがあり、この二つを区別する必要があることが、意識されるようになってきた[КТИ 27-28]⁸⁴。ジルムンスキー(Жирмунский, Виктор Максимович 1891-1971)は1945年に発表された論文の中で、次のようにいっている。

一般的にチュルク諸語と印欧諸語の間には、語彙の素材や構成要素の違いにもかかわらず、文法構造に大きな類型学的な類似がある。いわゆる膠着と屈折の対立は、この類似に反映されていない。それが本質的には思惟の反映としての言語の構造に触れるものではなく、むしろ構成にかかわる技術的な形式に関するものだからである⁸⁵。

クリモフはジルムンスキーのこの箇所を引用して次のようにいっている。

わが国の言語学者は、言語の体系的分析の諸原理によって、類型学研究の二つの種類、すなわち一方では言語の構造的な特徴を、言語によって伝えられる内容を捨象して研究する、純粹に形式的な類型学と、他方では言語の構造的な特徴を、言語的思考の領域に制約されたものとして研究する(まさにそのことによって後者の場合、言語形式へのアプローチが、その形式によって伝達される内容と関連して実現される)、内容的(より正確には内容を指向した)類型学を、区別することができた[КТИ 25]。

このように、形式的な類型学の意味については当時すでに疑いがもたれるようになってきたが、それにともなって言語の形式的な側面を支配している深層構造と形式の関係、当時の言い方では「言語の(表現)技術の思想的根拠」[КТИ 33]⁸⁶に注意が向けられるようになった。その中から、すでに若干触れたように、主語・目的語の関係の表現が、ほかのすべての関係を規定する基本的なものである、という主張が現れてきた。たとえばリフチン(Рифтин, Александр Павлович 1900-1945)は、次のように述べている。すなわち、「言語の文法的な核」には「中心的な関係」があり、「それが核の内部、およびその外部におけるすべての他の関係を規定している。われわれの考えるところでは、主語・目的語関係をそのようなものとみなすべきである。これは何よりも社会的実践の現実の主体の、社会的実践の客体に対する関係の、反映である。社会発展のおのおのの段階において、社会的主

体の客体に対する関係は、主体相互の関係を規定し、これらの関係の意味づけを規定し、同様にして客体とその関係の理解を規定する。したがって文における主語・目的語関係は、すべての他の関係にとって中核的で決定的なものである。このためにこの関係は、われわれにとって基本的な基準になるのである」[KTI 34]⁸⁷。

この主張は主語・目的語関係を階層構造の頂点に据えようとするものである。このことによって、この関係を軸にして内容的類型学を構築することが、ここで理論づけられることになった。また、この新しい類型学は、それまでの類型学が言語を主として語の形態の面に基づいて分類していたのに対し、統語論のレベルを中軸に据えるという点でも、質的に新しいものであったといえることができる。たとえばヤコヴレフ (Яковлев, Николай Феофанович 1892-1974) は、「現実と思想は、言語において文の形によってのみ、表現できる。したがって統語論はあらゆる他の文法的な要素の存在の本来の意味が解明されるところの、文法の部分である」[KTI 44]⁸⁸と述べているのである。

序にえば、このような統語論のレベルを基本に据えるという考えは、ロシアの類型学研究においては、未だ理念的な領域にとどまっていたと考えられる。あとにみるように、欧米および日本における類型学の研究においては、統語論的なレベルでの類型間の相異が、より明確な形で明らかにされつつあり、またコミュニケーションのレベルの問題も、研究の対象になりつつあると思われるが、ここでは単に事実の指摘にとどめておく。

§ 32 以上のような研究の進展の中で、多くの非印欧語に関する研究が行われるようになった。その中で能格言語類型に属する言語が漸次明らかになってきた。たとえばコーカサスの諸言語については、次のようなものがあるとされる⁸⁹。

1) イベリア・コーカサス語族の北西に位置し、西コーカサス諸語といわれるアブハズ・アディゲ諸語 (アブハズ・チェルケス諸語ともいう)。これには次のものがあるという。

a) アブハズ諸語。アブハズ語 (これには北のブズィブ方言と南のアブジュイまたはカドル方言があるという。1951 年まではグルジア語の文字によって書写されていたが、それ以降キリル文字が用いられるようになった)、アバザ語 (キリル文字を使用) がこれに属するという。

b) チェルケス諸語。これにはアディゲ語 (キャプ語あるいは低地チェルケス語ともいわれるという)、カバルディン語 (高地チェルケス語ともいわれる) のほか、ウビフ語 (帝制時代にこの言葉を話す人々はトルコに移住したという) などが属している。

2) 南に位置し、南コーカサス諸語といわれる、カルトヴェリ諸語。これには次のようなものが属する。

a) ザン諸語(またはメグレル・チャン諸語ともいわれる)。メグレル語、チャン語(ラス語)がこれに属する。

b) カルトヴェリ(イペリア)諸語。グルジア語とその下位方言、ヘブスル方言、カルタリイ方言、イメレチン方言、グレイ方言がこれに属する。

c) スヴァン語。

3) ナフ諸語(ヴェイナフ諸語、バツビー・キスチン諸語ともいう)。チェチェン語、イングーシュ語、バツビー語(バツ語ともいわれる)などを含む。これは対格言語への一定の傾向をみせているという [KP 81]

4) ダゲスタン諸語。

a) アヴァール・アンディ・ツェス諸語。アヴァール語、アンディ語、ボトリフ語、ガドベリ語、カラチン語、アフヴァフ語、バグラリ語、ティンディ語、チャマル語、ツェス(またはディド)語、フヴァルシン語、ギヌフ語、ベジェティン(カプティン)語、グンジブ語など。

b) ダルギン(またはダルグワ)語。

c) ラク(またはカズィ・クムフ)語。

d) レズギ諸語。レズギ語、タバサラン語、アグル語、ルトウル語、ツアフル(またはツアフ)語、クルイズ(またはジェク)語、ブドゥフ語、ヒナルグ語、アルチン語、ウディン語など。

そのほか、「古アジア諸語」といわれるものの研究も、盛んに行われた。古アジア諸語というのは、系統的には必ずしも同じではないが、シベリア北部および北西部に分布し、この地方の先住民であったと考えられる、少数民族の諸言語である。これは系統的には四つの語族と一つの孤立した言語を含んでいるといわれる。すなわち、

1) チュクチ・カムチャツカ語族(チュクチ語、コリャク語、ケレク語、アリュトル語、イテリメン語など)。このうちイテリメン語を除いて⁹⁰、他の言語は能格言語類型に属するという [KP 81-82]。

2) エスキモー・アレウト語族(エスキモー語、アレウト語)。これらの言語の性格は、記述の方法がまちまちなのではっきりしないが、能格類型が支配的で、それに対格あるいは活格類型の要素が加わっていると、クリモフは述べている [KP 82]。

3) ユカギル・チュヴァン語族(ユカギル語、死語になったチュヴァン語)。

4) エニセイ語族(ケット語、死語になったコット語、アリン語、アサン語など)。

5) ニヴフ(ギリヤーク)語などである。

シナ・チベット語族に属するチベット・ビルマ語派の多くの言語も、能格言語に属するが、チベット語および死語となった西夏語は対格言語的な性格が強いという。また多くのパプアの言語およびオーストラリアの言語も能格言語であるという [KP 81]。

ポリネシアの言語も、純粹に能格的であるといえるのは、ニウエワ語だけであるが、一般に能格的であるという。

クリモフによれば、以上のようなもののほか、能格言語の属するものとしては、たとえばピレネー地方のバスク語(この言語は対格言語への一定の傾きをみせているという [KP 81])、パキスタンの北西の山中に分布するブルシャスキ語、北米インディアン⁹¹のネズ・パース語、チヌーク・チムシャン語族、アルゴンキン・リトワ語族、中央アメリカのユート・アステック諸語および対格言語的性格もすでに顕著にみられるマヤ・キチェ諸語、南米のタカナ・パノ諸語⁹¹の多くの言語も、能格言語に属するという [KP 82]。さらにすでに死語になっている古代エジプトの言語、同じく死語であるウラルトの言語なども能格言語に属するものとして、学界に知られ、利用されるようになった。

これらの研究によって、文法カテゴリーや体系の全体について印欧語的な先入観の克服が行われるようになった。たとえばすでに述べたように、革命前にコーカサスの諸言語の科学的な研究の基礎を築いたウスラルは、ナフ・ダゲスタン諸語を研究して、そのカテゴリーの立て方、動詞の構造や文の構造が特異であることを強調して、これに印欧諸語のモデルをあてはめることが危険であると、述べているという [KTI 10]。ここからウスラルは、チェチェン語、アヴァール語などの事実に基づいて、のちに能格構文受動説と呼ばれるようになった理論を唱えるようになったのである。

§ 33 能格 ergative case というのは、行為者を表す特別の格である。ergative という名をはじめて用いたのは、ディール (Dirr, Adolf 1867-1930) であるといわれる。アブドゥラーエフ (Абдуллаев, Запир Гасанкович) は、ディールがコーカサス諸語の動詞を考察して「この問題はきわめて複雑であり、私はこの問題を解決できないことを認めなければならない。受動構文という代わりに、私はつねに能格構文(論理主語が能格に立つ)、情緒構文 affective construction (論理主語が与格あるいは情緒格に立つ、……)、主格構文(論理主語が主格に立つ)という表現を用いよう」と述べている

ことを引用して、「《能格》および《能格構文》という用語は、ディールのこの労作が世に出た後、コーカサス学にしっかりと根づき、時とともに全世界の言語学の継承するところとなった」と述べている⁹²。能格をもっている言語は、意味的に他動を表す動詞の意味上の主語を表すにあたって、これを用いている。

これに対して意味的に状態を表したり、または自動詞で表されるような行為を表す動詞の意味上の主語は、能格とは違った絶対格 *absolute case* といわれる格によって示される。この格は形の上で、何も特徴をたない、無徴 *unmarked, merkmallos* な格である。しかし能格言語の特徴は、この同じ絶対格が、能格で表される主語をもつ、意味上の他動詞の目的語としても用いられるというところにある。たとえば古アジア諸語に属しているチュクチの言語では、*клявол чейвыркын* (*kljawol čejwərkən*)「人が歩く」、*коран'ы чейвыркын* (*koran'ə čejwərkən*)「鹿が歩く」に対して *кляволя коран'ы тымыркынэн* (*kljawolja koran'ə təmərəkənən*)「人が鹿を殺した」のようになる。ここで *kljawol*「人」と *koran'ə*「鹿」は絶対格であるが、*kljawolja* は「人」の能格である。したがって絶対格 *koran'ə*「鹿」は *čejwərkən*「歩く」の主語であると同時に、*təmərəkənən*「殺した」の目的語になっているのである。

コーカサスのグルギン語は、人と人以外のものという対立をもっているが、このばあいにも、人以外のクラスに属するものは、自動詞の主語にも、また他動詞の目的語にもなることができるという。ただし人のクラスのばあいには、意味的に自動詞であっても、主語に立つときには能格になるようである。たとえば *адам'или вашар* (*adam'ili vaʃar*)「人が歩く」、*варткел башар* (*vartkel baʃar*)「鹿が歩く」に対して「人が鹿を殺した」の場合には *адам'ий варткел хабушиб* (*adam'ij vartkel xabuʃib*) となるという。ここで *v-aʃa-r*, *b-aʃa-r* の *-r* は絶対格構文の三人称の接辞、*v-* は男性(人間)のクラスの接辞、また *b-* は人以外のクラスの接辞である。これに対して *xa-b-uʃi-b* の最後の *-b* は能格構文の三人称の接辞であり、語根の間の *-b-* は、目的語に人以外のクラスの名詞が立つときに用いられる接辞である。このばあいにも、やはり絶対格の *vartkel*「鹿」は自動詞的な *-aʃa-*「歩く」の主語であると同時に、他動詞的な *xa-uʃi-*「殺す」の目的語になっているのである [MG 97-98]。

§ 34 ヨーロッパおよびアメリカにおいても、近年、とくに 1970 年代以降、いわゆる能格言語についての研究がさまざまに行われてきている。日本においても、たとえば 1979 年に、橋本萬太郎は「言語の類型論」というと、体系作業としては自然言語の分類、個々の言語についてはその類型特徴の設定に主要な関心があるかのように誤解されることがある。そのような関心は、じつは前世紀、前々世紀の

ものである。現代の言語類型論の課題は、共時的には個々の言語の類型構造を全体的に把握することによって、その言語の構造の各部分がいかにあり、一步すすんでなにゆえそうあるかを予告的に解明することにある。通時的には各種の言語の類型構造の発展原理をみることによって、一方では人間の言語のあり方にたいする一般理論に寄与するとともに、他方ではその観察・分析をとおして個々の言語の共時相のあり方にかんするいかにとなにゆえにとをあきらかにする点にある。つまり、言語研究の一番根本に関係しているのである」⁹³と書いている。この論文を載せた『月刊言語』は、1982年に「言語類型論の新展開」という特集を組み、これに柴谷方良「言語類型論の展開」、橋本萬太郎「言語音型の構造類型」、影山太郎「語彙構造の類型論」、小泉保「能格性——能格言語と対格言語」を収めている⁹⁴。さらに日本言語学会の紀要である『言語研究』は1986年にシンポジウム「能格性をめぐって」という特集を組み、これに柴谷方良「能格性をめぐる諸問題」、宮岡伯人「エスキモー語の能格性」、長野泰彦「チベット・ビルマ系諸語における能格現象をめぐって」、角田太作「能格言語と対格言語におけるトピック性」、松本克己「能格性に関する若干の普遍特性——シンポジウム「能格性をめぐって」を締めくくるために」の諸論文が収められている。

クリモフの内容類型学に沿ってさきに述べた、能格言語類型の説明は、欧米および日本においては、主語(s)と動作主(A)および対象(P)との関係のあり方によって示されている。柴谷方良の説明によれば、これは次のようになる。

伝統的には能格構文とは、他動詞構文の目的語が自動詞構文と同一の格標示(通常は unmarked なゼロ標示)を受け、他動詞構文の主語がこれらと違った特別な格、つまり能格標示を受ける構文である、と性格づけされ、そのような構文をもつ言語を能格言語と呼んで来た。しかし、この伝統的な性格づけには、主語・目的語という概念があたかも自明なもののように含まれているが、能格言語においてこそこれらの概念が問題となるのであって、対格言語における構文理解の投射なしでは成り立たない性格づけである。このようなことから、近年では主語・目的語という概念をそのまま使うことなく、より意味的な概念 Agent(動作主)及び Patient(対象)を用い、他動詞構文におけるこれらのうちのどちらが自動詞構文の名詞句と同一の標示を受けるのか、という観点から能格型格標示及び対格型格標示というものを規定しようという動きが起こった。自動詞構文に起こる一つの名詞句は意味的に動作主の場合もあり、また対象の場合もあり、この位置においては A(gent)と P(atient)の対立が中和されたものとなり、意味的違いを超越した統語的要素、「主語 S(subject)」というカテゴリーが形成されていると考えることが出来る⁹⁵。

このような規定の仕方によれば、能格言語類型は、動作主が能格という有徴的

な格形をとって他のものと異なる扱いを受けるのに対し、自動詞の意味上の主語と他動詞の意味上の目的語が同じ格形になって、同じように取り扱われるから、 $S=P \neq A$ となる。これに対し対格言語類型においては、他動詞構文における行為主体は、自動詞構文の主語と同じ形式をもって表され、通常有徴的な意味上の目的語とは異なった扱いを受けるから、 $S=A \neq P$ の形をとることになる。

このような規定の仕方は、クリモフの規定の仕方よりも形式的であって、より明確なものであるといえよう。しかし「動作主」、「対象」、「主語」といった用語は、論理的とはいえ、内容にかかわるものであるから、もっと形式性の強い説明があれば、その方がよいといえる。ディクソン (Dixon, Robert M.W. 1939-) が、 P の代わりに O を用いて、 S 、 A 、 O をそれぞれ「自動詞の主語」intransitive subject、「他動詞の主語」transitive subject、「他動詞の目的語」transitive object としているのは、このためであるように思われる⁹⁶。

いずれにもせよ、このような規定によって、能格という概念が、名詞の形式に限定されるものでないことが、明確になったと思われる。柴谷方良は、続けて次のように述べている。

以上のように、 P を除外して S と A を同一に取り扱う状況を対格パターン、そして A を除外して S と P を同一に取り扱う状況を能格パターンというふうに理解することが可能となる。またこのように考えると、 S と A の同一取り扱い及び S と P の同一取り扱いという状況が格標示だけに限られる必要が無くなる。つまり、格標示の形式だけを他の文法形式と区別して対格型・能格型という根拠はなく、一致その他の文法形式に対しても対格的か能格的かという問い方が可能であるということである。このことから、格標示から離れた領域においても S と A が同一に取り扱われるか、 S と P が同一に取り扱われるかというように、文法形式全般に対して、対格型現象・能格型現象という概念が適用されるわけである。ここに、格標示を超越したレベルでの能格性 (Ergativity) というより抽象的な概念が生まれるのである。日本語の訳語としては能格性と「格」という概念を含んだものになってしまうが、Ergativity という概念は、 A が除外され、 S と P とが同一に取り扱われている現象、つまり S と P のグルーピングを広く一般的に指すのである。それに対し、対格性 (Accusativity) は、 P を除外し、 S と A が共通して対象になっている現象を指すのである⁹⁷。

§ 35 しかしながらこのような形式的規定によれば、能格言語類型とあとに述べる活格言語類型が同じ形式によって表されることになり、区別がつけられない。いま議論を能格言語類型に限ることにすれば、能格は行為の積極的な主体を表す

から、これは同時に対格言語の具格に相当する機能をもつことになる。また行為の行われる「場」の表現として、対格言語の与格に相当する機能をもつことができた。少なくともクリモフはそう考えている [KP 108-109]。ここから彼は対格言語の与格並びに具格に相当する「間接目的語」 O_1 を考え、ディクソンの図式に修正を加えている [KP 112-113]。すなわち、能格言語においては S と O とが「融合」syncretism しているのと同様に、 A と O_1 も融合しているのである。

$A + O_1$	$S + O$
能格	絶対格

そうとすれば、対格言語に移行することによって、主語が必ずしも行為者を表さないようになれば、 O_1 は主語と同じ形式をもつことができなくなる。具格と与格の機能が分離するのである [KP 113]。すなわち、

与格, 具格	O_1	能格
主格	A	
	S	絶対格
対格	O	

それと同時に、対格言語に移行すれば、主語と目的語の関係が明確になるから、この関係が投影されると、この格が単に行為の行われる「場」を表すのではなく、いわゆる「主語を表す与格」*dativus subiectivus* と「目的語を表す与格」*dativus obiectivus* の機能を獲得するようになる。そうすれば、この格の具格にあたる機能と、与格にあたる機能とが分離せざるをえなくなってくる。

同様のことは、属格についてもいうことができる。クリロヴィツチ (Kryłowicz, Jerzy 1895-1978) やバンヴニスト (Benvenist, Émile 1902-1976) は属格が主格と対格の一種の「転位」transposition であるとしているという [KP 108]。いわゆる *genitivus subiectivus* と *genitivus obiectivus* である。そうとすれば、これも対格言語の主語・目的語関係の存在を前提としなければ、存在しえないものである。あとに述べる活格言語類型、および能格言語類型に属格が存在せず、接辞によって所属を示していたことは、この格がこれらの言語類型となじまないものであったことを示している。もしそうとすれば、これらの格は決して言語に普遍的なものではなく、対格言語類型に特有な、包含事象であるということにならざるをえないであろう⁹⁸。

ゾンマーフェルト (Sommerfelt, A.) も属格に関して「属格は普遍的な文法的カテゴリーではない。そう考えるのは、世界の言語をインド・ヨーロッパ諸語の目でみることを意味している」といつているという [KP 47]⁹⁹。活格言語のばあいには、

のちにデスニツカヤの所説にみるように、絶対格は動詞に密接な関係をもつものを表すにすぎないから (§ 180 参照), 次のように表せるという [KP 113].

$$\begin{array}{cc} A + S & S + O + O_1 \\ \text{生物} & \text{無生物} \end{array}$$

ここで S が生物にも, また無生物にも現れていることについては, 「要素 S が活格の体系を規定する意味的な役割の両方に含まれているのは, 自動的な行為が, ある場合には活性に, またある場合には不活性に現れるという, 上述の事情による (したがってこの要素は, S_1 と S_2 とに分けるべきかもしれない)」[KP 114] としている。

もしそうとすれば, このような図式を採用することによって, 活格言語と能格言語もまた, 形式的に区別することができることになろう。

§ 36 さきにロシアの類型学の発展について述べた際, 内容的類型学は統語論に基礎をおくものではあるが, しかしそれは未だ多分に理念的なものにとどまっていたと述べた。欧米および日本においては, 統語論のレベルにおける類型学的考察は, ロシアにおけるものに較べて, より具体的, より精密なものとなっているように思われる。私見にすぎないが, その中でも最も重要であると思われるのは, いわゆる統語的ピボット syntactic pivot という概念である¹⁰⁰。この概念は, いわゆる同一名詞句の削除, 再帰化, 関係節化などの統語的な手続きと密接に関連し, これを制御する中枢的な役割を担うものと思われるが, 対格言語がこの手続きに関して S と A とを同じように取り扱い, $O(P)$ を別に取り扱う, いわゆる S/A ピボットをもつものに対して, 能格言語は S/P ピボットをもつ, というのである。

たとえば, 角田の例に従えば, 英語の等位構文のばあい,

- a. Nancy(S) went and [Nancy(A)] slapped Diana(P).
- b. Nancy(scriptsie A) slapped Diana(P) and [Nancy(S)] went away.

において, 後続の節および先行の節の Nancy は, A と S または S と A とであるが, 後続の節の Nancy が省略できるのは英語が $S=A$ の型で省略を行うからである。これに対し,

- c. *Nancy(S) went and Charles(A) kicked [Nancy(P)].

の場合は, Nancy がそれぞれ S と P であるために, 非文法的な文になる。これを避けるためには後続の節を受動形にすればよい。

- d. Nancy(S) went and [Nancy($d-S$)] was kicked by Charles.

これは受動構文の場合, 述語動詞は自動詞と同等のものとされ, したがって「意

味的な」主語は S となって、 $A=S \neq P$ に抵触しなくなるからである。なおここで $d-S$ とされているのは、派生的な S (derived S) の意味である。

これに対して、能格型の言語であるオーストラリア東部のワログ語では、次のような現象がみられるという。

- e. pama+øyani+øwarrngu+ngku [pama+ø] palka+lku.

「男・絶対格 行く・過/現 女・能格 [男・絶対格] 殴る・目的」=「男 (S) が行って、女 (A) がその男 (P) を殴った。」

(動詞の目的形は、従文において目的、結果、次に起こった動作などを示すという。)

- f. warrngu+ngku pama+øpalka+n [pama+ø] yani+yal.

「女・能格 (A) 男・絶対格 (P) 殴る・過/現 [男・絶対格 (S)] 行く+目的」=「女 (A) が男 (P) を殴って、その男 (S) が行った。」

明らかなように、この言語は $S=P \neq A$ で、 S/P ピボットをもつ。逆に対格言語で文法的な $S=A$ 型の削除は、非文法的なものとなる。たとえば、

- g. *pama+øyani+ø [pama+ngku] warrngu+øpalka+lku.

「*男・絶対格 行く・過/現 [男・能格] 女・絶対格 殴る・目的」=「男 (S) が行って、男 (A) が女 (P) を殴った。」

この非文法性を避けるためには、いわゆる「逆受身」antipassiveの文にする必要がある。逆受身というのは、対格言語において無徴的な能動形の述語から派生した形式を用いて、受動の構文がつくられ、対格が主格 ($P \rightarrow S$) に変換されるのと同じように、無徴的な他動詞(能格動詞)から派生した形式によって、能格が絶対格に変換される ($A \rightarrow S$) ものである。

- h. pama+øyani+ø [pama+ø] warrngu+wu palka+kali+yal.

「男・絶対格 行く・過/現 [男・絶対格] 女・与格 殴る・逆受身・目的」
=「男 (S) が行って (男 ($d-S$) が) 女 (与格) を殴った。」¹⁰¹

しかしクリモフは「逆受け身」という概念を導入することに批判的である。彼はこれに関してたとえば次のようにいう。

……時に専門の文献に能格言語に特徴的な文型としていわゆる逆受け身構文について言及される。このようなアプローチは能格性を特徴づける性質を無原則的に増やすことを意味する。このばあい、能格構文と並んで、一連の能格言語に随伴事象として存在する、可変動詞 *diffused verbs* あるいは *labile verbs* という、非生産的なクラスによってつくられるところの、絶対構文とおなじものが考えられているからである [KP 102]。

すなわち、クリモフはこれを活格言語段階の名残と考えているのである。仮に

逆受け身を認めるとすれば、これは受動構文のように能格構文からつくられるものとなるから、相のカテゴリーであるといわなければならないが、もしこれを相のカテゴリーとするならば、この構文がどのような機能をもつかが問われなければならないであろう。しかしこれが受動を意味するものではありえないこともすでに明白である。他方これが意味上の主語の削除を可能にするためだけに存在すると考えることはむずかしいと思われる。クリモフの批判はこの点で妥当するといえるが、しかし逆にクリモフの見解が正しいとすれば、この構文に用いられる動詞には、一定の制限がなければならぬ。この点の確認は現在のところ未だ充分にはなされていないように思われる (§ 52 参照)。

§ 37 いずれにせよ、この概念が重要なのは、格の組織においては能格言語の規範を満たしている言語がすべて、統語的現象に関しても能格的であるとはかぎらないこと、したがって形態論と統語論の両面から類型についての判断を行う必要があることなどが、次第に明らかにされてきつつある点にあると思われる。

たとえばコムリー (Comrie, Bernard 1947-) によれば、東北コーカサスのヒナルグ語においては、名詞の格組織も、また動詞の文法的一致についても、能格的である。たとえば、

- a. Ligild secax-ø -q'igomā.

「男・絶対格 黙っている・男性」=「その男は黙っている。」

- b. Xiñimk'ir sacax-z -q'igomā.

「女・絶対格 黙っている・女性」=「その女は黙っている。」

に対して、

- c. Bij -i ši ti -ø-k'i.

「父・能格 息子・絶対格 起こす・男性」=「父が息子を起こす。」

- d. Bij -i riši ti -z -k'i.

「父・能格 娘・絶対格 起こす・女性」=「父が娘を起こす。」

のように、述語は絶対格と文法的な一致をしている。

しかし主動詞に依存する「不定形動詞」のばあい、もしその意味上の主語が主動詞の意味上の主語と一致しないときには、「不定形動詞」の種類にしたがって能格あるいは絶対格に立つ名詞の存在が必要になる。たとえば、

- e. Asir gada točkwi jukwat^hmā.

「私・与格 男の子・絶対格 起きる 欲する」=「私はその子が起きてほしい」

と思う。」

f. As jukwat^hmā hini p^hsā q'izi.

「私・与格 欲する 彼女・能格 パン・絶対格 焼く」＝「私は彼女がパンを焼いてほしいと思う。」

ここで asir と as は一人称単数の与格の異形であり、また「欲する」は与格を意味上の主語とするとのことである(クリモフのいう, verba affectuum にあたる可能性がある)。

英語の場合、全く同様のことが起こる。たとえば、

g. John wants to come.

h. John wants Bill to come.

ここからコムリーはこの言語は、この種の構文に関して対格的であるとしている¹⁰²。

§ 38 コムリーはさらに徹底した能格性を示すものとして、ディクソン以来日本においてもしばしば引用されるディルバル語を挙げ、結論として次のようにいう。

考慮しなければならない一つの要因は、言語が(ヒナルグ語)のように、純粹に形態論的な能格言語と、(ディルバル語のように)(形態論的に能格であると同時に)統語論的に一貫した能格言語とに、きれいに分かれるのではないということである。多くの言語は中間的な位置を占め、ある統語的現象は主・対格に基づき、他の現象は能格・絶対格に基づいていて、その結果、世界の能格言語は全体として純粹に形態論的な能格性から……統語的な能格性まで、一つの連続体をなしている¹⁰³。

このことと関連して興味深いことは、語彙のレヴェルにおいては、たとえば英語のように典型的な対格言語であると思われるものでも、能格的性格が強いということである。たとえば bird-chirping「鳥のさえずり」のように、自動詞からつくられるものは、「鳥」が意味上の主語になるが(s), bird-watching「鳥の観察」のように、他動詞からつくられる場合は「鳥」は意味上の目的語と考えられる(p)¹⁰⁴。

いずれにしても、レヴェルによって能格性と対格性の現れ方に違いがあることが明らかになってきたことは、大きな理論的成果であろう¹⁰⁵。しかし一方欧米あるいは日本における能格性の取り扱い、主として A, P および S の関係のあり方という、形式的なクリテリアに基づいて定義されているから、クリモフのいう能格言語類型と活格言語類型の区別ができない。両者ともこれら三つの関係が同じだからである。これを区別するためには動詞の意味の分類、あるいはこれと相関する名詞の性の分類原理、格の体系のあり方などを考える必要があろう (§ 35,

§ 180 参照)。またこれと関連することであるが、欧米並びに日本の類型学研究は、ロシアのものに比べて、現象間の関係について論じることが未だ少ないように思われる。

このことはクリモフの批判の対象となるところでもある。彼はコムリーの所説に対して次のように述べている [KP 67]。

コムリーの研究に関していえば、そこには類型学における個別的体系的なアプローチ、およびまた一連の問題の形式的な取り扱いへの志向が感じられる(たとえば主格性(i.e. 対格性)と能格性の相互関係の彼の解釈、いわゆる逆受け身構文の指定など)。著者が言語類型という、ある種の構成物をつくることを拒否しているまさにそのことが、主格言語と能格言語の対立について、同一の言語の中のある現象は能格的な基礎の上に、また他の現象は主格的な基礎の上に働いているという、著しく誤った結論に導いたのである。

クリモフは言語類型を、主語・述語・目的語関係をヒエラルキーの頂点とし、言語の各レベルがこれに基づいて構造化されているものとしてとらえているから、個別言語の類型への帰属は一意的に決定される。コムリーの学説への批判は、正確にはこの点に関してなされるべきであり、またクリモフ自身もそうしていると思われるが、しかしながら、そのことと言語のレベルによって、あるいは「能格的」傾向をもつ現象を示したり、あるいは「活格的」または「対格的」傾向をもつ現象を示したりすることとは、おのずから別のこととせねばならないであろう。このことが、いわゆる split ergativity の問題、言語類型の発展的な変化の問題と、理論的に密接に関連していると考えられるからである。

§ 39 ところでさきにみたようにダルギン語のばあいには、能格構文で意味上の目的語を表す接辞と主語を表す接辞とが、動詞に附加されている。このようなばあい、能格言語に共通の特徴として、目的語を表す指標が主語を表す指標よりも、前の位置にくることが多いことが挙げられる。たとえばイベリア・コーカサス語族に属するアブハズ語のばあい、i-lagwajt 「それ(-i) が粉になる」に対して i-s-lagwajt は「それ(-i) を私が(-s-) 粉にする」という意味になるという [KO 103]。このばあい、能格構文で目的語を示す -i が、絶対格構文では主語を表しているが、これは能格言語における能格と絶対格の用法に対応したものである。またクリモフは、いま述べたダルギン語のように、接頭辞と接尾辞の両方を用いる言語では、ふつう目的語を表す指標が接頭辞として、また主語を表す指標が接尾辞として用いられるという [KO 102]。

またたとえばナフ語、ダゲスタン語、ウラルト語のほか、イランの山岳地方に分布するエラム語、インド北部、パキスタン、アフガニスタンの北東部に分布する、印欧語族のイラン語派に属しているダルド諸語などのように、目的語の指標だけをもっている言語も存在するといわれる [KO 98].

これらのことから、能格言語のばあいには目的語の指標の方が優先的な重要性をもっているのであって、主語の指標は、歴史的に後の時代になってから発達したものであると、考えることができる。たとえばアフガニスタンの北西部および西部に分布する、イラン語派に属するプシトゥーの言語では、Kitāb mi lwast「本(男性)を私は読んだ」、および Titāi mi lwast-ala「書付け(女性)を私は読んだ」から明らかなように、動詞が目的語と性の一致を行っているのがみられる。これらのイラン諸語は、基層の言語の影響によって、限定的にはあるが、能格構文を発達させたと、考えられている [KO 104].

§ 40 このように能格をもつ言語のばあいには、動詞述語が主語とではなく、目的語と文法的な一致を行うことが多いことのほかに、いくつかの共通の特徴がみられる。たとえば主語となる能格が、しばしば具格の機能(～によって)ももっていること、能動構文の目的語が、絶対格構文の主語と同じ形をしていることから、対格をもっていないと考えられること、などである。前にも述べたように、ウスラルはこれらのことから能格構文は目的語を主語とする受動構文であり、これらの言語には能動構文が欠けていると考えたという。

このような考えは、われわれが日常よく知っている印欧諸語の立場から能格構文を説明しようとするところに、その本質があったと思われる。印欧語族の言語は、多くのばあい主語と目的語の関係を軸にした、いわゆる対格(主格)言語 accusative (nominative) languages に属しており、英語やフランス語のように名詞、形容詞のようないわゆる名詞類 nominals が格変化を失ってしまった言語を除いては、一般に主格と対格は異なった形をもっている。また英語やフランス語にしても、主格と対格(目的格)の形式的な区別はないにせよ、この二つは統語論のレベルではまったく異なったはたらきと意味をもち、「異なった」格であるという意識ははっきりしている。この立場からみれば、自動詞の主語と他動詞の目的語とが同じ形をもつ(したがって同じはたらきをもつ)、同じ格であるというのは、とても信じられないことだったのである。

ウスラルと同じように能格構文受動説の立場をとった学者には、トルベツコイ¹⁰⁶、前にも述べたマールのほか、シュハルト (Schuchardt, Hugo 1842-1927)、ミュラー

(Müller, Friedrich 1834-1898) など、またインド・イラン学の分野ではガイガー (Geiger, Wilhelm 1856-1943)¹⁰⁷, ヘルンレ (Hoernle, August Frederick Rudolf 1841-1918)¹⁰⁸, グリーソン (Grierson, George Abraham 1851-1941)¹⁰⁹ などがいたといわれる [KO 11-13]。またアメリカではマヤ語学者のセラー (Seler, E.)¹¹⁰, アルゴンキン諸語の研究者ウーレンベック (Uhlenbeck, Christian Cornelius 1866-1951)¹¹¹ など、一時期この立場をとったといわれる [KO 14 17]。

たとえばマールは、古グルジア語の *spasalar-man křiba lařkar-i* 「軍司令官 (能格)・集めた・軍勢 (絶対格)」という文について、*-man* を通常の *-s* に終わる与格 (英語では間接目的の格にあたる) とは違った、特別の与格と考えた。そうすれば、「主格」 (すなわち絶対格) の *i* をもつ名詞は、意味的には目的語であるが、形の上では主語ということになる。そして彼は動詞のアオリストの接尾辞の *-e* と幹形成母音の *a, i* などを被動相を表すものだと、考えた。このように解釈すれば、この例文は「軍司令官にとって、軍勢が集められた」ということになる。しかし能格が与格とは違った格であること、動詞が「能動」の形であること、*i* と *a* が幹形成母音であり、*e* が一・二人称アオリストの語尾であって、どちらも能動・受動 (被動) といった相とは関係がないこと、などによって、マールのこの説明は、正しいものではなかったとされる [KO 12-13]。

§ 41 このような能格構文受動説というのは、能格構文を同じ言語の中にあってこれと相関関係をもっている絶対格構文と比較するのではなく、主格言語の受動構文と比較したために生じたものと思われる。一方、研究が進み、言語資料が増えてくるにつれて、能格構文のすべての意味上の主語を、通常道具、手段、行為者などを表す具格と考えることができないことが、明らかになってきた。またそれまでは絶対格を主格と考えてきたが、これが正しいものかどうかについても、疑いが生じてきた。たとえばフィルモア (Fillmore, Charles J. 1929-) は、この格が単に無徴的であるにすぎない、と主張していた [KO 15]¹¹²。これは絶対格が機能についてはまったく限定されていないということを、意味していた。

そうしているうちに、ラク語や前に述べたダルギン語のように、動詞述語が意味上の主語と意味上の目的語の両方と文法的な一致を行う、能格構文をもつ言語があることが、知られるようになった。対格言語では、受動構文の動詞述語は、主語、すなわち意味上の目的語と文法的な一致をするが、このことが、動詞述語が意味上の目的語と文法的な一致をすることの多い能格構文を、受動構文であると考え、一つの大きな根拠になっていた。だから動詞述語が、意味上の主語と意味上の目

的語の両方と文法的に一致することになれば、このような根拠は崩れてしまうことになる。さらにまた、たとえばプシトゥーの言語のように、現在形は主格構文をとり、過去形、あるいはアオリストのばあいには能格構文をとるというように、一つの言語の中に、主格構文と能格構文とがあり、たがいに使用される領域を分け合っている言語があることも、明らかになってきた。いわゆる split ergativity である¹¹³。

たとえばグルジア語では、現在時称では文は対格言語のタイプ、アオリストでは能格言語のタイプを示すという。

1) 現在時称

k'ac-i kal-s (ø-)k'l-av-s.

男(絶対格) 女(与格) 第二系列三人称・殺す・第一系列三人称＝「男が女を殺す。」

k'ac-i k'vd-eb-a.

男(絶対格) 死ぬ・第一系列三人称＝「男が死ぬ。」

ここでは意味上の自動詞でも他動詞でも、意味上の主語に立つのは絶対格であり、この意味で明らかに絶対格は主格と同等である。

2) アオリスト

k'ac-ma kal-i mo-(ø-)k'l-a.

男(能格) 女(絶対格) 時称接辞・第二系列三人称・殺す・第一系列三人称＝「男が女を殺した。」

k'ac-i mo-k'vd-a.

男(絶対格) 時称接辞・死ぬ・第一系列三人称＝「男が死んだ。」

ここでは意味上の他動詞の目的語と、意味上の自動詞の主語とが、ともに絶対格であり、意味上の他動詞の意味上の主語には、特別な能格が用いられている。したがってこれは能格言語のタイプを示している¹¹⁴。

このことから、能格構文を受動構文であると考えことはむずかしいという指摘が、されるようになった。レベジェフ(Лебедев, Константин Александрович 1920-)は、「(プシトゥーの言語の) žarəl жаръл <泣く>のような動詞が現在形で能動、過去形で受動の意味をもつとは思えない」といっている[KO 15]¹¹⁵。

フィンク(Finck, Franz Nikolaus 1867-1910)は能格構文を能動構文であると考えたといわれる[KO 17]¹¹⁶が、これも上に述べたような事情を背景にしてのことである

と、思われる。しかし能動という観念は、これと相関関係にある受動という観念があって、はじめて成り立つものである。能格言語のばあいには、「他動詞」を述語とする構文では、このような対立あるいは選択の可能性がない。このことからフィンの考えは、やはり対格言語のものの観方を、拭うことができなかったといえる。

このようないきさつを経て、やがてディールによっていわゆる中立説が唱えられるようになる[KO 17]¹¹⁷。これは能動、受動という、相の対立に関して、能格構文が中立である、言い換えれば、能格構文は能動でも受動でもない中立のものであるというのである。この中立説は、1930年代から40年代に唱えられ、この説をとった学者も多いといわれる。たとえばトロンベッティ (Trombetti, Alfredo 1866-1929)、マルティネ (Martinet, André 1908-) などのほか、ソヴエトではボカーレフ、プイホフスカヤ (Выховская, С.И.), メシチャニーノフ、カツネリソン、ヤコヴレフ、チコバヴァ (Чикобава, Арнольд Степанович 1898-1985) などがそうである[KO 19-22]。

以上述べたように、能格構文と絶対格構文は対格言語にみられる現象に較べてきわめて特殊なものであったから、研究者の注意は、どうしてもこれらの構文がもっている意味の問題に向けられることが多かった。そのため、能格言語のもっている格の体系の特殊性に関する研究は、ややもするとこの注意の外におかれる傾向があった。このような事情の中でも、すでに述べたように、たとえばウスラルは、チェチェン語、アヴァール語などの能格言語には対格が存在しないと主張した[KO 24-25]¹¹⁸。ポット (Pott, August Friedrich 1802-1887) は能格および絶対格の両方を、ともに主格と考えた[KO 25]¹¹⁹。これに対してミュラー、シュハルトなどは主格も対格も存在しないと考えた[KO 25]¹²⁰。またウーレンベックは「行為者」agens という格と「受容者」patients という格がある、と主張した[KO 25]¹²¹。このように学者たちの考えは必ずしも一致してはいなかったが、それにもかかわらず、これらの説は、能格言語には対格言語とはまったく違った格の体系が存在する、という認識に道を拓くものであったから、その意義はきわめて大きかったといえることができる。

クリモフによれば[KO 26]、このような経過を経て、ディールがはじめて「他動詞」の意味上の主語の形に「能格」ergative という名を与え¹²²、またタルピッツァ (Thalbitzer, William Carl 1873-1958) が「自動詞」の意味上の主語であり、「他動詞」の意味上の目的語でもある語の形に、「絶対格」absolute という名をつけた[KO 26]¹²³。こういうようにして、能格言語が対格言語とはまったく異なる格の体系をもっていることが、明らかになってきたのである。

§ 42 これまで述べてきたような内容的類型学の理念の形成にともなって、それ以前の研究も、新しい理念によって評価しなおされ、位置づけられ、そしてこの理念からさらに新しい研究が行われるようになる。しかし研究の比較的早い段階では、まず能格言語にみられる、さまざまな特殊な現象の発見と、その記述が必要であった。その上でこれらの現象の意味づけが考えられることになるのである。

ところでこの内容的類型学は、すでに述べたように、言語の現象を階層構造の中に位置づけるが、研究が進展していくなかで、考察の対象となる現象の中には、このような位置づけをすることができるもののほかに、一定の言語類型（たとえば能格言語）にしばしばみられるにもかかわらず、論理的には階層構造の中に位置づけることのできないものがあることが、わかってきた。これら二つの種類の現象のうち、前のものを「包含事象」implication、後のものを「随伴事象」frequentaliaと呼んで、これらを区別するようになった。この包含事象と随伴事象との区別は、あとになって類型間の関係の設定に、大きな理論的意味をもつことになる。

1930年代になって、能格言語の動詞組織に、二つの異なった系列の人称の指標があることが確かめられた。その一つの系列は主として意味上の他動詞の意味上の主語に対応し、もう一つの系列は、意味上の目的語、および意味上の自動詞の意味上の主語に対応するものである。このことによって、たとえばアブハズ語のように、名詞変化をもたず、したがって能格と絶対格のような形式がない言語も、能格言語に属するかどうか、確定できるようになった。このようにある言語が能格言語に属するかどうかという判断基準が明確になってくることによって、能格言語の内部にさらに下位区分を立てることが可能になった。すなわちメシチャニーノフにみられるように、能格言語は動詞型、名詞型、混合型の三つに分けられたのである。動詞型というのは、名詞そのものは変化しないが、能格と絶対格の要素が動詞に附加されるものであり、名詞型というのは、名詞の形によって能格と絶対格が表されるものである。また混合型というのは、名詞変化と動詞の要素の両方によって、能格構文と絶対格構文が区別されるものである [KTI 49]¹²⁴ (§ 54, 55 参照)。

§ 43 語彙のレベルでまず問題になるのは、能格構文の述語になる動詞と絶対格構文の述語になる動詞の区別である。前者はおおよそわれわれが「他動詞」といつているものに、また後者は「自動詞」といつているものにあたると考えられ、それぞれ「他動詞」、「自動詞」と呼ばれていた。しかし能格言語と対格言語との違いが、言語の構成を支配している「類型学的な深層構造」の違いに基づいているとすれば、対格言語の文法カテゴリーである「他動詞」、「自動詞」というようなものを機械的にあてはめることが、妥当なものであるかどうかは、問題になってくる。クリモフは言語の個々の類型の底にある「深層構造」は、すべての類型に共通する、普通用いられている意味での「深層構造」よりも浅いところにある、と考えているようである [KTA 55]。したがってこれは「類型学的な深層構造」といってもよいであろう。フランスの学者デュメジル (Dumézil, Georges Edmond Paul 1898-1986) が、能格言語における「自動詞」と「他動詞」という名前は仮のものにすぎない、と述べているのは、このためであろう [KTI 50]¹²⁵。

このことは、能格言語に属する言語で、語彙的意義からみれば論理的に他動詞と考えなければならない動詞のあるグループが、しばしば「自動詞」のクラスに属していることによって、裏づけられる。さきに述べたヤコヴレフは、アディゲ諸語において対象の表面にしか及ばない行為を表す動詞が「自動詞」のクラスに属していることを指摘し、そのようなものとして「打つ」、「突く」、「刺す」、「つねる」、「口づける」、「咬む」、「はじく」、「待つ」などの意味をもつ動詞を挙げているという [KTI 50]¹²⁶。

さらにコーカサス諸語の研究が進むなかで、いわゆる「感覚動詞」*verba sentiendi* が特殊な構文をとることが、確認された。これは後になって「情緒動詞」*verba affectuum* と呼ばれるようになった動詞のグループである。一般に能格言語では動詞に人称を示す接頭辞が附加されるばあいには、意味上の目的語を表すものが意味上の主語を表すものよりも前に立つ傾向があり、もし接頭辞と接尾辞の両方を用いるタイプの言語であれば、接頭辞は意味上の目的語を、接尾辞は意味上の主語を表すことが多いという [KO 102]¹²⁷。このように、能格言語では、動詞の主な接辞は主語とではなく、目的語と文法的に一致することが多い。これを「対象活用」*objective conjugation* というが、さきに述べた情緒構文は、これとは逆に、絶対格を指す動詞の接辞が、接尾辞の位置、すなわち意味上の主語の位置に立ち、能格系列の指標が接頭辞の位置、すなわち意味上の目的語 (意味上の間接目的語) の位置に立つという点で、普通の能格構文とは意味上の主語と目的語との接辞の位置が逆になっている。このためアメリカの言語学では、情緒構文は「他動詞」を

述語とする構文の一種で倒置をとともなうものと考えられているという。たとえば、北アメリカのアルゴンキン語族に属するオジブワ Ojibwa の言語では、「他動詞構文」に属する *ke-nōntō-n*「おまえを・聞く・私は」(私はおまえのことを聞く)¹²⁸ に対して、「情緒構文」ではたとえば *ne-nōntuw-ā*「私に・聞こえる・彼が」(彼のいうことが私に聞こえる)¹²⁹, *ke-nōntuw-ā*「おまえに・聞こえる・彼が」, *u-nōntuw-ā*「彼に・聞こえる・彼が」などのようになるという [KO 102].

このような情緒構文をつくる「情緒動詞」としては、たとえば「見る」, 「聞く」のほか, 「知る」, 「覚えている」, 「忘れる」, 「気に入る」, 「愛する」, 「欲する」, 「必要とする」, 「憎む」, 「恐れる」, 「そねむ」, 「憐れむ」, 「笑う」, 「考える」, 「見える」, 「似合う」などがあり, また言語によってはさらに「泣く」, 「叱る」などもこれに属するという [KO 71]. このような情緒構文には, たとえばいくつかの北アメリカのインディアン言語, パプア諸語のように, 動詞が特殊な系列の人称接辞をとるもの, あるいはナフ・ダゲスタン諸語のように, 名詞が与格, または場合によっては特別な「情緒格」の形をとるものもあるという。

ここで情緒動詞として挙げられている語彙をみれば, 能格言語だけでなく, 対格言語でも, 特殊な取り扱いを受けていた痕跡がみられるように思われる。たとえば英語では *see* と *hear* は「感覚動詞」として, 受動形をつくる場合に, ほかの動詞と違った扱いを受けている。ギリシア語の *οἶδα*「知っている」, ラテン語の *memini*「覚えている」, *novi*「知っている」, *odi*「憎む」などは現在形にあたる意味を完了形で表している。いわゆる *perfectiva tantum* である。またラテン語の *videor*「見える」, *obliviscor*「忘れる」, *meditor*「考える」, *opinor*「考える」, *arbitror*「判断する」, ギリシア語の *οἶσμαι*「思う」, *ἐν-νοέομαι*「考える」, *δέρκομαι*「見る」, *βούλομαι*「欲する」, *δέομαι*「必要とする」, *ἐράμαι*「愛する」, *φοβέομαι*「恐れる」などは, 受動の形をしているが意味は能動の意味をもっている, いわゆる形式所相動詞 *deponentia* に属している。

このような動詞が存在していることは, 能格言語の動詞を単純に自動詞と他動詞というカテゴリーで割り切ってしまうのが, 適当でないことを示すものであると思われる。

§ 44 グフマンは印欧語の古層の動詞の問題と関連して, これらの *perfectiva tantum* と形式所相動詞の問題を取り上げ, かなり詳細に論じている [GI 181-189]. とくにギリシア語に多くみられる形式所相動詞に関していえば, これらが中動相の形しかもたないことから, 相の対立に参加していないことは明らかであるが,

それと同時に注目されるのは、これらの動詞が、かなり閉じた意味の範囲をもっていることであるという。デルブリュック (Delbrück, Berthold 1842-1922) はホメーロスの言語においては中動相の形しかもたなかったもののうち、のちになって使役動詞の構成をもって能動相をつくったものが多くあるとして、例を挙げているという¹³⁰。たとえば ἀγάλλομαι「喜ぶ、誇りとする」は、ピンダロス以降能動相の形 ἀγάλλω「讃える」の形でも現れるようになった。θέρομαι「暖まる」の能動相の形 θέρω「暖める」は後期のもので、また使用が限られている。μαίνομαι「激怒する、猛る」と通常アオリストで現れる能動相 ἐμηναι「激怒させる、狂わせる」との関係も同じである、など。同じように、ヒッタイト語でも、たとえば中動相の形を取る ṡar-「燃える」、tarra-「できる」が使役の接辞 -nu- をとって ṡar-nu-「焼く、燃やす」、tarra-nu-「威力あるものにする」のように、他動詞になるという。ここから彼女は印欧語の古層においては、この種の動詞の種類はかなり多かったのではないかという [GI 180]。

これらの形式所相動詞の意義は、彼女によれば、

- 1) 「生物のみが主語になりうるプロセスを示す動詞が、疑いもなく優勢を示すこと」。「サフチェンコ (Савченко, Алексей Нилович, 1907-1988) がこれに属するとして挙げている、86 の動詞のうち、80」がこの意味をもっているという。たとえば、ἡμῖν「座っている」、οἴχομαι「立ち去る」、φέβομαι「逃げ去る」、μάχομαι「戦う」、ἔρυνναι「得る、勝ち取る」、δύναμαι「できる」、γίγνομαι「生まれる」のようなものである。彼女がこの例外として挙げているものは、χεῖμαι「横たわっている」、τέρσομαι「乾く」、πίλναμαι「触る、近づく」、ῥώομαι「急ぐ」、ῥερέθομαι「翻る」のほか、ホメーロス以外では、κρέμαμαι「垂れる」、σήπομαι「腐る」、θέρομαι「暖まる」があるという。
- 2) 「このクラスの動詞の中に、情緒、感覚、意志という、まとまった(意味をもつ)動詞」があり、ホメーロスの言語の中だけでも 36 個の動詞が認められるという。たとえば、χῶομαι「怒る」、σκύζομαι「腹をたてる」、μαίνομαι「激怒する」、ὀδύρομαι「嘆く」、ἄχρυνναι「悲しむ」、ἐλδομαι「望む」、βούλομαι「欲する」、αἰδομαι「恥じる」、ἄζομαι「恐れる」、ὀπίζομαι「恐れる」、γάννυμαι「喜ぶ」、ἐραμαι「愛する」などがあるという [GI 182-183]。

これらも明らかに、生物に特有な「行為」を示すものといえる。

- 3) その他、サンスクリットやヒッタイト語のように、形式所相動詞をもっている言語においては、ギリシア語のように数が多くはないが、たとえばサンスクリットのばあいには、主語として生物のみが想定される動詞のグループがここに属するとい

う。たとえば, *ihatē*「望む」, *kīpatē*「激しく望む」, *módatē*「喜ぶ」, *óhatē*「注意を向ける」, *bhuñktē*「楽しむ」, *smáyatē*「ほほえむ」, *svájatē*「抱く」, *lábhatē*「つかむ」, *tváratē*「急ぐ」, *áste*「座っている」, *várdhatē*「成長する」などである [GI 184]。

一方, サンスクリットは, 明らかに後代の構成にかかると思われる, 接辞 *-ya-* によってつくられ, 中動相あるいは能動相のいずれか, またはその両方によって変化するここのできる形によって, 部分的には代替されたといわれる。たとえば, *kúpyati/tē*「怒る」, *yúdhyati/tē*「戦う」, *háryati/tē*「望む, 楽しむ」, *svídyati/tē*「汗をかく」, *gāyati/tē*「歌う」等がこれに属するという [GI 184]。

§ 45 能格言語のばあい, 能格構文の意味上の主語と動詞述語の位置は比較的自由であるが, 文章の中で最も離れた位置をとる傾向があるという。たとえばグルギン語では, *nuni dag bugasi GjalGjali daqūal mura derdira* (нуни даг бугаси къялкъяли дахъал мура дердира)「私は(主語)・昨日・鋭い・鎌で・多くの・干し草を・刈った(述語)」となる [KO 79-80]¹³¹。これに対してこの例にもみられるように, 能格構文の意味上の直接目的語および情緒構文の意味上の間接目的語は, 動詞に密着する傾向があるといわれる。これはこれらの目的語が動詞と結合してシンタグマをつくっていることを示している。また間接目的語があるときは, これは直接目的語よりも前にくる傾向があるともいわれる。したがって能格言語の典型的な文型は *S-(O')-O-V* と *S-V* の形をもつことになる¹³²。

次にこれらの能格言語では, イントネーションの境界が意味上の主語のグループと, 意味上の目的語を含む述語動詞のグループの間にくるという傾向があることが, 指摘される。

さらに第三には, 名詞の変化をもつ能格言語では, 能格構文の意味上の主語が有徴的であり, 無徴的な意味上の目的語と対立することが, 指摘されている [KO 80]。

これらのことから, 能格言語では, 能格構文のばあい, 意味上の目的語と述語動詞の結合が, 意味上の主語と述語動詞の結合よりも強いと考えられてくる。すなわち意味上の目的語と述語動詞が第一次のシンタグマをつくり, それが二次的に意味上の主語と結合して第二次のシンタグマをつくる, と考えられるのである。これに対して絶対格構文のばあいには, 述語動詞は意味上の目的語をもたないから, 意味上の主語と, 第一次のシンタグマをつくるよりほかはないことになる。このように考えれば, 能格言語のばあい, 能格構文の意味上の目的語と, 絶対格

構文の意味上の主語とが同じ形をもち、しかもともに無徴的であること、また能格構文の述語動詞が意味上の目的語と文法的に一致する対象活用を行い、絶対格構文では述語動詞が意味上の主語と文法的に一致を行うことが、すべて矛盾なく説明できることになる。

そう考えれば、これらの現象は、能格言語の本質とかかわりをもつ、包含事象であるということになるであろう。トルベツコイは、対格言語のばあいには意味上の目的語(すなわち対格補語)が「規定的」シンタグマ *syntagme déterminatif* であり、行為者+動詞が「述語的」シンタグマ *syntagme prédicatif* であるが、能格言語のばあいには、規定的シンタグマであるのは行為者であり、目的語+動詞が述語的シンタグマであると述べている。ここで述語的シンタグマというのは、文の成分が集まって一つの述語をつくることを意味していると思われるから、対格言語の場合には主語+述語で述語的シンタグマをつくり、これを意味的に修飾する形で目的語が附加されるのに対し、能格言語においては、目的語+動詞が、述語的シンタグマをつくり、この全体に意味的な修飾を与える形で能格に立つ意味上の主語が附加されることになる。

したがって、トルベツコイの説明は、上に述べたような事情を正しくいいあてたものであるということができる [KO 90-91]¹³³。そうすれば対格言語では「規定的シンタグマ」である対格があるかどうかによって、動詞が他動詞と自動詞に分けられるが、能格言語では能格が規定的シンタグマであるから、能格があるかどうかによっていわゆる「他動詞」と「自動詞」 (§43 参照。この内容についてはのちに述べる) が区別されることになる。ここから能格構文は二肢文であり、絶対格構文は一肢文であるという主張も現れてきた。

§46 これまで述べてきたような議論は、能格言語の述語動詞が、必ずしも自動詞と他動詞というカテゴリーによって分類できるようなものではないことを示唆している(とくに §43 参照)。対格言語のばあい、すでに述べたように第一次のシンタグマが意味上の主語と述語からなるとすれば、この第一次のシンタグマがさらに別の項である対格によって規定され、第二次のシンタグマをつくるかどうかによって、述語動詞が他動詞であるか自動詞であるかの区別がされる。これに対して能格言語のばあいには、絶対格に立つ名詞と述語動詞とによってつくられる第一次のシンタグマが、能格に立って行為者を表す名詞をとまうかどうかによって、述語が分類されるのである。

もしそうであるならば、能格言語のばあいには、自動、他動という概念は語彙

的意義にかかわるものであったとしても、文法的なものであるとは考えられなくなってくる。言い換えれば、自動詞、他動詞というカテゴリーは、対格言語の事実のみから判断すれば、言語にとって普遍的なものであると考えられるし、またそう考えられてきたが、これは決して普遍的なものではなく、実は対格言語の包含事象にすぎないものであったということになるであろう。

このように考えれば、能格言語のばあい、自動詞、他動詞という用語を用いるのは適当でないということになる。したがってここではこれまでいく人かの研究者が用いていた「能格動詞」ergative verbs と「絶対動詞」absolute verbs という名を使用するのが、適当であるように思われる。これらのことから「主格」、「対格」というような格の体系も、実は対格言語の包含事象であったことが、明らかになる。もしもそうとすれば、能格言語と対格言語とでは、格の体系に原理的な相違があるに違いない、ということにもなるであろう。

クリモフは従来能格言語の動詞の二つの種類は他動詞と自動詞と名づけられていたが、これは結局対格言語のカテゴリーを敷衍したものにすぎず、正確ではなかったとして [KP 95], 前者を agentive, 後者を factitive と呼ぶことを提案している [KP 102]。その理由として彼が挙げているのは、第一に多くの意味上の他動詞が、文法的な「他動詞」ではなくて、特殊な「可変動詞」(labile verbs, лабильные глаголы)として存在していることを挙げている。これは同一の動詞が、意味上の他動詞としても、また自動詞としても用いられうるものである。たとえばクリモフはマゴメドベコヴァ (Магомедбекова, З.М.) の論文を引用して、アヴァール語では、

vacas istakan bekana「兄弟が(能格)・コップを(絶対格)・壊した」
istakan bekana「コップが(絶対格)・壊れた」

のようになると述べている [KP 100]¹³⁴。

クリモフによれば、スニク (Суник, Орест Петрович 1912-1988) はこの種の動詞に関して次のように述べているという。

専門家の結論によれば、能格構文の他動詞は能動・受動の特徴をもっていない。それは相の分化に関して中立であるか、もしくは無関係である。周知のように、この結論も、対象とする能格構文のばあい基本的なものである。いまいったことにさらに、能格構文の多くの研究者が指摘しているように、能格構文の動詞は動詞的なものではなく、名詞的なものの多くを自己のうちに蔵しているとつけ加えるならば、このような<動詞>の特殊性と、その<他動性>の特殊性は、きわめて異なった光を浴びてわれわれの前に現れるであろう。このばあいにもいくらかの(論理的)一貫

性を示して、能格構文の動詞の形を他動性・自動性というカテゴリーに関して中立であると認めてはならないであろうか。

この能格構文の理論を支持するものがこのことを認めるのを妨げるのは、おそらく能格構文をもつすべての言語に、述語に自動詞をもつ、主格(あるいは絶対格)構文も存在することであろう。(しかし)このような動詞を自動詞と名づけるとすれば、対格も相ももたないにもかかわらず、能格構文の動詞を他動詞と呼ばねばならなくなる[КР 101]¹³⁵。

§ 47 第二に、言語によってその数は一定しないが、一群の意味上の他動詞が、形態的あるいは統語的に「自動詞」として用いられていることである。これに属するものには、たとえば、

- 1) 「打つ」、「叩く」、「突く」、「つかむ」、「引っ張る」、「抓る」、「引っかく」、「咬む」、「キスする」、「舐める」など。
- 2) 「頼む」、「待つ」、「呼ぶ」、「追いかける」、「見送る」、「罵る」など。

これとは逆に意味的には自動詞であるのに、構文としては他動詞のように振舞う一群の動詞があるという。アブハズ・アディゲ諸語に属するカバルディン語のばあい、たとえば「直接」目的語をもたないにもかかわらず、意味上の主語は能格に立つ *xithaləhəm* (хитхəлэхьым) (溺れる), *q'azəhəm* (къəжыхьым) (走る), *q'ak'w'hən* (къəк'ухьын) (歩く) など、またダゲスタン諸語に属するレズギ語では「跳ぶ」、「走る」、「疾走する」などが, *ada kkaɖaɖna* (ада хкаɖарна) 「彼が(能格)・跳んだ」, *ada zverna* (ада зверна) 「彼が(能格)・走った」, *ada čukurna* (ада чукурна) 「彼が(能格)・疾走した」のように用いられるという[КР 97-98]¹³⁶。

第三に意味上の他動詞から派生する使役動詞が、使役の対象と与格におく現象の存在である。たとえば、

アディゲ語: *ʔiʔi-m kʔalə-m čəmi-r geɖaʃčə*
(лʔьжʔы-м кʔалə-м чəмы-р геɖаʃчə)
「老人は(能格)・若者に(与格)・牛を(絶対格)・運ばせる」

アヴァール語: *di-ca dos-da t'ex ts'alizabuna*
(ди-ца дос-да т'ехъ ц'ализабуна)
「私は(能格)・彼に(与格)・本を(絶対格)・読ませた」[КР 98]

明らかなように、これらの例は、この種の言語において使役動詞が形式的には「他動詞」ではないことを表している。

§ 48 すでに述べたように、能格言語には能動と受動というような相の対立は、

一般にはみられない [KO 107-108]¹³⁷。このことを説明するために、動詞述語が名詞に起源をもつためであるという研究者がいる。この名詞説の根拠となっているのは、いま述べた相の対立がないということのほかに、能格構文の意味上の主語が属格であること、および動詞接辞が所有代名詞と同じであること、などが挙げられている。すなわちこれらの研究者は、文の原型としてたとえば his love のようなものを考えているのである。

第一の点については、たとえばグリーンランド・エスキモーの言語にみられる -p のように、いくつかの言語の一般斜格 (すなわち主語、目的語以外の関係を一般的に表す格) を属格と誤認している [KO 108]¹³⁸ こと、あるいはイベリア・コーカサス語族のダゲスタン語派に属しているラク語のように、能格が属格のはたらきも合わせもっているが、これは実はナフ・ダゲスタン共通祖語の能格・具格形 *-d(i) に遡るものである、というように、属格の機能が本来のものでなかったこと、属格が形成されるのは歴史的に能格よりも新しいこと [KO 108]、などの反論があるという。もし his love のように、属格+名詞がこの種の能格構文の原型であるとすれば、能格言語は必ず属格をもっていなければならないが、一般的に言えば、属格があるというのは決して能格言語に特徴的なことではなく、したがって属格をもたない言語も多くみられるのであり、またそのばあい、所有を表す接辞的要素が属格の働きの大部分を受けもっている、というのである [KO 108-109, 189-190, KP 46] (註 98 参照)。

第二の点、すなわち動詞の接辞が所有代名詞と同じであるということについては、これらの所有代名詞と同じ形の接辞は、能格動詞ではなく、絶対動詞にしかつかない、という反論がある [KO 109]¹³⁹。すなわち、たとえば father + (his-love + son) すなわち father's + (love + son) というように、能格が属格のはたらきをもって動詞+絶対格からなるシンタグマを修飾している、ということを前提にしていると考えられるから、所有代名詞が絶対動詞にしかつかないとすれば、矛盾を生じる。絶対動詞のばあいしか、文法的一致ができず、したがって意味上の主語を示すことができないことになるからである。またたとえば北アメリカの多くのインディアン言語、オーストラリアのアボリジンの言語、エスキモー・アレウト諸語、いくつかのパプアの言語などにみられるように、動詞と名詞がまだ分化していなかった時代の痕跡を残しているものもあることは確かであるといわれるが、これはあくまで未分化だというだけであって、このことは名詞から動詞が生じたということを証明することにはならないであろう。

クリモフは以上のような議論を、カツネリソンの次の言葉を引用してしめくくっ

ている。すなわち、

ミューラーやフィンの時代に遡るこのような解釈は、最も古い時代の動詞を行為名詞と同じと考えて……動詞述語と主語との結合を古い行為名詞と所有形の主語との結合に遡るとした。しかし動詞の祖形に抽象的な行為名詞の機能を所属させることは、われわれには典型的なヒュステロン・プロテロン(反理倒置法)であると思われる。記録された多くの言語の歴史は、行為名詞が動詞からの派生として相対的にあ
とになって生じたものであることを示している [KO 110]¹⁴⁰。

§ 49 これに対し、すでに述べたように対格言語のばあい、主語と述語動詞が第一次のシンタグマをつくり、他動詞の場合にはこれがさらに対格に立つ目的語と結びついて第二次のシンタグマをつくる、と考えれば、もし対格を主格に転換しても、新しい主格と述語とが結合するだけで、文の要素とシンタグマの関係には変化がない。

たとえば、

человек-убил	—	оленья
人が殺した	—	鹿を
олень — убит	—	(человеком)
鹿が殺された	—	人によって

この転換を行うことが可能なのは、主格が必ずしも行為者を表すわけではないからであり、そのばあいには述語動詞の形によって変換が行われたことが示される。述語動詞に受動形が用いられるのは、このためである。

これに対して能格言語あるいは後に述べる活格言語のばあいには、意味上の目的語と意味上の述語他動詞とが第一次のシンタグマをつくり、意味上の主語はこのシンタグマと結んで第二次のシンタグマをつくると考えられる。能格言語のばあい、能格動詞は対格言語の他動詞と、また絶対動詞は自動詞と意味の上では重なることが多いが、行為に積極的に関与する(主として他動詞の)対象が能格形に立つのに対して、積極的には関与しない(主として自動詞および状態動詞の)対象は、つねに絶対格に立つことになっていた。したがって「鹿を殺す」ばあいでも、また「鹿が殺される」、あるいはむしろ「鹿が死ぬ」ばあいでも、「鹿」は絶対格であって、能格になることはできない。また多くの能格言語において能格は具格のはたらきをもっているといわれるが、そのばあいにはなおさら能格を別の格に転換する可能性はなくなる [KO 106]¹⁴¹。

のちに述べる活格言語の場合にも、シンタグラムの関係は能格言語のばあいと同じであるが、行為の主体になる生物を表す対象が活格に立つ活格構文に用いられる活格動詞は、能格言語とは違って意味上の他動詞ではなく、自動詞も含めた生物が行う行為を表す動詞である。したがってここには自動詞と他動詞という対立ではなく、行為動詞と状態動詞という対立が文法化されている。また活格言語では、能格言語の場合と同じように、意味上の他動詞の意味上の目的語と、意味上の自動詞の意味上の主語とは、同じ絶対格に立つ。そうすれば「鹿を殺す」と「鹿が死ぬ」のあいだには、格に関して表現の違いが存在しないことになる。したがってこのばあいにも、次節で述べる求心相と遠心相の対立などを別にすれば、能動と受動という相の対立はないということになる。

以上のことから、能動と受動という相の対立は、実は対格言語の包含事象に外ならないことがわかってくる [KO 105]¹⁴²。最近では「能格言語」の中にも、受動相が存在しているという見解がしばしばみられる。これを対格言語への移行期にみられる随件事象とみるのか、あるいはもっとほかの見方があるのかについては、いまのところ筆者には判断できない。

§ 50 以上に述べたように、能動・受動という相の対立が、能格言語あるいは活格言語に本来なかったとしても、このことから文法的なカテゴリーとしての「相」の対立そのものがまったくなかったと結論することはできないことが、やがて明らかになってきた。対格言語における能動相と受動相の表現は、その基底にある現実とのかかわりにおいては異なっていない。両方とも、深層構造においては同じと考えられる。この同じ深層構造が言語の具体的な表現のレベル、つまり表層構造において、違った形をとるとみられる。したがって相の対立というのは、主語・述語・目的語の関係における深層構造と表層構造との関係であると考えられる。

この関係に関して同一の深層構造が、異なる表層構造をとるとき、相の対立が生じる。対格言語における、表層構造としての能動相と受動相も、動詞が表現する述語が、意味上の主語によって示される対象、および意味上の目的語によって示される対象とどうかわっているかという、関係の仕方にその違いがあると考えられる。もし対格言語以外の言語類型において、「同一の」主語・述語・目的語の関係に関して何らかの表層構造の対立が生じるとすれば、これもまた「相」である。このばあいにも、この「相」は文法的なカテゴリーであるから、なにかの形によって表されていないといけない。

たとえば北アメリカのネズ・パース語では、次のような人称接辞がみられるという [MG 103 & seq.].

一人称	ø-	
二人称	ä-	
三人称	hi-	行為者
	a-	被行為者
	pa-	三人称から三人称への行為

このほか、

-m	二人称から一人称への行為

また自動詞の主語は絶対格に立ち、他動詞の主語は -m をとる所有格であるという。

たとえば ä a-npaysa 「おまえは 彼を・とる」、hi-npaysa 「彼は・(私を)とる」、ä hi-npaysa 「おまえを 彼は・とる」のようになる。この npaysa という形は、実は npisa という形と相関関係にあり、npisa が対象の所属が不定であるときに用いられるのに対して、npaysa の方は、所属が明確に定まっているときに用いられるという。

たとえば ä sikäm-na a-npisa 「おまえは 馬を・不定 それを・とる」= 「おまえは馬をとる」というばあい、-na は対象が不定であることを示しており、a- は三人称の被行為者を表すから、「(不定の)馬」が目的語になる。一方 ä sikäm a-npaysa のばあいには、動詞の語幹からこれが所属の決まっている対象を表すことがわかり、また「馬」も不定の -na をもっていない。しかし接辞の a- はこのばあいには三人称の被行為者である「馬」を指しているわけではない。もしそうならば、「馬」は特定できないことになるからである。つまりこの接辞は、「馬」がだれのものであるかを示すのである。その結果この文は「おまえは 馬 彼の・とる」= 「おまえは彼の馬をとる」ということになる。すなわちここでは「不定動詞語幹」npisa が「定動詞語幹」npaysa に変えられると同時に、接辞の意味も変わったのである。このばあい二つの語幹の違いは動詞述語と、意味上の主語または目的語とのかかわり方の違いに結びついているから、これまで述べてきた相の対立であると考えることができる。

§ 51 これとほとんど同じ現象がネネツ語にもみられるという [MG 110 & seq.]. この言語では人称接辞に二系列(再帰形を含めると三系列)があり、第一の系列が自動詞の主語を示すものであるのに対し、第二の、所有変化と呼ばれているものは、

他動詞の主語になる行為者を示すという、

	I	II
一人称	-m	-v
二人称	-n	-r
三人称	-ø	-da

このばあい、たとえば *ty-m khada-m* 「鹿を 殺した・私は」の「鹿」*ty* の目的語の形 *ty-m* は、その所属が無規定であり、動詞は例えば *njudja-m* 「小さい・私は」のような「自動詞」と同じ形をもっている。これに対してもし「鹿」の持ち主がはっきりしているばあいには、たとえば *tē-v khada-v* 「鹿を・私の 殺した・私が」、*tē-v khada-r* 「鹿を・私の 殺した・おまえが」のように、第二系列の接辞をとる。したがってこのばあいにも、相の対立であるということができる。

能格言語の随件事象として、同じ動詞が能格構文にも、また絶対格構文にも用いられ、能格構文のばあいには意味上の他動詞の、また絶対格構文の中では意味上の自動詞の意味をもつものがあるという [KO 118-119]。もちろん共通なのは語幹の部分であって、接辞その他の変化はそれぞれ能格動詞または絶対動詞のものをとる。たとえばラク語の *bivē'an* という動詞は、能格構文の中では「殺す」の意味を、絶対格構文の中では「死ぬ」の意味をとる。この「可変動詞」¹⁴³は意義的に未分化なのであって、能格言語以前の言語状態、すなわち活格言語の状態が、残っているものであると考えられる。これが能格言語の随件事象なのは、そのためである (71 頁参照)。したがってたとえばアディゲ語の *redaktori-m statLja-r e-tx-i* 「編集者 (能格) が論説 (絶対格) を書く」に対する絶対格構文 *redaktor ma-tx-ə* 「編集者 (絶対格) が書く」は対格言語の *The editor writes an article.* と *The editor writes.* に平行するもののようにもみえるが、絶対格構文は文法的カテゴリーとして、行為を編集者の状態として示すものであるという点で、対格言語のばあいとは違うと考えられる。

一方これらの「可変動詞」はこれをもっている多くの言語において意味的に共通性をもっていることが知られている。たとえば「種を播く」、「耕す」、「牧畜をする」、「編む」、「織る」、「紡ぐ」、「裁つ」、「縫う」、「束ねる」、「刈る」、「除草する」、「搗く」などである。ヤコヴレフ、アシハマフ (Ашхамф, Н.Ф.) などはこれを古代の農業および家庭労働に関するものであるとしている [KO 122]¹⁴⁴。これらもまた相の対立であるということができよう。

活格言語に属しているアタパスカン諸語では、すべての動詞がゼロクラス、1-クラス、D-クラス、および1-クラスの四クラスに分けられるという。第二のクラス

に属している動詞は遠心的な行為を、また第三および第四のクラスに属している動詞は非遠心的な行為を示すという。遠心的というのは、たとえば「焼く」のように行為が行為主体の外に及ぼされるものであり、求心的というのは、たとえば「燃える」のように、行為が行為主体の内部に限定されるものである。たとえば、アタパスカン語族に属するナヴァホの言語の *yí-bééz* 「未完了・沸く」に対する *yí-lbééz* 「未完了・遠心・沸く」=「沸かす」、サーシー Sarcee の *yi-s-í* 「完了・私・見る」=「私は(一を)見た」に対する *yi-s-t-í* 「完了・私・非遠心・見る」=「私は見られた」のようなばあいである [KTA 140-144]。グフマンも印欧諸語、たとえばギリシア語およびサンスクリットを例にとって、能動と中動の対立が、本来遠心と求心の対立であり、中動相に時としてみられる受動の意味は、もともと偶発的なものであったとしている [GI 47-56]¹⁴⁵。

§ 52 このような相の違いとして、日本、欧米においてしばしば言及されるものに、さきにちょっと触れた逆受身 *antipassive* がある。シュマルスティーク (Schmalstieg, William R. 1929-) によれば、この用語はシカゴ大学のマイケル・シルヴァースタイン (Silverstein, Michael) によって導入されたとのことであるが、これは能格構文の動詞から派生した有徴的な形式を述語動詞とし、能格に立つ意味上の主語を絶対格に、また絶対格に立つ意味上の目的語を斜格 (典型的なものとしては与格または具格) におく、というものである¹⁴⁶。たとえばコムリーが、ディクソンから引用したディルバル語の例によれば、

a. Balam wud^yu baggul yara-ŋgu d^yagga-n^yu.

「絶対格 果物・絶対格 男性・能格 男・能格 食べる・時称」=「男が果物を食べる。」

に対して、

b. Bayi yara bagum wud^yu-gu d^yagga-mari-n^yu.

「男性・絶対格 男・絶対格 与格 果物・与格 食べる・再帰・時称」=「男が果物を食べる。」

のようになるという¹⁴⁷。

これは対格言語の能動構文に対する受動構文と同じように、能格構文に対して有徴的である。一方少なくとも外見的には能格構文は対格言語の受動構文に似ているといえることができる。*antipassive* という用語は、このような事情を勘案した結果であると思われる。機能的にはすでに触れたように、いわゆるピボットとの関連

で複文をつくる際にこの形が必要とされる外、行為の未完了を表したり、あるいは逆に完了を表したりするという。コムリーの引用する例によれば、たとえばアドイゲ語のブジェドゥグ方言では、逆受身は行為の未完了や「絶えず行為を行う」意味等を示し、オーストラリアのカラ・ラガウ・ラングス Kala Lagau Langgus では逆に完全な遂行を示すという¹⁴⁸。たとえば、

c. Ngath ngaungu ithab koei puil pathamadhin.

「私・能格 私自身 これら 大きい 木・絶対格・複数 切る・複数・過去」
＝「私はこれらの大きな木を切った。」

d. Ngai ngaungu ithab koei puin pathaidhin.

「私・絶対格 私自身 これら 大きい木・斜格 切る・過去」
＝「私はこれらの大きな木を全部切った。」

能格あるいは活格言語類型の場合、さきに述べたように意味上の主語と意味上の述語自動詞、あるいは意味上の目的語と意味上の述語他動詞が第一次のシンタグマをつくり、しかもこのシンタグマの名詞成分はともに同じ絶対格に立ち、行為者を表す能格や活格に立つことができないから、このような「逆受身」は機能的には受動構文をつくることはできない。したがってこの構文は、言語によってその機能はさまざまであるにしても、意味的な他動詞述語を意味的な自動詞述語に転換するところにその共通の本質があるとみなればなるまい。山本秀樹は、「逆受身は一種の非他動詞化である。通常他動詞の目的語が斜格要素になり、そのことによって他動詞の主語が自動詞の主語として現れる」と述べている¹⁴⁹。そうすればこれはクリモフのいう、遠心相と求心相との対立であるということができよう。もしそうとすれば、この形式は能格言語というよりは、活格言語の包含事象であるとみるのが、無理のないところであろうと思われる。すなわち、

人が・能/活格 — 鹿が/を・絶対格 殺した

人が/を・絶対格 殺生した — 鹿について・斜格

以上述べてきたように、能格言語あるいはあとに述べる活格言語において、受動相は理論的にありえないと思われるにもかかわらず、能格言語に受動相が存在することが、欧米並びに日本の研究者によって指摘されるようになってきた。たとえばコムリーは、「……多くの言語が能動の能格に対立する受動構文をもっている」¹⁵⁰として、バスク語の次のような例を挙げている。

Haurra igorria da.

「子ども・絶対格 送る・受動 助動詞・三人称単数」＝「子どもが送られた。」

このような能格言語の受動構文については、詳らかにしないが、クリモフのいうように能格言語がやがて対格言語に移行するとすれば、あるいは対格言語へ移行する前段階になって生じたものかもしれない。これについてはのちにみるように、研究者の間に意見の相違があるように思われる。

§ 53 能格言語の随伴事象と考えられるものには、このほか同じ意味をもつ動詞が、これと結びつく名詞の種類によって、違った形をとるばあいがある。たとえばナフ・ダゲスタン諸語のバツビー語では、「横たわる」という動詞は男性に関しては w-išar, 動物や植物に関するときには b-išar となるが、それ以外のときには lepčar という、まったく違った語根を使用するという。

たとえば,

w-išar	「(男が) 横たわる」
b-išar	「(動植物が) 横たわる」
lepčar	「(それ以外のものが) 横たわる」
w-ožar	「(男が) 倒れる」
b-ožar	「(動植物が) 倒れる」
tasbalar	「(それ以外のものが) 倒れる」

能格動詞のばあいには、一般に意味上の目的語と文法的な一致を行うから、語根の選択も意味上の目的語が何を指すかによって定まることになる。

すなわち,

(d)abčar	「(人)を 識る」
xa'ar および qetar	「(もの)を 識る」

ダゲスタン諸語のレズギ諸語に属しているウディン語のばあいにも、同じような現象がみられるという。

たとえば,

čalxesun	「(人)を 識る」
ababaksun	「(もの)を 識る」

ブルシャスキ語でも、同じように、生物であるか無生物であるかによって異なる動詞語根を用いる現象がみられる。

たとえば,

生 物	無生物	
d-V-tsas	dusūyas	「持ってくる」
-uyas	-cias	「与える」

yanas	ganas	「とる」
yūrginas	gurginas	「刺す」
-wālas	balas	「消える」
-walas	balūyas	「倒れる」

さらにカムチャツカのイテリメン語では、意味上の他動詞が人にかかわるかあるいは人以外の対象にかかわるかによって、文法的に違うクラスに分かれる例が、報告されている。これは同じ動詞が違った形をとるというわけではないから、厳密にいうと上に述べたものとは同じではないが、原理的にはこれに近いものということができる。たとえば、

人のクラス ančpəs「教える」、talas「打つ」、ənikhčas「勝つ」など
人以外のクラス kukəs「煮る」、čansəs「研ぐ」など [KO 129-130]

日本語の場合でも「ある」と「いる」の区別は、この原理に従ったものであると、考えることができる。この原理はあとでみるように、活格言語を形づくっている原理と同じものであるから、もともと活格言語の包含事象であったものが能格言語に受け継がれたために、能格言語の原理からは説明できない随件事象になったものであると考えることができる [KTA 84 & seq.]。

§ 54 また能格言語には、動詞が複数の指標をもつものが多いといわれる。すなわち、意味上の自動詞(絶対動詞)のばあいには、意味上の主語が複数であるかどうか、また意味上の他動詞(能格動詞)のばあいには、意味上の目的語が複数であるかどうかによって、動詞が複数の指標をとるかどうかが、決まるのである。たとえば古グルジア語では -n が複数の指標であった。n-concord といわれているものである [KO 132]。たとえば、

daleç-n-a kalak-n-i「(彼は)破壊した(複数) 町(複数)」
moguc-n-a kaç-n-i「(彼は我々に)与えた(複数) 人びと(複数)」
ganaxu-n-a tual-n-i「(彼は)開いた(複数) 目(複数)」

しかし一般には、名詞が必ず複数の指標をとらなければならない、ということとはなかった。たとえば北米インディアンのチヌークの言語では、「(単数のものを)見る」という意味の el-kel に対して複数のものを見る時には e-kel となり、「(単数のものを)残す」ことを意味する el-taqL に対して「(複数のものを)残す」ばあいには、ē-taqL が使われた [KO 132]。

またブルシャスキの言語でも、hurūt-as「(単数のものが)座る」に対する huručai-

jas「(複数のものが)座る」, dūj-as「(単数のものが)溶ける」に対する dūjai-jas「(複数のものが)溶ける」, sū-jas「(単数のものを)もって来る」に対する suč-as「(複数のものを)もって来る」のような対立があるという [KO 132].

しかしこれは単に現象面だけからすれば、能格あるいは活格言語だけに知られていることではない。英語の場合にも、たとえば kill「殺す」に対して massacre「虐殺する」があり、go「行く」、come「来る」に対して troop「群れをなして進む」があるというように、主語の複数性を語彙の上で示すばあいがある。ロシア語のばあいには、たとえば raz(/s)-sja という構成をもつ動詞(たとえば raz-bežat'-sja「走ってそれぞれの方向に散る」、ras-xodit'-sja「(多数、全員が)散る」)は主語が複数であることを前提にしているし、また pere- という接頭辞をもつ動詞は、しばしば目的語が複数のときに用いられる。

たとえば、

Tarélok on štuk pjat' perebíl.

「彼は皿を五枚ほど(次々に)割った。」

Rebėnok perebolél vsėmi bolėznjami.

「その子はあらゆる病気を(次々に)患った。」

これらのことから考えて、主語が複数であることが、動詞において表現されるのは、名詞の形態が未発達であることによるものであって、能格あるいは活格というような、言語類型と内面的にかかわるものであるかどうかは、未だ確かであるようには思われない。

このほか、能格言語に広くみられる随件事象として、一人称複数の「包含形」inclusive form と「排外形」exclusive form との対立がある。聞き手を含めて「我々」という(包含形)か、聞き手を含めないで「我々」という(排外形)かという違いである。これは北米インディアンの言語に広くみられるものであるといわれる。たとえばチヌーク語の包含形 lxaika と排外形 ntcaika, アルゴンキン語族のメノーミニ語にみられる包含形 kenaq と排外形 nenaq, フォックス語の包含形 kīnān^a と排外形 nī'nān^aなどがこれである。

これはまたオーストラリアのアボリジンの諸言語、パプアのいくつかの言語、シナ・チベット語族のいくつかの言語、多くのポリネシア諸語のほか、コーカサスのアブハズ・アディゲ語派やナフ・ダゲスタン語派の諸言語にみられるという。たとえばアブハズ語の包含形は hara で排外形は hart, ダゲスタン語派のアヴァール語の包含形は nił (ниль) で排外形は niž (ниж) である、という [KO 130-131, KTA 109-111].

ロシア語ではたとえば「私と君」、「私と貴方がた」というような場合には一人

称単数の ja「私」を使わないで複数の my を用い、my s toboj「君をふくむ我々」、my s vami「貴方がたをふくむ我々」のように表現するのが普通である。これはいままで述べてきた包含形に非常によく似ている。これに対して my bez tebjja「君をふくまない我々」、my bez vas「貴方がたを含まない我々」のような言い方は普通は使われない。しかし単純な my「我々」がしばしば排外形に対応していることは、十分に考えられる。

7

内容的類型学研究の進展 II. 活格言語

§ 55 これまで述べてきたような能格言語の研究が進むにつれて、能格言語の起源、あるいは発生という、いわば通時的な問題が、研究者の意識に上ってくるようになった。これはそれまで能格言語と考えられていたものの中に、発達しつつあると思われる現象、および減少、衰退しつつあると思われる現象が認められるようになってきたことと、密接に関連している。たとえば一方には可変動詞の減少、情緒構文といわれているものの衰退、生物と無生物という名詞のクラスの消失あるいは形式化、意味上の自動詞（絶対動詞）と意味上の他動詞（能格動詞）という語彙的な対立の弱化、一人称複数の包含形と排外形の対立の消失などがあり、他方では「持つ」を意味する verba habendi のような、典型的な主語・目的語関係を表す動詞の発生がみられること、などが挙げられる。この動詞は、状態動詞でありながら意味上の目的語をとるという意味で、きわめて特異な動詞であり、あとにみるように、状態動詞が絶対動詞となる活格言語でも、主として意味上の自動詞が絶対動詞となる能格言語においても、その存在の基盤をもつことができない。

これに関連して、とくにコーカサス諸語の比較言語学的な研究が進んだことによって、次のようなことがわかってきた。すなわち、能格言語のばあい、本来は動詞が文の支配の中心であって、形態的な指標もここに集中していたが、やがてこのような状態が崩壊の道を迎えるようになると、これを補う形で、名詞の形態的指標が発達してくるのである。このことによって、動詞が主に形態的な指標の担い手になっている言語類型と、動詞と名詞が同じように形態的な指標をもつもの、および主に名詞が形態的な指標を担っているもののが、それぞれ能格言語の内部の、歴史的な発展段階を示すものであることが、明らかにされるようになった [KO 42 & seq., KTA 58-62]。

たとえばコーカサスのアプハズ・アディグ諸語は、多くの点で未だ活格言語類型の影を強く残しているといわれるが、この諸語では、名詞は大まかにいて英語の定冠詞と不定冠詞で表されるような、定性・不定性の区別をもっているだけで、この諸語に属するウビフ語とアディグ語を除けば、格の体系をもっていないといわれる¹⁵¹。しかしその代わりに、たとえば、カバルディン語では、

u-a-qə-də-d-ej-z-γä-šə-žə-f-ä-tä-qəm

「二人称単目的・三人称複目的・こちらに・共同・場所・三人称単目的・一人称単主語・使役・[導く]・反対の行為・可能・過去・そのとき・否定」

＝「わたしはそのとき彼に君をそこからこちらに彼らと一緒に連れて帰らせることができなかった」

のように、動詞が文の構成に必要な要素を表す接辞をとるという¹⁵²。

これに対し、いくつかの活格言語の残滓とともに、またいくつかの対格言語の萌芽をも含むといわれるが、大体において能格型の類型をもつ、ナフ・ダゲスタン諸語のばあいには、動詞のみでなく、名詞においても、格と数の体系が発達しているという。たとえば、前にも述べたダルギン語では、

d-iftʔ'al xunuj β-iftʔ'al galga xa-β-ufi-β

「女性のクラス接辞・「小さい」＋「女」(能格)＋人でないクラス接辞・「小さい」＋「木」(絶対格)＋「切る・人でないクラス接辞・能格系列の三人称単数」

のようになるという。ここで xa-β-ufi-β は前にも述べたように人でないクラス -β- を xa-ufi に挿入している。xunuj は xunul「女、妻」(絶対格)の能格形であり、したがって名詞変化をもっているが、同時にこの言語では動詞の接辞も保存している¹⁵³。

コーカサスの諸言語の中で、最も対格型に近い類型をもつのは、グルジア語を含む、カルトヴェリ諸語である。グルジア語はさきに述べたように (§40 参照)、現在形ではすでに対格言語類型に移行しているが、アオリスト時称においては能格言語類型を示す、いわゆる split ergativity をもつとされるものである。

この言語は発達した格変化をもつ一方、動詞の接辞は二つ以上とらないのが、原則となっている。たとえば、

ertma kartvelma kəcma mkis dros bevri γvino da-l-i-a

「一」(能格)＋「人」(能格)＋「男」(能格)＋「収穫」(属格)＋「時」(与格)＋「たくさん」(絶対格)＋「酒」(絶対格)＋完了・「飲む」・アオリスト・三人称単数」

＝「一人のグルジア人の男が収穫の時沢山の酒を飲んだ」¹⁵⁴

したがってこれは名詞型に属することになる。

さきに述べたように、名詞のクラスが崩壊し、代わりに名詞によって表現され

る格のカテゴリーが発達する傾向、意味上の自動詞と他動詞との語彙的な対立が強化する傾向なども、このような一般的な発展段階と密接に関連する現象であると考えれば、よく理解することができる。

§ 56 このように能格言語の内部に、発達の傾向を示す現象と衰退のきざしをみせる現象があるとすれば、発達するものは能格言語の将来にかかわるものであり、衰退するものはその過去に関係するものであると考えるのが、自然である。

前者に属するものとしては、すでに述べたように *verba habendi* や連辞の発達があるが、そのほかにも、たとえばロマンス諸語の影響であるとはされているが、バスク語にみられるように、本来相の対立をもたなかった分詞 [KO 175]¹⁵⁵ に連辞 *izan* をつけて受動相をつくるばあいなどがある¹⁵⁶。またダルギン語では、次のような分詞の形がみられるという。

ʔače β-iq'uzi-v usta (гҭаче бикъузив уста)

「職人 それを・行うところの・彼が 仕事」

= 「仕事を行う職人」

ustadil β-iq'uzi-β ʔače (устадил бикъузиб гҭаче)

「仕事 それを・行うところの・それが 職人」

= 「職人によって行われる仕事」

すなわち、*iq'uzi* という分詞そのものには能動の意味も受動の意味もなく、それが -v によって人のクラスに関係づけられるか、または -β によって物のクラスに関係づけられるかによって、能動と解釈されるか、または受動と解釈されるのである [KO 176]。これが能動・受動という意味での相の対立の萌芽であることは、間違いないであろう。またグルジア語は現在諸時称では対格構文を、またアオリストでは能格構文を用いる。前者の場合には能動と受動の相の対立は組織的であるが、後者の場合には相の対立はあまり明瞭ではないといわれる。これらすべてのことは、能格言語がやがて対格言語に発展していくという歴史的な法則があることを示唆するものであるといえよう。

これに関連して、グフマンは、印欧語が、過去において活格型言語類型あるいは能格型言語類型を経験し、それから発展したものであるかどうかについて、資料の限界によっていずれか直ちに判断はできないと、慎重な態度をとっているが、これに続いて、次のように述べていることは、興味深い。

再構成された印欧語の文法構造のモデルと、歴史的に観察できる諸言語の資料によって示される法則性にみられる、(文法体系の特徴を規定する) 基本的対立を比較して

みれば、指示対象 denotatum の世界の言語的モデル化の原則の相違が、きわめて明瞭に現れる。第一の場合(すなわち活格または能格類型 — 著者)には、言語構造に思惟の内容が図象的 iconic に反映していることと結びついた、有契性 motivation が支配的である。第二の場合(すなわち対格言語類型 — 著者)には、有契性が欠如しているか、あるいは失われ、われわれの意識によって正しく adequately 反映されている外的世界のカテゴリーや関係の、言語の文法構造に対する非図象的な反映が、支配的である [GI 236-237]。

クリモフも、活格言語の「二価動詞」(すなわち意味上の他動詞)について、これが状況を図象的に反映していると述べている [KTA 139-140]。

ここで述べられているかぎりでは、図象的反映とはどのようなものであるか、また対格言語類型の主語・述語・目的語の関係が、なぜ図象的反映でないのかは、明らかでない。グフマン、あるいはクリモフの意図とは異なるかもしれないが、著者の考えるところは、次のようである。

著者は以前動詞の意味構造を考察するなかで、次のように考えた¹⁵⁷。たとえばいま、ある「人物」があり、彼の手の中に「斧」があり、かつ彼の前に「木」があるとすると、この人物が手を上下、あるいは左右に振うという行為を行い、それによってもって「斧」が「木」にあたつくほみをつけ、やがて「木」が二つの部分に分かれる。これが「伐る」という「行為」である。この「人物」の行為そのものがまったく同じであったとしても、もし「斧」が「木」にあたらなかつたり、あたってもくほみをつけるだけであったとすれば、それは斧を「振る」行為、あるいは木を「叩く」行為としか、観念されないであろう。したがって「伐る」という行為が成立するためには、「人物」の外にある対象が存在し、かつその対象が、少なくとも二つの部分に分かれることが、必要になる。

あるいはまた to pass「通り過ぎる」という「行為」を考えてみる。これはある「人物」の行為としては、「行く」という行為、すなわち自動詞にほかならない。「通り過ぎる」という「行為」が成立するためには、この「人物」が「行く」という行為を行う過程で、ある「地点」とこの「人物」との相対的な位置が逆転することが必要なのである。これが「伐る」の類と異なるところは、「地点」が何らの変化をも蒙らない、という点にある。著者は前者の類を「他動詞」、後者を「準他動詞」として区別した。

しかし、ばあいによってはこの「人物」の行為の、得られる結果に対する因果関係が、あまりはっきりしない場合も多い。たとえば「死ぬ」と「殺す」の場合を考えてみよう。両方とも、瞬間的であれ、一定の時間を要するものであれ、共通

しているのは、ある「人物」に生じる「死」のプロセスである。しかしこの「人物」に生じるプロセスに、他の「人物」が関与しているかどうかは、わからないばかりもある。たとえば極端な場合、離れたところで、この「他の人物」が神に呪咀を行っている、という状況を考える。この場合呪咀を行っている人物が関与していると認められるならば、「殺す」という行為が成立するはずである。しかしこれは、当該事件の生起する文化的環境とも関連する、認定の問題である。これに対しある「人物」のうえに生じる「死」というプロセスは、客観的に存在するものであり、直接に感官に感知されるものである。もしこの考えが誤っていないとすれば、行為と目的語の関係がより密接な言語類型の方が、現実の認識の仕方が、より直接的であり、感覚的であるということができよう。これに対して対格言語の場合は、現実の認識が、より抽象的、論理的であるということになる。

この点に関連して、山本秀樹が本質的には同趣旨であると思われるが、より透徹した理論づけを行っていることを述べておきたい¹⁵⁸。

もしこのような考えが正しいものであるとすれば、印欧諸語の歴史に徴しても、言語構造をより論理化しようとする傾向は随所に認められるわけであるから、言語類型の発展がもし存在するとすれば、対格言語類型は年代的により後代のものであるということが、一般的にはいえるのではなからうか。

§ 57 一方、衰退の傾向を示している諸現象を考えてみれば、これらの多くのものが、これまで能格言語の随件事象として記述されていたものであることに気づく。言い換えれば、随件事象の多くは、能格言語の古い段階、あるいは能格言語以前の言語段階の状態を反映するものであるということになる。

クリモフは「内容類型学的再構成」に関連してこの点に触れ、次のように述べている。

内容類型学的研究によって得られた若干の新しい結果に照らしてみれば、再構成の今後の支点が明らかになる。とくに統語、およびとりわけ語彙のレベルに比較して、形態のレベルの諸現象がはるかに保守的であることが明らかになったのちは(形態的手段が語彙のおよび統語的手段の転位(transposition)であるという、これまでの叙述において指摘されたところの、現代の言語学に広く流布している考えを参照)、何よりもまず、言語構造のより高位のレベルにすでにはっきりと実現されている、類型学的な規範に矛盾している言語の形態論的体系の諸現象の領域に、経過した類型学的な状態の反映を求めるという可能性が生じる(周知のように、この事情は現代比較言語学の再構成の実践においてかなり広く考量されている)[KP 160-161]。

しかし学者によっては、能格言語が対格言語から発展した可能性を指摘するばあいもみられる。たとえばコムリーは、「しかしながら通時的には形態的な能格性の若干の例が、受動構文から、これに対応する能動形の喪失を経由して生じたよい証拠がある」として、インド・イラン語派の諸言語、とくにインド諸語を挙げ、「これらの言語は過去時称の諸形においてのみ、またはさらに限定されて完了過去の諸形において、典型的に能格的である。これらの言語、たとえばサンスクリットの初期の段階においては、このような時称/アスペクトは能動と受動の両形をもっていた。しかし能動形に比較して受動形の頻度が増加し、最終的には能動形が廃用に帰した。この発展に平行して、主語の性質は(細部にわたって再構成することはできないであろうが、疑いもなく緩りと)(受動構文の)P名詞句から(能格構文の)名詞句へ移行した」と述べているが、他方逆の可能性も認めて、「受動から能格への可能な発達を観察したので、われわれは主格・対格システムが逆受身から発達しえたという逆の可能性を指摘することができよう」として、アオリストが能格性をもつグルジア語でアオリスト形が対格性を示す現在時称よりも早く成立していた可能性を挙げている。しかしコムリーが「現代ペルシア語において能格性は完全に失われ、その結果最古のペルシア語から現代語への発達において、能格性の興亡をみることができる」としていることからみれば、彼は両様の可能性があると考えていたのではないかと思われる¹⁵⁹。

これに対してたとえばシュマルスティューグは、印欧語は本来能格言語であったとし、「印欧語の内部で基本的な相と派生的な相との逆転が起こったこと、すなわち従来の能動相は本来は逆受身(かつアスペクトは不完了)であり、従来の中・受動相(通常完了的であるが、すべての動詞のカテゴリーにおいてそういうわけではない)は、能格の文脈において用いられていた」という仮説を提示し、たとえば、

逆受身

*māter	pekw-et	ovi-m
mother	cooks away	at the sheep
(absolutive case)	(intransitive verb)	(dat.-loc.case)

能格

*ovi	pekw-to	mātr-é/ós
sheep	cooked	by mother
(absolutive case)	(intransitive verb)	(ergative case)
	(transitive???)	(= [genitive])

初期の段階では逆受身が現在に用いられ、能格構文が過去時称に用いられてい

たために、両者は能動相と受動相の対立とはなりえなかったが、不完了アスペクトが最終的に現在時称になったとき、これは大部分逆受身の構文をとるようになった。このとき、三つの変化が生じたという。すなわち、1) 述語動詞の自動詞から他動詞への変化、2) 主語の絶対格の主格への転化、3) 目的語の与・所格の対格への変化。これによって逆受身構文が能動構文になったとき、それまでの能格構文も再解釈されて受動構文と感じられるようになった、というのである¹⁶⁰。

§ 58 一方具体的な言語の研究のなかから、これまで能格言語、あるいは能格言語の一つの変種と考えられてきた言語の中に、能格言語とは違った、独立の言語類型に属しているとみられるものがあるという、認識が生まれてきた¹⁶¹。たとえば北アメリカのダコタの言語では、代名詞的な指標 *ma-*「私」は能格言語と同じように意味上の他動詞の意味上の目的語または意味上の自動詞の意味上の主語として用いられている。これに対して意味上の他動詞の主語として用いられるのは *wa-* という形である。たとえば、

<i>ma-síca</i>	「私は・わるい」
<i>ma-ya-k'te</i>	「私を・おまえは・殺す」
(ø)- <i>wa-k'te</i>	「彼を・私は・殺す」

のようなばあいである。

しかしこの言語は一方では意味的には自動詞であるはずの、「移動の動詞」*verba movendi* といわれる一群の動詞の主語に立つばあいには、*ma-* ではなくて *wa-* を用いるという。たとえば、

<i>wa-t'i</i>	「私は・住む」[KTA 34]

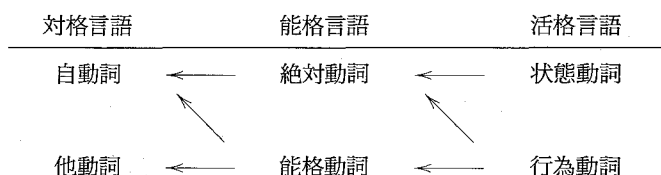
カルトヴェリ諸語の研究のなかでも、このように意味的には自動詞であるはずのものに、他動詞の主語と同じ形の指標をとるものが、多数みられることが、指摘されてきた。その数は数百、派生動詞を含めると数千にもものぼるといわれる [KTA 42]。そうとすれば、これらの例は、能格言語という原理からの例外というだけではなくて、何か別の原理によっているものと考えないわけにはいなくなる [KTA 43]¹⁶²。それがどのようなものであるかについては、種々の議論があったが、結論的にいえば、これらの言語は述語を行為であるか、状態または性質であるかによって分類することを構成の原理としてもっている、と考えられる。逆にいえばこのような言語のばあいには、意味上の自動詞と他動詞の区別は、重要なものではないのである。したがってここではまた名詞も行為に参与できるかどうかによって、

区別されることになる。

能格言語の対格言語に対する関係と同じように、この類型に属している言語の形式(格)も、能格言語とは違った原理の上に建てられるとみなければならない。これらの言語には、無徴的な格と有徴的な格とがみられるが、クリモフは有徴的なものを *aktivnyj padež* (active case) と呼び、無徴的なものを *absoljutnyj padež* (absolute case) と呼んでいる。ここから彼はこのような言語を *jazyki aktivnogo stroja* (active languages 文字通りには languages of active formation) と名づけている¹⁶³。ここでは仮にそれぞれ「活格」、「絶対格」および「活格言語」と訳すことにする。そうすれば動詞のばあいも「活格動詞」と「絶対(格)動詞」ということになる。もっともこのばあい、「行為動詞」と「状態動詞」という呼び名の方が、一般的であるように思われる。

対格言語では他動詞と自動詞が文法のカテゴリーとして対立し、また能格言語では能格動詞と絶対動詞が対立していた。この能格動詞は他動詞の大部分といくらかの自動詞からなり、絶対動詞は自動詞の大部分を含んでいるという点で、対格言語の他動詞と自動詞の区別と一定の重なりをもっていた。これに対して活格言語のばあいには、対格言語の自動詞と他動詞の大部分が行為動詞に含まれ、自動詞に属していた状態動詞が名詞述語や形容詞述語にあたるものとともに、状態動詞を構成することになる。この点で活格言語は能格言語と対格言語の両方に対して対立する言語の類型であるといえる。

いま述べたことを表にすれば、おおよそ次のようになる。



前にも少し触れたが、欧米並びに日本の類型学においては、活格言語類型を能格言語類型と原理的に異なったものであるとは考えていないようにみえる。コムリーの論文「能格性」の中には、ポリネシア諸語に属するサモアの言語の例が、いわゆる *split ergativity* の特殊な例として引用されている。すなわち、この言語においては、「よりダイナミックな動詞」*more dynamic verbs* のばあいには能格構文が用いられ、「より静的な動詞」*more static verbs* のばあいには主・対格構文が用いられるというのである。たとえば、

'Ua sogi e le tama ø le ufi.
Tense cut Erg. the boy Abs. the yam
"The boy cut the yam."

に対して、

'Ua alofa ø le tama 'i le teine.
Tense love Nom. the boy Acc. the girl
"The boy loves the girl."¹⁶⁴

ここで絶対格と主格は同じく無徴であり、能格の *e* と区別されているという。しかしこれは見方によれば活格言語であると考えの方が、適当であるように思われる。筆者にはこれについて判断する知識はもち合わせていないが、クリモフは以下にみるように、インドネシアおよびメラネシアの諸語を、活格言語に数えているのである。

§ 59 クリモフによれば、現在この活格言語に属していると考えられている言語には、たとえば次のようなものがあるという [KTA 5-8].

第一には活格言語の初期の段階にあるとされる、北アメリカのナデネ語族に属するとされる諸言語、すなわちハイダ、トゥリンギット、エヤクなどの言語、およびこの語族のアタパスカン語派に属するといわれるナヴァホ、アパッチ、チリカファ、フパ、ナットレ、サルギ、チペブヤ、カリエル等の諸言語、スー語族に属するダコタ、アシニボイン、ボンカ、トゥテロ、ヒダツァ、クロウ、オフォ、アイオワ、カタウバなどの諸言語、活格言語の後期の段階にあるとされる、ムスコギ語族に属するムスコギ、クリーク、チョクタウ、ヒチティ、コアサティなどの諸言語、並びにイロクオイ語族のモホーク、オネイダ、セネカ、オノンドガ、フロン、チェロキーなどの諸言語がある。同じく北アメリカのユチの言語もこれに属するとされている。

第二には南アメリカのブラジル、パラグアイ、アルゼンチン、ボリビア、ペルーに分布するトゥピ・グアラニ語族も、この活格言語に属する標準的な言語であるといわれる¹⁶⁵。これは七つの語派に分かれるが、その第一はトゥピ語およびグアラニ語のほか、カイワ、カマユラ、アウェティ、コカマ、オマグア、ムンドウルク、シリオノなどによって構成されるものであり、第二はユルナ、第三はアリケム、第四はトゥバリ、第五はラマラマ、第六はモンデ、第七はパルボラの諸言語のつくる語派である。

アメリカ大陸以外には確実に活格言語に属していると考えられるものはないが、たとえばインドネシアとメラネシアの諸語、フィリッピンタガログ語、ミンダ

ナオ島のダバオの北に分布するディババウォンの言語なども、活格言語に属する可能性があるといわれる。またオーストラリアのアボリジンの言語にも活格言語の可能性をもったものがあり、たとえばアラワ語などでは生物を指すもののほか、舟、自動車、飛行機のように運動する物体を指す語も、活格に立つことができるという〔KTA 5-8〕。古代の言語では印欧祖語のほか、ウラルト語、エラム語なども、少なくともその主要な特徴に関しては活格言語の可能性があるとといわれる〔G&II 267-319〕¹⁶⁶。

これらの活格言語は、その内部でさらに三つの類型に分かれるという。その一つは行為と非行為（状態）の対立を基本軸にしているもので、典型的な活格言語である。第二はこの行為と非行為の対立が活動体（人・動物）と不活動体（それ以外のもの）の対立に影響されているものであり、もう一つは主語と目的語の対立によって行為と非行為の対立が修正を受けているタイプである。最後のものはこれまで述べてきたことから、能格言語または対格言語に移る過程にあるものと考えられ、したがって活格言語の後期の段階を示しているとみられる。そうすれば第二のものは、活格言語以前の状態をまだ残しており、したがって活格言語の初期のタイプに属するものである可能性が生じる。もちろん、いわゆる活動体と不活動体の区別は、この区別を知っているロシア語においては、比較的後代に発達したものであり¹⁶⁷、それ以前には男性、女性、中性の三性を区別するのみであったことをみても明らかなように、少なくとも理論的には生物・非生物のカテゴリーが、活動体・不活動体の区別より前に存在する可能性も十分にあると考えられる。

クリモフはこの点に関連して、諸家の所説を紹介しているが、その中に典型的なものとしてネミロフスキー（Немиловский, Михаил Яковлевич 1883-1965）の説の次のような引用がある。

事実は、名詞の類別の発達は、多分類体系から二・三の文法的性の、あるいは完全な性の消滅の方向に進むことを、示している。……言語が具体的なものから抽象的なものへ、一般的なものへと発展する傾向をもつことが、もう一度裏づけられる。言語に多くの名詞のクラスがあればあるほど、これらのクラスはより具体的であり、客観世界の対象の類別をより明確にまた完全に反映するのである。……逆に、名詞のクラスの数の減少とその融合は、かつての形式と内容の統一を破壊にみちびく。はっきりいえば、その分類はどんどん事物の現実性を失っていき……純粹に文法的で、抽象的形式的な名詞の分類に転化する。この分類をとおして色あせ、大部分混乱した形で、そのより古い分類が透けてみえるのである〔KTA 268〕¹⁶⁸。

このような考え方に基づいて、クリモフはさまざまな研究者の報告しているとこ

ろの、「透けてみえる古い分類」を引用している。たとえば、ロドリゲス (Rodrigues, Aryon Dall' Igna R.) の報告しているところによれば、トゥピ・グアラニ諸語の古トゥピ語には、所有変化の三人称に、t- によって特徴づけられる人を表すクラスと、s- によって特徴づけられる動物を表すクラスがあるという。たとえば、esá「目」に対して t-esá「それ(人)の目」、s-esá「それ(動物)の目」となるという。

a-t-esá-kutúk	「私・三人称人間・目・傷つけた」 =「私は彼の目を傷つけた」
a-s-esá-kutúk aĩuru	「私・三人称動物・目・傷つけた+オオム」 =「私はオオムの目を傷つけた」[KTA 276] ¹⁶⁹

あるいはまた、エビング (Ebbing, J.E.) の報告するところによれば、アイマラ語においては、「運ぶ」、「置く」、「取る」という動詞が、意味上の目的語となる対象の性質によって、異なった形をとるという。たとえば、

「運ぶ」	「取る」	「置く」	
irpaña	irptaña	irpxataña	活動体
içuña	içtaña	içxataña	細かいもの
ajaña	ajtaña	ajxataña	長いもの
iraña	irtaña	irxataña	丸いもの
asaña	astaña	asxataña	平たいもの
apaña	aptaña	apxataña	不規則な形をもつもの
itaña	ittaña	itxataña	重いもの
iqua	iqtaña	iqxataña	柔らかいもの [KTA 280] ¹⁷⁰

§ 60 このような見方によれば、活動体・不活動体の対立と、生物・無生物の対立は、植物がどちらに組み込まれるかの相違であるということになる。もしそうであるとすれば、そのためには植物が一つの類を構成している状態が必要となる。たとえば典型的な多分類言語であるバントゥー語族が、人と動物、植物などを細かく分類しているような場合が想定される。上述のアイマラ語などをみれば、一概にはいえないにしても、活動体・不活動体の類別をとるか、生物・無生物の類別になるかは、バントゥー諸語のように、細分化している名詞の類別が、どのように集まってより大きな分類に変化したかによると思われる。したがって活動体・不活動体の類別、生物・無生物の類別は、たとえ一旦成立したとしても、相互に容易に変わりうるもののようにも、思われてくる [KTA 79-80]¹⁷¹。しかし理論的にはその逆のばあいも考えられる。そのいずれが先であるかは、にわかには定めがたい。両方とも可能なのではないか、というのが、現在の感想である。

ソヴァは(Сова, Любовь Зиновьевна),『バントゥー諸語の文法構造の発達』¹⁷²の序文において、例としてズールー語の名詞の分類の意味的基礎を論じ、「分類の基礎にあるのは二つの空間的・時間的連続体、すなわち人間の脳の外にある時間と空間、および脳の内部にある時間と空間の連続体の固定化と名づけることのできる、客観的現実の反映の原理である。この二つの空間的・時間的連続体は話者によって認知される所与であるが、これらの所与の各々が自らの特殊性をもっており、人間によってその感じ方が異なるために、言語手段によって固定の仕方が異なるのである」¹⁷³とする。ソヴァによれば、バントゥー祖語には24のクラスが推定されるが、これは言語によってさまざまに継承され、コモ語のように、まったく類別を失ったものから、アンバ語のように二つのクラスのみを区別するものもあるといい、「このようなプロセスの結果、二分類あるいは三分類の体系が発生する可能性があり、それを一つのクラスのカテゴリーから、別のクラスのカテゴリー、すなわち文法性 *genre*, 活動体・不活動体, 社会的に能動的なもの・社会的に受動的なものなど、に転化したと解釈することができる」としている¹⁷⁴。

印欧語についてはのちに述べることになるが、これに関連してデスニツカヤは、「名詞の分類と印欧語の名詞変化の問題」という論文において[DS 57-70], キュニー(Cuny, Albert 1870-1947)の所説を引用しながら¹⁷⁵, たとえば *O* 語幹, *U* 語幹, *I* 語幹のような印欧語の名詞の語幹の多様性について、「(ロシア語, ドイツ語などの)現代の印欧諸語に未だ根絶されずにある, 名詞変化のタイプのこの多様性は, 歴史以前の状態に遡る。語幹形成接尾辞の相違は, 名詞変化の体系の形成, およびおそらくは動詞変化の体系にも……先立つ時期における印欧諸語を特徴づけていた古代の名詞の類別の反映である」とし, 同時に「……格体系の発達に先立つ時期に遡る, 語幹のタイプによる名詞の類別は, 明らかにすでに以前から生きたカテゴリーとは感じられなくなっているから, その研究はきわめて困難である」として, 慎重な姿勢をみせながらも, たとえば *U* 語幹の場合には, ギリシア語の *γένυς*, ゴート語の *kinnus*「頬」, ギリシア語の *γόνυ*, ラテン語の *genu*, ゴート語の *kniu*「膝」, ゴート語の *handus*「手」, ラテン語の *manus*, ゴート語の *fotus*「足」等のように, 対偶をなす身体の部分, ギリシア語の *βραδύς*「遅い」と *ταχύς*「早い」のように対をなす概念等を表すことが多いことも確かであるとしている[DS 58-62]。

さらに彼女は*-rの構成にかかる名詞についていくらか立ち入った考察をしている。この構成にかかるものには, よく知られているように, *δωτήρ*のような生産的な行為者名詞を除けば, ギリシア語 *πατήρ*「父」, *μήτηρ*「母」, *δᾱήρ*「夫の兄弟」, *θυγάτηρ*「娘」, *κέλωρ*「息子(詩語)」, サンスクリット *nāptar*「甥」, ラテン語 *soror*

「姉妹」のように親族関係を表す語がある。一方これに対応するものとして中性で人あるいは動物の身体の部分を表すものがある。たとえば、ギリシア語 ἥπαρ (ラテン語 *iecur* 「肝臓」), οὐθαρ 「動物の乳房」, στέαρ, πῖαρ 「脂」, ἥτορ, κῆρ 「心臓」, ラテン語 *cruor* 「血」 などである。この構成にかかるものの中のあるものは、のちに -ας によって代えられたとされるが¹⁷⁶, この後者の構成をもつものにも、やはり身体の部分を表すものがある。たとえば κέρας 「角」, κρέας 「肉」, δέμας 「身体」, δέρας 「皮膚, 毛皮」, κῶας 「毛皮」 などである。

デスニツカヤはレヴィー・ブリュール (Lévy-Bruhl, Lucien 1857-1939) がオーストラリアのアボリジンのいけにえの儀式における「血」の重要性についての所説を引用しながら¹⁷⁷, ホメーロスのいけにえの描写においても血および内臓が重要な役割を果たしているとしている。ここから彼女は、*-r および *-as の構成をもつその他の名詞も、宗教的な儀式にかかわるものであると推定している。たとえば, ἄλειφαρ 「脂」, ἄλας 「塩」 および *-as に遡ると考えられる ἰχώρ 「神の血管に流れている血にあたる物質」, πέλωρ 「怪物」, ὄπαρ 「うつつ, 現実」, ὄναρ 「夢」, ἥμαρ 「日」, τέρας 「しるし, 奇跡」, Κήρ 「死の女神」, εἶδαρ 「食べ物」, ὕδωρ 「水」, ἔαρ 「春」, νέκταρ 「ネクタル, 聖酒」, πῦρ 「火」 などである。

これらの語と上述の親族関係を表す語との関係について、デスニツカヤは宗教的儀式の遂行の基本的単位は氏族であった点に求められると考えている [DS 61-62]¹⁷⁸。

クリモフは、同じレニングラード学派の一人として、これらの研究について承知していたであろうと思われるのである。

§ 61 すでに述べたように、活格言語は動詞を行為動詞と状態動詞に区別することを基本にしているから、対象も行為の意味上の主語になれるものと、そうでないものとに分けることになる。したがってこれらの言語では名詞の「活性」animate と「不活性」inanimate の区別も、包含事象であるということになる。たとえばハイダの言語では、活性に属しているのは, djáda 「女」, 'auga 「母」, gaxá 「子ども」, xa 「犬」, kat 「鹿」, t̥cu 「赤杉」 のようなもの、また不活性に属するのは、たとえば gwai 「島」, gayu 「海」, góγa 「崖」, tágun 「皮」, na 「家」, kun 「鼻」 のような名詞である [KTA 83]。これらの例から、活性名詞には一般に人、動物のほか、樹木などの植物も含まれていることがわかる。さきに挙げたような、活動体、不活動体の区別に近い対立をもつといわれるものは、植物が活性名詞から除外されるばあいである。これらのばあいに行為動詞は、常に活性名詞と結びついている。

逆にいえば、行為動詞は、活性名詞によって表される行為を示しており、それ

が意味上の自動詞であるか、または意味上の他動詞であるかにはかかわりがない、ということになる。たとえば「産む」、「産まれる」、「死ぬ」、「育つ」、「育てる」、「行く」、「走る」、「跳ぶ」、「倒れる」、「横たわっている」、「食べる」、「飲む」、「話す」、「泣く」、「切る」、「捕まえる」、「壊す」、「持っている」、「与える」、「焼く」、「雷がなる」、「稲妻が光る」、「雨が降る」などのような意味をもった動詞がこれである。

具体的な例としては、トゥピ・グアラニ語族⁷⁹のカムユラ語では、maraká「歌う」、ha「行く」、manó「死ぬ」、jan「走る」、juká「殺す」、nupá「打つ」、kutúk「刺す」、'atá「歩き回る」、wewúj「泳ぐ」、wewé「飛ぶ」、apá「焼く」、k'aháp「知っている、できる」、me'éŋ「与える」、momót「投げる」、pejú「風が吹く」、potát「欲する」、pahák「持っている」、'u「食べる」、u'ú「咬む」、'ú「(水を)飲む」、patét「(乳を)飲む」などが、行為動詞に属しているという [KTA 85]。

このように活格言語では自動詞と他動詞が文法的に関与的でないとするれば、たとえば「死ぬ」と「殺す」、「燃える」と「焼く」、「乾く」と「乾かす」、「横たわっている」と「置く」、「目覚める」と「起こす」、「倒れる」と「倒す」、「行く」と「運ぶ」、「走る」と「追う」、「這う」と「引きずる」のようなものは、同じ語によって表されることになる。これらは能格言語類型においては可変動詞であった [KTA 89-90]。

たとえば、コーカサスのナフ・ダゲスタン諸語に属するレズギ語では、q'in「殺す、死ぬ」、xun「壊す、壊れる」および「生む、生まれる」、čurun「焼く、焼ける」、kxun「焼く、燃える」、q'urun「乾かす、乾く」、rugun「沸かす、沸く」および「煮る、煮える」、at'un「ちぎる、ちぎれる」などが、これに属するという [KO 148]。

したがって能格言語のばあいには随伴事象であったこれらの動詞も、活格言語では包含事象になる。またたとえばグアラニ語の nemboʔá「立っている」や ñenó「横になっている」または kwaá「知っている」のように、意味的には状態動詞であるはずのものが行為動詞として扱われているのは、これらが活性の名詞と用いられるためであると考えられる。このほかたとえばカムユラ語の pejú「(風が)吹く」、グアラニ語の sunú「(雷が)鳴る」、werá「(稲妻が)光る」、ki「(雨が)降る」のような自然現象が同じように行為動詞として用いられているのは [KTA 85-87]、これらの民族の世界の観方に関係しているのかもしれない。このような不随意的な行為や状態を表す「周縁的な」語彙は、言語によって少しちがった扱いを受けるばあいがある。たとえば「横たわっている」、「倒れる」、「死ぬ」のような動詞は、すで

にみたようにグアラニ語では行為動詞に分類されているが、ダコタの言語では状態動詞として用いられるという [KTA 88].

状態動詞に属するものは、たとえばグアラニ語では次のような動詞であるという。arəraí「震える」、asá「病気である」、éra「という名である」、ajwinó「悪臭がする」、karé「びっこをひく」、kurusú「ちぢんでいる」、iʔái「汗をかく」、opewá「まどろむ」、pú「音がする」、wotəyerá「花が咲く」、hāsé「泣く」、manduʔá「覚えている」、tesaráy「忘れる」、uhéy「喉が乾く」、ware'á「空腹である」のほか、apuʔá「丸い」、gwasú「大きい」、mareté「強い」、pukú「高い、長い」、tuyá「年老いている」などである [KTA 87].

行為動詞はきわめて多くのばあい活性名詞と結びつき、また状態動詞は不活性名詞と結びつくことが多いといわれるが [KTA 95], これはその意味から当然であると思われる。また活格言語のばあいには他動詞と自動詞という区別はなかったとされるから、同じ語が自動詞としても、また他動詞としても用いられるということが可能になる。可変動詞である。このような動詞は能格言語のばあいにもみられることが多かったが、能格言語の原理からは説明することができず、随伴事象であった。これに対して活格言語の原理からは直接説明することができるから、これは活格言語の包含事象であるといえる。このことから逆に、自動詞と他動詞という区別も、論理的には別にして、決して普遍的なものではなく、対格言語の包含事象であることがわかる。

§ 62 いま述べたような行為動詞と状態動詞という区別に対応して、活格言語でも活格と不活格の二つの系列の人称接辞が区別されることになる。前の節で述べたように、行為動詞の意味上の主語になるのは活性の名詞が主であるから、これが活格の系列の接辞に対応し、また多く状態動詞の意味上の主語になる不活性名詞が不活格系列の接辞に対応するのは、当然である。しかし逆に行為動詞の意味上の目的語あるいは補語になるのが、不活性名詞だけとはかぎらないことも、また明らかである。しかしこのばあいには活性名詞も不活格の接辞に対応しなければならない。また活性名詞の状態を表すばあいにも、行為の意味上の主語ではないから、不活格の接辞に対応する。

このような対応の仕方は、結果においては能格言語の人称接辞のばあいと同じことになるが、原理の面からみれば能格言語のばあいとは違った、活格言語自身の原理によっているのである。包含事象と随伴事象とについて述べたときに、随伴事象は以前の言語類型の包含事象であったものか、または将来の言語類型の包

含事象であるといったが、この対応の仕方は、能格言語の包含事象でもあり、また活格言語の包含事象でもある、ということになる。こういうことが起こるのは、活格言語のもっていた構文の意味を能格言語の立場から解釈しなおしたためであると思われる。述語とこれに関係する名詞との関係のあり方が言語の類型をきめる中心的なものだからである。逆にいえば、このような再解釈が言語類型の中心の部分で起こったために、言語類型そのものが変化したのであると、いうことができる。

人称接辞の系列は、たとえば次のようになるという [KTA 133-134].

a) グアラニ語¹⁸⁰

数	人 称	活 格	不 活 格
単 数	1	a-	šc-
	2	re-	ne-
	3	o-	i-, ø
複 数	1 {包含形 排外形	ya-	yane-
		ro-	ore-
	2	pe-	pene-
	3	o-	i-, -ø

b) ダコタ語¹⁸¹

数	人 称	活 格	不 活 格
単 数	1	-wa	ma-, m(i)-
	2	ya-	ni-, n-
	3	ø-	ø-
複 数	1 {包含形 排外形	u ⁿ -	u ⁿ -
		wa-	ma-, m(i)-
	2	ya-	n(i)-
	3	ø	ø-

c) トゥリングット語¹⁸²

数	人 称	活 格	不 活 格
単 数	1	x(a)-	xAt-
	2	i-	i-
	3	ø-	a-, du-, AC-
複 数	1	tu-	ha-
	2	yī-	yī-
	3	ø-	a-

たとえばグアラニ語では次のように変化する [KTA 137].

活格動詞

意味的他動詞

a-meʔé 「私は与える」

re-meʔé 「おまえは与える」

o-meʔé 「彼は与える」

še-peté 「(彼は)私を打つ」

ne-peté 「(彼は)おまえを打つ」

ñane-peté 「(彼は)おまえを含めて我々を打つ」

意味的自動詞

a-wewe 「私は飛ぶ」

re-wewe 「おまえは飛ぶ」

o-wewe 「彼は飛ぶ」

絶対動詞

še-mirí 「私は控えめだ」

nde-mirí 「おまえは控えめだ」

i-mirí 「彼は控えめだ」

グアラニ語では、いくつかの例外を除いて意味上の主語または目的語のどれか一つだけを接辞として表すのを原則にしているが、スー語族の言語では接辞のつけ加え方にこのような制限はなく、意味上の主語と目的語の両方の接辞をとることも、またどちらか一方をとることもできるという。たとえばグコタ語では、wa-kaška「私は縛る」、ya-kaška「おまえは縛る」に対して、ma-ya-kaška「私をおまえは縛る」、ma-kaška < ma-ø-kaška「私を(彼が)縛る」のような形もある [KTA 137]。

§ 63 ところで不随意的な行為を表す動詞や、活性名詞とかかわりの深い状態を表す動詞は、典型的な行為動詞と状態動詞からみれば、それらの中間にある動詞であるといえることができる。したがってこれらの動詞は、言語によって行為動詞に属したり、あるいは状態動詞に属したりしている。たとえばスー語族のアシニボインの言語、イロクォイ語族のセネカの言語のように、三つの系列の接辞をもち、そのひとつの系列を不随意行為を表す動詞の接辞として利用している言語が報告されているが、これもいま述べたような不随意行為を表す動詞のもっている中間的な性格のためであろう。たとえばアシニボイン語では、この接辞の系列は次のようになっているという¹⁸³。

たとえば mn-uhá-si「一人称単数・ある」・否定 = 「私のところにはない」、n-uha「二人称単数・ある」 = 「おまえのところにある」、yuha「彼のところにある」(y-は語が母音 u で始まるために前綴されたもの) のようなばあいである [KTA 136]。

この系列の接辞をとる動詞には、たとえば wayáka「見える」、iyúka「思われる」、awáyaka「目覚めている」、yuksá「とぎれる」、yusóta「疲れる」、yuwéga「こ

われる」などがあるという [KTA 97]。

この系列の動詞は、不随意行為や状態を表しているから、能格言語の随伴事象であった「情緒動詞」と語彙が重なることが多い。能格言語では意味上の自動詞を絶対動詞に分類しているから、これらの自動詞の中からかつての活格と結びついていたものだけを解釈しなおしたのが、情緒動詞であると思われる。もしそうであるならば、能格言語の情緒動詞も、もとは活格言語の包含事象であったということになる。

§ 64 活格言語は、名詞を活性と不活性に分けている。植物は生物ではあるが行為に積極的に参与するわけではないから、不活性に属すると考えられる。しかし活性にはかつて生物すべて、すなわち動物と植物が属していたことを示すと思われる、多くの現象がみられる。このことから、いくつかのことが活格言語の包含事象として説明できる。

まず第一に植物と動物に共通の語彙がみられることである。たとえば「血」と「樹液」、「角」と「枝」、「耳」と「葉」、「皮」と「樹皮」、「身体」と「幹」、「肉」と「果肉」、「頭」と「樹冠」などがしばしば同じ語によって表された。また「殺す」と「伐倒す」、「泣く」と「樹液が滲出する」のような動詞も、また動物と植物に共通であった [KTA 112-113]¹⁸⁴。このような現象は現在でも、活格言語の初期の発展段階にあるとみられるナデネ語族によくみられるといわれるが、このような分類の基礎には、名詞が示している対象が言語の使用者にとって重要であるかどうかという、言語集団のものの観方があるように思われる。多くの言語に、本来ならば不活性に属しているはずのものが、社会生活を営む上で重要と思われるばあいには、活性名詞として扱われている例がみられるからである。たとえばアルゴンキン語族のオジブワ語では、人、靈魂、超自然の存在であるマニトゥ、動物、植物のほか、とうもろこし、タバコ、こけももなどが、活性名詞になっている。またこの言語に近い関係にあるメノーミニ語でも、パン、小麦、とうもろこし、タバコ、えぞいちご、太陽、星、月などのほか、鍋や車、汽車のようなものも、活性名詞と考えられているという [KO 125-126]。

ロシア語の場合でも、論理的には明らかに不活動体であるはずの pokojnik「故人」、mertvec「死人」などのほか、kukla「人形」、korol「(チェス、トランプなどの)キング」のようなものが、活動体の名詞と考えられている。またあとで述べるように、ロシア語の活動体と不活動体という文法カテゴリーの発生は、歴史的にみれば、対象に与えられる価値、すなわち個別性の高さ、に基づいて行われたもので

あると考えてもよいように思われる。逆の場合、たとえば中世ロシア語では *plenŭ* 「戦争捕虜」, *rabŭ* 「奴隷」は、決して活動体の語尾をとることがなかった。社会的な地位が低かったからである¹⁸⁵。

このような活性と不活性の区別は、活格言語の発達の後期になると崩れてくる。たとえばユート・アステック語族のタオス語では、不活性のカテゴリーが二つに分かれて、三つのクラスになった。これは論理的には不活性であるが、社会的に重要なものを表す名詞と、それ以外の不活性名詞とを区別する必要によって生まれたものと思われる。これに対してチヌークの言語では、男性、女性、中性にあたる三つの性の区別を発達させた。これはタオス語のばあいとは違って、活性のカテゴリーの下位区分を基礎にしたものと思われるが、指示代名詞、数詞、複数の形などに活性と不活性の対立の痕跡があるという [KO 126]。

§ 65 活格言語は対象を活性と不活性に分類することを基本的な原理としており、また活性のクラスの名詞の方が社会的に重要な役割をもつ対象を表しているから、活性のクラスに属する対象の勢力範囲、あるいはこの対象の所属を示す必要が大きいのにはよく理解できる。したがって活性のクラスの対象の所属の表示は、活格言語の包含事象の一つであるということができる。このような所属の表現は、非分離所有 *organic possessive* と分離所有 *inorganic possessive* とに分けられる。非分離所有というのは、名詞がいつも所属の表示とともに用いられ、単独で用いられることのないものである。これに対し、分離所有はばあいによって所属の表示をともなうこともあり、またともなわないこともあるものである。

この非分離所有をもつ名詞は、三つに分けられる。一つは人、動物、植物の一部分であるもの、第二は名前や親族関係を表すもの、第三は人や動物と密接に関係する事物を表すものである。第一のグループに属するものは、たとえば「頭」、「手」、「足」、「目」、「耳」、「心臓」、「膝」、「角」、「尻尾」、「木の葉」、「根」などがあり、第二のグループにはたとえば「父」、「母」、「祖父」、「兄弟」、「姉妹」、「息子」、「娘」などが属しているという。また最後のグループに属するものとしては、たとえば「影」、「足跡」、「夢」、「矢」、「きせる」、「家」、「獲物」、「巢穴」、「巢」などがあるという [KO 136-137, KTA 49]。

分離所有と非分離所有というカテゴリーが活性の対象に特有のものであることはさきに述べたとおりであるが、非分離所有の人称接辞が、多くの言語で不活格の系列の動詞の人称接辞と同じであることは、興味深い。たとえばダコタの言語では、*mi-taⁿtcaⁿ* 「私の身体」、*ni-siha* 「おまえの足」のように、一人称 *m(i)-*、二

人称 *n(i)-*、三人称 *o-* という、活格の系列に対立する不活格の系列の接辞が用いられている。クリモフは、この系列が状態または性質を対象から分離しにくいことを示すためである、と考えている [KTA 149]。

これに対して分離所有は、たとえばグコタ語の *mi-ta-koda* 「私の友人」、*ni-ta-cuⁿke* 「おまえの馬」、あるいはアタバスカン語族のチリカファ語の非分離所有の *bi-tsii* 「彼(自身)の頭」に対する分離所有 *bi-'i-tsii* 「彼の(もっている、あるいは食用にする、など)頭」のように、不活格の接辞と非分離を表す接辞とを組み合わせたものか、あるいはムスコギ語族の諸言語のように、情緒動詞の系列の接辞によって示されるという [KTA 149-150]。

コーカサスのアディゲ語においても、同様に、非分離所有 *s-nə* (с-нə) 「私の鼻」、*s-lə* (с-лə) 「私の足の裏」、*s-pχw* (с-пхъу) 「私の娘」、*s-kūōš* (с-кьош) 「私の兄弟」、*s-c'ə* (с-цə) 「私の名前」に対して、分離所有は *s-i-si* (с-и-шы) 「私の馬」、*s-i-məli* (с-и-мэлы) 「私の羊」、*s-i-winə* (с-и-уына) 「私の家」、*s-i-tχiŋ* (с-и-тхылъ) 「私の本」のようになるという [KO 137]。

ジュリンスカヤ (Жури́нская, М.А.) は、メラネシア諸語の分離所有と非分離所有について考察している。たとえばバックス島のモトゥ語では、非分離所有は名詞に直接人称接辞をつける形で表されるが、分離所有は特別な範疇語に人称接辞をつける形で示されるという。この範疇語は、名詞の意義に従っていくつか存在し、その区分および種類は言語によって必ずしも一致しないようであるが、メラネシア諸語には広く認められるという。

たとえば、*na pane-k* 「冠詞+手・一人称単数」= 「私の手」に対して *no-k o pane* 「範疇語・一人称単数+冠詞+手」= 「私の(分離できる)手」= 「私の腕輪」のような場合がこれであるという。同じようにして *na tama-k* 「私の父」、*no-k o parapara* 「私の斧」などがつくられる。ここで興味のあるのは、のちに動詞との関連でみるように、これらの言語における名詞の分類の仕方が、分離所有の内部でみえてくることである。

ジュリンスカヤによれば、モトゥ語では範疇語は次のようになっているという。

<i>no</i>	一般の事物	<i>no-k o vetal</i>	「私のバナナ」
<i>ɣa</i>	食物	<i>ɣa-k o vetal</i>	「私の(食用の)バナナ」
<i>ma</i>	所有物, 飲物	<i>ma-k o pei</i>	「私の(飲用の)水」
<i>pula</i>	豚, 財産	<i>pula-k o kpwoe</i>	「私の豚」
<i>m^wo</i>	行為と関係する事物	<i>m^wo-k o ɣaɣapalay</i>	「私の仕事」 ¹⁸⁶

所有の表現がこのようなものであるから、これらの言語には所有代名詞が必要ないことになる。一方活格言語では他動詞と自動詞という区別がなく、したがって「持つ」という所有動詞 *verba habendi* と「ある」という存在動詞の区別もなかった。このことのために、所有の表現には存在動詞が用いられるのが普通であった。そのばあい、たとえばナヴァホの言語の *n-teij xóló* 「おまえの薪がある＝おまえは薪を持っている」のように、所有の接辞をともなった名詞と存在動詞を組み合わせて所有を表現することもあった。また言語によってはたとえばトゥビ語の *hú-ikú* 「存在する」に随伴を示す要素 *-r-* をつけた、*hú-rikú* 「共にある＝持っている」のような表現をもつものも多いといわれる [KTA 101-102]。

§ 66 活格言語の特徴として、活格動詞の内部にしばしば遠心相と求心相との対立 *extrovert-introvert contrast* があることが、挙げられている。求心相というのは、行為が行為主体の内部にとどまるものであり、また遠心相というのは行為が主体の外に向かうものである。たとえば「焼く」と「燃える」、*「導く」と「行く」、*「咬む」と「咬まれる」、*「乾かす」と「乾く」* のようなばあいである。これは他動詞と自動詞の対立であるようにみえるが、活格言語では、前にも述べたように、他動詞と自動詞は文法的なカテゴリーではないから、これはそれとは別のものでなければならない。クリモフの引用しているように、ホイジャーは、ナヴァホの言語で相の一つを表す *ø*-クラス (すなわち接辞ゼロ) の動詞 2000 のうちの、70% が自動詞で、30% が他動詞であり、一方これと相の上で対立する *ɬ*-クラスの動詞 1100 のうちの、73% が他動詞で、27% が自動詞である、というように、相の対立と自動、他動の対立とが重なり合わないことを述べている [KTA 140] (78 頁参照)¹⁸⁷。

これは動詞語幹の直前に位置する接辞であり、ホイジャーはこれを *classifier* と名づけているが、クリモフによれば、これらの関係は、次のようであるという。すなわち、最も基本的なものは、いうまでもなく無微的な接辞ゼロのクラスである。この言語は活格言語として自動詞、他動詞の類別は文法的なカテゴリーではないから、ここに含まれる動詞にも、当然のことながら、意味上の自動詞と意味上の他動詞がある。

接辞 *ɬ* をもつクラスには、接辞ゼロのクラスの意味上の自動詞からつくられる、意味上の他動詞が属するという。そうとすれば、これは元の動詞の遠心相を表すことになろう。*D* クラスというのは、形態素 **-d-* の存在が推定されるものであり、この接辞に隣接する音素に従って、さまざまな形をとるために、大文字を用いているようであるが、これは接辞ゼロのクラスの意味上の他動詞からつくら

れ、意味的には印欧語の受動相あるいは中動相に対応するという。そうとすれば、これは逆に求心相を表すものであるといえよう。

接辞 $-t$ をもつ、第四のクラスは、いったん接辞 $-t$ をもつ第二のクラスの動詞からつくられ、基本的にはやはり印欧語の受動相および中動相に相当する動詞が属するという。そうとすれば、これもやはり求心相を表すものとすべきであろう。たとえば、

ゼロクラス

yì-ø-bééz「三人称未完了・それ・沸く」
=「それが沸いている」

$-t$ クラス

yì-ø-t-bééz「それ・未完了・彼・接辞・沸く」
=「彼がそれを沸かす」

$-l$ クラス

yì-ø-l-bééz「未完了・それ・接辞・沸く」
=「それが沸かされている」¹⁸⁸

あるいは

yì-ø-ʔààl「三人称未完了・彼・噛む」
=「彼は噛んでいる」

に対する

yìt'ààl<yì-ø-d-ʔààl「三人称未完了・それ・接辞・噛む」
=「それは 噛まれている」¹⁸⁹

のようになるという。

この相の対立は、形の上では求心相が有徴的な項として特徴づけられるのが、ふつうである。たとえばカマユラ語では、 $o-juká$ 「彼は(彼を)殺した」に対する $o-je-juká$ 「彼は自殺した」、 $ere-kətsi$ 「おまえは(彼を)切った」に対する $ere-je-kətsi$ 「おまえは自分を切った」のように、求心相が要素 $-je-$ によって特徴づけられているという [KTA 141-142]¹⁹⁰。相の対立がこのように活格動詞に限られている点、および活格動詞の示す行為の、行為の主体に対する関係を示すという点で、これは活格言語の包含事象であるといえることができる。

§ 67 印欧祖語は、その古い時代に受動相をもっておらず、能動相と中動相だけを区別していたといわれているが、類型学のこのような結果に立ってみれば、能動相と中動相というのは、実は遠心相(非求心相)と求心相という対立であった可

能性が強いことになる。実際比較的最近、印欧祖語が活格言語であったという考えが一般的になってきているように思われる [KTA 207 & seq.]¹⁹¹。

遠心相と求心相の対立は、意味上の自動詞と他動詞の区別が文法的にも、また語彙的にも、存在していないことを前提としているから、活格言語の包含事象であり、しかも行為動詞のカテゴリーにのみ現れるのが、普通である。しかし能格言語では、行為動詞の中の意味上の自動詞の大部分が状態動詞とともに新しい絶対動詞を形成し、残された意味上の他動詞と、ある種の意味上の自動詞とによって能格動詞が形成されることになり、かつての行為動詞と状態動詞という文法的対立は解消する。したがって対格言語の観点からは他動詞に属するとされる、不随意的な行為を表していた動詞がいわゆる情緒動詞として別のカテゴリーを構成する場合を除いて、意味上の他動詞は能格動詞に属することになり、他方では意味上の主語は行為者でなければならないという制約があったために、遠心相と求心相の対立は、その存在の理論的根拠を失うことになる。したがってこのような遠心相と求心相の対立は随件事象でしかなく、やがて消滅の運命を辿ることになる。これを補うために、能格言語では同じく随件事象である、非分離所有と分離所有のカテゴリーは、長く失われなかった。

これに対して活格言語から能格言語を経ないで直接対格言語に移行したばあいには、他動詞によって表される行為は、必ずしも主語を離れて他に向かう必要はなく、主語の内部で完成することもできるから、求心相と遠心相は、中動相と能動相という形で受け継がれることができた。したがってこのばあいには、非分離所有は動詞によって表すことができるようになり、消滅した。たとえばヒダツア語の *wacéo ki-áara-ikac-c* 「人が 求心相・手・見る」=「人が自分の手を見る」[KTA 197]¹⁹² のように、求心相が實際上非分離所有を示す言語があるが、これは非分離所有が消滅する過程にあるものであると、考えられている。ここで *ki* は非遠心相の接辞である [KTA 202-203]。

§ 68 メシチャニーノフが報告しているところによれば、ギリヤークの言語では、述語を示す接辞として *-d'* という要素がある [MG 35]。これはたとえば *pil-(l)adyf ur-d'* 「大きい・家 よい・述語」=「大きい家はよい」、*ur-ladyf pil-d'* 「よい・家 大きい・述語」=「よい家は大きい」のように、形容詞的な要素 *ur* 「よい」や *pil* 「大きい」につけ加えられて述語になったり、*n'i xum-d' ur-d'* 「私は 生きる・述語 よい・述語」=「私はよく暮らしている」の *xum-d'* にみられるように、動詞的なものにも附加される。

もし -d' がメシチャニーノフの報告のような機能をもっているとすれば、このような形は、最も古い言語段階に近い状態のものであると思われる。実際このような言語のばあいには、名詞と動詞がまだ分かれていないと考えられるものも多い¹⁹³。

したがってこのような言語では、名詞と動詞が形の上できわめて近い関係にあると、思われる。たとえばアレウト語には ula-n'「私の家」、ula-n「おまえの家」に対して、siku-n'「私はする」、siku-n「おまえはする」のような形がある。これがさらに発展すれば、述語の位置にあるものはすべて変化することになるであろう。たとえばネネツの言語では、hasaβa「男」、ngaruka「大きい」、nu「立つ」という語について、次のような文が成り立つ。

hasaβa-m	「私は男だ」	ngarka-m	「私は大きい」
hasaβa-n	「おまえは男だ」	ngarka-n	「おまえは大きい」
hasaβa	「彼は男だ」	ngarka	「彼は大きい」
nu-m	「私は立つ」		
nu-n	「おまえは立つ」		
nu	「彼は立つ」		

時称もまた、すべての述語で示される。たとえば過去の指標である -s' は人称の接辞と結合して、次のようになる。

sjurbi-mz'	「私は走った」	ngarka-mz'	「私は大きかった」
sjurbi-nas'	「おまえは走った」	ngarka-nas'	「おまえは大きかった」
sjurbi-s'	「彼は走った」	ngarka-s'	「彼は大きかった」

名詞のばあいにも同じように、たとえば tohodanna-s'「彼は生徒だった」、toholkodana-s'「おまえは教師だった」のように用いられる [MG 45-46]。逆に動詞は述語の位置に立たず、したがってすべての指標をもたないときには、動詞以外のものとして働くことになるであろう。たとえばギリヤーク語の ty-n'ivx ryu-d'「この・人が 教える」に対する ryu-n'ivx「教える人＝教師」のようなばあいである [MG 35]。

§ 69 活格言語はこのような状態に近い言語段階にあるのではないかと思われる。これらの言語で形容詞的なものが動詞として表されるのは、このことと関係があると考えられるからである。一般的にいつて活格言語に形容詞が欠けていることは、なかなか気づかれなかった。最近になって活格言語の研究が進んでくると、品詞としての形容詞が欠けていることが、主張されるようになってきた。た

たとえばホイジャーは、アタパスカン語族に、名詞、動詞、小詞だけを品詞として認めた [KTA 104-105]¹⁹⁴。またファイアストーン (Firestone, H.L.) のように、トゥピ・グラニ語族には品詞としての形容詞がないとする研究も現れた [KTA 105]¹⁹⁵。これらの言語を通じて、形容詞的なものがまだ形態的な要素をとまわないうで裸のままであること、それが修飾する名詞の後ろに置かれることが多い (すなわち動詞の位置をとっていた) こと、などからみて、これらの活格言語では形容詞はまだ生成の途中であったとみることができる。

形容詞が欠けていることと関連して、名詞によって修飾するという表現の形が一般的であったことが、挙げられている [KTA 107, 108-109]。たとえばトゥリンギットの言語では、*dlet* は「雪」を意味しているが、修飾語としては「白い」の意味である。同じように *ixt* 「氷」は「堅い」を、*ta* 「石」は「石の」を表していた。

トゥピ語でも *abá* 「インディアン」は同時に「インディアンの」を意味し [KTA 107, 108-109]¹⁹⁶、*itá* は「石」と「石の」の両方を意味していた¹⁹⁷。

このほか、指小辞、指大辞、その他の接辞の発達も、形容詞が欠けていることと関係があったと思われる。たとえばアシニボイン語の *hoksí* 「子ども」と *hoksí-na* 「子ども・指小」=「小さい子ども」、*waxpé-pe* 「茶の葉」と *waxpé-pe-na* 「茶の葉・たくさん・指小」=「小さい多くの茶の葉」(ここで *-pe-* は数の多いことを示すための、印欧語の完了形にみられるような不完全な語根の重複) のようなばあいである。指小辞、指大辞はインド・ヨーロッパの言語に広くみられ、ロシア語ではとくによく発達しているものである。もちろんこれは形容詞が欠けているのを補うものではあっても、形容詞に代わるものではない。

形容詞と名詞の関係については、これまでは名詞の意味が抽象化することによって形容詞が発生してきたという考えが一般的であったように思われる。しかし、対格言語では明らかに形容詞である語が状態動詞を構成している活格言語の事実からみれば、名詞が形容詞をつくる一つの有力な手段であったとしても、形容詞はむしろ動詞からつくられるというのが、一般的な道筋であるように思われてくる。クリモフもそう考えているようである [KTA 109]。印欧語のばあいにも、たとえばロシア語の *belyj* 「白い」は **bhēl-* 「輝く」という語根からつくられ (cf. 梵 *bhāti* 「輝く」)、動詞からつくられたものであることが明らかである。

このように形容詞が品詞として独立しておらず、状態動詞として述語の位置に立つし、またネネツ語の *khasava-m* 「私は男だ」のように、名詞も述語の位置に立つときには、人称や時称の変化をするというような場合があることを考えれば、活格言語に連辞「～である」にあたる言葉がないのも、当然であると考えられよ

う。このことから逆に、連辞が欠けているということは、述語の名詞または形容詞の部分の「述語性」が高いことを示していると考えられる。ロシア語のばあい、現在形では連辞が「省略」されるのが普通であるが、これも第2部でみるように、活格言語で連辞が欠けていることと、何か関係があるのかもしれない。

§ 70 活格言語は、論理的には動詞が文法的な形態の主な担い手であるような動詞型から、名詞も動詞と並んで文法的な形態を担う混合型を経て、やがて名詞が主な形態の担い手になる名詞型に移る、という発展の経過を辿るといわれるが (§ 55 参照)、実際には、活格言語では概して名詞の文法的な形態の発達が弱く、大部分の言語が動詞型の段階にとどまっているといわれる [KTA 58-61]。このことからこれらの言語では対象の複数性が名詞ではなく、動詞によって表されることが説明される。またこのカテゴリーは主に活格動詞に現れるが、これも活格言語で活格が最も重要なカテゴリーであることから、当然であると考えられる。このような活格動詞には、「行く」、「走る」、「飛ぶ」、「死ぬ」、「すわる」、「立つ」、「横たわる」、「泳ぐ」、「漕ぐ」、「運ぶ」、「留まる」、「跳ぶ」、「倒れる」、「取る」のような意味をもつ動詞が多いといわれる [KTA 99]。

たとえばムスコギの言語では、*ísis*「彼は(単数のものを)取る」に対して *toáwis*「彼は(複数のものを)取る」があり、*ilídjis*「彼は(単数のものを)殺す」に対しては *pā'cadis*「彼は(複数のものを)殺す」が、また *lítkis*「彼は走る」に対しては *bifátkis*「彼らは走る」があるという [KTA 100] (§ 54 参照)。

同じような例を挙げれば、たとえばナヴァホの言語では動詞の語根は次のようになるという [KTA 100]¹⁹⁸。

意 味	単 数	複 数
「行 く」	-gáɬ	-kah
「すわる」	-dāɬ	-tá
「走 る」	-lyol	-džah
「死 んぬ」	-tsaɬ	-nēɬ

[cf. G&H 306-308]¹⁹⁹

オストホーフ (Osthoff Hermann 1847-1909) はかつて、印欧祖語についてこれと同じような語彙の対立があったと主張したといわれるが、彼はこのような現象を、これらの動詞が人間に身近な行為を表しているために、より細かに特徴づけたいという、人間の心理的な特徴のためであるとしているという [KTA 99]²⁰⁰。周知のように、ロシア語ではこれらの動詞のうちの移動を表すものが、定動詞と不定動詞という対立をもっている。定動詞というのは、行為が具体的に生起することを示

すものであり、したがって一定の方向性をもつ。たとえば *on idët v škólu* 「彼は学校にいくところだ」。これに対して不定動詞は行為を一定時間観察して抽象化したものと考えられる。したがってこれは行為の反復、不定方向の行為(たとえば「歩き回る」のように)、能力などを表す。たとえば *on khódit v škólu* 「彼は学校に通っている」、*oná khódit po úlicam* 「彼女はいろいろな通りを歩き回っている」、*rebénok užé khódit* 「子どもはもう歩ける」などがこれである²⁰¹。

念のためにこれを図示すれば、次のようになろう。

定動詞	不定動詞	意 味
<i>bežát'</i>	<i>bégat'</i>	「走る」
<i>ékhat'</i>	<i>ézdít'</i>	「(乗り物で)行く」
<i>gnat'</i>	<i>gonját'</i>	「追う」
<i>idtí</i>	<i>khodít'</i>	「(歩いて)行く」
<i>lezt'</i>	<i>lázit'</i>	「よじ登る」
<i>letét'</i>	<i>letát'</i>	「飛ぶ」
<i>nestí</i>	<i>nosít'</i>	「(歩いて)運ぶ」
<i>plyt'</i>	<i>plávat'</i>	「泳ぐ」
<i>polztí</i>	<i>pólzat'</i>	「這う」
<i>vestí</i>	<i>vodít'</i>	「導く」
<i>vezzí</i>	<i>vozít'</i>	「(乗り物で)運ぶ」

これは偶然の一致であろうか。

§ 71 このほか活格言語の包含事象であろうと思われるものに、一人称複数の包含形と排外形とがある。前に述べたように、包含形は聞き手を含めるものであり、排外形は含めないものである。たとえばグアラニ語の包含形 *yane-*「おまえを含めた我々」に対して排外形は *ore-*「おまえを含まない我々」である。またチョクタウの言語では、これはそれぞれ *hapišnu* と *pišnu* であるという [KTA 109]。このような区別がどうして生じてきたのかについては、いろいろな説があるという。たとえばシュミット (Schmidt, Wilhelm 1868-1954) は、これが社会的な上下関係にある二つの婚姻のクラスをもつ、母権性社会に生まれたものであるとし、アルゼンチンのケウェド (Quevedo, L.) は、支配階級と被支配階級が存在していたためであるとしているという [KTA 110]²⁰²。これに対してガムクレリゼ (Гамк्रेлидзе, Тамаз Валерианович 1929-) はこれを「人」と「もの」の対立であると考えているという [KTA 111]²⁰³。

このようにいろいろな説が生まれるのは、これが活格言語の包含事象であると考えられるのに、その意味上の関連性がもうひとつはつきりしないという、事情

によると思われる。これが活格言語の包含事象であるというのは、活格言語の初期の段階にあると思われるナデネ語族で、包含形と排外形の対立がみられないこと、前に述べたように、能格言語にはこれがみられること、の二つのことから、このカテゴリーが、活格言語の段階で生まれたと考えなければならないからである。クリモフは、このカテゴリーをもつ言語では、ふつう包含形には活格と不活格のカテゴリーが密接に関連していると推定している [KTA 111]。その理由としては、私見であるが、おそらく次のようなことになるであろう。すなわち、これまでみてきたように、活格言語のばあいには、行為動詞の中の意味上の他動詞のばあいには、生物は目的語に立つとき状態動詞の意味上の主語と同じ形、すなわち絶対格をとることになっていた。したがって、たとえ生物を示す名詞であっても、絶対格の形をもっているならば、行為に参与しないことを意味していたと、考えられる。この場合、もしも「我々」というとき、「我々」を構成する二人ないしそれ以上の生物が、等しく行為に参与するかそうでないかは、活格言語類型の構成原理にかかわることになる。またこのことは、活格のばあいにも、絶対格のばあいにも、等しくいえることである。

さらにこのことは、純理論的には二人称の複数にも、三人称の複数にもいえることであるが、これが一人称の複数に限られているのは、おそらく具体的な発話の状況とかかわっているのであろう。このとき「おれ」と「おまえ」の関係が、もっとも重要なものと思われるからである。

§ 72 これと関連して、活格言語の特徴として挙げられるものに、動詞のアスペクト (より正確に言えばアクチオンス・アルトといわれる、行為の様態) がある。これは言語の間にかかなり著しい共通性があり、その主なものは、完了 *perfectiva*、未完 *imperfectiva*、継続 *progressiva*、始発 *ingressiva*、反復 *iterativa*、強調 *intensiva*、願望 *desiderativa*、希求 *optativa* などであるという [KTA 145]。

クリモフは、これらの言語において、アクチオンス・アルトが時制よりも優位に立っている理由として、従来アクチオンス・アルトが原則として客観的な内容をもっているのに対して、時制はむしろ主観的な志向 *subjective orientation* をもっているという点に注意が向けられたとしている。たとえばヴント (Wundt, Wilhelm 1832-1920) はアクチオンス・アルトが「客観的」であるのに対して、法 *modus* は「主観的」であり、また時制のカテゴリーは「相対的」であるといっており [KTA 145-146]²⁰⁴、またグフマンは「動詞の時制の主観性に対するアクチオンス・アルトの客観性はすべての研究者によって強調されている」と述べているという [KTA 145]²⁰⁵。

さらにクリモフは一般的にアクション・アルトが時制より古いものである理由として、前者は主として語彙的なものであり、また後者は主として文法的なものであるが、一般的にいつて語彙的なものの方が文法的なものよりも古いという点を挙げている [KTA 146]。わが国においてもこの点については、以前から指摘されていた。たとえば泉井久之助は、「表現せられんとする或る過程を、先づ我々の有する時の観念的な段階に分類して、この分類に従って表現の形式を定めるのが時称の用法である。目前の或る過程の完成か不完成かを直ちに問ふのがアスペクトである。時称は間接的である、アスペクトは直接的である。時称は概念的であり理知的である、アスペクトは感性的であり感情的である。時称は抽象的であり、アスペクトは具体的である。アスペクトは量であり、時称は数である」²⁰⁶と述べている。

しかしアクション・アルトが客観的で時制が主観的なものであるというのは、直観的にはそのとおりであろうと思われるが、それだけでは、なぜアクション・アルトが活格言語に特徴的な現象であるのか、はっきりしない。クリモフはこれを活格言語の包含事象に数えているが [KTA 144]、なぜそうなのか明確な説明がないように思われる。活格動詞が多くのアクション・アルトを区別するのに対して、絶対動詞は通常ただ一つの形しかもたないことが述べられているだけである [KTA 144]。もしアクション・アルトというカテゴリーが活格言語の包含事象であるならば、それは活格言語の類型的原理から説明されなければならないであろう。

この点に関連して時制が主観的志向をもっている、というクリモフの言葉が示唆的であるように思われる。時制が主観的な志向をもっているとすれば、これと対立する概念であるアクション・アルトは、「客観的志向」、言い換えれば意味上の目的語の立場から、行為をみようとする点にあると思われるからである。意味上の目的語からすれば、行為が及びつつあるか、及んでしまっているか、及ぼうとしているかなどの区別は、行為の起こる相対的な時間よりも、はるかに重大であると思われる。もしそうとすれば活格構文では意味上の目的語と述語動詞が緊密なシンタグマをつくっているのであるから、述語動詞がアクション・アルトを表現しようとするのは、活格言語の包含事象であるということになる。このように考えれば、同じように名詞と緊密なシンタグマをつくっている絶対格構文においては、意味上の目的語は存在しないから、絶対動詞にアクション・アルトの区別が発達しなかったこともよく説明できるであろう。

再びもしそうとすれば、このシンタグマの関係については活格言語と同じである能格言語の場合にも、アクション・アルトは包含事象と考えなければならない

であろう。クリモフはこれについては直接には述べず、能格言語におけるアクチオンス・アルトと時制の関係については未だ十分に研究されていないが、これは言語によって一様でないとして、種々の言語の例を挙げるにとどまっている [KO 134-136]。

これまで述べてきたことが正しいとすれば、活格言語も能格言語も、意味上の主語と述語との関係が緊密になるにしたがって、時制を発達させていくと予想される。クリモフの記述している、能格言語におけるアクチオンス・アルトと時制の関係は、この過程を反映したものかもしれない。

8

多分類言語

§ 73 クリモフは、アイマラ語の例についてすでにみたように (§ 60 参照)、動詞が意味上の目的語となる対象の類別によって語彙的に異なっている例などから、活格言語の前の段階として、たとえばバントゥー諸語にみられるような、多分類言語の類型を考えているが、これは未だ多分に思弁的な仮説にとどまっている。『活格言語の類型学』において、彼はこの線に沿って諸家の所説を紹介している。たとえば彼はネミロフスキーの次のような箇所を引用する²⁰⁷。

事実の語るところによれば、名詞の類別の発達は、多分類体系から 2, 3 個の性の体系へ、あるいは完全な性の消滅へと進んでいる……あらためて言語発生の一般的過程における具体的なものから抽象的、一般的なものへの言語の発展が裏づけられる。言語における名詞のクラスが多ければ、それは、人々の社会的存在に基づいて、人々の思惟の中に思惟そのものとして形成されるところの客観世界の事物の分類を、より完全に言語に反映しているのであるから…… [KTA 268]。

印欧語の名詞についてのデスニツカヤの所説はすでに紹介したが、クリモフはこのほかに、セム語においては、-b に終わる名詞が有害な動物のクラスを表すとするヂヤコノフ (Дьяконов, Игорь Михайлович 1915-) の所説を引用している [KTA 271]。たとえば kalb-「犬」, *di'b-「狼」, *ta'lab-「狐」, dubb-「熊」, arnab-「兎」, 'aḵrab-「蠍」などがこれに属するという²⁰⁸。

一方多分類言語の側にも、伝統的なさまざまな分類が、生物と無生物の分類に統合されていく経過が認められるという。たとえばバントゥー語族に所属するスワヒリ語のばあい、分類として「活動体」(人と動物を合わせたもの、生物にはこれに

植物が加わる)に属するのは第一類と第二類であるが、それ以外の類に属する活動体名詞も存在している。クリモフは、これら第一類および第二類に属する活動体名詞が、第一類の文法的一致をするという形で、従来の分類が破られつつあるとする、オホチナ (Охотина, Наталия Вениаминова 1927-) の所説²⁰⁹、並びに他の分類に属する活動体名詞が社会的あるいは経済的な面で能動的であるか否かに従って第一類の文法的一致をする傾向の見えること、その際動物を表すものは本来の接頭辞を失うことはまれであるが、文法的にはやはり第一類の一致をする傾向があること、しかもこれは動物が物語、フォークロアなどで積極的な役割を果たしているとき、ないしは新聞の記事においてこれらが経済的に重要と考えられるときに多いという、ストロガーノヴァ (Строганова, И.Л.) の観察²¹⁰を引用している [KTA 282-285]。いまこれをまとめると次のようになるであろう。

念のためまずはじめにスワヒリ語の名詞の類別と動詞との文法的一致について述べておくと、名詞は 11 個の類に分たれる。主として抽象名詞を表すとされる第 11 類を除くと、他の 10 類は単数と複数に対応する。したがってこれらは 5 類と第 11 類の 6 類にまとめられる。

名詞のクラスと動詞の一致 * 印は別表

単 数			複 数			ク ラ ス 意 味
名 詞		動詞	名 詞		動詞	
類	接頭辞	接辞	類	接頭辞	接辞	
1	m(u)-, mw-	*	2	wa-	*	人
3	m(u)-, mw-	u-	4	mi-	i-	植物
5	j(i)-, ø-	li-	6	ma-	ya-	丸いもの
7	ki-	ki-	8	vi-	vi-	物
9	n(y)-, ø-	i-	10	n(y)-, ø-	zi-	動物
11	u-	u-	—	—	—	抽象名詞

別表：一類と二類の名詞の動詞との一致²¹¹

類	主 語			目 的 語		
	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称
1	ni-	u-	a-	-ni-	-ku-	-m-
2	tu-	m(w)-	wa-	-tu-	-wa-	-wa-

クラスの崩れの第一は、人、あるいは動物が、それが所属する名詞の類の接頭辞はとるが、動詞の一致は第一類、または複数のばあいには第二類に従うというものである。たとえば、

- a. Ki-jana m-refu w-a Nigeria a-li-soma.....
 = a-youth 1cl.-tall 1cl.-of Nigeria he-past-read.....
 = ナイジェリアの背の高い若者が読んだ.....

ここで kijana は第7類 (ki-family) に属している。これは原則として物のクラスであるが、他のクラスの名詞がこのクラスの接頭辞をとると指小辞になる。したがって形式的にはこれは *Kijana kirefu cha Nigeria kilisoma..... のようにならないはずである。しかしスワヒリ語の現在の文法では、いわゆる所有形容詞とそれに準じる若干の語を除いて、このような一致はすでに存在しない、次の例も同様である。

- b. Ma-jernadari w-a ma-jeshi wa-li-toa amri.....
 = 6cl.-officer 2cl.-of 6cl.-army 3pl.-past-give command.....
 = 軍の士官たちが命令を与えた.....
- c. Ndege m-dogo a-me-ruka.
 = (9cl.-)bird 1cl.-little 3sg.-perfect-jump.
 = 小さな鳥が飛び立った。

第二の崩れ方は、本来のクラス接頭辞はつけたままで、その前に第一類または第二類の接頭辞を重ねるやり方である。たとえば第9類 (N クラス) の nyama「獣」に対して単数 m-nyama、複数 wa-nyama のようになる。たとえば、

- d. M-ndege huyu a-li-ruka hewa-ni. = 1cl.-bird this 3pl.-past-jump air-loc.
 = 鳥 (本来 N クラス) が空中に飛び上がった。

第三の方法は、クラス接頭辞そのものを第一類に代えてしまうものである。たとえば kiongozi「案内人」(ki-family) に対して、mw-ongozi/wa-ongozi のようにするばあいである。

§ 74 クリモフは、『内容的類型学の諸原理』においても次のようにいっているが、『活格言語の類型学』に較べて、多分類言語についての見解にさほどの進展があったようには思えない。

前に発表した論文の一つで、本論文の著者はいくつかの活格言語に多分類言語体系の残滓である現象が存在するという見解を述べたが、これは、記述的な性格をもったもっと以前の研究論文においても、すでにはっきりとしない形ではあったが、前提とされていた。この点に関係する議論として、名詞の活性と不活性のクラス的不安定な対立が安定した活動体と不活動体の対立にある程度近似していること、活格言語に分類数詞の体系、三人称の所有変化にクラスによる段階的な変化の体系が存在することなどを挙げることができる²¹²。この点に関連して注目には値するのは、現

在基本的に能格または主格言語であるものの多くに、内容的に有契的な名詞分類の残滓が存在するという見解が、言語学の文献にみられることである。最後にここで想起すべきは、かつては現在みられるよりも多くの多分類言語が存在していたとする、マインホフ (Meinhof, Carl 1857-1944) の直感的な見解である²¹³。これは歴史的・類型学的な彼の展望をある程度反映している。

逆に、現在活格あるいは能格言語として機能しているものが……これに先立つ主格言語の状態から導き出されたとするいかなる研究も、著者は知らない。

言語の類型学的変化に特徴的な道程に関する特殊研究文献の資料を手短かに一般化することに関連して、次の点も述べておくことが適当であろう。すなわち多少とも研究されている多分類言語においては、明示的な名詞のクラスが暗示的なものに変化し、それにともなってその数を減少させ、活格体系の枠内における語彙の形成原理を想起させるところの、活動体と不活動体の二項対立をもつようになることである。周知のようにすでに今世紀の 30 年代にこのプロセスはバントゥー諸語の資料によって論証された。ヴィノグラードフは、バントゥー類諸言語の一つの特徴と関連して、次のように書いている。「さまざまな言語における多分類体系が、一様に活動体と不活動体の対立を発展させる方向に単純化する過程は、偶然的なものではありえない。したがって明らかにバントゥーの名詞のクラスの体系には、暗示的に存在している対立を明示化するようなこのカテゴリーの発展の可能性が包蔵されている。活動体の意味的クラスの基礎をなす人 (I) と動物 (IX) との区別は、すでにある程度バントゥー祖語に存在していた。すなわち数および文法的一致を示す接頭辞は I と IX を除くすべてのクラスにおいて高い音調をもち、属格構造においては、結合辞 (connective) -a は、I と IX のクラスについては低い音調、その他のすべてのクラスについては高い音調をもつ一致の接頭辞をもつ……」[KP 185-187]。

すなわち、クリモフの主張は二つの点からなっている。その第一は、現在のところ、活格言語、能格言語あるいは対格言語の類型が、多分類言語類型に変化した例が存在しないこと、そして多分類言語の内部で生物・無生物あるいは活動体・不活動体の二項対立に向かう過程の存在が観察されること、である。

これは変化の方向という点ではそれなりの説得性のある考えであるが、他方クリモフの所説には、多分類言語類型における主語・述語・目的語の関係がどのようなものであるかについての言及がないように思われる。言語の類型は、核をなす主語・述語・目的語関係のタイプによって決定されるというのが、内容的類型学の主張であるとすれば、多分類言語の場合においても、この関係がどのようなものであり、またそれによって規定される包含事象はどのようなものであるかについての説明が、必要とされよう。これに属するものとしては、わずかに「多分類言語における名詞変化と他動詞・自動詞という二項対立の完全な欠如」[KP 181]

という説明がみられるにすぎない。

筆者はバントゥー諸語についての知識はないので、専門家の意見を仰ぐしかないが、上述の別表にみえるように、人を表す第一類と第二類のばあいには人称の別と並んで、主語の位置にくる形と、目的語の位置にくる形とが区別されている。これが格の発生の萌芽的形態であるとするれば、スワヒリ語は多分類言語の後期に属する言語であるといえるのかもしれない²¹⁴。あるいはまた他動詞・自動詞が完全に欠如しているとするれば、スワヒリ語にみられる「受動態」はどう解すべきなのであろうか。たとえば、

M-toto a-li-pig-wa na baba y-ake.
= 1cl.-boy he-past-beat-passive by father 3cl.-his
子どもは彼の父親に叩かれた。
cf. Baba y-ake a-li-m-piga m-toto.
= father 3cl.-his he-past-him-beat 1cl.-boy.

いずれにもせよ、内容的類型学の観点からの多分類言語の研究が必要とされよう。

9

いわゆる混合類型の諸問題

§ 75 クリモフは混合類型について次のように述べている。

具体的な言語が一定の言語のクラスに属するという、通常存在する可能性は……明らかに異なるタイプの構造的特徴が結合している多くの言語が実際に存在していることが経験的によく知られているということと矛盾するものではない。このばあい通常は二つの言語類型の特徴が共存している例が考えられるが、ばあいによっては第三の類型の特徴が存在していることが、かなりはっきりと感じられる例もある。たとえばナフ・ダゲスタン諸語のばあい、能格類型の要素が主となり、それに主格類型が従属しているが、活格類型の要素も個々に認められる。類型的要素の多様な可能な結合の中で、専門的な文献において最もよく記述されているのは、一方では主格類型、他方では能格類型あるいは活格類型の諸特徴が、同一言語に共存している例である [KP 122-123]

すなわち、いわゆる split ergativity の問題が、ここでは単なる能格類型と対格類型の問題だけではなく、一般的な類型の混合の問題として扱われているのであり、split ergativity はその特殊な部分にすぎないことになる。

クリモフは混合類型をいくつかの型に分類している。その一つは時称に関するものである。このうち最もよくみられるものは、過去形あるいはアオリストが能格型で、現在時称が対格型であるばあいである。ここに属するものとしては、ブルシャスキ語、プシトゥー、ヒンディー、ラジャスターニなど若干のインド・イラン諸語、古典チベット語のような、チベット・ビルマ諸語の一部、サモア語、ユカテック(マヤ)語、未完了過去が対格類型に傾いているバスク語などがあるという。

ナフ・ダゲスタン諸語のうち、継続体 *durative* が対格類型の特徴をもつもの。グルジア語、スヴァン語のようなカルトヴェリ諸語もこれに属するという²¹⁵。この後者は現在時称は対格型で、アオリストでは活格型の特徴を示す。

第二の型は人称代名詞、人名、人を表す普通名詞、生き物を表す普通名詞、ものを表す普通名詞の順に対格類型から能格類型へと移行するタイプで、オーストラリアの諸言語にしばしばみられるという。たとえばオーストラリアのディルバル語では通常は A, S, O の関係が能格類型に従っているが、一人称および二人称の代名詞では A と S は無標であるのに対して、O は有標で語尾 *-na* をもつという。ただしクリモフはこの語尾が通常いわれているように対格の指標であるかどうかは、なお疑っているようである [KP 124]。

第三の型は、バスク語、オーストラリアのムリンパタ語、あるいはナフ・ダゲスタン語族のウディン語などにみられるもので、名詞は能格類型であるが、動詞は対格類型に属するというものである。

第四に最近いわれているものとして、統語のレヴェルは対格類型であるが、形態のレヴェルには能格類型が現れるというように、言語のレヴェルによって類型の相違が認められるというものがある²¹⁶。

クリモフはこの第四の型について、「このような主張は全体として形態のレヴェルと統語のレヴェルにおける言語の類型的分布を正しく反映している」[KP 125] としながらも、「しかしながら忘れてならないのは、自己の体系的性質によって、言語はそのいかなる発展段階においても、類型的に異なった成分の機械的な共存物ではないということである」[KP 126] としている。

このような主張はこれまでみてきた内容的類型学の立場からは当然であるが、時制によって類型が異なる場合のように、類型学的なヒエラルキーの頂点にある統語のレヴェルにおいて、異なる言語類型が認められるときには、どちらを優先させるべきかという問題が生じるであろう。この点についてはクリモフもあまり明確な理論的説明を行いていないような印象を受ける。

序でにいえば、クリモフは逆のばあい、すなわち統語のレヴェルでは能格的で

あって、形態のレベルでは対格的であるようなばあい、存在しないと考えている [KP 128-131, 174].

§ 76 言語類型間については、すでに述べたように多分類言語、活格言語、能格言語、対格言語の方向に発展してきたと考えられるが、この発展が逆になるばあい、すなわちいわば「先祖返り」が起こりうるかどうかという問題がある。クリモフはこれに対して明確に否定的である。たとえば、彼は次のように断定している。

現在のところ歴史的に主格体系として特徴づけられた言語が能格言語化したという、いくらかでも信頼できる例は一つとして挙げるができない。一般に、主格的な状態から能格的な状態に言語の構造的変成が生じたとする、きわめて少数の解釈のすべては、それぞれの特殊研究が、能格の一般理論と接することが不十分であったために生じたという印象を受ける [KP 191].

クリモフはこのような立場から、「その主格構造が能格化する過程を反映しているという幻想を類型学者に深く植えつけている」インド・イラン語派の言語について、これらの言語が対格言語であり、能格的なものは部分的であり、形態のレベルにおけるものでしかないとしている [KP 191-193]. しかし同時にクリモフの「しかしながら、たとえば *we ez dīt-im* 「おまえは・私を・見た」、あるいは *šivēn hesp dīt-in* 「羊飼いが・馬を・見た」のように、主語が斜格形で直接目的語が直格であり、また動詞述語が本来対象と一致している、クルド語の構造がどうして明らかな能格的形態であるのか、理解するのはむずかしい。直格と斜格の形態的対立は決して常に絶対格と能格という機能的対立に還元できないことを強調する必要がある」と述べていることには、疑問がある。これらの対格言語が類型として能格あるいは活格に変化してはいないとしても、能格的な現象を二次的にもつことは、たとえばロシア語についても認められると思われるからである。この点については今後理論的にも検討が必要とされよう (§ 79 参照)。

§ 77 これまで言語類型学というものがどのようなものかについて、主にクリ

モフの説を中心にしてぎっとながめてきた。言語のもついろいろな現象は、活格言語、能格言語、対格言語といった、それぞれの言語類型のもっている基本的な原理に従って構造化されていると考えられる。そのようなものを類型学では包含事象といった。それと同時に、言語というものは歴史のなかで継続しながら発展していくものであるから、前の段階の類型の包含事象のいくつかを消滅させないで継承している。そのなかには、新しい段階の類型の原理による新しい解釈を受けて包含事象となるものもあれば、そのような解釈を受けることができないで、随伴事象になるものもある。逆に随伴事象の中には、このように前の段階の類型の包含事象から生まれるものもあれば、次の段階の類型の萌芽として生まれてくるものもあると、考えられる。

活格言語は主述関係を、主体が生きものであるかどうかという観点から構造化する。したがって動詞は、人や植物と動物を含む生きものの行為や状態を表すもの(活格動詞)と、それ以外の「もの」の状態を表すもの(絶対動詞)とに大きく分かれる。したがって行為が他動詞であるかそれとも自動詞であるかという区別は、文法的にはあまり重要なものではないということになる。このために、意味上の自動詞と他動詞は文の中で同じ資格をもって述語となるから、意味的他動詞の目的語も、動詞述語の一部分にすぎないことになる。同じように名詞も生きものであるかどうかによって、活性と不活性とに分かれる。また動詞述語の一部になる意味上の目的語の位置に立つばあいには、活性名詞でも格の指標をもたない無規定の形(絶対格)をとる。不活性の名詞はふつう無規定であるから、結果として絶対動詞の主語と、活格動詞のうちの意味上の他動詞の目的語の形とは同じことになる。

能格言語のばあいには、主体以外のものに働きかける積極的なものであるかどうかという観点から、主述関係がつくられる。したがって動詞はこの意味での積極的なもの(能格動詞)と、消極的なもの(絶対動詞)とに分けられる²¹⁷。活格言語の活格動詞のうちの意味上の他動詞の大部分といくつかの意味上の自動詞が、能格動詞に受け継がれたのである。残りの動詞と活格言語の絶対動詞はともに能格言語の絶対動詞に属することになった²¹⁸。

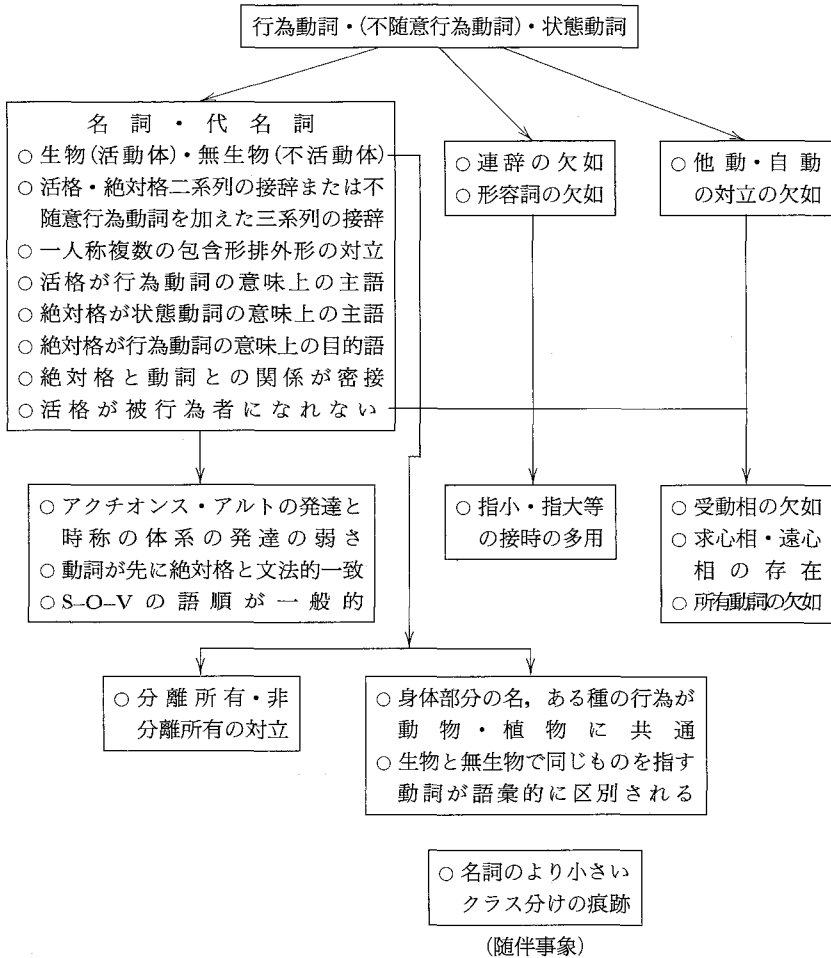
名詞の格もこれにともなって分類替えが行われ、行為に積極的に参与することを表す能格と、そうでない絶対格に分かれる。能格動詞述語の意味上の主語になるのは、能格に立つ名詞ということになる。しかし同じ名詞でも、能格動詞のうちの意味上の他動詞の目的語になるとときには、消極的なはたらきを表すものとして、無規定な絶対格に立つ。これはもともと消極的な行為を表す絶対動詞述語の主語になるものと、同じ形である。したがって能格動詞の意味上の主語は能格に

立つ名詞であるが、能格動詞の意味上の目的語と、絶対動詞の意味上の主語とは、絶対格に立つ名詞ということになる。結果として能格言語の文は、見かけ上活格言語の文と同じ構造をもつことになる。また文の中での述語の重要度は、活格言語の場合と同じく相対的に高く、主語と絶対動詞、目的語と能格動詞が第一次のシンタグマをつくり、能格動詞の場合にはこれが能格と結びついて第二次のシンタグマをつくっていると考えられる。その結果、能格言語の場合にも、能動と受動という意味での相は、まだありえなかった。このような文の構造によって、動詞述語は絶対格に立つ名詞と文法的な一致を行うのが、原則であった。能格に立つ名詞との文法的な一致は二次的に生じたものと考えられている。この一致を行う言語では、絶対格との文法的な一致が主に接頭辞によって行われるのに対し、能格との文法的な一致は接尾辞によって行われるか、あるいは接頭辞によるときには、絶対格の指標の前に置かれるのがつねである。

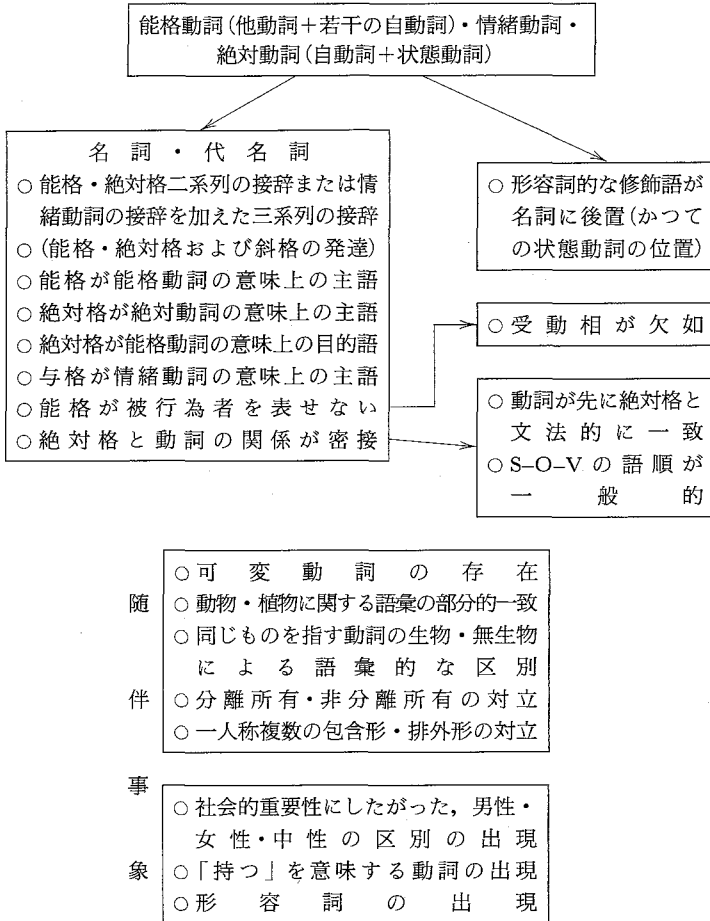
もし動詞述語が意味上の目的語と文法的な一致を行うことをやめて意味上の主語と一致を行うようになり、動詞と意味上の主語との関係が緊密になって、動詞述語と意味上の主語とが第一次のシンタグマをつくるようになると、それまで無徴的であった意味上の目的語が有徴になって、対格言語が生まれることになる。このようなわけで、能格言語は活格言語と対格言語との中間にある言語類型であることができる。一般的に言って能格言語が多くの随件事象をもち、構造として不徹底であるのは、このためであるように思われる。

しかし他方対格言語は必ず能格言語から発生したかといえば、必ずしもそうではなく、むしろ能格言語を経ることなく、直接に活格言語から生じることが多かったと考えられている。印欧語族の諸言語もまたそうであったといわれている。

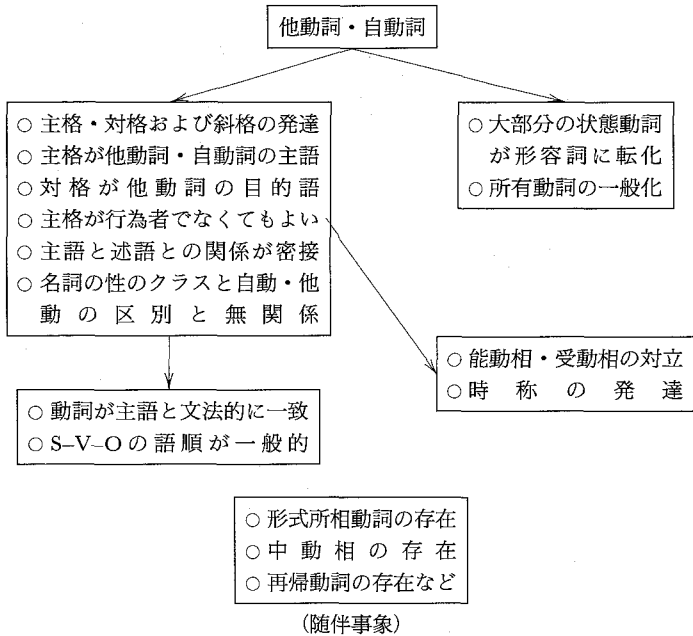
活 格 言 語



能 格 言 語



対 格 言 語



類型学序説——ロシア・ソヴェト言語研究の貢献

第 2 部

ロシア語の類型学の諸問題

§ 78 内容的言語類型学がどのようなもので、またどのようなところまで到達しているかは、これまで述べてきたとおりである。この類型学は、一つの統一した体系としては、やっとその輪郭がはっきりしてきたところであって、まだ細かいところまで十分に研究されているとはいえない、と思われる。これまで述べてきた活格言語、能格言語および対格言語という言語類型以外の類型がいくつあるのか、またそれはどのようなものか、という総合的な意味づけも、まだ行われていないというのが、実情である。とくにたとえばパントゥー語族のような「多分類言語類型」の内部の理論的な体系性のようなものも、まだはっきりしていないように思われる。対格言語の特徴についても、活格言語や能格言語との比較によって、やっとかなり明らかになってきたというのが、現状である。

またこれまでみてきたように、活格言語と能格言語、活格言語と対格言語、または能格言語と対格言語のあいだには歴史的な関連があるというのが、類型学の結論であるとすれば、たとえばイラン語派に属しているいくつかの言語のように、もともと印欧語族に属していて、対格言語であってもいいはずのものが、能格言語の性格を色濃くもっているというようなばあいには、どう説明したらいいのであろうか。すでに述べたように、印欧語は、古い時代には活格言語の類型に属していたと考えられる、多くの特徴をもっているといわれる [G&H 265-319]。これが現在認められているように、対格言語に発展したとすると、イラン語派だけが独自の発展をして、活格言語から能格言語になったという可能性も、理論的にはないわけではない。しかしこれらの言語の能格言語的な性格は、その発生が比較的新しく、不徹底であって、対格言語の特徴が基本的に存在していた時期に現れたと思われるから、これらの言語の基本的な特徴は対格言語であるとして、そのような可能性は否定されるのが、普通であるように思われる。

たとえばグフマンによれば、インド・イラン語派にみられる能格構文は自動詞・他動詞の区別より遅く生じた二次的なものであるが、イラン諸語の能格構文についてみれば、これは古イラン語の分詞による構文、たとえば *ima tya maná kṛtam* 「それ・関係詞(対格)・私によって・なされた(対格)」=「私がなしたこと」について、バンヴニストは、これを古ペルシア語の完了形に取って替わった形であるとし

ている。ここで意味上の主語である「私」manáは具格に立ち、過去分詞の kṛtam は意味上の目的語である関係詞と文法的な一致をしているのである。またインド諸語における能格構文も、その始まりはヴェーダの言語ではなくて、サンスクリットにあるという [GI 223]。

このように考えれば、インド・イラン語派にみられる能格言語的な現象は、たとえばほかの能格言語との接触、混交または基層言語の影響による、二次的なものであるということになろう [KO 146]¹。しかし言語というものが、何の必然性もないのに外のものの影響を取り入れ、しかもその取り入れたものに何の構造的な意味も与えないで取り込んでしまうというのは、言語が一つの構造体であるという、現代言語学の最も基本的な仮定に背くことになる。言語というものは、たとえばはじめは意味のないものであっても、構造の中に取り入れようとするときには、一定の構造的な意味を与えようとすると思われる。もしそのような意味づけを与えられないならば、そのような要素はやがて消滅してしまうに違いない。もしそうであるとすれば、インド・イラン語派のこれらの言語で、能格的な現象がどんな意味づけをされたのかを知ることが、類型学の理論にとって大きな意味をもつことになるとと思われる。しかしこれを明らかにすることは、専門家の研究を待つほかはない。

グフマンは、たとえば古高地ドイツ語の habēta phigboum gipflanzōtan「持つ・一人称・単十木・単・対格+植える(過去分詞)・単・男・対格」(I-have a-tree planted) = 「私は木を植えた」のように、同様の例が印欧語に散在していることをあげ、次のようにいっている。

.....文献においてこれが一定の外的な影響であるとする仮説が一再ならず表明された。たとえば東部イランの諸語の非印欧語型の諸言語との地域的な近さは、印欧語の文法構造から逸脱したこの不規則な構文の、可能な説明の一つとして、挙げられてきたが、この地域的な近さは構造の変成と、(本来の言語の統語法とは)構造を異にする一連の統語法の出現の、強力なファクターとなった可能性がある。一定の意義をもつ動詞に関して、十分に安定し、生産性をもっているところの、これと同じ構造をもつ構文が存在していたことも、少なからずこのことを促したに違いない。それにもかかわらず、インド・イラン語圏における、二次的な能格性の問題は、印欧語学の明らかでない問題の一つで、あり続けている [GI 226-227]。

§ 79 ロシア語が、私たちの知っている英語やドイツ語、フランス語といったヨーロッパの言語に較べて、いろいろ変わった特徴をもっていることは、昔から

よく知られている。しかしそれらの特徴がどうしてロシア語にあるのかについては、説明する手段をもっていなかった。これらの特徴は一つひとつ取り上げれば単なる偶然にすぎないようにみえるが、まとめて全体として考えると、内容的類型学で取り上げられ、説明されたものと、いろいろな共通点をもっていることがわかってくる。そういう意味で内容的類型学というのは、私たちに、これまでとは少し違った視点からものをみることを教えてくれるものである、ということが出来る。この立場に立つと、いままでみえなかったことが、みえてくるように思われるのである。

このようなわけで、ロシア語についての類型学的な立場からの考察も、まずこの立場からみて、興味があると思われる現象があるかどうかという、事実を確認すること、そしてそれらの現象が、スラヴ諸語の全体に共通のものであるか、それとも主にロシア語にみられるものであるかを、はっきりさせることから始めることが必要であろう。そしてその次には、これらの現象の間には何らかの内的な関係があるのかどうか、もしあるとすればそれはどのようなものであるかを、考えることになる。このような研究の仕方は、最終的にはロシア語がもっている構造的な原理がどのようなものであるかを明らかにするという方向に進まなければならないと思われるが、現在のところロシア語については、内容的類型学の立場からみて興味のある現象があるかないかということも、まだ意識的に研究されてはいないことから、ここで述べることもロシア語の類型学的な研究そのものというよりも、むしろそのための準備段階のものになるよりほかはない²。

2

活動体と不活動体

§ 80 活格言語のばあいによく似たものとしてまず目を引くのは、活動体と不活動体の区別である。これはロシア語にかぎらずスラヴ諸語に広くみられるが、ロシア語のばあいには植物は不活動体に属しているという点で、活性・不活性の区別とは異なっている。活格言語のばあい、「太陽」、「月」、「星」、「鍋」などのように不活性名詞に属するはずなのに、生活上の重要性のために活性名詞として扱われるばあいがあるといわれる。したがって活格であるか不活格であるかという区別の基礎には、その言語社会の人々が対象に与える、たとえば宗教などを含む、個人あるいは社会にとってその対象がもっているところの重要性、ないしは

価値の観念の違いがあると考えられる。ロシア語の**покойник**「故人」や**мертвец**「死人」は活動体として扱われている。しかしその同じ対象を**труп**「死体」という語で表すときには、不活動体として扱われる。その違いは「死人」や「故人」の**ばあい**には、まだこれらの言葉が指し示す対象に対する「はばかり」や「尊敬」の念があるのに対し、「死体」の**ばあい**には、単なる「もの」としてしかこれをみていない、というところにある。このことは、ロシア語の活動体と不活動体のカテゴリーの基底にも、対象に与える価値の違いがあることを、示すものであるということができよう。逆に意味の上では明らかに活動体に属すると思われるものでも、たとえば**народ**, **толпа**「群衆」のように、集合としてとらえられるときには、不活動体として扱われる。これはある対象が集合として認識される**ばあい**、その集合をつくっている成員の一つひとつの個性が弱くなることと、関連していると思われる。したがって個性の強いものほど、集まっても集合として認識されにくい、ということが起こる³。中間的なものとして、魚や両生類、貝類のように、複数をもってはいるが個性が比較的弱いものは、生きているかどうかではなく、食品として考えられるときには不活動体として、そうでないときには活動体として扱われる。このことも上で述べた価値の感覚と関連するものと考えられる。たとえば **покупать килыки, омары, шпроты, устрицы**「いわし、いせえび、小さいいわし、かき(不活動体)を買う」に対して、**ловить килек, омаров, шпрот, устриц**「いわし、いせえび、小さいいわし、かき(活動体)を採る」のような**ばあい**である。

これに対してたとえば**бог**「神」、**дух**「精霊」、**демон**「悪魔」のような超自然の観念に対して与えられる名前は、活動体として扱われる。興味のあるのは、**кукла**「人形」のほか、**валет**「(トランプの)ジャック」、**туз**「エース」、**ферзь**「(チェスの)女王」のように、人をかたどったものが、活動体として扱われることである。いわゆる *anthropomorphism* である。これらの名詞が活動体に分類されるのも、対象の個性の強さに支えられているためであると考えられる。

ダシコ(Дашко, М.А.)の報告するところによれば、ドラヴィダ語族に属するマラヤラム語では、意味上の他動詞の目的語になるものは、対格の外に目的格があり、目的格は主格と同じ形をしているという。そしてこの**ばあい**、どちらを選択するかは、目的語になる名詞が、活動体(人、動物、鳥、昆虫)を示すか、不活動体を示すかに依存しているという。しかし動詞 **kurikkuga**「示す」、**pattuga**「触れる」から形成された後置詞 **kuriccu** および **patti**「ついて」の**ばあい**にはこの区別はなされず、つねに有徹的な対格が用いられること、この言語では複数を作る手続

きが、1) 人および神のばあいには *manushyan - manushyar* 「人」、*acchan - acchanmār* 「父」のように、*-r, -mār, -kār* により、2) それ以外の動物、鳥、あるいは不活動体は、*āna - ānagaḷ* 「象」、*maram - marangaḷ* 「木」のように、*-kaḷ* (異形態 *-gaḷ, -ngaḷ, -kkaḷ* がある) が用いられるが、この手続きがいま述べた区別と対応していないこと、また他のドラヴィダ語がこの区別を知らないこと、などから、これが後に発達したものであろうとしている⁴。

このように、活動体名詞によって表される対象に比較的強い個性が与えられることは、歴史的にも裏づけられる。活動体名詞の形態的な特徴は、不活動体名詞が主格と同じ形の対格をもつ(主・対格形)のに対して、対格が生格と同じ形をもつ(生・対格形)ことであるが、古スラヴ語で書かれたオストロミル福音書にすでに、たとえば *оузьрѣ Исоуса идоща* 「彼は見た・イエスを・行きつつあるのを」= 「彼はイエスが行くのを見た」のように、対格が生格と同じ形をしている例がみられる。古ロシア語の文献を調べてみれば、このような生・対格形は、はじめ *e/o* 語幹で人を表す、男性の固有名詞の単数に現れたと考えられる。たとえば 13 世紀に成立したと考えられているノヴゴロド第一年代記の宗務院本によれば、すでにこの時期には、このような名詞に生・対格形が一般化する過程はほとんど終わっていたとみることができる。筆者の調べたかぎりでは、394 例のうちの 386 例 (98%) が生・対格形になっているのである⁵。

一方 *e/o* 語幹で人を表す男性普通名詞の単数のばあい、総計 317 例のうち、生・対格形をとるものは 263 例 (83%)、主・対格形をとるものが 53 例 (17%) である。このことから、生・対格をとるものは固有名詞ほどではないが、かなり一般化していることがわかる。この文献の中で動物を表す *e/o* 語幹名詞は単数で 1 例 (*змѣи* 「蛇」)、複数で 11 例 (*буволы* 「水牛」、*вельблуды* 「らくだ」、*коне* 「馬」、*куры* 「雄鳥」、*соболи* 「てん」など) みられるが、これらはすべて主・対格をもっており、これらの名詞には、まだ活動体・不活動体の区別は及んでいなかったといえる。

§ 81 人を表す普通名詞で生・対格をとるものについて、意味内容を観察すれば、まず第一に教会関係の職名、僧侶を指すもの、またはこれと密接に関係しているものの名が挙げられる。たとえば *архиепископъ* 「大主教」、*архимандритъ* 「大僧院長」、*иереи* 「司祭」、*попинъ* 「教会の長老」、*поповиць* 「僧侶の子」、*митрополитъ* 「総主教」、*пророкъ* 「予言者」、*цѣрньць* 「修道僧」、*епископъ* 「主教」、*попъ* 「僧」、*игумень* 「修道院長」などである。

第二に宗教的な概念を表すものがある。たとえば *исповедникъ* 「迫害を受けた

聖人」, поборникъ「擁護者」, поспешникъ「援護者」などである。さきに述べたように, 厳密に言えば人ではないが, богъ「神」, духъ「精霊」なども, ここに入ることができる。

第三に社会的に身分が高い人々を表すものがある。たとえば, господинъ「主人」, королевицъ「王子」, цѣсарь「皇帝」などである。отъць「父」, стрѣи「父方のおじ」などのように, 親族関係の上位にあるものを示す語も, ここに入ると思われる。なぜならば, шуринъ「妻の兄弟」, сынъ「息子」, сыновъцъ「兄弟の息子」のように, 親族関係で下位にあるものは, ほとんどすべて主・対格をもって現れるからである。

§ 82 人を指す e/o 語幹の普通名詞の複数形に生・対格形が用いられた最も古い例は, 14 世紀のモスクワ大公イヴァン・カリタ (Иван Калита, 在位 1325-1340) の書簡にみられる, пожаловаль есмь соколниковъ печерскихъ「私はペチェルスキーの鷹匠たち (生・対格) に贈与する」という文であるといわれるが⁶, ノヴゴロド第一年代記宗務院本では総数 249 例について, 生・対格形をとるものは, わずかに 27 例 (11%) にすぎない。残りの 211 例 (89%) はまだ主・対格形をもっているのである。

女性名詞の複数にこのカテゴリーが一般化するのは男性名詞よりもさらに遅れ, 16 世紀になってはじめて生・対格の例がみられたという。ドモストロイ (家訓) の и рабынь научити「婢女をも教えるべきである」というのがこれである。しかしこの時代にはこのような形はまだ散発的にしかみられず, 本格的に一般化するまでには, さらに一世紀を必要とした。これが女性名詞の複数に一般化するのは, 17 世紀になってからである⁷。

動物を表す名詞の単数にこのカテゴリーが普及するのも, 人を指すばあいと同じように, 男性名詞のばあいが早く⁸, その普及の過程は, 1649 年に成立したウロジエーニエ Уложение と呼ばれる法典において, 一応完成しているのがみられる。動物を表す女性名詞の複数にこのカテゴリーが及ぶのは, 17 世紀以降のことである。

中性名詞はもともと不活動体に属するものであるから, このカテゴリーとは関係がないはずであるが, 現代ロシア語では中性名詞が活動体に属する対象を表すことも, 少しずつ増えてきた。このためにこれらの名詞は, 複数で生・対格をもつようになった。たとえばもともと「顔」を表していた лицо は, 「人物」を表すときには複数対格が生格と同じ лиц となる。また насекомое「昆虫」, животное

「動物」などのほか、страшилище「お化け」、чудище, чудовище「怪物」のような超自然の「生き物」も、複数で生・対格形をとる。したがって活動体と不活動体というカテゴリーは、ロシア語では三つの性を通じてみられる、発展しつつあるカテゴリーであるということができる。

これまでの文法家の説明では、対格が生格と同じ形をもつのは、第一にスラヴ語のように自由な語順をもつ言語では、対格が主格と同じであると、どれが主語かわからないことになるから、これを避けるためであり、第二に活動体の名詞に生・対格が現れるのは、これらの名詞にとって主語であるか目的語であるかの区別が、とくに重要だったからである⁹。この考えを推し進めれば、女性名詞が単数で生・対格をとらないのは、女性名詞の単数は主格とは違う形の対格をもっているために、主格と間違われる心配がないからだということになる。しかし生・対格の発生が主語と目的語の混同を避けるためだけであつたならば、それはなにも活動体の名詞に限ったことではない。また女性名詞でも、たとえば¹⁰を主格語尾にもつ第三変化に属する名詞は、活動体名詞であっても、単数対格で主格と同じ語尾をもっているが、いま述べた説ではこのことをうまく説明できない。さらに中性名詞が単数対格でこの区別をしないことも、まったく説明できないであろう。

細かいことは抜きにしてこれまでみてきたことを少し手荒くまとめれば、生・対格ははじめ身分の高い人を表す固有名詞の単数に現れ、次に普通名詞の単数に及んだ。それからこれは男性名詞の複数に拡がり、やがて女性名詞の複数に一般化した。動物を表す名詞はその後になって男性単数、男性複数、女性複数の順でこの区別をもつようになった。そして最後に中性名詞の複数がこの区別を知るようになる。

これをまとめれば、おおよそ次のようになるであろう。

1) 人を指す名詞

11) 男性単数

111) 高位の人の固有名詞 13世紀以前

112) 教会の職名、高位の人の普通名詞 13世紀頃

12) 男性複数

121) 一般の人の名詞 15世紀頃

12) 女性複数

122) 一般の人の名詞 17世紀頃

2) 動物を指す名詞

21) 男性

211) 男性単数	17 世紀中頃
212) 男性複数	17 世紀以降
22) 女性	
222) 女性複数	17 世紀以降
3) 中性複数で人、動物を表す名詞	?

チェルヌイフ (Черных, Павел Яковлевич 1896-1970) は動物を表す名詞において、いつ生格が対格の代わりに用いられるようになったかを、確定することはむずかしいとしながらも、16 世紀の前半のモスクワの俗語においては、人を表す名詞はまだ動物を表す名詞とは対格の形がはっきり異なっていたと述べ、さらに先に述べたウロジェーニエの言語では、若干の例外を除けば、男性名詞の単数においてすべての人名および動物名を表す名詞に、生・対格形が一般化していた、としている¹⁰。

チェルヌイフのこのような見解と上述の表とを比べれば、122) と 211) は実際にはほとんど同時に起こった可能性がある。

もし 122) の人を表す女性名詞の複数形に生・対格形が一般化するのが、動物を表す男性名詞よりも早いとすれば、明らかにここでは女性単数と中性単数を除いて、「人」-「動物」, 「単数」-「複数」, 「男性」-「女性」の対立はこの順序を軸にして、一つの階層的順序を構成していることになる。もし反対であったならば、「男性」-「女性」の対立が、「人」-「動物」の対立よりも、階層的に上位の順序をもつことになる。中性複数是最も遅く活動体・不活動体の区別に参与すると思われるが、いつそうなったかについて、諸家は触れるところがない。

このように考えれば、活動体と不活動体という区別は、対象の社会的な重要性の順に拡がっていったのであって、その基底にはこのような価値の観念があったとみなければならないであろう。その一般化の過程のなかで、A 語幹の女性名詞の単数では、主格と異なる対格形をもっていたために、生格形の一般化が阻まれたもの、と思われる。A 語幹名詞は女性名詞の中で有力な語群をつくっていたから、単数で生・対格をもたないということが、女性活動体名詞の特徴となり、この特徴に男性活動体名詞に較べて社会的重要性が低いという価値が与えられたのではないと思われる。もしそうであれば、中性名詞は単数対格が主格と同じ形であるのに、中性活動体名詞が単数で生・対格をもたないことが、よく説明できる。

§ 83 ほかのスラヴ諸語の場合も、このカテゴリーはロシア語とほぼ同じような経過を辿って発展していったが、それぞれの言語でいろいろな特徴をもってい

た。ポーランド語を例にとると、このカテゴリーは途中で発展が止まってしまった。この言語では、このカテゴリーが人を表す男性名詞の単数と複数、動物を表す男性名詞の単数に一般化したところで、発達が始まり、人を表す女性名詞の単数、動物を表す男性名詞や女性名詞の複数、および中性名詞には及ばなかったのである。このためにポーランド語では単数では活動体と不活動体という対立をもつが、複数では「男人体」と「非男人体」という対立になる¹¹。たとえば、

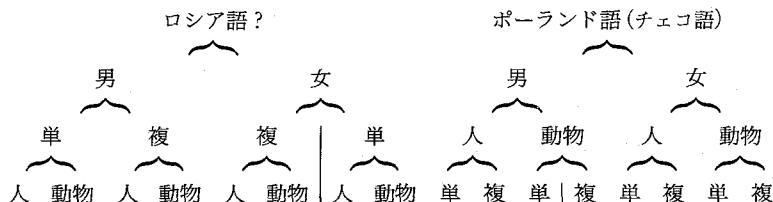
単数主格	単数対格	複数主格	複数対格
dwór 「邸」	dwór	dwory	dwory
kot 「猫」	kota	koty	koty
żona 「妻」	żonę	żony	żony
mąż 「夫」	męża	mężowie	mężów

ここで dwór は人または動物以外の、不活動体に属している名詞であるから、単数複数ともに主格形と対格形は同じである。kot は動物であり、単数では活動体に、また複数では「非男人体」に属しているから、単数では対格は生格(属格)に等しいが、複数では主格と同じである。żona は女性名詞であるから、単数の対格は主格とも生格とも違う特別の形をもっているが、複数では「非男人体」に属し、対格は主格に等しい。mąż は男性名詞で人を表しているから、男性では活動体、複数では「男人体」に属し、したがって単数複数ともに対格は生格と同形である。

このようなポーランド語の単数と複数でカテゴリーが異なる理由を、上に述べたように、究極的にはロシア語と同じく活動体と不活動体を目差していた発展の過程が、その途中で打ち切られたためであるとし、またもしロシア語のばあい階層的な順序の最下位にあるのが、「人」と「動物」の対立であるとするれば、ポーランド語ではこの過程が及ぶ順序がロシア語とは少し変わっていたと考えなければならなくなる。動物を示す男性名詞の単数が、人を表す女性名詞の複数よりも前に、このプロセスを蒙っていたとしなければ、ならないのである。すなわち、ポーランド語では階層化の順序がロシア語とは異なって、「男性」と「女性」、「人」と「動物」、「単数」と「複数」の順序で構造化されているということになる。この理由については現在のところ明らかでない。しかしポーランド語では「人」と「動物」の区別よりも「男」と「女」の区別が、階層的に上位にあるという考えの根拠となるかもしれないのは、あとで少し詳しくみるが、ポーランド語およびチェコ語の人を表す男性名詞の複数、主格においてかつての U 語幹名詞から借用した語尾 -owie をもつという点で、複数対格の形を一般化させたそれ以外の名詞の複数と、鋭いコントラストを示していることである。あとで述べるように、チェ

コ語のばあいにも、対立の階層関係はポーランド語と同じであると考えられるから、ロシア語のばあいにも、実際は「男性」と「女性」の対立が、階層的序列の最上位にあったのではないかという、疑いが濃くなって来る。

このようにみてくれば、たとえばさきに述べたノヴゴロド年代記の言語では、正確にいえばまだ「活動体」と「不活動体」という対立はなく、あったのはむしろポーランド語に近いカテゴリーの対立であったことになる。



チェコ語のばあいにも、生・対格形は最も古い文献ですでに人を表す固有名詞に普通にみられた。たとえば Adam「アダム(主格)」に対する Adama, Jakub「ヤコブ(主格)」に対する Jakuba のようなものである。人を表す男性の普通名詞の単数でもこの過程は文献時代以前に始まっていたが、一般化が完成するのは少し遅れ、14 世紀(一部は 15 世紀の初め)であったといわれる。動物を表す男性名詞の単数に生・対格が一般化するのにはさらに遅れ、16 世紀になっても、まだ古い主・対格の方が多くみられたという。この過程は 15 世紀の中頃に始まり、17 世紀の初め頃に完成する¹²。

§ 84 複数では活動体の男性名詞の主格が本来の複数主格形 *i* をもつのに対して、不活動体では対格形 *-y* が主格に一般化する(対・主格形)。これは古チェコ語では比較的稀であるとされるが、興味のあるのは、この過程が、生・対格形とはまったく逆に、まず「もの」を表す男性名詞に現れたことである。この語尾が「不活動体」を表す男性名詞の複数形に一般化したのは、現代チェコ語の時期の始まる 16 世紀以降のことである¹³。

したがってここでは対格に本来の生格形 *-u* を用いることはなかったが、結果として、活動体と不活動体で形が異なることになった。したがってチェコ語のばあいには、このカテゴリーの内容は活動体と不活動体の対立であるといえるが、ロシア語と違って女性名詞や中性名詞には及ぶことがなかった。その結果、現代チェコ語ではこのカテゴリーはたとえば次のようになった。男性名詞では、

単数主格	単数生格	単数対格	複数主格	複数対格
dub 「樫」	dubu	dub	duby	duby
had 「蛇」	hada	hada	hadi	hady
hoch 「男児」	hochá	hochá	hoši	hochy

したがってポーランド語について述べた仮説が仮に正しいとするならば、チェコ語のばあいにも、対格に生格形を用いるというプロセスにおいては、ポーランド語と同じように、「男性」と「女性」の対立が、「人」と「動物」の対立よりも、上位の階層的序列をもっていたということができる。しかしポーランド語と異なる点は、このプロセスが単数名詞に及んだところで打ち切られた、というところにある。結果としてチェコ語では活動体と不活動体のカテゴリーは、形成の手続が単数と複数で異なることになった。すなわち、両者の相違は、単数では生格形が対格形を置き換えたかどうか、また複数では本来の対格形が主格形にとって代わったかどうか、に存することになったのである。

ただ複数の体系の中でみれば、チェコ語のばあいでも、人を表す男性名詞の複数主格は、たとえば profesor 「教授」に対する profesori とならんで U 語幹の語尾をもつ形 profesorové が存在している。-i と -ové の語尾には、名詞によってどちらかしかとらないばあい、あるいは両者が競合するばあいがあり、ポーランド語よりも弱い形ではあるが、人を表す名詞の男性形が、他のものに対して卓立される傾向がある。

南スラヴ語群の中では、格変化をもたないブルガリア語は別として、セルボ・クロアチア語でも、生・対格形は男性単数名詞以外には拡がらなかった。

これらのことから、ロシア語の活動体と不活動体のカテゴリーが、スラヴ語の中でも、非常に特異な発展をしたことがわかる。

ところで活格言語と能格言語のばあいには、意味上の目的語の位置にくるのは無徴的な絶対格であり、したがって述語動詞は有徴的な格である活格または能格をとるかどうかによって、区別された。

活格<主語>	↙ (絶対格<目的語> - 動詞)	活格動詞
	↘ (絶対格<主語> - 動詞)	絶対動詞
能格<主語>	↙ (絶対格<目的語> - 動詞)	能格動詞
	↘ (絶対格<主語> - 動詞)	絶対動詞
(主格<主語> - 動詞) - 対格<目的語>		他動詞
(主格<主語> - 動詞)		自動詞

§ 85 これに対して対格言語では、述語動詞は、意味上の自動詞でも他動詞で

も、意味上の主語と文法的に一致してこれと一体になるから、有徴的な意味上の目的語をとるかどうかにによって、区別されることになる。

このような対格言語の構文上の特徴を考えれば、活動体・不活動体のカテゴリーが、主に他動詞の意味上の目的語の位置に立つ対格に現れたのは、この特徴のためであると思われる。すなわち対格言語では、本来対格は主格に対して有徴的であるはずであった。一方ロシア語では、印欧語の時代には有徴的であった男性名詞の対格は、音韻変化の結果語尾を失い、無徴的になって、主格と同じ形になってしまった(主格**-os* > *o* > *o*, 対格**-om* > *o* > *o*)。なぜ生格の形を選んだかという議論は別にしても、生・対格をとることによって、活動体の表現は、活格言語の活格、あるいは能格言語の能格と同じように、失われた有徴性を回復することになった。しかし活動体の表現が対格で示されるようになったことによって、活動体と不活動体というカテゴリーは他動詞の中で生じたものにすぎなくなり、これによって動詞述語そのものを、全体として分類することにはならなくなった。この点が活格や能格とは、根本的に違っているところであるが、それにもかかわらず、結果としてみれば、不活動体の目的語と主語とが形の上で同じになり、活動体と不活動体の区別が再び文法化されたことによって、ロシア語が活格言語または能格言語の状態に、再び一步近づいたとみることもできる。

しかしながら、それではなぜ、活動体対格に生格の形が援用されることになったか、という問題は、依然として未解決のままに残されている。

これについてメイエは、生格形を対格に援用したことを、単なる偶然に帰そうとしているように見えるが¹⁴、チェルヌيوفは、ロシア語において、他動詞が否定されたときに一定の条件のもとで目的語の対格形が生格形に置き換えられる、いわゆる否定生格という現象にみられるように、統語論的に生格が対格に近い働きをもっているからである、としている¹⁵。

しかしこれらの所説は、必ずしも直ちに承認しがたいものを含んでいるように思われる。メイエのばあい、たとえ必要に迫られたにせよ、いかなる内的連関もなく、生格が単なる偶然によって対格に転用されるというのは、信じるのがむずかしいからであり、チェルヌيوفのばあい、活動体、不活動体の区別なく用いられるはずの否定生格が、なぜもっぱら活動体のばあいだけにのみ、用いられるようになったかが、説明できないからである。

スプリンチャク(Спринчак, Яков Алексеевич)は、チェルヌيوفの説を一步進めて、「生格を選んだということは、おそらく、共通スラヴ語において、生格と対格の機能が時にきわめて似通ったものであったということによって、説明されよう。

しかしながら、目的語を表すばあい、これらの格はたがいに(機能が)異なっていた。対格は動詞の行為が完全に及ぼされた対象を示すが、生格は、行為が不完全にしか及ぼされない対象を示していた」と主張する¹⁶。いわゆる部分生格 *genitivus partitivus* の意義の重要性を強調したのである。これは疑いもなく正しい主張であるが、これだけではまだ、活動体のカテゴリーと生格のはたらきとの間の、内的連関性を明確にすることはできないであろう。

しかし、もし上で述べたように、活動体と不活動体の区別が、名詞の示す対象の価値に依存しているとするならば、この関係は容易に説明できるであろう。すなわち、活動体は、その価値、あるいは個性のゆえに、他者の行為が全面的にその上に及ぼされることがむずかしいと思われるからである。

この点に関連して興味のあるのは、スペイン語のばあいである。活動体と不活動体の区別が、スラヴ語以外にスペイン語およびアルメニア語にみられることは、つとにメイエの指摘するところであるが¹⁷、スペイン語のばあい、動詞の直接目的語となる名詞が「まず人を表す名詞、次に動物名、および擬人化されたもの」であるばあい、ラテン語の *ad* (英語の *to*) に遡る前置詞 *a* をとり、それ以外のものは *a* なしで用いられるというのである¹⁸。ラテン語で *ad* を名詞に附加したものは、意義的に与格に近いということができよう。そうすれば、この事實は、発現の仕方こそ違え、行為の対象への及び方が、間接的であるという点で、ロシア語の活動体のばあいと共通しているように思われてくるのである¹⁹。

3

述語機能の強化——形容詞短語尾形述語の成立

§ 86 活格言語や能格言語では、述語は述語動詞だけか、または述語動詞と絶対格に立つ名詞の結合からできており、このため述語動詞は絶対格に立つ名詞と文法的一致を行うことが多かった。述語動詞が意味上の他動詞であるときは、絶対格に立つ名詞は意味上の目的語になったから、この動詞は意味上の主語とではなく、意味上の目的語と文法的に一致するのが本来の形であった。意味上の他動詞の主語は、述語に依存しながら相対的に独立した、有徴的な活格あるいは能格によって示されていたのである。これに対して対格言語のばあいには、主語と動詞との結合が緊密である。対格言語の動詞が主格と文法的に一致することを原則としているのは、このためであると考えられる。

しかしロシア語の場合、主語と動詞との結合を緩めて、述語を相対的に独立強化しようとする傾向を示す、いろいろな兆候がみられるように、思われる。その第一は、形容詞の短語尾形がつくられたことである。印欧語においては、形容詞はもともと名詞と形の上ではほとんど同じであり、わずかに違うのは形容詞は同じ語根が異なる幹母音または語尾をとって、異なる性にわたる変化をすることであつた。男性の形も、女性の形も、また中性の形もとることができたのである。これをラテン文法家は *motio* と呼んでいる。

このような本来の形容詞の形はロシア語では名詞形と呼ばれ、現在の短語尾形に連なるものである。これに対して長語尾形といわれるものは、名詞形に承前代名詞 *anaphoriques* の *jě, ja, je* を加えることによってつくられたものとされている。たとえば *dobrŭ-jě* (よい — 男性単数主格) > *dobryj, dobra-jego* (男・中性単数主格) > *dobrago* > *dobrogo, dobru-jemu* (男・中性単数与格) > *dobruumu* > *dobromu* のようなものである。

このような長語尾形は、承前代名詞の「その」という指示の機能によって、対象が特定のものである(定性)ことを示し、逆に短語尾形は不特定のものの(不定性)を指す、とされている。筆者は以前にノヴゴロド第一年代記を用いてこれら二つの形の用法を観察し²⁰、これらの形の機能を次のように考えた。短語尾形は形容詞が示す性質あるいは状態と、この形容詞が修飾する名詞が指し示す対象との関係が、話手が発話する時点ではじめて設定される場合に用いられる、とする。

たとえば、

Въ то же лѣто паде метель густъ по земли и по водѣ и по хоромомъ.....

「同年、烈しい吹雪が地上にも、氷の上にも、家々の上にも降った。」

.....и ту такоже бысть лють пожаръ, вихромъ наборзѣ, трескомъ.

「そしてそこに同じく烈しい火事が起こり、すぐにつむじ風とパチパチという音がそれにとまった。」

このばあい、*густъ*「濃い、濃密な、烈しい」、*лють*「烈しい」という形容詞短語尾形のもつ意義と、「吹雪」あるいは「火事」という意義との関係は、発話以前に当然のものとして設定されているものではない。烈しくない吹雪、烈しくない火事というのも考えられるのである。したがってここで述べられている「吹雪」あるいは「火事」が「烈しい」ものであるということは、発話の時点で話し手によつてはじめて認識され、表現されたものであると考えられる。これに対してたとえば長語尾形、

того ради всемилютивый богъ хотя погубити безбожныя сыны

Измайловы Куманы.....

「このためにいと慈悲深い神は、神を知らぬイシュマエルの子らクマン族を滅ぼそうとされて.....」

Они же оканьныи крестопреступници, не дождавъше свѣта побѣгоша.

「かの呪われた十字架に背くものたちは、夜明けを待たずに逃亡した。」

これらのばあい、たとえば「神」богъが「いと慈悲深い」всемилоствивыйものであり、また「十字架に背くものたち」крестопреступнициが「呪われた」оканьныиものであるのは、発話以前にすでにはっきりしていることである。このような場合につねに長語尾形が用いられたのは、このように形容詞の示す意味と、名詞の示す意味とが、発話より以前に定まったものと考えられていたためであるということになる。

§ 87 形容詞の長語尾形と短語尾形の機能がこのようなものであるとすると、長語尾形が定性を表すことも、またしばしば「決まり文句」(エピテトン)として用いられることも、よく説明することができる。また長語尾形が述語としても、修飾語としても用いられるのに対し、短語尾形は現代ロシア語にみられるように、やがてもっぱら述語として用いられるようになったのも、よく理解できる。主語と述語の関係は、述語によって示される性質あるいは状態と、主語によって表される対象とが、発話の時に関係づけられるものだからである。このことからまた、短語尾形の場合には主語と述語との関係が、長語尾形の場合よりも、緩やかなものであることを示しているといえる。

短語尾形は、このようにもっぱら述語として用いられるようになるが、それにとまって、主格以外の格は失われることになる。逆の言い方をすれば、形容詞は述語として用いられるとき、格変化をもたない特殊な形をもつことになったのである。これは形容詞が活格言語の状態動詞と非常によく似た機能をもつようになったことを、意味している。いま仮に短語尾形の主語になる代名詞を人称接辞とみなせば、次のような形になる。

я-добр/добр-а.	「私は善い(男性/女性).」
ты-добр/добр-а.	「おまえは善い(男性/女性).」
он-добр.	「彼は善い(男性).」
она-добр-а.	「彼女は善い(女性).」
оно-добр-о.	「それは善い(中性).」
мы-добр-ы.	「我々は善い(複数).」

вы-добр-ы.	「おまえたちは善い(複数).」
они-добр-ы.	「彼らは善い(複数).」

これは動詞の過去形とほとんど同じ形であるといえる。たとえば、

я-читал/читал-а.	「私は読んだ(男性/女性).」
ты-читал/читал-а.	「おまえは読んだ(男性/女性).」
он-читал.	「彼は読んだ(男性).」
она-читал-а.	「彼女は読んだ(女性).」
оно-читал-о.	「それは読んだ(中性).」
мы-читал-и.	「我々は読んだ(複数).」
вы-читал-и.	「おまえたちは読んだ(複数).」
они-читал-и.	「彼らは読んだ(複数).」

ここで а は女性の接辞, о は中性の接辞, ы, и は複数を示す接辞とみることができる。

現在形のばあいには原則として人称による変化をもっており、このような形容詞短語尾との形の上での一致はみられないが、重要なのは、まだ部分的で過去形に限られているにしても、動詞述語と形容詞述語のあいだに、形の上での一致がみられることである。このように、短語尾形述語の成立の意味は、類型学の立場からすれば、形容詞が状態動詞化したという点にあると、思われる。

4

述語の相対的独立性の強化

§ 88 これまで述べてきたことから、述語の主語からの相対的な独立性の強化には、動詞の過去形で人称変化が失われたことが、密接に関連していると考えてもよいように思われる。なぜならば、人称変化は、主語と述語の文法的な一致によって、両者の密接な関係を保障するものだからである。ロシア語の過去形は、もともと能動完了分詞第二形 *participium praeteriti activi secundum* といわれる、接尾辞 *-lo- によって構成される分詞が連辞を失って、独立の動詞と考えられるようになったものである。この分詞は、もともと、ちょうど英語、ドイツ語、フランス語などの過去分詞と同じように、英語の *be* 動詞あるいは *have* 動詞と結んで、さまざまな完了系諸時称をつくるのに用いられたものである。ロシア語を含むスラヴ諸語では、この分詞は *be* 動詞にあたる連辞と結合するのが、原則であった。し

たがって連辞が失われることによって、それまで連辞の部分が受けもっていた人称のカテゴリーが失われ、主語と述語の性あるいは数による文法的な一致がまだ述語部分に残ってはいるものの、新しい述語動詞と主語との結びつきはかなり弱まることになった。形容詞の短語尾形は過去形で連辞 *был, была, было, были* をとるが、その連辞そのものも、すでにたとえば *есмы быль* のような能動完了分詞の第二形が、現在形の連辞 *есмы* などを失った形であるから、動詞の過去形の相対的独立にともなって相対的な独立を得ることになった。もし現在時称でも動詞の人称変化が失われることになれば、形容詞の短語尾形は、性、数の一致を除けば、完全に状態動詞として確立する可能性がある。このように述語の主語からの相対的な独立のためには、どうしても少なくとも人称変化がなくなる必要があり、そのためには連辞がなくなる必要があったということがいえる。ロシア語で連辞として用いられているのは *быть* であるが、これはもともと現在時称では *есмы, еси, есть, есмы, есте, суть* のように変化していた。これらの形はその後失われて現在では *есть* だけが現在形としてすべての人称に用いられているが、それもとくに強調するときか、「存在する」という意味のほかはふつう用いられない。この動詞はもともときわめて使用頻度の高い動詞であり、またたとえば英語の *be* 動詞にみられるように、一般に使用頻度の高い語彙は変化しにくく、古い形を保つのが通例であることを考えれば、ロシア語の状態はきわめて異常なものであるといえる。したがってロシア語で動詞の中でも最も保守的なはずの *быть* の現在形が失われたのは、いま述べたように、述語の主語からの相対的な独立性の獲得の前提として、人称変化の衰退が必要であったためである、と考えなければ、説明はむずかしいと思われる。

§ 89 チェコ語またはポーランド語のばあい、連辞の人称変化はまだ保たれているが、それと同時に、これらの言語では、短語尾形を長語尾形に置き換える強い傾向がみられる。たとえばチェコ語では、短語尾形が用いられるのは、比較的次数の少ない性質形容詞に限られている。またそのばあい、長語尾形に較べると短語尾形は一時的なニュアンスが強いといわれる。たとえば、

<i>Jsem št'asten.</i>	「私は(いま)幸福だ(短).」
<i>Jsem št'astný.</i>	「私は(一般的に)幸福だ(長).」
<i>Jsi vesel.</i>	「君は(いま)陽気だ(短).」
<i>Jsi veselý.</i>	「君は陽気な人だ(長).」 ²¹

また形容詞が補語をとるときには、主として短語尾形が用いられるという。たと

えば je dalek「遠い」, blízek「近い」, hoden「ふさわしい」, pln「満ちている」, prost「欠けている」, žádostiv「どん欲な」などは生格の補語をとるときに, je roven「等しい」, blízek「近い」などは与格の補語をとるときに使用される。これに対して補語をとらないときには, 長語尾形を使うのが一般的である²²。たとえば,

Jeho konec je blízký. 「彼の終わりは近い。」
 Sklenka je už plná. 「コップはすでに一杯だ。」

補語をとまうときに短語尾形を使う傾向は, ロシア語の場合にもみられる。たとえば与格の補語をとる верен「忠実である」, мил「好ましい」, противен「いとわしい」などである²³。これらをみれば, 述語的な性格が強く, したがって動詞に近い役割をもつときに, 短語尾形が使われると考えてもよいであろう。

さらに興味のあるのは, チェコ語のばあい, 人に関わるときは短語尾形を, また動物やものに関係するときには長語尾形を用いる傾向がみられることである。たとえば,

Otec je stár. 「父は老いている(短).」²⁴
 Strom je starý. 「木は老いている(長).」
 Ten člověk je kliden. 「その人は物静かである(短).」
 Moře je klidné. 「海は静かである(長).」
 Nepřítel je mrtev. 「敵は死んでいる(短).」
 Můj drozd je mrtvý. 「私のつぐみは死んでいる(長).」
 Jsem mlád. 「私は若い(短).」
 Kůň je mladý. 「馬は若い(長).」

これをどう解釈するかについては, いろいろな議論があると思われるが, 主語が「人」のクラスに属しているときは, 述語の形容詞の表す性質あるいは状態は, 人以外のクラスに属する対象をさす主語の場合よりも可変性があり, したがって「動詞的」であるということができよう。ただしこの可変性というのは動物の場合にもみられるわけであるから, その底にはやはり「人」のクラスと「動物」および「もの」のクラスの対立がある, と思われる。

しかしチェコ語ではさきにも述べたように, 短語尾形の代わりに長語尾形を使おうとする, 強い傾向がみられることを考えれば, チェコ語では過去のある時期まではロシア語と同じように, 述語の相対的な独立の方向を辿っていたが, やがて一定の段階になってこの方向をとることを停止して, 再び主語と述語との結合を緊密にするようになったのではないかと考えられる²⁵。チェコ語がロシア語と違って過去形で人称変化を行う連辞を失わなかったのも, そのためではないかと

思われるのである。結果としてチェコ語では、さきに挙げた例文にみられる形容詞のばあいだけでなく、過去の諸時称においても、また接続法のばあいでも、たとえば *bych byl* (英語の接続法 I *were* にあたる) のように、連辞+能動過去分詞第二形の形が残ったのである。このことからさらに、なぜロシア語の接続法の場合に、かつての連辞のアオリスト形が人称変化を失い、三人称単数に遡る単なる小詞 *бы* になってしまったかということも、よく説明できる。ロシア語のばあいには、主語と述語の緊密な関係を弱めて、述語の相対的独立を獲得する方向に進むことをやめなかったと思われるからである。

§ 90 ポーランド語のばあいにも、連辞 *być* は人称変化を保っている。現在形ではこれは *jestem, jesteś, jest, jesteście, są* のようになる。

明らかにこれらの形は *są* を除いて古くからの *być* の形を直接に受け継いだものではなく、三人称の形である *jest* を語幹として二次的につくられたものである。この語幹に付け加えられた同じ要素は、能動完了分詞第二形にも付け加えられて、たとえば男性のばあい *byłem, byłeś, był, byliśmy, byliście, byli*、女性のばあいには *byłam, byłaś, była, byłyśmy, byłyście, były* のようになった²⁶。これは一度分析的になりかけた動詞の形に対して再び屈折語的な性格を強めようとするものであり、したがってチェコ語の場合よりもさらに強く、主語と述語との関係を緊密にしようとするものである。ポーランド語ではたとえば *zdrow* 「健康である」、*gotów* 「準備ができている」、*wesoły* 「愉快である」、*rad* 「喜ばしい」、*ciekaw* 「興味がある」、*pewien* 「確信している」のような、ごく少数の形容詞だけが短語尾形をもち、しかもそれも男性単数に限られるのも、このようにして短語尾形の述語的性格が再び弱まったためであると、考えられる。

以上に述べたことから、形容詞の短語尾形の述語的性格の強さと、連辞があるかどうか、あるいは人称変化が保たれているかどうかということとは、密接に関連しているということができよう。この意味でチェコ語あるいはポーランド語とロシア語とは、途中までは同じ方向をもっていたが、その後の発展はまったく違った方向をもつようになったといえる。

もしそうとすれば、ロシア語で連辞の現在形が脱落したのは、決して偶然ではなかったと思われるのである。さきに述べたように、活動体と不活動体の対立がポーランド語とチェコ語で不徹底のまま終わり、またポーランド語のばあいのほうがチェコ語のばあいよりも不徹底の度合いが強かったのは、この対立の徹底化が、チェコ語やポーランド語を能格言語類型に近づける方向性をもっていたために、

これを避けようとしたためであると考えられる。同じように、もし述語の相対的独立性を強化する方向が、意味上の他動詞を述語とする構文において、意味上の主語と述語との関係が比較的希薄である、能格あるいは活格型の言語類型に言語を近づけるものであるとすれば、チェコ語やポーランド語が再び主語と述語の関係を強化したことも、この方向に進むことを避けようとするものであった、といえよう。そうとすれば、一見何の関係もないかにみえる、これら二つの事柄の間には、実は深い類型学的な関連が潜んでいると、考えられるのではあるまいか。

5

名詞類の述語性の強化

§91 以上に述べたことから、連辞をなしですますためには、述語に立つ語の述語性の強化が前提となっていないかといえる。この意味で、名詞が述語に立つばあいでも、その述語としての機能は連辞があるばあいよりも強いと考えられる。もし人称代名詞を、人称を表すためのものにすぎないと考えれば、人称代名詞を主語にし、名詞を述語とする文は、前に述べたネネツ語の *khasava-m* 「私は男だ」、*khasava-n* 「おまえは男だ」のような形とあまり変わらないのである。たとえば、

Я-студент.	「私は・学生。」
Ты-студент.	「君は・学生。」
Он-студент.	「彼は・学生。」
Мы-студент-ы.	「我々は・学生・複数。」
Вы-студент-ы.	「君達は・学生・複数。」
Они-студент-ы	「彼らは・学生・複数。」

このような観方をしてみれば、たとえば Книга там. 「本はあそこだ」という文でも、ここに存在を表す *быть* の現在形 *есть* がいつも省略されているという考え方には問題があると思われる。たしかにこの考え方は、たとえば Книга была там. 「本は・あった・あそこに」または Книга будет там. 「本は・あるだろう・あそこに」のような、*быть* 「ある」の過去あるいは未来の形をもつものとの間で体系的を保つという点で魅力のある考え方である。しかし存在というような重要な意義をもつ動詞がそうたやすく省略されてよいものかどうか、という疑問は、消えることがない。このような疑問とネネツ語の事実などを考え合わせると、Книга

там. のような表現では、「存在」が述語になっているのではなく、むしろ述語になっているのは там「あそこ」ではないかと思われてくる。もしそうだということになれば、いま挙げた быть の未来形と過去形は、存在を表すのではなくて、単に未来または過去という時称だけを表すということになるであろう。

いま述べた Книга была там. や Книга будет там. を疑問文に変えるとすれば、これはそれぞれ Была ли там книга? と Будет ли там книга?, または Там ли была книга? と Там ли будет книга? になると思われる。疑問となる語は疑問の小詞 ли の前にくるのが決まりであるから、はじめのものは存在そのものを訊ねる形であって、「本はあそこにあったか」、「本はあそこにあるだろうか」という意味である。後のばあいは疑問になっているのは там「あそこ」であって、「本があったのはあそこか」、「本があるであろうというのはあそこか」というような意味になる。だから疑問に対する答えも、前のばあいならば Да, была. 「はい、ありました」、Да, будет. 「はい、あるでしょう」または Нет, не было. 「いいえ、ありませんでした」、Нет, не будет. 「いいえ、ないでしょう」ようになる。もし後のばあいならば答えは Да, там. 「はい、あそこです」または Нет, не там. 「いいえ、あそこではありません」になるであろう。Книга там. のばあひも、もし есть が省略されているならば、疑問文は Есть ли там книга? となるはずであるが、実際にはこれとならんで Там ли книга? が用いられることが多い。

このことから Книга там. という文は、存在を表わす述語の есть が省略された「本はあそこにある」という意味と、там が述語となっている「本はあそこだ」という意味との二つをもっていると考えなくてはならないように、思われる。この後の意味の場合には、これに対応する Книга была там. と Книга будет там. の была および будет は、単に時称を示すものにすぎないことになる。そうであれば Я-студент. も、それだけで述語になって文をつくっているとみてもよいことになるう。

以上のことからロシア語の二肢文は名詞類が強い述語性をもっているということが出来る。これに対してチェコ語やポーランド語では, být, bytí が省略されることはなく、これと結合する名詞類の述語性はロシア語の場合のように高いものではないと思われる。

§ 92 対格言語では述語動詞は主語と緊密に結びつき、また目的語をとるかどうかによって、自動詞と他動詞を区別している。またこのタイプの言語の主語には、活格言語の活格や能格言語の能格に立つ名詞だけではなく、不活格や絶対格

に立つ名詞も用いられることから明らかなように、行為を行う人や動物でなくとも、主語になることができる。このために、このタイプの言語では、述語動詞に適当な標識をつければ、対格に立つ名詞を主格に変換することができる。たとえば、

$$\boxed{\text{N}_{\text{nom}}-\text{V}_{\text{tr}}} - \text{N}'_{\text{acc}} \rightarrow \text{N}'_{\text{nom}} - \boxed{\text{V}_{\text{pass}}-\text{N}_{\text{inst}}}$$

これに論理的な解釈を加えれば、受動形ということになる。したがって受動と能動というのは、対格言語の包含事象なのである。このばあい N_{inst} は、行為者だけではなく、手段、道具などを表すこともできるから、主語をこれに変換することは論理的にも可能である。これに対して能格言語のばあいには動詞述語は絶対格と緊密に結合しており、能格をとるかどうかにしたがって絶対動詞と能格動詞を区別している。しかし能格に立つ名詞は行為者でなくてはならないから、これを行為者でないことによって特徴づけられる絶対格に変えることはできない。したがって受動形をつくることはできないのである。活格言語のばあいにも、活格に立つ名詞は生物であってかつ行為を行うものでなければならぬから、そうでないことによって特徴づけられる絶対格に変換することはできない。

しかし対格言語の受動構文は、形だけからみれば能格構文によく似ている。すでに述べたように、能格構文を受動構文として解釈しようという試みがあったのはこのためであるが、これに対応する能動構文がこのタイプの言語にみられないことから、これを受動構文と考えるのには無理がある。受動の意味は能動の意味がなければ存在できないからである。

スラヴ諸語では受動は быть に $*-\text{po-}$, $*-\text{to-}$ を接尾辞とする被動形動詞過去の形を加えることによってつくられる。たとえば、чръна земля под копыты костыми была посѣяна「黒い・大地は・下に・蹄・骨によって・過去・種蒔された」＝「蹄の下の黒い大地に、骨が種蒔きのようにまき散らされた」(イーゴリ軍記)あるいは Аже будеть свободный члвкъ рубить「もし・未来・自由な・人間が・殺された」＝「もし、自由人が殺されたならば」(ルシ法典)のようなばあいである。この被動形動詞過去が本来受動の意味をもっていたかどうかについては疑いがあるが²⁷、古教会スラヴ語、古代ロシア語を通じて、現在までこの形が用いられている。ロシア語では、これまで述べてきたようなこの言語の一般的な傾向に従って、連辞の部分は脱落し、また被動形動詞過去の部分は、述語的な性格の強い短語尾形の形で、単独に使用されるようになった。このように受動の表現でも、形容詞述語のばあいと同じように、述語は人称変化を失い、性と数だけで主語と文法的な一致

を行うようになった。たとえば、

Я-унесён/-сен-а.

「私は運びさられた。」

Ты-унесён/-сен-а.

「おまえは運びさられた。」

Он-унесён.

「彼は運びさられた。」

Она-унесен-а.

「彼女は運びさられた。」

Оно-унесен-о.

「それは運びさられた。」

Мы-унесен-ы.

「我々は運びさられた。」

Вы-унесен-ы.

「おまえたちは運びさられた。」

Они-унесен-ы.

「彼らは運びさられた。」

これらはみな状態を表しているから、形容詞短語尾形の述語のばあいと、本質的に異なっていない。

6

主語と述語との関係の弱化 I. 非人称形

§ 93 これまで述べてきたように、動詞の人称変化の衰退の傾向は、主語と動詞述語との関係を弱め、述語動詞の独立性を高める方向に働いてきたと考えられる。この方向をさらに強く推し進めるのは非人称形であると思われる。非人称形が主語と関係をもたず、独立した述語として用いられるからである。とくにすでに述語としての性格を強くもっている形容詞短語尾形は非人称の形をとり、述語として広く用いられている。これらの述語はしばしば与格の補語をとるが、いま人称代名詞の与格の形を主格形とは違う系列の人称接辞と考えれば、これらの述語は、この人称接辞によって文法的一致を行っているともみることできる。たとえば Мне-холодно は「私は寒い」となる。これを表にすれば次のようになる。

Мне-холодно. 「私は・寒い。」

Тебе-холодно. 「君は・寒い。」

Ему-холодно. 「彼は・寒い。」

Ей-холодно. 「彼女は・寒い。」

Нам-холодно. 「我々は・寒い。」

Вам-холодно. 「君達は・寒い。」

Им-холодно. 「彼らは・寒い。」

このばあいにも、было, будет を時称の接辞と考えれば、時称変化を行うこともできる。たとえば、

Мне-было-холодно.

「私は・過去・寒い」＝「私は寒かった。」

Тебе-будет-холодно.

「おまえは・未来・寒い」＝「おまえは寒いだろう。」

などのようなものである。前に述べたスー語族のアシニボイン語や、イロクオイ語族のセネカ語などでは、不随意的な行為を表すときには特別な系列の接辞を用いるが、ロシア語のこのようなものは、これに平行する現象であるとみることもしる。実際ロシア語においても、このような表現は不随意的行為を表しているのである。また情緒動詞にあたる видно「みえる」、слышно「聞こえる」、больно「痛い」などのばあいには、たとえば、

Мне видно горы.

「私には山を見える＝山が見える。」

Нам слышно песню.

「私たちには歌を聞こえる＝歌が聞こえる。」

Мне больно ногу.

「私には足を痛む＝足が痛い。」

のように、対格に立つ目的語をとることができる。また否定の場合にはたとえば、

Не видно горы.

「山が(生格)見えない。」

Не слышно песни.

「歌が(生格)聞こえない。」

のように、他動詞と同じように否定生格をとることができる²⁸。

このことから、このような述語が動詞に近い述語的性格をもっている、ということが出来る。これらはヴィノグラードフが「状態カテゴリー」 категория состояния といっている「話法の副詞」であるが²⁹、このような述語がロシア語で広く用いられていることは、述語の主語からの独立が、この言語の強い底流になっていることを物語っている。

これと関連して、ロシア語では名詞も非人称述語として用いられることがある。たとえば、

Мне уже пора идти.

「私には もう行くべき時だ。」

＝「私はもう行かなくてはならない。」

の пора「時」,

Нам шутить не время.

「我々には冗談を言っているひまはない。」

の время「時間」などがこれである。名詞以外の品詞でも、たとえば

Мне негде сидеть. 「私にはすわるところがない。」

の негде「どこも～ない」や, некуда「どこへも～ない」, некогда「～する時間がない」などのほか, たとえば надо「ねばならない」, нельзя「できない, いけない」, не надо「いけない」, можно「してもよい, できる」, нужно「必要だ」などのように様態を表すものも, ここに属している。これらも, 意味上の主語を示すとされる与格をとって, 不随意的な状態を表している。

§ 94 被動形動詞過去の短語尾形も, 非人称の形をとって独立の述語になるが, このばあいにも述語性が高く, 与格に立つ対象にとって不随意的な状態を表す。たとえば,

Поручено было ей счета вести.

「彼女に清算が任された。」

Суждено нам разлучиться.

「我々は別れるように運命づけられている。」

このような述語は非人称であるために, 主語との関連がなく, したがって受動の意義が薄れ, ほとんど動詞述語に近い述語性をもつことがある。たとえば,

Складно сказано, отец Варлаам. (Пушк.)

「うまく言われた = うまく言ったもんだ, ヴァルラーム神父よ。」

Чудно устроено на нашем свете!

「世の中はうまく作られている = できているもんだ。」

このように述語性が高いために, とくに口語において対格に立つ目的語をとることもある。たとえば,

У ребят наловлено рыбы.

「子どもたちには, たくさんの魚をとられた
= 魚がとれた。」

У хозяйки наготовлено угощения.

「かみさんのところでは, ご馳走をたくさん準備された
= たくさんのご馳走の準備ができた。」

このように対格に立つ目的語をとる構文はまだ口語的なものに限られているが, このことは, この構文がやがて一般化する可能性があることを示唆している。し

かもこの構文は、述語と目的語が緊密に結びついているという点で、活格言語や能格言語のばあいにはきわめて近いといえることができる。ただこの構文は対格をとめない、したがって対格とは文法的な一致を行わないという点で、違いがある。この点でこの構文は対格言語の枠内にとどまっている。

§ 95 動詞による非人称構文はいくつかのグループに分かれるが、動詞が独立の述語となっている点で、上で述べたものと異なっていない。第一のグループは、天候などの自然現象に関するものである。たとえば *веет* 「風が吹く」、*светлеет* 「明るくなる」、*темнеет* 「暗くなる」、*шумеет* 「ざわめく」、*моросит* 「小雨が降る」、*снежит* 「雪が降る」などである。これらは人為の及ばない現象を指すという意味で、不随意的な行為である。

第二のグループとしては、人の心理的あるいは生理的な状態を示すものがある。これもまた、人の意志によらない不随意的な行為である。ただこのばあいには、人物は与格ではなく、「*y* + 生格」によって示されるのが、普通である。たとえば、

В ушах у гостя затрещало.

「お客の耳の中でパチパチと音がした。」

В глазах у меня потемнело.

「私の目の中は真っ暗になった。」

第三のグループは「吹く」、「匂う」のような、感覚にかかわるもので、造格に立つ名詞をとまうのが普通である。この造格は本来は限定の造格であったと考えられ、行為者や行為の手段を表すものではない。たとえば、

Вот сыростью холодною.

С востока понесло. (Лерм.)

「いま、冷たい湿気が/東から吹いてきた。」

Из-за Волги с лугов цветами пахнет.

「ヴォルガの向こうの草原から、花の匂いがする。」

これは一方では自然現象であり、また他方では人の感覚にかかわるものであるという点で、第一と第二のグループの中間にあるといえることができる。

第四のグループに属するのは、非人称に用いられる他動詞であって、目的語をとまうものである。たとえば、

В одну минуту дорогу занесло.

「一瞬のうちに道をふさいだ

= 道がふさがった。」

Зимний сон разнесло.

「冬の夢をあとかたもなく散らした
= 冬の夢はあとかたもなく消えた。」

Одну ночь.....взорвало лед на реке.

「ある夜、川の氷を割った
= 川の氷が割れた。」

この構文では主語がないから、動詞述語は目的語とだけしか結びつかない。この点でこれは前に述べた *налоблено рыбы*。「魚がたくさんとれた」のような構文と同じように、活格言語や能格言語の構文に近いといえることができる。しかも日本語では目的語を主語とし、動詞述語を自動詞として訳すのが、最も自然であることから明らかなように、これは能格言語の絶対格構文に近い。しかし *Зимний сон разнесло*。「冬の夢はあとかたもなく消えた」の「冬の夢」を主語にし、「散らした」を自動詞の「消えた」にかえて *Зимний сон исчез*。「冬の夢は消えた」としても、また「散らした」を受動形にして *Зимний сон разнесен*。「冬の夢は散らされた」としても、もとの構文がもっていた、自然現象またはそれに近い不随意の行為というニュアンスは失われ、事実の単なる叙述になってしまう。このようなことが起こるのは、このような人称構文では主語と述語の結びつきが相対的に強く、したがって動詞述語の述語としての性格が弱められるためであると思われる。非人称構文のもつ不随意的な性格は、たとえば、

Его знобит. 「彼を悪寒をさせる = 彼は悪寒がする。」

Меня тошнит. 「私を吐き気をさせる = 私は吐き気がする。」

Ее трясет. 「彼女を震わす = 彼女は震えている。」

Меня лихорадит. 「私を悪寒をさせる = 私は悪寒がする。」

などによく現れている。

§ 96 前節で述べた非人称動詞の構文は、さらに行為者、手段、道具などを表す、造格に立つ名詞をとまなうことがある。たとえば、

Дорогу занесло снегом.

「道を・埋めた・雪で = 道が雪で埋まった。」

Сарай зажгло молнией.

「納屋を・焼いた・雷によって = 納屋が雷でやけた。」

1980年版のアカデミー文法は、たとえば *Сарай зажгло молнией*。「納屋が雷に

よって焼けた」という文における Сарай「納屋を」は, Молния зажгла сарай. 「稲妻が・焼いた・納屋を」という構文の, 行為を蒙った対象としての「納屋」と, Сарай загорелся от молнии. 「納屋が・燃えていた・稲妻のために」という事態の結果としての状態の担い手との両方を表しており, この意味で, 両義的である, といっている³⁰.

しかし受動構文を用いて Сарай зажжен молнией. 「納屋は・焼かれた・稲妻によって」としても, あるいは Молния зажгла сарай. 「稲妻が・焼いた・納屋を」としても, 人為を越えた自然現象であるというニュアンスが失われるのは, 前節で述べたばあいと同じである.

ところでこの構文は次のような内部構造をもっていると考えられる. すなわち,

Дорогу занесло — снегом.

「道を・埋めた—雪で」

この構造はしたがって形式的にはこれまでみてきた能格構文の構造と同じである. ここからこの構文を能格構文と考える研究者もあった³¹.

この構造をとるかぎり, この構文が相の対立をもつことができないことは, これまで能格構文についてみてきたとおりであるが, だからといってこれが能格構文であるということにはならないと思われる. この構文のばあい, 造格に立つ名詞が表しているのは, 能格構文のばあいとは違って, 主体的積極的に行為に参与する人あるいは動物を表すのではなく, 自然現象, とくにその過程(すなわちこのばあいには雪が降るという「過程」)を表すものだからである. これが能格構文の, 少なくとも内容的な定義に反していることは明らかであろう. したがってこの構文の特徴は, 不随意的な行為を表すところにあると考えるのが妥当であると思われる. もちろんそういったからといって, このような構文の成立に能格言語の影響がなかったと主張するものではない.

§ 97 再帰動詞の非人称形も同じように不随意的な行為を表すが, これは普通与格に立つ動詞をとまなう. たとえば,

Мне не спится.

「私は眠れない。」

Ребёнку не здоровится.

「子供が具合が悪い。」

Мне хотелось спать.

「私は眠たかった。」

再帰動詞の非人称形を表すこのような不随意的な性格は、とくに次のような場合に明らかである。たとえば、

Как вам служилось у Власова?

「ヴラーソフのところでの勤めはどうでしたか。」

Как работалось в полициях?

「警察でのお仕事はどうでしたか。」

これを人称文にして、

Как вы служили у Власова?

「貴方はヴラーソフのところでどのように勤務しましたか。」

あるいは、

Как вы работали в полициях?

「貴方は警察でどのように働きましたか。」

のようにすれば、元の文の不随意的な性格が失われてしまって、貴方という人物の勤めぶり、あるいは働きぶりについての質問になってしまう。ここで問題にしたいと思っているのは、勤務あるいは仕事はどう感じられたか、ということなのである。

7

主語と述語との関係の弱化 II. 不定法文の発達

§ 98 これまで述べてきたように、ロシア語は述語の述語性を強めると同時に、主語との関係を弱めようとする方向に働いていると思われるが、ロシア語において不定法文の広汎な発達がみられるのも、このような傾向と無関係ではないと思われる。

意味の上ではこれは当為(ねばならない)、可能、不可能、必要、不必要、不可避、予定(することになっている)など、さまざまな様態性を表現する。このうち不可避性を表すばあいには、*быть* 以外の動詞が用いられることがないという、語彙的な制約があるが、その他のばあいには語彙的には自由である。

この構文は意味上の主語として与格に立つ補語をとることが多いが、これは形の上では活格言語などの情緒構文に近いといえることができる。たとえば、

Мне-работать. 「私は働かねばならない。」

Тебе-работать. 「君は働かねばならない。」

これはまたたとえば Мне-было-работать. 「私は働かねばならなかった」, Тебе-будет-работать. 「君は働かねばならないだろう。」のように、時称を表すこともでき、また Нам-было-бы-работать. 「私たちは働かねばならなかったのだが。」のように、必然性、不可避性、可能、不可能、当為のような、様態性 modality を表すこともできた。

不可避性を表すばあいには、たとえば、

Что войне быть, в этом Степан теперь не сомневался.

「戦争は必ず起る。このことをステパンは今となっては疑っていないかった。」

Традициям новым быть!

「新しい伝統が必ず起る。」

その他の例としては、たとえば、

Сына не сравнить с отцом.

「息子と父と較べることはできない。」

Никому не двигаться!

「誰も動いてはいけない。」

これらの例文から明らかなように、この構文の不定法によって示される行為は、いずれも与格に立つ主体にとって随意的なものではない。様態性というのは、もともと主体の随意性、自発性を制限するものなのである。このようなことが起こるのは、述語(このばあいには不定法)と主語との結合が相対的に弱いからであると考えることができる。

§ 99 これに対して対格言語としての性格を弱めることがなく、したがって述語と主語との関係を緊密に保とうとする言語のばあいには、不定法文はきわめて限られた範囲でしか、使用されない。

たとえばチェコ語では純粋な形の不定法文は, platiť. 「(私は) 支払いたいのですが」のようなばあい、あるいは命令の様態性をもつ sednout! 「座れ」, uhnout! 「退け」のようなばあいには用いられる。

条件を示すばあいにはたとえば次のようなものがある。

Já mít peníze, tak to koupím.

「もし私が(主格) お金をもって(不定法) いたら、それをかうだろう。」

このほか稀れな用法として「～するや否や」の意味をもつばあい、あるいは接

続法の代わりに用いられるばあいなどがあるという。たとえば、

Tohle slyšet Anna, zapoměla na všechno.

「アンナは(主格)これを聞くや(不定法)否や、たちまちすべてのことを忘れてしまった。」

Pes jen kousat (=by jen kousal (接続法)).

「その犬は(主格)咬むこと(不定法)ばかり考える。」³²

これらすべてのばあい、不定法に主格形の名詞または代名詞がともなわれていることが、注意を引く。ふつう主格形は定動詞の主語としてしか用いられないから、これは明らかに文法的な破格である。

英語のばあいこれにあたるのは be to の構文と呼ばれているものである。これは連辞として用いられる be 動詞に to 不定法のついた形であり、ロシア語の不定法文と同じように、当為、可能、不可能、予定など、さまざまな様態を表している。たとえば I am to go. 「私は行かなければならない、行くことになっている、など」のようなものである。

英語のばあい、不定法をこのように be 動詞に従属させることによって破格を修正し、人称構文に組み込んでいるとすれば、チェコ語の例は、そのような人称構文に至る中間的な位置を占めていると考えることができる。このような過程が生じるのは、結局のところ述語と主語との関係を緊密なものとしようとしたためであると考えられ、この点不定法文を広く発達させたロシア語と、チェコ語とは発達の方角を異にしているということができよう。

8

その他の特異な現象 I. 所有の構文

§ 100 すでに述べたように、活格言語および能格言語は一般に所有動詞をもっていない。クリモフは対格言語にもこれを欠くものがあるとして、これを最も遅い時期に発生した語彙であろうと推定している [KO 153-154]。

活格言語にこのような語が欠けていたのは、この型の言語では、他動詞と自動詞の区別が文法的カテゴリーとしては存在しなかったために、存在の意義と所有の意義とが区別できなかったためであると思われる。また能格言語のばあいには、自動詞的な絶対動詞と、他動詞的な能格動詞の区別はすでに存在していたものの、状態動詞はすべて絶対動詞に属していた。一方所有動詞は本質的には状態動詞で

あるから、このような動詞の分類のもとでは、存在するのがむしろしかったと考えられる。言い換えれば状態動詞でありながら、同時に他動詞でもあるという、所有動詞の意義の特殊性が、これらの言語類型において、その存在の基盤をもたなかった、ということができるように思われる。

このような事情と並んで、活格言語では、活性のクラスが決定的な重要性をもっていたために、活性のクラスに所属する対象の勢力範囲の表示、すなわち対象の所属の表示が発達したと考えられる。分離所有と非分離所有の表現である (§ 65)。

このようなところからたとえばナヴァホ語にみられるように、*n-tcij xółó*「おまえの薪がある」のように、所有接辞をともなった名詞と存在動詞の組み合わせによって所有が表現されたり、あるいはトゥピ・グアラニの言語にみられるように、随伴を示す要素 *-r-* を用いて、たとえば *hú-ikú*「存在する」から *hú-r-ikú* のような構成をとって、所有を示すというような手法が用いられるようになった (§ 65 参照)。

スラヴ語のばあい、印欧共通語から受け継いだ語根 **em-*「取る」の零階梯 **om-* を状態を表す接尾辞 **-ē-* によって延長した **om-ē-tēi > jǐmēti > imēti* が所有動詞になっている。この動詞はロシア語にも受け継がれているが、現在では文語的な表現のような、ごく狭い範囲にしか用いられていない。この点この動詞を広汎に使用している他のスラヴ諸語に対して、ロシア語は著しい対照を示している。

これに代わってロシア語で用いられているのは、周知のように存在動詞と *y*「～のところに」とを組み合わせた構文である。前置詞 *y* による句は、勢力範囲を表すことも多いことを考えれば、У меня книга。「私のところに本がある＝私は本を持っている」のような表現は、活格言語の場合にきわめてよく似ているといわなければならない。

古教会スラヴ語のシナイ詩篇 *Psalterium Sinaiticum*、ゾグラフ福音書 *Codex Zographensis*、マリア福音書 *Codex Marianus* などをもても、所有動詞の使用が一般的であり、*y* を用いる構文は純粹に所有を表すものとしては、かえって稀れである。ロシアの原初年代記などについても、事情は同じである。これがどうして現代ロシア語にみられるようになったのかについては、その経過を調べてみないとはつきりしないが、ロシア語において所有動詞の自由な使用が、時とともに制限されて、*y* による構文が一般化したことだけは、間違いがないように思われる。

これは何かを所有しているという状態において、所有者とされる人物の自発性を考えれば、あまり自発的なものとは考えられないから、「所有している」という状態が一般的に随意的なものとは考えられないためかもしれない。ロシア語がこのような構文をとるようになったのは、あるいはそのためかも知れないが、少な

くともいまのところは、これについて確かなことは何もいえない。これは人称構文であるが、ものを主語としていて、活格言語の情緒構文に近い。クリモフはアシニボインの言語において、存在を示す動詞 yuhá が不随意的「行為」を表す情緒動詞に属していることを報告している [KTA 97]。これはロシア語からみれば単なる随伴事象にすぎないかもしれないが、やはり主語からの述語の相対的独立が底流になっているように思われてならない。

これと関連して興味があるのはクリモフが挙げている情緒動詞のリストである。これはもちろん言語によっていろいろ出入りがあるが、基本的には「見える」、「聞こえる」、「知る」、「欲する」、「愛する」、「好む」、「思われる」、「疲れる」、「寝る」、「笑う」、「怖れる」などの動詞がこれに属しているようである [KO 71]。

ロシア語のばあい、人称的に使用され、ся をとらない形をもたない動詞 reflexivatum の一群が存在するが、これらがかなりの程度にクリモフのリストに一致するのである。たとえば бояться「怖れる」、улыбаться「微笑む」、смеяться「笑う」、нравиться「気に入る」などである。これらは古い言語段階の包含事象であった情緒動詞の残余であるのかもしれない。

§ 101 スラヴ諸語の最も目立つ特徴として古くから指摘されているのは完了体・不完了体という、アスペクトの存在することである。このアスペクトはアクチオンス・アルトと密接に結びついており、アスペクトはアクチオンス・アルトを基礎にして文法化されたものと考えられている。すでに活格言語の項で述べたように (§ 72 参照)、もしアクチオンス・アルトが活格言語の包含事象であり、またその発生が行為を意味上の目的語の立場からみることにあるとすれば、これまで述べてきたことから、他のスラヴ諸語よりも、ロシア語のばあいの方がその発達が著しいのではないかという、予想が立てられる。ロシア語が主語と述語の相対的独立性を強めていると考えられるからである。

このような観点からスラヴ諸語を横断して体の問題を考えたものは、未だみられないように思われるが、チェコスロヴァキア科学アカデミーのロシア語文法が、チェコ語とロシア語の対照を部分的に行っているので、以下少しこれによってこの問題を考えてみたい³³。

まず直説法現在形をみれば、ロシア語では時間に定位されない表現は不完了体で表されるが、チェコ語では完了体の方が好まれる。たとえば、

Vyladíme nejprve E a pak na hmatníku vyhledáme tón který potřebujeme pro další strunu.

「まずホを調律して(完), それからネックで次の弦に必要な音を探しましょう。」³⁴

しかし不完了体あるいは多回体も使用できるばあいも多い。たとえば次の例は動詞に不完了体, 完了体, 多回体のいずれも使用できるばあいである。

To je dobrý písař, ten píše/psává/napíše 100 slov za minutu.

「それはよいタイピストで, 彼は一分間に百ワード打てる。」

To je silný kuřák, ten kouří/kouřívá/vykouří až 40 cigaret denně.

「これはヘビースモーカーで, 彼は一日四十本煙草を吸う。」

この場合完了体 *napíše*, *vykouří* を用いれば, どちらかといえば, 能力に重点がかかり, 多回体 *psává*, *kouřívá* あるいは不完了体 *píše*, *kouří* を用いれば習慣に重点がかかるという³⁵。

§ 102 いわゆる歴史的現在, ロシア語ではふつうは不完了体が用いられ, 完了した行為の反復あるいは特殊な効果を必要とするときにだけ完了体が用いられる。これに対してチェコ語では話者の眼の前で展開するような行為についても, 歴史的現在で完了体も不完了体も用いられる³⁶。たとえば,

.....jdu, najednou uslyším, jak kdosi přede mnou křičí: zastávím se a poslouchám.

「.....歩いて行くと(不完), 突然誰かが私の前方で叫んだ(不完)のが聞こえた(完). 立ち止まって(完), 聞き耳を立てた(完).」³⁷

ロシア語では完了体動詞の現在形はかなり強い未来時のニュアンスを帯びるが, チェコ語ではこのニュアンスはあまり強くない。過去形のばあいでもチェコ語はロシア語と異なって反復される行為を完了体によって表現することができる。たとえば,

Z chycených medvíd'at vybrali vždycky jednoho "rozumného".....Toho oddělili od ostatních.

「捕らえた小熊の中からいつも一頭の賢いのを選び出して(完), ...それを他のから引き離す(完)のだった。」³⁸

この問題については, 今後十分な研究がなされなければならないと思われるが, 以上のようなごく簡単な概観からもチェコ語の体の対立がロシア語のものよりも緩やかであるという印象を受ける。

§ 103 このほか, ロシア語の特殊な現象として, 一人称代名詞の包含形にあたる *мы с тобой* の表現の存在が挙げられる。ロシア語ではよく知られているように「僕と君」というとき, *я и ты* (I and you) ということはほとんどなく, *мы с тобой*

(we with you) というのである。しかしこれが活格言語の包含形と関係があるかどうかは、わからない。

またスラヴ諸語では移動の動詞 *verba movendi* にいわゆる定動詞と不定動詞の区別がある。この移動の動詞は活格言語では多く活格動詞に属しており (§ 70 参照)、これを受け継いだ能格言語でも随件事象としてしばしば能格動詞に加えられている、特異な語彙である。定動詞と不定動詞の対立は、結局のところアクチオンス・アルトの対立であると考えられ、またアクチオンス・アルトは活格動詞において発達したことを考えれば、移動の動詞にこの区別が生じたのは、理解できることかもしれない。

§ 104 バスク語では、否定文になったとき、意味上の目的語が絶対格から部分格に変化する。たとえば、

ni-k gizon-a ikusten d-u-t.

「私(能)・男(定)・見る・三人称+助動詞+一人称」

＝「私はその男を見る。」

に対し、

ni-k ez d-u-t ikusten gizon-ik.

「私(能)・否定・三人称+助動詞+一人称・見る・男(部分)」

＝「私はどの男も見ない。」

これに対して意味上の目的語が特定であるときには、このようなことが起らない。

ni-k ez d-u-t ikusten gizon-a.

「私(能)・否定・三人称+助動詞+一人称・見る・男(定)」

＝「私はその男を見ない。」³⁹

これは否定の場合には絶対格に立つべき意味上の目的語と述語動詞の緊密な関係が破られるためであると考えられる。これに対して対象が特定であるときには、能格言語の特徴である、述語と絶対格に立つ名詞によってつくられるシンタグマの全体が否定されるから、このシンタグマの内部構造には変化がないと考えられる。すなわち、一般的にいつて否定のばあいには、述語動詞とこれに密接に関連する意味上の主語または目的語との関係に、二つのばあいがある、と考えられる。述語が否定されることによって、意味上の主語または目的語の示す事物の存在自体もまた否定されるばあいと、述語によって示されるものだけが否定されるばあいである。たとえば「A が死ぬ」というときでも、「B が A を殺す」というときで

も、Aという生物体があって、「死ぬ」という過程がその上に生じるという点にはかわりがない。しかし「BはAを殺さない」というときには、「殺さない」ことによって、具体的な対象としてのAが存在しなくなるばあいと、存在しているばあいがありうる。たとえば「彼は人を殺さなかった」と「彼は被害者を殺さなかった」というようなばあいである。対象が特定しているばあいは、原則として後者である。いいかえれば、後者は「Aが死ぬ」ということが「なかった」ということであるのに対し、前者は意味的にはむしろ自動詞に近く、「Bが殺す」ということは「しなかった」ということになり、Aは仮想のものでしかなくなる。シンタグマの関係が変化するのである。もしそうであるならば、この現象は、目的語と述語動詞の緊密な関係を前提にしているから、能格言語の包含事象であるということになる。

ロシア語の場合にも、他動詞が否定されるとき、特定のものを指さない対格は生格に変わることが多い。ロシア語は対格言語であるから、バスク語と同じような説明はできないが、現象としてはこれと並行している。しかしもしそうとすれば、たとえばポーランド語で否定生格の使用がよく保たれているのはなぜか、別の説明を必要とするであろう。

ついでにいえば、意味上の自動詞のときにも、もしこれが存在動詞であるならば、よく似たことが生じる。たとえば「Aがいない」という文が、「Aという対象が存在しない」を意味するときと、「Aが(ここには)いない」という限定的な意味をもつばあいである。かつて筆者は後者のようなものを存在文の一種であると論じたことがある⁴⁰。たとえていえば「Aがいるのは、ここではない」という意味である。ロシア語ではこのばあいには主格をとるが、前者のばあいには意味的な主語は生格におかれる。おそらくこれも、Aという対象が仮想のものにすぎないからではないかと思われる。

9

その他の特異な現象 II. 不定人称文

§ 105 主語と述語の関係の弱化と関係するものとして、いわゆる不定人称文が現代ロシア語において、著しい発達を遂げている。周知のようにこれは三人称複数形の動詞を述語とし、主語を用いない構文であり、たとえば英語の They say のような、いわゆる Generic person といわれているものに相当するが、英語のばあ

いと異なる点は、第一にその使用がきわめて広範なことである。その使用の条件となるのは、述語で表される行為が人であるということであり、かつ行為主体が特定できないか、あるいは明示する必要がないばあい、もしくは明示することを避けようとするばあいである。たとえば、

- a. Однажды играли в карты у конногвардейца Нарумова. (Пушк.)
「ある時、近衛騎兵ナルーモフのところでトランプのゲームがあった。」
- b. Сейчас его приведут сюда.
「すぐに彼をここに連れてきますよ。」

上述の使用条件から明らかなように、行為主体が明らかに単数であっても、使用が妨げられることはない。たとえば、

- c. Ребёнка пеленяют и укладывают в постель.
「子どもは襁褓をしてもらって、ベッドに寝かされる。」
- この構文はまた必ずしも三人称である必要もない。たとえば、
- d. Не хочу я, говорят тебе! — возразила Настенька. (Писем.)
「私は嫌や、あんたに言っているのよ(=そう言っているのよ)、とナーステンカは答えた。」

- e. Вас просят, Вам говорят русским языком.
「あなたに頼んでいるのですよ。ロシア語で言っているのですよ。」

第二にこの構文は結果として受動態と同じ事態を表現するのに使われる。これはたとえば英語において They say が It is said と結果的に同義であるのと同じであるが、英語のばあいには受動態の使用がきわめて頻繁であるのに対して、ロシア語では明示的な受動態の使用を避けようとする傾向が一般に顕著である。不定人称文が広範に使用されるのは、主としてこのことと関係があると思われる。シャフマトフ(Шахматов, Алексей Александрович 1864-1920)は、たとえば пятна не отмываются「しみが洗い落とせない」のような再帰動詞による受動表現について、これが不活動体名詞を主語とするときであるとし、обвиняюсь「罪ありとされる」、штрафуюсь「科料に処せられる」、обличаюсь「摘発される」、вызываюсь「召喚される」、называюсь「呼ばれる」のような、少数の動詞は人を主語とすることができが、これらは行為者が不定の人物の集団であることを含意しているのが普通であり、ты обвиняешься мной「おまえは私によって非難される」という言い方は可能であっても、これは比較的新しい言い回しであって、тебя обличают, тебя обвиняют, тебя вызывают などと同義であるとしている⁴¹。

このような不定人称文と受動表現の関係については、少なくとも類型学的な観

点からは、いまだ十分に研究されていないと思われるが、この構文の発達が、結果として能動と受動の対立を弱めるものともなっていることだけは確かである。

10

ま と め

§ 106 これまで述べてきたことからすれば、ロシア語は対格言語の原理となっている、主語と述語との緊密な関係を弱め、述語の相対的独立性を強める方向に発展してきたようにみえる。

それは何よりも述語の人称変化を弱めるという形で現れている。連辞を失ったこと、動詞の過去形が連辞を失って独立してきたこともこの方向に沿ったものである。また形容詞、被動形動詞も述語性を強め、形の上でも動詞に近い短語尾形を発達させた。

非人称文、不定法文さらには不定人称文の広汎な使用も述語の独立性を強めるものであった。また述語の主語からの相対的独立性の強化は、相対的に目的語と述語との距離を近づけることになったと思われる。活動体と不活動体の区別、否定生格、アクチオンス・アルトの区別の発達など、目的語の比重の増加に関係すると思われる現象がみられるのは、このためであると考えられる。

解明は今後の研究にまつほかはないが、このような述語の主語からの独立性はロシア語において最も著しく、他のスラヴ語は多少とも同じ現象をもっているが、ロシア語に較べて、その現れ方が不徹底であるという印象を受ける。これが活格あるいは能格言語の影響であるかどうかについても、いまのところ証明の手ではないが、おそらくは基層の言語の影響ではないかと、思われる。しかしそのばあい、はじめはロシア語と同じように、基層の影響を同じように受けていたチェコ語やポーランド語が、おおよそ 17 世紀頃から、再び本来の対格言語の性格を強めていくのは、何によってであるのかは、考えてみる必要がある。この時期にいったい何が起こったのであろうか。それはおそらくは、宗教を含めた文化の性格の変化に求めなければならないであろう。しかしそれは言語学に携わる者の守備範囲を越えるものになると思われる。言語学者の任務というものがもしあるとすれば、それはまず第一に、できるだけ客観的な資料に基づいて、言語の内的な論理を考察し、それを周辺科学に提供することだと思われるからである。ここでみたような基層の影響がもしあったとしても、それはロシア語、あるいはその他のス

ラヴ諸語自身の論理の中で選択され、取り入れられていったに違いない。

少なくとも、ロシア語に散在する特異な諸現象を内容的類型学の立場からみれば、それらは、ロシア語が能格あるいは活格の言語類型の論理を、自らの裡に取り入れた結果であるように、思われてならないのである。

以上、一つの考え方として問題を提起したいと思う。

類型学序説——ロシア・ソヴェト言語研究の貢献

第 3 部

形式的類型学

§ 107 これまでみてきたように、言語がさまざまな観念を表現する仕方についての類型から出発して、言語の構造を支配する原理そのものの類型を探ろうとする方向に、研究が進んできた。内容的類型学である。この内容的類型学の進展によって、言語の表現の技術あるいは形式を問題にする従来の形式的な類型学が、まったく不用になったわけではなく、現在でも、類型学の研究とされているものの中に、このような形式的類型学のカテゴリーに属するものも、しばしばみられる。より正確に言えば、内容的類型学の進展によって、それ以前の類型学は、形式的類型学へと精密化していったと、考えられるのである。

すでに述べたように、類型学は言語を観念の表現の仕方について、膠着型の言語、孤立型の言語、屈折型の言語というように、言語を分類することから始まった。しかしこのような類型のどれかに純粋な形で属している言語はないことも、明らかになっている。一つの言語の中に、さまざまな類型に属する要素が混ざり合っていて、上に述べたような類型への分類も、どの類型に属する要素が優勢であるのか、という観点から行われる、相対的なものにすぎないことは、研究者の共通の理解になっていると思われる。

このようなわけで、言語の類型について論じようとするれば、たとえ実際には存在しないとしても、理想的な類型 *Idealtypus* を想定しないわけにはいかない。これが明らかになっていなければ、一つひとつの具体的な言語が、この理想型からどれだけ偏っているかを、決定することができないからである。このようなモデルの設定は、従来は経験的あるいは直観的に行われてきたように思われるが、近年これを形式的になるべく厳密な形で行おうとする傾向が、著しくなってきた。このような方向は、従来ともすれば曖昧であったいろいろな概念を明確にさせることに役立ってきた。これはなにも類型学に限ったことではなく、構造言語学の全体についていえることではあるが、ここでは細かい議論に入ることは避けて、形式的類型学に問題を絞る、そのおおまかな輪郭を述べるにとどめたいと思う。したがって使用する予備的な概念も、最小限にとどめている。この記述はレヴジン(Ревзин, Исаак Иосифович 1923-1974)によっているが、表記の方法は、なるべくわが国で用いられている慣用に従っている。なお、集合についてはすでに周知のこと

として、あらためて説明はしない。

2

予 備 概 念

反射律，対称律，推移律

§ 108 ある関係 R があるとき，ある集合 A の要素 x について xRx が成り立つとき，この関係 R は「反射律を満たす」という．たとえば「等しい」という関係は $x = x$ であるから，反射律を満たしている．「家族である」という関係も，自分は自分の家族であるから，反射律を満たしている．しかし「より大きい」という関係は，自分が自分よりも大きいことはないから，反射律を満たさない．同じように，ある集合 A の要素 x, y があるとき，ある関係 R に関して xRy が成り立つならば yRx も成り立つとき，この関係 R は「対称律を満たす」という．たとえば「等しい」という関係についていえば， $x = y$ ならば $y = x$ であるから，これは対称律を満たしている．「家族である」という関係も， x が y の家族ならば y は x の家族だから，対称律は成立する．しかし「より大きい」という関係は，明らかに対称律を満たしてはいない．

さらに，ある集合の要素 x, y, z について， xRy と yRz が成り立つならば， xRz が成り立つとき，この関係 R は「推移律を満たす」という．たとえば「等しい」という関係や「家族である」という関係は，たとえば $x = y, y = z$ ならば $x = z$ となるから，推移律を満たす．「より大きい」という関係も， $x < y, y < z$ ならば $x < z$ であるから，明らかに推移律を満たしている．しかし「友人である」という関係は， x と y とが友人であり，また y と z とが友人であるとしても， x と z とが友人であるとはかぎらないから，推移律を満たしていない．

これらの関係が集合 A の任意の要素について成り立つ場合，この集合は関係 R について，それぞれ反射律，対称律，推移律を満たす，という．

分割，同値類

§ 109 反射律，対称律および推移律を満たす関係は同値関係といわれ，これによって集合をたがいに交わらない部分集合に分割することができる．同値関係によって分割された部分集合は同値類といわれるが，これはまた細胞と呼ばれることもある．

分割の特別なものとして、ある集合の要素の一つひとつを細胞とする分割の仕方がある。これを単位分割という。

そのほか、たとえばある言語の単語の集合を、同じアルファベットの文字で分けると、これはたがいに交わらないから、分割になる。この基礎になる関係は、「同じ文字で始まる」という関係であると考えられる。実際これは反射律、対称律、推移律のすべてを満たしている。「同じ文字で終わる」という関係の場合でも、まったく同じである。レヴジンは前のものを「 α 分割」、後のものを「 ω 分割」と名づけている [RM 85]。

語と連絲

§ 110 集合 V に属する要素の有限個の連なりを「連絲」という。連絲が空である特別の場合が考えられるが、これは「空連絲」と呼び、記号 Λ で表す。たとえば集合 V の要素をアルファベットの文字と考えれば、連絲は語に対応するであろう。 V の要素を語と考えれば、連絲は文あるいは句ということになる。ここでは V の要素を語と考え、「句」という言葉で文と句の両方を指すことにする。

V に属している要素からなるすべての連絲に空連絲を加えた集合を V の星積といい、 V^* で表す¹。

句と言語、正しい連絲

§ 111 いま「正しい」連絲が与えられたとし、この正しい連絲の集合を言語 L と呼ぶことにする。そして一つの連絲が示されたとき、それが正しい連絲であるかどうか、すなわちこの連絲が言語 L に属するものであるかどうか、一義的に決定できると仮定する²。このような正しい連絲がどのようにして作られるかという、生成の問題についてはここでは触れない。そうすると L は V^* の部分集合になる。なぜなら V に属する単語の連なりはすべて V^* に属しているが、そのすべてが正しい文とはかぎらないからである。

文脈、許容および置換

§ 112 いま連絲 f と g からなる順序対 (f, g) を考え、これを「文脈」と呼ぶ。順序対というのは、順序の定まった二つの要素からなるものである。したがって (f, g) と (g, f) とは同じものではない。ついでにいえば順序対を構成する要素が同じ集合に属していなければならない、ということはない。たとえば f が集合 A に属し、 g が集合 B に属している、というばあいもある。具体的な文脈とは、たとえ

ば (I, fast) や (in, ∧) などのようなものである。

ある語 x と文脈 (f, g) が存在し、連糸 fxg が L に属するとき、すなわちこれが「正しい文」であるとき、「文脈 (f, g) は語 x を許容する」という。たとえば英語において語 run は文脈 (I, fast) に許容される (cf. I run fast.)。しかしこの語は文脈 (in, ∧) には許容されない (cf. *in run)。

また語 x, y が存在し、任意の文脈においてこれが x を許容するならば y も許容する、という関係にあるとき、「 y は x を置換する」または「 x は y によって置換される」といい、 $x \Rightarrow y$ と書く。たとえば同じ動詞の変化形に属する、すなわち次節でいう同じ Γ 類に属する (すなわち $\text{comes} \in \Gamma(\text{come})$ である) 語 come と comes を考えたとき、文脈 (he, home), (I, home) などは come を許容する。He come home も, I come home も, 正しい文だからである。しかし comes は文脈 (he, home) には許容されるが、文脈 (I, home) には許容されない。He comes home はありうるが、*I comes home は正しい英語の句ではないからである。したがって $\text{comes} \Rightarrow \text{come}$ は成り立っても、 $\text{come} \Rightarrow \text{comes}$ は成り立たない。

S 同値と S 類, Γ 類

§ 113 いま x と y があって、 $x \Rightarrow y$ かつ $y \Rightarrow x$ であるとき、 x と y とは「S 同値」または単に「同値」であるといい、 $x = y$ で表す。 $x \Rightarrow y$ というのは、任意の文脈において x が許容されるならば y も許容されることであった。したがって $x \Rightarrow x$ であり、また $x \Rightarrow y, y \Rightarrow z$ ならば明らかに $x \Rightarrow z$ である。また仮定によって $x \Rightarrow y$ ならば $y \Rightarrow x$ 。したがってこれは反射律、対称律、推移律を満たす同値関係であり、一つの分割を与える。 x と S 同値である語の集合を x の「類」または「S 類」といい、 $S(x)$ で表す。

また同じ語の変化形に属している語の集合を Γ 類といい、 $\Gamma(x)$ で表す。これは「～の変化形である」という関係に基づくものである。この関係を γ で表せば、 $x\gamma x, x\gamma y, y\gamma z$ ならば $x\gamma z$ 。 $x\gamma y$ ならば $y\gamma x$ 。したがってこれも同値類である。

写像, 関数

§ 114 二つの集合 A と B とに対して、 A の各々の要素 a に B の要素 b をただ一つ対応させる規則が与えられたとき、この規則を「写像」と呼び、 $f: A \rightarrow B$ のように表す。これは「 f は A から B への写像」であると読まれる。また A の任意の要素 a に対応する B の要素 b を、 a の「 f による像」と呼んで、 $f(a)$ で表す。このとき集合 A を関数 f の「定義域」または「始域」、 B を「双対定義域」あるいは

「終域」などと呼ぶ。また A の要素 x_i に対応するのが B の部分集合 B_i であるばあいもある。このような f は「 A から B への対応」といわれ、写像とは区別されている。しかし B の同値類による分割がなされており、ある同値類に属する任意の要素を同一視すれば、 B は同値類を要素とする集合と考えられる。このばあい、 f が A から B への対応であっても、 f の像が同値類であるときには、 f を A から、同値類からなる集合 B への写像と考えることができる³。

P 写像、有標的な P 写像、完全な P 写像

§ 115 いまある言語に属する語の集合の一つの分割 P が与えられたとする。このとき、この言語に属する連絲 $x_1x_2x_3\dots x_n$ に対して $P(x_1)P(x_2)P(x_3)\dots P(x_n)$ を対応させることができる。これを $x_1x_2x_3\dots x_n$ の「 P 写像」あるいは「 P 構造」という⁴。たとえば a very good girl sleeps という連絲があったとすれば、 α 写像は $AVGGS$ 、 ω 写像は $A'Y'D'L'S'$ のようになる。ただしここで $A \sim W$ はそれぞれの文字で始まる語の集合、 $A' \sim W'$ はそれぞれの文字で終わる語の集合を表している。

§ 116 いまある P 写像が与えられたとき、この P 写像をもち、かつ言語 L に属している連絲（すなわち「正しい」連絲）が一つでも存在しているならば、この P 写像は「有標的である」という。またもし、与えられた P 写像をもつすべての連絲が L に属しているならば、この P 写像は「完全である」という。上に述べた α 写像および ω 写像は、明らかに有標的ではあるが、完全ではない。たとえば and very great good sleep という連絲も α 写像は $AVGGS$ であるが、この連絲は正しい連絲ではない。これに対して、 E 分割はすでに述べたように、各々の細胞がただ一つの要素だけからなる分割であるから、 $E(A)E(\text{good})E(\text{girl})E(\text{sleeps})$ のように有標的な E 写像は、トリヴィアルな意味で完全である。

P 文脈、 P 許容、 P 置換

§ 117 与えられた連絲の P 写像の任意の順序対 $(P(f), P(g))$ を「 P 文脈」という。また集合 P_i が与えられた P 文脈 $(P(f), P(g))$ によって「 P 許容される」または単に「許容される」というのは、 P 写像 $P(f)P_iP(g)$ が有標的なばあいである。たとえば P 写像 $P(a)P(\text{very})P(\text{good})P(\text{girl})$ は正しい連絲 a very good girl が存在するから有標的であり、したがって P 文脈 $(P(a), P(\text{good})P(\text{girl}))$ は $P(\text{very})$ を P 許容する。

P_i を許容するすべての P 文脈が P_j をも許容するとき、 P_i は P_j を「 P 置換する」または単に「置換する」といい、 $P_i \supset P_j$ または単に $P_i \Rightarrow P_j$ と表す。たとえば

P 文脈 ($P(a)P(\text{very}), P(\text{harvest})$) は $P(\text{good})$ を許容する。 P 写像 $P(a)P(\text{very})P(\text{good})P(\text{harvest})$ が有標的だからである。同じようにしてこの P 文脈は $P(\text{full})$ も許容する。任意の文脈にこのことがいえる (いま、意味の整合性については考えないことにする) から、 $P(\text{good}) \supseteq P(\text{full})$ 。しかし P 文脈 ($P(a)P(\text{cup}), P(\text{of})P(\text{water})$) を考えれば、これは $P(\text{full})$ は許容するが、 $P(\text{good})$ は許容しない。したがって $P(\text{full}) \not\supseteq P(\text{good})$ は成り立たない。

もし $P_i \supseteq P_j$ でかつ $P_j \supseteq P_i$ ならば、 P_i と P_j は「 P 同値である」といい、 $P_i \sim P_j$ または単に $P_i \sim P_j$ と書く。

誘導された集合、誘導された分割、初期細胞

§ 118 集合 $P^*(x)$ が $P(x) \sim P(y)$ となる集合のすべて、かつそれだけから成るとき、集合 $P^*(x)$ を「誘導された集合」といい、分割 P^* を「誘導された分割」という。明らかにすべての分割は単位分割 E から誘導された分割である。

任意の分割 B とこの分割のある細胞 $B(x)$ が存在して、 $B(y) \neq B(x)$ でかつ $B(y) \Rightarrow B(x)$ となるような $B(y)$ が存在しないとき、 $B(x)$ を「初期細胞」という。

いま $P(x)$ と P 同値の集合 $P(x_i) (1 \leq i \leq q)$ および $P(y)$ と P 同値の集合 $P(y_j) (1 \leq j \leq r)$ があったとする。そして任意の P 文脈が $P(x)$ を許容するとき、 $P(y)$ をも許容するとする。 $P(x_i)$ と $P(x)$ とは同値であるから、 $P(x)$ を許容する P 文脈は $P(x_i)$ を許容し、また逆も真である。 $P(y)$ と $P(y_j)$ についても同様である。仮定から任意の文脈において $P(x_i) \supseteq P(y_j)$ 。したがって $P^*(x) = P(x) \cup P(x_i) \cup \dots \cup P(x_q)$, $P^*(y) = P(y) \cup P(y_1) \cup \dots \cup P(y_r)$ とすれば $P^*(x) \supseteq P^*(y)$ となる。すなわちもし $P(x) \supseteq P(y)$ ならば $P^*(x) \supseteq P^*(y)$ となる。 $S(x)$, $S(y)$ はそれぞれ x と y の同値類であるから、明らかにもし $x \supseteq y$ ならば $S(x) \supseteq S(y)$ である。もし $P(x)$ が初期細胞ならば、定義によって $P(x) \neq P(y)$ でかつ $P(y) \supseteq P(x)$ となるような $P(y)$ は存在しないから、 $P(y) \supseteq P(x)$ となる $P(y)$ は必ず $P(x) \sim P(y)$ となる。このことは $P(x)$ と P 同値になるすべての細胞についていうことができるから、 $P^*(x)$ は初期細胞である。すなわちもし $P(x)$ が初期細胞ならば $P^*(x)$ も初期細胞である。

初期類によって生成された系列、基礎文法カテゴリー

§ 119 $P(x), P(y_1), P(y_2) \dots P(y_n)$ があって、任意の $i (1 \leq i \leq n)$ に対して $P(x) \Rightarrow P(y_i)$ であり、かつ $P(x) \Rightarrow P(z)$ となる z が存在するならば $P(y_j) = P(z)$ となる j が存在するとき、 $P(x) \cup P(y_1) \cup \dots \cup P(y_n)$ を「 $P(x)$ によって生成された系列」という。この最後の条件の意味は、 $P(x)$ が置換するすべての P 細胞が、 $P(x)$ によっ

て生成された系列に含まれるということである。

またある初期類によって生成された系列を、「基礎文法カテゴリー」という。

この基礎文法カテゴリーによって、たとえば文法的同音異義を次のように定義することができる。

文法的同音異義

§ 120 語 x は、これが二つの異なった基礎文法カテゴリーに属しているとき、「文法的に同音異義である」という。

これはさらに二つの種類に分けることができる。

- 1) 語 x はこれが文法的に同音異義であり、かつ x が属する基礎文法カテゴリーを生成するすべての初期類の中に $y_1 \in S_1, y_2 \in S_2 \dots y_n \in S_n$ であって、かつ同一のパラダイムに属する $y_1, y_2 \dots y_n$ が存在するとき、「第一種の文法的同音異義である」という。

たとえばロシア語の名詞 *tetrad'*「ノート」は単数生格(属格) *tetradi*、与格 *tetradi*、対格 *tetrad'*、造格 *tetrad'ju*、前置格 *tetradi* のように変化する。一方 *lampa*「電灯」は *lampy*, *lampe*, *lampu*, *lampoj*, *lampe* と変化する。そうすればたとえば文脈 (ot, $\wedge$) は *ot* が生格支配であるから、*lampy* を許容し、また *tetradi* をも許容する。しかし文脈 (k, $\wedge$) は与格を要求するから、*tetradi* は許容するが、*lampy* は許容しない。したがって *lampy* $\Rightarrow$ *tetradi* は成立するが逆は成り立たない。したがってまた $S(lampy) \Rightarrow S(tetradi)$ である。逆に文脈 (k, $\wedge$) は *lampe* と *tetradi* をともに許容するが、文脈 (ot, $\wedge$) は *tetradi* を許容しても、*lampe* は許容しない。したがって *lampe* $\Rightarrow$ *tetradi* は成立するが逆は成り立たない。ここから $S(lampe) \Rightarrow S(tetradi)$ となる。



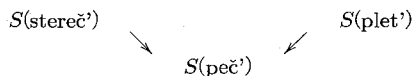
このように *tetradi* という語は、二つの基礎文法カテゴリーに属しているから、文法的に同音異義である。しかも *lampy* と *lampe* は同じパラダイムに属しているから、これは第一種の文法的同音異義だということになる。このことから、第一種の同音異義というのは一つの語の異なる変化形が同じ形をもっているときであることがわかる。

§ 121 第一種の同音異義に対して、

- 2) 文法的に同音異義であって、第一種の同音異義でないものを「第二種の同音異義

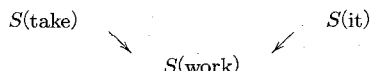
である」という。

レヴジンの場合によれば [RM 94]



ここで stereč' というのは「護る」という動詞の不定法、また peč' は動詞としては「焼く」の同じく不定法である。これに対して plet' は「鞭」という名詞の主・対格形であり、 peč' は名詞としては「暖炉」の主・対格形である。この例の置換関係（すなわち矢印の方向）についてはレヴジンは何もいっていないが、このようなばあいには peč' は名詞のことも、また動詞のこともあるわけだから、 $S(\text{plet'}) \Rightarrow S(\text{peč'})$ および $S(\text{stereč'}) \Rightarrow S(\text{peč'})$ しかありえない。したがって peč' は文法的同音異義であるが、 stereč' と plet' が異なる品詞であり、したがって同じパラダイムには属していないから、これは第二種の文法的同音異義である。

ロシア語をはじめとするスラヴ諸語では、第一種の文法的同音異義はきわめて多く、これを体系から除外することはできないが、第二種の同音異義は散発的、偶然的にみられるにすぎない。これに対して英語ではたとえば、



などにみられるように、第二種の文法的同音異義が多用されている [RM 95]。これは英語の類型学的特徴の一つであるが、より一般的には孤立型言語の特徴であるといえる。

タイプ

§ 122 x と y とが同じタイプ T に属するというのは、 x を許容する任意の文脈 $(z_1 z_2 \dots z_k, z_{k+1} z_{k+2} \dots z_n)$ に対して、 y を許容し任意の $i (1 \leq i \leq n)$ に対して $z'_i \in \Gamma(z_i)$ となるような文脈 $(z'_1 z'_2 \dots z'_k, z'_{k+1} z'_{k+2} \dots z'_n)$ が存在すること、および逆に y を許容する任意の文脈 $(u_1 u_2 \dots u_l, u_{l+1} u_{l+2} \dots u_m)$ に対して、 x を許容し任意の $j (1 \leq j \leq m)$ に対して $u'_j \in \Gamma(u_j)$ となるような文脈 $(u'_1 u'_2 u'_l, u'_{l+1} u'_{l+2} \dots u'_m)$ が存在することである [RM 97]。ここで $z'_n \in \Gamma(x)$ というのは、 z'_n が $\Gamma(x)$ に「属している」ということを表す。

たとえば英語で文脈 $(\wedge, \text{am a boy})$ が存在するとき、これは I を許容しているが、これに対して you を許容する文脈 $(\wedge, \text{are a boy})$ が存在し、明らかに $\wedge \in \Gamma(\wedge)$, $\text{are} \in \Gamma(\text{am})$, $\text{a boy} \in \Gamma(\text{a boy})$ である。逆に you を許容する文脈 $(\text{Who are}, \wedge)$ に対

して I を許容する文脈 (Who am, $\wedge$) が存在して、かつ $\text{who} \in \Gamma(\text{who})$, $\text{am} \in \Gamma(\text{are})$, $\wedge \in \Gamma(\wedge)$ である。したがって I と you は同じタイプに属している。同じようにして he , she , it , we , they など、同じタイプに属することになる。このことは $\Gamma(I)$ を許容する任意の Γ 文脈において $\Gamma(I) \sim \Gamma(\text{you}) \sim \Gamma(\text{he}) \dots$ であること、すなわちこれらが互いに Γ 同値であることを意味しているから、結局 $T(I) = \Gamma^*(I)$ 。すなわちタイプ $T(I)$ は $\Gamma(I)$ から誘導された集合であることになる。

これは品詞の一つのモデルである。しかしロシア語のばあい、たとえば Γ 文脈 ($\Gamma(\wedge)$, $\Gamma(\text{žizn'})\Gamma(\text{čelovek})$) (žizn' は「生活」、 čelovek は「人」) は $\Gamma(\text{dovol'nyj})$ (dovol'nyj は「満足な」) を許容する。すなわち $\text{dovol'nyj žizn'ju čelovek}$ 「生活に満足な人」は正しい連綴である。しかしこの文脈は $\Gamma(\text{dobryj})$ (dobryj は「善良な」) を許容しない。 dobryj が補語をとらないからである。したがって dobryj と dovol'nyj は異なるタイプに属することになる。ロシア語では dovol'nyj も dobryj もともに形容詞であるから、少なくともロシア語ではタイプは品詞よりも狭い概念であるということになる。ロシア語の品詞のモデルをどのようにして構築するかについては、ここで立ち入ることをしないが、同じような概念やカテゴリーが、言語によって形式的にどのように異なっているかは、各々についてこのようなモデルを構築することによって、はじめて明らかにされるであろう。

ΓS 連鎖、部

§ 123 二つの語 x と y とが「 ΓS 連鎖によって結ばれている」というのは、 $z_1 = x$, $z_n = y$ となる n 個の語 $z_1 \dots z_n$ が存在して、任意の i ($1 \leq i \leq n$) に対して $z_i \in \Gamma(z_{i+1})$ または $z_i \in S(z_{i+1})$ が成り立つときである [RM 99]。

「部」(razdel) $Ra(x)$ というのは、 ΓS 連鎖によって結ばれているすべての語の集合である。明らかにこれは反射律、対称律、推移律を満たすから、一つの分割を与える。

3

言語の種類

無形態の言語

§ 124 以上の予備的な概念を基に、言語の種類について考えてみることにしよう。いま「同じパラダイムに属する」という関係による分割を Γ とすれば、無形

態の言語は、次のように定義される。まず、

語 x が「無形態である」というのは、 x に対し $y \in \Gamma(x)$ となるような y が存在すれば、 $y = x$ となることである。したがって言語が「無形態である」というのは、その言語に属する任意の語 x に対して上記が成り立つことである。

$\Gamma(x)$ は x の変化形の集合であるから、 $y \in \Gamma(x)$ ならば $y = x$ ということは、この集合が x ただ一つからなっていること、言い換えれば、語形変化がないことを意味している。すなわち、任意の語について、そのパラダイムが一語だけから成っていることである。

無形態な言語というのは、したがって孤立語型の言語の理想型である。中国語がこの定義によくあてはまることは、この言語が理想的な孤立語であることを示すものである。ロシア語は無形態な言語ではないが、部分的には無形態な語も存在している。たとえば本来の副詞、間投詞、接続詞、前置詞などは、すべて無形態な語である。このほかロシア語では、metro「地下鉄」、kino「映画、映画館」、viski「ウィスキー」、kofe「コーヒー」などのような無形態な名詞が存在し、その数もとくに近年急激に増加しつつある。Baku「市名」、Mississippi「川の名」のように、本来ロシア語の名詞の語尾にはなかった語末をもつ名詞は、これまでも不変化であったが、たとえば Smit「スミス」、Tetčer「サッチャー」などの外来の人名のように、ロシア語の名詞変化が可能と思われる語でも、男性を指す場合には変化するが、女性を指すときには変化をしない。日本人の姓も、以前にはたとえば Khamada, Yamada のように a で終わる場合は、 a に終わるロシア語の名詞と同じように変化させていたが、最近では変化しないばかりが、次第に増えてきている。

§ 125 しかしこれらの不変化名詞は、ロシア語では前に述べた文法的同音異義であると考えられ、同じように無形態な語ではあっても、副詞、間投詞などとは性格が異なっている。このことを考えて、次のような定義をおく。

無形態な語 x は、 $y_1 \in \Gamma(y_2)$, $y_1 \Rightarrow x$, $y_2 \Rightarrow x$ となるような、相異なる語 y_1, y_2 が存在しないとき、「本来的に無形態である」という。

また、本来的に無形態な語以外の無形態な語を、「非本来的に無形態な語である」という。

たとえばロシア語の metro「地下鉄」に対して文脈 (on edet na, $\wedge$)「彼は～に乗っていく」および文脈 (stancija, $\wedge$)「駅」を考えると、 $\text{tramvae} \in \Gamma(\text{tramvaja})$ (tramvaj は「市電」) で、かつ $\text{tramvae} \Rightarrow \text{metro}$ である。なぜなら On edet na tramvae.「彼は市電に乗っていく」も、On edet na metro.「彼は地下鉄に乗っていく」も、ともに正し

い連糸であるが、stancija metro「地下鉄の駅」は正しい連糸であっても、*stancija tramvae は正しい連糸ではないからである。同じように stancija tramvaja「市電の駅」も stancija metro「地下鉄の駅」も正しい連糸であるが、*On edet na tramvaja は正しい連糸ではないから、tramvaja $\Rightarrow$ metro となる。したがって metro は本来的に無形態な語ではないことになり、定義によって非本来的に無形態な語である。

いま述べたことから明らかなように、本来的に無形態な語の定義は、文法的な同音異義を排除することを、目的としている。

無形態な言語のばあいには、その言語に属する任意の語 x について、 $S(x) = Ra(x) = T(x)$ となる。これは $\Gamma(x)$ が x だけから成っているから、 ΓS 連鎖は S だけから成り、したがって $S(x) = Ra(x)$ となること、および $\Gamma(x)$ を許容する任意の文脈 $(z_1 z_2 \dots z_k, z_{k+1} z_{k+2} \dots z_n)$ と $\Gamma(y)$ を許容する文脈 $(z'_1 z'_2 \dots z'_k, z'_{k+1} z'_{k+2} \dots z'_n)$ とは同じものになり、また逆も真であるから、 $\Gamma(x) \sim \Gamma(y)$ 、すなわち $x = y$ であり、したがって $S(x) = S(y)$ となり、ここから $S(x) = T(x)$ となること、によっている。したがってこの言語は、非常に簡単な構造をもつことになる。

極端に文法化した言語

§ 126 無形態な言語の対極にあるものとして、「極端に文法化した言語」が考えられる。これは次のように定義される。

語 x が「極端に文法化されている」というのは、 x に対し $y \in S(x)$ となるような y が存在すれば、 $y = x$ となることである。したがって言語が「極端に文法化されている」というのは、その言語に属する任意の語 x について上記が成り立つことである。

$S(x)$ というのは、文脈によって語 x と相互に置換可能な語からなる、同値類のことであった。したがってもし $y \in S(x)$ ならば $y = x$ であるということは、 $S(x)$ が x のみからなっているということを示し、意味している。言い換えれば、この言語に属する語は決して同じ S 類に属することはないことになる。これも一つの理想型ではあろうが、このような言語が現実機能することはむずかしいであろう。なぜならすべての語について、たがいに置換可能な文脈が一つもないような言語は、使用することがむずかしいからである。

ロシア語やラテン語の人称代名詞は、極端に文法化されている。ラテン語のばあい、たとえば文脈 (ergo, sum) は、ergo ego sum「故に我あり」が正しい連糸であるから、ego「私」を許容するが、tu「おまえ」も、ille「彼」も、nos「我々」も、vos「おまえたち」も、許容することがない。逆に文脈 (ergo, es) は tu 以外のものを

許容しない。しかし $\Gamma(\text{ego})$ を許容する文脈、たとえば $(\text{ergo}, \text{sum})$ に対して $\Gamma(\text{tu})$ を許容する文脈 (ergo, es) が存在し、 $\text{ergo} \in \Gamma(\text{ergo})$, $\text{es} \in \Gamma(\text{sum})$ であるから、定義によって ego と tu とは同じタイプに属している。すなわち $\text{tu} \in T(\text{ego})$ である。他の人称代名詞も、同じようにして $T(\text{ego})$ に属することになる。

§ 127 これに対して人工語のエスペラントでは、たとえば文脈 $(\Lambda, \text{estas Esperantisto})$ 「 $\sim$ はエスペランティスト (単数) である」は人称代名詞の単数をすべて相互に置換できるから、同じ S 類に属している。同じように文脈 $(\Lambda, \text{estas Esperantistoj})$ 「 $\sim$ はエスペランティスト (複数) である」は人称代名詞の複数を相互に置換できるから、同じ S 類に属する。また $\text{Esperantistoj} \in \Gamma(\text{Esperantisto})$ であるから、定義によってすべての人称代名詞が同じタイプに属することになるのは、ラテン語のばあいと同じであるが、エスペラントのタイプは、二つの S 類からなることになる。

このことから人称代名詞がラテン語で極端に文法化する理由は、動詞が人称変化をするためであることがわかる。ロシア語の場合、過去形に限れば、人称変化はなく、かわりに性と数が区別されるが、このばあい、すべての文脈ではないが、かなり多くの文脈において、一人称と二人称の単数が相互置換可能であり、一人称と二人称の複数もまた相互置換可能である。これに対して三人称の代名詞は人称代名詞そのものが性の区別をもち、文法的な一致をするから、相互に置換可能ではない。人称も性も数も区別しない日本語の場合には、人称代名詞はすべて同じ S 類に属する。英語のばあいには完全な人称変化をするのは be 動詞に限られるから、仮にこれらを除外すれば、三人称単数を除く人称代名詞は同じ S 類に属することになる。このようなことから形式類型学のばあいにも、具体的な言語が典型的なものからどのように隔たっているかを、客観的に評価する手段を必要としているのではないか、と思われるのである。

ST 正規な言語、完全に正規な言語

§ 128 「ST 正規な言語」というのは、次のように定義されるものである。

語 x が ST 正規である、というのは、 $y \in S(x)$ であるすべての y について $y \in T(x)$ となることである。すなわち、同じ S 類に属するすべての語が、同じタイプに属することである。したがって言語が「ST 正規である」というのは、その言語に属する任意の語 x に対して上記が成り立つことである。

極端に文法化した言語の項で述べたことから、同じ S 類に属する語が同じタイプに属するのは自明なことであるようにみえる。しかし研究が進むにつれて、必ず

しもそうはいえないことが明らかになってきた。たとえばブルガリア語では比較級は名詞からつくられることもある。たとえば *dobъr*「善良な」, *po-dobъr*「より善良な」, *nai-dobъr*「最も善良な」に対して, *majstor*「匠, 親方」, *po-majstor*「もっと匠, もっと親方」, *nai-majstor*「最も匠, 最も親方」のようなものがみられる。したがってこのばあい, 一定の文脈において, 名詞と形容詞という, 異なったタイプに属する語が *S* 同値になり, 同じ *S* 類に属することになる。もちろんブルガリア語の場合も, これが言語の全体に及ぶものでないことは明らかである。

この定義から, *majstor* や *dobъr* は *ST* 正規な語ではないということになる。このことから明らかのように, *ST* 正規という概念は, 同じ文脈に用いられる語は, 決して異なったタイプに属することがないということを, 主張するものであるといえる。

これと関連してルーマニアの数理言語学者のマルクス (Marcus, Solomon 1925-) は, *S* 類という概念が同値関係, すなわち相互置換の関係に基づいているのに対して, 単なる置換の関係に基づいた, より強い「完全に正規な言語」を定義したといわれる [RM 117]。

言語が「完全に正規である」というのは, $x \Rightarrow y$ あるいは $y \Rightarrow x$ を満たす x, y に対して, それぞれの場合について, $x \in T(y)$, $y \in T(x)$ となることである。

ロシア語の *student*「学生」のような男性活動体名詞は, 対格と生格 (属格) が同じ形の *studenta* であるのに対し, *stol*「机」のような男性不活動体名詞は主格と対格が同じ形である。逆に *stola* は生格の意味しかもたないが, *studenta* は生格のほかに対格の意味ももっている。したがって *student* を許容する任意の文脈においてこれは *stol* によって置換できるが, 逆は正しくない。したがって $student \Rightarrow stol$ である。同じように *stola* を許容する任意の文脈は *studenta* を許容するが, 逆は真でない。したがって $stola \Rightarrow studenta$ である。

一方 $\Gamma(student)$ を含む任意の Γ 文脈において $\Gamma(student)$ と $\Gamma(stol)$ とは Γ 同値になるから, *student* と *stol* とは同じタイプに属している (§ 122 参照)。

これに対してすでに述べたように, $stereč' \Rightarrow peč'$ は文法的同音異義であった (第二種の文法的同音異義)。これは $stereč'$ が動詞であるのに $peč'$ には動詞のばあいと名詞のばあいがあることによるものであった。このばあい, たとえば文脈 (*malen'kaja, stoit*) は *malen'kaja peč' stoit*「小さい暖炉が立っている」が正しい文であるから $peč'$ を許容するが, $stereč'$ を許容してかつ Γ 写像 $\Gamma(malen'kaja)\Gamma(stereč')\Gamma(stoit)$ が有標的になることはない。したがって $stereč'$ と $peč'$ とが同じタイプに属することは

ない。

序にいえば、たとえばロシア語の student「学生」と studentka「女子学生」のように、性が異なるばあいには、この二つの語を同時に許容する文脈は限られたばあい(たとえば studentka stoit「女子学生が立っている」/student stoit「学生が立っている」)を除けば、一般に存在しないから、置換関係は成り立たないが、同じタイプに属している。たとえば (male'kij, stoit) という文脈は、malen'kij student stoit「小さな学生が立っている」が正しい文であるから student を許容する。これに対して studentka を許容する文脈 (malen'kaja, stoit) が存在して (malen'kaja studentka stoit「小さな女子学生が立っている」は正しい文である), $\text{malen'kaja} \in \Gamma(\text{malen'kij})$, $\text{stoit} \in \Gamma(\text{stoit})$ である。また逆に studentka を許容する文脈 (priležnaja, prišla) (priležnaja studentka prišla「勤勉な女子学生が来た」は正しい文) に対して student を許容する文脈 (priležnyj, prišel) が存在して, $\text{priležnyj} \in \Gamma(\text{priležnaja})$, $\text{prišel} \in \Gamma(\text{prišla})$ である。したがって定義により $\text{studentka} \in T(\text{student})$ となる。

上に述べたことから、第二種の文法的同音異義をもつ言語は完全に正規な言語ではないことがわかる。ロシア語はこの種の文法的同音異義を除けば $x \Rightarrow y$ または $y \Rightarrow x$ となるすべての語について $y \in T(x)$ が成り立つから、完全に正規な言語であるといえる。しかし英語の場合には、すでに述べたように第二種の文法的同音異義は広くみられるから、これを取り除くことはできない。したがって英語は一般に完全に正規な言語とはいえないことになる。

このように「完全に正規」という概念は、二つの語について、その間に単なる置換関係しか存在しないばあいでも、これらが同じタイプに属することを要求するものである。

単純な言語, 自由変異

§ 129 まず「単純な語」を定義すると、次のようになる。

語 x が「単純である」というのは、語 x に対して $y \in \Gamma(x) \cap S(x)$ となるような y が存在すれば、 $y = x$ となることである。したがって言語が「単純である」というのは、その言語に属する任意の語 x に対して上記が成り立つことである。

たとえば英語のばあい、focus「焦点」の複数形には foci と focuses とがあり、そのあいだに「ゆれ」がみられる。このばあいには $S(x) = \{\text{foci, focuses}\}$ であり、また $\Gamma(x) = \{\text{focus, foci, focuses}\}$ であるから、 $S(x) \cap \Gamma(x) = \{\text{foci, focuses}\}$ となって、一義的には定まらない。このようないわゆる異形態 allomorph は自然言語には広く認められ、ロシア語でもしばしばみられるものである。たとえば kostjami/kost'mi

「骨(複数造格)」, synov'ja/syny「息子(複数主格)」のようなばあいである。異形態のまったくない言語としてはエスペラントのような人工語があるが、いまこのような異形態を完全に取り除いた言語を考えて、これを「規範化された言語」ということにする。これを定義するに先立って、「自由変異」の定義を行う。

二つの語 x と y とが「自由変異の関係にある」というのは、任意の連綴 f と g とに対して fxg および fyg の両方が意味をもたないか、あるいは同じ意味をもつときである。

ここで新しく「意味」というクリテリアが導入されることになるが、これについての詳しい議論には、ここでは立ち入らない。 fxg と fyg という連綴が与えられたときに、これが同じ意味をもつか、あるいは全く意味をもたないかが、いわばア・プリオリに判定できると仮定するのである。

規範化された言語、文法的変異体

§ 130 自由変異の定義を用いて、まず「文法的変異体」が次のように定義される。

二つの語 x と y とが互いに「文法的変異体である」というのは、それらが同じパラダイムに属し、かつ自由変異の関係にあるときである。

さきにあげた例でいえば、foci と focus とは同じパラダイムに属しており、また明らかに互いに自由変異の関係にあるから、文法的変異体である。

これを用いて「規範化された言語」を次のように定義する。

「規範化された言語」とは、文法的変異体をもたない言語である。

このことの意味は説明するまでもなく明らかであると思われるが、このような規範化された言語がすべて単純な言語であるか、というのが、次に問題になる。たとえばブルガリア語ではいわゆる後置定冠詞が用いられるが、ここではたとえば次のような文がありうる。

Dnes ne s'bm čel vestnik.

(今日 否定 一人称単数・助動詞 読む・完了分詞 新聞)

「今日私は新聞を読まなかった。」

Dnes ne s'bm čel vestnika.

(今日 否定 一人称単数・助動詞 読む・完了分詞 新聞・後置定冠詞)

「今日私はその新聞を読まなかった。」

これは同じ文脈であるから、vestnik と vestnika は同じ S 類に属している。またこれが同じパラダイムに属していることも、明らかである。それにもかかわらず、vestnik を用いるか vestnika を用いるかによって、意味が異なるから、これは自由

変異ではなく、したがって定義によって文法的変異体ではない。

したがってこれは規範化された語である。それにもかかわらず、 $vestnika \in \Gamma(\text{vestnik}) \cap S(\text{vestnik})$ であつ $vestnika \neq \text{vestnik}$ であるから、これは単純な語ではない [RM 118]。

このような例の存在から、規範化された言語が、必ずしも単純な言語であると
はかぎらないことがわかる。

ロシア語の場合には、一定の文脈に限るという条件をつければ、たとえば次の
ような例が考えられる。

Oblako plyvět nad gorój.

「雲が一つ山の上を流れている。」

Oblako plyvět nad góru.

「雲が一つ山の上へ流れている。」

ロシア語のばあいには、 $gorój$ と $góru$ は明らかに S 同値ではないが、仮にこのよ
うな文脈に限れば、 $vestnika$ と $vestnik$ のばあいとまったく同じことがいえる。 $gorój$
は $gorá$ 「山」の単数対格 (具格)、 $góru$ は単数対格であつて、意味も異なり、異なつ
た文法的な形であるから、文法的変異体ではない。またロシア語で多くみられる
ものとして、たとえば $učitel'$ の複数主格 $učiteljá$ 「教師、先生」と $učíteli$ 「師、指導
者」のように、単数形がいくつかの意味をもつ同音多義語のばあいに、どの意義
を指すかによって、複数主格 (場合によっては複数対格も) が二つまたはそれ以上の
形の中から一つを選択することがある。これもまた文法的変異体ではないことにな
る。このような規範化されてはいるが「単純でない」例をみれば、これらが一
種の「紛らわしき」の原因になっていることがわかる。

完全に単純な言語、完全に単純な語

§ 131 以上のようなことを考え、単純な言語の定義を強めて、「完全に単純な
語」および「完全に単純な言語」を次のように定義する。

語 x が「完全に単純である」というのは、任意の $y (\neq x)$ に対し、 $x \Rightarrow y$ または
 $y \Rightarrow x$ ならば $y \notin \Gamma(x)$ となることである。

「完全に単純な言語」とは、この言語に属するすべての語 x に対して上記が成り立
つことである。

言い換えれば、これは x が y を置換するか、 y が x を置換するという、 S 同値
よりも緩やかな条件においても、 x と y とが同じパラダイムに属することはない、
ということを主張しているのである。たとえば英語の文脈 (God, you) は bless と

blesses の両方を許容するが、文脈 (I, you) は bless を許容しても、blesses を許容しない。したがって $\text{blesses} \Rightarrow \text{bless}$ 。しかし $\text{blesses} \in \Gamma(\text{bless})$ であるから、これは完全に単純な語ではないということになる。一方 $\text{blesses} \in S(\text{bless})$ であるから、これは単純な語ではある。その理由はさきに述べた単純な語の定義が、 $x \neq y$ であるすべての語 y に対して $y \in \Gamma(x)$ ならば $y \notin S(x)$ である、と言い換えることができることによる。

理想的に単純な言語、連結類

§ 132 レヴジンはこの置換の関係を拡張して、さらに「理想的に単純な言語」を定義している [RM 118]。これによれば、まず置換の関係を、次のように拡張する。

二つの語 x と y とが同じ「連結類」、または「 Δ クラス」に属するというのは、 $z_1 = x, z_n = y$ となる列 $z_1, z_2, \dots, z_i, \dots, z_n$ が存在し、任意の $i (1 \leq i \leq n)$ に対して z_i と z_{i-1} との間に置換の関係 $z_i \Rightarrow z_{i-1}$ または $z_{i-1} \Rightarrow z_i$ が成り立つときである。

明らかに $x \in \Delta(x)$ であり、また $y \in \Delta(x)$ ならば $x \in \Delta(y)$ である。さらに $x \in \Delta(y)$ かつ $y \in \Delta(z)$ ならば $x \in \Delta(z)$ である。したがってこの関係は反射律、対称律、推移律のすべてを満たすから、一つの分割を与える。これに基づいて「理想的に単純な語」および「理想的に単純な言語」を次のように定義する。

語 x が「理想的に単純である」というのは、任意の $y (y \neq x)$ に対し、 $y \in \Delta(x)$ ならば $y \notin \Gamma(x)$ となることである。

「理想的に単純な言語」とは、この言語に属するすべての語 x に対し、上記が成り立つことである。

たとえばロシア語で文脈 (on pridet k, ^)「彼は～までに来るだろう」は žime (冬, 与格) と noči (夜, 生格・与格) を許容し、また文脈 (ja ždal, prikhod)「私は～到着を待っていた」は žimy (冬, 生格) と noči (夜, 生格・与格) を許容するが、前の文脈が žimy を許容することはなく、また後の文脈が žime を許容することもない。したがって žimy および žime を noči によって置換することはできるが、逆は成り立たない。ここから $\text{žimy} \Rightarrow \text{noči}$, $\text{žime} \Rightarrow \text{noči}$ となる。したがって定義によって žimy と žime は同じ Δ クラスに属することになる。一方 žimy と žime とは同じパラダイムに属するから、定義によってこれは理想的に単純な語ではないことになる。したがってロシア語は理想的に単純な言語ではない。

例から明かなように、このようなことが起こるのは、noči の形態的な同音異義性を媒介にしているからである。このことから、形態的な同音異義が存在するときには、理想的に単純な言語にはならないことがわかる。一般に屈折型の言語

は形態的な同音異義をもつから、理想的に単純な言語ではない。これに対して膠着型の言語は形態的同音異義をもたないことが多いから、理想的に単純な言語に近いといえる。孤立型の言語は、理想的には無形態であるから、トリヴィアルな意味で、理想的に単純な言語になる。

完備した言語

§ 133 完備した言語というのは、次のようにして定義されるものである。

語 x が「完備している」というのは、 $x \Rightarrow y$ となるすべての y に対し、 y を許容するすべての文脈が $\Gamma(x)$ を許容することである。

したがって言語が「完備している」とは、この言語に属するすべての語 x に対して上記が成り立つことである [RM 119]。

たとえばロシア語では、okno「窓」 $\Rightarrow$ metro「地下鉄」である。okno が普通の名詞変化をするのに対して、metro は不変化名詞であるから、okno が常に metro によって置き換えられるのに、逆の場合、たとえば ot metro「地下鉄から」は存在しても、okna には *ot okno という形はない。しかし正しい連鎖 ot okna「窓から」の okna は okna (生格形) $\in \Gamma(\text{okno})$ であるから、このようなばあい限定すれば、ロシア語は完備した言語であるといえよう。けれども一般にはそうはいえない。たとえば okno $\Rightarrow$ ovladenie「獲得」である。たとえば文脈 (bor'ba za, znanijami)「知識の、のための闘争」は ovladenie は許容するが、okno を許容することはない。それだけではなく、この文脈は $\Gamma(\text{okno})$ に属するどのような語も許容しない。こういうわけでロシア語は一般的には完備した言語ではないことになる。

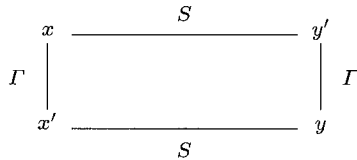
さきに述べた okno と metro の例から、ロシア語の kino「映画」、kofe「コーヒー」などのような不変化名詞が、不変化であっても格をもっているのは、このような「局所的な」完備性のためであることがわかる。またあとの例にみられるような完備性の欠如は、ロシア語の -nie、-tie に終わる行為名詞が、派生の原基となっている動詞が補語に要求する格を、そのまま継承しているために起こる、周縁的な現象であるといえる。

形式的に等質な言語

§ 134 また形式的に等質な言語を次のように定義する。

言語が「形式的に等質である」というのは、その言語に属する任意の語 x について、 $\Gamma(x) \cap S(y) \neq \emptyset$ であるすべての y に対して $\Gamma(y) \cap S(x) \neq \emptyset$ となることである [RM 120]。

言い換えれば、もし $\Gamma(x)$ の中に y と S 同値の x' が存在していれば、 x と S 同値となり、かつ $\Gamma(y)$ に属する y' が必ず存在する、というのが、この定義の趣意である。したがってこれは類推が完全な形で成り立つことを示している。



たとえばロシア語では、形容詞の比較級単一形は、少数の例を除いて不変化の形しかもたないが、khorošij「よい」、vysokij「高い」などは、lučšij「よりよい」、vyssij「より高い」などの、変化をもつ長語尾形をもっている。したがって $\Gamma(\text{lučšij}) \cap S(\text{krasivyj}) \neq \emptyset$ (krasivyj は「美しい」) であるが、 $\Gamma(\text{krasivyj}) \cap S(\text{lučšij}) = \emptyset$ である。すなわち、khorošij : lučšij = krasivyj「美しい」: x とおいたとき、 x にあたるものは存在しない。したがってロシア語は形式的に等質ではない。他のスラヴ語、たとえばチェコ語では、一般に形容詞の比較級は変化する長語尾形をもつから、dobrý「よい」、lepší「よりよい」、heský「美しい」、hesčí「より美しい」のあいだに、完全に形式的等質性がみられる。レヴジンはこの形式的等質性の欠如が、ロシア語を他のスラヴ諸語から区別する、一つの特徴であるといっている [RM 120-121]。日本語の「私は」:「本は」=「私を」:「本を」のように、膠着型の言語は形式的等質性が高いと考えられる。エスペラントのような人工語も、形式的等質性をもっている。

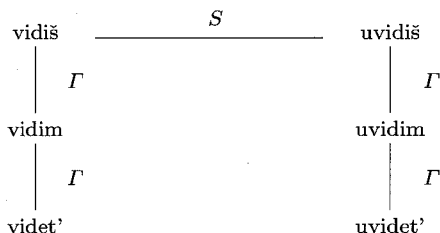
§ 135 「形式的に等質な語」も、同じようにして定義される。すなわち、

語 x が「形式的に等質である」というのは、 $x \in \Gamma(y) \cap S(z)$ となるすべての語 y と z に対して、 $w \in \Gamma(z) \cap S(y)$ となる語 w が存在することである。

これについては、例えば次のようなことが考えられる。

スラヴ語の動詞に一般にアスペクトの区別があるのは、周知のことである。ロシア語の場合、不完了体動詞の vidis'「おまえは見る」と完了体動詞の uvidis' とが対立しているが、これらは互いに置換可能であって、同じ S 類に属している。しかし完了体の不定法は、一般に助動詞 byt' の未来形 budu, budeš', budet... と結んで複合未来形を作ることはいできないから、例えば文脈 (ja budu, ∧) は不完了体不定法 videt' は許容するが、完了体不定法 uvidet' を許容しない。したがってこれらは S 同値ではない。また完了体の一人称複数形は davaj と結んで勧奨 (〜しよう) の意

味を表すが、不完了体の一人称複数形は *davaj* と結ぶことがない。この故に *vidim* と *uvidim* も、*S* 同値ではない。したがってロシア語の完了体動詞と、これに対応する不完了体動詞とは、形式的な等質性をもたないことになる。



ロシア語学の研究者の間には、完了体と不完了体とを一つの動詞の変化形であるとする観方と、それぞれ異なった動詞であるとする立場があるが、レヴジンは、もしこれらを一つの変化形であると考えれば、*vidiš* と *uvidiš* のように、同一の変化形の中に *S* 同値のものが存在することになり、全体として形式的等質性が失われることになるとして、異なる動詞であるとする立場のほうが、より適当であるとしている [RM 122-123, 128]。

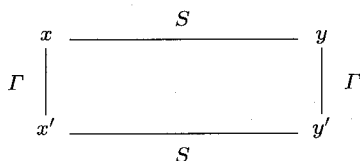
完全に等質な語、完全に等質な言語、パラダイムをもつもの

§ 136 無形態な語は、明らかに形式的に等質な語である。なぜなら無形態な語 x は、 $x \in \Gamma(y)$ ならば $x = y$ となるから、 $\Gamma(x) \cap S(y) \neq \emptyset$ ならば $\Gamma(x) \cap S(y) = \{x\}$ 。したがって $y \in S(x)$ 。また $\Gamma(y) = \{y\}$ であるから $\Gamma(y) \cap S(x) = \{y\} \neq \emptyset$ となるからである。したがって形式的に等質な言語から無形態な語を除外したものを考え、それを「完全に等質な言語」とであるという。すなわち、

すべての語が形式的に等質であって、かつパラダイムをもつものを、「完全に等質な言語」という。

ここで「パラダイムをもつ」ということが、まだ無定義のままで用いられているから、実は上の定義に先立って、この言葉の定義をする必要がある。

言語が「パラダイムをもつ」というのは、 $x \Rightarrow y$ となるようなすべての x と y に対して、 $x' \in S(y')$ となるような $x' \in \Gamma(x)$, $y' \in \Gamma(y)$ が存在していることである。



たとえばロシア語において、不変化名詞 metro, kino などを考えてみる。このとき、すでに述べたように okno $\Rightarrow$ metro であるが、metro と S 同値になる語は okno の Γ 類の中にはない。したがってロシア語はパラダイムをもつ言語とはいえない。これはみたところ、ロシア語の性質と矛盾するようにみえるが、これはいま述べたような、不変化名詞あるいは少数の bez「ベージュ色の」、khaki「カーキ色の」のような不変化形容詞が存在しているからである。これらおよび前に述べたような無形態な語を除けば、ロシア語はパラダイムをもつ言語であるといえる。しかし前にも述べたように、ロシア語では不変化の名詞が近年急速に増加している。これに対して、チェコ語のばあいには外来語もチェコ語の変化体系に組み入れようとする傾向が著しく、たとえば Bordeaux, Sanssouci のように、わずかな外来語だけが不変化である。形容詞のばあいにも、たとえば blond「ブロンドの」、lila「ライラック色の」、fajn「すてきな」のような、口語的なものを除いては、不変化のものはない。スロヴェニア語やセルビア語のばあいには、原則として不変化のものはないという。このことからロシア語のスラヴ諸語における特殊な位置が浮かび上がってくる。

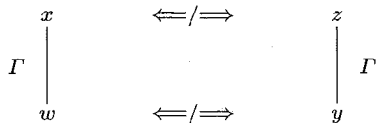
言語学的にみれば、膠着型の言語が、この完全に等質な言語に最も近いと考えられる。

制限された等質性をもつ語および言語

§ 137 いま述べたような完全に等質な言語は厳格すぎるから、条件を少し緩めて「制限された等質性をもつ語」というものを考え、次のように定義する。

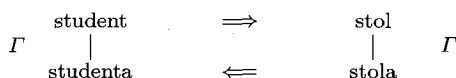
語 x が「制限された等質性をもつ」というのは、任意の語 y に対して、 $w \in \Gamma(x)$ であり、かつ y と直接の置換関係にある語 w が存在すれば、 $z \in \Gamma(y)$ であり、かつ x と直接の置換関係にある語 z も存在することである。

したがって「制限された等質性をもつ言語」とは、任意の語 x と y に対して、上記が成り立つことである。



たとえばロシア語では、名詞は人または動物を示す活動体名詞と、それ以外のものを示す不活動体名詞とに分類され、活動体名詞は対格が主格と同じ形をもち、不活動体名詞は対格が主格と同じ形をもつことによって、たがいに区別される。そ

ここで活動体名詞の student「学生(主格)」と studenta「学生(生・対格)」および stol「机(主・対格)」と stola「机(生格)」とを考えてみる。student は主格にしか用いられないから常に stol によって置き換えることが出来るが、stol は主格のほかに対格にも用いられるから、常に student によって置き換えられるとはかぎらない。したがって student $\Rightarrow$ stol である。逆に studenta と stola のばあいには、stola が生格にしか用いられないのに対して studenta は生格のほか対格にも用いられる。したがって stola は常に studenta によって置き換えられるが、studenta は必ずしも stola によって置き換えられるとはかぎらない。したがって stola $\Rightarrow$ studenta となる。これによって student も stol も、制限された等質性をもつことになる。



したがって第一種の同音異義をもつ屈折型の言語は、制限された等質性をもつ言語になると考えられる。

整合的なパラダイム

§ 138 単純性および等質性という概念を用いてレヴジンは、パラダイムが「整合的である」がどうかという評価の基準を定めている [RM 128]。説明の前に、まずこれを定義すれば、次のようになる。

言語においてパラダイムが「整合的である」というのは、パラダイムに任意の要素を付け加えると、単純でなく、また等質でない語の数が増加するときである。

定義から明らかなように、これは数量的な評価の基準であって、これまでの定義とは、性格が異なっている。

レヴジンの挙げている例を引用すれば、たとえばロシア語では čelovek「人」に対して čelovečestvo「人類」という集合名詞がある。これが čelovek のパラダイムに属するとする。そうすればたとえば čelovek と同じ S 類に属する morjak「船乗り」と同じ Γ 類に属して、かつ čelovečestvo と S 同値になる語すなわち *morjačestvo が存在すれば、等質性が得られる。しかし現実にはそのような語は存在しないから、等質性が損なわれることになる。したがってこのようなパラダイムは整合的なものではないことになる。ここから čelovečestvo を čelovek のパラダイムから取り除き、別の語と考えるのが適当である、ということになる。

同じように、常時複数名詞の peregovory「交渉」は stoly「机(複数主・対格)」と S 同値であるが、stoly と同じ Γ 類に属する stol「机(単数主・対格)」と S 同値になる

語 *peregovor は存在せず、等質性は保たれない。常時単数名詞のばあいも同じである。したがって常時単数名詞および常時複数名詞は単数、複数を備えた名詞とは、異なったパラダイムをもつと考えられる。ロシア語のばあい、名詞は常時単数名詞および常時複数名詞を除けば、整合的なパラダイムをもつ、といえる。

§ 139 このクリテリアは、類型学に次のように利用できる。いま主語として用いられるばあいに限って、Δクラスとして、 D_1 , D_2 , D_3 , D_4 を考え、それぞれ男性活動体(指人)名詞、男性不活動体(非指人)名詞、女性名詞、中性名詞とする。

レヴジンによれば、スラヴ諸語はこのとき、原則としてセルビア語型、チェコ語型、ポーランド語型、ロシア語型のどれかに入るという [RM 126-127]。

	数	D_1	D_2	D_3	D_4
セルビア語型	単	_____	_____	_____	_____
	複	_____	_____	_____	_____
チェコ語型	単	_____	_____	_____	_____
	複	_____	_____	_____	_____
ポーランド語型	単	_____	_____	_____	_____
	複	_____	_____	_____	_____
ロシア語型	単	_____	_____	_____	_____
	複	_____	_____	_____	_____

これらの言語では、単数では男性、女性、中性でそれぞれの形の修飾語がつくが、複数ではセルビア語では oko-oči「目」のような少数の例外を除けば、単数のばあいと同じように修飾語は性によって区別される。これに対してチェコ語では男性不活動体名詞と女性名詞の修飾語が、同じ形になる。ロシア語では修飾語は性の区別がなくなって、すべて同じ形になる。

したがってセルビア語は、ごく少数の例外を除けば、制限された等質性をもつ言語であるといえる。チェコ語の場合には、制限された等質性をもつためには、男性不活動体名詞あるいは女性名詞のどちらかをすべて取り除くことが必要である。ポーランド語型では、男性非指人名詞と女性名詞の両方を取り除かねばならない。ロシア語では、男性名詞と女性名詞の両方、あるいは男性名詞と中性名詞または女性名詞と中性名詞の両方を取り除く必要がある。

このように考えれば、セルビア語、チェコ語、ポーランド語、ロシア語の順に制限された等質性から遠ざかっていることがわかる。中世のロシア語はセルビア語型に属し、制限された等質性を保っていたが、これが崩れたのは、ロシア語で、屈折語的な性格が急速に失われてきつつあることと、関係があると思われる。単

数においても、修飾語の性の区別がなくなれば、いったん失われた等質性は回復されると思われるが、ロシア語がこの方向に向かっているとすれば、スラヴ諸語の中で、ロシア語がこの点で最も急進的な言語であるといえよう。

Γ 関係

§ 140 これまでは主として語のレベルから言語の類型を考えてきたが、連絲あるいは句のレベルでも、類型を考えることができる。このためにまず「Γ 関係」を定義する。

句 $f = x_1 \dots x_n$ が句 $g = y_1 \dots y_m$ と「Γ 関係にある」というのは、 f の中のすべての無形態でない語 x_i に対して g の中に $y_j \in \Gamma(x_i)$ となる j が存在し、 g の中のすべての無形態でない語 y_k に対して $x_l \in \Gamma(y_k)$ となる l が存在することである [RM 129]。

たとえばロシア語の連絲 Doktor ocenil stat'ju 「博士が(単数主格)・評価した・論文を(単数対格)」と Stat'ja ocenena doktorom 「論文は(単数主格)・評価された・博士によって(単数造格)」とを考えてみる。ocenil と ocenena とは ocenit' 「評価する」のパラダイムに属しており、また明らかに doktorom $\in \Gamma(\text{doktor})$, stat'ju $\in \Gamma(\text{stat'ja})$ であるから、この二つの連絲は Γ 関係にあるといえる。

次にまた別の連絲 Doktor dal knigu 「博士が(単数主格)・与えた・本を(単数対格)」と Kniga dana doktorom 「本が(単数主格)・与えられた・博士によって(単数造格)」のばあいにも、同じことがいえる。

これら二つの例は、どちらも同じ事態の異なった表現であり、深層構造は同じであるといえる。またあとの例のばあい、連絲 Kniga dana doktoru 「本が(単数主格)・与えられた・博士に(単数与格)」も定義に合致するから、前の二つの連絲と Γ 関係にあることになる。しかしこのばあい、前の二つの連絲とは深層構造が同じではない。

このことから Γ 関係というのは、意味あるいは深層構造の同一性を保証するものではないことがわかる。

それだけではない。はじめの例と関連して、たとえば ocenka stat'i doktorom 「評価(単数主格)・論文の(単数主格)・博士による(単数造格)」という連絲を考えてみる。もしも名詞 ocenka を動詞 ocenit' と同じパラダイムに属すると考えれば、この連絲は連絲 Doktor ocenil stat'ju と Γ 関係にあることになる。またこのばあい深層構造も同じである。このことから Γ 関係の規定には、パラダイムの範囲の決定が必要であることもわかる。レヴジンは Γ 関係を扱うばあいには、パラダイムを語のレベルよりも広く、語幹を同じくする語のすべてというように考えるべきである

としている [RM 131-133]. そうとすれば上に述べた最後の例も, Γ 関係であるということになる.

変形関係

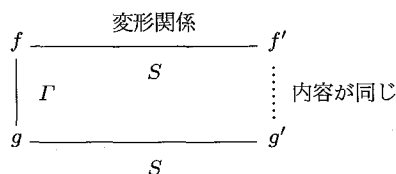
§ 141 次に「変形関係」を以下のように定義する. すなわち,

句 $f = x_1 \dots x_n$ が句 $g = y_1 \dots y_m$ と「変形関係にある」というのは, それらが Γ 関係にあつてかつ $u_i \in S(x_i)$ および $w_j \in S(y_j)$ となるような, 内容の同じ実際の句 $f' = u_1 \dots u_n$ および $g' = w_1 \dots w_m$ が存在することである [RM 129].

前の節で述べたことから, 定義の第二点が Γ 関係にある連絲の中から, 深層構造の異なったものを除外することを目的としていることは明らかである.

たとえば連絲 f として前にあげた Doktor dal knigu「博士が・与えた・本を」およびこれと Γ 関係にある連絲 g として Kniga dana doktorom「本が・与えられた・博士によって」のばあいを考えてみる. 連絲 f の要素の各々と要素が S 同値となる連絲 f' として, たとえば Professor sočinil stat'ju「教授が・著述した・論文を(単数対格)」を考えてみる. このとき, これに対して連絲 g と要素の各々が S 同値である連絲 g' として, たとえば statejka napisana professorom「ちょっとした論文が・書かれた・教授によって」は, 連絲 f' と「内容が同じ」と考えられる. したがって連絲 f と連絲 g とは変形関係にあるといえる.

一方連絲 $f = \text{Doktor dal knigu}$ と連絲 $g = \text{Kniga dana doktoru}$ 「本が・与えられた・博士に」とは, 明らかに Γ 同値である. しかし連絲 f のすべての要素と同じ S 類にある要素からなる, たとえば $f' = \text{Professor sočinil stat'ju}$ 「教授が・著述した・論文を」と, 連絲 g と同じ関係にある連絲 $g' = \text{stat'ja sočinena professoru}$ 「論文が・著述された・教授(のため)に」とは, 「内容が同じ」ではない. このことは他のすべての場合にいえる. したがって連絲 Kniga dana doktoru は変形関係から除外される.



ところで連絲 Doktor dal podruge knigu「博士が(単数主格)・与えた・女友達に・本を(単数対格)」と Kniga dana doktorom podruge「本が(単数主格)・与えられた・博士によって(単数造格)・女友達に(単数与格)」とは明らかに Γ 関係にある. これに対

して内容の同じ連絲 Professor dal drugu stat'ju「教授が(単数主格)・与えた・友達に(単数与格)・論文を(単数対格)」と Stat'ja dana drugu professorom「論文が(単数主格)・与えられた・友達に(単数与格)・教授によって(単数造格)」を考えると、drugu と podruge は S 同値関係ではなくて $drugu \Rightarrow podruge$ である。その理由は podruge には単数与格、単数前置格があって、第一種の文法的同音異義だからである。ここからレヴジン は定義の第二点の S 同値関係を置換関係にした方がよいとしている [RM 130-131]。

またさきに述べた Doktor ocenil stat'ju に対する ocenka doktorom stat'i は, Professor prepodaval fiziku「教授が(単数主格)・教授した・物理学を(単数対格)」と prepodavanie professorom fiziki「教授(単数主格)・教授による(単数造格)・物理学の(単数生格)」が考えられるから、前に述べたように、パラダイムを広く考えれば、やはり変形関係にあるといえる。

§ 142 ところで変形関係の定義にみられる「内容の同じ」実際の句という表現は、きわめて曖昧である。あとで述べる「完全な変形関係」の定義と照らし合わせてみると、単なる「変形関係」の定義では、連絲 f' と g' との間には、必ずしも Γ 関係が成り立ってなくてもよいことがわかる。したがってたとえばすでに述べたように Doktor dal knigu に対して Professor napisal stat'ju を考え、Kniga dana doktorom に対して Statejka sočnena professorom「ちよつとした論文が(単数主格)・作成された・教授によって」を考えても、変形関係は成り立つ。したがってどの範囲を「内容が同じ」であるとするか、また何と何について、「内容が同じ」であるのかについては問題が残るが、上の例をみれば、一応同意語は許されると考えられる(パラメーターについては、あとで述べる)。

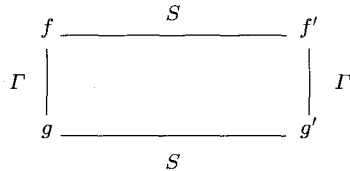
しかし次に述べる「完全な変形関係」は、このような同意語も排除することになる。

句 $f = x_1 \dots x_n$ が「完全な変形関係をもつ」句であるというのは、 $x'_i \in S(x_i)$ となる任意の句 $f' = x'_1 \dots x'_n$ と、 f と変形関係にある句 $g = y_1 \dots y_m$ に対して、 $y'_i \in S(y_i)$ となり、かつ f' と変形関係にある句 $g' = y'_1 \dots y'_m$ が存在して、 $x_i \in \Gamma(y_j)$ ならば $x'_i \in \Gamma(y'_j)$ となり、またその逆も成り立つときである [RM 131]。

たとえば前に挙げた Doktor dal knigu と Kniga dana doktorom のばあいを考えてみる。これに対して内容の同じ、たとえば Professor napisal stat'ju「教授が(単数主格)・書いた・論文を(単数対格)」と Stat'ja napisana professorom「論文が(単数主格)・書かれ

た・教授によって(単数造格)」という連絲が考えられ、 $\text{professor} \in S(\text{doktor})$, $\text{napisal} \in S(\text{dal})$, $\text{stat'ju} \in S(\text{knigu})$ かつ $\text{stat'ja} \in S(\text{kniga})$, $\text{napisana} \in S(\text{dana})$, $\text{professorom} \in S(\text{doktorom})$ である。

明らかなように、「完全な変形関係」は連絲 f' と g' の間にも Γ 関係が成り立たなければならないことを要求するものである。



このようにすれば、「完全な変形関係」のばあいには、「内容が同じ」というクリテリアが必要ではなくなるように思われる。しかしこのときには、次のようなばあいが生じる。

f = Doktor dal knigu 「博士が・与えた・本を」

g = Kniga dana doktoru 「本が・与えられた・博士に」

f' = Professor napisal stat'ju 「教授が・書いた・論文を」

g' = Stat'ja napisana professoru 「論文が・書かれた・教授(のため)に」

このとき、 f と g の間には、「完全な変形関係」が成立する。すなわち、深層構造が明らかに異なるものに対しても、「完全な変形関係」を認めなければならないのである。レヴジンはこれに関連して Plotnik stroit dom 「大工が・建てる・家を」の場合、「パラディグマ $\Gamma(\text{plotnik})$ の中のある種の語、たとえば plotnikom は変形された句であるが、他の語 (plotnike 「前置格」、 plotniku 「大工に、与格」) のばあいには、そのような句が存在しない ($\text{plotniku stroit dom}$ 「大工に・彼が建てる・家を」は元の句と Γ 関係にあるが、異なった意味をもっている)」としている。このことから、彼が内容を完全に捨象しているわけではないことは、明らかである。もしそうとするならば、上述の「完全な変形関係」の定義は、不十分といわねばならない。

このような留保をつけた上で、レヴジンの定義に従えば、完全な変形関係にある言語は、次のように定義される。

すべての句が完全な変形関係にある言語を「完全な変形関係をもつ言語」という。

変形条件を満たすパラダイムをもつ言語

§ 143 レヴジンは、「変形条件を満たすパラダイム」を次のように定義している [RM 130].

パラダイム $\Gamma(x)$ が「変形条件を満たす」というのは、語 x を含む任意の連絲 f と、 $\Gamma(x)$ に属する任意の語 y に対して、 y を含み、連絲 f と変形関係にある連絲 g が存在するときである。

ロシア語を含むスラヴ語の名詞は、変形条件を満たすパラダイムをもっていない。たとえば連絲 *Plotnik stroit dom* 「大工が(単数主格)・建てる・家を(単数対格)」における語 *plotnik* を考えてみる。このとき連絲 *Dom postroena plotnikom* 「家は(単数主格)・建てられた・大工によって(単数造格)」を考え、また *postroena* $\in$ (*stroit*) と考えれば(連絲のレベルではパラダイムを広く考えることは、前に述べた)、両者は変形関係にある。しかし連絲 *Dom postroena plotnike* 「家は(単数主格)・建てられた・大工に(単数与格)」は、上で *Kniga dana doktoru* について述べたのとまったく同じ理由で、変形関係にはない。これは変形条件を満たすパラダイムの定義に反する。

これに対してレヴジンは、動詞の場合には変形条件を満たすパラダイムがあるとして、*ja čitaju* 「私は・読む」、*ty čitaes'* 「おまえは・読む」、*on čitaet* 「彼は・読む」...、*ja risuju* 「私は・描く」、*ty risues'* 「おまえは・描く」、*on risuet* 「彼は・描く」... のような例を挙げている。レヴジンの考えているように、これが変形条件を満たすパラダイムであるとするれば、*ja*, *ty*, *on* などが同じパラダイムに属していると考えなければならない。そうすれば、たとえば *ja čitaju* と *on čitaet* は、*on* $\in \Gamma(\textit{ja})$, *čitaet* $\in \Gamma(\textit{čitaju})$ であり、また *ja čitaju* に対して *ja risuju*, *on čitaet* に対して *on risuet* が存在して、*ja* $\in S(\textit{ja})$, *risuju* $\in S(\textit{čitaju})$, *risuet* $\in S(\textit{čitaet})$ となる。

またもし *ja čitaju* $\in \Gamma(\textit{ty čitaes'})$... などをも一つの語と考えれば、*ja čitaju* $\in \Gamma(\textit{ty čitaes'})$... で *ja čitaju* $\in S(\textit{ja risuju})$... となるから、問題は非常に単純になる。レヴジンはこの取り扱いについて何もいっていないが、この少しあとで彼が「有意語」と「補助語」のパラダイムへの結合について述べていることからすれば [RM 132]、彼が考えていたのは後者のばあいであると思われる。

これらのばあい、仮定のように *ja čitaju* と *on čitaet* が変形関係にあるためには、*ja risuju* と *on risuet* の「内容が同じ」であることが必要である。

しかし両者は明らかに人称が違っている。このことからレヴジンは「内容が同じ」ということが、連絲 f と連絲 g との間にある関係と同じ関係が、連絲 f' と連絲 g' との間にあることを意味していると、考えているように思われる。「内容が同じ」ということをこのように考えれば、たとえば人称の違い、時称の違い、肯定と否定の違いといった、パラメーターの違いがあっても、変形関係が成り立つことになる。

完全な変形関係をもち、パラダイムが変形条件を満たすとき、この言語は形式

的に等質である。したがってこれは膠着型の言語に多くみられることになる。

4

文法カテゴリーのモデル化

予備概念、文脈の容量

§ 144 以上にみてきたのは言語の形式的類型であった。今度はいくつかの文法カテゴリーについて、その類型をみることにする。この場合にもまずこれらのカテゴリーのモデルをつくることから始めなければならないが、その際、いくつかの予備的な概念が、新たに必要になる。

その第一は文脈の「容量」である。文脈 (f_2, g_2) が文脈 (f_1, g_1) よりも容量が大きいというのは、文脈 (f_1, g_1) によって許容されるすべての語が、文脈 (f_2, g_2) によって許容されるときである。文脈 (f_2, g_2) が文脈 (f_1, g_1) よりも容量が大きいことを、 $(f_1, g_1) \Rightarrow (f_2, g_2)$ のように表す [RM 90]。

もし $(f_1, g_1) \Rightarrow (f_2, g_2)$ でかつ $(f_2, g_2) \Rightarrow (f_1, g_1)$ であるならば、文脈 (f_1, g_1) と文脈 (f_2, g_2) とは容量が等しい、あるいは等容量であるといい、 $(f_1, g_1) \sim (f_2, g_2)$ のように表す。

等容量という関係は明らかに反射律、対称律、推移律を満たすから、一つの分割を与える。すなわちすべての文脈からなる集合は、同じ容量の文脈の集合に分割されて、交わることがない。この等容量のすべての文脈の集合を文脈類という [RM 91]。文脈類 K_2 が文脈類 K_1 よりも容量が大きいというのは、 $(f_1, g_1) \in K_1$, $(f_2, g_2) \in K_2$ が存在して $(f_1, g_1) \Rightarrow (f_2, g_2)$ となるときである。これを $K_1 \Rightarrow K_2$ と表す。

逆の場合、すなわちもし $K_1 \Rightarrow K_2$ であれば、必ず $(f_1, g_1) \in K_1$, $(f_2, g_2) \in K_2$ となる文脈 (f_1, g_1) と (f_2, g_2) との間に、 $(f_1, g_1) \Rightarrow (f_2, g_2)$ が成り立つかどうか、次に問題になるであろう。

これは次のようにして証明される。いま $(f_1, g_1) \in K_1$, $(f_2, g_2) \in K_2$ であるとする。そうすると上述の定義によって $(f_3, g_3) \in K_1$, $(f_4, g_4) \in K_2$ で $(f_3, g_3) \Rightarrow (f_4, g_4)$ となるような文脈 (f_3, g_3) , (f_4, g_4) が存在する。もし (f_1, g_1) と (f_3, g_3) とが同じ文脈類に属しているとすれば、 $(f_1, g_1) \Rightarrow (f_3, g_3)$ が成り立つ。同じように (f_2, g_2) と (f_4, g_4) とが同じ文脈類に属しているならば、 $(f_4, g_4) \Rightarrow (f_2, g_2)$ が成り立つ。この

関係は推移律を満たしているから、 $(f_1, g_1) \Rightarrow (f_2, g_2)$ が成り立つ。したがってもし $K_1 \Rightarrow K_2$ が成り立つならば、 K_2 に属する任意の文脈は、 K_1 に属する任意の文脈よりも、容量が大きいことになる。

予備概念、文法カテゴリー、カテゴリー束など

§ 145 次に文法カテゴリーという概念がある。これは初めから与えられている初期概念であって、なんらかの一般的な形式的特徴によって結合される語の一定の集合を指している [RM 61].

またある語が属しているすべての集合の交わりをレヴジンカテゴリー束と呼んでいる。したがってカテゴリー束を $\Pi(x)$ で表わせば、語 x が属するカテゴリーを κ_i とするとき、 $\Pi(x) = \kappa_1 \cap \dots \cap \kappa_n$ のようになる。これを表記を簡単にするために、 $\Pi(x) = (\kappa_1, \dots, \kappa_n)$ のように表わす [RM 63-64]。たとえば $\Pi(\text{him}) = (\text{男性}, \text{三人称}, \text{単数}, \text{目的格})$ のようになる。

カテゴリー κ_1 は $x \in \kappa_1$ であるすべての x に対し $S(x) \in \kappa_1$ となるととき、シンタグマのカテゴリーといい、 $\Gamma(x) \in \kappa_1$ となるととき、パラディグマのカテゴリーという [RM 138]。もしあるカテゴリーが同時にシンタグマ的であり、かつパラディグマ的でもあるならば、 $x \in \kappa_1$ であるとき $Ra(x) \in \kappa_1$ となる。これは直観的にはほとんど明らかなことであるが、帰納法を用い、次のようにして証明できる。いま $y \in Ra(x)$ とする。 ΓS 連鎖の長さが 2 に等しいならば、 $y \in \Gamma(x)$ または $y \in S(x)$ である。上述の仮定によってそのどちらの場合でも $y \in \kappa_1$ となる。次に ΓS 連鎖の長さが $n-1$ のとき、 $y_{n-1} \in \kappa_1$ が成り立つとする。すると $y_{n-1} \in \Gamma(y)$ であるか、または $y_{n-1} \in S(y)$ であるから、 $y \in \kappa_1$ が成り立つ。したがって $y \in Ra(x)$ となるすべての y について $y \in \kappa_1$ が成り立つことになる [RM 272]。

カテゴリー κ_1 は、 $y \in Ra(x)$ となるすべての y に対して $\Gamma(x) \cap \kappa_1 \neq \emptyset$ ならば $\Gamma(y) \cap \kappa_1 \neq \emptyset$ となるととき、パラディグマに関して均等に分布しているといい、また $S(x) \cap \kappa_1 \neq \emptyset$ ならば $S(y) \cap \kappa_1 \neq \emptyset$ となるととき、類に関して均等に分布しているという。この定義の意味は明らかであろう。たとえば x を go とし、カテゴリー κ_1 を過去としたとき、 $\Gamma(x) \cap \kappa_1$ は $went$ になるが、これに対して $y \in Ra(go)$ となる語、たとえば $weep$ に対して $\Gamma(y) \cap \kappa_1 = wept$ が存在する。類の場合も同様である。

したがって直観的には明らかなことであるが、もし言語が形式的に等質であるならば、この言語に属するすべてのシンタグマ的なカテゴリーはパラディグマに関して均等に分布し、またすべてのパラディグマ的なカテゴリーは類に関して均等に分布している [RM 273]。

いま π をパラディグマ的なカテゴリー、 σ をシンタグマ的なカテゴリー、 $\kappa_1, \dots, \kappa_n$ を任意のカテゴリーとすると、カテゴリー束 $\Pi = (\pi, \sigma, \kappa_1, \dots, \kappa_n)$ に属する語が一つでも存在しているならば、このカテゴリー束は有標的であるという。ある言語において有標的な任意の三つのカテゴリー束 $\Pi_1 = (\pi_1, \sigma_1, \kappa_1, \dots, \kappa_n)$ 、 $\Pi_2 = (\pi_1, \sigma_2, \kappa_1, \dots, \kappa_n)$ 、 $\Pi_3 = (\pi_2, \sigma_1, \kappa_1, \dots, \kappa_n)$ に対してカテゴリー束 $\Pi_4 = (\pi_2, \sigma_2, \kappa_1, \dots, \kappa_n)$ が有標的ならば、この言語はカテゴリーに関して等質であるという [RM 138]。

格の決定の一方法

§ 146 レヴジンによればマルクスは容量の等しい文脈のクラスの一つによって許容される語の集合を、格と定義しているという [RM 140]。このようなものとして、ロシア語のばあい、たとえば次のような文脈が考えられる。

- a. ($\wedge$, idët) 「～が行く (三人称単数)」

($\wedge$, guljaet) 「～が散歩する (三人称単数)」

($\wedge$, stoit) 「～が立っている (三人称単数)」

これに許容されるのは、たとえば mal'čik 「少年」、devočka 「少女」、okno 「窓」、metro 「地下鉄」、stol 「机」、čaj 「茶」、šokolad 「チョコレート」、narod 「国民」(いずれも単数主格) などである。

- b. ($\wedge$, idut) 「～が行く (三人称複数)」

($\wedge$, guljajut) 「～が散歩する (三人称複数)」

($\wedge$, stojat) 「～が立っている (三人称複数)」

これに許容されるのは、たとえば mal'čiki 「少年たち」、devočki 「少女たち」、okna 「窓」、stoly 「机」、narody 「国民」(いずれも複数主格) などである。

- c. (vot, $\wedge$) 「ほら～だ」

(eto, $\wedge$) 「これは～だ」

これに許容されるのは、a の例と、b の例である。すなわちこの文脈は単数および複数の形を許容する。

- d. (osobennost', $\wedge$) 「～, 特性」

(udaljajus' ot, $\wedge$) 「～から私は離れる」

これに許容されるのはたとえば mal'čika 「少年」、devočki 「少女」、okna 「窓」、naroda 「国民、民衆」、metro 「地下鉄」、stola 「机」、mal'čikov 「少年たち」、devoček 「少女たち」、okon 「窓々」などの、単数および複数の生格の形である。

- e. (malo, $\wedge$) 「少ない」

(kilo, 八) 「一キロ」

これに許容されるものには, *d.* に挙げたもののほか *narodu* 「民衆」, *čaju* 「茶」などのような, 集合名詞あるいは物質名詞の, 特殊な生格形(数量生格)がある。

- f. (*prinadležnost' k*, 八) 「～への帰属」

(*prisjaga na vernost'*, 八) 「忠誠の誓い」

これに許容されるのは, *mal'čiku* 「少年」, *devočke* 「少女」, *čaju* 「茶」, *narodu* 「国民」, *mal'čikam* 「少年たち」, *devočkam* 「少女たち」, *narodam* 「諸国民」のような, 単数および複数の与格形である。

- g. (*vižu*, 八) 「～を見る」

(*streljaju v*, 八) 「～を私は撃つ」

これに許容されるのは, たとえば *mal'čika* 「少年」, *devočku* 「少女」, *okno* 「窓」, *metro* 「地下鉄」, *stol* 「机」, *narod* 「国民」, *čaj* 「茶」, *mal'čikov* 「少年たち」, *devoček* 「少女たち」, *okna* 「窓々」などの, 単数および複数の対格形である。

- h. (*ne vižu*, 八) 「～を私は見ない」

(*ne mogu peredelat'*, 八) 「～を作り替えることが, 私はできない」

これに許容されるのは, *mal'čika* 「少年」, *devočku*, *devočki* 「少女」, *okno*, *okna* 「窓」, *stol*, *stola* 「机」, *mal'čikov* 「少年たち」, *devoček* 「少女たち」, *okna*, *okon* 「窓々」, *stoly*, *stolov* 「机」のように, 単数および複数の, 対格および生格である。これはロシア語では, 動詞述語が否定されたときに, 補語が生格になるばあいと, 対格になるばあいがあるからである。

- i. (*dovolen*, 八) 「～に満足である」

(*sižu s*, 八) 「～とともに私は座っている」

これに許容されるのは, *mal'čikom* 「少年」, *devočkoj* 「少女」, *oknom* 「窓」, *mal'čikami* 「少年たち」, *devočkami* 「少女たち」, *oknami* 「窓々」のような, 単数および複数の造格である。

- j. (*guljaju v*, 八) 「～の中を私は散歩する」

(*naxožus' v*, 八) 「～の中に私はいる」

これに許容されるのは, *mal'čike* 「少年」, *devočke* 「少女」, *mal'čikax* 「少年たち」, *devočkax* 「少女たち」などの単数および複数の前置格のほか, *lesu* 「森」, *beregu* 「岸边」のようなものがある。この形是一群の男性名詞の単数において, 前置詞 *v* 「中に」または *na* 「上に」が時間あるいは空間を表すばあいに限って用いられるものである。

k. (govorju o, $\wedge$) 「～について私は話す」

これに許容されるのは, mal'čike, devočke, okne, mal'čikax, devočkax, oknax のような, 単数および複数の前置格である。ただし j にみられる lesu, beregu のような形は, ここには現れない。

l. (dam detjam, $\wedge$) 「～を子どもたちに私は与える」

これに許容されるのは, mal'čika, devočku, okno, mal'čikov, devoček, okna, šokolad 「チョコレート」 のような, 単数および複数の対格のほか, たとえば šokolada 「チョコレート」, vody 「水」 のような単数生格もみられる。これは物質名詞, あるいは集合名詞について, 一定量それが存在することを含意する, いわゆる数量生格である。

T 判別の文脈と T 判別的句

§ 147 このような格の定義は, 次のような特徴をもっている。その第一は, これによって定められた格の一つにある語が属するとすれば, その語と同じ S 類に属する語も, この同じ格に属すること, すなわち, このカテゴリーがシンタグマ的なカテゴリーであるということである。第二は, 同じ語形が同時にいくつかの文脈によって許容されることである。レヴジンはこれらの特徴が, 文法で扱われるのによく対応しており, その意味でよくできたモデルであると考えている [RM 141].

しかしこのモデルの問題点は, 第一に文脈の選択が直観的なものであるということにある。たとえば (malen'kij, idët) 「小さい(男性), 行く」, (malen'kaja, idët) 「小さい(女性), 行く」, (malen'koe, idët) 「小さい(中性), 行く」という文脈を選べば, たとえば mal'čik 「少年」と devočka 「少女」, および okno 「窓」 はそれぞれ別の文脈にしか許容されないから, 別の「格」になってしまう。逆にたとえば (nesu, $\wedge$) 「私は運ぶ」あるいは (daët, $\wedge$) 「彼は与える」 のような文脈を考えれば, 前のものはたとえば sobaku 「犬を(対格)」, sobake 「犬に(与格)」, rukoj 「手で(造格)」, vodu 「水を(対格)」, vody 「いくらかの水を(生格)」などを許容するし, またあとのものはたとえば čelovek 「人が(主格)」, vody 「いくらかの水を(生格)」, vodu 「水を(対格)」, sestře 「妹に(与格)」, rukoj 「手で(造格)」などを許容する, というように, 多くの格を許容することになる。

したがって過不足なく格を定義するための文脈, すなわち「格形成文脈」を, 客観的な手続きで決定するにはどうしたらよいかが, ここで問題になってくる。そこでまずある文脈がタイプ T_1 に属する任意のパラディグマを許容するとき, この

文脈を「 T_1 判別的文脈」であるということにする。また「 T_1 判別の句」というのは、文脈 (f, g) が T_1 判別的文脈であって、かつ $x \in T_1$ であるような句 fxg のことであるとする。このとき次の定理が成り立つ。すなわち、

もし ST 正規の言語であるならば、任意のタイプ T に対する T 判別の句もこの言語に属する。

これは次のようにして証明される。いま $x \in T$, $x \in S(y)$ で fxg が T 判別の句であるとする。すると $x \in S(y)$ であるから、 fyg も句である。もし (f, g) が T 判別文脈であれば、 fyg も T 判別の句である。なぜなら ST 正規言語であるから、もし $x \in S(y) \cap T$ ならば $y \in T$ となるからである。またもし (f, g) が T 判別文脈でないとすれば、 fxg が T 判別の句であるから、これは $z \in T$ で $(h_1 x h_2, h_3)$ が T 判別文脈であるような $h_1 x h_2 z h_3$ の形をもつか、 $z \in T$ で $(h_1, h_2 x h_3)$ が T 判別文脈であるような $h_1 z h_2 x h_3$ の形をもっているはずである。第一の場合、いま文脈 $(h_1 y h_2, h_3)$ が $\Gamma(w) \subset T$ となる $\Gamma(w)$ を許容しないとする。文脈 $(h_1 x h_2, h_3)$ は T 判別文脈であるから、 $w' \in \Gamma(w)$ となる w' が存在する。すなわち $h_1 x h_2 w' h_3$ は T 判別の句である。したがって $h_1 y h_2 w' h_3$ も T 判別の句となる。ここから $w' \in \Gamma(w)$ とならなければならない。これは仮定と矛盾するから、文脈 $(h_1 y h_2, h_3)$ は T 判別文脈となる。第二の場合も同じようにして証明できる [RM 273]。

格形成文脈

§ 148 T 判別文脈という概念の意味するところは、これが許容する語が同じタイプに属するということである。したがってたとえば前に述べた (malen'kij, idët), (malen'kaja, idët), (malen'koe, idët) のような文脈の場合、たとえば $\Gamma(\text{čelovek})$ 「人」は第一の文脈には許容されるが、第二および第三の文脈には許容されない。これに対して $\Gamma(\text{devočka})$ 「娘」は第二の文脈にしか許容されない。しかしこれらの文脈はいずれも同じ Γ 写像をもつ。したがって čelovek と devočka は同じタイプに属することになる。このようにして T 判別文脈によって性の影響を除外することができる。

しかし T 判別文脈には別の問題もある。その一つは前に挙げた (vot, $\wedge$) 「ほら〜だ」, ($\wedge$, idët) 「〜が行く (単数)」, ($\wedge$, idut) 「〜が行く (複数)」のような文脈にみられるものである。これらの文脈が許容するのは名詞の主格であるが、第一の文脈は単数主格および複数主格のいずれをも許容するのにに対し第二の文脈は単数主格のみ、また第三の文脈は複数主格のみをそれぞれ許容する。したがって数の影響を除外するためには第一の文脈が適当であるということになるが、この選択を形

式的に行うための方策が見い出せるかどうかということがここで問題になる。

第二にはこれも前に挙げた (nesu, $\wedge$)「私は～運ぶ」, (daju, $\wedge$)「私は～与える」のような文脈の場合, およびたとえば (on byl, $\wedge$)「彼は～である」, ($\wedge$, odnosit lodku)「～が舟を運び去る」, (etot čelovek polon, $\wedge$)「この人は～で一杯である」のような文脈のばあいである。

はじめのものは前にも述べたように, sobaku「犬を(運ぶ-対格)」, sobake「犬に(運ぶ-与格)」, rukoj「手で(運ぶ-造格)」, vody「いくらかの水を(運ぶ-生格)」など, さまざまな格を許容できる。またあとのばあい, たとえば (on byl, $\wedge$)は On byl poet/poetom「彼は詩人であった」のように主格と造格の両方を許容する可能性があり, ($\wedge$, odnosit lodku)は人称構文のばあいには主格をとって Tečenie odnosit lodku「流れが舟を運び去る」のようになるが, 非人称構文のときには同じ意味で造格をとって Tečeniem odnosit lodku のようになる。また (etot čelovek polon, $\wedge$)のばあいには, polon が生格支配と造格支配のゆれを示しているから, Etot čelovek polon myslej/mysljami「この人は思慮に満ちている」のようになる。

したがって rukoj, sobake のように明らかな省略のある文を除いたとしても, 同じ文脈が二つ以上の格を許容するばあいがみられる。これに対処するために, 次のような概念を導入する。

容量の等しいすべての正しい T 判別的文脈を集めた集合 $K_1, K_2, K_3 \dots$ を判別クラスということにする。判別クラス K の文脈によって許容されるすべての語 x に対してこれを許容する判別クラス K_1 が存在して $K \neq K_1, K \Rightarrow K_1$ であるならば, K_1 は格形成文脈のクラスではないという。それ以外のすべてのクラスを格形成文脈のクラスという [RM 143]。

たとえば文脈 (nesu, $\wedge$)「私は～運ぶ」, (idu k, $\wedge$)「私は～に行く」, (vižu, $\wedge$)「私は～見る」, (eto sozdano, $\wedge$)「これは～作られた」のような文脈を考えてみる。(nesu, $\wedge$)はすでに述べたように sobaku (対格), sobake (与格), vodu (対格), vody (生格), rukoj (造格)などを許容するが, (idu k, $\wedge$)は与格(～の許へ)しか許容せず, したがって容量が小さい。すなわち (idu k, $\wedge$) $\Rightarrow$ (nesu, $\wedge$) である。同様に (vižu, $\wedge$)は対格(～を)しか許容せず, また (eto sozdano, $\wedge$)は造格(～によって)しか許容しないから, (vižu, $\wedge$) $\Rightarrow$ (nesu, $\wedge$), (eto sozdano, $\wedge$) $\Rightarrow$ (nesu, $\wedge$) となる。したがって文脈 (nesu, $\wedge$)は格形成文脈ではない。

§ 149 このようにして構築したモデルは, かなりうまくできてはいるが, それでもまったく問題がないわけではない。その一つは, たとえば文脈 (malo, $\wedge$)「～が

少ない」と(osebennost', $\wedge$)「～の特徴」のような場合である。ロシア語のある種の男性名詞には、malo「少ない」、mnogo「多い」などの数量詞が要求する場合に用いる特殊な生格形(通常数量生格あるいは第二生格と呼ばれているものである)-u, -juをもつものがある。その他の名詞はこのばあいにも規則的な生格を用いる。これに対してあとの文脈にはすべて規則的な生格形が用いられる。したがってあとの文脈が許容する語はすべて前の文脈でも許容されるが逆は真でないから、(osebennost', $\wedge$) $\Rightarrow$ (malo, $\wedge$)である。このため上述の規定からすれば文脈(malo, $\wedge$)は格形成文脈ではないことになるが、もしこれを除外すれば、この文脈では許容されるが文脈(osebennost', $\wedge$)では許容されない pesku「砂」、saxaru「砂糖」のような第二生格を許容する文脈がなくなることになる。したがってこの文脈は格形成文脈と考える必要がある。

このようなばあいについてレヴジンは「(malo, $\wedge$)というクラスが格形成文脈なのは、それが許容するすべての語が、必ずしもより容量の小さい判別的文脈によって許容されないからである」[RM 144, 145]と述べるにとどまっている。しかし形式性を重んじるならば、さきに述べた格形成文脈の規定が不十分であるということになるであろう。たとえば容量の等しい文脈のクラスを $K_1, K_2, \dots$ とし、これらの文脈の許容する語の集合をそれぞれ $W_1, W_2, \dots$ とするとき、 $K_1 \Rightarrow K_2$, $K_1 \Rightarrow K_3$, $K_1 \Rightarrow K_4, \dots$ であってかつ $W_1 = W_2 \cup W_3 \cup W_4, \dots$ であるとき、 K_1 は格形成文脈ではない、とすれば、この問題は一応解決すると思われる。

もう一つの問題は、不変化名詞である。これがすべての格形成文脈によって許容されるからである。レヴジンはこれを除外するために「本来の格」という概念を導入し、これを $x \in \Gamma(y)$ となる x と y とが存在し、 $x \in C_1$, $y \notin C_1$ であって、かつ y がどれかの格形成文脈によって許容されるときであるとしている [RM 145]。ここで C_1 というのはある格形成文脈によって許容される文脈の集合を指している。

しかし不変化名詞は確かに格の形はもっていないが、格は所有しているという立場からすれば、このような規定をあらたに導入する必要があるかどうか、疑問の残るところである。

さらに第三の問題として、前にも述べたが、文脈(vot, $\wedge$)「ほら～だ」と($\wedge$, idët)「～が行く(単数)」と($\wedge$, idut)「～が行く(複数)」のような場合である。第一の文脈は名詞の単数および複数の主格を許容するが、第二の文脈は単数主格、また第三の文脈は複数主格のみをそれぞれ許容する。したがってこのばあい、格の決定には第一の文脈が適当であるはずである。しかしいま述べた格形成文脈の定義からすれば、これは格形成文脈ではありえないことになる。このような規定ではこの場

合数のカテゴリーを除外できないのである。したがってこのばあいには、一応第二および第三の文脈を格形成文脈と認め、数の問題については、別途に考えるほかはない。

§ 150 レヴジンはこの問題を解決するために、カテゴリーの等質性の概念を援用する。そのためにはまず、格に下位のカテゴリーを設定することが必要になる。そのためにレヴジンはまず、次のような概念を導入する。すなわち、正しい句の集合に対する任意の T_1 判別的な句の集合である δ の補集合 $\bar{\delta}$ を考え、これを「 T_1 反判別的な句の集合」とする。いま同じ格に属し、 $x \in \Gamma(y)$ かつ $\Gamma(x) \subseteq T_1$ である二つの語 x と y とが同じ「下位カテゴリー」に属するというのは、その上で $x \xrightarrow{\delta} y$ あるいは $y \Rightarrow x$ となる T_1 反判別的な句の集合 $\bar{\delta}$ が存在するときであるとする [RM 146-147]。

この規定の意味はおおよそ次のようなものであると思われる。格形成文脈 (dovolen, $\wedge$) 「～で満足である」は造格を要求するから、たとえば *ženoj*, *ženoju*, *žēnami*, *mal'čikom*, *mal'čikami*, *narodom*, *narodami*... などを許容するが、同じパラディグマに属するのはこのうちたとえば *ženoj*, *ženoju*, *žēnami* であり、このパラディグマはすでに述べたように同一の(名詞の)タイプに属している。格形成文脈は判別的文脈の一部であるから、これに許容される *dovolen ženoj* 「妻(単数)に満足である」, *dovolen ženoju* 「妻(単数)に満足である」, *dovolen žēnami* 「妻(複数)に満足である」はいずれも判別的な句である。

これに対してたとえば (*dovolen svoej*, $\wedge$) 「自分の(女性単数)～で満足である」, (*dovolen svoimi*, $\wedge$) 「自分の(複数)～で満足である」は同じタイプに属する語のすべてを許容するわけではないから、反判別的文脈である。初めの文脈は *ženoj* と *ženoju* の両方を許容するが、*žēnami* は許容しない。一方二番目の文脈は *žēnami* は許容するが、*ženoj* も *ženoju* も許容しない。このことから、反判別的な句の集合の上では、*ženoj* $\Rightarrow$ *ženoju* かつ *ženoju* $\Rightarrow$ *ženoj* であるが、*ženoj* $\Rightarrow$ *žēnami* あるいは *žēnami* $\Rightarrow$ *ženoj* も、*ženoju* $\Rightarrow$ *žēnami* あるいは *žēnami* $\Rightarrow$ *ženoju* も成り立たない。したがって *ženoj* と *ženoju* は同じ下位カテゴリーに属するが、*žēnami* と *ženoj* または *ženoju* とは同じ下位カテゴリーに属さないことになる。

このようにして主格以外の格については、下位カテゴリーが区別される。これは例から明らかなように、ロシア語では実は数のカテゴリーである。主格については二つの独立した格が認められる。すなわち、さきに述べたように、文脈 ($\wedge$, *idët*) と ($\wedge$, *idut*) および (*vot*, $\wedge$) のばあいを考えれば、(*vot*, $\wedge$) の方が他の二つの文

脈より容量が大きい。これが単数主格の名詞も、複数主格の名詞も許容するのに
 対して、他の二つはその一方しか許容しないからである。したがって $(\wedge, id\dot{e}t) \Rightarrow$
 $(vot, \wedge)$, $(\wedge, idut) \Rightarrow (vot, \wedge)$ 。そうするとき述べた制限によって $(vot, \wedge)$ は格
 形成文脈ではないことになるから、文脈 $(\wedge, id\dot{e}t)$ と $(\wedge, idut)$ の許容する語は、別
 の格とみなさなければならなくなる。これを第一主格と第二主格とすれば、カテ
 ゴリー束はたとえば次のようになる。

(男性, 活動体, 単数, 第一主格)	mal'čik
(男性, 活動体, 単数, 第二主格)	欠如
(男性, 活動体, 単数, 生格)	mal'čika
(男性, 活動体, 複数, 第一主格)	欠如
(男性, 活動体, 複数, 第二主格)	mal'čiki
(男性, 活動体, 複数, 生格)	mal'čikov

これは明らかに、前に述べたカテゴリー束の等質性をもたない。もし第一主格
 と第二主格を合併して一つの格、すなわち主格とし、この節で述べた手続きによっ
 てたとえば mal'čik と mal'čiki とを下位カテゴリーとして分離すれば、カテゴリー
 束の等質性を得ることができる。したがって格形成文脈によって作られる格のカ
 テゴリーについては、最小限の合併がありうると考えなければならなくなる。少
 なくともレヴジンは、そう考えているようである [RM 147-148]。

§ 151 ポーランド語のばあい、ロシア語の文脈 $(vot, \wedge)$ のように、単数主格と複
 数主格を同時に許容する文脈に当たるものはない。しかしたとえば文脈 $(\wedge, cztajciel)$
 「～, 読みなさい (複数)」は複数主格を許容する $(Gdzie pracują, \wedge)$ 「～はどこで働い
 ているか (複数)」のような文脈と同じ語を許容する。一方文脈 $(\wedge, cztaj)$ 「～, 読み
 なさい (単数)」が許容するものは単数主格を許容する文脈 $(Gdzie pracuje, \wedge)$ 「～は
 どこで働いているか」が許容するものとは異なっている。単数のばあい呼格形を
 もつものがあるからである。したがってもし文脈 $(Gdzie pracują, \wedge)$ と $(\wedge, cztajciel)$
 とが同じ格を許容すると考えれば、前に述べたようなカテゴリー束の等質性が失
 われる。したがってこれらは異なる格を表していると考えなければならないとい
 うことになる。呼格である。レヴジンによれば、このタイプに属するのは、セルビア
 語、スロヴェニア語、上部ソルブ語などであるという [RM 151]。

一方チェコ語のばあいには、ポーランド語と同じように呼格を設定する必要が
 あることに加えて、たとえば文脈 $(\wedge, prosí)$ 「～が頼む」のようなばあいには、単数
 主格も複数主格も許容されるということがある。しかし他方では文脈 $(Gde pracuje,$

ハ「～はどこで働いているか(単数)」と(Gde pracují, ハ)「～はどこで働いているか(複数)」のように、単数主格のみ、あるいは複数主格のみを許容するものがあるから、(Gde pracuje, ハ $\Rightarrow$ (ハ, prosí)), (Gde pracují, ハ) $\Rightarrow$ (ハ, prosí)となり、(ハ, prosí)は格形成文脈ではないことになる。これは prosí が同音異義であることに起因しているが、このようなことは一群の動詞に起こるから、いま述べたような手続きは無視することができないであろう。この点においてチェコ語はポーランド語と異なっている。

このように形式的類型論の方法を用いれば、どのような点において一つの言語の構造が他のものと異なっているかを、精密に知ることができる。

ま と め

§ 152 以上にみてきたのは、著者が理解するかぎりの、主として形式類型学の基本的な言語モデルである。ここに挙げたように、品詞、性、数、その他の文法的なカテゴリーを形式的に表す方法を通じて、具体的な言語の間の相違を明らかにすれば、それらの言語の類型学的特徴が明らかになると思われるが、これについては述べない。しかしこのような初歩的なものであっても、理想的な類型と現実の言語との関係が、かなり入り組んだものであることは明らかになったと思われる。さまざまな類型が、具体的な言語のある部分に局在するという形で、混ざり合っているのである。今後は理想的な類型と現実の言語との関係をどう形式的に表現すればよいのかという、客観的に妥当なクリテリアを考える必要があると思われる。これが形式的類型学の概念的な理解に役立てば、幸せである。また形式的類型学と内容的類型学の関係であるが、これまで述べてきたように、伝統的な類型学から内容的類型学が分離するにともない、残された言語による思想の表現技法の問題は、構造言語学の精密化とともに、その取り扱いが精密化して、形式的類型学を生み出していったと考えられる。これらの二つの類型学が今後どうなっていくのか、ますます乖離していくのか、それとも統合していくのかについては、何ともいえない。個人的には後者の道に期待したいと思う。

クリモフは両者は原理的に異なるものであるとして、統合には否定的である。たとえば対格言語に属するものには、屈折語も膠着語も孤立語もあって、両者の分類は交錯しているから、「……言語の類型学的なクラスを内容的類型学の基準と形式的な次元の基準との統合に基づいて分類しようとする、時にみられる試みは、有益ではなからう」[KP 135] というのである。しかし形式的類型学の目指すものを、屈折語、膠着語のような分類に局限する必要は、まったくないと思われる。

もしも両者の統合が行われるとすれば、その方向は、おそらくは形式的類型学が内容的類型学に従属し、内容的類型学の記述を精密化するという方向で実現されるであろう。

類型学序説 — ロシア・ソヴェト言語研究の貢献

第 4 部

類型学の応用 — 比較言語学におけるガムクレリゼラの試み

§ 153 1984年に発表されたガムクレリゼ (Гамкрелидзе, Тамаз Валерианович 1929-) とイヴァーノフ (Иванов, Вячеслав Всеволодович 1929-) の『印欧語と印欧人』は、印欧語比較言語学に類型学の成果を取り入れようとしたきわめて野心的な試みであり、その結果の評価は別にしても、きわめて注目すべきものであることは疑いない。以下にその概要を略述し、著者たちが類型学の成果をどのような形で取り入れようとしたかを、主として原理的な観点からみてみたいと思う。

すでによく知られているように、比較言語学は起源を同じくする諸言語を比較することによって、具体的な諸言語が分化する以前の共通の祖語の姿を理論的に措定し、これによって逆に歴史的な諸段階における言語の現象を説明しようとするものである。したがってこれは広い意味での歴史的な研究であるが、比較言語学が起源を同じくする親近諸言語の全体を対象にし、大部分は文献によっては直接検証のできない時代の言語の姿を論じるのに対して、伝存している文献によって知ることのできる、具体的な一つの言語の発達の道筋については、歴史文法という名のもとに行われることが多い。

このように直接検証できない時代の状態を知ることが原理的に可能であるという認識に人が到達したのは、何よりも言語、とくに音韻の変化の仕方が規則的であるという前提によってであった。この考えは、19世紀のおよそ70年代以降に主としてドイツを中心にして輩出した、ヨハネス・シュミット (Schmidt, Johannes 1843-1901)、アウグスト・レスキーン (Leskien, August 1840-1916)、ベルトルド・デルブリュック (Delbrück, Berthold 1842-1922)、ヘルマン・オストホーフ (Osthoff, Hermann 1847-1909)、カール・ブルックマン (Brugmann, Karl 1849-1919) のような、いわゆる青年文法学派の人々が徹底させたことは、よく知られている。しかしそれ以前にも、音韻の変化が規則的であるという考えは、たとえばトムセン (Thomsen, Vilhelm L.P. 1842-1927) によって「近世比較言語学の第一期の頂点を示すとともに、またその終結をもたらした人」¹⁾と評されたアウグスト・シュライハー (Schleicher, August 1821-1868) の考えの基底にも存在していた。

彼は個々の言語の比較によってこれら個別的な言語に特有な発展にかかわる現象をはぎとっていけば、やがて共通祖語に到達すると考えた。たとえばサンスクリッ

トの ajras「野原」はギリシア語の agros「野原」、ラテン語の ager「野原」、ゴート語の akrs「野原」(英語の acre, 多く複数 acres として「耕地」の意味)であるが、これらと比較してみれば、ゴート語の k はもともと g であり、サンスクリットの j もそうである。また語末の s の前の母音は a であるが、ゴート語では脱落し、ラテン語ではくずれて e になった。少なくともシュライハーはそう考えた。結果として得られた agras という形が、共通の祖語の形ということになったのである²。このような考え方の根底にあるのは、いま述べたように、音韻の変化が規則的であるから、それを遡れば、やがて祖語に到達するという信仰であったが、それには第一にどの現象が後代のものであるかを、決定できなければならないはずである。第二にこの考えは、ほとんどの語族において祖語に至る文献が存在しないことによって、事実上不可能であり、研究者の恣意を取り除くことはできない。

しかしやがてもし共通祖語のある音韻が言語ごとに規則的な変化を蒙るとするならば、それは言語ごとにつねに一定の対応をしているはずだという、認識が生まれてきた。いわゆる音韻対応である。もしそうとするならば、この対応の個々の項のすべてに変化する可能性のある音韻を、理論的に祖語の音韻であると措定すればよいということになる。比較言語学はこのような音韻対応の上に著しい発達を遂げるようになった。その華々しい進歩の光に幻惑されて、当時は意識されなかったが、この「理論的に個々の下位言語の音韻に替わることが可能な音韻」という考え方には、この音韻が一義的に定まる、という保証はないはずであった。少なくとも理論的にはいくつかの可能性があり、したがってここで措定された音韻の体系はあくまで理論的に可能なものの一つにすぎなかったのである。

§ 154 比較言語学が発達するにつれて、青年文法学派に代表されるそれまでの研究は、言語の個々の要素を研究の対象にするにすぎないのではないかという反省が生まれてきた。これは 20 世紀を特徴づける構造主義のもたらしたものである。青年文法学派の中にも、すでにその萌芽が認められた。たとえばデルブリュックは、その著『印欧語研究序説』において、次のように述べている。「さらにシュライハーよりも大きい程度に、我々が意識しているのは、完成した印欧屈折語がその背後に長い発展の道程をもっており、したがって我々が再構成した多くの語の一つが、起源的に他の語よりも古いものか新しいものか知ることができないということである。すでに 1872 年にシュミットがこの考えを明確に表している。我々が作成した印欧語の文は、ウルフィラ (Wulfila ca. 310-383) の言語、タチアノス (Tatianos 2 世紀後半) の言語およびルッター (Luther, Martin 1483-1546) の言語の

単語が並んでいる聖書の詩篇のようにみえる可能性がある、というのである。しかしまったく明らかなように、アナクロニズムは個々の語の内部でも起こりうる。語の中に現れる異なる音声は、異なった早さで発達する可能性があるから、再構築するときに、すべてが必ずしも相互に同時に存在してはいない音声の発展段階を併置する可能性があるからである」³。

これは比較方法の限界といわれているものである。この問題を解決するには、体系を考える必要があった。その先鞭をつけたのは、弱冠十九歳のフェルディナン・ド・ソシュール (Saussure, Ferdinand de 1857-1913) であった。彼は論文「印欧諸語における母音の初原的体系についての覚書」⁴において、印欧語の形態論にみられるいわゆる母音交替を手がかりにして、印欧祖語にはどの下位言語にも伝存していない音韻が、かつて存在していたと考える必要のあることを、主張した。このような考えは、当時の比較言語学の水準を越えたものであったところから、学界の容れるところにはならなかった。一方 1906 年ヴィンクラー (Winkler, Hugo 1863-1913) に率いられたドイツの探検隊が、トルコのアンカラの近くにあり、ヒッタイト帝国の首都ハツツサスにあたる、現在のボガズキョイ (Bogazköy) において、楔形文字の記された大量の粘土板を発見した。そこに書かれている言語の一つがチェコの東洋学者フロズニー (Hrozný, Bedřich 1879-1952) によって解読され、印欧語に属するものであることが明らかにされたのは、ようやく 1917 年のことであった。1927 年に至って、ポーランドのクリヲヴィツチ (Kuryłowicz, Jerzy 1895-1978) がソシュールの主張していた未知の音韻の存在する場所に、ヒッタイト語が *h* をもっていることを述べるに及んで、ソシュールの「覚書」が、はじめてその真価を認められることになった⁵。ソシュールはその後 1892 年の印欧語の無声有気音に関する論文を除けば⁶、再び比較文法に手を染めることはなかったが、彼が『一般言語学講義』によって構造主義言語学の鼻祖となったのは、故のないことではないと、思われる。

このように印欧語比較文法は 20 世紀の 30 年代以降、構造的な取り扱いを導入してくるが、それにもかかわらず、祖語における音韻の指定の大枠については、原則として変化はなかった。

§ 155 ガムクレリゼとイヴァーノフの試みは、主として内容的類型学の結果の比較文法への応用であるが、すでに述べたように、内容類型学の教えるところによれば、言語の諸現象は、その言語が属しているところの、主語・述語・目的語関係に基づく類型に従って階層的に規定されている、ということであった。ところが本書においても、内容的類型学の項において音韻のレベルについては触れ

ていないように、音韻のレヴェルが言語の類型とどうかかわっているのかは、未だはっきりしていないのが現状であると思われる。たとえばすでに述べたように、スラヴ諸語、とくにロシア語は、対格言語でありながら、主語と述語の関係を弱め、述語の相対的独立性を高めようとしていると考えられるが、そのことと、スラヴ諸語、とくにロシア語において、なぜいわゆる硬音と軟音、すなわち非口蓋音と口蓋音の対立が顕著な形で存在しているのかは、現在のところ説明されていないように思われる。

したがって、少なくとも現在のところ、音韻のレヴェルに関しては、音韻体系の中の音韻相互の関係のあり方、その実現の一般的な可能性の問題に、研究が局限されているのが、現状であると思われる。これは従来前にも述べたように、いわゆるランゲージ・ユニヴァーサルの問題として扱われているものである。クリモフ(Климов, Георгий Андреевич 1928-)は比較言語学と類型学との関連について、次のようにいっている。

とくに文法構造の分野において再構成の妥当性をチェックする可能性は、最近の類型学の成果と関連して、著しく増大した。普遍的な含意の形で指定された言語体系の諸事実が、構造的にたがいに規定しあっているという法則性によって、あれこれの再構成が可能であるか、または不可能であるかを示すことができる。もちろん、ある再構成が類型学的に容認できるということだけでは、まだその正しさを証明することにはならない。しかしそれが類型学的に不可能であるということは、それだけでそれが誤っているという、十分な証明になる。具体的な複数の再構成の、構造的な蓋然性の研究は、比較する資料の解釈がいくつか可能であるような条件のもとでは、とくに重要である⁷。

ガムクレリゼらの研究も、基本的にはこのクリモフの発言に沿っていると思われる。彼らは比較言語学と類型学との相関について、比較によって得られた結果である、理論的な祖語の形が、現実に存在していた言語に近いかどうかは、それがどれだけ類型学的な条件を満たしているかに依存していると考えているようである。

言語研究の一定の方法によって、原則として共通の原初の言語の体系を反映していなくてはならない初原的な諸言語モデルを再建する際に生じるのは、得られた再建が現実的であるかどうか、与えられたグループの親近諸方言の初原的な体系と考えられる、空間と時間の中に存在していた言語体系に、それがどの程度対応しているか、という問題である。

得られた再建が現実的なものであるという命題の採用によって、比較・起源的言語研究のすべての方法的諸原理、とりわけそれらが言語類型学およびランゲージ・

ユニヴァーサル¹の諸原理と密接に関連していること、が決定される。この意味で起源的(比較・史的)言語学、すなわち言語の諸グループ間の親近関係を措定し、それらの初原的なモデルを与える言語学は、原則として構造的・類型学的な言語学およびランゲージ・ユニヴァーサル²の言語学とともに一つの学問を構成しているのである[G&H LXXXI]。

上述したことと関連して、ガムクレリゼらが「言語類型学およびランゲージ・ユニヴァーサル」というように、言語類型学とランゲージ・ユニヴァーサルを並立させていることは、上述したことを考え合わせれば、興味深い。言語のすべてのレベルが、まだ内容的類型学の中に組み込まれていないからである。

§ 156 一般に同一の対象について、それが示す種々の現象を説明する理論は、ア・プリオリにただ一つしか存在しないというわけではない。複数の理論が存在する可能性がある。そのとき、これらの理論そのものを対象にしてそのうちのどれが優っているかを論じるのは、メタ理論といわれる。たとえばすでに触れたように、イエルクスレフ(Hjelmslev, Louis Trolle 1899-1965)はそのような基準として「経験則」empirical principles というものを挙げ、「無矛盾性」self-consistency, 「網羅性」exhaustiveness および「単純性」simplicity を挙げている⁸。これらの原則に最もよく適合するのが、最も優れた理論であるというのである。ガムクレリゼらがあげている、類型学の諸原理というのは、このような意味でのメタ理論的な基準であると思われる。

ガムクレリゼらは、ここで用いられる類型学的な基準は共時的なものだけではなく、通時的なものも含まれるという。

ランゲージ・ユニヴァーサルと矛盾する言語学的な再建は、当然、歴史的に存在した言語体系を現実⁹に反映していると主張することはできない。しかし再建される諸体系が共時的なランゲージ・ユニヴァーサルに対応していたとしても、それはこれらの再建が現実性¹⁰をもち、親近諸言語にとって初原的なものであると仮定される、具体的な言語体系がその中に反映していると主張するには、十分な根拠とはなりえない。このばあい不可欠の条件になるのは、再建された諸モデルが通時的な類型学的データ、(すなわち)個々の言語の歴史の具体的な諸事実の研究によって措定された一定の言語体系の、時間における変化の一般的な図式にも対応していることである[G&H LXXXII]。

§ 157 ガムクレリゼおよびイヴァーノフの研究『印欧語と印欧人』全2冊の中の第1部は、このように類型学の研究によって得られた成果をもって、印欧語比

較文法を再検討してみようという目論見にあてられている。第2部は、第1部の結果に基づいて再構成された印欧語の語彙から、原始印欧人の自然、文化その他の生活環境を再構成しようとする。まことに気宇壮大な試みというべきである。

この入門書の著者は、もとより比較文法を専門とするものではないから、ここで専門的立場からこの書物に対する、何らかの評価を与えようとするものではない。これまで述べてきた類型学の応用の一つとして取り上げようとするにすぎない。

ところで、印欧語にかぎらず、比較文法の最も基礎となるのは、何よりも音韻対応に基づく祖語の音韻体系の再構築である。ここから出発して次に語根の構造、語の構造、形態論というように議論は進められるが、彼らの著書を通読すると、その説くところには、いくつかの特徴が認められる。まず、音韻に関する部分と原印欧語の形態論ないし構造に関する部分との取り扱いが、大きく異なっていることである。これは大まかにいって、内容的類型学の進展の現状と対応しているように思われる。すなわち、音韻のレベルにおいては、ガムクレリゼらはランゲージ・ユニヴァーサル¹の規範を援用して、従来指定されてきた祖語の音韻体系に、たとえば有気音の対立の中では無徴的な項であるはずの、無声音が欠けていることはありえないこと、あるいはあとで述べるように、有声無気音の中では最も無徴的であると考えられる、*bの音韻をもつ語がきわめて少ないことなどから、従来の体系は、現実性に乏しいとしている。このことから明らかなように、音韻のレベルにおいては、著者らは類型論あるいはランゲージ・ユニヴァーサルの成果を比較文法に応用しようとしている。その可否は別にして、本書で最も生彩あふれる部分である。

しかし形態論のレベルになると、著者らは一転して印欧語が本来活格言語であったという前提から、印欧祖語についてこれまで得られた結果をこれと結びつけようとしているかにみえる。音韻に関する部分がいわば帰納的であるのに対し、形態論を扱った部分は、演繹的であるような印象を受ける。すでに第一部の内容的類型学の項において、活格言語が必ず能格言語類型を経なければ、対格言語にはならないということではなく、活格言語類型が直接対格言語類型に発展するばあいもあり、この意味で活格言語類型と能格言語類型とは、いわば平行的に存在する言語類型であるというのが、現在の考え方の主流であることを述べた。印欧語のばあい、果たしてどうであったのか、という議論は、上述のような結論を得る過程で、さまざまに行われ、印欧語は活格言語から直接に対格言語に発展したというのが、現在の一応の結論となっているようにみえる。しかし印欧語に関するこのような学説的な発展を、いわば既知のものとして前提し、論を進めようとす

るのは、たとえ体系性を重んじるためであるとしても、いささか不親切のそしりを免れることは、できないであろう。それは引いてはガムクレリゼらの所説に対して、無用の疑いを生じさせることになるかもしれないからである。しかしこれについては、形態論の項に委ねることにし、ここではこれ以上立ち入ることはしない。

2

音韻体系 — 印欧語の破裂音

§ 158 以上のような考えから、従来採用されている印欧祖語の破裂音の体系をみれば、共時的な類型学の点で問題があると、ガムクレリゼらは指摘する。従来の破裂音の体系とは、よく知られているように、次のようなものである。

I	II	III
(b)	bh	p
d	dh	t
g	gh	k
g ^w	g ^w h	k ^w

すなわち有声無気音、有声有気音および無声無気音の三つの系列と、調音部位による、唇音、歯音、喉音、喉唇音の四類である。このうち喉唇音 labio-velares といわれるのは、調音部位というよりは、二重調音による音類である。しかし以前から b の音韻の例はきわめて少ないことが指摘されていた。ガムクレリゼらも、この音韻をもつことが疑いない例はほとんど存在していないと述べている [G&II 6]。

同書によればすでにペデルセン (Pedersen, Holger 1867-1953) が、d および g をもちながら b を欠く言語がほとんどないこと、および t と k を持ちながら p を欠く言語は多くみられることから、従来の I 系列と III 系列を入れ換えることを提唱したといわれる。ペデルセンはその際に、彼が提唱した体系は「前印欧語期」Vorindoeuropäisch に存在したものであって、印欧語共通語期 Gemeinindoeuropäisch にはすでに従来の体系に変化したと主張しているとのことである [G&II 7]。

すなわち、ペデルセンの説は、従来の I 系列と III 系列を入れ替えた、前印欧語期の体系を考え、この体系の I 系列と III 系列とが入れ替わって、印欧語共通語期の音韻体系ができたと考えたわけである。

しかしこの仮説は前印欧語期の体系から、従来認められている体系、彼の用語でいえば印欧語共通語期の体系に、どのようにして変化したかを説明することが困難であること、言い換えればこの変化が通時的な類型学の規範に合致しないこと、並びに印欧語共通語期の体系を従来のまま認めたことによって、結果的に理論としての新味がなく、したがって学界の承認を得ることができなかったという。言い換えれば、従来の体系は共時的な類型学の規範には合致しない点をもってはいたが、通時的な類型学の規範は満たしていた。ペデルセンの説は共時的な類型学の規範に合わせようとして、通時的な規範から逸脱することになったのである。

§ 159 ガムクレリゼらによれば、グリーンバーグ (Greenberg, Joseph Harold 1915-), メリキシヴィリ (Меликишвили, И.Г.), キャンベル (Campbell, L.) などの研究によって⁹, 有声音と無声音が対立する破裂音の体系においては、有声音の中で喉音 g が有徴的な項であり、唇音 b が無徴的な項であるのに対し、無声音のばあいには逆に唇音 p が有徴的な項であり、喉音 k が無徴的な項であることが、明らかになっているという [G&II 9-10]。また系列としては、最も無徴的なのが無声無気音であり、無声有気音、無声声門閉鎖音の順に有徴性が高くなるという [G&II 11]。

この二つを合わせれば、最も有徴性の高いのは唇音の無声声門閉鎖音 p' であるということになる。

類型学的な観点からの従来の体系のもう一つの問題点は、ヤコブソン (Якобсон, Роман Осипович 1896-1982) が指摘しているように [G&II 11]¹⁰, 無声有気音がないのに有声有気音が指定されていることである。有声有気音が存在して無声有気音をもたないような言語は存在しないというのである。

このような共時的類型学の結果と、従来の体系の b にあたる音韻をもつ確実な例がみられないことを考え合わせて、ガムクレリゼらは、系列 I を無声声門閉鎖音、系列 II を有声有気音、系列 III を無声有気音とする体系を提案している [G&II 15]。すなわち、

I	II	III
(p')	b ^h	p ^h
t'	d ^h	t ^h
k'	g ^h	k ^h

ここで大文字で表しているものは、喉音と喉唇音の両方を表している。これは喉音と喉唇音の区別が、地域的なものにすぎないと判断されているためであるらしい。このばあい、有声有気音あるいは無声有気音に対応する無徴項である、有

声無気音と無声無気音が欠如している。ガムクレリゼらによればⅡ系列とⅢ系列は有気、無気の対立ではなく、有声無声の対立であるから、有気、無気は非弁別的な特徴であるということになる。すなわちⅡ系列の有気成分は有声の破裂にとりまう、一種の有声の「ささやき声」murmured release であると考えるのである。同じようにⅢ系列の有気音も、附随的、非弁別的なものであると考える。そうすれば、印欧祖語においては有気、無気の対立は、位置による変異 allophone にすぎないことになる。

以上を総合すれば、印欧祖語の破裂音の体系は、結果として次のようになる [G&II 14-16]。

I	II	III
(p')	b ^h /b	p ^h /p
t'	d ^h /d	t ^h /t
k'	g ^h /g	k ^h /k

ガムクレリゼらによれば、ジュクワ (Jucquois, G.) は印欧語の語根における破裂音の系列ごとの出現頻度を、次のようにしているという。

I 系列	6.2 %
II 系列	8.9 %
III 系列	17.7 %

もしⅠ系列を有声無気音であるとすれば、これに対する有徴的な項は有声有気音であるから、Ⅰ系列の方がⅡ系列よりも出現頻度が多くなければならない。したがってⅠ系列を声門閉鎖音とする、ガムクレリゼらの仮定は、ジュクワの結果とも一致することになる [G&II 14]¹¹。

§ 160 このような体系は、「声門説」glottal theory と呼ばれているらしい。ガムクレリゼは 1987 年に『言語学の諸問題』誌上に発表された論文、「声門説、印欧語比較言語学における新たなパラダイム」¹²において、自己の体系を大文字で始まる「声門説」Глоттальная теория として言及している。この説がこのような名称をもって呼ばれるようになったのについては、この体系において措定された声門閉鎖音の系列の存在が、強烈な印象を与えるためであるとみて、ほとんど間違いがないと思われる。この強烈な印象から、この体系に対する反発が生じるのも、また予期されるところである。事実、上述のガムクレリゼの論文は、このような批判に対する彼の反論となっている。

彼によれば、その中の基本的なものは、原理に関するものであり、これが「比

較言語学的再構成」ではなくて、「類型学的再構成」であるとするものであるという。これに対して、ガムクレリゼは、「原理的に比較あるいは内的比較による再構成に対立するような類型学的再構成なる手続きは存在しない」¹³とし、「どのような言語の再構成も、比較の資料に基づかなければならない」と主張する。そして「……同時に比較及び内的比較による再構成に基づいて措定することを得た言語体系は、(共時においても、また通時においても)類型学的な蓋然性を考慮しなければならない。別言すれば、比較による再構成は、類型学およびランゲージ・ユニヴァーサルと手を携えていかなければならないのである。……したがって通時言語学において我々が語らなければならないのは、若干の場合に、祖語の諸モデルの内的比較による再構成によって補足される、比較言語学的な再構成に尽きるのである。一方類型学とランゲージ・ユニヴァーサルとは、実はあれこれの再構成の妥当性を検証するクリテリアにすぎない」¹⁴と述べている。

これに対して従来の体系については、彼は次のような評価を与えている。

印欧語の破裂音の初原的な体系を、従来示されていたような形で、最初から措定すべきではないと、我々には思われる。このようなモデルが、当時模範とみなされていた古代インド語の体系の影響下に、また比較言語学の創始者たちに再構成の厳密な方法論が欠けていたことと関連して、純粋に歴史的な偶然によって条件づけられていたからである¹⁵。

このような、いわば「サンスクリット中心主義」は、印欧語比較文法の成立そのものの中に存在していたことは、疑いのないことでもあり、また無理からぬことでもあったと思われる。サンスクリットの破裂音の体系が、もっとも印欧祖語の体系をよく継承しているものとみなされてきたのも、この意味では、当然の論理的帰結であったろう。

しかし一方たとえそうであったにしても、比較文法のそもそものはじめから見慣れ、操作の対象としてきた語の形が、大幅な変更を迫られるというのは、感覚的に耐え難い思いをすることも、また事実であろう。ガムクレリゼらの体系に対する反発の底流には、このような思いが伏在しているように、思われてならない。

§ 161 「声門説」に対する第二の反論として、この体系には声門閉鎖をともなう歯擦音が存在しないというものがあるという。これに対してガムクレリゼは、ランゲージ・ユニヴァーサルによる論理的包含関係は、次のような形をもつという。すなわち、「もし声門閉鎖をともなう破裂音をもつ言語が、同時に歯擦音をもっているならば、歯擦音の系列の一つは、声門閉鎖もともなう」。したがって声門閉鎖

をとまなう破裂音の存在は、必ずしも歯擦音の存在を予定しないことになるというのである¹⁶。

*b の音韻をもつ語形がきわめて少ないことと関連して、たとえばハイダー (Haider, H.) のように、この音韻の所属する系列を有声の内破裂音と考えようとする試みも現れたという¹⁷。ガムクレリゼはこれに対して、グリーンバークが 1970 年に示したように、有声内破裂音の系列においては、有声無気音の系列と同じように、無徴的な項は唇音であり、有徴的な項は喉音であるから、問題の解決にならないのみならず、通時的に下位言語において有声無気音を導出することが困難であるとしている¹⁸。

ネロズナク (Нерознак, Владимир Петрович 1939-) によれば¹⁹、このような「声門説」は、ガムクレリゼとイヴァーノフとは独立に、アメリカの若い印欧語学者ホッパー (Hopper, Paul J. 1939-)²⁰、およびメイエ (Meillet, Antoine 1866-1936) の弟子のフランスのオドリクル (Haudricourt, André Georges 1911-)²¹ によって唱えられた。これを支持したのは、マイヤホファー (Mayerhofer, Manfred 1926-)²²、レーマン (Lehmann, Winfried Philip 1916-)²³、ポロメ (Polomé, Edgar C. 1920-), マルティネ (Martinet, André 1908-) などであるという [G&II 15-16]。またボンハード (Bomhard, Alan R.) は「声門説は今世紀において印欧語比較音声学に最も著しい寄与をなした。これにただ一つ比肩しうるラリンガル理論は、前世紀の 90 年代に創始されたものである」とし²⁴、ノルミール (Normier, R.)²⁵ も同じくこれに高い評価を与えているという²⁶。

このように、いわゆる「声門説」はさまざまな反発にもかかわらず、徐々に同調者を増加させつつあると、いえるようである。

これに対して著名な印欧語比較言語学者のセメレーニイ (Szemerényi, Oswald 1913-) は、*b は確かに語頭に現れることはほとんどないが、語中では、たとえばラテン語の *lūbricus* *līo*, ギート語の *diups* のようにしばしば現れるとして、従来の体系を擁護しているという²⁷。

ガムクレリゼは「声門説」をトーマス・クーン (Kuhn, Thomas Samuel 1922-) の意味でのパラダイムの変更を意味するものであるとしている²⁸。確かに「声門説」を採用することによって、共時的な体系のみならず、通時的な下位言語への導出の仕方が変更され、たとえばグリム (Grimm, Jacob 1785-1863) の法則のように、必要のない法則ができてくるが、これをもってしてクーンの意味でのパラダイムの変更といえるかどうかについては、疑問の余地があろう。むしろ内容的類型学の成立こそが、パラダイムの変更を迫るものではないだろうか。

§ 162 このことによって、これまでその存在は知られていたものの、なぜそうなるかという理由がはっきりしなかったものに、説明が与えられることになる。たとえば印欧祖語の語根の音韻的構造について、メイエはいくつかの制限があることを述べている。その一つは、語根が有声無気音で始まり、有声無気音で終わることはない、すなわち $De(R)D$ のようなタイプの語根は存在しないというものである²⁹。

たとえば $*bheudh-$ あるいは $*g^w endh-$ のような語根はあるが、サンスクリットの $gadati$ 「彼は言う」のように、 $*ged-$ を予想させるようなものは、サンスクリット以外にははっきりとした例がない、というのである。これがなぜであるのかは、従来の説では説明できないが、これをガムクレリゼらに従って $T^h e T^h-$ のような二つの声門閉鎖音であると考えれば、このような語根が存在しにくいことは、音声的に発音がむずかしいことによって、説明することができる。

一方、メイエの指摘する第二の法則は、有声有気音で始まり、無声(無気)音で終わる語根、およびその逆の順序をもつ語根は存在しない、すなわち、 $D^h e(R)T$ または $Te(R)D^h$ のような形をした語根は存在しない、というものである。

これはさきに述べた声門閉鎖音の並立のばあいとは異なって、音声的に説明することがむずかしい。ガムクレリゼらはしたがってこれを印欧語の古い時代に生じた音声の同化によるものではないかとしている。その間接的な証拠として、彼は $T^{[h]} e(R) T^{[h]}$ あるいは $D^{[h]} e(R) D^{[h]}$ の形をした語根の出現頻度が、それ以外の形をした語根よりも大きいことを挙げている [G&II 20]。すなわち、かつての $T^{[h]} e(R) T^{[h]}$ あるいは $D^{[h]} e(R) D^{[h]}$ の形の語根と、 $T^{[h]} e(R) D^{[h]}$ あるいは $D^{[h]} e(R) T^{[h]}$ の形をした語根とが、ここに合流しているとするのである。しかしこれはあくまで推定にすぎず、現在のところ証明のできないことであるといわねばならない。

§ 163 また印欧語にはより一般的に、同一の破裂音が、同一語根内に並立することはない、という規則が知られている。たとえばバンヴニスト (Benveniste, Émile 1902-1976) は、印欧語の語根の構造について、有声有気音と無声音を同時に含むばあいを除いて、それ以外の子音の同一語根内部の組み合わせは可能であると述べているが、それと同時に、同じ子音を含むばあいはこれから除外される、としている³⁰。ガムクレリゼらはこれを、同一の調音位置をもつ音韻が同一語根内に並列しないという、より一般的な規則の特殊なばあいであるとしている [G&II 18]。しかしこのより一般的な規則については、それがどういう理由によるのか、説明の必要があると思われる。ただし彼は「この法則は唇音、歯音、喉唇音の系列の破

裂音を含む印欧語の語根の分析に基づいて導かれたものである」[G&II 96]と述べ、これが一種の経験則にすぎないことを示している。

しかしこの規則には例外があって、喉音のみは同一語根の中に並立できる。たとえば、従来の体系による表記では、

*geiǵ- : Arm. kc-anem「突く」、Lit. gīžti「酸敗する」、gaižūs「苦い」、
gaīžti「苦くなる」、Alb. gjizë「チーズ」、O.Ir. gér「辛い、酸い」

*kaḱ- : Av. kasu-「小さい」、Lit. (nu)kašėti「弱まる」、Germ. hager「痩せた」

*ḱak- : Skr. śaknóti「助ける」、Av. sačaiti「できる」

*ǵalg- : Arm. jalk「枝」、Lit. žalgà「長い竿」、Got. galga「竿」

*ǵengh- : Skr. jānghā「踝」、Av. zanga-「足の骨」、Got. gaggan「行く」、
Lit. žengiù「行く」

彼は本書の中で別項目を立て、印欧語比較言語学ではよく知られている喉唇音 labio-velar と口蓋化喉音の区別について、両者は喉音に二次的な特徴が加わったにすぎないとしているが、同時にこれらの例外をみれば、明らかにここに現れている喉音は喉唇音と口蓋化喉音の組み合わせになっている。彼はここから喉唇音と口蓋化喉音とは、調音位置の異なる音韻系列であると考えなければならないとしている[G&II 97]。

以上のような留保をつけたとしても、もしもこのような一般法則が成り立つとすれば、このような説明は音声学的な性質に基づくものであるから、これが妥当するのは必ずしも一つの語根の内部に限られているわけではない、ということになろう。印欧語の語根は、一般的に「子音+母音+子音」あるいは「子音+母音+ソナント+子音」または「子音+母音+ソナント」の形をしているから、上述の法則は、母音あるいはソナント、あるいは母音+ソナントを隔てた二つの子音の間に成立する一般的法則の局所的な現れというべきである。これを仮に「間接的接触」と呼ぶことにする。

§ 164 ガムクレリゼらの体系によれば、系列Ⅱと系列Ⅲの子音については、有気、無気の対立は弁別的ではなかった。もしそうとすれば、次に問題になるのはどのような条件のもとで、有気あるいは無気の異音が現れるか、ということであろう。彼は基本的な異音、すなわちいわゆる archiphoneme は、有気音であると考えているようである[G&II 21]。その理由として彼が挙げているのは、印欧語の再構成された語根の、音声的に独立した位置の大部分に有気音が現れるからであるという。しかし常識的に考えるかぎりでは、有気、無気の対立する場合、無徴的な

のは無気音であると思われるから、この説明には疑問が残るといわざるをえない。

それはともかくとして、彼はまず、同一語根内に系列Ⅱの子音が並立するばあい、一方の子音は必ず無気の異音として実現されるという。これはともに有気音で実現することは、声門閉鎖音ほどではないとしても、発音に際して大きなエネルギーを必要とすることから、よく理解できる [G&II 22-23]。

またもしそうとすれば、たとえばギリシア語の $\tau\rho\iota\chi\acute{o}s$ 「髪・属格」と $\theta\rho\acute{\iota}\xi$ 「髪・主格」 (< i.e. *drigh-) あるいは $\tau\alpha\chi\acute{y}s$ 「早い」と $\theta\acute{\alpha}\sigma\sigma\omega\nu$ 「早い・比較級」 (< i.e. *dngh-) は、*drigh- と *dhrih-, あるいは *dngh- と *dhnggh- のように、異なった二つの語根を指定するのではなく、*d^[h]rig^[h]- または *d^[h]ngg^[h]- のように、同一の語根に含まれる同一の音韻の、「位置による異音」にかかわる現象であるとして説明できる。

またたとえばサンスクリットの $vid\acute{a}tham$ 「指示」 (< *vidh-atha-) にみられる、本来 *vidh- であるべきものが、*vid- の形をもっていることも、同じようにして説明できよう。

サンスクリットとギリシア語に共通にみられる、いわゆる語根の重複において、語根の最初に立つ子音が有気音であるときには重複部分の子音は対応の無気音になるという、いわゆるグラスマン (Grassmann, Hermann Günther 1809-1877) の法則も、本質的にはこれと同じ現象であるということになる。たとえばサンスクリット $d\acute{a}dh\bar{a}mi$, ギリシア語 $\tau\acute{\iota}\theta\eta\mu\iota$ 「置く」 (< i.e. *dhē-), サンスクリット $b\acute{ī}bharti$ 「彼は運ぶ」, ギリシア語 $\epsilon\sigma\text{-}\pi\iota\text{-}\phi\rho\acute{\alpha}\nu\alpha\iota$ 「運び込む, 閉じこめる」 (< i.e. *bher-)³¹ のようなばあいである。

§ 165 グラスマンの法則によれば、二つの言語にみられる有気音の無気化は、それぞれの言語段階における平行的発展の現象であるということになる。このような見方は、祖形として、たとえば *bher- における *bh のように、*b とは異なりこれと対立する、ただ一つの音韻を指定したことによる、必然的な論理的帰結だからである。すなわち、ギリシア語あるいはサンスクリットにおいて bh の代わりに b が現れたとすれば、その変化は個々の言語の歴史の中に求められなければならないことになるからである。一方ガムクレリゼラの説に従えば、たとえば *bh と *b とは印欧祖語の時期には対立する音韻ではなくて、単なる異音にすぎず、それが各々の言語において音韻化したものであるということになる [G&II 23-24]。

このばあい問題になるのは、ガムクレリゼらの体系による、*D^[h]eD^[h]- が、どのような条件のもとに *DeD^h- となり、また *D^heD- になるかを明らかにすることであろう。彼は上に挙げた例などからも明らかなように、ギリシア語およびイン

ド・イラン語においては、最初には無気音が、そしてあとの位置には母音あるいはソナントの前で有気音が現れるのが基本であると考えている。DeD^h-の形である[G&II 22].

これに対してイタリア語派あるいはゲルマン諸語のばあいには、逆に *D^heD-の形が基本であるという。

たとえば従来の体系で *bheidh- と表される語根は、ギリシア語では *πείθομαι* 「説得する」であって、*beidh- を予想させるが、ラテン語では *fidō* 「信じる、信用する」であって、*bheidh- の形に対応している。同様に、ラテン語 *fiber* 「ビーバー」(< *bhi-ber-), サンスクリット *babhrūh* 「赤褐色の」(< *be-bher-): ラテン語 *fidelia* 「土鍋」(< *bhid-), ギリシア語 *πίθος* 「陶器の容器」(< *bidh-): ラテン語 *habeō* 「持つ」(< *ghab-), サンスクリット *gābhastih* 「手」(< *gabh-) など [G&II 25-26] がある。

よく知られているように、ラテン語は従来の体系での有声有気音を、語頭では *f または *h によって、語中では一定の条件のあるときを除いて対応の有声無気音によって、それぞれ表している点で、「ケントゥム語群に特徴的な状態からの重大な逸脱」³²を示している。すなわち、

I	II	III
*bh	f,	-b-
*dh	f,	-d-(-b-)
*gh	h-	-g-(-h-)
*g ^w h	f,	-u-

ガムクレリゼらの体系は、この問題を従来の説明よりも簡単に説明できる。語頭では *bh, *dh, *gh 等の異音が、語中では *b, *d, *g 等の異音が、それぞれ現れたと考えればよいからである。この点では、ガムクレリゼらの説の方が、優れているといえよう。しかしそれにもかかわらず、たとえば *ταχύς* と *θάσσω* の(すなわちガムクレリゼ等の体系によればともに *d^[h]ng^[h]- に由来する)ばあいのように、同一の言語において *DeD^h- と *D^heD- が現れる条件は、ガムクレリゼらには明らかにされていないように思われる [G&II 23].

§ 166 詳しくは述べないが、系列 III に属する音韻も、上述の系列 II のばあいと同じように説明されている。すなわち、同一語根内に二つの系列 III の子音が並列するときには、系列 II のばあいと同じように、語派によってどちらか一方が有気音、他方が無気音として実現されるというのである。ただしゲルマン語派のばあい、*T^[h]e(R)T^[h] の形をした語根が、ともに有気音として実現される例がしばし

Got. *hēpjō* 「部屋」, Av. *kata*, OCS *kočiči* 「部屋」
 Got. *faihu* 「財産」, Lat. *pecus* 「家畜」
 bahan 「黙っている」, Lat. *taceō* 「黙っている」

系列Ⅱおよび系列Ⅲの異音の現れ方を規定する条件の一つに、いわゆるバルトロメイ (Bartholomae, Christian 1855-1925) の法則というものがある。これはもともと形態との境界において系列Ⅲの子音に系列Ⅱの子音が接するばあいには生じるもので、インド・イラン語派で Dh-T > D-Dh によって表されるものである。ギリシア語の地域においては、これは Dh-T > T-T となった。たとえば *bheudh-「目覚めてゐる」の零階梯の形 *bhudh- に *-to- を附加してつくられる分詞は、サンスクリットで *bhudh-to- > buddhá-「目覚めたところの」のようになるが、ギリシア語では *putto- > πυστός「識れる」となる。したがってバルトロメイの法則が、インド・イラン語派以外に適用されるかどうかについては、懐疑的な研究者が多いようである³³。

226 | 第4部 類型学の応用

めまでは及ばないという。たとえば、 $*b^{[h]}ud^{[h]}-t^{[h]}->*budh-th->bud-dh-$ のようになる。

したがって、ガムクレリゼらの体系を採用すれば、バルトロメイの法則に示される現象は、インド・イラン語派にのみ生じた現象ではなく、印欧語共通基語において生じた、より一般的な法則の、特殊な現れということになる [G&II 32]。

喉音の取り扱いとケントゥム、サテム語群

§ 167 さきに喉唇音と口蓋化喉音について、ガムクレリゼらがこれは基本となる喉音に、附加的な特徴が加わったものにすぎないとしていることを述べた。このことは、基本的な、すなわち何らの附加的な特徴もついていない、いわば純粋な喉音が存在することを、暗黙のうちに前提しているといえよう。

ところでよく知られているように、印欧語の音韻対応をみれば、喉音の類には、言語によって対応の仕方が異なる、二つの系列が存在している。たとえば、

Gr. (ἐ)κατόν, Lat. centum, O.Ir. cēt, Got. hund, Toch. A.
kānt, Skr. śatām, Av. satəm, Lit. šimtas, OCS sŭ-to 「百」

に対して、

Gr. τίς, Lat. quis, Hit. kuiš, Skr. ka-, Lit. kàs, OCS kŭ-to, Alb. kë 「誰」

のようなばあいである。第一のばあいは喉音の要素を保存するものと、s 類の音に変化しているものとがあり、また第二のばあいには、第一のばあいに喉音の要素を保存する言語は、おおむね喉音の要素とともに唇音の要素をもつか、あるいは唇音の要素をもっている。上述の対応表ではギリシア語がτの音価を示し、この例外をなしているが、これはιまたはεが後続するばあいであって、αまたはοが後続するばあいには、たとえばπώς「どのように」のように、πとなって現れる。第一のばあいにs 類の音をもって対応する語群は、第二のばあいには逆に喉音の要素をもって現れる。

ここからこの二つの系列の対応を示すものは、印欧語において異なった音であると考え、前者を *k または *k̥, 後者を *kʷ とするのが普通である。

同様にして *g または *g̊, *gh または *gh̊, および *gʷ, *gʷh が推定される。

この対応に従い、「百」を意味する語によって、喉音を保持する語群をケントゥム centum 語群、それ以外をサテム satəm 語群という。

ケントゥム語群に属しているのは、よく知られているように、ギリシア語、ラテン語、古アイルランド語、ゴート語、ヒッタイト語、トカラ語などの属する語

派であり、サテム諸語に属しているのは、サンスクリット、アヴェスタ語、リトアニア語、古教会スラヴ語、アルメニア語、アルバニア語などの属する語派である。

§ 168 ところで喉音には、このほかにたとえば、

Gr. κρέας「肉」, Lat. cruor「血」, Wels. crau「血」, O.Norse
hrar, Skr. kravis「生肉」, OCS krŭvĭ「血」, Lit. kraūjas「血」
Gr. στέγος「屋根」, Lat. tegō「覆う」, Lit. stógas「屋根」,
Skr. sthāga(ya)ti「彼は覆う」, OCS o-steg-ŭ「着物」
Gr. στείχω「進む」, Got. steiga「歩む, 行く」, Skr. stighnóti
「彼は登る」, Lit. staigýtis「急ぐ」, Lett. steigtis「急ぐ」

のように、ケントゥム、サテムの両群に共通して、喉音の特徴を示す対応が存在する。この種の音韻を、純粋な喉音と考えるのが普通であるが、その発生の機序、相対年代の比定をめぐることは、従来種々の見解がある。またこのような純粋な喉音を認めるかどうかについても、諸家の説は必ずしも同じではない³⁴。

また、喉音に喉唇音と口蓋化喉音の二系列のみを認める立場でも、その理由としては、たとえ三系列が存在しているとしても、ケントゥムあるいはサテム語群の内部ではとくに区別をする必要がないという、消極的な理由によるばあいもあるように見受けられる³⁵。

ガムクレリゼらは三つの系列を認める立場であるが、そうとすれば、サテム語群においても、何らかの痕跡が存在しなければならない。そのようなものとして彼はサンスクリットの *l 類および *r 類のソナントの取り扱いを挙げている。すなわち、サンスクリットでは、長音および短音の *l̥ と *r̥ が、通常は *il, *il, *ir, *ir に変化するのに対して、それぞれ *ul, *ul, *ur, *ur になるばあいがあるが、これはたとえば *p̥l̥n- > pūrṇá-「一杯の」のような唇音に続くばあいのほか、かつての喉唇音の残滓であるとするのである [G&II 93]。セメレーニイはこれに加えてスラヴ語の *il, *ir に対する *ül, *ür の取り扱いを挙げている³⁶。たとえば、

*g^wṛ̥-t- : Skr. gūrtá-「好ましい」, Lat. grātus「快い」, Osq. brateis
*g^wṛ̥- : Skr. gurú-「重い」, Gr. βαρύς「重い」, Lat. gravis
*g^wna- : OCS gŭnati「追う」

§ 169 ところでケントゥム語群のばあい、口蓋化喉音はサテム語群の s 類の音に対して喉音の特徴を保持しているが、アナトリア諸語においては *u の前の位置ではサテム語群のように、s 類の音に変化した。たとえば、

*k_u-e/on- : Ierog.Lub. sù-wa-nà-i「犬」, Skr. ś(u)vá, śúnas,
Gr. κύων, κυνός, Lat. canis
*ek_uo- : Ierog.Lub. á-sù-wa「馬」, Skr. áśva, O.Lit. ašvà,
Gr. ἵππος, Lat. equus, O.Irl. ech

これはガムクレリゼらによれば, *u の前では, たとえば *k のような口蓋化喉音は, *k^w と混同する可能性があるために, 異化して s 類の音に変化したという [G&II 100-101].

また印欧語の *k_u- がどうしてラテン語の canis「犬」にみられる k に変化したかについても, 同様に, ラテン語ではこの位置で *k^w と混同することを避けて *k_u > k とした結果であるという [G&II 101].

以上からケントゥム語群のばあい, 口蓋化喉音は, 上述したような若干のばあいを除いて, 無微的な純粋な喉音と合流したということになる. その結果としてこの種の言語においては, 純粋な喉音と喉唇音とが対立することになった.

サテム語群のばあい, 口蓋化喉音は *s および歯音の前で中立化し, 無微の純粋な喉音になったという. たとえば,

*m(e)lǵ-/ *mlǵ-s- : Skr. mrjāti「彼は擦る」, Av. marəzaiti「触れる」,
に対する Skr. mrkṣāti「擦る」

*pink-/ *pink-t- : Skr. piṁśāti「彼は飾る」, OCS písati「書く」,
に対する Skr. piṅkte「描く」

*weǵh-/ *weǵh-s- : OCS vezetŭ「彼は運ぶ」
に対するアオリスト Skr. ávākṣam

mūǵh-/ *mug-to- : Skr. múhyati「彼は誤る」
に対する Ved. mugdhá-「誤った」 < *mugh-to- のようなばあいである.

この最後のものについては, mūḍhá- の形が後に現れる. これは mugdh- の g が脱落して母音に代償延長が生じ, 同時に歯音がそり舌音に変化することによって得られたものである. サンスクリットのそり舌音の一つの起源とされる [G&II 110-111].

語派によってこの種の中立化は若干の相違があるが, このようなばあいを除いて, サテム語群では, 口蓋化喉音はより安定した s 類の音に変化し, それにともなって喉唇音は純粋な喉音と合体することになったという.

破裂音の通時的变化

§ 170 共時的な類型学の観点からは, ガムクレリゼらの体系はそれなりの説得

性をもっているように思われるが、問題はこの体系が通時的な類型学の規範を満たしているかどうか、言い換えればこの体系の、各々の下位言語の体系への変化が、自然な形で説明できるかどうか、である。

印欧語において、他の語派に比べて閉鎖音に著しい特徴があるといわれているのは、よく知られているように、ゲルマン語派とアルメニア語のいわゆる音韻推移 *Lautverschiebung* であり、とくにゲルマン語派の場合には、グリムの法則として知られているものである。ゲルマン語派の場合、印欧語の無声無気破裂音は無声有気破裂音を経て無声の摩擦音になり、有声無気音は無声無気音に、また有声有気音は有声の摩擦音になったといわれる。すなわち、

$$\begin{array}{lll} *p, *t, *k, *k^w > *ph, *th, *kh, *k^wh > & f, \theta, \chi (> h), h^w \\ (*b), *d, *g, *g^w > *p, *t, *k, *k^w & (= \text{Got. } q) \\ *bh, *dh, *gh, *g^wh > *b, *ð, *y, *y^w & (= \text{Got. } b, d, g, g^w) \end{array}$$

これに対してガムクレリゼらは系列Ⅰの無声声門閉鎖音(従来の有声無気音)は声門閉鎖を失って無声無気音になったとする。また系列Ⅱの有声音(従来の有声有気音)は語頭では無気の異音として、また語中では有気の異音として現れ、有気音は有気摩擦音に変化し、無気音は有声無気の破裂音になった可能性があるという。系列Ⅲにも、同じことが起こったという[G&II 35-38]。すなわち、

系列	従来の体系	ガムクレリゼの体系
I	*D	*T' > T
II	*Dh	*D ^[h] > D-, -D ^h - > D-, -ð-,
III	*T	*T ^[h] > T-, -T ^h - > T-, -θ-,

これは類型学的に可能性の高い考えであり、またたとえば *g^[h]erd^[h]- (従来の *gherdh-) が古アイスランド語で *garðr* 「屋敷」になり (cf. Got. *gards* 「家」, Skr. *grhá-* 「家」), *g^[h]ab^[h]- (従来の *ghabh-) が同じく古アイスランド語で *gefa* 「与える」, 古英語で *giefan* (cf. Got. *giban* 「与える」, OHG *geban*, Skr. *gābhastih* 「手」, Lat. *habeo* 「持つ」) のようになる例をよく説明するものである[G&II 37]。

§ 171 一方、二子音が母音あるいはソナントを介することなく直接に結合するのを「間接接触」に対して「直接接触」ということにすれば、両者は同じ法則の適用を受けるといふ。ガムクレリゼらによれば、ゲルマン語派では第Ⅱ系列および第Ⅲ系列の子音は、他の語派とは異なって、第一要素が有気の異音を、第二要素が無気の異音をもって現れるという。たとえば、ラテン語 *neptis* 「孫娘」に対する古高地ドイツ語 *nift-*, ラテン語 *octō* 「8」, *nox* 「夜」, *noctis* 「夜(属格)」に対するゴート語 *ahtau*, *nahts* のようなばあいである[G&II 25-32]。

もしそうとすれば、ガムクレリゼら自身も認めているように [G&II 37, 脚注], 異音の現れについての上述の二つの説は、たがいに矛盾していることになる。またたとえば *d^[h]eig^[h]- (従来の *d^{heigh}-) が古アイスランド語で deig 「ペースト」 (cf. Got. daigs, OHG teig) となるようなばあいをどう説明するのか、必ずしも明らかではないように思われる。

系列 III の無声破裂音 (従来の無声無気音) の場合にも、有気の異音と無気の異音とが考えられるが、有気の無声破裂音は摩擦音になり、*s および無声破裂音のあとに立つ無気の無声破裂音は、系列 I に合流したという。この摩擦音はアクセントのある音節の直前あるいはアクセントのない音節の直後において有声化する。いわゆるヴェルネル (Verner, Karl 1846-1896) の法則である。この法則によって有声化した摩擦音は、系列 II の有声摩擦音に合流することになったという。

このようなガムクレリゼらの体系によれば、いわゆるグリムの法則の存在は否定され、印欧祖語の破裂音の体系が、その有声・無声という特徴に関してゲルマン語によく保存されていることになる。著者らの見解によれば、ゲルマン語派の破裂音の体系は、古形をよく保存しているということになるのである。すなわち、

系列	従来の体系	ガムクレリゼの体系
I	D	T' > T
III	(s-)T	(s-)T ^[h]
III	T	T ^[h] > θ/ð (ヴェルネルの法則)
II	D ^h	D ^[h] > ð

アルメニア語の体系

§ 172 アルメニア語の音韻推移は、従来の説では、印欧祖語の無声無気音 (系列 III) は無声有気音に、有声有気音 (系列 II) は有声無気音に、そして有声無気音 (系列 I) は無声無気音にそれぞれ変化した、というものであった。このアルメニア共通基語の音韻は、さらに西アルメニア語において第二の音韻推移を蒙り、アルメニア共通基語の無声無気音は有声無気音に、有声無気音は無声無気音あるいは無声有気音になったといわれる。すなわち、

I.E	Arm.	W.Arm.
*b, *d, *G	> *p, *t, *k	> b, d, G
*bh, *dh, *Gh	> *b, *d, *g	> p/ph, t/th, K/Kh
*p, *t, *K,	> *ph, *th, *Kh	

これに対してガムクレリゼらは系列 I の無声声門閉鎖音は、アルメニアの方言

に保存されているものとなないものがあることから、声門閉鎖が弁別的なものではなくなったと考えている。また系列Ⅱについて、バンヴニストとフォクト (Vogt, H.) がまったく独立して古アルメニア語に有声有気音が存在していたと結論づけたことを引用しながら³⁷、ガムクレリゼらは、方言資料からみて、この系列の音がすべての位置において有気音に変化したのではなく、語頭では有気、それ以外の位置では無気として現れていたとし、したがって有気・無気は弁別的な特徴ではなかったとする [G&II 42]。一方系列Ⅲの音韻は無声有気音になったが、そのうち *p^h は *s の後ろに立つ場合を除いて語頭では *f > *h > zero となって消失し、母音間の位置では *f > w となった。また *t^h も θ > zero となって消失したという [G&II 43]。すなわち、ガムクレリゼらの体系によれば、

I.E				Arm.		
(*p')	*t'	*K'	>	*p ^[ʰ]	*t ^[ʰ]	*K ^[ʰ]
*b ^[h]	*d ^[h]	*G ^[h]	>	*b ^[h]	*d ^[h]	*G ^[h]
*p ^[h]	*t ^[h]	*K ^[h]	>	*p ^h	*t ^h	*k ^h

もしもそうとすれば、アルメニア語の体系はガムクレリゼらの主張するように、最もよく古形を保っているものであるということになるろう。

サンスクリットの体系

§ 173 もしもそうとするならば、伝統的な比較文法において、印欧語の破裂音の体系を最もよく保存しているとされている、サンスクリットの体系はどう解釈されるかは、やはりみておかななくてはならない。ガムクレリゼらによれば、これは次のようになる [G&II 52-58]。

系列Ⅰの声門閉鎖音は、インド・イラン語派においても有声無気音になった。著者らはこの系列がかつて無声の声門閉鎖音であった痕跡は、たとえば átti (< *et'-ti 従来の体系では *ed-ti) 「彼は食べる」、vittá- (< *wit'-t^[h]o-, 従来の体系では *wid-to- < 語根 *weid-) 「知られた」など、あるいは *-s- に先行するたとえば ugrá- 「強い」に対する *auK'-s- > vavákṣa 「私は成長した (完了)」 (cf. ギリシア語 αὔξω 「私は強くなる」) などにみられるという。

系列Ⅱはすでにみた語根の構造に関する規則および語中の位置によって異音 *b, *d, *G と *bh, *dh, *Gh の二系列のうちのいずれかが現れるが、有声無気の異音の系列は、インド・イラン語派では *b, *d, *G となって系列Ⅰと融合した。その際に *p' に由来する *b はすでにみたようにほとんど確実な例がないが、新しく系列Ⅱから発生した *b によって体系の穴が埋められることになった。一方有声

有気の異音の系列は *b^h, *d^h, *G^h になったが、これはいま述べた系列 I と系列 II の有声無気音の系列とが融合した結果、有声無気音の系列に対する異音であることができなくなり、独立して独自の音韻系列になった。

系列 III は *s の後の位置、およびラリンガルの前の位置において無声有気の異音として現れ、その他の位置では無声無気の異音の形をとったといわれる。たとえばサンスクリット sphuráti 「彼は震える」(< *sp^[h]er- cf. Gr. ἀσπάλρω 「震える」, Lat. spernō 「退ける」), サンスクリット sthag- 「覆う」(< *(s)t^[h]eK'- cf. Gr. στέγω, Lat. tegō 「覆う」), サンスクリット pánthās, 属 pathās 「道」(< *p^[h]gt^[h]-a- 従来の体系では *p_{gt}-), サンスクリット pṛthú- 「広い」(< *p^[h]ṛt^[h]-a- 従来の体系では pṛt-a-, cf. Gr. πλατύς, Lit. platus 「広い」) など。しかしのちになってラリンガルが消失すると、無声無気の系列と無声有気の系列が同じ位置に立つようになり、その結果両者の系列は異音であることをやめ、独立の音韻になった。

以上をまとめると次のようになる。

	I.E				Skr.		
I	* (p')	*t'	*K'	—————→	b	d	g
II	*b/	*d/	*G/	—————→			
	*b ^h	*d ^h	*G ^h	—————→	bh	dh	gh
III	*p/	*t/	*K/	—————→	p	t	k
	*p ^h	*t ^h	*K ^h	—————→	ph	th	kh

このように考えれば、インド・イラン語派の破裂音の体系は、かえってかなりの変化を蒙っていることになる。

ここではガムクレリゼらの比較文法の学説を祖述するのではなく、比較文法に対する類型学の応用の一つの例を示すことを目的としているのであるから、音韻の面については、以下に述べる、s 類の音を除けば、もっぱら破裂音の体系に限ることにしたい。しかしいま述べたことからだけでも、ガムクレリゼらの説は、一方でこれまで十分には説明できないことがらの説明を容易にするが、他方ではまだよく説明できないことがらが残っており、また新たに説明を必要とすることがらが生じていることも感じるができる。全体として音韻の面に限れば、ガムクレリゼ等の所説は、今後の検証が必要とされるように思われる。

印欧語の s

§ 174 印欧語の *s にも、これまで説明できない現象がみられる。通常の対応は次のようなものである。

Skr.	OCS	Lit.	Germ.	Lat.	Av.	Gr.	Arm.
s	s	s	s	s	h	h	h
*sed- : Skr. śādayati「彼は植える」, Arm. nstim「私は座る」, Gr. ἕζομαι「私は植える」, Lat. sedeō「私は座っている」							
*swep- : Skr. svāpnaḥ「眠り」, Av. xʰap-「眠る」, Gr. ὕπαρ「白昼夢」, Lat. sōpiō「私は眠る」							
*es- : Gr. ἐστί「彼はある」, Lat. est, Got. ist, Skr. ásti, Lit. ėsti, OCS jestŭ							

母音間の h はギリシア語, アルメニア語では消失している。またインド・イラン語派, スラヴ語派, リトアニア語などでは *i, *ī, *u, *ū, *r, *k のあとの *s は [j] の音に変化する, など, 上述の対応は, よく知られているように, 言語ごとに二次的な変化を蒙る場合もあった。

これに対してガムクレリゼらは, たとえば Skr. páśyati「彼は見る」, Av. pašna-「眼差し」, Gr. σκέπτομαι (< *σπεκτ-)「私は見る」, Lat. speciō「私はみる」, OHG spehōn「ながめる」のように, サンスクリットで *s を欠く対応をもつものについて, 喉音の系列と同じように, これを口蓋化した *ʃ と考えている [G&II 119]。ちなみに高津春繁 (1908-1973) は, Skr. spaś-, paś- のように「s の有無は上掲の例にも認められる如くに, 同一言語内に於いても異なり, その原因は不明であるが, かかる現象は他の子音にも認められ, 恐らくかつて *se 或は之に似た形を有していた接頭辞或はその外の造語法上のある形態の名残であると思われる」³⁸ としているが, バロウ (Burrow, Thomas 1909-) はこれについて, 外連声の影響を考え, 次のようにいつている。

印欧語の s が語頭の子音群の最初の要素であったとき, それは不安定な音であって, 正確には説明できないことが明らかな条件のもとで, 消滅した。……すべての印欧諸語にかかわるこの変異を説明できるような, 十分に満足できる理論はないが, 最もありそうなのは, これが印欧語期に語頭の s に影響を及ぼした, 何らかの外連声の結果だということである。この現象が語頭の s の喪失と関係があるのは全く明らかに思われる。もしもそうであるならば, この s を何らかの接頭辞の残余であると考えざるを得ない理論は, 正しくないことになる³⁹。

これと関連するが, ガムクレリゼは, たとえば Skr. sneha-「雪」, Av. snaēža「雪が降る」, Gr. νίφα「雪 (対格)」, Lat. nix, nivis, O.Irl. snigid「滴る, 雨が降る」, OHG snīwan「雪が降る」, Lit. sniēgas, OCS sněgŭ「雪」のように, サンスクリットにおいては逆に s を保持しているが [G&II 117], ギリシア語, ラテン語などにおいてはこれを欠く場合には, *sn の形を推定している。これがなぜなのか, 理論として齊

一性を欠くのではないが、疑問の残るところである。

§ 175 以上のような *s* の音に対して、やはり *s* 類の音と考えられるが、異なった対応を示すものがある [G&Π 124]。すなわち、

Alb.	Gr	Lat.	Isl.	OHG	Tokh.	Lit.	Sl.	Av.	Skr.	Arm.
h	h	su	su	sw/w	s	v	v	v/xv	v	k'

たとえば、

Gr. ἔλκω「引く」、ὀλκός「畝合い」、Lat. sulcus「畝合い」、OE seolh「畝合い」、Tokh. B sälk-「引く」、Lit. velkù「曳く」、OCS vlěkŭ「曳く」、Av. varak-「曳く」、Alb. heq「引摺る」

O.Isl. sollr「豚の飲物」、OHG swelhan「飲み込む」、Av. x^var-「食べる、飲む」、M.Pers. xurdan「食べる、飲む」、Skr. vālbh-「飲み込む、咀嚼する」

Gr. ἐλίκη「柳」、Lat. salix「柳」、Mycen. e-ri-ka「柳」、OHG wilge「柳」、OE welig「柳」

これらがしばしば唇音の要素をとまなうことからみて、ガムクレリゼらは唇音化した *s^o を想定している。そうすると *s* 類の音にも、破裂音と同じように、純粹なもの、唇音化したもの、および口蓋化したもの、の三種類を立てられることになる。彼は上述したような破裂音と *s* 類の音の体系が類型学的に西北コーカサス諸語、とくにアプハズ語の体系に実現されていることを、その存在可能性の一つの根拠としている [G&Π 136]。

語根の構造

§ 176 さらにガムクレリゼらは彼らの措定した印欧語の音韻体系に従って語根を再構成し、その構造についていくつかの興味ある法則を導きだした。これは大まかにいって次の五つになる。すなわち、同一の語根の内部において、

- 1) 同一の発音部位の破裂音は並立しない。
- 2) 第三系列の破裂音は第二系列のものと並立せず、また逆も真である。
- 3) 第一系列の破裂音は並立しない。
- 4) 第二系列の破裂音は「實際上」第一系列のものと並立しない。

もう一つのは、以上の四つの原則をさらに敷衍したものである。すなわち、

- 5) C₁VC₂- の同一語根内において互に結合できるのは有声・無声の特徴に関して同質の子音のみである [G&Π 140-142]。

結果として印欧語において可能な語根の形は、次のようになる。

	系 列	ガムクレリゼラの形	従来の形
(1)	I ~ III	T'eT ^[h] -	DeT-
(2)	III ~ I	T ^[h] eT'-	TeD-
(3)	II ~ II	D ^[h] eD ^[h] -	D ^b eD ^b -
(4)	III ~ III	T ^[h] eT ^[h] -	TeT-

(1)の T'eT^[h]-(DeT-)の例としては、たとえば Skr. diśáti「示す」、Lat. dicō「言う」、Gr. δείκνυμι「示す」(< *deik-)のようなもの、(2)の T^[h]eT'-の例としては、たとえば、Got. fōtus, OHG fuoz, Skr. pad-, Gr. ποὺς, πόδος, Lat. pēs, pedis「足」(< *pēd-/ *pōd-)のようなものが挙げられる [G&II 38].

(3)に属するものには、たとえば Got. baíðjan「強いる」、O.Isl. beiða, OE bædan, OHG beitten, Gr. πείθομαι「説得する」、Lat. fidō「信じる」(< *bheidh-)がある [G&II 37].

(4)の例としては、Arm. hayr「父」、Got. fadar, Lat. pater, Skr. pitár-, (< *pater)が、典型的なものであろう [G&II 38].

みられるように、従来の祖形によれば、上述の原則の第五のもの、すなわち同一の語根の内部には、有声・無声の特徴に関して同質なもののみが並立しようということとは、明らかに成り立たない。この点についていえば、ガムクレリゼラの体系は、従来のものに比べて、斉一性において優れているといえようが、それがどのような理由によるものかは、説明が必要とされよう。

これと関連して述べておく必要があると思われるのは、語頭の *s に破裂音が続いて、いわゆるクラスターをつくる場合である。このときには上述の語根の規則2)にもかかわらず、同一語根に第II系列の子音と第III系列の子音とが並列することができる。たとえば、Skr. stighnoti「踏み越える」、OCS stignō「行く」、Gr. στείχω「行く」、Got. steigan「登る」、O.Irl. tíagu「私は行く」のようなばあいである。ガムクレリゼらによれば、これは上述の規則からの逸脱ではなく、*s の後ろの位置においては系列IIと系列IIIとの対立が中立化し、したがって*sの後ろに立つ子音は系列IIと系列IIIの archiphoneme であるという [G&II 140].

§ 177 また、すでに述べたように、ガムクレリゼらの体系は有気音と無気音を異音としていることから、たとえば *bheid- と *beidh- のような異形を統一的に説明できるが、そればかりではなく、彼はさきに述べた語根の構成にかかわる法則に抵触しない場合には、それぞれ異なった系列にも変化できると考えている。すなわちたとえばII類の子音からなる語根は、III類の子音からなる形をとることが可能であるが、III類の子音とII類の子音、あるいはII類の子音とIII類の子音か

らなる形には2)の法則に反するために、なることができないという。

たとえば語根 *g^[h]ab^[h]- はⅡ類の子音のみからなっているが、これは意味を保存したままでⅢ類の子音のみからなる *k^[h]ap^[h]- の形をとることができるという [G&II 143]。

伝統的な語根の形でいえば、前者は *ghabh-, 後者は *kap- になる。*ghabh- > *ghab- はラテン語の habere 「持つ」、古アイルランド語の gaibim 「私はとる」に対応し、またウンブリア語では hahtu 「取るべし」であるという。サンスクリットの gábhastih 「腕」は *gabh- の形に由来することになる。これに対して後者のばあいには、ラテン語の capiō 「取る」、ゴート語の habjan 「持ち上げる」および haban, 古高地ドイツ語の haben の元になっているとされる語根である。エルヌー (Ernout, Alfred 1879-1973) とメイエは、これがギリシア語の κῶπη 「柄」からみて、語根の形としては *kōp-/*kəp- が考えられるが、この語根は *ghabh- と密接に関連しており、サンスクリットの gr̥bhā- 「柄」と ghṛ- のように異形をもつと考えている⁴⁰。同様にラテン語の pāx 「平和」、pacō 「協定する」、ゴート語の fāhan は *pāk-/*pək- を予想させるが、ラテン語の pangō 「結ぶ、協定する」、ギリシア語の πῆγνυμι 「固定させる」は明らかに *pēg-/*pəg- に来由する。前者はガムクレリゼらの表記に従えば *p^[h]ak^[h]- となるので、Ⅲ類の破裂音からなる語根であり、後者は *p^[h]ak'- であるから、Ⅲ類とⅠ類の破裂音からなる語根であって、いずれもガムクレリゼらの条件を満たしている。

またサンスクリットの pimsāti 「彩る」、アヴェスタの paēs-, リトアニア語の piēsti 「肖像を描く」、古スラヴ語の pišq 「書く」、ギリシア語の ποικίλος 「斑の」は語根として *peik- を推定させるが、サンスクリットの piṅgalā- 「赤褐色の」、ギリシア語の πίγγαλος 「とかげの一種」、古スラヴ語の pēgŭ 「(馬につき) 斑の」などは、いずれも *peig- を予想させる。これも前の例と同じく、*p^[h]eik^[h]- と *p^[h]eik'- ということになる。このような例の存在については以前から知られていたが、体系的な説明はこれまでなされてこなかった。その意味でこれは興味のある説であると思われる。しかしガムクレリゼらの挙げている例はまだ少数であり、さらに多くの例についての検証が必要とされるであろう。

§ 178 母音について一言述べれば、まずガムクレリゼらは、ラリンガルとしてバンヴニストと同じく三種を区別している。従来の表記でいえば、これは α_1 , α_2 , α_3 とされるものである。 α_1 は $\alpha_1 + e = e$, $e + \alpha_1 = \bar{e}$ を、 α_2 は $\alpha_2 + e = a$, $e + \alpha_2 = \bar{a}$ を、また α_3 は $\alpha_3 + e = o$, $e + \alpha_3 = \bar{o}$ をそれぞれ与えるとされるが、著者らはこのことか

ら ə_1 , ə_2 , ə_3 の音価を、それぞれ口蓋化したラリンガル、中立のラリンガル、唇音化したラリンガルと考え、 $\hat{\text{H}}(\text{H}_1)$, $\text{H}(\text{H}_2)$, $\text{H}^\circ(\text{H}_3)$ のようにした。そうすれば、これが影響を与えて、それぞれ e , a , o となった母音、すなわち上述の e の位置にある母音は、そのいずれにも変わりうる可能性をもった中立的な性格のものでなくてはならない。これを V で表せば、 $\text{H}_1\text{V}=\text{H}_1\text{e}$, $\text{VH}_1=\text{eH}_1$, $\text{H}_2\text{V}=\text{H}_2\text{a}$, $\text{VH}_2=\text{aH}_2$, $\text{H}_3\text{V}=\text{H}_3\text{o}$, $\text{VH}_3=\text{oH}_3$ のようになる。

一方著者らはたとえばラテン語の *quis* 「誰」, *quid* 「何」, オスク語の *pīs*, *píd*, ギリシア語の *τίς*, サンスクリットの *kṛi*, *kīm* から予想される $*\text{k}^w\text{i}$ -, あるいはサンスクリットの *kū* 「どこ」, クレタ語の *ῥ-πυλ*, スラヴ語の *kŭ-de*, ラテン語の *-cubi* などから措定される $*\text{k}^w\text{u}$ - にみられるように、本来 $*\text{i}$ および $*\text{u}$ という母音が存在していたと考える。そうすれば、最初の母音組織は、たとえばアラビア語のようなセム語にみられる、 i-u-V という三母音によるものであったという結論になる [G&H 157-160]。クリモフは三系列のラリンガルをもつことが「最近」知られるようになった言語として、インド・イラン語派のヤズグラミ語、カシミーリ語を挙げ、その他の言語ではたかだか二系列のラリンガルの痕跡しかみられないといっている⁴¹。

§ 179 この時代には、強弱のアクセントがその上にない母音は減衰したが、これは語根の構造に従って母音が全くなくなる零階梯になる場合と、 ə のような一種の渡り音を持つ弱階梯になる場合があったとされる。ソナントが後続する場合には、弱階梯になったという。この ə は後続するソナントと合体して、ソナントに音節形成の機能を与えることになった。この段階においては、かつての母音の $*\text{i}$ および $*\text{u}$ は $*\text{y}$ および $*\text{w}$ の音節形成機能をもった形であると考えられるようになり、母音の体系から外れた。一方さきに述べたラリンガルと母音 $*\text{V}$ によって $*\text{e}$, $*\text{a}$, $*\text{o}$ が発生したから、結果として $*\text{e}-*\text{a}-*\text{o}$ という母音組織が生じることになった。そして H_1 , H_2 , H_3 は同時にその調音位置による異音の異なりを解消して、いわゆる *schwa indogermanicum* $*\text{ə}$ になった、と著者たちは主張している。

印欧祖語の類型

§ 180 形態論については、さきに述べたように、ガムクレリゼらは、すでにクリモフの所説にみた、内容的類型学の結果に全面的に準拠しているように思われる。彼らは印欧祖語を活格言語であるという観点から再構成しようとしているのである。

しかし伝統的な比較文法を学んだものにとって、印欧祖語がかつて活格言語であったという考えは、自明のことではない。活格言語という概念が存在しなかった時代に、印欧語が異なる言語類型に属することを示唆した最も初期の研究者はウーレンベック (Uhlenbeck, Christian Cornelius 1866-1951) であるとされる。彼は印欧語の *o* 語幹中性名詞の主・対格の指標である **-m* と、同じく *o* 語幹男性名詞対格の指標である **-m* とが同じ形をもっているという事実に基づいて、印欧諸語の格の体系が、主語・述語関係の表現において、能動 *aktiv* と受動 *passiv* の対立という、異なった原理に基づく、現代のものとは異なる類型に遡る、という仮説を提示した [DS 18]⁴²。またベデルセンも同じころ、印欧語がかつて能格言語であったという仮説を提示したという [DS 19]⁴³。しかし印欧語について、比較言語学者の間に、とくに内容的類型学との関連において、このような説が生じてきたのは、比較的最近のことに属する。したがっていきなりこのような見方を前提にして議論を進めるのは、内容そのものの信憑性を疑わせることにもなりかねない。どうしてこのような説が生まれてきたのかについて、ごく簡単であっても、みておく必要がある。

§ 181 印欧祖語が活格言語の類型をもっている可能性に関係する事実は、活格言語類型という概念が未だ存在していなかった時期の著作にも、散見される。たとえばメイエは、1922 年に書かれた、高名な『印欧語比較研究序説』⁴⁴において、「名詞は格のほかに変化によって生物性 *genre animé* と非生物性 *genre inanimé* を区別する。非生物性は中性といわれる 中性はものに用いられ、人とみなされないかぎり、人を表すことはない。たとえば Lat. *mancipium* (奴隸) である。それは

また指小辞の場合に用いられる」⁴⁵とし、「男性と女性の対立は印欧語期の間に発達し、一般化した」⁴⁶と述べているが、同時に別のところで、「生物性と非生物性の価値を理解するためには、現代とは異なる考え方を参照せねばならない。印欧語においては、動くものすべて、行為するものすべてが生物と考えられる。……たとえば「足」のように、働く器官の名も生物である。……樹木の名も生物である……が、果実の名は中性である」⁴⁷としている。いうまでもなく、これは活格言語の包含事象に一致している。

さらに対格に関連してメイエは次のようにいつている。

対格は動詞の意味を決定するのに役立つ。印欧語の同じ動詞が対格補語をとるかどうかによって、異なった訳になる。たとえばギリシア語の $\epsilon\chi\omega$ 「私は持つ、私は身を持する」である。対格がなければ、意味は「私は身を持する」であり、 $οὐτως \epsilon\chi\omega$ 「私はこのようである」となる。もし対格があれば、「私は持つ」となり、 $\epsilon\chi\omega \tau\epsilon$ 「私はあるものを持つ」となる。同様に、ヴェーダの $\acute{a}p\alpha\sigma\tau\acute{a}t$ は「他のものが裂いた」であるが、 $p\acute{u}r\acute{o} \delta\alpha\tau$ は「彼が町々を破った」となる⁴⁸。

ここで述べられていることで注目すべきは、動詞が他動詞、自動詞の区別をもたないということ、および対格の役割は、動詞が他動詞的な意味をもつかあるいは自動詞的な意味をもつかを、決定するところにある、という点にある。第二の点はのちにデスニツカヤ (Десницкая, Агния Васильевна 1912-1992) の所説と関連して述べるが、第一の点に関していえば、このような現象の存在は、もしこれが随伴事象でなく、包含事象であったならば、この言語が能格言語類型ではなく、活格言語類型に属することを示唆するものといえよう。しかしこれだけの材料では、そのいずれであるかを決定することは、困難であるといわねばならない。

§ 182 メイエのこの著作よりもはるかに早く、1902年にヴァン・ヴェイク (van Wijk, Nicolaas 1880-1941) は印欧語の主格の語尾 $*-s$ に関して、これがかつての能格の語尾であり、また属格の語尾 $*-s$ と同じものであるという説を唱え⁴⁹、1935年に至ってクリヲヴィッチが、再びこの説を取り上げたという [DS 42]⁵⁰。デスニツカヤによれば、クリヲヴィッチがこの説を仮説として採用したのは、たとえばギリシア語の $\pi\acute{\omega}\varsigma > \pi\acute{o}\varsigma$ 「足(主格)」と $\pi\acute{o}\delta\acute{o}\varsigma$ 「足(属格)」、サンスクリットの $p\acute{a}t$, $p\acute{a}d\acute{a}h$ のように、広く印欧語において主格の際に語根の母音の延長が生じる現象を説明しようとする、音韻論的な動機によるものであったとされる [DS 42]⁵¹。

再びデスニツカヤによれば、ガムクレリゼとならんで、ここで取り上げている著作の共著者であるヴァチェスラフ・イヴァーノフは、1964年および1965年に

発表した論文において、上述したような主格と属格の語尾の一致は、能格言語の「活格」の形から主格形がつくられたためであるという仮説を提示し、それがほとんど定説として受け入れられていたという [DS 43]⁵²。これに対し、サフチェンコ (Савченко, Алексей Нилович 1907-1988) は、印欧語の *es が行為名詞の主語、間接目的語、場所の状況語を表す機能をもっており、これは能格言語の能格と機能的に等しいから、元来は能格であったと主張したという⁵³。

これらは学説的にいえば、この格を形態論のレベルで論じようとしたものであるといえる。

§ 183 すでに第一部で触れたように、1930-40 年代に、ソヴェトにおいて類型学の研究が盛んになり、この中で印欧語の類型が能格言語類型に遡るものであるか、それとも直接活格言語類型に由来するものであるかが議論されたが、これらの類型は、主語・述語あるいは述語・目的語関係という、統語論のレベルに基づいて行われた類別であったから、格の問題も、当然統語論の立場から論じられるようになった。そのようななかで、デスニツカヤは「印欧諸語の直接補語のカテゴリーの発達」⁵⁴を書いた。対格の機能がどのようなものであるかを決定することが、この問題を解決するための鍵となっていたからである。しかしタイプ書きで 674 ページに及ぶこの論文は、当時全体としては公刊されず、個々の抜粋のみが印刷に附されるにとどまったという。彼女は「その中で提起された諸問題に対する学問的興味が復活したこと、およびその中で定式化された諸命題のうちのいくつかが、印欧諸語の主格構造の起源の問題についての最近の研究の結果に一致することが、明らかになったことを考えて」[DS 51]、1984 年に出版された論集『比較言語学と諸言語の歴史』の中に、彼女が重要と思う部分を、収録している。

この「幻の書」について、彼女は次のように書いている。すなわち、

.....印欧共通語のタイプの構造の発達における、前主格(言語)期についての問題は、当時(すなわち 40 年代)の緊迫した興味の対象であり、私にはいずれかを選択せねばならなかった。すでに当時ほとんど定説となっていた、この問題の「能格説論者的な」解決に同意して、その強化のために、何らかの新しい、より説得性の高い論拠を探し求めるか、あるいはこのような予断にとらわれた目論見を拒否して、もう一度、印欧語のような主格言語の構造を決定する主体・客体関係の表現の図式の、基本的な諸要素の起源の研究にむかうかであった。能格言語という仮説のために集められた論証の体系全体がそもそものはじめから私には不十分なものに思われていたので、私は第二の道を選び、直接補語のカテゴリーに注意を集中した。そこに焦

点のように、他のタイプの統語論的構造、とくに能格構造と異なった、文の主格構造の特徴を決定するところの、文法的・意味的な諸現象の線が集中していたからである」[DS 49].

ここで直接補語といているのは、意味上の目的語のことである。

§ 184 この論文の一部として論集『比較言語学と諸言語の歴史』に収録された論文の一つが「印欧語における対格という文法的カテゴリーの発達史によせて」[DS 81-124]⁵⁵である。「ホメーロスのイーリアスの言語における対格の諸機能」⁵⁶という副題をもつこの論文において、著者はイーリアスにみられる対格の用法を考察し、次のように結論づけている。

古代ギリシア語で、いわゆる関係の対格をとまなう特殊な構文に保存されていた、対格の状況語的・修飾語的な意義は、この格のより古い意義であると思われる。当初、対格という形式は、述語あるいは修飾語によって与えられる徴条の、最も緊密で直接的な規定語であった名詞に特徴的なものであった。やがて、述語的な諸関係が形成されてくる過程のなかで、述語の規定語である名詞は絶えず独立の度を増してくる。意義の状況語的規定語的性格は、漸次直接補語、すなわち最も近い補語の意義に移行する。述語によって与えられる(動詞の)徴条もまた、特定の補語を必要とするものと感じられはじめる。このようにしてこれらの動詞によって表される行為が直接に及ばれるところの補語が必要とされる、他動詞という特殊なカテゴリーが作り上げられていき、結局対格はその特殊な機能、すなわち直接補語の機能を獲得する。……逆に古い印欧諸語の対格の諸形の比較形態論的な分析は、歴史的に、これらの形がかつて状況語的・副詞的な機能をもって用いられていた、無形態の名詞語幹に遡るという結論に導く[DS 118-119].

以上の結論には、少なくとも二つの相互に密接に関連する問題が含まれている。一つはいうまでもなく、対格の問題であり、もう一つは自動・他動のカテゴリーの問題である。

§ 185 第一の点に関しては、「これまでの言語学の文献においては、古代ギリシア語およびその他の印欧諸語の対格の使用の型の分類に多くの注意が払われた。しかしそれらの分類は通常それぞれの結合の語彙的内容に立脚しており、文法カテゴリーとしての格の定義には、あまり役立たなかった。このような分類原理は、格の使用の仕方の考察に一定の秩序を導入しはしたが、文法的見地からすれば原理にそぐわないものであった」[DS 87-88]として、従来の用法の分類を批判している。従来の分類の仕方が、主として論理的な立場によるものであって、言語の立

場からなされたものではなかったというのである。

対格の用例として著者が挙げているのはきわめて詳細なものであるが、いくつかの例にとどめておくとするば、たとえば次のようなものである。

a. 主体の状態を表す動詞による構文

γέγηθε δὲ τε φρένα ποιμήν (Θ, 559, D90, 267)

「喜んでいる ところで 虚辞 胸(心, 喜びの在処, 対格) 羊飼いは」

= 「牧人も心に喜びとする」⁵⁷

Αἰνείας δ' ἄρα θυμὸν ἐχώσατο (Π, 616, D90, 362)

「アイネイアースは そこで 魂(心, 怒りの在処, 対格) 怒った」

= 「そこでアイネイアースはひどく腹を立て」

b. 形容詞とともに用いられる場合

γηθόσυνος κῆρ (Σ, 557, D90, 392)

「喜ばしい 心(対格)」= 「気も楽しげに」

これはいわゆる「限定の対格」*accusativus limitationis* と呼ばれているものである⁵⁸。

デスニツカヤはこれと関連して、従来他動詞の直接目的語の中に含まれていた、次のような例を、関係の対格の枠内にはあるが、直接目的に移行しつつあるものとしている。

ἤχθετο γὰρ κῆρ (Λ, 400, D90, 296.)

「彼は苦しんでいる ところで 心(対格)」

= 「(ディオメーデースは)心をたいそう苦しめながら」

のような例に対する、

ἤχθετο γὰρ ῥα Τρωσὶν δαμναμένους (Ν, 352-353, D90, 319)

「彼は苦しんでいる ところで というのは トロイアの人々によって(複数与格)

打ち負かされる(人々, 複数対格)」= 「というのも、(ポセイダーオーンは)みながトロイア方に打たれていくのを腹にすえかね」

のようなばあいである。この後者の例は岩波書店の『ギリシア語文法』によれば、直接目的語のcに分類され、「多くの自動詞は、また他動詞になり得るが、特に感情を表すものに多い」と述べられている。しかしこれも「打ち負かされる人々に関して」という方が、自然であるように思われる。これはとくに動詞が受動形であることにも、関連している。

c. 広義の行為の状況を示すもの

σὺ δέ κεν κακὸν οἶτον ἔλθαι (Γ, 417, D91, 209)

「おまえが　ところで　おそらく　悪い(対格)　運命(対格)　滅びる」＝

「(それで私がトロイア方とダナオイ勢と、両方の間に立って、ひどい敵意をあおり立てたら)、おまえだってもみじめな最後を遂げるきりだろうよ」

このばあいには、むしろ対格は「悪い運命のゆえに」のように、原因を表すといってもよい。

そのほか、たとえば *νίκην νικᾶν* 「勝利(対格)勝利する」＝「勝ち戦をする」のような、いわゆる内的対格 *paronomasia* などにもこれに属する。

形容詞と共に用いられる場合も同様であるが、著者はこれにたとえば *βαρὺ στενάχων* 「重くうめきながら」＝「深く嘆息しながら」あるいは *σμερδαλέα κτυπέων* (H, 479, D96, 256) 「聞くも恐ろしく(雷鳴を)轟かせつつ」＝「(ゼウスが)すごい雷を轟かせた」のように、通常副詞と考えられている対格形も含めている。

§ 186 第二の問題、すなわち自動詞と他動詞のカテゴリーの問題は、上述の論文の中で、対格の機能と関連して論じられているが、この問題を独立して論じたものは「動詞の他動性のカテゴリー」⁵⁹という題のもとに、『比較言語学と諸言語の歴史』の独立の一章として、収録されている[DS 124-138]。

ここで著者は、印欧語においては、本来自動詞と他動詞の区別がなかったとする主張の根拠として、まず、ホメーロスの言語において自動詞と他動詞の区別が曖昧であることを挙げている[DS 126-127]。たとえば古典期のギリシア語においても、たとえば *ἄγω* 「導く」と「進む」、*βάλλω* 「投げる」と「落ちる」、*στρέφω* 「回す」と「逸れる」、*ὀρμύω* 「動かす、急がせる」と「急ぐ」のような場合、あるいはイリアースの *ἐπ'ἀριστέρ' ἔχε στρατοῦ* (N, 326, D127, 318) 「左手に　位置せよ　軍勢から(属格)」＝「(我々二人を)左翼にむけてくれ(?)」などを、挙げている。著者はこのような現象が決して散発的なものであるとはいえないとして、一連の語彙を掲げている。

第二の論拠として挙げられているのは、語構成論上より古層に属するとみられる、いわゆる第二アオリストが自動詞的な意味をもつものに対して、より新しいシグマのアオリストはしばしば他動詞的な意味をもつばあいのあることである。たとえば *δύω* に対する第二アオリスト *έδυν* 「沈んだ」と第一アオリスト *έδυσα* 「沈めた」、*ἵστημι* に対する *έστην* 「立った」と *έστησα* 「立たせた」、*σβέννυμι* に対する *έσβην* 「消えた」と *έσβεσα* 「消した」、*φύω* に対する *έφυν* 「生まれた、育った」と *έφυσα* 「生んだ」、*τρέφω* に対する *έτραφον* 「育った」と *έθρεψα* 「育てた」などである[DS 130]。

同時にまたここでは、アオリストの語尾 *-ην* が古いテキストにおいて「自動詞・絶対動詞」の意義をもち、これがやがてアオリスト受動形の *-θην* にも引き継がれたことを指摘している [DS 131].

第三の論拠として、著者はまた、この問題が、古層をなすいわゆる第二完了形が自動詞の意味をもち、他動詞の意味をもつ第一完了形および現在形に対立している場合のあることと、平行していることをも、指摘している。たとえば、現在形 *ἐγείρω* 「起こす」、第一完了形 *ἐγήγερκα* 「起こしてしまった」、第二完了形 *ἐγρήγορα* 「起きている」、*ὀλλυμι* 「滅ぼす」、*ὀλώλεκα* 「滅ぼしてしまった」、*ὀλωλα* 「滅びている」、*πείθω* 「説得する」、*πέπεικα* 「説得してしまった」、*πέποιθα* 「信じている」、*πράσσω* 「為す」、*πέπραχα* 「為してしまった」、*πέπραγα* 「ある状態にある」などである [DS 131].

第四の論拠としてデスニツカヤが挙げているのは、能動相・受動相のカテゴリーの欠如である。「ホメーロスの詩の言語では……他動性の性格が通常のものとは本質的に異なっていた。なぜなら他動詞の主語・目的語の図式の基本的な構成要素の一つである受動相が欠如していたからである」[DS 125] とし、さらに、「<中立的>と<主格的> (いわゆる<能動>と<中動>) な行為のニュアンスのうえに建てられた古代ギリシア語の相の体系は、動詞の他動詞的および自動詞的な使用への分化とは、当初いかなる共通性をもってはおらず、対格に立つ直接補語は、中動の形と共に立つこともできた」と、著者は述べている [DS 133].

もしデスニツカヤの説が正しいとするならば、何度も述べているように、これは活格言語の包含事象であるから、ホメーロス期には随件事象でなければならない。随件事象が二つの言語類型を越えて継承される可能性がないわけではないが、このような例が比較的多数みられるとすれば、印欧語が、活格言語から直接に対格言語に発展した蓋然性は、少なくとも内容的類型学の立場からすれば、かなり高いとみななければならないであろう。

§ 187 一方、クリヲヴィッチは、「印欧語の *-m*, *-s*, *-t* という系列は能動であり、*æ₂*, *-t*, *zero* という系列は受動・自動である」としている⁶⁰。ここから判断すれば、自動・他動の区別は、印欧語に本来的であったかのような印象を受ける。もしそうとすれば、これは明らかにデスニツカヤの所説とは相矛盾することになる。

ペレリムーテル (Перельмутер, Илья Аронович 1929-) は、第一完了形だけではなく、現在形、あるいはアオリストが、たとえば、

完了 πέ-πηγ-α「突き刺さっている」に対する
 現在 πήγ-νυ-μι「突っ込む」
 完了 ὀρ-ωρ-α「鼓舞されている」, 「奮起している」に対する
 現在 ὀρ-νυ-μι「鼓舞する」
 完了 ὀλ-ωλ-α「破滅している」に対する
 現在 ὀλ-λυ-μι < *ὀλ-νυ-μι「滅ぼす」
 完了 δέ-δη-α < *δε-δᾱF-α「燃えている」に対する
 現在 δαίω < *δαF-ι-ω「燃やす」
 完了 τέ-τρηχ-α「猛っている」に対する
 現在 ταραάσσω < *ταραχ-ι-ω「動揺させる」

のように、現在形が完了形から派生したと考えられるものが多いこと、あるいはホメロスの言語にはたとえば完了形 μέμονα「熱望する」, οἶδα「知っている」, ὀδωδα「匂いがする」, εἰκα「似ている」などに対応する現在形もアオリストも存在しなかったこと、また ἄνωγα「命じる」, γέγωνα「聞こえるように叫ぶ」, τέτριγα「(鳥が)鋭く鳴く」, προβέβουλα「選択する」に対応するアオリストが存在しなかったこと、などから、印欧語においては原初には動詞は完全なパラダイムをもたず、語彙的意義に従ってそれぞれ適当な形をもって用いられていたであろうと考えている。その上で彼はこれらの不規則完了形の語彙的意義が、次のようにグループ化するとした。

1. 物理的状态を表すもの、たとえば、
 πέπηγα「突き刺されている」, τέθηλα「咲いている」, σέσηπα「腐っている」, ὀλωλα「破滅している」, τέτρηχα「猛っている」, ὀρωρα「生起した」など。
2. 恒常的状态を表すもの、たとえば、
 εἰκα「似ている」, εἴωθα「癖になっている」など。
3. 心理状态, 思惟の過程, 感覚の受容等を表すもの、たとえば、
 τέθηπα「びっくりしている」, γέγηθα「喜んでいる」, δέειδια「恐れている」, τετίηα「悲しんでいる」, ἐρύγα「おののく」, πέφρικα「ぞっとする」, μέμονα「望む」, πέποιθα「信じている」, ἔολπα「期待している」, οἶδα「知っている」, δέδορκα「見る」, ὀδωδα「香っている」など。
4. 音声を表す語、たとえば、
 βέβρυχα「うめく」, μέμνκα「(牛が)鳴く」(μυκάομαι), μέμνκα「(羊が)鳴く」, κέκληγα「叫ぶ」, 「(風が)唸る」, τέτριγα「(鳥が)鋭く啼く」, γέγωνα「(聞こえるように)叫ぶ」など。

これらのことから、著者は印欧語の完了形は、本来「非行為的 inactive な意義をもった述語という、特殊な語彙的、文法的な語のクラスを構成していた」とし⁶¹、「印欧諸語の歴史以前のある時期に、その文法構造において、大きな役割を演じていたのは、行為を示す述語と、状態を示す述語の区別であった」としている⁶²。このことの真意は、著者が別のところでたとえば $\pi\lambda\eta\sigma\sigma\omega$: $\acute{\epsilon}\pi\lambda\eta\gamma\alpha$ 「打つ」、 $\epsilon\rho\delta\omega$: $\epsilon\sigma\rho\gamma\alpha$ 「行う」、 $\epsilon\delta\omega$: $\epsilon\delta\eta\delta\alpha$ 「食べる」のように、すでにホメーロスにおいて 15 ほどの動詞の完了形が、他動の意味をもっていることを挙げていることからすれば⁶³、著者は自動・他動と、行為動詞・状態動詞の区別は別のものであって、後者の範疇が印欧語にとって初原的なものであることを主張していると思われる。そうとすれば、これは全体としてデスニツカヤの緒論を精密化したものであるといえよう。

それにもかかわらず、クリラヴィッチにみられる立場も、未だ否定されているわけではないから、グフマン (Гухман, Мирра Моисеевна 1904-1989) が 1981 年に書いているように、「……印欧語の主格言語類型以前の過去に関する問題は、未だ仮説の域にとどまっている」のも、また事実である [GI 177]⁶⁴。その理由は、現在の比較方法のみによっては、印欧語の文の構造の再構成が、むずかしいことによると思われる。もし問題とする段階の言語が、たとえば活格言語類型に属すると仮定すれば、この時代の文がどのような構造をもっていたか、という推測はできる。そしてそのような構造を仮定すれば、これまで比較言語学が再構成してきたさまざまな現象を、よく説明できるばあい、あるいはこれに新しい解釈を施す可能性の生じるばあいが、存在することは確かかも知れない。しかしこれに基づいて印欧祖語が、かつて活格言語であったと結論することができないのも、明らかであろう。一種の「循環論法」*circulus vitiosus* をつくりだすからである。したがって、これを理論的に証明するためには、たとえ純粋に比較言語学、あるいは内的比較の枠内でなくとも、少なくとも言語類型学以外の方法をかりて、文の構造を再構成する必要があると、思われる。私見ではあるが、そのときまでは、この問題は、蓋然性はたとえ高くとも、仮説のままでありつづけるであろう。

§ 188 すでにデスニツカヤの所説にみたように、印欧語の対格が、本来広い意味での状況語としてはたらいっていたものが、やがて直接目的語として用いられるようになったとすれば、二つの問題が生じてくるように思われる。一つは、印欧語の対格はもともとどのようなはたらきをもっていたか、という問題と、状況語が直接目的語に転化する条件は何であったか、という問題である。すなわち、一

つは状況語として用いられていた対格の過去に関するものであり、他の一つはその未来に関するものである。

第一の点について、デスニツカヤは次のような状況を考えている。

……すでに最も古い時代に、対象や現象を意味する名詞を、文の中で主語あるいは目的語の役割を果たす可能性があるかどうかという観点から分類する、ある種の質的な特徴が存在していたことには、まったく疑いがない。このことは、指示代名詞の古い補充法によるパラダイムにおいて、男性および女性の単数主格が、特別な主語の語幹をもち、すべての斜格と中性主格に共通の、材料的にまったく異なった語幹に対立している、という形で、形態的に表されている（ギリシア語 *ὁ, ἡ, τό*, 古代インド語 *sa, sá, tát*）。……形態的に「主語」の性格づけを受けなかった他の名詞についていえば、これらは（前者の）漸次独立の文肢となりつつあった主語や述語に対して、状況語的・修飾語的な機能をもつ、形態化されない状態を保っていた。形態化されていない語幹の状況語的・修飾語的機能から、やがて目的語の機能が発達した。これと平行して個別の斜格の形成が行われた。……多くの学者が、チュルク諸語や多くの非印欧諸語に知られている、いわゆる「不定格」*casus indefinitus* と正しくも比接し、あるいは比接しつつあるカテゴリーの印欧諸語における発達を、このように考えることができる [DS 71-72]。

デスニツカヤがこれを書いたとき、バンヴニストの高名な著書『印欧語の名詞形成の起源』⁶⁵はすでに世に出て久しかったこと、例として用いられている語の共通性などから、彼女がこの論文に接していたことは疑いがないと思われる。バンヴニストはの中で、印欧語には **-n*, **-r*, **-w*, **-y*, (**-s*) に終わる中性名詞がかつて存在していたこと、そしてこれらは本来接尾辞ではなく、拡張子であったことを論証した。またこれと関連して、たとえばサンスクリットの *vanar* 「森の中で」、*vásar* 「春に」あるいは *jmán* 「地中に」、*hemán* 「冬に」などを、**-r*, **-n* の構成にかかる所格であるとする説に対して、これが上述した中性の主・対格の形であることを主張した⁶⁶。また印欧語の所格の語尾とされる **-i* についても、これが本来上述の **-y* に由来する、中性名詞の主・対格の形であるとしている。著者はこの「主・対格」について、次のようにいっている。

我々は、中性の変化が数の表現に関しても、格の表現に関しても、まったく形式化されていない時代に遭遇する。……同様にしてここにあるのは主語あるいは目的語として動詞にとまなわれ、あるいは時または場所の限定詞としてこれに添えられることのできる、ただ一つの形式である。これは文によって自由に名詞とも、副詞ともなる。その本来の不定性によって、この形式は、きわめてさまざまな関係の表現に適応できる、十分な柔軟性を保持している。これが、我々が「不定格」*cas indefini*

と呼ぶただ一つの格が、ある程度統語的機能の全体を引き受けている、中性の特殊な状況である⁶⁷。

バンヴニストは中性(無生物性)名詞についていっているのであるが、これは容易に生物性に敷衍できるであろう。

第二の問題、すなわち状況語として用いられていた対格が、直接目的語を表すようになる条件は、明らかに対格が状況語を表さないようになることである。言い換えれば、状況語の機能を担う対格以外の格が整備されることである。青年文法学派の人々は印欧語の格の体系として8格を考えていたが、すでに述べたバンヴニストの印欧語の所格の語尾 *i についての見解にもみられるように、格の体系は漸次つくりだされてきたというのが、最近の比較言語学において主張されてきつつある説であると思われる。たとえばグフマンは次のように述べている。

現代の印欧語比較文法における、名詞のパラダイムの有力なモデルは、青年文法学派の伝統に対応する古いモデル(8格)よりも、著しく少ない語形の体系という形をもっている。文法格(主格、対格、属格)と具体格(具格、与格、奪格、所格)への層化は、部分的に時間的な層化と一致している。さまざまな副詞的な語構成の参与によって発達した、具体格がより遅い性格のものであることは、多くの一般のおよび専門的な研究において指摘されている。現在印欧語学において支配的な傾向にとって疑いなく特徴的なものとして、トロンスキー(Тронский, Иосиф Моисеевич 1897-1970)のように、慎重で科学におけるモダニズムに余り傾くことのなかった学者が、「名詞変化の最古の層は単数の主格、対格、属格である」という結論に到達したことがある[GI 199]。

序に言えば、トロンスキーはこれに引き続いて、「当然ながらこれらの格の由来およびそれら相互間の関係については、仮説が可能であるにすぎない」としている⁶⁸。

このような議論の根拠となるものとして、たとえばギリシア語の *δέμας*「身体」、*σέβας*「畏敬」、*ἡδός*「喜び」、*ὀφέλος*「助長」のように、少なくともホメロスの時代には主格、対格、呼格に使用が限定されていた中性名詞の存在、あるいはバンヴニストが考察したような、*r/n-の交替をともなう heteroclis において、*-r- が主格、対格、呼格に用いられ、その他の格は *-n- によっている、という事実などがあると思われる⁶⁹。

このようにさまざまな格が形成され、一般格、あるいは対格がもっていた、きわめて広い状況語的な機能を分担していく過程のなかで、対格が目的語をもつて示すことに、その機能を限定していくことが、可能となったのだと思われる。

§ 189 以上みてきたように、仮に印欧語が活格言語から対格言語に発展したとするばあい、どのような機序でこのことが可能となったのかについては、少なくとも以上の議論からは、明らかになったとはいえないであろう。能格であれ、あるいは活格であれ、能動的に行為に関与することを示すのを、その機能としているから、対格言語の主格にみられるように、必ずしも能動的な行為への参与を前提としてはいないものが、どのようにして生じたかが、明らかでないからである。デスニツカヤが論集に収録している、「古ゲルマン語の目的与格について」[DS 138-153]⁷⁰および、その補足として書かれた「活格文類型から主格文類型への発達の問題によせて」[DS 153-162]⁷¹は、このような問題意識のもとに書かれたと思われる。

著者は論文「古ゲルマン語の目的与格について」において、古アイスランド語およびゴート語においては、他の言語では対格を用いるようなばあいに与格補語をとる動詞の構文を詳細に検討し、次のようにいう。

.....したがっていわゆる「目的与格」を支配する古アイスランド語の基本的な諸タイプを概観した結果、これらの動詞は自動詞とみなさなければならないことがわかった。しかしこの種の古アイスランド語の動詞の「自動性」は、これらの動詞の意味の性格に関しても、その量的規模においても、我々が通常理解している意味での動詞の「自動性」とは、本質的に異なっている。.....古アイスランド語の「自動」詞は、むしろその意義にしたがって、「絶対」動詞という用語で特徴づけることができる。この用語は、あれこれの対象への指向性という観点からして、中立的なその性格を強調するが、目的語との結合の可能性を除外するものではない。目的語は文中に存在することもできるが、それは動詞の語幹によって示される行為を、状況語として精密化するにすぎない [DS 150].

たとえば、これには *fagna*「歓迎する」、*unna*「愛する」、*hjalpa*「助ける」のように、「生き物の対象に.....行為が向けられていることを表す動詞」や、*hrinda*「突く」、*hella*「注ぐ」、*skipta*「分ける」のように、「それについている目的与格に固有の、道具の意義のニュアンス」をもつ動詞が、属しているという [DS 139].

このような目的与格は、一方ではやがて対格によって代替されることによって、主語・述語・目的語の関係を明確にし、そのことによって同時に他動詞とみなされるようになる。しかし他方では主語はかつての自動詞の主語である絶対格を継承し、したがって必ずしも主語が積極的に行為に参加しなくてもよいという状態が、現出することになる。デスニツカヤはこのようなプロセスを想定しているようにみえる。そしてこれがコーカサスの諸言語、とくにグルジア語のばあいのアナロジーであることは、確かであると思われる。

カルトヴェリ諸語において現在諸時称の体系と結びついている、他動詞の主格構文の起源の説明への道は、古アイスランド語およびゴート語の類似の構文との、類型学的な比較によって明らかになると、私は考えていた。しかし私は、両者の解釈のために、もっと地理的に遠いが類型学的に類似しているものに向かった。メシチャニーノフ (Мещанинов, Иван Иванович 1883-1967) によって措定された、アレウト語およびチュクチ語の主語 (自動詞) 的な変化のタイプと、主語・目的語的な他動詞の変化のタイプとの相違に、その説明を見出したからである。この分け方は、具体的な動詞とは結びついていない。同じ動詞がこれらの両方のタイプに従って変化するのである。相異は、動詞が伝える行為がとるアスペクトによってのみ、規定される。主語的な形式は、主体の行為あるいは状態をみせることにだけ向けられ、それは動詞の形によって示される。目的語は関係がない。それはチュクチ語では具格の形によって示され、文の中にあってもよいが、それに依拠することはない。行為がそれ自身として、一般的に伝えられるからである。主語・目的語タイプのばあいには、まさにこの目的語が支えになるが、それは動詞の対応する形と、文の構造によって伝えられる [DS 156]。

ガムクレリゼとイヴァーノフの労作の、名詞の形態論に関する部分は、このような研究史を暗黙の前提としていていると思われる。

4

名 詞

§ 190 さて、すでに触れたように、すでにヴァン・ヴェイク以来、主格の語尾 **-s* と属格の語尾 **-s* とは同じものという説がなされてきた。これに関連していえば、従来名詞の属格の語尾は、単数においては Gr. *podós* 「足」、Skr. *padas* < **pod-os* のように、**-os* または **-es* あるいは **-s* であり、複数ではたとえば Skr. *śun-ām*, Av. *sūn-ām*, Gr. *κυνῶν* 「犬」のように、**-ōn* または **-ōm* であるとされている。またラテン語の *can-um* のような形については、高津は長短いずれの **o* に由来するかわからないとし⁷²、メイエもそう考えているようである⁷³。これに対してトロンスキーはこれを **-ōm* の縮約した形であるとし⁷⁴、この変化が **m* の前で生じたのは紀元前 2 世紀の初めであるとする⁷⁵。またたとえば古教会スラヴ語の複数属格 *nebesŭ* 「空」のような場合、ヴァイヤン (Vaillant, André 1890-1977) は **-on* または **-om* に由来するとしか、考えられないとしている⁷⁶。

一方ヒットライト語の解読によって、名詞の単数属格の語尾には **-s* だけではな

く、ヒッタイト語で *-n* として現れるものが存在することが明らかになった。これは印欧語の **-m* に遡るものであると考えられ、キプロス方言にみられる、単数属格の語尾 *-o-ne* (*-e* は書写上のもの) も決して孤立した、偶然的なものではないことになるという⁷⁷。イヴァーノフは、ヒッタイト語の *-an* について、名詞のばあい、これをもっているのは古ヒッタイト語のテキストに限られ、たとえば Labarnan「(ヒッタイト王) ラバルナの」あるいは Šiunan「神々の」のように、本来は単数、複数の別には関係がなかったこと、この使用が、生き物を表す名詞に限られていたこと、を述べている⁷⁸。

このように、印欧語の属格として、**-s* の語尾と **-m* の語尾が認められることによって、上述したヴァン・ヴェイクの、主格形と属格形の同源説が信憑性を帯びてくる。

またイヴァーノフは、名詞の複数について、次のようにいっている。

ヒッタイト語の名詞変化の特徴は、単数のパラダイムに比べて、複数のパラダイムの発達が弱いことである。複数においては、(単数と複数の語幹が異なるいくつかの代名詞を除けば)、具格と奪格に独立した形がなく、与・所格と属格との対立が中和され、しかも単複の属格形が一致している。最後に、複数においては主格と対格の混同がしばしば認められる。これらの諸現象(特に主格と対格の混同)は、革新であると説明されなければならないが、これらの革新は、(他のアナトリア諸語との比較が示すように)、アナトリア共通語から継承された、複数のパラダイムの発達の弱さに関係していた。

複数の諸格の二次的な性格は、とくにルウィ語に明らかにみられる。ここでは生物性の複数のすべての形が、接尾辞 *-nz-* (歴史的観点からは、これは、鼻音の主音 archiphoneme の形で表される鼻音の接尾辞と、印欧語の複数の指標である **-s-* との結合 **-N-s-* として説明できよう) をともなう、二次的な語幹からつくられる⁷⁹。

これをまとめれば、印欧語の複数諸格は、印欧語の複数の指標 **-s-* と格語尾との結合に由来し、属格の語尾は生物性の場合には **-m* となる。そうすればあとでみるように、無生物性の場合には **-s* になるということになる。

§ 191 ガムクレリゼらの著書は、このような背景に立脚したものであると考えられる。彼らは、上述のラテン語やスラヴ語の複数属格の形を **-om* であるとし、サンスクリット、ギリシア語、リトアニア語などの長音の **ō* をもつ形は **-om-s* に来源するものであると考える [G&H 268]。そしてこの **-s* はたとえば単数対格の **-om* に対する複数対格の **-oms*、単数所格の **-i* に対する複数所格の **-si* にみられ

るように、複数の指標であるとする。そうとすれば、属格の語尾には *-os と *-om とが存在することになるが、イヴァーノフを含む著者らは、すでにみたイヴァーノフの説に従って、ヒッタイト語ではともに単数並びに複数に用いられる -aš と -an のうち、-an は、使用は限られているものの、明らかにいわゆる共通性の名詞に用いられるのに対し、-aš は中性名詞にも、また共通性の名詞にも用いられていることからみて、本来 -an は活性名詞に、-aš は不活性名詞に用いられていたとする [G&II 269]。この *-os は活性名詞の主格と同じ形をしていたために、下位方言によっては混同を避けるために、*-yo- によってこれを延長したとする。たとえばサンスクリット *vṛkaḥ*、ギリシア語 *λύκος* 「狼」 < *wlk-os に対する属格 *vṛkasya*, *λύκοιο* < *wlk-os-yo のようなばあいである [G&II 270]。

〇語幹男性名詞単数主格の語尾 *-os と対格の語尾 *-om については、明らかに前者が活性名詞、後者が不活性名詞の主格の形であり、後者は後に中性名詞に発展した不活性名詞の主格語尾 *-om と同じものである [G&II 271-273]。

そうとすれば、主格の場合と属格のばあいとは、生物性と無生物性の語尾が逆になることになる。著者らはこの問題を次のように説明する。

いま、ある名詞が他の名詞を規定する位置にあるとき、規定語が活性名詞であるか、不活性名詞であるかにかかわらず、被規定語が活性名詞であれば語尾 *-os を、また不活性名詞であれば語尾 *-om をとったとする。このとき、規定語、被規定語がともに活性名詞であるか、ともに不活性名詞であるときには、これは単なる同格による規定関係であるとみなされ、やがて融合して複合語をつくった、という。これに対して規定語が不活性名詞であって、被規定語が活性名詞であるばあい、もしくは規定語が活性名詞であって被規定語が不活性名詞であるようなばあいには、規定語は本来の主格語尾とは異なる語尾をとることになるから、これは機能的に主格と異なる語尾であると観念されなければならない。そうとすれば、主格のばあいとは逆に、活性名詞は属格語尾として *-om を、不活性名詞は *-os をとるということになる [G&II 277-278]。すなわち、

規 定 語		被規定語	
1) 生物性名詞語幹 -os	+	生物性名詞語幹 -os	
2) 無生物名詞語幹 -om	+	無生物性名詞語幹 -om	
3) 無生物性名詞語幹 -os	+	生物性名詞語幹 -os	
4) 生物性名詞語幹 -om	+	無生物性名詞語幹 -om	

ここで 1) と 2) とは複合語に転化し、3) と 4) とが「形容詞」に転化した、というのである。

これはなかなか興味深い説明である。これは共著者のイヴァーノフが、かつて『ヒッタイト語』において、生物性に $-an < *-om$ が用いられるに至ったのは、部分属格の $-an$ が、生物性の対格に拡張された結果であるとした説明とは、明らかに異なっている⁸⁰が、『ヒッタイト語』にみられる解釈では、 $-s$ の語尾の説明がむずかしい。

§ 192 ガムクレリゼらによれば、与格の $*-ei$ と所格の $*-i$ も、本来は状況語として用いられるものであって、前者は活性名詞に、後者は不活性名詞に用いられていたものであるが、やがて前者は与格の語尾として、後者は所格の語尾としてそれぞれ用いられるようになったという [G&II 286-287]。これは両者が同一の語尾であって、母音度を異にするにすぎないという、素朴な感覚をよく説明するものとして興味深いが、そのためにはやはり論証が必要とされるであろう。

少なくとも所格の語尾 $*-i$ が不活性名詞に用いられていたという主張については、すでに述べたように、バンヴニストがこれを中性名詞ないし無生物性名詞の対格形 $*-y$ に来源をもつとしていることと、符合している。

一方与格の語尾 $*-ei$ については、トロンスキーは男性・女性(すなわち生物性)の語尾 $*-e$ に $*-i$ が加えられてなったものであるとして、次のように述べている。

単数与格の語尾 $*-ei$ は、 $*-i$ が $*-e$ に加えられたものと解するのがもっともよい。男性・女性の双数に遡る $*-e$ に終わる形は、行為者であるかあるいは事物であるかにかかわらず、第二の対象を示すことができた。その後、与格は所格の $*-i$ を加えることによって、具格と区別されるようになった⁸¹。

印欧語の具格と双数の間に関連があることを主張したのは、トロンスキーによればレヴィイ (Lewy, Ernest 1881-1966) であるという⁸²。この考えは、単数与格と所格との間に関連があるという点で、ガムクレリゼらの所説と軌を一にしているが、印欧語の双数の格の体系が十分に発達してはおらず、ヒッタイト語にも、文法カテゴリーとしての双数がみられないなど、これが非常に古い起源をもっていたかどうか疑わしいことから、十分に説得力があるようには思えない。バンヴニストは、たとえば印欧語の中性名詞 $*dhróbhy$ に由来する、ギリシア語の $\tau\rho\acute{o}\phi\eta$ および接尾辞 $*-ei-$ によって派生した形容詞 $*dhrobhéi-$ に遡る $\tau\rho\acute{o}\phi\acute{\iota}\varsigma$ 「栄養のよい、太った」が混同したとする。この混同はオクシトンの音調をもつ中性形 $*\tau\rho\acute{o}\phi\acute{\iota}$ の代わりに $*-y$ に終わり、バリトンの音調をもつ古い中性名詞 $\tau\rho\acute{o}\phi\eta$ が中性形として用いられていることによって、証明される、という。同様に、 $*-y$ による古い中性名詞 $*\acute{o}\rho\eta\eta$ から同じ接尾辞 $*-ei-$ によって派生した $\beta\rho\upsilon-\acute{\iota}\varsigma$ 「鳥、鶏」も、中

性名詞と混同されてバリトンの音調をもち、「結局生物性に転換され、更に $-\bar{\iota}\theta-$, $-\bar{\iota}\chi-$ によって延長された」という⁸³。ここで $-\bar{\iota}\theta-$, $-\bar{\iota}\chi-$ というのは、たとえば斜格で $\delta\rho\nu\bar{\iota}\theta\omicron\varsigma$ のように変化すること、ルカ伝にみえる $\delta\rho\nu\bar{\iota}\varsigma$ やその対格 $\delta\rho\nu\bar{\iota}\chi\alpha$ のような形のあることを指していると思われる。序に言えば単数対格において $\delta\rho\nu\nu$, 複数対格で $\delta\rho\nu\epsilon\iota\varsigma$ または $\delta\rho\nu\bar{\iota}\varsigma$ という別形があることが、辞書にみえる。

この所説にみられるような事情を背景にして、与格の $*-ei$ が、本来の中性対格形 $*-y > *i$ が接尾辞 $*-ei$ の零階梯と混同された結果であるとするならば、 $*-ei$ の形が生物性に用いられたということは、十分に可能性があるといえよう。

§ 193 ガムクレリゼらは、印欧語の人称代名詞複数一人称にみえる $*uei$ ($*ues$) および $*mes$ の形について、前者はスラヴ語の vy , ラテン語の $u\bar{o}s$ のように、二人称複数にも現れているから、かつての包含形に由来するものであり、これに対して後者は排外形である、と述べている [G&II 292]。確かに印欧語の人称代名詞の複数一人称には $*wei-$ と $*mes-$ の二つがあつて、方言によってそのいずれかが用いられていることは、以前からよく知られていた。たとえばサンスクリット $vay-\bar{a}m$, アヴェスタ $va-\bar{e}m$ (古ペルシア語 $vay-am$), ヒッタイト語 $weš$, ゴート語 $weis$ などに対する古プロシア語 mes , スラヴ語 my のような場合である。ラテン語の $n\bar{o}s$ は対格の形であるとされる⁸⁴が、この場合には、 $*no-$ の形も考慮されなければならないであろう。

いずれにしても、一般的にいえば、印欧語の人称代名詞にはさまざまな語根が認められ、その相互関係がはっきりしなかったことは確かである。たとえばメイエは、「人称代名詞の形は言語ごとにあまりに異なるために、印欧語の状態を再構成することはできないが、いくつかの特徴は認められる」⁸⁵と述べている。ガムクレリゼ等は、印欧語においても、他の活格言語と同じように、複数一人称に包含形と排外形の別があるとし、 $*wei-$ の形が包含形、 $*mes-$ の形が排外形であると主張しているが、その根拠については「一般類型学的考慮に基づけば」活格言語には包含事象としてこの現象がみられること、印欧語が活格言語であることを挙げているにすぎない。私見にすぎないが、ここには三つの問題があると思われる。一つは一般類型学的な考慮だけではなく、印欧語にみられる人称代名詞的要素が、問題となっている文法カテゴリーとして解釈できるかどうか、第二に $*wei-$ と $*mes-$ の形がこれにあたるとして、なぜその一方を包含形、他方を排外形であるとするのか、また第三に、その場合、要素 $*no-$ にはどのような位置が与えられるのか、という問題である [G&II 292]⁸⁶。少なくとも我々門外のものにとっては、必ずしも

これらのことは、自明とはいえないからである。

イヴァノフによれば、イェンセン (Jensen, Hans 1884-1973) が、1930 年にすでに印欧語の *ne- が包含形であると述べているという⁸⁷。しかしイヴァノフによれば、イェンセン自身は、必ずしもこの説に固執しなかったという。その後 1969 年に至って、ワトキンス (Watkins, Calvert 1933-) は動詞の変化語尾と関連して、次のように述べている。

双数と複数のおよび二人称には三つの基本的な形態素があり、それらの機能は、部分的に重なっている。*-ue 双数一人称、ただしヒッタイト語で複数一人称、*-me 複数一人称、*-te 双数二人称および複数二人称。同じような状況が、人称代名詞にも認められ、そこでも同じ人称と数において、三つの相互に重なり合う形態素が存在する。……しかしほかならぬ双数および複数の一・二人称の領域における、これらの動詞および代名詞要素の強い多値性は、著しいものである。少なくともこの状態の背後には、通常の印欧語とは異なったタイプの代名詞および動詞変化が存在し、そこでは代名詞と動詞が双数のカテゴリーをもたず、複数が二人称を含んだ一人称、二人称を排除した一人称（「私と他の人または人々」）を示す、と考えることができる。そうすれば、語尾 -ue, -me, -te および代名詞 *ue-, ne-(me-), iŭ- が、本来これら三つの機能に対応する指標であって、後に排外形/包含形の対立が失われ、双数のカテゴリーが（名詞から？）一般化したことによって、新しく配置替えされたと、仮定することができる。（しかし-I.Y.）この仮説はよくみても証明不可能である。これがそもそも可能なものであるかどうかを決定するためには、類型学的な考えを導入することが可能であろう⁸⁸。

*ne- の形は次のような分布を示している。すなわち、

双数一人称

Sl. na, Gr. νώ, Skr. nau, Av. nā

複数一人称

(対) Lat. nōs, Av. nā, Hitt. anz-ās, Got. uns

(後倚辞, 属・与・対) Skr. naḥ, Av. nō, Sl. ny

以上の外、スラヴ語の複数一人称代名詞の主格以外の格 *nasŭ, namŭ, nami* など、いわゆる所有代名詞の *naši*、プロシア語の複数一人称代名詞の *nusan* など。

一方、*we- の形は、次のような分布を示す。

双数一人称

Ved. vām, Av. vā, Sl. vě, Lit. vė-du, Got. wī-t

複数一人称

Skr. vay-ām, Av. vaēm, Got. weis, Hitt. weš,

Lit. mės, OPruss. mes, Sl. my

複数二人称

Skr. yūyām, Av. yūžəm, yuš (後倚辞),

Got. jus, Lit. jūs, OPruss. ious

*we- の形は、双数一人称と複数一人称に分布している点は *ne- の形と同じであるが、両者の違いは、*we- の形が、複数の二人称にも用いられているところにある。包含形が、一人称のほかに、二人称の人物をも含める点にその特徴があるとすれば、そしてまた両者の違いが、包含形と排外形の違いであるとすれば、*we- の形が包含形にあたる蓋然性は、*ne- のばあいより高いといえよう。イヴァーノフも、この形が包含形であることについては、多くの研究者の認めるところであるとしている⁸⁹。

§ 194 これに対して、*me- および *ne- のいずれの形が、これに対応する排外形であるかについては、研究者の意見が必ずしも一致していないという。イヴァーノフによれば、たとえばイリッチ・スヴィトウイッチ (Илич-Свитыч, Владимир Маркович 1934-1966) は、*me- の形が包含形であるとし、そのために *we- の形を古い双数に遡るものであり、「私とおまえ」を意味するものであるとしているという。しかしこの意味ならば結局は包含形になるとするイヴァーノフの批判は、あたっているといわなければならない⁹⁰。

*me- はたとえば、

複数一人称

*mes : Lit. mēs, OPruss. mes, Sl. my, Arm. mek̄

*_{ns}-me : Skr. asma- (一人称複数斜格の語幹), Gath. əhmā,

Gr.(Lesb.) ἄμμε < *ασμε < *_n-sme

複数二人称

*(j)us-me : Skr. yusma- (二人称複数斜格の語幹),

Av. yūšma-, Gr.(Lesb.) ὕμμε < *ὕσμε

この形が、複数一人称および二人称の *nes- および *wes- の零階梯 *_{ns}-, *us- に *me- の要素が附加されてなった形であるとするれば、これもまた包含形の条件を満たしていることになる。この *me- の要素については、高津はこれを単数形の類推であるかと疑っている⁹¹。またバロウも、これを一人称単数の形に帰している⁹²。またこれらの形は、メイエは *s-me- としているが、高津は「主格以外の格はギリシア語とサンスクリット語に於て多くの場合に弱階梯 *_{ns}, *us に *-sm- がついた形をもっている。*-sm- は Skr. ta-smai, ta-smin の如くに他の代名詞の格に見出され

るものと同一要素である」⁹³とし、*sm- を考えているようである。このような説に対してイヴァーノフは、この時期には *ns-, *us- から *-s- を分離することはできないとして、批判している⁹⁴。イヴァーノフによれば、エアハルト (Erhart, A.) は、一般類型学的にいえば、包含形の一人称複数形は、二人称の要素を含むとするフォルヒハイマー (Forchheimer, P.) の説を援用して、これらの形を包含形であるとしているという⁹⁵。イヴァーノフ自身は、「*ns-me, *us-me という形はギリシア・アフリカ方言地域に限られているので、まだ印欧祖語において最終的な結論を得る可能性はない」として、この問題に慎重な姿勢を示している。しかし、もし *me-, *we- がともに包含形であり、これが排外形 *ne- に対立しているとしたばあいを含めて、彼は次のように結論づけている。

.....このようなばあいには疑問が生じる。排外形の *ne と並んで、*we と *me という、二つの包含形が共存することをどのように説明すればよいか。この疑問に対する答を与えるのは、包含形と排外形の対立が認められる言語との、類型学的比較である。このような諸言語においては、排外性は、(単数および複数の三人称の人々をも補助的に含むが)、聞き手を除く話し手の集合を示す形によって表すことができるのに対し、包含性は、(聞き手の単数と複数を補助的に区別する) 話し手と聞き手の集合を示す形によって表すことができる。たとえば「(おまえ以外の)彼と私(たち)」, 「(彼らぬきの)おまえ(たち)と私(たち)」のようなばあいである。.....これらの類型をもつ言語との類型学的比較は、*we と *me とが、異なった種類の包含形に属していたと仮定する根拠を与える。しかし(類型学的な解釈に基づき、それゆえに理論の発展の後の段階で変更する可能性のある)これらの仮説の信憑性は別にして、比較的遅い時期の印欧語諸方言において *we と *me とが、すでに方言ごとに相補的な分布にある、双数と複数の形態素として、現れていた⁹⁶。

以上述べてきたことからいえることは、この問題は、未だ多くの不明瞭な点を残しており、簡単には結論を出すのはむずかしいということであろう。したがってガムクレリゼらも、彼の結論にいたる道程をもう少し読者に明確に示すべきであると思われる。とくに彼の結論は、みられるように *ne- についての言及がなく、また *me- を排外形とする点でも、上述したイヴァーノフの結論とも異なっていることを考えれば、この点の考慮がぜひ必要であったと、思われてならない。

§ 195 複数の主格については、すでにメイエが、たとえば pōts に対する *pod-es のように、*-es の語尾を立て、単数属格との違いは、母音交替のいかなる痕跡もない点にあるとしている⁹⁷。これは、ガムクレリゼらによれば、*e/o の交替をとまなうことがないことによって、複数が二次的に形成されたことを立証するものと

される [G&II 282]。これに対して *-m に終わる語形の場合、複数の指標 *-s が附加されるとする。たとえば生物性の複数属格は、単数の *-om に対して複数 は *-oms になるという [G&II 282]。

無生物性の名詞のばあいには、原則としてすでに述べたような「一般格」のみが存在するにすぎなかった。結果として、ガムクレリゼらは、生物性の名詞に対して、次のような祖形を推定する。

	単 数	複 数
活 格	*-s/*-os	*-es
属 格	*-om	*-om-s
不活格	*-[o] m	*-[o] m-s

ヴァイアンは複数属格の語尾について、スラヴ語あるいは古アイルランド語、ウンブリア語などのばあいには *-on もしくは *-om を想定しなくてはならないが、ギリシア語、リトアニア語のようなバルト諸語などでは *-ōn あるいは *-ōm の形をとっていたとせねばならない、またラテン語の -um についてはどちらか判断できない、としている。ここから彼は、この語尾の母音が長音であるものは、幹母音 *-o- に *-on が附加された形 *-o-on の縮約された形ではないかとしている⁹⁸。しかしもしこの語尾が *-oms であったとすれば、語尾の長母音は *-s の脱落による、代償延長の結果であるということになる。

一方シャントレーヌ (Chantraine, Pierre 1899-1974) によれば、ギリシア語の複数対格は、ポエオティア方言、ドーリア方言では *λυκως* のように -ōs の語尾をもつのに対し、テッサリア方言、アルカディア方言などでは -os, レスビア方言では -ois, アルゴス方言では -ons の形をもつとし、これらがギリシア共通語の *-ons に遡るとしている⁹⁹。したがって複数対格については、これはガムクレリゼらの推定した形と一致するが、周知のように古典ギリシア語の複数対格の語尾は -ous である。そうとすれば、この語尾が少なくとも *-s の要素をもっていたであろうことは確認できるものの、ギリシア語では、同じ形の *-ons が、属格と対格とで異なる取り扱いを受けることになる。たとえば *ο* 語幹男性および中性対格の *-om が、スラヴ語で男性と中性で異なる扱いを受ける例もあることは確かであるが、少しく気になるところではある。

§ 196 無生物性あるいは中性名詞のばあい、単数属格はすでに述べたように、*-os の形をもち、他の斜格も漸次構成されてきたが、複数 は本来存在しなかったために、複数の格体系が発生するのは、生物性よりも遅れたとされる。とくに主・

対格は * $\bar{a}$ を語幹とする単数の集合名詞によって補充されたというのが、ほとんど定説になっている。そしてやがて生物性の中から女性が分岐したときにも、この同じ語幹が使用されたというのも、ほとんど定説といってもよい。

たとえばヴァイアンは、中性名詞複数の * $\bar{a}$ について、「この語尾は * $\bar{a}$ に終わるタイプの主格単数の語尾と同じであり、中性複数がかつての単数集合名詞であり、二次的に生物性の複数の変化を斜格にとった……ことがわかる」¹⁰⁰と述べている。

これも周知のことであるが、* $\bar{a}$ の構成をもつ印欧語の古い中性名詞の複数の主語に、しばしば単数の動詞が用いられていることが、これが本来集合名詞であったことの証左であるとされている。たとえば、

Gr.Hom. ὅσα φύλλα καὶ ἄνθεα γίνονται ὥρη

「ように 木の葉(中性複数主・対格) と 花(中性複数主・対格) 生じる(三人称単数) 季節に(与格)」=「木の葉と花が季節に生じるように」

Skr.Ved. dhṛṣṇāve dhīyate dhānā

「勇敢な人に(与格)与えられる(三人称単数中動) 富(中性複数主・対格)」=「勇敢な人には富が与えられる」¹⁰¹

またヴァイアンは、名詞の主格の語尾 * $\bar{i}$ あるいは * $\bar{u}$ の存在からいわゆる schwa indogermanicum の * $\bar{a}$ の存在をここにみている¹⁰²。ガムクレリゼらが、この要素を * $\bar{a}H$ に遡るとしているのも、このような事情に基づいていると考えられる。イヴァン・ドブレフ(Добрев, Иван 1938)の『古代ブルガリア語文法』¹⁰³には「始原的名詞接尾辞 - H_2 -」という項が設けられている¹⁰⁴。 H_2 というのは、いわゆる * $\bar{a}_2$ にあたるものであるから、上述した印欧語の * $\bar{a}$ は * $\bar{e}H_2$ の形をもつことになる。これについてドブレフは次のようにいう。

……語尾の * $\bar{a}$ は、* $\bar{e}H_2$ に由来するもので、 H_2 指標を含む——単・主・対 $\text{иго} < *_{\text{jug-o}}$ と複・主・対 $\text{ига} < *_{\text{jug-e-H}_2}$ は、同一接尾辞を含んでいるが、ただし二つの異なる階梯である対応階梯(i.e. いわゆる $\circ$ 階梯)と正常階梯(i.e. e 階梯)としてである。 ига の原形においては、正常階梯の接尾辞の後ろに、非分割(一括)多数性指標 H_2 があつたのである。我々は、この指標を、中性複数主・対格形の指示代名詞 $\text{си} < *k'-i-H_2$ にもみておかななくてはならない。cf. 男・単・主, сь 「これ」 $< *k'-i-s$; $\text{си} < *k'-i-H_2$ は女性単数主格でもある。言い換えれば、女性単数主格と中性複数主・対格 $\text{си} < *k'-i-H_2$ の、男性単数主格 $\text{сь} < *k'-i-s$ 「これ」に対する関係は、女性単数主格と中性複数主・対格 $\text{та} < *t-e-H_2$ の、男性単数主格 $\text{тъ} < *t-o-s$ に対する関係と同じである。

ガムクレリゼらはこの議論を一步進めて、女性名詞の単数主格の語尾を *-aHs であり、中性名詞の複数主・対格の語尾を *-aH であったとする。ドブレフにしたがえば前者は *-aH₂s 後者は *-aH₂ ということになる。しかしガムクレリゼらは、女性名詞の単数主格における要素 *-s の存在についての資料的な証明は、試みていないようにみえる。彼らはこの両者が混同されて、ともに *-ā の語尾をとるに至ったというのである。この仮説は、とくに生物でないものについて、なぜ女性名詞になったか説明できない例が多く存在することに、一応の説明を与えることができるが、立証がむずかしいというらみが残ることは否めない。

§ 197 ガムクレリゼらは、ヒッタイト語において ammel「私の」、tuel「おまへの」、apel「彼の」のような独立の所有代名詞に対して、前倚辞の -miš, -mit「私の」、-tiš, -tit「おまへの」、-šiš, -šit「彼の」のような系列が存在し、前倚辞の系列がたとえば attas-miš「私の父」、ešhaš-miš「私の主人」、keššaras-miš「私の手」、ker-met「私の心」、laman-mit「私の名前」、pir-mit「私の家」のような名詞につくことを挙げて、前倚辞の系列が非分離所有を、独立の所有代名詞の系列が分離所有を表していたと主張する [G&II 289-290]。

ここに挙げられた例のみからすれば、確かにクリモフのいう、非分離所有のばあいには前倚辞の系列が対応しているかにみえる。しかしたとえそうであったとしても、この結論がもしヒッタイト語のみに基づいているとすれば、これはいささか大胆にすぎるように思われる。また、たとえばローゼン克蘭ツ (Rosenkranz, Bernhard 1903-) の、「古ヒッタイト語は前倚辞の所有代名詞を持っているが、新帝国の言語はその代わりに人称代名詞の属格の形を用いている。他の言語において所有代名詞が確認されることから、これは人称代名詞の斜格に依拠した新しい形成物であろう」¹⁰⁵として、これを時代的に異なる層に属するものとする見解もある。いずれにしてもこの問題については、専門家の研究をまつほかはない。

また著者らは人称代名詞の一人称複数の主格形が、たとえば Skr. vayām, Av. vaēm, Got. weiš, Hit. weš, Tokh. B wes, Lit. mēs, Sl. my, Arm. mek のように、言語によって、あるいは *wei-/ *wes- を、あるいは *mes のような形を想定させるのは、前者が包含形を、後者が排外形を表していたと考えれば、よく理解できるという。そうすればたとえばリトアニア語の双数形 vè-du, あるいはスラヴ語の vě, ギート語の wit なども、包含形 *wei-/ *wes に来由するものとして、よく理解できることになる [G&II 291-293]。この点に関しては、すでに述べたようにヲトキンスもこの説をとっている¹⁰⁶。

§ 198 印欧祖語が活格言語であるとすれば、当然、動詞も、少なくとも活格動詞と絶対動詞、ないしは不活格動詞の二種に分かたれなければならない。ガムクレリゼらは、これについて次のように述べている。

最古の印欧語の状態について再構成される、活性・不活性という特徴による名詞の二分類法は、名詞変化の体系のすべての構造的包含事象を伴うが、これは当然、動詞およびそれから派生したもののすべてを、二つの構造的・意味的クラスに分けるという結果に導く。もっぱら活性の行為者と結びつく活格動詞のクラス、および統語的に不活性の名詞と結びつく、不活性動詞のクラスである。

このように、名詞の二分法的分類によって誘導された二つの部分集合に動詞の集合を分割することの結果、動詞が表す意義が活性のものであるか、不活性のものであるかという、二つの基本的なクラスによって、自然に動詞の諸形式の類別ができてくる [G&II 293].

印欧語の動詞諸形式の分類の初原的な原理は、名詞の分類とは無関係な動詞の諸形式の意味的な対立原理によって、動詞を他動詞と自動詞に分けることなく、それらが表すのが動詞の行為であるか、状態であるかという性格によって、動詞を活性のクラスと不活性のクラスという、意味的に誘導された分類を行うところにある [G&II 294].

ガムクレリゼらは、このような認識に立って、印欧語のいわゆる MI 変化を活性動詞 (活格動詞) のクラス、HI 動詞を不活性動詞 (絶対動詞) のクラスと考える [G&II 296 & seq.].

周知のように、印欧語の語尾には、いわゆる一次語尾と二次語尾とがあるとされ、その形は能動形では次のように指定されていた。

		一次 語 尾	二次 語 尾
単 数	一人称	*-mi *-ō	*-m
	二人称	*-si	*-s
	<u>三人称</u>	*-ti	*-t
複 数	三人称	*-nti	*-nt

よく知られているように、印欧語の名詞および動詞は、いわゆる語幹形成母音 *e/o をともなう語幹によって変化形がつくられるテマティック動詞と、これを

もたないアテマティックな動詞とに分かれる。一次語尾の単数一人称に二つの形がみえることに関して、メイエは **-ō* の形をアテマティック動詞のばあい、**-mi* の形をアテマティック動詞のばあいとしている¹⁰⁷。たとえば Gr. *εἶμι* 「ある」 < **es-mi* に対する Gr. *φέρω*, Lat. *ferō*, Got. *baíra* 「運ぶ」 < **bher-ō* など。

すでに述べたように、メイエの時期の比較文法は、未だギリシア語、サンスクリットが、祖形の再構成に際して決定的な意味をもつとされている時代から、完全には脱却してはいなかった。メイエ自身も、能動の語尾というタイトルの下に、括弧つきで「ギリシア語とインド・イラン語派における」という断り書きをつけている。

一次語尾と二次語尾との区別であるが、前者は直説法現在(未来)、後者は直説法未完了過去とアオリスト、および希求法に用いられるとされていた。また接続法のばあいにはそのいずれの語尾が用いられるかは、定まっていなかった¹⁰⁸。

いわゆる中動の語尾は、メイエによって同じようにして次のように措定された¹⁰⁹。

		一次語尾	二次語尾
単 数	一人称	* <i>-(m)ai</i>	* <i>i(?)</i>
	二人称	* <i>-sai</i>	* <i>-so</i>
	三人称	* <i>-tai</i>	* <i>-to</i>
複 数	三人称	* <i>-ntai</i>	* <i>-nto</i>

一次語尾と二次語尾の区別は、言語によっては、あまりはっきりしないものがある¹¹⁰。

二次語尾の単数一人称の **-i* に疑問符が附されているのは、たとえばサンスクリットでは *á-bhare* 「私は運んでいた」 < **e-bher-o-i* のようになるのに対して、ギリシア語では *ἐφερόμην* 「(やっと) 到達しつつある」 < **e-bher-o-mān* のように、**-mān* の語尾をもっているというように、インド・イラン語派とギリシア語でも、すでに語尾が異なっているからである。

§ 199 少なくとも能動形の人称語尾において、従来一次語尾といわれてきた、**-mi*, **-si*, **-ti*, **-nti* などが、二次語尾といわれてきた **-m*, **-s*, **-t*, **-nt* に要素 **-i* が附加されて、二次的に形成されたものであることは、いろいろところで指摘されている。たとえばパロウは、

-m, *-s*, *-t*, *-an(t)* の系列と、一次語尾の *-mi*, *-si*, *-ti*, *-anti* との相互関係は、現在時称の指標としての小辞 *-i* が、後者の系列の二次的な附加物であると仮定するば

あいにも、説明できる。同じように命令法の語尾 *-tu*, *-antu* においては、小辞 *-u* が同じ基本語尾に附加される。これはとくに、次のことから明らかになる。この同じ要素 *-i* と *-u* は、たとえばギリシア語の *φέρει* (*φερει* + *i*)、ヒッタイト語の *šakki* 「知っている」、およびヒッタイト語の *-hi* クラスの命令法の形 *aku*, *dāu* (*ak-*「死ぬ」、*dā-*「取る」) のように、人称語尾をもたない形に独立して現れるのである。この *t-* などに対する *-i* の附加は、二次語尾しか存在しなかったより古い時代があったことを、物語っている。「一次語尾」の体系、すなわち現在時称は、過去諸時称の「二次」語尾に基づいてつくられたのである。オーグメント (*augment*, 過去を示す接頭辞 *a-* で、第二次語尾をとまう時・法の語根部の前に附加される *a-*¹¹¹) のない過去時称とインユンクティブ (すなわちオーグメントをもたない未完了過去とアオリスト) は、印欧語の現在・アオリスト体系の第一次の基礎をなしている。

一次語尾と二次語尾との相違が印欧語期に完全に成立したというのは、ありそうもないことに思われる。たとえばギリシア語は複数一人称と二人称を区別しない (一次・二次 *-μεν*) が、これは他の言語にも共通している (古代スラヴ語 *nesemŭ*, *nesomŭ*, Got. *bindam*, *witum*, *-budum*)¹¹²。

スラヴ語のばあいにも、青年文法学派以来、アオリストの単数二・三人称の語尾は、この図式によっていたと思われる。スラヴ語においては、周知のように、アオリストには大別すれば三種あり、その第一は語根に直接語尾が附加される、いわゆる単純アオリストであり、第二は語根に印欧語のアオリストの指標 **-s-* がついて成立した、いわゆるシグマのアオリスト第一形、ならびに、このシグマの前に語幹形成母音がつく、シグマのアオリスト第二形がこれである。単純アオリストのばあい、たとえば、*idti* 「行く」 < **ei-dh-* は、*idŭ* < *-om*, *ide* < **-e(s)*, *ide* < **-e(t)* のようになるという。ベセーザナ・ネヴズドロヴァ (Беседина-Невздорова, Вера Павловна) は、単数二・三人称の *ide*, 複数三人称の *idŭ* のような形について、明示的にこれらが「開音節の法則によって」、それぞれ **-es*, **-et* および **-ont* から、末尾の子音を脱落させることによって成立したものとしている¹¹³。1966年に出版されたヴァイヤンの『スラヴ語比較文法』の第3巻においても、この点については変更がない¹¹⁴。またこの形は、レスキーンによれば、単数二・三人称を除いて、母音度が *e* 階梯である動詞からはつくられないという¹¹⁵。シグマのアオリストの第一形は、語幹末の子音によっていくつかの下位分類されるが、たとえば *vedŭ* 「導く」のばあい、レスキーンのいう制限によって単数二・三人称以外は *e* 階梯をとることができず、延長階梯となって、*vēsŭ* < **wē-s-om* < **wedh-s-om*, *ved-e* < **wedh-es*, *vede* < **wedh-et*, *vēsŭ* < **wedh-s-ent* のようになることになる。またシグマのアオリスト第二形は、語根に語幹形成母音が付加されるもので、たとえば *rekŭ* 「言う」は、*rekoxŭ* < **rek-o-*

s-om, reče < *rek-es, reče < *rek-et, rekošę < *rek-o-s-ent のようになる。上述したことから明らかなように、アオリスト時称の全体を通じて、単数二・三人称の形は、語根アオリストからの借用である。これらのアオリストは、その構成から明らかなように、単純アオリスト、シグマのアオリスト第一形、シグマのアオリスト第二形の順に、新しい形であることが、容易に推定される。

古スラヴ語の古層をなす一定の動詞において、シグマのアオリストの二・三人称に *-t* の形がみえることに関して、これが印欧語の完了形の単数二人称の語尾 **-stha*, (Skr. *vêthta*, Gr. (F) *oĩσ-θα*, Got. *wais-t* 「おまえは知っている」) に対応するという考えもあるが、**-stha* ならば *-to* になるはずであること、およびスラヴ語の語根の形が、印欧語の完了形に特徴的な *o* 階梯をもっていないことから、ヴァイヤンはこのような考えを排して、単数三人称の語尾 **-t* が、リエゾンのような特殊な環境のもとで残り、それが語尾を失った単数二人称に一般化したと考えている¹¹⁶。しかしこの説明には無理があるように思われる。

§ 200 一方ヒッタイト語の解説と、この言語の研究の進展の結果、この言語では、動詞の構造は、それ以前にギリシア語あるいはインド・イラン語派の事実から推定される、印欧祖語の構造とはかなり異なっており、非常に単純であることが、明らかになってきた。たとえば数は単数と複数の二数のみであり、双数の痕跡がみられないこと、時称が現在と過去の二時称のみであること、能動と中動の形はあるが、受動の形が欠けていること、などがその主なものである¹¹⁷。また他動詞変化については、この言語ではいわゆる MI 変化と HI 変化の対立がみられる。これはおおよそ次頁に挙げるようなものである。

ここで現在形の語尾にしばしば認められる、選択的な要素 *-ti-* と *-ri-* のうち、*-ti-* は、ヲトキンスによれば、印欧語の小辞 **dhi* に起源をもつものであり、*-ri-* はイタリア語派、ケルト語派の *-r* と同じ来源をもつとされる¹¹⁸。

§ 201 イヴァーノフによれば、内的比較の方法によって、印欧祖語の動詞に、ヒッタイト語にみられるような二つの系列が存在していることを、最初に指摘したのは、1907 年のペデルセンの論文であったという¹¹⁹。彼はその後、ヒッタイト語が解説されたのちの 1933 年に至って、この説を発展させた論文、「印欧語とウグロ・フィン語との親近性の問題に寄せて」¹²⁰を発表したという。この時期にはペデルセンは、両者の対立を他動詞と自動詞の対立であるとし、ヒッタイト語の資料に基づいてこれを単数 **-m(i)*, **-s(i)*, **-t(i)* および複数三人称 **-(e)nt(i)* の系列、

能 動 形				
			MI 変 化	HI 変 化
現在	単数	一人称	-mi	- <u>he</u> , - <u>hi</u>
		二人称	-ši	-ti
		三人称	-(z)zi	-i (まれに -ai)
	複数	一人称		- <u>u</u> eni (- <u>u</u> ani)
		二人称		-teni
		三人称		-(a)nzi
過去	単数	一人称	-un, -nun	- <u>h</u> un
		二人称	-ši (-t, -ta)	-ta, -ši, -ta
		三人称	-t, -ta	-š, -ta, -šta
	複数	一人称		- <u>u</u> en
		二人称		-ten
		三人称		-er

中 動 形				
			MI 変 化	HI 変 化
現在	単数	一人称	- <u>h</u> a	- <u>h</u> a(ri), - <u>h</u> a <u>h</u> a(ri)
		二人称	-ta	-ta(ri), -ta(ti)
		三人称	-(t)a	-(t)a(ri)
	複数	一人称	- <u>u</u> ašta, - <u>u</u> ašta(ri)	- <u>u</u> ašta(ti)
		二人称	-duma, -tuma(ri)	-dumat
		三人称	-anta, -anta(ri)	
過去	単数	一人称	- <u>h</u> ati, - <u>h</u> a <u>h</u> ati	- <u>h</u> at, - <u>h</u> a <u>h</u> at
		二人称	-tati	-tat, (-ta)
		三人称	-(t)ati	-(t)at, (-ta)
	複数	一人称	- <u>u</u> aštati	- <u>u</u> aštāt
		二人称	—	-dumat
		三人称	-antati	-antat ¹²¹

ならびに *-a/-ō, *tha/-e(i), *-e/-e(i) および *-r¹²²の系列であるとした。彼によれば前者はもっぱら他動詞的な意味をもち、後者は自動詞的な意味をもつとされた¹²³。そして彼は後者の系列にテマティックの変化、ヒッタイト語の HI 変化、他の印欧諸語の完了形が遡るとしたという¹²⁴。

一方、イヴァーノフによれば、1932年にスタング (Stang, Christian Schweigaard 1900-1977) とクリヲヴィッチとが、まったく別々に、印欧語、とくにヒッタイト語の中動相の語尾が、結局のところ完了形の語尾と同じものであることを発見した¹²⁵と

される。しかしペレリムーテルによれば、完了形が本来相的意義をもつものであったとする主張は、印欧語の完了形と中動相の語尾が相互によく似ており、一部共通していることが明らかになってきた 30 年代から、行われるようになり¹²⁶、最近になってこの問題はさらにクリョヴィッチ、バーデル (Bader, F.) によって、論じられたが、「上述の観点の擁護者によって利用されている論点は、完全に証明されたものではなく、これに対しては重大な反論が可能であ」って、「印欧語の完了形の人称語尾と印欧語の中動の人称語尾とがどれぐらいたがいに似ているかという問題は、まだ解決にほど遠い」¹²⁷としている。

イヴァーノフによれば、一方ではヒッタイト語が印欧語の古層を知る上で鍵となる位置にあること、「……およびとくにヒッタイト語において *mi* に終わる語根動詞と *hi* に終わる語根動詞が対立していること、また他方ではアーリア・ギリシア語の持続的語根とアオリスト語根が対立していることに基づいて、印欧語の動詞に二つの系列が存在するという理論が 1957 年に提起され、後に印欧語、並びにバルト語およびスラヴ語に関して展開された」¹²⁸という。彼はこれにあたるものとして彼自身の論文 5 点、彼とトポロフ (Топоров, Владимир Николаевич 1928-) の共著になるもの 1 点、トポロフのもの 2 点を挙げている。これらはいずれも 1957 年から 1968 年の間に書かれたものである¹²⁹。

§ 202 たとえばトポロフは、1961 年に発表した論文「スラヴ及びバルト語の動詞の発達の問題によせて」¹³⁰において、印欧語比較文法における、ギリシア語およびインド・イラン語派の支配的な位置を否定すれば、祖形の再構成が、従来認められてきたものとは、異なったものになる可能性のあることを論証しようとした。

従来の研究方法によれば、「……バルト語およびスラヴ語の形のかなりの部分は、上述した古代諸語の対応する形に、一方的に依存するものであることになり、対応のないバルト語およびスラヴ語の諸事実が、新たに生成したものとして取り扱われたために、印欧語の状態の再構成、とくに動詞の分野にとって、それらをもつ意義が、概して非常に小さいものになった。何らかの意味をもつものは、他の古代諸語にも存在していたからである」¹³¹と彼はいつている。

この中で著者は、バルト諸語とスラヴ諸語にはインド・イラン諸語やギリシア語にみられるような、一次語尾と二次語尾の整然とした対応はみられないが、アテマティックとテマティックの対立はよく知られていたとし、テマティックの動詞の三人称単数の語尾とされる **-t* について、次のように主張している。すなわち、

バルト諸語では、三人称単数に対して、通常語尾 $-t$ を想定し、語末の音韻変化によってのちに消滅するとする。トラウトマン (Trautmann, Reinhold 1883-1951), エンゼリン (Enzelins, Jānis 1873-1961), スタング (Stang, Christian Schweigaard 1900-1977), オトレンブスキー (Otrębski, Jan 1889-1971) およびその他の、この問題について書いている学者達も、そう考えている。もちろんバルト諸語自身に $-t$ の痕跡すら、示唆するものがあるだけでなく、ここに $-t$ が存在しなかったことを示す、いくつかの事実が存在することから、言語学者は、他の印欧諸語の、既知の資料から出発する。もしこれこれの言語において三人称単数に $-ti$ と $-t$ があり、バルト諸語では、(アテマティックの変化の) $-ti$ があるとすれば、いまでは語尾のない形をもつ現在三人称単数にも、 $-t$ があったに違いない、というのである。

これと関連して、一見したところではこの点でバルト語の諸方言とは本質的に異なっているようにみえるスラヴ諸語も、想起される。しかしこのような行論は、正しいとはいえない。たとえいくつかの、 $-t$ を保存、使用するための保守的な条件が存在しているときにすら、三人称単数の形の一つとして、この $-t$ の痕跡をとどめるものはない。少なくとも かなり長い期間にわたって、三人称単数に $-t$ を想定することは、疑いもなく不可能である¹³²。

ここからトポロフはさらに論を進めて、 $*-mi : *-si : *-ti = *-m : *-s : x$ という比例式から $x = *-t$ という形が得られるにしても、そのためには $*-m$ および $*-s$ という比例の項が正しくなければならないとする。「しかし実際にはバルト諸語には、現在も、また文字以前の時期にも、我々が知る限り、一人称単数において $-m$ (あるいは $-m$ に由来する $-n$) は存在しなかった。このことはおそらく皆が同意するであろう。そのかわりに一連の印欧諸語によく知られている、 $-o$ 変化が存在するが、これが古いものであることには、いかなる疑いもない。ラリングル理論の業績に照らして明白になった新しい資料も、また古代に $-o$ 変化が、たとえばアヴェスタの $-barā$ に対する古代インド語の $bharāmi$ のような、外ならぬインド・イラン語派に認められる語尾に対して、優越していたことを示すすでに以前から知られているいくつかの事実が、このことを物語っている」¹³³と、彼はいう。

次に「アテマティック変化の二人称単数に関していえば、この場合にも我々は $-s$ を示唆するどのようなものも、見出せない。この $-s$ を通常想定するのは、すでに語尾 $-t$ の分析に関連して批判したのと同じ考え方に起因している」¹³⁴と著者は指摘している。

以上から、 $x = *-t$ とすることは、はなはだ疑わしいということになり、もしそうとすれば、 $*-m$ 、 $*-s$ という項そのものについても、再検討の必要がでてくる。著者は東バルト諸語の二人称単数の $-ie < *-ei$ から、ギリシア語の現在二人称単数

-eiς あるいは古アイルランド語の *berī* < **berēi* のように¹³⁵、かつて *-*eis* の形が存在していたとしても、要素 -*s* は後で附加されたものにすぎないとする。トポローフは、スラヴ語の -*si* の形は、アテマティックの *-*si* と *-*ei* の混同の結果であり、これはたとえばプロシア語の -*sei/sai* が、*-*si* と *-*ei* の混同の結果であると思われることと、並行しているという。ここから彼は「……すべてのバルト諸方言のばあい、すでに 40 年前にエンゼリンが指摘したように、現在二人称単数 *-*ei* から出発しなければならない」という。

§ 203 三人称単数については、彼は次のようにいう。

バルト諸語のテマティック変化の現在単数一人称にも、また二人称にも、アテマティック変化の、同じ人称に認められるものと並行する語尾が存在しなかったとすれば、スタングが考えたように、アテマティック変化の -*i* に対応する、テマティックの動詞の単数三人称に、かつて -*i* が存在していたとすることはできない。ここでは中・受動相のいくつかの動詞において、ヒッタイト語の -*hi* (H) 変化の単数三人称で語尾が欠けていること、古代ギリシア語の単数三人称の -*ei* で終わる形を引くことができよう。このばあいかつて -*i* が存在したとしても、それは二次的な要素であった。

これらすべての事実、および一連の他の事実は、我々が知っている印欧語の諸方言の発展の最も古い時期に、現在三人称単数の機能をもって用いられた、語幹だけの形が存在していたことを示している。……現在変化を過去変化と比較すれば、古バルト語期に特徴的であったのは、次のような変化の図式、すなわち、-*ō*, -(*e*)*i*, -(零語尾) である。このような状態は、バルト語圏にとって、初原的なものであったと考えなければならないであろう。上述の変化のその後の発達の歴史にみられる、いくつかの事実は、このような体系がきわめて古いものであり、少なくともその古さにおいて、インド・イラン諸語、古代ギリシア諸語、あるいはイタリア語派の諸方言から知られているものを、凌駕しているという考えに導く¹³⁶。

このような考えに基づいてトポローフは印欧語に二つの変化系列があったと想定する。そうすれば、たとえばテマティックな変化において、現在単数一人称の語尾が、バルト語では *-*ō* を想定させるのに対し、スラヴ語では *-*ōm* を措定しなければならないことも、*-*mi* と *-*ō* という、二系列の変化語尾の混同に由来すると考えることができる¹³⁷。

トポローフは単数三人称の語尾の *-*i*- という要素は「……文献時代に直接先行する時代に、テマティックのクラスのなかで、(*i* に終わる) 第 4 クラスのみ」にみられ、これがやがて他のクラスにも一般化したのではないかという仮説を提示している¹³⁸。

以上大ざっぱにみてきたように、トポローフのこの論文の意義は、青年文法学派以来伝統的に継承されてきた、印欧語の動詞体系の見直しを迫るところにあったと考えられるが、ここで注目されるのは、アテマティックの動詞が、テマティックな動詞よりも古いものであるとする見解に対して、テマティックの動詞が古い来源をもつこと、ならびに印欧語にはヒッタイト語にみられるように、動詞の変化に二つの系列が存在していたことを、主張していることである。このあとの点に関していえば、たとえヒッタイト語の動詞変化に二つの系列があったとしても、そのことから直ちに、これらの系列が印欧祖語に存在していたことを証することにはならないから、トポローフの内的比較による、スラヴ語に関するこのような主張は、印欧語におけるこれらの語尾の存在を立証するために、ぜひとも必要なものであったと、考えられる。

§ 204 クリラヴィッチは、1964年に書かれた『印欧語の屈折カテゴリー』において、印欧語にはかつて動詞の変化語尾に **-m*, **-s*, **-t* の系列と **-ǵ₂*, **-t*, **-ø* の系列が存在していたこと、そして完了と中・受動 medio-passive との間には密接な連関があり、その関係は能動の現在形とアオリスト形の関係に並行していたことを述べている。すなわち、

単数	能動現在	アオリスト	完了	中・受動アオリスト
一人称	*léukom	*lukóm	*lóuk-ǵ₂o	*luk-ǵ₂ó
二人称	*léukes	*lukés	*lóuk-ta*	*luk-tá*
三人称	*léuket	*lukét	*lóuk-e	*luk-ó

完了形の起源は、著者によれば、機能的に後に **-to-* によって構成されるに至ったものと同じ **-é* による動詞的形容詞の語幹に、**-ǵ₂o*, **-ta** がそれぞれ一人称ならびに二人称に附加されたものであるという。たとえば **ghⁱen-é* 「彼は殺された」、**ghⁱen-ǵ₂ó* 「私は殺された」、**ghⁱen-tá** 「おまえは殺された」のようなものである。

本来の機能は著者によれば三つあり、一つは「殺されつつある」のような未完了のもの、第二は「殺されている」＝「死んでいる」のような、状態を表すもの、第三は「殺された」のように、完了的(アオリスト的)なものであるという。

この **ghⁱené* が動詞の体系に組み入れられ、**ghⁱóne* のように変化すると、第一、第二の機能と、第三の機能とが分化し、この形は第一および第二の機能をもつに至り、第三の機能は **ghⁱené > *ghⁱnó* が受け持つようになるという。また第一の機能と第二の機能の分化は能動の語幹が中動に入り込むとともに起こったという。このばあい、最も古い形はそのまま残って、完了形になったというのであ

る。著者が語根 **ieug-*「繋ぐ」によってこれを例示しているところに従えば、次のようになる。

現 在 中 動	* <i>iung-ó</i>	>	* <i>iunk-tó</i>
完 了	* <i>ióuge</i>		
アオリスト中動	* <i>iug-ó</i>	>	* <i>iuk-tó</i> ¹³⁹

クリヲヴィッチのいうように、完了形と中動形が同じ起源をもち、能動形と対立していたとすれば、前者が状態動詞あるいは自動詞に由来し、後者が行為動詞あるいは他動詞に由来する確率は高いといえることができる。しかしこれが状態動詞と行為動詞の対立であるのか、あるいはまた自動詞と他動詞の対立であるのかについては、これまでの議論でははっきりしないように思われる。

これに対してガムクレリゼらは、**-mi*の系列がたとえば「人が獣を殺す」のように、行為者と被行為者とがともに生物であるときに用いられるのに対して、**-Ha*すなわち **-g₃₀*の系列は、たとえば「人が石をおく」のように、行為者が生物であって、被行為者が無生物であるときに用いられるとする。

また **-Ha*の系列は、一人称 **-Ha*、二人称 **-t^[h]Ha*、三人称 **-e*の形をもつが、このうち三人称の形は本来無生物を意味上の主語とする状態動詞に用いられるものと同じであるとする。したがってこれは本来一人称あるいは二人称の形をもたないはずである。このこと、および一人称と二人称との形を比較すれば、**-Ha*の要素が共通することから、著者らは一人称の形は **-ø-Ha*、二人称は **-t^[h]-Ha*に分解でき、**-ø*は一人称の行為者を表し、**-t^[h]*は二人称の行為者を表す要素であるとする。これに対して **-Ha*の部分は無生物の被行為者を表す要素であるという [G&II 296-299]。

この言語が能格言語ではなくて活格言語に属するものであるという根拠は、おそらく印欧語に広く認められる補充法 suppletivism による動詞の形成にあると思われる。たとえば「存在する」を意味する語根 **es-*は Hitt. *eš-mi*, *eš-zi*, Skr. *ás-mi*, *ás-ti*, Gr. *εἰμί*, *εἶμι*, Lat. *sum*, *est*, Sl. *es-mŭ*, *es-tŭ*のように、**-mi*の系列に属しているが、これに対して同じ意味をもつ語根 **bhuH-*は Skr. perf. *ba-bhūva*, Gr. perf. *πέφϋκα*, Lat. perf. *fuī*, OE *bēom*のように、**-Ha*の系列に属する語尾をとる。これらが完了形に現れることから、これらは元来状態を表す独立の動詞であったと考えるわけである。同様にして、

「横たわる」 **ses-* : Hitt. *šeš-zi*, Skr. *sásti*「眠る」

**k^[h]ei-* : Hitt. *kittari* (中動), Gr. *κεῖται*, Skr. *śéte*

(従来の表記 **kei-*)

「立つ」*st^[h]aH- : Gr. ἵστημι, Skr. tísthati, Av. hištaiti, Hitt. tiyami

(従来の表記 *stā-)

*or- : Hitt. arḥaḥari「起きる」, Gr. ὄρω, Lat. orior「起きる」

「座る」*es- : Hitt. eš-zi, Gr. ἵσταται, Skr. āste

*set'- : Skr. śāda(完了)[G&II 295]

(従来の表記 *sed-)

これらの語根が、下位諸方言において一つの動詞の変化形式に統合されている事が多く、語彙的意義が同じか、きわめて近いものであった可能性が強いことは、確かである。しかしこの現象について何か確定的なことをいうにはまだ時期が尚早であるような印象を与える。

序にいえば、クリモフは、印欧語がかつて活格言語であった可能性に触れ、*-sをもつ格と、これをもたない格の対立が活性のクラスの名詞にのみみられ、不活性のクラスの名詞においては、この対立が中立化すること、時称の体系は比較的遅い時代のもので、アスペクトが初原的なものであったと思われること、「行く」、「来る」、「走る」、「運ぶ」、「導く」、「取る」、「食べる」、「言う」、「打つ」、「在る」などの動詞にスプレティズムがみられること、ヒッタイト語において古い属格の語尾 *-om > -an が活性の名詞にのみみられること、またこのことから印欧語は能格言語というよりは活格言語であったと考えられることなど、活格言語にみられるさまざまな特徴が認められることを述べているが、断定は慎重に避けているように思われる [KTA 207 & seq.]。

6

ま と め

§ 205 以上ガムクレリゼおよびイヴァーノフの共著になる、『印欧語と印欧人』の第1部の内容を、内容的類型学の応用という点から概観してきた。現在印欧語比較文法は、いろいろな新しい資料、とりわけアナトリア諸語の資料導入とその研究の進展にともなって、激しい勢いで研究が進められているように見受けられる。このような時期には、多くの研究者がさまざまな仮説や新説を提示することが多くなるのは当然であり、したがってこれを専門にする学者でなければ、これらのすべてを視野に入れることができない以上、何らかの見解を述べることはむずかしいと思われる。しかし新説を唱えるためには、従来の通説を吟味し、なぜ

従来の説を排して、新説を立てねばならないかを、論じる必要があろう。モノグラフの場合には、対象とする研究者において、すでに細かな専門的知識の存在を前提とすることができるが、本書のような単行本のばあいには、やはりその点の配慮が望まれる。このことは、音声に関する部分では、かなりの程度に実現できていると思われるが、形態論においてはきわめて不十分といわねばならない。敢えていえば、印欧語が活格言語であるという前提から、すべての論述がなされていると思われるのである。本書に散見される定言的な叙述の当否は、今後専門家の判断に委ねなければならないが、著者らが内容的類型学をどのように比較言語学に適用しようとしたか、という点については、成功不成功は別にして、本書の試みはきわめて興味深い。内容的類型学に興味をもつものにとって、本書の意義はまず第一にこの点にあるといえよう。

類 型 学 序 説

跋・註・索引

跋

これは、京都大学学術出版会の1992年の理事会において出版が決定されたと聞いており、また同会の新刊予告にも載せられていたが、このように出版が遅れたについては、一応の釈明が必要であろう。この原稿を完成原稿の形で出版会に渡したのは、1993年の4月であったが、その後出版会の都合もあったのであろう、出版の運びとならなかった。そこで出版会の八木俊樹氏に了承を得た上で某出版社に依頼し、平成6年度の出版助成金の申請を行ったが、不幸にして不採用になった。その間を利用してできるかぎりの補足を行ったが、一つにはプライオリティーの問題もあり、またいつまでもこれにかかざらわっている、身を入れて次の仕事に専念できないということから、とにかく発表することにした。各方面から、引用の都合もあり、早く印刷して欲しいという要望が多く寄せられたことも、動機の一つとなっている。そこで再度八木氏に問い合わせかたがたお願いをしたところ、早急に出版することになった。

なお本稿の校正および索引の作成は研究室の木下晴世氏の手を煩わした。記して感謝する次第である。また名古屋大学言語文化部助教授柳沢民雄氏には綿密に原稿に目を通していただいて、数多くの誤植や訂正の箇所を指摘して戴いたことも忘れられない。本書がなったのは、偏にそのほか名古屋大学言語文化部教授中条直樹氏、大阪外国語大学教授石田修一氏その他の御協力の賜である。そのほか京都大学大学院の院生李長波氏、同学文学部学生田中大氏にも誤植の指摘をいただいた。なお引用文献の著者名については、和洋を問わず、敬称をいっさい略させて戴いた。御断りしておきたい。

一九九四年八月十九日

著 者 識

引用文献略号

本文中に括弧〔 〕によって示した略号は次のとおりである。

- DS ——— Десницкая, А.В., *Сравнительное языкознание и история языков* (『比較言語学と諸言語の歴史』), Л., 1984.
- G&I ——— Гамкрелидзе, Т.В., Иванов, В.В., *Индоевропейский язык и индоевропейцы* (『印欧語と印欧人』), Тбилиси, 1984, ч.1.
- GI ——— Гухман, М.М., *Историческая типология и проблема диахронических констант* (『歴史的類型学と通時的コンスタントの問題』), М., 1981.
- КО ——— Климов, Г.А., *Очерк общей теории эргативности* (『能格性の一般理論』), М., 1973.
- КТА ——— Климов, Г.А., *Типология языков активного строя* (『活格言語の類型学』), М., 1977.
- КТИ ——— Климов, Г.А., *Типологические исследования в СССР. 20-40-е годы* (『ソヴェトの類型学研究. 20-40年代』), М., 1981.
- КР ——— Климов, Г.А., *Принципы контенсивной типологии* (『内容的類型学の諸原理』), М., 1983.
- MG ——— Мещанинов, И.И., *Глагол* (『動詞』), Л., 1982.
- RM ——— Ревзин, И.И., *Метод моделирования и типология славянских языков* (『モデル化の方法とスラヴ語の類型学』), М., 1967.
- SC ——— Sapir, E., *Culture, language and personality, Selected essays*, Berkley-Los Angeles, 1958. (平林幹郎訳『言語・文化・パーソナリティー——サピア言語文化論集——』北星堂書店, 1983).
- SL ——— Sapir, E., *Language: An introduction to the study of speech*, New York, 1949. (泉井久之助『言語——ことばの研究』紀伊國屋書店, 1957).

第 1 部

1. Karl Wilhelm von Humboldt, *Ueber die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts*, Berlin, 1836; 亀山健吉訳『言語と精神』法政大学出版局, 1984, p.173.
2. フンボルト著, 亀山健吉訳『言語と精神』p.186.
3. *idem*, p.187.
4. 日本語でしばしば「複数」的な意味をもって用いられる「たち」や「ども」という要素は、必ずしも複数性を純粹に表しているものとは思われない。小学館の『日本国語大辞典』によれば、「たち」は「人を表す名詞・代名詞について、複数を表す。また、そのすべてのものを含む意も表す。上代では、神・天皇・高貴な人に限られたが、時代が下がるにつれて範囲が拡大し、丁寧な表現として用いられるようになった。「ども」「ら」に比べて敬意が強い」とし、やがてこれが「複数の意が薄れ、軽い敬意

を表す」ようになり、ついには「敬意を失って目下の者、一人称の代名詞、また擬人化して動物などにも用いる」ようになった、とされている。

これに対し「ども」は「名詞・代名詞について、そのものを含めて、同類の物事が数多くあることを示すが、必ずしも多数とは限らないで、同類のものの一、二を指してもいい。人を表す場合は「たち」に比べて敬意が低く、目下、または軽侮すべき者たちの意を含めて用いる。現代では、複数の人を表すのに用いられることが多い」ほか、「自称の代名詞、または自分の身内の者を表す名詞につけて、単数・複数にかかわらず、謙遜した表現として用いる」という。筆者自身の見聞であるが、長女が生まれた頃、先生のお宅にうかがうと、奥様が必ず「お子たちは？」とたずねられた。また同じころ、大阪のさる一流といわれるデパートについて商品についていろいろ質問をしていると、売り場主任の男性がいちいち「手前どもでは」という言葉を枕にしていたのが、生きた言語としての使用であったがために、ひどく印象的であった。ともに昭和40年ころのことである。

5. アンドレ・マルティネ編、泉井久之助監修『近代言語学大系第4巻——言語の構造』紀伊國屋書店、1972、p.38.
6. Greenberg, Joseph H., Jenkins, J.J., Osgood, Ch.E., Memorandum concerning language universals, *Universals of language, Report of a conference held at Dobbs Ferry*, New York, April 13-15, 1961, ed. by J.H. Greenberg, Cambridge (Mass.), 1963; 露訳、Меморандум о языковых универсалиях, *Новое в лингвистике* (『言語学の新しい動向』), вып.5, М., 1970, pp.31-44.
7. Greenberg, J.H., Language universals, with special reference to feature hierarchies, *Current trends in linguistics*, ed. by T.A. Sebeok, v.3: Theoretical foundations, The Hague-Paris, 1966.
8. 主としてアメリカにおいて行われているこの言語的普遍の要を得た概説は、Успенский, Б.А., *Проблема универсалий в языкознании* (『言語学における普遍の問題』), *Новое в лингвистике*, вып.5, М., 1970, pp.5-30. にある。

これは言語的普遍の特集号である。日本では「言語類型論の新展開」を特集した『月刊言語』1982, v.11, No.11, pp.24-26 がある。これに載せられた柴谷方良の「言語類型論の展開」は、類型論的アプローチを「個別化を目標とするアプローチ」, 「分類を目標とするアプローチ」および「一般化を目標とするアプローチ」の三種に分けている。このうち第一のものと第二のものとの関係が、彼の規定しているように、「個別化を目標とした類型論が一言語全体を何々タイプと類型化するのに対し、分類及び一般化を目指す類型論は特定の特徴を基準に、「この特徴に関しては、この言語はどのタイプである」というように、特定のな類型化を基本としている」ということだとすれば、両者とも、根本の理論においてはさほど異なったものではないといってよいであろう。

第三のアプローチは、「種々の言語特徴の起こり方、つまり分布を中心に言語タイプを識別し、各タイプを通してみられる一般的な法則を追求し、人類言語全体に対する一般性、すなわち言語の普遍的特徴 (language universals) を把握しようとするもの」であるという。このアプローチの代表的な研究者としては、さきに述べたグリーンバークが挙げられる。たとえば、Greenberg, J.H. (ed.), *Universals of language*, Cambridge (Mass), 1963; *Language typology: a historical and analytic overview*, The Hague, 1974; *Universals of human language*, v.1: Method and theory, Stanford, 1978. このほか著名なものとして、Comrie, Bernard, *Language universals and linguistic typology*, Blackwell, 1981 などがある。

9. これはクリモフ、グリーンバークの類型に対する定義の違いに帰着する。グリーンバーク自身、彼の言語的普遍に基づく言語類型学による言語の分類が、比較言語学による語族の概念のように、絶対的なものであるとは思っていないと思われる。クリモフ自身が引用しているところによれば、グリーンバークは次のように述べているという。

類型的分類は「一連の仮に選んだ特徴によって種族进行分类するのに似ている。たとえばもし母音の対を区別する特徴として、円唇の存在あるいは欠如という、純粹に音声的なクリテリアを選んだとすれば、世界の言語は二つのグループに分かれるであろう。すなわち、この対立原理が用いられている言語と、用いられていない言語である。英語とイタリア語は円唇化を利用しないから、無数の他の言語とともに、一つのクラス A に属する。……一方フランス語とドイツ語は、それよりは少ない、さまざまな地域の言語とともに B のクラスに属する。……もし何か別の類型的特徴、たとえば名詞に従属

- する属格の位置を選ぶと、また二つの言語クラスが得られる。しかしこれらは円唇化母音と非円唇化母音の対立というクリテリアに基づいて得られたものとは一致しない。二つのファクターを考慮すれば、四つのクラスが得られる……要するに、系譜的分類と異なり、この、すなわち類型学的分類のばあいには、比較に用いられた言語現象の数と選択の仕方によって、言語グループの数は異なることになる」(『言語の形態的類型学への数量的アプローチ』Квантитативный подход к морфологической типологии языков, *Новое в лингвистике*, вып.3, М., 1963, pp.62-63[КР 25-26])。
10. ヴィルヘルム・トムセン著、高谷信一・泉井久之助訳『言語学史』弘文堂、1954, pp.96-97。(仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。漢字一部訂正)
 11. クレオール型およびサビール型の言語については、上掲の『近代言語学大系第4巻——言語の構造』の第7章および第8章のピエール・ペレゴの記述を参照。
 12. 以下は『近代言語学大系第4巻——言語の構造』の第7章および第8章に収録されている、ピエール・ペレゴの「サビール型言語」(pp.219-233)および「クレオール型言語」(pp.235-249)によっている。ともに小畑明訳である。詳細についてはこれを参照されたい。
 13. Mathesius, Vilém, Kam jsme dospěli v jazykozpytu, *Čeština a obecný jazykozpyt*, Praha, 1947, p.25.
 14. イェルムスレウの「機能」の定義は、英訳では次のようになっている。"A dependence that fulfils the conditions for an analysis we shall call a function. Thus we say that there is a function between a class and its components (a chain and its parts, or a paradigm and its members) and between the components (parts or members) mutually. The terminals of a function we shall call its functives, understanding by a functive an object that has function." (Hjelmslev, L., *Prolegomena to a theory of language*, tr. by Whitfield, F.J., The Univ. of Wisconsin Press, 1961, p.33.)
 15. Vachek, Josef, Několik poznámek o pražské škole jazykovědné dříve a dnes (『以前と今日のプラーク言語学派についての覚書』), *Přednášky v XIX běhu letní školy slovanských studií*, Praha, 1966, pp.13-15.
 16. Mathesius, V., O funkci podmětu (『主語の機能について』), *Čeština a obecný jazykozpyt*, Praha, 1947, pp.277-285.
 17. Mathesius, V., O soustavném rozboru gramatickém (『文法の体系的分析について』), *Čeština a obecný jazykozpyt*, Praha, 1947, pp.157-158.
 18. *idem*, p.158.
 19. cf. Mathesius, V., Úkoly srovnávací fonologie (『比較音韻論の諸課題』), *Čeština a obecný jazykozpyt*, Praha, 1947, p.43.
 20. *idem*, pp.160-161.
 21. Mathesius, V., Funkční jazykozpyt (『機能的言語学』), *Jazyk, kultura a slovesnost*, Praha, 1982, p.36. 「共時的なタイプの科学的文法、もしくは記述文法——古い言語学においてはこの呼び名は侮蔑的な響きをもっているが——は、所与の時期に所与の言語にみとめられるすべてのものの、詳細で厳密な目録であるか、あるいは目録であることを目差していた。言語性格学は、目録になった言語現象をその重要性に従って階層化する試みである」。
 22. Mathesius, V., Stylistika a lingvistická charakteristika (『文体論と言語性格学』), *Čeština a obecný jazykozpyt*, Praha, 1947, p.15.
 23. Greenberg, J.H., The Nature and uses of linguistic typologies, *International Journal of American Linguistics (IJAL)*, 1957, v.23, pp.68-77.
 24. 『近代言語学大系第4巻——言語の構造』pp.38-39.
 25. Skalička, Vladimír, K maďarské grammatice (『マジャール文法に寄せて』), *Lingvistické čítanky*, Svazek 3, Typologie—svazek 1, Praha, 1975, pp.5-48.
 26. *idem*, p.8.
 27. *idem*, p.9.
 28. "Unité morphologique non-susceptible d'être divisée en unités morphologiques plus petites"
 29. Skalička, V., K maďarské grammatice, *op. cit.*, p.9.
 30. *idem*, pp.9-10.

31. Skalička, V., K otázkám fonologických protikladů (「音韻的対立の諸問題に寄せて」), *Ž klasického období pražské školy 1925-1945, Prameny české a slovenské lingvistiky*, Řada česká, Svazek 2, Praha, 1972, p.42.
32. Skalička, V., Asymetrický dualismus jazykových jednotek (「言語単位の非対称的二重性について」), *Lingvistické čítanky*, Svazek 3, Typologie—svazek 1, Praha, 1975, p.50.
33. Skalička, V., K maďarské grammatice, p.8.
34. 『近代言語学大系第4巻——言語の構造』pp.39-42; Skalička, V., Zákonitost ve vývoj jazyka (「言語発達の法則性」), *Vývoj Jazyka*, Praha, 1960, pp.40-51.
35. Skalička, V., Typ češtiny (「チェコ語の類型」), *Lingvistické čítanky*, Svazek 3, Typologie—svazek 1, Praha, 1975, p.69.
36. Skalička, V., Zákonitost ve vývoj jazyka, p.75.
37. *idem*, p.82.
38. *idem*, p.41.
39. *idem*, pp.48-49.
40. 『近代言語学大系第4巻——言語の構造』p.39.
41. *Travaux Linguistiques de Prague (TLP)*, Praha, 1966, pp.157-163. チェコ語文によるものは, *Lingvistické čítanky*, Svazek 3, Typologie—svazek 1, Praha, 1975, pp.131-135.
42. Skalička, V., Typologie slovanských jazyků, zvláště ruštiny (「スラヴ諸語, とくにロシア語の類型学」), *Vývoj Jazyka*, Praha, 1960, pp.97-98.
43. *idem*, pp.93-110.
44. Thèses présentées au Premier Congrès des philologues slaves, *Travaux du Cercle Linguistique de Prague (TCLP)*, 1, Prague, 1929, pp.7-29.
45. *idem*, pp.8-9. c) Nouvelles possibilités d'emploi de la methode comparative.
46. *ibid.*
47. Petr Sgall, On the notion “Type of language”; Rudolf Růžička, Some remarks on linguistic typology; Bohumil Palek, Hyper-syntax as a potential typological parameter; V.N. Toporov, Burushaski and Yeniseian Languages: Some parallels; E.M. Uhlenbeck, Peripheral verb categories with emotive-expressive or onomatopoeic value in modern Javanese etc., *TLP*, 4, Études de la phonologie, typologie et de la linguistiqu générale, 1971.
48. 多くの優秀がカザン学派に属していたが, その代表的なものとして, たとえば, シチエルバ(Л.В. Щерба 1880-1944), ヤクビンスキー(Л.П. Якубинский 1892-1945), ラーリン(Б.А. Ларин 1893-1964), ポリヴァーノフ(Е.Д. Поливанов 1891-1938), ボゴロディツキー(В.А. Богородицкий 1857-1941), プラーク学派に参画したクルシェフスキー(Н.В. Крушевский 1851-1887), 広瀬『ロシア言語学史概論』(Очерк истории языкознания в России, Спб., 1908)を書いたブーリッチ(С.К. Булич 1859-1921)らのほか, ヴィノグラードフ(В.В. Виноградов 1895-1969)などがいた。
49. Потебня, А.А., *Из записок по русской грамматике*(「ロシア文法覚書」), т.1-2, М., 1958, pp.82-83.
50. Потебня, А.А., *Мысли и язык*(「思惟と言語」), 4-е изд., Одесса, 1922, 5-е изд., Хариков, 1926.
51. Потебня, А.А., *Из записок по русской грамматике*, т.3, М., 1968, p.507.
52. Бодуэн де Куртене, И.А., Сравнительная грамматика(「比較文法」), *Избранные труды по общему языкознанию*(「一般言語学選集」), т.1, М., 1963, p.375.
53. Бодуэн де Куртене, И.А., О смешанном характере всех языков(「すべての言語の混合的性格について」), *Избранные труды по общему языкознанию*, т.1, p.371.
54. Бодуэн де Куртене, И.А., О задачах языкознания, *Избранные труды по общему языкознанию*, т.1, p.215.
55. 彼はマルクス主義的な言語学を建設しようと熱望するあまり, 言語をいわゆる上部構造であると考えた。このことから必然的に下部構造すなわち社会の経済的な基盤が変化すれば, 言語も変化する, と

いうテーゼが生じてくる。一方マルクス主義の教えるところによれば、あらゆるものの発展は不連続的に変化する。社会の発展もまたそうである。いわゆる革命である。したがって言語もまた不連続的に発展しなくてはならない。これがいわゆる唯物弁証法を機械的に言語の発展に適用した結果である。

56. Десницкая, А.В., *Вопросы изучения родства индоевропейских языков* (『印欧諸語の親近性の研究の諸問題』), М.-Л., 1955, p.5.
57. Апресян, Ю. Д. *Идеи и методы современной структурной лингвистики* (『現代構造主義言語学の理念と方法』), М., 1966. これには英訳がある。Apresjan, Ju.D., *Principles and methods of contemporary structural linguistics*, tr. by D.B. Crockett, The Hague-Paris, 1973.
58. Мельничук, А.С., *Понятия системы и структуры языка в свете диалектического материализма* (『弁証法的唯物論に照らしてみた言語の構造と体系という概念』), *Ленинизм и теоретические проблемы языкознания* (『レーニン主義と言語学の理論的諸問題』), М., 1970, p.56.
59. Дектерева, Т.А., *Пути развития современной лингвистики* (『現代言語学の発展の道程』), М., 1964, pp.91-92.
60. Услар, П.К., Чеченский язык (『チェチェン語』) *Этнография Кавказа. Языкознание* (ЭКЯ) (『コーカサス民族誌学。言語学』), т.2, Тифлис, 1888; Аварский язык (『アヴァール語』), ЭКЯ, т.3, Тифлис, 1889; Лакский язык (『ラク語』), ЭКЯ, т.4, Тифлис, 1890.
61. Услар, П.К., Лакский язык, *op. cit.*, p.141.
62. Услар, П.К., Чеченский язык, *op. cit.*, pp.64-65.
63. Услар, П.К., Аварский язык, *op. cit.*, pp.122-123.
64. Услар, П.К., Лакский язык, *op. cit.*, p.80.
65. イ. ヴェ. スターリン「言語学におけるマルクス主義」。
66. たとえば, Марр, Н.Я., Яфетический Кавказ и третий этнический элемент в созидании средиземноморской культуры (『地中海文化の創造におけるヤベテ語族のコーカサスと第三の人種の要素』), *Избранные работы* (『選集』), т.1, Л., 1933 (Nauka Reprint, Tokyo), 1977, p.96.
67. Марр, Н.Я., Индоевропейские языки Средиземноморья (『地中海のインド・ヨーロッパ諸語』), *Избранные работы*, т.1, p.185.
68. Марр, Н.Я., Яфетическая теория, *Вопросы языка в освещении яфетической теории* (『ヤベテ理論に照らしてみた言語の諸問題』), ГИИМК, 1933; Звегинцев, В.А., *История языкознания XIX-XX веков в очерках и извлечениях* (『19-20世紀言語学史。解説と抜粋』), ч.2, М., 1965, p.346.
69. スターリン「言語学におけるマルクス主義」。スターリンは、マールが自分の「マルクス主義的」な「新言語理論」に反対する学者を容赦なく迫害した「Аракчеу-эф (Аракчеев, Алексей Андреевич 1769-1834) 的体制」(Аракчеу-эфはアレクサンドル一世の政治家で、過酷な恐怖政治を行ったことで、有名である)を敷いたことのほか、理論的には、マールが、言語が土台となる経済の上に立てられた上部構造であるとして、言語の変化・発展を、経済の変化・発展に依存していると考えたことを批判している。

もしそうであったならば、言語はたとえば階級によって違ったものにならなければならないし、革命が起ったら新しいものに変わらねばならないことになる。スターリンは言語は民族全体のコミュニケーションの手段であって、上部構造ではなく、その発展は漸進的なものであるという。これはいわば当たり前のことであるが、筆者はスターリンの本当の狙いは別の所にあったのではないかと考えている。

現在のロシア、東欧の状態をみれば無意味だと思われるが、当時、社会主義から共産主義への移行の問題が、盛んに議論されていたことは事実である。一方唯物弁証法は、ものごとがある状態から別の状態に移行するとき、急激な変化——革命——を経ると教えていた。しかし社会主義から共産主義への移行に際して革命が起こるのは都合が悪い。ここからスターリンは、言語の問題にかこつけて、弁証法の命題の修正をはかったのではないか、と思われるのである。またいわゆる「Аракчеу-эф 的体制」については、真偽のほどは定かではない。彼の国がかつて体験した体制の中では、批判は誇張され、歪曲されるのがつねであったからである。

この点についてかつて橋本萬太郎が、次のように書いていることに注意を喚起したい。「言語発展の段階説、ことに人種差別の偏見とむすびついたそれは、一番新しいところでは、1930年代からソ連の言語学界を風靡したニコライ・マールのヤフェット学説にまで影を落したと言われている。誤解を未然に防ぐために、先に言及することが許されるなら、故マール教授は、近辺にあった人々の証言を総合すると、まことに温厚な、公正な学者であって、現代史に果たした彼のモンスター的役割の張本人とは、とても信じられない。政治的な配慮と偏見から来る特定面の誇張が皆無であると思っているわけではないが、妙な公式記録よりは、わたくしは自分の知己たちの証言の方を信ずる。だから、かのヤフェット学説——特にその末期の議論——にこめられたマール教授の真意というものは、再検討を要するかもしれない。なぜかと言うと、わたくしの読んだかぎりでは、マール教授は、孤立語が一番原始的な段階で、膠着語がその次、屈折語が最高の発展というような単純な頭脳であったとは、どうしても思えない。わたくしは、それよりも、ごく少数の「語根」のくみ合せによって、種々な言語のなりたち(決して現況ではないことに注意)を解いて行こうとするマール教授のやり方に、現代における言語類型論の方向の、原初的な萌芽をみるような気がする」(『言語音形の構造類型』『月刊言語』1982, v.11, No.11, pp.35-36.)

一方セメレーニは、1982年に出版された『現代言語学の潮流』の第5章「ソヴェトにおける言語学」のほとんどすべてをマールの問題に宛てている(Oswald Szemerényi, *Richtungen der modernen Sprachwissenschaft*, Teil II: Die fünfziger Jahre 1950-1960, V. Der Sprachwissenschaft in der Sowjetunion, Heidelberg, 1982, pp.1-21).

これによれば、マールの失脚に至る経過は次のようなものであった。まず1948年に行われたマールの弟子のメシチャニノフの講演(О положении в лингвистической науке「言語の学における状況について」АН СССР, ОЛЯ, V/5)およびフィリン(Филин, Федот Петр 1908-1982)の「言語学における二つの潮流」(О двух направлениях в языковедении)という講演によって、反対派への攻撃の口火が切られた。とくに若いフィリンは、祖語の理論は「ドイツのファシストによって、彼らの目的に利用され」、いまは「英米の侵略者によって利用されている」とし、ロシア語学の泰斗ヴィノグラドフを、「西欧の言語研究者の奴隸的模倣者」であるとして非難したという(p.7)。

これによって触発された「マール主義者」と「形式主義者」との論争のクライマックスとして、マースロフ(Маслов, Юрий Сергеевич 1914-1990)が「ブルジョア科学からの徹底的な訣別」のために、ソヴェトにはマール学派という、一つの学派のみが存在することを、出席者に要求したという。

翌1949年の5月、共産党中央委員会宣伝部の機関誌『文化と生活』(Культура и жизнь)にベルニコフとブラギンスキー(Брагинский, Иосиф Самуилович 1905-)の手になる「進歩的ソヴェト言語学のために」(За передовое советское языкознание)という論文が掲載されたが、これと時を同じくして、共産党の圧力下でマール名称言語と思想研究所で二つの会議が開かれた。モスクワでは5月27-28日、レニングラードでは6月28-29日であった。反対派の学者はここに呼び出されて、マールの説を認めるように強要されたという(p.8)。

このようにしてマール派は全面的な勝利を収めたかにみえ、しばらくは重苦しい沈黙の時が流れたが、1950年5月9日付けのプラウダ紙上にチコバヴァ(Чикобава, Арнольд Степанович 1898-1985)の論文「ソヴェト言語学の若干の問題について」(О некоторых вопросах советского языкознания)が掲載された。この際に編集者は「ソヴェト言語学の現在の憂うべき状況を考え、批判と自己批判を通じてソヴェト言語学の発展における現在の停滞を克服し、この領域における今後の研究の正しい方向を確立するために、率直な議論を組織することが必要であると考えた」と述べている。このような動きの結果として、スターリンの「言語学におけるマルクス主義」が発表され、マール派の失脚が決定的になる。1950年6月20日のことであった。

70. Марр, Н.Я., Постановка учения об языке в мировом масштабе и абхазский язык (『世界的規模における言語の学の提起とアブハズ語』), *Избранные работы*, т.4, JL., 1937 (Nauka Reprint, Tokyo 1977), pp.57-58.

71. Бодуэн де Куртене, И.А., О смешанном характере всех языков, *op. cit.*, p.362.

72. Мещанинов, И.И., Проблема классификации языков в свете нового учения о языке

- (『新言語理論に照らしてみた諸言語の分類の問題』), *Речь произнесенная в торжественном годовом собрании Академии Наук 12 февраля 1934 года*, Л., 1935, pp.10-16.
73. Мещанинов, И.И., *Проблемы развития языка* (『言語発達の問題』), Л., 1975, pp.3-10.
 74. Бокарев, А.А., *О "Пассивном" характере аварского переходного глагола* (『アヴァール語の他動詞の「受動的」性格について』, Диссертация, 1934).
 75. Бокарев, А.А., *Синтаксис аварского языка* (『アヴァール語統語論』), Л., 1949.
 76. Кацнельсон, С.Д., К генезису номинативного предложения (Диссертация, 1935) (『主格文の発生に寄せて』), *Труды ин-та языка и мышления им. Н.Я. Марра*, вып.4: Серия Romano-Germanica, М.-Л., 1936.
 77. Мещанинов, И.И., Проблема классификации языков в свете нового учения о языке, p.5.
 78. Десницкая, А.В., *Развитие категории прямого дополнения в индоевропейских языках* (Докт. диссертация) (『印欧諸語における直接補語のカテゴリーの発達』), Ин-т языкознания, Л., 1946. これは短くしてデスニツカヤの『比較言語学と諸言語の歴史』に収められている.
 79. Бубрих, Д.В., К вопросу о стадийности в строе глагольного предложения (『動詞文構造における段階性の問題に寄せて』), *Изв. АН СССР, ОЛЯ*, 1946, No.3, p.206.
 80. 「40 年に文の発達における「能格段階」の普遍性が否定され, 主格構造と能格構造が両方の構造に先行する, 古い文の構造(複数)から並行的に発展してきたとする考えが提唱されるようになって, 初原的な能格性という考えの, 漸次弱まりつつあった立場にこれが対置されることが多くなった」.
 81. Кацнельсон, С.Д., *Краткий очерк языкознания* (『言語学小論』), Л., 1941, p.45.
 82. 原書は, Кацнельсон, С.Д., *Типология языка и речевое мышление* (『言語類型学と言語的思惟』), Л., 1972, p.7.
 83. *idem*, pp.8-9.
 84. クリモフによれば, すでに 1926 年にショールが, 形態論的な分類は, 言語が自己の文法的カテゴリーの基礎に置いている, 意味と意味の間の関係の選び方という, 重要な問題をないがしろにしていると, 指摘しているという. cf. Шор, П. О., *Язык и общество* (『言語と社会』), 2-е изд., М., 1926, p.15.
 85. Жирмунский, В.М., Развитие категории частей речи в тюркских языках по сравнению с индоевропейскими языками (『インド・ヨーロッパ諸語との比較におけるチュルク諸語の品詞のカテゴリーの発達』), *Изв. АН СССР, ОЛЯ*, 1945, No.3-4, p.111. cf. [КТИ 24]
 86. “идеологическое обоснование языковой техники”
 87. Рифтин, А.П., Основные принципы построения теории стадии в языке — 1819-1944 (『1819-1944 年の言語における段階理論の構築の基本原理』), *Труды юбилейной и научной сессии ЛГУ*, 1946, p.22.
 88. Яковлев, Н.Ф., *Синтаксис чеченского литературного языка* (『チェチェン語統語論』), М.-Л., 1940, p.6.
 89. Реформатский, Александр Александрович, *Введение в языкознание* (『言語学概論』), 4-е изд., М., 1967, pp.419-421; Андре・マルティネ編『近代言語学大系第2巻——世界の言語』の第6章のルイス・ミチエレナ Luis Michelena が執筆し, 下宮忠雄訳の「バスク(エウスカラ)・コーカサス語族」が比較的詳しい. これに属する言語の表は訳者の手になるものである.
- 簡単な研究史をも含めた解説は, ソヴェト科学アカデミー言語学研究所編『さまざまな語族の言語の比較・歴史的的研究. 現状と諸問題』(АН СССР, Институт языкознания, *Сравнительно-историческое изучение языков разных семей. Современное состояние и проблемы*, М., 1981) のカルトベリ諸語 (pp.276-284), アプハズ・アディグ諸語 (pp.285-297), ナフ・ダゲスタン諸語 (pp.298-311) にみられる. なおこれらの言語についての文献が巻末にそれぞれ項目別に記載されている.
90. イテリメン語についての研究としては, Володин, В.П., К вопросу об эргативной конструкции предложения (на материале ительменского языка) (『能格構文の問題に寄せて(イテリメン語の資

料にもとづいて)」、*ВЯ*, 1971, No.1, pp.14-22 があるという。

91. Shell, O., Cashibo, II: Grammatical analysis of transitive and intransitive verb patterns, *IJAL*, 1957, v.23, No.3, pp.179-218; *Eiusdem*, Signaling of transitive and intransitive in Chacobo (Pano), *IJAL* 1962, v.28, No.2, pp.108-118.
92. Абдуллаев, З.Г., *Проблемы эргативности даргинского языка* (『ダルギン語の能格性の諸問題』), М., 1986, p.3. 彼が引用しているのは, Dirr, Adolf, *Einführung in das Studium der kaukasischen Sprachen*, Leipzig, 1928, p.76 であるが, 彼はこれをロシア語訳(Дирр, А., Глагол в кавказских языках (『コーカサス諸語の動詞』), *Эргативная конструкция предложения* (『能格文構造』), М., 1950, p.32)によって引用している。
93. 「類型論の視角」『月刊言語』1979, v.8, No.11, p.19.
94. 『月刊言語』1982, v.11, No.11 参照。
95. 「能格性をめぐる諸問題」『言語研究』1986, v.90, pp.75-76.
96. Dixon, Robert M.W., *Studies in ergativity*, Introduction, *Studies in ergativity*, North Holland-Amsterdam-New York-Oxford-Tokyo, 1987, p.2.
97. 「能格性をめぐる諸問題」p.77.
98. クリモフはこれに関連して次のようにいっている。「……その後このテーゼは記述的な多くの研究によって経験的にも裏づけられた。属格は活格構造の言語のみならず, 典型的な能格構造の言語にも欠如しているのである。事実, これは圧倒的多数の能格言語に属するものに知られていない(たとえばアブハズ・アブディゲ諸語, 一連の西アジアの古代諸語, パプア諸語, オーストラリア諸語, エスキモー・アレウト諸語, アルゴンキン諸語, ツィムシャン・チヌーク諸語, マヤ・キチェ諸語, タカナ・バノ諸語など)。この言語類型のわずかな部分——それらはすべて他に著しい主格言語の特徴をもっているが——に関してのみ, 主語・目的語の諸関係の伝達によく知られた制限があることを念頭に置けば, 属格の形成について語ることができる(ナフ・ダゲスタン諸語, バスク語, 部分的にはブルジャスキ語の状態を参照)。とくにナフ・ダゲスタン諸語においては, 属格の役割を果たす語尾は, *genitivus obiectivus* の役割をもたないばかりでなく, *genitivus subjectivus* の役割にも, 制限をもっているという。たとえば主格的属格の形式は, このばあいしばしば不活動体 (*i.e.* 無生物) の名詞からはつくられない。アヴァール語: *gamatʃ* (гамачI) (絶対格), *borti* (борти) (石の・落下), ベジェティン語: *boco* (боцо) (絶対格), *guts'oli* (гуц'оли) (月の・出現), ツアフル語: *juxxan* (йухъхъан) (絶対格), *q^hadij* (хъадиий) (春の・到来) (ツアフル語において, *virxen* (виргъен) (属格) *ilq^hevtʃi* (илкъевчи) (日の・出) のような構文は, 活動体のコノテーションをもつ少数の不活動体名詞に限られている)。それだけではなく, 活動体名詞のばあいでも, これに対応する附加語的なシンタグマにおいて, 意味的なアクセントが主語ではなく行為にあるときには, 属格は絶対格に変えられる。たとえば, ベジェティン語: *abo-s* (або-с) (属格) *oq^h'oli* (окъоли) (父が・到着すること) に対する *abo* (або) (絶対格) *oq^h'oli* (окъоли) (父の・到着), ラク語 *pildanul* (пилданул) (属格) *letjavu* (лечаву) (象が・逃げていくこと) に対する *ril* (пил) (絶対格) *letjavu* (лечаву) (象の・逃走) ……
- これに対して主格構造の言語のばあいには, 属格の諸語の機能は何等の制限もなく用いられる。それらの多くに存在する目的語の機能についてはいうまでもない(とくにインド・ヨーロッパ諸語, フィン・ウゴル諸語, カルトヴェリ諸語がそうである)」[KP 46]。
99. Sommerfelt, A., *Language, society and culture, A Diachronic and synchronic aspects of language*, 's-Gravenhage, 1962, p.114.
100. 角田太作「能格言語と対格言語におけるトピック性」『言語研究』1986, v.90, p.149 & seq. なお宮岡はこれを「統語的な要」としている。宮岡伯人「エスキモー語の能格性」*idem*, p.114.
101. 角田太作「能格言語と対格言語におけるトピック性」*idem*, pp.153-156.
102. Comrie, Bernard, *Ergativity, Syntactic typology, Studies in the phenomenology of language*, Austin-London, 1978, p.329 et seq.
103. *idem*, p.350.
104. 柴谷方良は, 英語の接尾辞 -able と -ee についても同様のことを指摘し, たとえば perishable のよう

- なばあいには S を修飾するが, commendable, readable などは, P を修飾するという。確かに escapee, standee に対する employee, addressee のばあいにも同じことがいえるが, 一方たとえば英語の -er のように行為者を表す場合には, たとえば swimmer と employer のように, S と A を表すものもあり, すべてについて上述のことがいえるともかぎらないように思われる。cf. 柴谷方良「能格性をめぐる諸問題」『言語研究』1986, v.90, p.81 & seq.
105. これについては松本克己の興味ある考察がある。松本克己「能格性に関する若干の普遍特性」『言語研究』1986, v.90, p.181.
106. Troubetzkoy, N., Le rapport entre le déterminé, le déterminant et le défini, *Mélanges de linguistique offerts à Charles Bally*, Genève, 1939, pp.77-78; Notes sur les désinences du verbe dans les langues tchéchénolesghiennes (caucasiennes-orientales), *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris (BSLP)*, 1929, t.29, fasc.3, pp.170-171.
107. Geiger, Wilhelm, Die Passivconstruction des Präteritums transitiver Verbe im Iranischen, *Festgruss an Rudolf von Roth*, Stuttgart, 1893, pp.1-5.
108. Hoernle, Frederick Rudolf, *A Comparative grammar of the Gaudian languages*, London, 1880.
109. Grierson, George A., Kāshmirī, *Linguistic survey of India*, v.8, pt.2: Specimens of the Dardic or Pis'ācha languages (including Kāshmirī), Calcutta, 1919.
110. Scler, E., Das Konjugationssystem der Maya-Sprachen, *Gesammelte Abhandlungen zur Amerikanischen Sprach- und Altertumskunde*, Berlin, v.1, 1902, p.89.
111. Uhlenbeck, Christian C., Het passieve karakter van het verbum transitivum of van het verbum actionis in talen van Noord-Amerika, *Verslagen en mededeelingen der Akademie Amsterdam*, Aft. Letterkunde, 5, t.2, 1917, p.188.
112. Fillmore, Charles J., The Case for case, *Universals in linguistic theory*, London-N.Y.-Sydney-Toronto, 1968, p.59.
113. カツネリソンは, 「通常能格型と主格型は相互に排除しあっており, この観点からすれば能格型言語と主格型言語とを区別しなければならない。しかし両方の型が相補的に分布している言語がある。「混合型」言語におけるこの分布の条件は必ずしも同じではない。グルジア語では能格構文はアオリストにおいてのみ現れ, いくつかの現代インドおよび現代イラン諸語においては過去においてのみ現れる」と述べている。cf. Кацнельсон, С.Д., *Типология языка и речевое мышление*, p.68.
114. Hewitt, B.G., Georgian: Ergative or active?, *Studies in ergativity*, North Holland-Amsterdam-New York-Oxford-Tokyo, 1987, pp.319-340.
115. Лебедев, К.А., Построение предложения с переходным глаголом в прошедшем времени в пущту (эргативная конструкция) (「プシトゥーにおける他動詞過去形を持つ文の構成(能格構文)」), *Ученые записки Ин-та международных отношений, Серия филологическая*, вып.7, М., 1961, p.86.
116. Finck, F.N., Der angeblich passivische Charakter des transitiven Verbs, *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung (KZ)*, Bd.41, 1907?, p.242.
117. Ditt, A., *Einführung in das Studium der kaukasischen Sprachen*, Leipzig, 1928, p.76.
118. Услар, П.К., Чеченский язык, *op. cit.*, p.65; *ejusdem*, Аварский язык, *op. cit.*, pp.122-123.
119. Pott, August F., Unterschied eines transitiven und intransitiven Nominativs, *Beiträge zur vergleichenden Sprachforschung*, 1873, 7, p.73 & seq.
120. Müller, Fr., *Grundriß der Sprachwissenschaft*, Bd.3, Abt.2., Wien, 1885, p.7; Шухардт, Г., О пассивном характере переходного глагола в кавказских языках (「コーカサス諸語の他動詞の受動的性格について」), *Эргативная конструкция предложения*, М., 1950, p.39.
121. Уленбек, Х.К., Agens и Patiens в падежной системе индоевропейских языков (「印欧諸語の格体系における Agens と Patiens」), *Эргативная конструкция предложения*, М., 1950, p.102.
122. Ditt, A., *Einführung in das Studium der kaukasischen Sprachen*, Leipzig, 1928, p.76.

123. Thalbitzer, William, Eskimo, *Handbook of American Indian languages*, pt.1, Washington, 1911, p.1016.
124. Мещанинов, И.И., *Язык ванской клинописи (Die Van-Sprache)*, 2: Структура речи, Л., 1935, pp.191-201.
125. Dumézil, Georges, *Études comparatives sur les langues caucasiennes du Nord-Ouest (Morphologie)*, Paris, 1932, p.49, p.156.
126. Яковлев, Н.Ф., Ашхамаф, Д.А., *Грамматика адыгейского литературного языка* ([『アディゲ文章語文法』], М.-Л., 1941, pp.68-71; Яковлев, Н.Ф., *Грамматика литературного кабардино-черкесского языка* ([『カバルディン・チェルケス文章語文法』], М.-Л., 1948, pp.16-21).
127. 接頭辞を用いる言語としては、たとえばアブハズ・アディゲ諸語、北アメリカや中部アメリカのインディアンの中の多くの言語などがあるという。また接頭辞と接尾辞を用いる言語としては、たとえばバスク語、カルトヴェリ諸語、ナフ・ダゲスタン諸語のうちのあるもの、フルリ・ウラルト諸語、シュメール語、ブルジャスキ語、チュクチ・カムチャツカ諸語、エスキモー・アレウト諸語などがある。ただしオーストラリアの「接尾辞語」といわれるいくつかの言語はこの例外であるといわれる。
128. 英語では I listen to you, ロシア語では Я слушаю тебя にあたる。
129. 同じように英語では I hear him, ロシア語では Я слышу его にあたる。したがって英語やロシア語のような対格言語からみれば、他動詞構文と情緒構文とは論理的な主語と目的語の位置が反対になっていることになる。
130. Delbrück, Berthold, *Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen*, Teil 3, Strassburg, 1897, p.417.
131. Абдуллаев, З.Г., *Очерки по синтаксису даргинского языка* ([『ダルギン語統語論概要』], М., 1971, p.29).
132. これはあくまで傾向であって、固定したものではない。たとえばチュクチの言語やカムチャツカの諸言語は S-O-V と S-V-O の両方の文型をもつといわれる。またインド・ヨーロッパ語のばあいでも、たとえばラテン語のように, pater filium amat「父が・息子を・愛する」のような S-O-V の形をとることが多い。その理由としては、最も重要性の高い文の要素を文の始めに置き、次に重要な要素を文の終わり置く、という原則があるといわれてきた。これはロマンス諸語にみられるように、やがて S-V-O の形によって置き換えられてくるが、語順はこのように歴史的にも、また共時的にも変わるものであるから、そこには一定の傾向があるということを指摘できるだけである。
133. Troubetzkoy, N., Le rapport entre le déterminé, le déterminant et le défini, *Mélanges de linguistique offerts à Charles Bally*, Genève, 1939, pp.77-78. cf. Regamey, C., A propos de la “construction ergative” en Indo-Aryen moderne, *Sprachgeschichte und Wortbedeutung, Festschrift Albert Debrunner*, Bern, 1954, pp.368-369.
134. Магомедбекова, З.М., Каузатив в аварско-андийских языках ([『アヴァール・アンディ諸語の使役動詞』], *Иберийско-кавказское языкознание (ИКЯ)*, 20, Тбилиси, 1978, p.244-245).
135. Суник, О.П., К вопросу о “нениминативном” строе предложения ([『<非主格>構文の問題に寄せて』], *ЭКПЯРТ*, Л., 1967, p.49).
136. Шагиров, А.К., Сравнительная характеристика системы склонения в адыгских языках ([『アディゲ諸語における名詞類変化の体系の比較言語学的特徴』], *Вопросы изучения иберийско-кавказских языков* ([『イペリア・コーカサス諸言語の比較の諸問題』], М., 1961, p.52).
137. 例外となるのは能格的性格が完全ではない、カルトヴェリ諸語、インド・イラン諸語だけであるという。
138. Thalbitzer, W., *Förhandlingar vid sjätte nordisk filologmötet*, Uppsala, 1903, p.60; Pedersen, Holger, Neues und Nachträgliches, *KZ*, Bd.40, 1907, p.151.
139. Уленбек, Х.К., Пассивный характер переходного глагола или глагола действия в языках Северной Америки ([『北米諸言語における他動詞あるいは行為動詞の受動的な性格』], *Эргативная конструкция предложения*, М., 1950, p.95).
140. Кацнельсон, С.Д., К происхождению эргативной конструкции ([『能格構文の起源によせて』], *Эргативная конструкция предложения в языках различных типов* ([『様々な類型の言語における能格文構造』], Л., 1967, p.37).

141. ただしカルトヴェリ諸語や多くのイラン諸語のように、対格言語に近づいている能格言語では受動構文も存在しているという。
142. クリモフは相について次のように述べている。「周知のように、主格 (*i.e.* 対格) 言語の完全な、すなわち三文肢から成る受動構文は、能動構文の文体的なヴァリエントとして用いられる派生的な構文である。両方の基底には文の同じ深層構造があるといえる。能格言語においては能格構文は別の位置を占めている。ここではそれは非派生的、すなわち統語論的に基本的なものである。したがってそれは統語単位 (文肢) が心理的な機能に、またそれらを通じて諸実体と諸特徴の現実の機能に対応する構築物として扱うことができる。したがってその文肢の間の関係は、言語外的状況の要素の間にある現実の関係を「恒等的に」写像している」
143. *diffused verbs*. 筆者は別の所でこれに「瀰漫動詞」という訳語を与えたが、あまり評判がよくなかった。しかし適当な訳語がみあたらないので、ここでは「可変動詞」とすることにする。
144. Яковлев, Н.Ф., Ашхамаф, Д.А., *Грамматика адыгейского литературного языка*, p.216.
145. 彼女はこれらの言語における受動相の発達は、一方では中動相から、および他方では印欧語の *-e* および *-ya-* の上に行なわれたと述べている [GI 50].
146. Schmalstieg, William R., *Applications of the notion of ergativity to the Indo-European languages* 『言語研究』1989, v.96, pp.5-6.
147. Comrie, B., *Ergativity*, p.360.
148. *idem*, pp.359-363.
149. Yamamoto, Hideki, *Toward a natural explanation for typological phenomena around passives and ergatives*, 『言語研究』1987, v.92, p.38.
150. Comrie, B., *Ergativity*, p.370.
151. Климов, Г.А., *Введение в кавказское языкознание* (『コーカサス言語学序説』), М., 1986, p.37.
152. *idem*, p.147.
153. Мещанинов, И.И. *Проблемы развития языка*, p.186.
154. 『近代言語学大系第2巻——世界の言語』紀伊國屋書店, 1972, p.306.
155. クリモフによれば、対格言語との中間に位置するカルトヴェリ諸語やインド・イラン諸語では、受動相はすでによく発達しているという。
156. ヒッタイト語の分詞 **-nt-* は論理的な自動詞から派生すると能動的に、また論理的他動詞から派生するときは受動的に用いられるというように (Rosenkranz, Bernhard, *Vergleichende Untersuchungen der altanatolischen Sprachen*, *Trends in linguistics—State of the Arts Reports* 8, The Hague-Paris-New York, 1978, p.78), 本来は相の区別がなかったと考えられるが、イヴァーノフはここからインド・ヨーロッパ祖語ではこれは本来動詞から派生された行為名詞であったとしている。cf. Иванов, В.В., *Хеттский язык* (『ヒッタイト語』), М., 1963, p.152.
157. Yamaguchi, Iwao., *Remarks on the meanings of Russian verbs*, *Japanese Slavic and East European Studies*, v.1, 1980, pp.1-14.
158. Yamamoto, Hideki, *Toward a natural explanation for typological phenomena around passives and ergatives*, 『言語研究』1987, v.92, pp.33-57. とくに p.38.
159. Comrie, B., *Ergativity*, pp.368-374.
160. Schmalstieg, Willam R., *Applications of the notion of ergativity to the Indo-European languages*, 『言語研究』1989, v.96, pp.10-12.
161. 活格言語の研究史については、Климов, Г.А., *Типология языков активного строя* (『活格言語の類型学』), М., 1977 の第1章を参照。
162. マッシュースはヒダツアの言語に同じような「例外」があることをみとめて、「ヒダツアの文を個々ではなく文法全体として観察すると、能格の諸関係は、まったく存在していないというわけではないにしても、ヒダツアの基本的な特徴ではない」と述べ、さらに「したがって能格性はヒダツア文法の

基本的な特徴ではなく、むしろ行為動詞と状態動詞という……動詞の構成の二つのタイプを基本的に区別することの当然の結果である」といっているという。cf. Matthews, G.H., *Hidatsa syntax, Papers on formal linguistics*, The Hague-Paris, 1965, p.143.

163. 活格言語に関する用語の種々の用法については、*Типология языков активного строя*, pp.48-52 参照。
164. Comrie, B., *Ergativity*, p.373.
165. このほか能格言語のところで挙げたエスキモー・アレウト語族も、活格言語の構造をもっているといわれるが、クリモフは動詞が他動詞と自動詞の対立をみせていることから、これは能格言語であって活格言語ではないとしている [KTA 73]。
166. 印欧語が活格言語であったことは、とくにガムクレリゼ等によって強く主張されている。
167. 山口巖「ノヴゴロド原初年代記シノダリ本における活動体と不活動体の区別について」『古代ロシア研究』1962, v.2, pp.53-95.
168. ネミロフスキーの原典は、Немировский, М.Я., Род и класс. К вопросу о генезисе номинальных классификаций (「性とクラス。名詞分類の起源についての問題に寄せて」), *Изв. ингушского научно-исследовательского Ин-та краеведения*, т.4, вып.2, Орджукиндзе-Грозный, 1935, pp.245-246 であるという。
169. 原典は、Rodrigues, A. dall Igna, *Morphologia do verbo Tupi*, Letras (Curitiba), 1953, No.1, p.128.
170. Ebbing, J.E., *Grammatica y diccionario Aimara*, La Paz (Bolivia), 1965, p.245.
171. クリモフは、これら初期のタイプに属すると考えられる活格言語にみられる痕跡から、はじめには外界は言語にもっと具体的な反映の仕方をしており、多くの名詞のグループを区別していたと考えている。そしてこのような「多分類言語」の内部で、より抽象的な活動体と不活動体への二極化が起こり、やがて活格言語へ発展するというのである。このような構造をもっている典型的なものは、アフリカのバントゥー語族であるが、この語族に属するスワヒリ語においても、近年このような活動体と不活動体への分極化が生じているという [KTA 264-303]。詳細は本文該当箇所参照。
172. Сова, Л.З., *Эволюция грамматического строя в языках банту* (「バントゥー諸語における文法構造の発達」), АН СССР, Л., 1987.
173. *idem*, pp.15-16.
174. *idem*, p.22.
175. Cuny, A., *Études prégrammaticales sur le domaine des langues indo-européennes et chamito-sémitiques*, Paris, 1924, p.450.
176. Benveniste, E., *Origines de la formation des noms en indo-européen*, Paris, 1935, pp.32-33.
177. Леви-Брюль, *Сверхъестественное в первобытном мышлении* (「原始的思考における超自然的なもの」), М., 1937, pp.208-209.
178. Лесницкая, А. В., Именные классификации и проблема индоевропейского склонения (「印欧語の名詞の分類と名詞類変化の問題」) (Доклад читанный в 1940 на общем собрании ОЛЯ АН СССР) [DS 62-63]。
179. クリモフは、この語族を典型的な活格言語の類型に属するとしている。
180. クリモフの掲げている表には若干の誤り並びに誤解を招きやすい表記がある。ここでは Gregores, Emma and Jorge Suárez, *A Description of colloquial Guaraní*, Mouton & Co., The Hague-Paris, 1967, p.131 によって訂正した。
181. これについても、Boas, Franz and Swanton, John R., Siouan, Dakota (Teton and Santee dialects, Boas, Franz, ed., *Handbook of American Indian Languages*, Smithsonian Institution Bureau of American Ethnology, Bulletin 40, Washington, 1911, p.908 & seq.) によった。
182. Swanton, John, Tlingit, *op. cit.*, pp.170-172 に従った。
183. このような三つの系列の接辞をもつのは、スー語族、ムスコギ語族およびイロクォイ語族に属している言語であるという。
184. これに加えてクリモフは、活性名詞には人、動物のほか、植物も属しており、そのため「生まれる」、

「死ぬ」、「育つ」、「痛む」、「引く搔く」、「つかまえる」、「支える」、「引く張る」、「立つ」、「横たわっている」、「座っている」、「飲む」、「ピーピー言う」、「唸る」、「騒ぐ」、「震える」のような行為動詞や、「立ち上がる」、「傾く」、「曲がる」、「倒れる」、「運ぶ(木の葉をつける)」、「這う」のような移動の動詞とともに用いることができる、と述べている [KTA 95-96].

そうであるとすれば本文に挙げたものも、活格言語の包含事象でなければならないはずである。ところが彼は別のところで、これを随件事象であるとして、「これらの現象は活格言語の深層構造において契機づけられていないので、本書では随件事象であると性格づけられる……すべてこれらの現象は活動体と不活動体の対立という、ただ一つの原理に依存していることを示しており、活格言語の発生の解明という見地からとくに興味深い」[KTA 66]と述べている。活動体 *odushevlyennye* と不活動体 *neodushevlyennye* というカテゴリーは、多分類言語の内部で発達したというのが、クリモフの考えであるが、彼がその発達の状況を、典型的な多分類言語であるスワヒリ語について観察している箇所をみれば、活動体という用語は、ロシア文法のばあいと同じく、植物は含んでいない。そうすればこのようなクリモフの扱いには、疑問が残る。

185. 山口巖「ノヴゴロド原初年代記シノダリ本における活動体と不活動体の区別について」『古代ロシア研究』1962, v.2, pp.53-95.

186. Жури́нская, М.А., Именные посессивные конструкции и проблема неотторжимой принадлежности (「名詞の所有構文と非分離所有の問題」), *Категории бытия и обладания в языке* (『言語における存在と所有のカテゴリー』), М., 1977, pp.197-198.

187. Sapir, E. & Hoijer, Harry, *The Phonology and morphology of the Navaho language*, University of California. Publications in Linguistics, v.50, Berkley-Los Angeles, 1967, p.92.

188. Sapir, E. & Hoijer, Harry, *The Phonology and morphology of the Navaho language*, p.25.

189. *idem*, p.91.

190. 彼はまたホイジャーを引用して、求心相と遠心相とが、もっと複雑な対立を示している例を挙げている。たとえばアタバスカン語族では、活格動詞は 1) $\emptyset$ クラス, 2) I クラス, 3) D クラス, 4) I クラスの四類に分かれるという。 $\emptyset$ クラスは論理的な自動詞と他動詞を含む無徴的なクラスである。I クラスというのは、 $\emptyset$ クラスの論理的自動詞から派生する論理的な他動詞のクラス, D クラスは $\emptyset$ クラスの論理的他動詞から派生する論理的自動詞のクラスである。また I クラスは I クラスの動詞から派生する論理的自動詞のクラスである。2) は実は 1) のクラスの遠心相のクラス, 3) は 1) のクラスの求心相のクラスであると解釈できる。また 4) は I クラスの動詞をさらに D クラスに変換したものであり、したがって I クラスに対応する求心相の動詞のクラスであるということになる。cf. Hoijer, H., Athapaskan morphology, *Studies in American Indian languages*, University of California. Publications in Linguistics, v.65, Berkley-Los Angeles, 1971, pp.134-135.

191. 体系的にこの問題を扱っているものとしては、たとえば Гамк्रेлидзе, Т.В., Иванов, Вяч.Вс., *Индоевропейский язык и индоевропейцы* (『印欧語と印欧人』), Тбилиси, 1984 参照。

192. 遠心相の場合にはたとえば *wacéo wacéo áara-ikao-c* 「人が・人(の)・手・見る」= 「人が人の手を見る」のようになるという。

193. オタイナはこの言語のアムール方言のインフォーマント調査を行い、それに基づいた性質を表す語の語彙的・形態的研究から、性質を表す語の性格を明確にしようとしている。これは従来の研究者の中で、この種の語が形容詞であるのか、あるいは動詞であるのかについて、必ずしも意見の一致を見ていなかったからであるという。彼女はその中で、性質を表す語が形態的に行為を表す語と異なっていないことを指摘し、これらが状態動詞であると主張している。cf. Отаина, Г.А., *Качественные глаголы в низзяском языке* (『ニヴフ語の性質動詞』), М., 1978, p.7, p.13.

オタイナによれば、この言語は時称としては現在・過去と未来を区別し(現在・過去 -d/-v, 未来 -ny-d') (*idem*, pp.65-70), また直説法の語尾は -d/-v であるという (*idem*, p.71). このかぎりでは、-d/-v の形は、メシチャニーノフのいうように述語をつくる働きをするものであり、現在・過去、および直説法は零形式であるとも考えることもできる。しかし一方ではこの形はたとえば *neni-la-d* 「甘い・接辞・d」= 「甘いもの」のように、「恒常性」を表す接尾辞 -la- (*idem*, p.62) をともなって名詞化

し, *nenilad' skha-d'*「甘いものは+ない」のように用いられるという (*idem*, p.71). また他方ではたとえば *khe-d'*「考える, 思う」を用いる構文において, たとえば *Atak uz k'e kyl-ny-d' khe-d'*「祖父+新しい+網+長い・未来・d'+考える・d'」=「祖父は新しい網は長いだろうと思った」のようなものがみられるという (*idem*, p.68). これらはいずれも同じ文中に二つの *-d'* を含んでいるから, メシチャニーノフの所説と矛盾するようにも思われる. 後の場合をもし, 述語としての *-d'/-e'* の機能を拡張して, 独立した文の述語のみでなく, 従属文の述語にも用いるとしても, 前の場合をどう解釈すればいいのか, 疑問が残る. *nenilad'* のような形も述語として, たとえば「恒常的に甘いものである(ところの)」という形式とすべきなのであろうか. オタイナはこのような *-e'/-d'* を「語尾」と考えているから, このような問題は起こらないが, その場合には, メシチャニーノフの所説は変更を余儀なくされよう.

194. Hoijer, H., *Galice Athapaskan: a grammatical sketch*, *IJAL*, 1966, v.32, No.4, p.321; Sapir, E. & Hoijer, Harry, *The Phonology and morphology of the Navaho language*, p.68.
195. Firestone, H.L., *Description and classification of Sirionó*, London-The Hague-Paris, 1965, pp.23-27.
196. *aba-nheenga*「インディアン語」=「トゥビ語」.
197. *ita-oca*「石の家」.
198. Reichardt, G.A., The character of the Navaho verb system, *Publications of the American Ethnological Society*, N.Y., 1951, v.21, pp.66-68. これはナヴァホの動詞の語彙論的分類を取り扱っている. その他として, サビアとホイジャーの「ナヴァホの音韻論と形態論」がある.
199. ガムクレリゼとイヴァーノフは, インド・ヨーロッパ語では, 不活性の対象を表す名詞の複数性を表すばあいには, 語根の重複 reduplication が用いられ, 場合によっては接尾辞 **-sk-* も使用されたという. 重複はこれまで完了形をつくる手段と考えられていたものであり, また接尾辞 **-sk-* は多回性 iterativity を表すものと考えられていた. したがってもしこれが正しいとすれば, 動詞によって示される複数性と, アスペクトとは, もともと深いつながりがあったということになる.
200. Osthoff, Hermann, *Vom Suppletivwesen der indogermanischen Sprachen*. *Akademische Rede*, Heidelberg, 1899, p.42.
201. 詳しくは山口巖「運動の動詞について」『ロシア語ロシア文学研究』1979, v.11, pp.101-112; Muravyova, L., *Verbs of motion in Russian*, Moscow, 1975 など を参照.
202. Schmidt, W., *Die Sprachfamilien und Sprachenkreise der Erde*, Heidelberg, 1926, p.333, pp.505-506.
203. Гамк्रेлидзе, Т.В., *Сибилантизм и некоторые вопросы древнейшей структуры картвельских языков* (『シビラントの対応とカルトヴェリ諸語の最古の構造のいくつかの問題』), Тбилиси, 1959, p.11.
204. Wundt, W., *Völkerpsychologie. Die Sprache*, Bd.2, 19, pp.196 & seq.
205. Гухман, М.М., *Происхождение строя готского глагола* (『ゴート語動詞構造の起源』), М.-Л., 1940, p.53.
206. 泉井久之助「言語の構造」弘文堂, 1939, p.124.
207. Немировский, М.Я., Род и класс. К вопросу о генезисе номинальных классификаций, pp.245-246.
208. Дьяконов, И.М., *Языки древней Передней Азии* (『古代西アジアの諸言語』), М., 1967, p.210.
209. Охотина, Н. В., К типологической характеристике языка суахили (『スワヒリ語の類型学的特徴に寄せて』), *Лингвистическая типология и восточные языки*, М., 1965, pp.152-153.
210. Строганова, И.П., Процесс развития именной классификации в языках банту (『バントゥ諸語の名詞の分類の発達のプロセス』), *Уч. зап. ЛГУ*, No.128, Л., 1952, pp.204-205.
211. Маячина, Е.Н., *Суахили-русский словарь* (『スワヒリ・ロシア語辞典』), М, 1987 による.
212. Рogaва, Г.В., *К вопросу о структуре именных основ и категориях грамматических классов в адыгских (черкесских) языках* (『Адыгэ (チェルケス) 諸語の名詞語幹の構造と文法的クラスのカテゴリーの問題に寄せて』), Тбилиси, 1956; Серебrennikov, Б.А., Существовали ли в протоуральском языке именные классы, *ВЯ*, 1969, No.3; Dulson A.,

- Eine vorgeschichtliche Sprachgemeinschaft in Zentralasien, *Acta Linguistica Academiae Scientiarum Hungaricae*, 1969, t.19, pp.20-21; Хайдаков, С.М., *Принципы именной классификации в дагестанских языках* (『ダゲスタン諸語の名詞の分類の諸原則』), М., 1980, pp.214-217; Вернер, Г.К., Живов, Г.Т., К характеристике классной системы в енисейских языках (『エニセイ諸語のクラス体系の特徴に寄せて』), *ВЯ*, 1981, No.5.
213. Meinhof, C., *Grundzüge einer vergleichenden Grammatik der Bantusprachen*, Hamburg, 1948, p.23.
214. ソヴァはバントウ諸語には, partitive-posessive 期, spacial 期, spacial-temporal 期という三つの発展の時期があるという. cf. Сова, Л.З., *Эволюция грамматического строя в языках банту*, Л., 1987, p.309 & seq.
215. Хайдаков С.М., Дюративное действие и эргативная конструкция (на материале дагестанских языков) (『継続的行為と能格構文(ダゲスタン諸語の資料にもとづいて)』), *ВЯ*, 1980, No.5.
216. Comrie, B., *Ergativity, Syntactic typology. Studies in the phenomenology of language*, Sussex, 1978, p.346.
217. クリモフも能格動詞と絶対動詞とを「他動詞」と「自動詞」という名で呼ぶことを避け,むしろ agentive と factitive とするべきであるとしている. cf. Климов, Г.А., *Введение в кавказское языкознание*, p.157.
- これに対してゲツァゼとガイダロヴァは, 同ような考えに基づいて, 能格動詞を dynamic verbs, 絶対動詞を static verbs とよんでいる. cf. Гецадзе, И.О., Гайдарова, Ф.Ф., О выражении субъектно-объектных отношений в иберийско-кавказских языках (『イベリア・コーカサス諸語における主語・目的語関係の表現について』), *Категория субъекта и объекта в языках различных типов*, Л., 1982, p.163.
218. 意味上の他動詞で絶対動詞として引き継がれたものには, たとえば「突く」, 「たたく」, 「つかむ」, 「引っ張る」, 「はじく」, 「引っかく」, 「咬む」, 「なめる」, 「吸う」のように対象の表面にしか行為が及ばないものや, 「待つ」, 「呼ぶ」, 「頼む」, 「見送る」, 「追い越す」のようなものがあるという. cf. Климов, Г.А., *Введение в кавказское языкознание*, p.157.
- このあとの種類の動詞は, かつて筆者が「準他動詞」として定義したものに属している. cf. 「準他動詞について」『ロシア語ロシア文学研究』, 1976, v.8, pp.1-12.

第 2 部

1. クリモフはインド語派のヒンディー語にみられる能格的な構文に関連して, これが言語の内的な発展によって生まれたというよりは, 基層の言語の影響であろうと述べている.
2. もちろんロシア語またはスラヴ諸語についての類型学を扱ったものは, これまでかなり多くみられる. しかしそれらは内容的類型学の立場からみて断片的のものであったり, 形式的類型学のカテゴリーに属することを取り扱ったものであったりすることが多い.

たとえば言語を形式的に研究する中で類型学に至った代表的な研究者としてレヴジン Ревзин Исаак Иосифович (1923-1974) が挙げられる. その中でも代表的なものは「スラヴ諸語における比較の形式的類型学によせて」(К типологии форм сравнения в славянских языках, *Исследования по структурной типологии*, М., 1963), 『モデル化の方法とスラヴ諸語の類型学』(Метод моделирования и типология славянских языков, М., 1967), 『バルカン諸語における定性のカテゴリーの構造主義的類型学的アプローチの諸問題』(Вопросы структурно-типологического подхода к категории определенности в балканских языках, *Балканский лингвистический сборник*, М., 1977) などがある.

このほかたとえば論集『一般およびスラヴ類型学についての言語学的研究』(*Лингвистические исследования по общей и славянской типологии*, М., 1966)などに寄稿している研究者の論文も, 形式的類型学の立場のものである. 内容的類型学に関するものとしては, 代表的なものに, たとえばカツネリソンの『言語類型学と言語的思惟』(Кацнельсон, С.Д., *Типология языка и речевое*

мышление, Л., 1972)などのほか、個別的なものとしてはメシチャニーノフの古典的な研究『動詞』(Мещанинов, И.И., Глагол, Л., 1982)あるいはたとえば論集『さまざまな類型の諸言語における主語と目的語のカテゴリー』(Категория субъекта и объекта в языках различных типов, Л., 1982),『構造の異なる諸言語の相の構文』(Залоговые конструкции в разноструктурных языках, Л., 1981)のように、個別的な問題を扱ったものが多い。

このほかにはまたたとえばグフマンの『史的類型学と通時的コンスタントの問題』(Гухман, М.М., Историческая типология и проблема диахронических констант, М., 1981)や論集『スラヴ諸語の史的類型学』(Историческая типология славянских языков, Киев, 1986)のように、史的類型学に関する研究が、とくに最近みられるようになった。

3. 山口巖「ロシア語における数のカテゴリーについて」『古代ロシア研究』, 1968, v.9, pp.123-143.
4. Дашко, М.А., Некоторые особенности переходного глагола языка малаялам (『マラヤラム語の他動詞の若干の特徴』), *Индийское языкознание*, М., 1978, pp.73-78.
5. 山口巖「ノヴゴロド原初年代記シノドリ本における活動体と不活動体の区別について」『古代ロシア研究』1962, v.2, pp.53-95.
6. Борковский, В.И., Кузнецов, П.С., *Историческая грамматика русского языка* (『ロシア語歴史文法』), М., 1963, pp.208-211.
7. Борковский, В.И., Кузнецов, П.С., *Историческая грамматика русского языка*, pp.208-211; Черных, П.Я., *Историческая грамматика русского языка* (『ロシア語歴史文法』), М., 1954, p.165.
8. ボルコフスキーとクズネツォフによれば, 1284年に成立したリャザン教会法典集に *иже камень вьргъ на пѣса и въ члѣка оулучитъ*「石を犬に(生・対格)投げて人に当てた者は」とあるという。cf. Борковский, В.И., Кузнецов, П.С., *Историческая грамматика русского языка*, p.209.
- また原初年代記のラヴレンチー写本にも, *и повелѣъ раздраждити быка; и быка пугиша; и похвати рукою за бокъ*「そこで彼は雄牛を(生・対格)いらだたせるように命じたので, 人々は雄牛を(生・対格)放した。彼は雄牛の(生・対格)わき腹を手で掴んだ」という例がみられる。
9. Борковский, В.И., Кузнецов, П.С., *Историческая грамматика русского языка*, p.208.
10. Черных, П.Я., *Историческая грамматика русского языка*, pp.165-166.
11. ポーランド語では活動体名詞と不活動体名詞はそれぞれ *rzeczowniki żywotne* および *nieżywotne* といい, 「男人体」は *formy męskoosobowe*, 「非男人体」は *formy rzeczowe* といっているようである。cf. Кротовская, Я., Гольдберг, Б., *Практический учебник польского языка* (『実用ポーランド語文法』), М., 1959, pp.328-329. これに対してたとえばグラパンは「男人体」と「非男人体」をそれぞれ *sous-genre personnel* と *sous-genre non-personnel* としている。しかしこれは誤解されやすく, 適当な述語ではないようにおもわれる。cf. Grappin, Henri, *Grammaire de la langue polonaise*, Paris, 1949, pp.34-35.
12. Vážný, Václav (1892-1966), *Historická mluvnice česká*, 2, Tvarosloví (『チェコ歴史文法』第2巻「形態論」), Praha, 1964, pp.9-12.
13. *idem*, p.28.
14. “Cet usage, surprenant au premier abord, n'est en aucune manière un emploi du génitif au lieu de l'accusatif: il s'agit de formes qui servent, au besoin, d'accusatifs.” (Meillet, Antoine, *Le Slave Commun*, 2-me édition revue et augmentée avec concours de A. Vaillant, Paris, 1934, p.463)
15. Черных, П.Я., *Историческая грамматика русского языка*, p.164.
16. Спринчак, Я. А., *Очерк русского исторического синтаксиса* (『ロシア語歴史統語論概論』), Киев, 1960, p.167.
17. Meillet, Antoine, *Le Slave Commun*, p.406.
18. Real Academia Española, *Grammatica de la Lengua Española* (スペインアカデミー『スペイン語文法』), Madrid, 1934, p.191.

19. 詳しくは、山口巖「ノヴゴロド原初年代記シノダリ本における活動体と不活動体の区別について」参照。
20. 山口巖「古代ロシア語における形容詞長語尾形と短語尾形の機能について」(О функциях полной и краткой форм имен прилагательных древнерусского языка『言語研究』1962, v.41 pp.28-54; 「古代ロシア語形容詞の長語尾・短語尾両形の職能と形容詞の種類との相関について」『古代ロシア研究』1964, v.4, pp.145-166.
21. Kopečný, František (1909-), *Základy české skladby* (『チェコ語統語論の基礎』), Praha, 1962, p.182.
22. Kopečný, F., *op. cit.*, p.181. また Trávníček, František (1927-1987), *Mluvnice spisovné češtiny*, 2 (『チェコ文章語文法』第2巻), Praha, 1951, pp.1099-1100 参照。
23. АН СССР, *Грамматика русского языка*, т.2, Синтаксис, ч.1 (1960年の科学アカデミーの『ロシア語文法』(いわゆる「60年版アカデミーロシア文法」)第2巻「統語論」第1部), М., 1960, p.444 および АН СССР, *Русская грамматика*, т.2, Синтаксис (1980年の科学アカデミーの『ロシア語文法』(いわゆる「80年版アカデミーロシア文法」)第2巻「統語論」), М., 1980, p.295-296.
24. ただし stár のばあいには、人を表すものというだけでなく、その人が男性単数であるばあいにかぎって短語尾形が使われる。これに対して人を表していても、それが男性以外のものであれば、長語尾形が用いられる。Jak je stár./Jak je stará, staré, staří など。cf. Trávníček, F., *Mluvnice spisovné češtiny*, 2, pp.1099-1100.
25. Trávníček, F., *Mluvnice spisovné češtiny*, 2, p.1099. ヴァージニーによれば1300年ごろに最も多く短語尾形が用いられていたという。cf. Vážný, V., *Historická mluvnice česká*, 2, Tvarosloví, p.100.
26. 正確には14世紀の末から byé の変化形にかわって -e/a(š)m, -e/aš, -e/ašmy, -e/ašcie などの形が自由に能動完了分詞第二形だけでなく、接続詞などにもつけられるようになり、やがて15世紀の末から現在のように能動完了分詞第二形につくようになった。cf. Stieber, Zdzisław (1903-1980), *Zarys grammatiki porównawczej języków słowiańskich* (『スラヴ語比較文法概説』), Warszawa, 1979, pp.235-236. また byé の現在形が三人称単数の形を語幹にしたものは、いま述べた能動完了分詞第二形に人称要素のついた形の類推であるという。cf. *Encyklopedia polska*, t.3, dział 3, część 2, Język polski i jego historia (『ポーランド百科辞典』第3巻第3編「ポーランド語とその歴史」), Kraków, 1915, p.101; Klemensiewicz, Zenon (1881-1969), *Historia języka polskiego*, Warszawa (『ポーランド語史』), 1976, p.303 (この二つの文献は京都大学文学部佐藤昭裕氏の教示による)。
27. これについては、山口巖「スラヴ語における非人称受動表現」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』1981, v.2(2), pp.103-123 参照。
28. この類に属するものはこのほか、заметно「明らかだ」、жаль「惜しい、悲しい」、жалко「かわいそうだ、気の毒だ」、надо「必要だ、欲しい」、нужно「が要る、必要とする」、необходимо「不可欠だ」、удобно「必要だ、望ましい」などがある。cf. АН СССР, *Русская грамматика*, т.2, Синтаксис, 1980, pp.325-327.
29. Виноградов, В.В., *Исследования по русской грамматике* (『ロシア文法研究』), М., 1975, p.30. 最近ではこの種の語を「述詞」предикативと呼んでいるようである。cf. АН СССР, *Русская грамматика*, т.2, Синтаксис, 1980, p.215.
30. АН СССР, *Русская грамматика*, т.2, Синтаксис, 1980, pp.129-131.
31. たとえば、泉井久之助『言語の構造』p.114.
32. Kopečný, F., *Základy české skladby*, p.142.
33. Československá Akademie Věd, *Русская грамматика* (チェコアカデミー『ロシア文法』), I-II, Praha, 1979.
34. Československá Akademie Věd, *Русская грамматика*, I, p.175.
35. Kopečný, František, *Základy české skladby*, p.103.
36. *idem*, p.105.
37. Československá Akademie Věd, *Русская грамматика*, I, p.179.
38. Kopečný, František, *Základy české skladby*, p.106.

39. 下宮忠雄『バスク語入門』大修館書店、東京、1979.
40. 山口巖「存在文と存在否定文について」『言語研究』75, 1979, pp.1-30.
41. cf. Шахматов, А.А., *Синтаксис русского языка*, 1941, pp.478-479.

第 3 部

1. V の星積はまた全称言語 universal language ともいわれるようである。cf. 栗原俊彦・吉田将『言語理論』〈情報科学講座〉C.10.1, 共立出版, 1960, p.5. この文献の中に、「分析モデルによる言語理論」として、クラギナ「集合論に基づいた文法的諸概念の決定の一つの方法」(Кулагина, О.С., Об одном способе определения грамматических понятий на базе теории множеств, *Проблемы кибернетики*, 1958) およびレヴジン『言語モデル』(*Модель языка*, М., 1962) による言語理論が述べられている。
2. これはチョムスキーの「句構造文法」以来周知のことになった。栗原・吉田の上述の著書にも、「生成文法による言語理論」として論じられている。
3. これについての平明な説明は、矢野健太郎『集合』〈新しい数学へのアプローチ〉1, 共立出版, 1965 にみえる。
4. たとえば、栗原・吉田の上述の著書, p.7.
5. レヴジンも *Модель языка* では、クラギナに従って「構造」という語を用いていたが、(*Метод моделирования и типология славянских языков* 『モデル化の方法とスラヴ語の類型学』 М., 1967) においては、「構造」という語は統語的依存関係について用いるので、この用語を避けて、「写像」という用語を用いるとしている [RM 86-87].

第 4 部

1. ヴィルヘルム・トムセン著、泉井久之助・高谷信一訳『言語学史』弘文堂, 1953, p.136.
2. *idem*, p.143.
3. Delbrück, Berthold, *Einleitung in das Sprachstudium der indogermanischen Sprachen*, 6 Aufl., Leipzig, 1919; Звегинцев, В.А., *История языкознания XIX-XX веков в очерках и извлечениях*, ч.1, М., 1964, p.219.
4. Saussure, Ferdinand de, *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*, Paris, 1879; ロシア語訳: Мемуар о первоначальной системе гласных в индоевропейских языках, Фердинанд де Соссюр, *Труды по языкознанию* (フェルディナン・ドゥ・ソシュール『言語学論集』), М., 1977, pp.302-557.
5. 高津春繁『印欧語比較文法』(岩波全書), 東京, 1954.
6. Saussure, Ferdinand de, Contribution à l'histoire des aspirées sourdes, *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* (BSLP), t.7, 1922.
7. Климов, Г.А., *Вопросы методики сравнительно-генетических исследований* (『比較的・発生的研究方法の諸問題』), Л., 1971, p.45.
8. Hjelmslev, Trolle Louis, *Prolegomena to a theory of language*, tr. by Francis J. Whitfield, Madison, 1961, p.11.
9. Greenberg Joseph H., *Language universals with special reference to feature hierarchies*, The Hague-Paris, Mouton, 1966; *ejusdem*, Some generalizations concerning glottalic consonants, especially implosives, *International Journal of American Linguistics (IJAL)*, 1970, v.36, No.2, pt.1, pp.123-145; Campbell, L., On glottalic consonants, *IJAL*, 1973, v.39, No.1, pp.44-46; Меликишвили, И.Г., *Отношение маркированности фонологии (условия маркированности в классе шумных фонем)*. Автореферат канди-

- датской диссертации, Тбилиси, 1972; *ejusdem*, К изучению иерархических отношений единиц фонологического уровня, *Вопросы языкознания* (ВЯ), 1974, No.3, pp.94-105.
10. Jakobson, Roman, *Typological studies and their contribution to historical comparative linguistics, Reports for the VIIIth International Congress of Linguists*, Oslo, 1957.
 11. Jucquois, G., La structure des racines en indo-européen envisagée d'un point de vue statistique, *Linguistic Research in Belgium*, Wetteren, 1966.
 12. Гамкрелидзе, Т.В., Глоттальная теория: новая парадигма в индоевропейском сравнительном языкознании (『声門説, 印欧比較言語学における新たなパラダイム』), 1987, ВЯ, No.4, pp.26-34.
 13. *idem*, p.27.
 14. *idem*, p.27.
 15. *idem*, p.28.
 16. *idem*, p.29, 脚注.
 17. Haider, H., The fallacy of typology. Remarks on PIE stop-system, *Lingua*, 1985, v.65.
 18. ガムクレリゼはグリーンバークの論文を特定していないが, これは, Some generalizations concerning glottalic consonants, especially implosives, *IJAL*, 1970, v.36, No.2, pt.1, pp.123-145 を指していると思われる.
 19. Нерознак, В.П., Индоевропейские языки (『印欧諸語』), *Сравнительно-историческое изучение языков разных систем. Современное состояние и проблемы* (『異なる体系に属する諸言語の比較・歴史的研究. その現状と問題点』), М., 1981, p.41.
 20. Hopper, Paul J., Glottalized and murmured occlusives in Indo-European, *GLOSSA. An International Journal of Linguistics*, 1973, v.7, No.2, pp.141-166; *ejusdem*, The typology of Proto-Indo-European segmental inventory, *The Journal of Indo-European Studies*, 1977, v.5, No.1, pp.41-53; *ejusdem*, Areal typology and the early Indo-European consonant system, *The Indo-Europeans in the Fourth and Third Millennia*, ed. by Edger C. Polomé, Ann Arbor, 1982, pp.121-139.
 21. Haudricourt, A.-G., Les mutations consonantiques (occlusives) en indo-européen, *Mélanges linguistiques offerts à É. Benveniste*, Louvain, 1975, pp.267-272.
 22. Mayrhofer, M., *Indogermanische Grammatik*, Bd.1, Halbband 2: Lautlehre (Segmentale Phonologie des Indogermanischen), Heidelberg, 1986; *ejusdem*, Sanskrit und die Sprachen Alteuropas. Zwei Jahrhunderte des Widerspiels von Entdeckungen und Irrtümern, *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen*, 1983, Philol.-Hist. Klasse, No.5.
 23. Lehmann, Winfred Ph., *Proto-Indo-European phonology*, Austin, 1952; *ejusdem*, Reflexes of PIE $d < t'$, *Linguistics across historical and geographical boundaries*, v.1: Linguistic theory and historical linguistics, Berlin, 1986.
 24. Bomhard, Alan R., The Indo-European phonological system: New thoughts about its reconstruction and development, *ORBIS. Bulletin International de Documentation Linguistique*, 1979, t.28, No.1.
 25. Normier, R., Indogermanische Konsonantismus, germanische "Lautverschiebung" und Vernersches Gesetz, *Zeitschrift für Vergleichende Sprachforschung, KZ*, 1977, Bd.91, Hf.2, pp.171-217.
 26. Нерознак, В.П., *Индоевропейские языки*, p.41.
 27. Szemerényi, Oswald, Recent developments in Indo-European linguistics, *Transactions of the Philological Society*, L., 1985, p.12; Гамкрелидзе, Т.В., Глоттальная теория: новая парадигма в индоевропейском сравнительном языкознании, p.30.
 28. Гамкрелидзе, Т.В., *op. cit.*, p.26.
 29. Meillet, Antoine, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, 8-éd. (『印欧語比較研究序説』第8版), Paris, 1953, pp.173-174.
 30. Benveniste, Émile, *Origines de la formation des noms en indo-européen* (『印欧語の名詞形成の起源』), Paris, 1935, pp.170-171.

31. この語はアリストテレスにみられるという。この語を含むギリシア語の現在形の重複については、Chantraine, Pierre, *Morphologie historique du grec* (『ギリシア語歴史形態論』), 2-éd., Paris, 1967, pp.209-212.
32. Тронский, И.М., *Историческая грамматика латинского языка* (『ラテン語歴史文法』), М., 1960, p.28.
33. たとえば、高津春繁『印欧語比較文法』p.146.
34. 高津春繁『印欧語比較文法』pp.66-75.
35. たとえば Szemerényi, O., *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft*, Darmstadt, 1970; ロシア語訳: Семереньи, О., *Введение в сравнительное языкознание* (『比較言語学序説』), М., 1980, pp.72-73.
36. Семереньи, О., *Введение в сравнительное языкознание*, pp.79-80.
37. Benveniste, É., Sur la phonétique et la syntaxe de l'arménien classique, *BSLP*, 1959, t.54, fasc.1, Paris, pp.46-68; Vogt, H., Les occlusives de l'arménien, *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap*, 1958, Bd.13, pp.143-161.
38. 高津春繁『印欧語比較文法』p.78.
39. Burrow, Thomas, *The Sanskrit language*, 2nd ed., London, 1959; ロシア語訳: Барроу, Т., *Санскрит* (『サンスクリット』), М., 1976, pp.78-79.
40. Ernout, A., Meillet, A., *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, 4-éd., Paris, 1959.
41. Климов, Г.А., *Вопросы и методики сравнительно-генетических исследований*, p.3. スカルモフスキーによれば、カシミール語はイラン語派のグルド諸語に属し、グルド諸語の中で文字をもつ唯一の言語であるという。最古の文献は14世紀に遡るという。またヤズグラミ語は同じくイラン語派に属し、ワハン語、ムンジャーニ語、イシカーシム語等とともに、パミール諸語を構成するという。この言語をはなす人々の数はおよそ二千人で、文字はなく、ヤズグラミ河の下流に住むという。cf. Bednarczuk, Leszek (ed.), *Języki indoeuropejskie* (『印欧諸語』), t.1, Warszawa, 1986, p.190, p.224.
42. Uhlenbeck, Christian Cornelius, Agens und Patiens in Kasussyntax der indogermanischen Sprachen, *Indogermanische Forschungen (IF)*, 1901, Bd.12, H.1/2, pp.170-171; Десницкая, А.В., Вопросы типологии предложения и проблема происхождения номинативного строя индоевропейских языков в исследованиях советских лингвистов 30-40-х годов (『30-40年代のソヴェトの言語学者の研究における、文の類型学の諸問題と印欧諸語の主格言語類型の問題』), *Сравнительное языкознание и история языков* (『比較言語学と諸言語の歴史』), Л., 1984, pp.7-56.
43. Pedersen, Holger, Neues und Nachträgliches, *KZ*, 1907, Bd.40, H.2, pp.129-217.
44. Meillet, A., *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Paris, 1922.
45. Meillet, A., *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, 8-éd., p.189.
46. *idem*, p.190.
47. *idem*, pp.339-340.
48. *idem*, p.343.
49. van Wijk, Nicolaas, *Der nominale Genetiv Singular im Indogermanischen in seinem Verhältnis zum Nominativ*, Zwolle, 1902.
50. Kuryłowicz, Jerzy, *Études indo-européennes* (『印欧語研究』), Kraków, 1935, p.165.
51. すなわち印欧語の語尾 *-és のアクセントが失われることによって語尾の母音度が零階梯になり、形態素の境界に並立する二子音の一方が失われることにもなつて、いわゆる代償延長 Kompensationsdehnung が生じるというのである。たとえばギリシア語の場合、*ποδσ > πως*, サンスクリットの場合、*podσ > pāt* のようになる。
52. Иванов, Вячеслав Всеволодович, Эргативная конструкция в общеиндоевропейском (『印欧語における能格構造』), *Эргативная конструкция предложения в языках различных типов. Тезисы докладов*, Л., 1964 p.18; *ejusdem*, *Общеиндоевропейская, праславянская и анатолийская языковые системы* (『印欧共通語、スラヴ祖語、アナトリア諸語の言語体系』), М., 1965, pp.51-54.

53. Савченко, А.Н., Эргативная конструкция предложения в праиндоевропейском языке (『印欧祖語における文の能格構造』), *Эргативная конструкция предложения в языках различных типов*, Л., 1967, pp.74-90; *ejusdem*, Этапы развития грамматического строя праиндоевропейского языка (『印欧祖語の文法構造の発達の諸段階』), *Lingua Posnaniensis*, 1968, XII/XIII; *ejusdem*, Сравнительная грамматика индоевропейских языков (『印欧語比較文法』), М., 1974.
54. Десницкая, А.В., Развитие категории прямого дополнения в индоевропейских языках (Докт. Диссертация).
55. *ejusdem*, К истории развития грамматической категории винительного падежа в индоевропейских языках (『印欧語における対格という文法カテゴリーの発達史によせて』).
56. Функции винительного падежа в языке гомеровской “Илиады”.
57. D 90 のように表示しているのは、デスニツカヤの論文のページ数である。邦訳は、高津春繁・呉茂一訳『ホメーロス』(筑摩書房世界文学体系 1, 1961)を使用した。前後の 267 のような数字は邦訳書のページ数を示す。
58. 高津春繁『ギリシア語文法』岩波書店, 1960, pp.258-259.
59. категория глагольной переходности.
60. Kuryłowicz, J., *The Inflectional categories of Indo-European* (『印欧語の屈折カテゴリー』), Heidelberg, 1964, p.57.
61. Перельмутер, И.А., О так называемых аномальных перфектах в языке гомеровского эпоса (『ホメーロスの叙事詩における, いわゆる不規則完了形について』), *Общеиндоевропейский и греческий глагол* (『印欧共通語及びギリシア語の動詞』), Л., 1977, pp.16-30.
62. Индоевропейские глагольные основы с исходом на долгий гласный (『長母音に終わる印欧語の動詞語幹』), *Общеиндоевропейский и греческий глагол*, p.109.
63. Об оппозиции переходность/непереходность в системе индоевропейских глаголах (『印欧語の動詞における他動性/自動性の対立について』), *Общеиндоевропейский и греческий глагол*, pp.120-121.
64. これについては, 以下の動詞の項を参照.
65. Benveniste, É., *Origines de la formation des noms en indo-européen*, Paris, 1935.
66. *idem*, p.91.
67. *idem*, pp.87-95.
68. Тронский, И.М., *Общеиндоевропейское языковое состояние* (『印欧共通語の言語状態』), Л., 1967, p.80. 格についてのより詳細な議論は, 同書, pp.69-82 参照のこと.
69. Тронский, И.М., *Общеиндоевропейское языковое состояние*, pp. 54-55. トロンスキーによれば (*idem*, p.79), レーマン, クリヴァーチも同様の結論に達しているという. cf. Lehman, Winfred Ph., On earlier stages of the Indo-European nominal inflection, *Language*, 1958, v.34, No.2, pp.179-202; Kuryłowicz, J., *The Inflectional categories of Indo-European*, p.196.
70. Древнегерманский объектный дательный (『古ゲルマン語の目的与格について』).
71. К вопросу о развитии номинативной типологии предложения из активной (Дополнение к статье о древнегерманском объектном дательном падеже) (『活格文類型から主格文類型への発達の問題によせて (古ゲルマン語の目的与格に関する論文への補遺)』).
72. 高津春繁『印欧語比較文法』p.214.
73. Meillet, A., *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, 8-éd., p.324.
74. Тронский, И.М., *Историческая грамматика латинского языка*, p.149.
75. *idem*, p.97.
76. Vaillant, André, *Grammaire comparée des langues slaves*, t.2 (『スラヴ語比較文法』第2巻), 1-ère partie, Lyon-Paris, 1958, p.35.
77. Тронский, И.М., *Общеиндоевропейское языковое состояние*, p.81.

78. Иванов, В.В. *Хеттский язык* (『ヒッタイト語』), М., 1963, pp.135-136.
79. *idem*, p.129.
80. *idem*, pp.134-135.
81. Тронский, И.М., *Общеславянское языковое состояние*, p.80.
82. Lewy, Ernest, *Zum Dual und zum Tocharischen*, 1913, *KZ*, Bd.45, pp.365-368; Тронский, И.М., *Общеславянское языковое состояние*, p.79.
83. Benveniste, É., *Origines de la formation des noms en indo-européen*, pp.74-75.
84. Vaillant, André, *Grammaire comparée des langues slaves*, t.2, 2-ème partie, p.451; Тронский, И. М., *Историческая грамматика латинского языка*, p.186.
85. Meillet, Antoine, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, 8-éd., p.332, および高津春繁『印欧語比較文法』(p.249)にも、これとほとんど同じ記述がみえる。
86. Иванов, В.В., *Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индоевропейские истоки* (『スラヴ, バルトおよび初期バルカン語の動詞。印欧語の源泉』), М., 1981, p.20-24.
87. Иванов, В.В., *Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индоевропейские истоки* p.21 & seq.; Jensen, Hans, *Bemerkungen zum urgeschlechtigen Personalpronomen des Indogermanischen*, *IF*, 1930, Bd.48, pp. 117-126.
88. Watkins, Calvert, *Geschichte der indogermanischen Verballexion*, *Indogermanische Grammatik* (『インド・ゲルマン語文法』), Bd.3: Formenlehre, Teil 1, Heidelberg, 1969, p.47.
89. Иванов, В.В., *Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индоевропейские истоки*, p.22.
90. Иванов, В.В., *ibid.*; Илич-Свитыч, В.М., *Опыт сравнения постпратических языков* (『ノストラ諸語の比較試論』), т.2, М., 1976, p.56.
91. 高津春繁『印欧語比較文法』p.253.
92. Барроу, Т., *Санскрит*, p.248.
93. 高津春繁『印欧語比較文法』p.253.
94. Иванов, В.В., *Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индоевропейские истоки*, pp.22-23.
95. Иванов, В.В., *Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индоевропейские истоки*, pp.22-23; Erhart, A., *Studien zur indoeuropäischen Morphologie*, Opera universitatis Purkynianae Brunensis facultas philosophica, 1970, No.148, Brno, pp.38-41; *eiusdem*, *Pluralformen und Pluralität*, *Archiv Orientální (AO)*, 1973, 41, p.253; Forchheimer, P., *The Category of person in language*, London, 1953, p.98 & seq., p.114 & seq.
96. Иванов, В.В., *Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индоевропейские истоки*, p.24.
97. Meillet, Antoine, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, 8-éd., p.295.
98. Vaillant, A., *Grammaire comparée des langues slaves*, t.2, 1-ère partie, pp.35-36.
99. Chantraine, P., *Morphologie historique du grec*, pp.39-40.
100. Vaillant, A., *Grammaire comparée des langues slaves*, t.2, 1-ère partie, p.44.
101. 高津春繁『印欧語比較文法』p.199.
102. Vaillant, A., *Grammaire comparée des langues slaves*, t.2, 1-ère partie, p.45.
103. Добрев, Иван, *Старобългарска граматика, Теория на основите*, София, 1982. (イヴァン・ドブレフ著, 石田修一訳『古代ブルガリア文法, 語幹論』大阪外国語大学学術研究双書 8, 1993). これは、訳者の大阪外国語大学の石田修一教授の御好意で訳稿の段階で、見せて戴く機会を得た。記して感謝する次第である。
104. *idem*, § 24, pp.153-156.
105. Rosenkranz, Bernhard, *Vergleichende Untersuchungen der altanatorischen Sprachen* (『古アナトリア語比較研究』), *Trends in linguistics — State of the Art, Reports* 8, The Hague-Paris-New York, 1978, p.71.

106. Watkins, C., Geschichte der indogermanischen Verbalflexion, *Indogermanische Grammatik*, Bd.3, Teil 1, pp.46-48.
107. Meillet, A., *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, 8-éd., p.227.
108. 高津春繁『印欧語比較文法』p.269.
109. Meillet, A., *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, 8-éd., pp.232-235; 高津春繁『印欧語比較文法』pp.276-281. インユンクティブについては, Hoffmann, Karl, *Der Infinitiv im Veda*, Heidelberg, 1967 参照.
110. Meillet, A., *op. cit.*, pp.227-229.
111. 辻直四郎『サンスクリット文法』岩波書店, 1974, p.107. これはギリシア語では ϵ - にあたる.
112. Барроу, Т., *Санскрит*, p.293.
113. Беседина-Невздорова, В.П., *Старославянский язык* (『古スラヴ語』), Харьков, 1962, p.281.
114. Vaillant André, *Grammaire comparée des langues slaves*, t.3 (『スラヴ語比較文法』第3巻), Paris, 1966, pp.15-17.
115. Leskien, August, *Handbuch der altbulgarischen Sprache*, 8 Aufl., Heidelberg (『古ブルガリア語提要』), 1962, pp.131-132.
116. Vaillant A., *Grammaire comparée des langues slaves*, t.3, p.56.
117. Rosenkranz, B., *Vergleichende Untersuchungen der altanatorischen Sprachen*, p.77; Иванов, В.В., *Хеттский язык*, pp.145-150; Watkins, Calvert, Geschichte der indogermanischen Verbalflexion, *Indogermanische Grammatik*, Bd.3, Teil 1, pp.76-78.
118. Rosenkranz, B., *Vergleichende Untersuchungen der altanatorischen Sprachen*, p.79, pp.83-84; Семереньи, О., *Введение в сравнительное языкознание*, pp.260-263.
119. Watkins, C., Geschichte der indogermanischen Verbalflexion, *Indogermanische Grammatik*, Bd.3, Teil 1, p.78.
120. Иванов, В.В., *Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индоевропейские истоки*, p.5; Pedersen, H., Neues und Nachträgliches, *KZ*, 1907, Bd.40, H.2, pp.129-217.
121. Иванов, В.В., *Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индоевропейские истоки*, p.5; Pedersen, H., Zur Frage nach der Unverwandtschaft des Indoeuropäischen mit dem Ugrofinnischen, *Mémoires de la Société Finno-Ougrienne*, 1933, 68, pp.308-325.
122. Иванов, В.В., *Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индоевропейские истоки*, p.5.
123. *ibid.*
124. Иванов, В.В., *Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индоевропейские истоки*, p.5; Pedersen, H., *Hittitisch und die anderen indoeuropäischen Sprachen*, København, 1938, pp.80-86.
125. Иванов, В.В., *Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индоевропейские истоки*, p.6; Stang, Christian S., Perfektum und Medium, *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap*, 1932, Bd.6 Oslo; Kuryłowicz, J., Les désinences moyennes de l'indo-européen et du hittite, *BSLP*, 1932, t.30, fasc.1, p.14,
126. たとえば, 上述の二人のほか, Safarewicz, J., Les désinences moyennes primaires de l'indo-européen (1938), *Studia językoznawcze*, Warszawa, 1967, p.50; Claffin, E.F., The voice of the Indo-European perfect, *Language*, 1939, v.15, No.3, p.158; Specht, F., Zur Perfektbildung im Germanischen und Indogermanischen, *KZ*, 1937, Bd.64, H.1/2 など. cf. Перельмутер, И.А., О так называемых аномальных перфектах в языке гомеровского эпоса, *Общеславянский и греческий глагол*, pp.18-19.
127. Перельмутер, И.А., О так называемых аномальных перфектах в языке гомеровского эпоса, *Общеславянский и греческий глагол*, p.19; Kuryłowicz, J., *L'apophonie en indo-européen*, Wrocław, 1956, p.43; *ejusdem*, *The Inflectional categories of Indo-European*, Heidelberg, 1964, p.63 &

- seq.; Bader, F., Réflexions sur le verbe indo-européen, *Revue de Philologie, de Littérature et d'Histoire anciennes*. 3-ème série, t.45, fasc.2, 1971, p.305, p.308; *ejusdem*, Persée, *πέρω* et l'expression archaïque du temps en indo-européen, *BSLP*, 1974, t.69, fasc.1, p.11, p.12.
128. Иванов, В.В., *Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индоевропейские истоки*, p.7.
129. *ibid.*
130. Топоров, В.Н., К вопросу об эволюции славянского и балтийского глагола, *Вопросы славянского языкознания*(ВСЯ)(「スラヴ語およびバルト語動詞の発達の問題によせて」『スラブ言語学の諸問題』), вып.5, М., 1961, pp.35-71.
131. *idem*, pp.35-36.
132. *idem*, pp.60-61.
133. *idem*, p.61
134. *ibid.*
135. これについてはメイエの論文があるという。Meillet, A., A propos de vieux irlandais *berí*, *Mémoire de la Société de linguistique de Paris (MSL)*, 14, 1912, pp.412-415. cf. Топоров, В.Н., К вопросу об эволюции славянского и балтийского глагола, (ВСЯ), p.62.
136. Топоров, В.Н., К вопросу об эволюции славянского и балтийского глагола, (ВСЯ), pp.62-63.
137. ただし **-ōm* > *-ō* の変化については, たとえば他方で **kamōn* > *kamy*「石」のような, 語末における *ōm* > *y* の音韻変化との関係が問題になり, メイエ, スタング等の間に論争が行われたが, 現在のところ, 未だ結論が得られたわけではない. cf. Топоров, В.Н., К вопросу об эволюции славянского и балтийского глагола, p.64.
- ヲトキンスはソヴエトにおけるこのような考えについて触れ, この考えがベデルセンに由来するものであることを, 指摘している. cf. Watkins, C., *Geschichte der indogermanischen Verbalflexion*, *Indogermanische Grammatik*, Bd.3, Teil 1, p.66.
138. *idem*, p.67.
139. Kuryłowicz, J., *The Inflectional categories of Indo-European*, p.56 & seq.

索引

人名索引

- アシハマフ (Ашхамаф, Н.Ф.) 77
 アリストテレス (384-322 B.C.) 296
 アブドゥラーエフ (Абдуллаев, Запир Гасанкович) 51
 アプレシャン (Апресян, Юрий Дереникович 1930-) 39
 アラクチエーフ (Аракчеев, Алексей Андреевич 1769-1834) 281
 イヴァーノフ (Иванов, Вячеслав Всеволодович 1929-) 211, 213, 215, 221, 240, 251-254, 256-258, 266, 267, 272
 イヴァン・カリタ (Иван Калита 在位 1325-1340) 132
 イェルムスレウ (Hjemslev, Louis Trolle 1899-1965) 24, 215
 イェンセン (Jensen, Hans 1884-1973) 256
 泉井久之助 (1905-1983) 10, 111
 イリツチ・スヴィトウイツチ (Иллич-Свитыч, Владимир Маркович 1934-1966) 257
 ヴァイヤン (Vaillant, André 1890-1977) 251, 259, 260, 264, 265
 ヴァージニー (Vážný Václav 1892-1966) 292
 ヴェンドリエス (Vendryés Joseph 1875-1960) 35
 ヴィノグラードフ (Виноградов, Виктор Владимирович 1894/95-1969) 37, 115, 150
 ヴィンクラー (Winkler, Hugo 1863-1913) 213
 ヴェイク (van Wijk, Nicolaas 1880-1941) 240, 251, 252
 ヴェルネル (Verner, Karl 1846-1896) 231
 ウスラル (Услар, Петр Карлович 1816-1875) 41, 51, 61, 64
 ウーレンベック (Uhlenbeck, Christian Cornelius 1866-1951) 62, 64, 239
 ウーレンベック (Uhlenbeck, E.A.) 35
 ウルフィラ (Wulfila ca. 310-383) 212
 ヴント (Wundt, Wilhelm 1832-1920) 110
 エアハルト (Erhart, A.) 258
 エビング (Ebbing, J.E.) 93
 エルヌー (Ernout, Alfred 1879-1973) 237
 エンゼリン (Enzelīns, Jānis 1873-1961) 268, 269
 オズグッド (Osgood, Ch.E. 1916-) 17
 オストホーフ (Osthoff, Hermann 1847-1909) 108, 211
 オタイナ (Отаина, Г.А.) 289
 オドリクル (Haudricourt, André Georges 1911-) 221
 オトレンプスキー (Otrębski, Jan 1889-1971) 268
 オホチナ (Охотина, Наталия Вениаминова 1927-) 113
 ガイガー (Geiger, Wilhelm 1856-1943) 62
 ガイダロヴァ (Гайдалова, Ф.Ф.) 291
 影山太郎 53

- カツネリソン (Кацнельсон, Соломон Давидович 1907-1985) 37, 44-47, 64, 73
 ガムクレリゼ (Гамкрелидзе, Тамаз Валерианович 1929-) 109, 211, 213-237, 239, 240, 251, 252, 254, 255, 258-262, 271, 272
 カルツェフスキー (Карцевский, Сергей Осипович 1884-1955) 26
 カルナップ (Carnap, Rudolf 1891-1970) 24
 キャンベル (Campbell, L.) 218
 キュニー (Cuny, Albert 1870-1947) 94
 クズネツォフ (Кузнецов, Петр Саввич 1899-1968) 292
 グフマン (Гухман, Мирра Моисеевна 1904-1989) 46, 47, 67, 78, 85, 86, 110, 127, 128, 247, 249
 グラスマン (Grassmann, Hermann Günther 1809-1877) 224
 クラギナ (Кулагина, О.С.) 294
 グラパン (Grappin, Henri) 292
 グリーソン (Grierson, George Abraham 1851-1941) 62
 グリム (Grimm, Jacob 1785-1863) 221, 230, 231
 栗原俊彦 294
 クリモフ (Климов, Георгий Андреевич 1928-) 16, 18, 23, 28, 33, 36, 38, 40, 44, 47, 48, 50, 51, 53-55, 57-60, 64, 66, 71, 73, 79, 85-87, 90-92, 95, 102, 103, 107, 110-118, 157, 159, 207, 214, 238, 239, 261, 272
 クリラヴィッチ (Kuryłowicz, Jerzy 1895-1978) 213, 240, 245, 247, 266, 267, 270, 271
 グリーンバーグ (Greenberg, Joseph Harold 1915-) 17, 18, 28, 218, 221
 クーン (Kuhn, Thomas Samuel 1922-) 221
 クルシェフスキー (Крушевский, Николай Вячеславич 1851-1887) 280
 クレメンシェウイチ (Klemensiewicz, Zenon 1881-1969) 293
 ケヴェド (Quevedo, L.) 109
 ゲツァゼ (Гецадзе, И.О.) 291
 小泉保 53
 高津春繁 (1908-1973) 234, 251, 257
 コベチニー (Kopečný, Fratišek 1909-) 293
 コムリー (Comrie, Bernard 1947-) 58-60, 78, 79, 88, 90
 サピア (Sapir, Edward 1884-1939) 5-11, 13-16, 28, 29, 31, 32
 サフチェンコ (Савченко, Алексей Нилович 1907-1988) 68, 241
 ジェンキンス (Jenkins, J.J.) 17
 シチエルバ (Шерба, Л.В. 1880-1944) 280
 柴谷方良 53, 54
 下宮忠雄 283
 シャフマトフ (Шахматов, Алексей Александрович 1864-1920) 163
 シャントレーヌ (Chantraine, Pierre 1899-1974) 259
 ジュクワ (Jucquois, G.) 219
 シュタインタール (Steinthal, Heymann 1823-1899) 35
 シュハルト (Schuchardt, Hugo 1842-1927) 61, 64
 シュマルスティエーグ (Schmalstieg, William R. 1929-) 78, 88
 シュミット (Schmidt, Johannes 1843-1901) 211, 212
 シュミット (Schmidt, Wilhelm 1868-1954) 109
 シュライハー (Schleicher, August 1821-1868) 211, 212
 ジュリンスカヤ (Жури́нская, М.А.) 102
 ショール (Шор, П.О.) 283
 ジョーンズ (Jones, William 1746-1794) 19
 シルヴァースタイン (Silverstein, Michael) 78

ジルムンスキー (Жирмунский, Виктор Максимович 1891-1971) 48
 ズヴェギンツェフ (Звегинцев, Владимир Андреевич 1910-1988)
 スカリチカ (Skalička, Vladimír 1909-) 26, 28-33
 ズガル (Sgall, Petr 1926-) 35
 スカルモフスキー 296
 スターリン (Сталин, Иосиф Виссарионович 1879-1953) 39, 40, 42, 43
 スタング (Stang, Christian Schweigaard 1900-1977) 266, 268, 269
 ストロガーノヴァ (Строганова, И.И.) 113
 スニク (Суник, Орест Петрович 1912-1988) 71
 スプリンチャク (Спринчак, Яков Алексеевич) 138
 セメレーニイ (Szemerényi, Oswald 1913-) 221, 228
 セーラー (Seler, E.) 62
 ソヴァ (Сова, Любовь Зиновьевна) 94
 ソシュール (Saussure, Ferdinand de 1857-1913) 24, 26, 35, 37, 213
 ゾンマーフェルト (Sommerfelt, Alf. 1892-1965) 55
 ダーウィン (Darwin, Charles Robert 1809-1882) 20
 ダシコ (Дашко, М.А.) 130
 タチアノス (Tatianos 2 世紀後半) 212
 タルピッツァ (Thalbitzer, William Carl 1873-1958) 64
 チェルヌィフ (Черных, Павел Яковлевич 1896-1970) 134, 138
 チコバヴァ (Чикобава, Арнольд Степанович 1898-1985) 64
 チャコノフ (Дьяконов, Игорь Михайлович 1915-) 112
 チョムスキー (Chomsky, Noam 1928-) 294
 角田太作 53, 56
 ディクソン (Dixon, Robert M.W. 1939-) 54, 55, 59, 78
 ディール (Dirr, Adolf 1867-1930) 51, 64
 デクテレヴァ (Дегтерева, Т.А.) 40
 デスニツカヤ (Десницкая, Агния Васильевна 1912-1992) 37, 39, 44, 45, 56, 94, 95, 112, 240, 241, 243
 245, 247, 248, 250
 デュメジル (Dumézil, Georges Edmond Paul 1898-1986) 66
 デルブリュック (Delbrück, Berthold 1842-1922) 68, 211, 212
 トポロフ (Топоров, Владимир Николаевич 1928-) 35, 267-270
 ドブレフ (Добрев, Иван 1938-) 260, 261
 トムセン (Thomsen, Vilhelm L. P. 1842-1927) 211
 Траウトマン (Trautmann, Reinhold 1883-1951) 268
 Траувニーчек (Trávníček, František 1927-1987) 293
 トルベツコイ (Трубецкой, Николай Сергеевич 1890-1938) 25, 26, 61, 70
 トルンカ (Trnka, Bohumil 1895-1984) 26
 トロンスキー (Тронский, Иосиф Моисеевич 1897-1970) 249, 251, 254
 トロンベッティ (Trombetti, Alfredo 1866-1929) 64
 長野泰彦 53
 ネミロフスキー (Немировский, Михаил Яковлевич 1883-1965) 92, 112
 ネロズナク (Нерознак, Владимир Петрович 1939-) 221
 ノルミール (Normier, R.) 221
 ハイダー (Haider, H.) 221
 橋本萬太郎 52, 53
 バーデル (Bader, F.) 267

バルトリ (Bartoli, Matteo Giulio 1873-1946) 35
 バルトロメイ (Bartholomae, Christian 1855-1925) 226, 227
 パレク (Palek, Bohumil) 35
 バロウ (Burrow, Thomas 1909-) 234, 257, 263
 バンヴニスト (Benvenist, Émile 1902-1976) 55, 127, 222, 232, 237, 248, 249, 254
 ピンダロス 68
 ファイアストーン (Firestone, H.L.) 107
 ブィホフスカヤ (Быховская, С.Л.) 64
 フィリン (Филин, Федот Петр 1908-1982) 282
 フィルモア (Fillmore, Charles J. 1929-) 62
 フィンク (Finck, Franz Nicolaus 1867-1910) 63, 64, 74
 フォクト (Vogt, H.) 232
 フォルヒハイマー (Forchheimer, P.) 258
 ブブリフ (Бубрих, Дмитрий Владимирович 1890-1949) 46
 ブラギンスキー (Брагинский, Иосиф Самуилович 1905-) 282
 ブーリチ (Булич, Сергей Константинович 1859-1921) 280
 ブルックマン (Brugmann, Karl 1849-1919) 211
 フロズニー (Hrozný, Bedřich 1879-1952) 213
 フンボルト (Humboldt, Wilhelm von 1767-1835) 3-5, 24, 27, 29, 35, 36, 38
 ヘーゲル (Hegel, Georg Wilhelm Friedrich 1770-1831) 43
 ベセーザナ・ネヴズドローヴァ (Беседина-Невздорова, Вера Павловна) 264
 ペデルセン (Pedersen, Holger 1867-1953) 217, 218, 239, 265
 ベドナルチュク (Bednarczuk, Leszek) 296
 ヘルンレ (Hoernle, August Frederick Rudolf 1841-1918) 62
 ペレゴ (Perego, Pierre) 21, 22
 ペレリムーテル (Перельмутер, Илья Аронович 1929-) 245, 267
 ボアズ (Boaz, Franz 1858-1942) 5
 ホイジャー (Hoijer, Harry 1904-1976) 29, 103, 107
 ボカーレフ (Бокарев, Анатолий Ал. 1910-1941) 37, 44, 64
 ボゴロディツキー (Богородицкий, Василий Александрович 1857-1941) 280
 ボティエ (Pottier, Bernard 1924-) 15, 28, 29
 ボテプニャ (Потепня, Александр Афанасьевич 1835-1891) 35-37
 ポット (Pott, August Friedrich 1802-1887) 64
 ホッパー (Hopper, Paul J. 1939-) 221
 ボドゥエン・デ・クルテネ (Baudouin de Courtenay, Jan 1845-1929) 24, 30, 35, 38, 44
 ホメーロス 68, 95, 242, 244-247, 249
 ポリヴァーノフ (Поливанов, Евгений Дмитриевич 1891-1938) 40
 ボルコフスキー (Борковский, Виктор Иванович 1900-1982) 292
 ポロメ (Polomé, Edger C. 1920-) 221
 ボンハード (Bomhard, Alan R.) 221
 ボンファンテ (Bonfante, Giuliano Ugo 1904-) 35
 マイヤホファー (Mayerhofer, Manfred 1926-) 221
 マインホフ (Meinhof, Carl 1857-1944) 115
 マゴメドベコヴァ (Магомедбекова, З.М.) 71
 マシュース (Matthews, G.H.) 287
 マースロフ (Маслов, Юлий Сергеевич 1914-1990) 282
 松本克己 53

マテジウス (Mathesius, Vilém 1882-1945) 24-28, 34
 マール (Mapp, Николай Яковлевич 1864/65-1934) 39, 40, 42-45, 47, 61, 62
 マルクス (Marcus, Solomon 1925-) 181, 199
 マルティネ (Martinet, André 1908-) 64, 221
 ミチエレナ (Michelena, Luis) 283
 宮岡伯人 53
 ミュラー (Müller, Friedrich 1834-1898) 61, 64, 74
 ムカジョフスキー (Mukařovský, Jan 1891-1975) 26
 メイエ (Meillet, Antoine 1866-1936) 35, 138, 139, 221, 222, 237, 239, 240, 251, 255, 257, 258, 263
 メシチャニーノフ (Мещанинов, Иван Иванович 1883-1967) 33, 44-47, 64, 65, 105, 106, 251
 メリキシヴィリ (Меликишвили, И.Г.) 218
 メリニチュク (Мельничук, Александр Саввич 1921-) 39
 ヤクピンスキー (Якубинский, Лев Петрович 1892-1945) 280
 ヤコヴレフ (Яковлев, Николай Феофанович 1892-1974) 49, 64, 66, 77
 ヤコブソン (Якобсон, Роман Осипович 1896-1982) 26, 218
 山本秀樹 79, 87
 ラーリン (Ларин, Борис Александрович 1893-1964) 280
 リフチン (Рифтин, Александр Павлович 1900-1945) 48
 ルージチカ (Růžička, Rudolf 1920-) 35
 ルッター (Luther, Martin 1483-1546) 212
 レヴィ (Lewy, Ernest 1881-1966) 254
 レヴィー・ブリュール (Lévy-Bruhl, Lucien 1857-1939) 95
 レスキーン (Leskien, August 1840-1916) 211, 264
 レベジェフ (Лебедев, Константин Александрович 1920-) 63
 レーマン (Lehmann, Winfred Philip 1916-) 221
 レヴジン (Ревзин, Исаак Иосифович 1923-1974) 169, 171, 176, 185, 187, 188, 191, 192, 194-196, 199, 201, 204-206
 ローゼンクランツ (Rosenkranz, Bernhard 1903-) 261
 ロドリゲス (Rodrigues, Aryon Dall'Igna R.) 93
 ワトキンス (Watkins, Calvert 1933-) 256, 261, 265
 吉田將 296

言語索引

アイオワ語 91	(古) アジア諸語 50, 52
(古) アイスランド語 226, 230, 231, 250, 251	アシニボイン (の言) 語 91, 99, 107, 150, 159
アイマラ語 93, 112	アタパスカン語族/語派/諸語 77, 78, 91, 102, 106
(古) アイルランド語 227, 237, 259, 269	アナトリア諸語 228, 252, 272
アヴァール語 41, 42, 44, 50, 51, 64, 71, 72, 82	アナトリア共通語 252
アヴァール・アンディ・ツェス諸語 50	アバザ語 49
アヴェスタ 227, 237, 255, 268	アパッチ語 91
アウェティ語 91	アブヴァフ語 50
アウストロ・アジア諸語 32	アブジュイ方言→アプハズ語
アウストロネシア諸語 32	アドイグ (キャフ/低地チェルケス) 語 49, 72, 77, 79, 84, 102
アグル語 50	アドイグ諸語 66
アサン語 50	

- アブハズ語 49, 60, 65, 82, 235
 アブジュイ(カドル)方言 49
 ブジェドゥグ方言 79
 アブハズ諸語 49
 アブハズ・アディゲ(アブハズ・チェルケス)語派/諸語 49, 72, 82, 84
 アボリジン語 73, 82, 92
 アラビア語 7, 10, 14, 21, 32, 33, 238
 アラワ語 92
 アーリア・ギリシア語 267
 アーリア・ヨーロッパ諸語 39
 アリケム語 91
 アリュトル語 50
 アリン語 50
 アルゴンキン(・リトワ)語/諸語/語族/語派 7, 8, 51, 62, 67, 82, 100
 アルタイ諸言語 9
 アルタイ・チュルク諸語 38
 アルチン語 50
 アルバニア語 23, 42, 43, 226, 228
 アルメニア(の諸言)語 32, 42-44, 139, 228, 230-232, 234
 アルメニア共通基語 231
 古アルメニア語 231
 西アルメニア語 231
 アルメニア方言 231
 アレウト語 50, 106, 251
 アンディ語 50
 安南語 7, 13
 アンバ語 94
 イタリア語 7, 32
 イタリア語派 225, 265, 269
 イテリメン語 50, 81
 イベリア諸語→カルトヴェリ諸語
 イベリア・コーカサス語族 49, 60, 73
 イメレチン方言→グルジア語
 (古)イラン語 127
 イラン語派/諸語 61, 127
 東部イランの諸語 128
 イロクォイ語族 91, 99, 150
 印欧(インド・ヨーロッパの諸(言)語/語族 3, 7, 20, 29, 33, 35, 39, 41, 42, 45, 48, 51, 55, 61, 67, 68, 78, 85, 87, 88, 94, 104, 107, 112, 120, 127, 128, 138, 140, 212, 213, 215, 216, 219, 220, 222, 223, 225, 229, 230, 232-235, 239-242, 244-250, 252, 254-256, 260, 262, 264-273
 非印欧(諸)語 35, 49, 248
 印欧共通(基)語 158, 227, 241
 印欧祖語 92, 104, 105, 108, 213, 216, 217, 219, 220, 222, 224, 231, 239, 247, 258, 262, 265, 270
 イングーシュ語 50
 インド諸語 88, 128
 古代インド語 220, 248, 268
 (北米/アメリカ)インディアン(の言語 5, 7, 8, 32, 67, 73, 82
 インド・イラン語/諸語/語派 20, 88, 117, 118, 127, 128, 225-227, 232-234, 238, 263, 265, 267, 269
 インドネシア諸語 91
 ヴェーダ 128, 240
 ウグロ・フィン語 265
 ウディン語 50, 80, 117
 ウビブ語 49, 84
 ウラルト(の言)語 51, 61, 92
 ウンブリア語 237, 259
 英語 3, 5-7, 10, 11, 12, 14, 22, 26, 30-32, 56, 59, 61, 62, 67, 82, 84, 128, 139, 142, 143, 145, 157, 162, 163, 172, 176, 180, 182, 184, 212
 古英語 230
 英語系ピジン型言語 22
 (古代)エジプトの言語 51
 エスキモー(の言)語 7, 50, 53, 73
 エスキモー・アレウト語族/諸語 50, 73
 エスベラント 180, 183, 187
 エニセイ語族/諸語 35, 50
 エヤク語 91
 エラム語 61, 92
 オジブワ語 67, 100
 オスク語 238
 オーストラリアの(諸)言語 51, 117
 オネイダ語 91
 オノンドガ語 91
 オフォ語 91
 オマグァ語 91
 オランダ語 7
 カイワ語 91
 カシミール語 238
 カズィ・クムフ語→ラク語
 カタウバ語 91
 ガドベリ語 50
 カドル方言→アブジュイ方言
 カバルディン(高地チェルケス)語 49, 72, 84
 カマユラ語 91, 96, 104
 カラ・ラガウ・ラングス 79
 カラチン語 50

- カリエル語 91
- カルタリイ方言→グルジア語
- カルトヴェリ (イベリア・南コーカサス) 諸語 49, 50, 84, 89, 117, 251
- カンボジア語 7
- ギヌフ語 50
- キャプ語→アドイグ語
- ギリシア語 5, 7, 10, 14, 19, 20, 21, 23, 67, 68, 78, 94, 95, 212, 224-227, 232, 234, 237, 238, 240, 248, 249, 252-254, 257, 259, 263-265, 267, 268
- 古代ギリシア諸語 270
- 古代ギリシア語 242, 245, 269
- 古典 (期の) ギリシア語 244, 259
- アルカディア方言/アルゴス方言/テッサリア方言/ドーリア方言/ボエオティア方言/レスビア方言 259
- キプロス方言 252
- ギリシア・アーリア方言 258
- ギリヤーク (ニブフ) 語 50, 105, 106
- グアラニ語 91, 96-98, 99, 109
- クメール語 7
- グレイ方言→グルジア語
- グreek語 91
- クリズ (ジェク) 語 50
- グルジア語 32, 49, 50, 63, 84, 85, 88, 117, 250
- 古グルジア語 62, 81
- ヘブスル方言/カルタリイ方言/イメレチン方言/グレイ方言 50
- クルド語 118
- クレオール型の言語 21, 22
- クレタ語 238
- クロウ語 91
- ゲンジブ語 50
- ケット語 50
- ケルト語 19
- ケルト語派 265
- ゲルマン語/諸語/語派 225, 230, 231
- 古ゲルマン語 250
- ケレク語 50
- ケントゥム語群 225, 227-229
- コアサティ語 91
- コーカサスの (諸言) 語 42, 44, 49, 51, 66, 83, 84, 250
- 西北コーカサス諸語 235
- 南コーカサス諸語 49, 50
- ココマ語 91
- コット語 50
- コモ語 94
- コリャク語 50
- ゴート語 19, 94, 212, 221, 226, 227, 230, 237, 250, 251, 255, 261
- サテム語群/諸語 227-229
- サビール (型の言) 語 21, 22
- 疑似サビール語 22
- サーシー語 78
- サモア 90, 117
- サルギ語 91
- ザン (メグレレ・チャン) 諸語 50
- サンスクリット 7, 19, 20, 68, 69, 78, 88, 94, 128, 211, 212, 220, 222, 224-226, 228, 229, 232-234, 237, 238, 240, 248, 252, 253, 255, 257, 263
- ジェク語→クリズ語
- シナ・チベット語族 51, 82
- シャム語 7, 32
- ジャワ語 35
- シリオノ語 91
- スー語族 91, 99, 150
- スーダン諸語 32
- スヴァン語 50, 117
- スペイン語 7, 32, 139
- スラヴ語/諸語/語派 33, 34, 129, 133, 134, 137, 139, 142, 148, 158, 159, 161, 164, 176, 187, 189, 191, 192, 196, 197, 214, 228, 234, 238, 252, 255, 256, 259, 261, 264, 265, 267-270
- 共通スラヴ語 138
- 古 (代) スラヴ語 131, 237, 264, 265
- 古教会スラヴ語 148, 158, 228, 251
- 南スラヴ語群 137
- ズールー語 94
- スロヴェニア語 189, 206
- スワヒリ語 14, 29, 112-114, 116
- 西夏語 51
- セネカ語 91, 99, 150
- セム語/諸語/族 10, 14, 33, 39, 112, 238
- セルビア語 189, 191, 206
- セルボ・クロアチア語 137
- 上部ソルブ語 206
- タオス語 101
- タカナ・パノ語 51
- タガログ語 91
- ダゲスタン語 61
- ダゲスタン語派/諸語 50, 72, 73, 80, 82, 96
- ダコタ (の言) 語 89, 91, 97, 98, 99, 101, 102
- タバサラン語 50

- ダルギン(ダルグワ)語 50, 52, 60, 62, 69, 84, 85
 ダルド諸語 61
 チェコ語 26, 135-137, 143-147, 156, 157, 159, 160, 164, 187, 189, 191, 206-207
 古チェコ語/現代チェコ語 136
 チェチェン語 41, 50, 51, 64
 チェルケス諸語 49
 (高地)チェルケス語→カバルディン語
 (低地)チェルケス語→アディゲ語
 チェロキー語 91
 チヌーク(の言)語 8, 81, 82, 101
 チヌーク・チムシャン語族 51
 チベット語 51
 古典チベット語 117
 近代チベット語 13
 現代チベット語 7
 チベット・ビルマ語派/諸語 51, 53, 117
 チベツヤ語 91
 チャマル語 50
 チャン(ラス)語 50
 中国語 3, 6, 7, 10, 13, 22, 32, 33, 38, 178
 チュヴァン語 50
 チュクチ(の言)語 50, 52, 251
 チュクチ・カムチャツカ語族 50
 チュルク諸語 48, 248
 チョクタウ語 92, 109
 チリカファ語 91, 102
 ツァフル(ツァフ)語 50
 ツェス(ディド)語 50
 ディババウォンの言語 91
 ディルバル語 59, 78, 117
 ティンディ語 50
 デンマーク語 7
 ドイツ語 3, 7, 10, 32, 94, 128, 142
 古高地ドイツ語 128, 230, 237
 トゥテロ語 91
 トゥパリ語 91
 トゥビ語 91, 103, 107
 古トゥビ語 93
 トゥビ・グアラニの言語/語族/諸語 91, 93, 96, 107, 158
 トゥリンギット(の言)語 91, 98
 トカラ語 227
 ドラーヴィダ語/語族 130, 131
 トルコ語 9, 10, 14, 21, 23, 31, 32
 ナヴァホ(の言)語 78, 91, 103, 108, 158
 ナツレ語 91
 ナデネ語族 91, 100, 110
 ナフ語 59
 ナフ(ヴェイナフ/バツビー・キスチン)諸語 50
 ナフ・ダゲスタン語派/諸語 41, 51, 67, 80, 82, 84, 96, 116, 117
 ナフ・ダゲスタン共通祖語 73
 ニウエワ語 51
 ニヴフ→ギリヤーク語
 日本語 3, 4, 12, 14, 22, 29, 54, 81, 153, 180, 187
 ネズ・パース語 51, 76
 ネネツ(の言)語 76, 106, 107, 146
 ハイダ(の言)語 14, 91, 95
 バグマリ(バグマリ)語 50
 バスク語 51, 79, 85, 117, 161, 162
 バツビー・キスチン→ナフ諸語
 バツビー(バツ)語 50, 80
 パプアの言語/諸語 51, 67, 73, 82
 パルボラ語 91
 バルト(諸)語 259, 267-270
 東バルト諸語 269
 バルト諸方言 269
 ハンガリー語 26, 39
 バントゥー語/(類)諸(言)語/語族 9, 14, 32, 93, 112, 115, 116, 127
 バントゥー祖語 94, 115
 ビジン型の言語 21, 22
 ビジン英語 22
 ヒダツァ語 91, 105
 ヒチティ語 91
 ヒッタイト語 68, 213, 227, 252-256, 261, 264-267, 269, 270, 272
 古ヒッタイト語 252, 261
 ヒナルグ語 50, 58, 59
 ビルマ語 7, 32
 ヒンディー語 117
 フィン・ウゴル諸語 46
 フヴァルシン語 50
 フォクス語 8, 82
 ブジェドゥグ方言→アディゲ語
 ブシトゥー(の言)語 61, 63, 117
 ブズィブ方言→アプハズ語
 ブドゥフ語 50
 フバ語 91
 フランス語 3, 6, 7, 10, 14, 21, 31-33, 61, 128, 142
 ブルガリア語 23, 137, 181, 183
 ブルシャスキ(の言)語 35, 51, 80, 81, 117
 プロシア 256, 269

古ブロシア語 255
 フロン語 91
 ベジェティン(カプティン)語 50
 ベトナム語 32
 ヘブスル方言→グルジア語
 ペルシア語 88
 古(代)/最古のペルシア語 20, 88, 127, 255
 現代ペルシア語 88
 ベルベル語 21
 ポーランド語 135-137, 143, 145-147, 162, 164, 191, 206, 207
 ホッテントット語 5
 ボトリフ語 50
 ボリネシア(の言)語/諸語 14, 51, 82, 90
 ボンカ語 91
 マヤ語→ユカテック語
 マヤ・キチェ諸語 51
 マラヤラム語 130
 南コーカサス諸語→カルトヴェリ諸語
 ムスコギ(の言)語/語族 91, 102, 108
 ムリンパタ語 117
 ムンドゥルク語 91
 メグレレル語 50
 メグレレル・チャン諸語→ザン諸語
 メノーミニ語 82, 100
 メラネシア諸語 91, 102
 モトゥ語 102
 モホーク語 91
 モンデ語 91
 ヤズグラミ語 238

ヤベテ諸(言)語 42, 46
 ユー語 13
 ユカギル語 50
 ユカギル・チュヴァン諸語 50
 ユカテック(マヤ)語 62, 117
 ユート・アステック語族/諸語 51, 101
 ユチの言語 91
 ユルナ語 91
 ラク(カズィ・クムフ)語 41, 42, 50, 62, 73, 77
 ラス語→チャン語
 ラテン語 3, 4, 5, 7, 9, 10, 12, 14, 19, 20, 31-33, 67, 94, 95, 139, 179, 180, 212, 221, 225, 227, 229, 230, 234, 237, 238, 251, 252, 255, 259
 ラマラマ語 91
 リトアニア語 226, 228, 234, 237, 252, 259, 261
 リングア・フランカ 21
 ルーマニア語 23
 ルトゥル語 50
 ルウィ語 252
 レズギ(諸)語 50, 72, 80, 96
 ロシア語 14, 41, 82, 92, 94, 100, 107, 108, 118, 128-130, 133-140, 142-145, 147, 148, 150, 155, 157-160, 162-165, 175-182, 184-188, 190-192, 196, 199, 200, 204-206, 214
 古(代)ロシア語 131, 148
 中世(の)ロシア語 101, 191
 現代ロシア語 132, 141, 158, 162
 モスクワの俗語 134
 ロマンズ(系)諸語 21, 85
 ワロゴ語 57

事項索引

アクセント 8, 10, 231, 238
 アクチオンス・アルト(行為の様態) 110, 111, 112, 159, 161, 164
 勸奨相 45
 アスペクト/体 45, 88, 110, 111, 159, 160, 187, 251, 272
 完了体/不完了(体) 88, 89, 159, 160, 187, 188
 継続体 durative 117
 多回体 160
 異音 223-226, 230-233, 236, 238
 基本的異音/主音 archiphoneme 223, 252
 異形 59, 236, 237
 異形態 allomorph 131, 182, 183

異型性/同型性(的) 23, 28
 異系 28
 同系(性) 26, 28, 46
 異系言語の比較 38, 44
 移動の動詞 verba movendi 89, 161
 意味するものと意味されるもの 30, 48
 一般格 249, 259
 印欧語期 234, 240, 264
 印欧語共通語期 217, 218
 前印欧語期 217, 218
 印欧語族中心主義 39
 イントネーション 25, 69
 ヴェルネルの法則 231

- エネルギー 24, 27, 36
 エルゴン 24, 27
 オーグメント 264
 音韻(的) 9, 16, 19, 21, 33, 212, 213, 214, 216-218, 221-225, 228, 231-233
 音韻推移 Lautverschiebung 230, 231
 音韻対応 212, 216, 227
 (音韻の)系列 217-228, 230-236, 238
 音韻(の)体系 212, 214, 216, 217, 235
 音韻(の)変化 7, 138, 211, 212, 268
 音韻法則 10, 20
 音韻論(的) 26, 29, 30, 35, 240
 音声 16, 26, 213, 246, 273
 音声(学)的 21, 222, 223
 比較音声学 221
 音声言語 43
 音節 16, 28, 33, 231, 238
 単音節 32, 33, 38
 音素 17, 30, 103
 音調(高い/低い) 115, 254, 255
 オクシントン/バリトン 254, 255
 開音節の法則 264
 下位言語 20, 212, 213, 221, 230
 階梯 260
 零階梯 158, 226, 238, 255, 257
 e 階梯 260, 264
 o 階梯 260, 265
 延長階梯 264
 弱階梯 238, 257
 正常階梯 260
 対応階梯 260
 外来語 189
 格 7, 12, 21, 31, 41, 51-55, 61, 62, 64, 74, 75, 85, 90, 116, 119, 137, 139, 141, 186, 199, 201, 203-206, 239, 241, 242, 248, 249, 252, 254, 256, 257, 272
 格形成文脈 201-207
 格組織 58
 格のカテゴリー 206
 格の指標 119
 格(の)体系 59, 64, 71, 84, 94, 239, 249, 254, 259
 格標示 53, 54
 格変化 61, 84, 137, 141
 拡散 divergence/集約 convergence(の相) 20, 22, 23, 34, 44
 拡張子 248
 カザン学派 36
 活格(的) 50, 56, 60, 75, 79, 82, 90, 92, 95, 97, 98, 100, 102, 108, 110, 118, 129, 137-139, 147, 148, 165, 241, 259, 262
 不活格 97, 98, 101, 102, 110, 129, 147, 259
 活格(の)体系 56, 115
 活格言語 55-57, 74, 75, 77, 79, 81-84, 86, 90-92, 95-98, 100, 101, 103-112, 114, 115, 118-120, 127, 129, 137-139, 141, 147, 148, 152, 153, 155, 157-159, 161, 164, 216, 239, 240, 245, 247, 250, 255, 262, 271-273
 動詞型/名詞型/混合型 108
 活格(型)言語類型 33, 46, 54, 55, 59, 79, 84, 85, 90, 110, 127, 165, 216, 239, 240, 241, 247
 活格類型 50, 86, 116
 活格文類型 250
 活格型 117, 146
 活格構文 75, 111
 活格動詞 75, 90, 99, 103, 104, 108, 111, 119, 137, 161, 262
 不活格動詞 262
 活性/不活性 56, 95-97, 100, 101, 114, 119, 129, 158, 262, 272
 活性/不活性動詞 262
 活性名詞 95-97, 99, 100, 119, 129, 253, 254
 不活性名詞 97, 101, 119, 129, 253, 254, 262, 272
 活動体/不活動体 46, 92-95, 100, 112, 114, 115, 129-139, 145, 164, 206
 活動体/不活動体名詞 113, 131, 133, 134, 163, 181, 189, 191
 カテゴリー束 198-200, 206
 シンタグマのカテゴリー 198, 199, 201
 パラディグマのカテゴリー 198, 199
 下位カテゴリー 205, 206
 可変動詞 deflected/labile verb 57, 71, 77, 83, 96, 97
 感覚動詞 verba sentiendi 45, 66, 67
 関係詞 12, 127, 128
 冠詞 21, 84, 102
 後置(定)冠詞 23, 183
 完全に正規な言語 180-182
 完備した(言語/語) 186
 記号 30, 48
 記号素 14, 28
 記号要素 10
 言語記号 15, 16
 記号法的 symbolistic 10
 基層 substratum 23, 38, 164
 基層(の)言語 61, 128, 164
 基礎文法カテゴリー 174, 175

規定語/被規定語 242, 253
「機能」 24-30, 37
 最小の機能的単位 30
機能主義 24, 27
 機能的構造主義 24
規範化(された言語/語) 183, 184
基本概念/派生概念/関係(的)概念 11-15
 基本的関係(的)概念 7, 10
 具体(的)関係概念 11, 12, 14, 15
 純粹関係(的)概念 11, 13
 純粹関係の言語 13
 混成関係の/言語 13, 14
逆受身 antipassive 57, 58, 60, 78, 79, 88, 89
共時 47, 53, 215, 217, 218, 220, 221, 229
 通時 41, 47, 53, 83, 88, 215, 218, 220, 221, 229, 230
共通基語 19, 20, 227, 231
極端に文法化した言語 179, 180
具格 41, 55, 61, 62, 73, 74, 78, 128, 184, 249, 251, 252, 254
楔形文字 213
具体格/文法格 249
屈折 3, 4, 6, 15, 32, 48
 屈折的 5, 11
 内的/内部屈折 inflective 14, 31, 33
屈折(型)(の)言語/屈折語 inflective languages 3-5, 9, 10, 13, 31-33, 39, 48, 145, 169, 185, 190, 191, 207, 212
 外的/内的屈折型の言語 31, 32
クラス 94, 109, 114, 247, 269
 (名詞の)クラス 29, 83, 84, 92, 94, 112-114, 272
 (動詞の)クラス 57, 66, 68, 77, 78, 247, 262, 269
 人/人以外(物)のクラス 52, 81, 84, 85, 93, 114, 144
 動物を表すクラス 93, 112
 活性/不活性のクラス 101, 114, 158, 262, 272
 ゼロ/I/D/I クラス 77, 78, 103, 104
 hi クラス 264
 クラス接(頭)辞 52, 114
クリック 17
グリムの法則 230, 231
形式所相動詞 deponentia 67, 68
形態 11, 15, 29, 32, 49, 82, 87, 108, 117, 118, 226, 234
 形態的/上 5, 7, 9, 10, 15, 21, 30, 38, 47, 72, 83, 87, 88, 103, 107, 118, 131, 185, 186, 248
 無形態(な/の) 15, 177-179, 186, 188, 189, 192,

242
 形態(的)言語/無形態な言語 15, 47, 177, 179
 無形態な語 178, 179, 188, 189
 無形態でない語 192
 形態的な指標 83
形態素 30-33, 48, 103, 256, 258
形態論 15, 30, 33, 47, 48, 58, 59, 87, 213, 216, 217, 239, 241, 242, 251, 273
形動詞 45
 不定形動詞 58
 被動形動詞 148, 151, 164
形容詞 36, 61, 90, 105-108, 140, 141-145, 148, 149, 164, 177, 181, 187, 189, 243, 244, 253, 254, 270
 所有形容詞 114
 性質形容詞 143
 不変化形容詞 189
 短語尾形 140-145, 148, 149, 151, 164
 長語尾形 140, 141, 143, 144, 187
言語学
 機能的(構造)言語学 26, 35, 37
 構造(主義)(的)言語学 24, 39, 169, 207, 213
 構造的・類型学的な言語学 215
 ランゲージ・ユニヴァーサル言語学 215
 現代(の)言語学 18, 24, 29, 128
 新言語学 44
 マルクス主義的言語学 39
 アメリカの言語学 66
 ソヴェト言語学 37
 対照言語学 contrastive linguistics 28
 地域言語学 areal linguistics 19, 23
 バルカン言語学 23
 比較・起源的/歴史的言語学 19, 23, 40, 215
 言語性格学 linguiticka charakteristika 27, 28
 言語的普遍 language universals 17, 18, 28, 29
 言語同盟 language union 23
 言語のクラス 23, 38, 116, 207
 ケントゥム語群 225, 227, 228, 229
 言理学 glossematics 24
語 3, 4, 6, 7, 9, 10, 12, 14, 30-34, 49, 92, 95-97, 99, 100, 106, 107, 114, 130, 132, 146, 147, 157, 171-173, 175, 177-192, 195-199, 201, 202, 204-206, 213, 216, 220, 227, 246-248
 語彙(的) 7, 9, 15, 19, 20, 22, 48, 53, 59, 66, 67, 70, 82-84, 87, 96, 99, 100, 105, 108, 111, 112, 115, 143, 155, 157, 161, 216, 242, 244, 246, 247, 272
「行為」 8, 16, 41, 46, 52, 54-56, 66, 68, 74, 75, 76-79, 84, 86, 87, 89, 92, 95-97, 99, 100, 102-104, 108-

111, 119, 139, 148, 150, 152-154, 156, 159, 160, 163, 241-243, 245, 247, 250, 251, 262
非行為的 inactive 247
行為動詞 75, 90, 95-97, 99, 105, 110, 247, 271
行為名詞 74, 94, 186, 241
行為者/行為主体 agents 41, 51, 54, 55, 62, 64, 70, 74-79, 103-105, 148, 152, 153, 163, 254, 262, 271
被行為者/受容者 patients 46, 76, 271
硬音 214
軟音 214
喉音 217, 218, 221, 223, 227-229, 234
喉唇音 217, 218, 222, 223, 227-229
口蓋化喉音 223, 227-229
口蓋音 214
口蓋化 234, 235, 238
構造主義(的) 24, 39, 40, 46, 47, 212, 213
構造主義美学 26
構造的 5, 10, 19, 28-30, 36, 38, 42, 48, 116, 118, 128, 213, 214, 262
後置詞 130
膠着 3, 6, 15, 48
膠着的 9, 11, 14, 15, 38
膠着(型の)言語/膠着語 agglutinative languages 3, 4, 5, 9, 10, 13, 31-33, 47, 169, 186, 187, 189, 197, 207
弱い膠着型/軽い膠着型/膠着・孤立型言語 13
膠着・統合的な型 14
呼格 206, 249
語幹(的) 4, 6, 8, 9, 11-15, 76, 77, 94, 103, 131, 132, 134, 135, 137, 145, 192, 239, 242, 248, 250, 252, 253, 257, 259, 260, 262, 264, 265, 269, 270
定/不定動詞語幹 76
語幹形成接尾辞 94
語形 7, 9, 32, 33, 178, 201, 221, 249, 259
語構成 33, 244, 249
語根 9, 10, 19, 52, 80, 107, 108, 140, 158, 216, 219, 222-226, 232, 235-238, 240, 255, 264, 265, 267, 270, 271, 272
語根動詞 267
語順 7, 15, 31, 32, 133
語族 8, 10, 14, 20, 23, 33-35, 39, 42, 49-51, 60, 61, 67, 73, 78, 82, 91, 93, 96, 99-102, 107, 110, 112, 117, 120, 127, 130, 150, 212
語頭 221, 225, 226, 230, 232, 234, 236
語中 221, 225, 230, 232
語末 178, 212, 226, 268
語尾 4, 10, 13, 31, 62, 101, 117, 133, 135-138, 140-

145, 148, 149, 151, 164, 178, 187, 240, 241, 245, 248, 249, 251-254, 256, 258-272
一次/二次語尾 262-264, 267
コペンハーゲン学派 24, 25
孤立 3, 6, 15, 18
孤立的 11, 13, 15
孤立型(型の)言語/孤立語 isolating languages 3, 4, 7, 9, 14, 31-33, 47, 169, 176, 178, 186, 207
孤立型/やや総合的な型/完全な総合型/複総合型 7
孤立型/膠着型/多統合型 31-33
混合類型 116
再帰化 56
再帰形 76
再帰動詞 154, 155, 163
再建/再構成/再構築 20, 47, 85, 87, 88, 212-216, 220, 223, 235, 239, 247, 255, 262, 263, 267
サテム語群 227-229
サビア作成の基準のリスト 15
子音 10, 14, 16, 33, 222-226, 230, 234-237, 264
鼻子音 16
子音群 10
子音の交替 10
子音連鎖 10
「使役」 8, 68, 72, 84
使役動詞 68, 72
歯音 17, 217, 222, 229
歯擦音 220, 221
死語 50, 51
時称 12, 63, 78, 84, 88, 89, 106, 107, 111, 117, 142, 145, 147, 149, 156, 196, 265, 272
時制 7, 110-112, 117
現在 12, 88, 89, 140, 246, 263-266, 268, 269-271
現在(諸)時称 63, 85, 88, 89, 117, 143, 251, 264
現在時称の指標 264
現在形 62, 63, 67, 84, 107, 142, 143, 145, 146, 159, 160, 245, 246, 265, 270
現在兼未来の形 21
歴史的現在 160
過去 6, 14, 22, 79, 84, 106, 147, 148, 150, 199, 264-266, 269
過去(諸)時称 88, 145, 264
過去(の)形 21, 63, 117, 142-144, 146, 147, 160, 164, 180
完了過去 88
未完了過去 117, 263, 264
近過去 8

- アオリスト 62, 63, 68, 84, 85, 88, 117, 229, 244-246, 263-265, 267, 270
- アオリスト形 88, 145, 270
- 語根アオリスト 265
- シグマのアオリスト(第一/第二形) 244, 264, 265
- 単純アオリスト 264, 265
- アオリストの指標 264
- 完了 15, 78, 79, 84, 110, 232, 246, 270, 272
- 完了系諸時称 142
- 完了形 67, 107, 127, 246, 247, 265-267, 270, 271
- 第一/第二完了形 245
- 不規則完了形 246
- 未完了 15, 78, 79, 104, 110, 270
- 未来 22, 147, 148, 150, 160, 263
- 未来形 146, 147, 187
- 複合未来形 187
- 自動・他動のカテゴリー/区別 70, 242, 245, 247
- 自動詞と他動詞(の区別/対立) 67, 70, 75, 85, 89, 90, 96, 97, 103, 105, 115, 119, 127, 147, 157, 240, 244, 265, 271
- 自動詞 45, 46, 52, 54, 56, 59, 61, 63, 64, 66, 70-72, 74-77, 79, 86, 89, 90, 95-97, 100, 103, 105, 116, 119, 137, 153, 157, 162, 240, 243-245, 250, 251, 262, 266, 271
- 自動性 46, 72, 250
- 意味上の/的自動詞 52, 63, 65, 71, 75, 77, 81, 83, 85, 89, 96, 99, 100, 103, 105, 119, 137, 162
- 自動詞構文 53, 54
- 他動詞 41, 44, 45, 52-54, 57, 59, 61, 64, 66-68, 70-72, 74-77, 79, 81, 86, 89, 90, 95-97, 103, 105, 116, 119, 137, 138, 150, 152, 157, 158, 162, 240, 242-245, 250, 251, 262, 265, 266, 271
- 他動性 46, 71, 72, 244, 245
- 意味上の/的他動詞 52, 63, 65, 71, 72, 75, 77, 81, 83, 85, 86, 89, 96, 99, 103, 105, 110, 119, 130, 137, 139, 146
- 他動詞構文 53, 54, 67
- 準他動詞 86
- 斜格 78, 79, 118, 248, 255, 257, 259, 260, 261
- 一般斜格 73
- 斜格形 118
- 斜格要素 79
- 周縁的 29, 96, 186
- 主格 4, 12, 31, 41, 51, 55, 57, 61, 62, 64, 71, 72, 74, 89, 91, 118, 130, 131, 133, 141, 148, 156, 157, 162, 181, 183, 184, 189, 190, 192-194, 196, 199, 201-207, 224, 240, 241, 245, 248-253, 256-258, 260, 261
- 主格的 60, 118, 245
- 主格形 135-137, 149, 157, 241, 252, 261
- 主格システム 118
- 主格言語 nominative languages 45, 60, 62, 115, 241
- 主格(対格)言語 45
- 主格言語類型 45, 247
- 主格類型 116
- 主格文類型 250
- 主格構造/構文 45, 47, 51, 62, 63, 72, 118, 241, 242, 251
- 主格・対格システム 88
- 主・対格 59, 90, 132, 136, 190, 239, 248, 259, 260, 261
- 主・対格形 131, 176, 260
- 主・対格の指標 239
- 主・対格構文 90
- 修飾語 32, 107, 141, 191, 192, 242, 248
- 被修飾語 32
- 主語・述語・目的語(補語)の関係 18, 34, 46, 60, 75, 86, 115, 213, 250
- 主語・(と)述語(の)/主述関係 16, 45, 112, 119, 141, 145, 146, 156, 157, 162, 164, 214, 239, 241
- 主語と述語の文法的な一致 142, 143, 148
- 主語・(と)目的語関係(の概念/図式/タイプ) 45, 46, 48, 49, 53, 55, 61, 83, 245, 251
- 主語 4, 8, 13, 16, 32, 41, 52-55, 57, 60-63, 66, 68-70, 74, 76, 77, 79, 81, 82, 84, 88, 89, 92, 99, 105, 113, 116, 118-120, 133, 137-151, 153, 155-157, 159, 162-164, 191, 241, 248, 250, 251, 260
- 意味上の主語 52, 54, 58, 59, 62-66, 69, 70, 72-76, 78, 79, 81, 89, 95, 97, 99, 105, 110, 119, 120, 128, 138, 139, 146, 151, 155, 161, 271
- 代名詞的な主語 8
- 文法的な主語 26
- 論理主語 51
- 主語の指標 60, 61
- 述語 13, 32, 34, 37, 44, 45, 57, 58, 64, 66, 67, 69, 70, 72, 74, 75, 89, 98, 105-108, 112, 115, 119, 139-153, 155-157, 159, 161-164, 214, 241, 242, 247, 248, 250
- 述語性 108, 146, 147, 151, 155, 164
- 述語構文 45
- 意味上の述語 69, 70, 74, 79, 146
- 形容詞述語 90, 142, 148
- 動詞述語 61, 62, 69, 73, 74, 76, 79, 118-120, 138, 142, 148, 149, 151, 153, 200

(動詞述語) 名詞説 73
意味的な自/他動詞述語 79
名詞述語 96
合成述語 45
述語動詞 56, 69, 70, 74, 78, 89, 111, 137, 139, 143,
147-149, 161
述語(動詞)の(相対的)独立(性) 142, 143, 146,
149, 159, 164, 214
状況語 241, 247-249, 250, 254
状況語的(規定語的/修飾語的/副詞的) 242, 248,
249
小詞 22, 107, 145
疑問の小詞 147
小辞 263-265
「状態」 46, 52, 77, 89, 92, 96, 97, 99, 102, 119, 140,
144, 149-152, 154, 158, 243, 246, 247, 251, 262,
270, 271
状態カテゴリー 150
状態動詞 74, 75, 83, 90, 95-97, 99, 105, 107, 110,
141-143, 157, 158, 247, 271
情緒格 51, 67
情緒構文 affective construction 51, 66, 67, 69, 83,
155, 159
情緒動詞 verba affectuum 59, 66, 67, 100, 102, 105,
150, 159
象徴的 6, 10, 11
冗長度 redundancy 18
上部構造/下部構造 42, 43
助動詞 79, 161, 187
所格 31, 89, 248, 249, 252, 254
「所有」 22, 73, 103, 157, 158
分離/非分離所有 101, 102, 105, 158, 261
所有形 74
所有(の)接辞 103, 158
所有変化 76, 93, 114
所有の構文 157
所有動詞 verba habendi 102, 157, 158
所有形容詞 114
所有代名詞 73, 103, 256, 261
所有格 76
唇音 217, 218, 221, 222, 227, 228, 235
唇音化 235, 238
親近(性) 19, 20, 22, 26, 34, 35, 38, 39, 42, 46, 211,
214, 215, 265
人工語 180, 183, 187
自然言語 52, 182
深層構造 48, 66, 75, 192, 193, 195

表層構造 75
親族関係 95, 101, 132
シンタグマ 69, 73-75, 79, 111, 161, 198, 199, 201
規定的/述語的シンタグマ 70
第一次のシンタグマ 69, 70, 74, 79, 120
第二次のシンタグマ 69, 70, 74, 120
随意性/的 156, 158
不随意(な/の/的な)行為/状態/性格 96, 99,
100, 105, 150-155, 159
随伴事象 frequentalia 45, 57, 65, 75, 77, 80-82, 87,
96, 97, 100, 105, 119, 120, 159, 161, 240, 245
数 7, 12, 16, 22, 30, 31, 84, 98, 107, 115, 143, 148,
180, 202, 205, 207, 248, 256, 265
非分割多数性の指標 260
単数 4, 12, 16, 17, 21, 30-32, 59, 79, 81-84, 98,
99, 102, 108, 113, 114, 131-137, 140, 145, 163,
175, 180, 183, 184, 190-196, 198-202, 204-207,
248, 249, 251-255, 258-266, 268-270
単数形 184, 257
双数 16, 17, 254, 256-258, 265
双数形 261
双数のカテゴリー 256
複数 4, 6, 8, 12, 15-17, 21, 30-32, 79, 81-83, 98,
101, 108-110, 113, 114, 130-137, 141, 142, 146,
180, 183, 184, 190, 191, 199-202, 204-207, 212,
243, 251-253, 255-266
複数形 7, 132, 134, 136, 162, 182, 187, 188
複数性 9, 82, 108
複数の指標 81, 252, 153, 259
数のカテゴリー 205
数詞 29, 101
助数詞 29
分類数詞 114
数理論理学 24
数量詞 203
セーマ sema 30-33
性 7, 12, 17, 22, 29, 31, 59, 61, 92, 94, 101, 112, 133,
140, 143, 148, 180, 182, 191, 192, 202, 207
文法(的)性 genre 92, 94
男性 4, 12, 52, 58, 61, 78, 80, 92, 101, 131, 133-
137, 140-142, 145, 181, 191, 198, 201, 203, 206,
239, 240, 248, 254, 259, 260
男性名詞 132-138, 191, 200, 204, 239, 253
中性 92, 95, 101, 134, 140-142, 191, 201, 239, 240,
248, 249, 255, 259, 260
中性名詞 132-136, 191, 239, 248, 249, 253-255,
259-261

- 女性 4, 12, 31, 58, 61, 84, 92, 101, 133-137, 140-142, 145, 191, 201, 205, 240, 248, 254, 260
 女性名詞 132-136, 191, 261
 共通性 253
 生物性/無(非)生物性 239, 240, 249, 252-255, 259, 260
 生物性/無生物性(の)名詞 249, 253, 254, 259
 生格 131, 135, 137-140, 144, 150, 152, 162, 164, 175, 181, 185, 189, 190, 192, 194, 199-201, 203, 204, 207
 数量生格 200, 201, 204
 否定生格 138, 150, 162, 164
 部分生格 139
 生格形 134, 136-138, 186, 200, 204
 生・対格 131-134, 136, 190
 生・対格形 131-134, 136, 137
 生物・無(非)生物(のカテゴリー/類別) 92, 93, 115
 生物と無生物 80, 83, 112, 271
 生物/生き物 8, 56, 68, 75, 80, 83, 92, 100, 110, 112, 117, 119, 133, 148, 240, 250, 252, 261, 271
 動物 80, 92, 93, 95, 100, 101, 112, 113, 115, 119, 131-137, 139, 144, 148, 154, 189
 植物 80, 93, 95, 100, 101, 112, 113, 119, 129
 絶対格 52, 55-66, 69-79, 84, 89-91, 110, 118-120, 137, 139, 147, 148, 161, 250
 絶対格の指標 120
 絶対言語類型 46
 絶対(格)構文 absolute structure 52, 57, 60-62, 64-66, 69, 70, 72, 77, 111, 153
 絶対(格)動詞 71, 73, 74, 77, 81, 83, 90, 99, 100, 105, 111, 119, 120, 137, 148, 157, 187, 245, 250, 262
 青年文法学派 Junggrammatiker 20, 35, 211, 212, 249, 264, 270
 声門説/ラリンガル理論 219-221
 声門閉鎖 219-220, 232
 声門閉鎖音 218, 222, 224, 230-232
 接辞 6, 9-11, 15, 52, 55, 60, 66, 68, 69, 73, 76, 77, 84, 97, 99, 102-107, 113, 142, 149, 150, 158
 接辞的 38, 73
 指小辞 107, 114, 240
 指大辞 107
 前倚辞 261
 後倚辞 256, 257
 結合辞 115
 時称接辞 63
 人称接辞 67, 76, 97, 98, 101, 102, 106, 141, 149
 接頭辞 7, 9, 31, 33, 60, 66, 82, 113-115, 120, 234, 264
 接尾辞 7, 9, 22, 31, 33, 60, 62, 66, 94, 120, 142, 148, 158, 248, 252, 254, 255, 260
 前置格 175, 194, 195, 200, 201
 前置詞 31, 139, 158, 178, 200
 「相」 46, 58, 62, 64, 67, 68, 71-73, 75-78, 85, 88, 103, 104, 120, 154, 245, 267
 遠心相/求心相 extrovert-introvert 75, 79, 103, 104, 105
 遠心/求心性 46
 遠心/求心(的)/非遠心(的) 78
 非遠心相/非求心相 104, 105
 受動 41, 42, 44, 57, 58, 62-64, 71, 72, 75, 78, 79, 85, 88, 120-148, 151, 163, 164, 239, 243, 245, 265
 受動(の)形 41, 56, 67, 74, 88, 148, 153, 243, 245, 265, 266
 受動相 75, 79, 89, 103, 104, 245
 受動(の)構文 51, 56-58, 61-63, 78-80, 88, 89, 148, 154
 受動態 26, 116, 163
 被動 62
 被動相 62
 能動 41, 42, 62-64, 67, 71, 72, 75, 78, 79, 85, 119, 120, 148, 164, 239, 245, 250, 263, 265, 270
 能動(相の)形 41, 57, 68, 88, 262, 263, 265, 266, 271
 能動相 68, 69, 75, 88, 89, 104, 105, 245
 能動構文 61, 63, 78, 89, 148
 中動 41, 42, 78, 245, 260, 263, 265, 267, 270-272
 中動(相の)形 41, 68, 69, 245, 265, 271
 中動相 67, 69, 78, 104, 105, 267
 中・受動相 medio-passive 88, 269, 270
 造格 152-154, 175, 183, 184, 192-195, 196, 200, 201, 203, 205
 限定の造格 152
 総合的/やや総合的/複総合的言語 7
 側音 17
 属格 31, 55, 73, 84, 115, 135, 175, 181, 224, 230, 240, 241, 244, 249, 251-253, 258, 259, 272
 部分属格 254
 genitivus subjectives/objectivus 55
 主格と対格の転位 transposition 55
 属格(の)形 252, 261
 祖語 19, 73, 92, 94, 104, 108, 115, 211-214, 216, 217, 219, 220, 222, 224, 231, 239, 247, 258, 262, 265, 270

祖形 74, 224, 236, 259, 263, 267
外連声 234
ソナント 223, 225, 228, 230, 238
そり舌音 229
「存在」 143, 146, 147, 157-159, 271
存在動詞 102, 103, 158
存在文 162
対格 31, 41, 45, 55, 57, 61, 64, 67, 70, 71, 74, 89,
117, 127, 128, 130-139, 148, 150-153, 162, 175,
176, 181, 184, 189, 190, 192-194, 196, 200, 201,
203, 239-245, 247-250, 252-255, 259, 261
対格的 54, 59, 60, 117
関係の対格 242, 243
内的対格 244
限定の対格 243
対格形 134-138, 200, 244, 254, 255
対格の指標 117
対格パターン 54
対格性 accusativity 54, 59, 60, 88
対格言語 accusative languages 45, 50, 51, 53, 55-57,
59, 62-64, 66, 67, 70, 71, 74, 75, 77, 78, 80, 84,
85, 87, 90, 92, 97, 105, 107, 115, 118-120, 127,
137-139, 147, 148, 152, 156, 162, 164, 207, 214,
216, 250
対格(主格)言語 61
対格言語類型 46, 54, 55, 84, 86, 87
対格類型 50, 116, 117
対格型 53, 54, 84, 117
対格構文 47, 85
対・主格形 136
対象活用 objective conjugation 41, 66, 70
代償延長 229, 259
代名詞(的) 8, 89, 117, 141, 157, 180, 252, 256, 257
指示代名詞 101, 248, 260
承前代名詞 anaphoriques 140
所有代名詞 73, 103, 256, 261
人称代名詞 21, 117, 146, 149, 160, 179, 180, 255,
256, 261
代名詞的指標 89
タイプ 5, 13, 15, 29, 33-35, 45, 63, 66, 92, 94, 115-
117, 147, 148, 241, 250, 251, 256
奪格 31, 249, 252
多統合型の言語 31-33
多分類言語(の類型/体系) 93, 112, 114-116, 118,
127
二分類/三分類体系 94
単語 3, 4, 6-9, 12, 14, 171, 213

段階理論 37, 39, 42, 43, 45
単純な(言語/語) 182-185
完全に単純な(言語/語) 184, 185
理想的に単純な(言語/語) 185, 186
男人体/非男人体 135
調音位置/部位 217, 222, 223, 238
直格 118
「テーゼ」 33, 34
定性 84, 140, 141
不定性 84, 140, 248
定冠詞/不定冠詞 84
定動詞 76, 108, 109, 157, 161
不定動詞 76, 108, 109, 161
テーマティック/アテーマティック 262, 263, 266-270
同音異義
形態的(な)同音異義 185, 186
文法的(な)同音異義 175, 176, 178, 179, 181, 182,
194, 207
同化 222, 226
順行性/逆行(性の)同化 226
統計的普遍 17
統合的・形態的言語 47
統語法 21, 22, 128
統語(論)(的) 15, 33, 36, 37, 44, 46, 47, 49, 53,
56, 58, 59, 61, 72, 87, 117, 138, 241, 242, 249, 262
統語(辞)関係 6, 15
統語構造 36
統語的単位 46
統語的ピボット syntactic pivot 56
動詞 3, 8, 19, 21, 31, 35, 36, 41, 42, 44, 45, 51, 52,
56-63, 65-84, 88-90, 93, 95-97, 99-108, 110, 112,
113, 117, 119, 120, 128, 130, 137, 139, 140, 142-
145, 149, 150, 152, 154, 155, 158-160, 163, 164,
172, 176, 180, 181, 186-188, 192, 196, 207, 240,
242-248, 250, 251, 256, 260, 262, 263, 265, 267,
269-272
動詞組織 65
動詞の系列 63, 65-67, 76, 77, 84, 97-99, 101, 102,
149, 150, 245, 261, 264-267, 269-272
動詞の分類/類別 59, 97, 100, 158, 262
動詞の目的形 57
等質/等質性 186-192, 197-199, 205, 206
カテゴリー(束)の等質性 205, 206
形式的(な)等質性 187, 188
制限された等質性(をもつ言語/語) 189-191
形式的に等質な言語/語 186-188
完全に等質な言語/語 188, 189

二価動詞 86

人称 12, 65, 66, 106, 107, 116, 142, 143, 146, 159, 180, 196, 256, 269

人称の指標 65

人称(構)文 153, 155, 157, 159, 203

不定人称文 162-164

非人称 149-152

非人称(の)形 149, 151, 154, 155

非人称(構)文 152, 153, 155, 203

非人称述語 150

非人称動詞 153

一人称 62, 76, 77, 82-84, 99, 101, 102, 109, 110, 128, 160, 161, 180, 187, 188, 255-258, 261-264, 268-271

二人称 17, 62, 76, 77, 84, 99, 101, 110, 180, 255-258, 262-265, 268-271

三人称 8, 12, 17, 52, 63, 76, 77, 79, 84, 93, 102, 104, 110, 145, 161-163, 180, 199, 258, 260, 262-265, 268-271

認知動詞 45

能格 ergative case 51-55, 57-65, 70-74, 77-79, 82, 84, 88, 91, 118-120, 128, 137-139, 147, 148, 165, 240, 241, 250

能格的 51, 54, 58-60, 88, 117, 118, 128

能格形 74, 84

能格・具格形 73

能格系列(の指標) 66, 84

能格パターン 54

能格性 37, 53, 54, 57, 59, 60, 88, 90, 128

split ergativity 60, 63, 84, 90, 116

能格言語 41, 45, 51-53, 55-61, 63-67, 69-75, 77, 79-83, 85, 87-90, 92, 96-98, 100, 105, 110-112, 115, 118-120, 127, 128, 137-139, 147, 148, 152-154, 157, 161, 162, 164, 239, 241, 271, 272

動詞型/名詞型/混合型 65, 84

能格(型)言語類型 33, 45, 46, 49, 50, 53-55, 59, 79, 83-85, 90, 96, 145, 146, 216, 240, 241

能格類型 50, 86, 116, 117

能格型 53, 54, 57, 84, 117

能格構造/構文 45, 47, 51-53, 57, 58, 60-66, 69-73, 77, 78, 85, 88-90, 127, 128, 148, 154, 242

能格(構文)受動説 41, 51, 61

(能格構文)中立説 64

能格動詞 57, 71, 73, 74, 77, 80, 81, 83, 90, 105, 119, 120, 137, 148, 157, 161

排外形 exclusive form 82, 83, 98, 109, 110, 255-258, 261

包含形 inclusive form 82, 83, 98, 109, 110, 160, 161, 255-258, 261

派生(的) 10, 14, 15, 57, 72, 74, 78, 186, 246, 254, 262

派生概念 11, 14

派生接辞 6

基本的/派生的な相 88

派生動詞 89

パラダイム 175-178, 183-185, 188-192, 194-196, 219, 221, 246, 248, 249, 252

整合的なパラダイム 190, 191

パラディグマ 195, 198, 199, 201, 205

破裂音 217-222, 229-233, 235-237

内破裂音 221

有声/無声破裂音 231

無声有気/無気破裂音 230

バルトロメイの法則 226, 227

範疇語 102

ヒエラルキー 18, 27, 34, 47, 60, 117

階層(的關係/構造) 27, 33, 34, 46, 49, 65, 213

鼻音 17, 252

比較言語学 19, 20, 22, 23, 35, 38, 39, 42, 45, 46, 83, 87, 211-214, 220, 223, 241, 242, 244, 247, 249, 273

比較文法 38, 39, 41, 44, 46, 213, 216, 220, 232, 233, 239, 249, 263, 264, 267, 272

表現の欲求/伝達の必要 25-27

「一つの言語」 eine Sprache 29

品詞 3, 12, 106, 107, 151, 176, 177, 207

副詞 36, 150, 178, 242, 244, 248, 249

話法の副詞 150

複統合言語 6, 8

不定格 casus indefinitus 248

普遍的分布法則 18

部分格 161

ブラーグ学派 24-28, 33, 35, 37, 38

ブラーグ言語学団 24

チェコ派/ロシア派 26

文 3, 6, 7, 11-14, 26, 32, 36, 41, 44, 45, 49, 56, 57, 62, 63, 69, 74, 76, 78, 83, 84, 106, 119, 120, 128, 132, 145-147, 154, 155, 161, 171, 172, 181-183, 203, 242, 247, 248, 250

一肢/二肢文 70, 147

印欧語の文 212, 247

不定法文 155-157, 164

文の原型 73

文の構造 37, 41, 51, 120, 247, 251

文の成分 32, 70

- 分詞 45, 85, 127, 142, 226
 - 過去分詞 128, 142
 - 完了分詞 183
 - 能動過去分詞第二形 145
 - 能動完了分詞第二形 142, 143, 145
- 分析的/統合的/複統合的 analytic/synthetic/poly-synthetic 6-9, 11, 13-15
 - 分析型言語 6
- 文法 16, 19, 27, 29, 30, 37, 46, 49, 114, 201
- 文法的 7, 11, 12, 26, 29, 30, 32, 33, 37, 41, 46, 48, 49, 57, 81, 92, 96, 105, 108, 111, 119, 157, 242, 247
 - 非文法的 56, 57
 - 歴史文法 211
 - 哲学的文法 38
 - 文法化 75, 138, 179
 - 文法的な形態 108
 - 文法(的)形式 19, 54
 - 文法(的)現象 18, 29
 - 文法(的)構造 37, 48, 85, 86, 128, 247
 - 文法(的)体系 29, 85
 - 文法的・統語的単位 46
 - 文法(的)要素 32, 49
- 文法(的な)カテゴリー/範疇 36, 51, 55, 66, 75, 77, 100, 103, 174, 175, 197, 198, 207, 242, 254, 255
 - (文法的な)一致 41, 54, 58, 61, 62, 66, 70, 73, 80, 113-115, 120, 128, 138, 139, 142, 143, 148, 149, 152, 180
- 分類(言語の) 5, 6, 8, 9, 11, 13, 15, 18, 31-33, 36, 39, 49, 52, 169, 207
 - 形態の手順による分類 15, 30
 - 形態的構造的分類 38
 - 形態論的/統語論的分類 47
 - 系統的(親近性による)分類 42, 44, 46
 - 類型(学)的/(親近性による)分類 5, 6, 42, 44, 46, 47
- 分類子 29, 32
- 分類のクリテリア 30, 31
 - (位置による)変異 219
 - 自由変異 182, 183
 - 文法的変異体 183, 184
- 変化/語形変化 6, 7, 9, 69, 77, 98, 106, 107, 114, 133, 140, 142, 175, 178, 187, 189, 239, 248, 251, 256, 260, 268-270, 272
 - 変化形 172, 175, 178, 188, 262
 - 人称変化 142-145, 148, 149, 164, 180
 - 代名詞変化 256
 - 動詞変化 94, 256, 265, 270
 - 名詞変化 65, 84, 94, 115, 178, 186, 249, 252, 262
 - 主語的/主語・目的語的な変化 251
 - テーマティック/アテーマティックの変化 266-268
 - MI/II 変化 262, 265, 266, 269
 - 現在/過去変化 269
 - 内部的替変による語形変化 7, 10
- (非)弁別的 30, 219, 223, 232
- 母音 10, 14, 16, 17, 33, 99, 212, 213, 223, 225, 229, 230, 232, 234, 237, 238, 259
 - 幹母音 140, 259
 - (語)幹形成母音 62, 262, 264
 - 長母音 259
 - 二重母音 10
 - 母音群 10
 - 母音交替 10, 213, 258
 - 母音組織 238
 - 母音度 254, 264
 - 母音の減衰 238
 - 母音の延長 240
- 「法」modus 7, 110, 264
 - インユンクティブ; 希求法 263
- 接続法 145, 157, 263
- 直説法 159, 263
- 命令法 264
- 不定法 23, 155-157, 176, 187
- 包含事象 implication 18, 55, 65, 70, 71, 75, 79, 81, 95-98, 100, 101, 104, 109, 111, 115, 119, 148, 159, 162, 240, 245, 255, 262
- 方言 6, 49, 50, 79, 214, 231, 232, 252, 253, 255, 258, 259, 268, 269, 272
- 北欧学派 24
- 補語 46, 97, 177, 186, 201, 242
 - 直接補語 45, 241, 242, 245
 - 対格補語 70, 240
 - 生格の補語 144
 - 与格(の)補語 144, 149, 155, 250
- 母語 21
- 補充法 suppletivism 248, 271
- ポテブニャ派 37
- 摩擦音 230, 231
 - 有声/無声の摩擦音 230, 231
- マルクス主義 39, 40, 43, 44
- 無徴(な/的) unmarked 52, 57, 62, 69, 70, 90, 91, 103, 120, 137, 138, 216, 218, 221, 223, 229
 - 有徴的 marked 53, 54, 69, 78, 90, 104, 130, 137-139, 218, 219, 221

- 無標(的) 17, 117
 - 有標(的) 17, 117, 173
- 名詞 3, 4, 12, 29, 31, 36, 37, 52, 54, 58, 59, 61, 62, 65, 67, 69, 70, 71, 73, 79-84, 89, 92-98, 100-103, 106-108, 110-115, 117, 119, 120, 130-135, 137, 139, 140, 141, 146-148, 150-154, 157, 158, 161, 175, 176, 178, 181, 189, 191, 192, 196, 202, 204, 205, 242, 248, 249, 251-253, 256, 259-262, 272
 - 行為名詞 74, 186, 241
 - 固有名詞 131, 133, 136
 - 指人/非指人名詞 191
 - 集合名詞 190, 200, 201, 260
 - 常時複數名詞 190, 191
 - 常時單數名詞 191
 - 普通名詞 117, 131, 133, 136
 - 物質名詞 200, 201
 - 不變化名詞 178, 186, 189, 204
 - 名詞形 140
 - 名詞句 53, 56, 88
- 名詞の分類/類別 59, 92-94, 102, 112, 113, 115, 130, 189, 248, 262
- 名詞類 nominals 61, 147
- メタ理論 215
- 目的格 61, 130, 198
- 目的語 8, 13, 18, 34, 41, 45, 46, 48, 49, 52-55, 60-63, 66, 69, 70, 73-77, 79, 82, 83, 86, 87, 89, 92, 110, 115, 119, 128, 130, 133, 137-139, 147, 150-153, 164, 213, 241, 245, 248-251
 - 直接目的語 46, 69, 72, 118, 139, 243, 247, 249
 - 間接目的語 8, 55, 66, 69, 241
 - 意味上の目的語 54, 59, 60, 62, 64-66, 69, 70, 74-76, 78-81, 83, 89, 93, 97, 99, 111, 112, 119, 120, 128, 137-139, 159, 161, 242
- 代名詞的な目的語 8
- 目的語の指標 60, 61
- ヤベテ理論 42
 - ヤベテ諸語 42, 46
- 唯物弁証法 40, 43
- 融合的/融合的・分析的/融合的・統合的/象徴的・融合的 14
- 有声/無声(の) 219, 226, 230-232
 - 有声・無声(の) 219, 231, 235, 236
 - 有声音 218, 230, 232
 - 有声化 231
 - 有声無気(の) 230, 232
 - 有声無気音 216, 217, 219, 221, 222, 225, 230-233
 - 有声有気(の) 233
 - 有声有気音 218, 219, 222, 225, 230-232
 - 無声音 216, 218, 222
 - 無声有気(の) 230, 233
 - 無声有気音 213, 218, 231, 232
 - 無声無気(の) 233
 - 無声無気音 218, 219, 222, 230, 231
- 有気/無気(の) 219, 223, 224, 230-232
 - 有気・無気の 232
 - 有気音 216, 219, 223-226, 230, 236
 - 無気音 224-226, 230, 236
 - 無気化 224
- 様態(性) modality 110, 151, 155-157
- 与格 31, 51, 55, 57-59, 62, 63, 67, 72, 78, 84, 139, 140, 144, 149, 151, 152, 154-156, 175, 185, 192-196, 201, 203, 243, 249, 254, 255, 260
 - 与格形 200
 - 主語/目的語を表す与格 55
 - 目的与格 250
- 与・所格 89, 252
- より静的な動詞 90
 - よりダイナミックな動詞 90
- ヨーロッパ中心主義 5
- ラリングル 221, 233, 237, 238, 268
- ランゲージ・ユニヴァーサル 214-216, 220
- リエゾン 265
- 類型/言語(の)類型 3, 5, 6, 8, 9, 13, 16, 18, 23, 28-34, 42, 44-47, 49, 52, 53, 55, 58, 60, 65, 66, 75, 82-84, 87, 89, 90, 97, 98, 112, 115-120, 127, 146, 158, 165, 169, 192, 197, 207, 213, 214, 216, 239, 241, 245
 - 理想的な類型 Idealtypus 169, 207
- 類型的
 - 類型的分類 6
 - 類型的基準 18
 - 類型的発展 42
 - 類型的原理 111
 - 類型的要素 116
 - 類型的分布 117
 - 類型的特徴 207
- 類型学/言語類型学(論) typology 5, 6, 15, 16, 18, 19, 23, 24, 26, 28, 29, 32, 34-38, 41, 42, 45, 49, 56, 59, 60, 90, 104, 116, 118, 119, 127, 128, 142, 169, 191, 207, 211, 214-218, 220, 229, 230, 233, 241, 247
 - 形式(的)(な)類型学 16, 36, 38, 48, 169, 180, 207, 208
 - 内容(的)(な)類型学 contentive typology 11,

15, 16, 18, 23, 24, 27, 28, 34, 37, 44, 47-49, 53,	146, 164, 176, 207, 214, 215, 218, 220, 230, 235,
56, 65, 83, 87, 115-117, 127, 129, 165, 169, 207,	251, 255, 256, 258
208, 213, 215, 216, 221, 239, 245, 272, 273	歴史主義 20, 39, 40
類型論/言語類型論 52, 53, 207, 216	レニングラード学派 95
類型的/言語類型的 16, 18, 19, 23, 27, 28, 33,	連辞 22, 85, 107, 142-146, 148, 157, 164
34, 36-38, 40, 42, 44-48, 56, 66, 87, 115, 117, 129,	渡り音 238

著 者
山 口 巖 (やまぐち いわお)
1934 年 咸鏡南道元山府に生まれる
1957 年 京都大学文学部文学科卒業
1962 年 京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
現 在 京都大学大学院人間・環境学研究科教授
(文化環境言語基礎論講座担任)
著 訳 書 『ロシア原初年代記』(共訳, 名古屋大学出版会, 1987 年)
『ロシア中世文法史』(名古屋大学出版会, 1991 年)

類型学序説 ― ロシア・ソヴェト言語学の貢献

© 1995

平成 7 年(1995)年10月31日 初版第一刷発行

定 価 4800 円

(本体4660 円)

著 者 山 口 巖

発行者 尾 崎 芳 治

京 都 大 学 学 術 出 版 会

発 行 所

京都市左京区吉田本町 京都大学構内(606)

電 話 (0 7 5)7 6 1 - 6 1 8 2

振 替 京 都 0 - 6 4 6 7 7

ISBN 4-87698-025-X

Printed in Japan

印刷/土山印刷・製本/山口製本・紙/三菱製紙

編集担当/鈴木哲也・八木俊樹



Kyoto University Press

京都大学学術出版会

ISBN4-87698-025-X C3087 P4800E

定価4800円(本体4660円)